

桔梗の娘

猪飼部

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は光和年間、所は益州巴郡。ここに正史にも演義にも、そして恋姫にも存在を確認されない少女が居た。姓を嚴、名を寿、真名を——しゅんか 薜華しゅんかと言う。

これは、数多ある外史の一つにイレギュラーとして生れ落ちた一人の少女が綴る恋姫歴史絵巻である。

益州で起きた叛乱。薜華の母桔梗は、益州牧劉焉を止める為に軍を率いて対峙する。

■ 諸注意 ■

本作は、真・恋姫無双の蜀ルートヒロインの一人、桔梗の元に生まれたオリジナルキャラクターを主人公としております。

娘を産んだ影響で、桔梗の人格は原作とは若干違つたものになっています。他にも焰耶を始めとして原作から遠のいていく人物が増えます。更に、主人公とは関係ない所でも原作と相違点のある人物も登場します。

注釈の嵐は私なりの古典文学リスペクトです。

※本作には地名や官職等それらしい用語が頻出しますが、全てはそれっぽさを演出する為のフレーバーに過ぎません。後漢当時の社会や習俗を正確に記するものではありません。御注意下さい。

目次

第一回 蝶在桔梗

1

第二回 血雨腥風

17

第三回 巴郡人士

46

第四回 暢飲歡宴

77

第五回 像箭女孩

110

第六回 南蛮志怪

130

第七回 荊州南乱

168

第八回 南陽太守

212

第九回 黄家母子

246

第十回 遭紅少女

272

第十一回 秋天過去

310

第十二回 立于人寰

339

第十三回 黄天當立

368

第十四回 歲在甲子

387

第十五回 蒼天未死

417

第十六回 天下不靜

459

第十七回 論功行賞

490

第十八回 為明天酒

516

第十九回 御遣上洛

538

第二十回 天子崩御

566

第二十一回 漢中夢記

593

第二十二回 西方流乱

623

第二十三回 如暴風雪

647

第二十四回 戰陣妖夢

671

第二十五回 靈幻亡帝

691

第二十六回 鬼謀闇夜

第一回 蝶在桔梗

ここに一人の少女が居る。

同年代の中では上背高く引き締まった体躯に、既に実りはじめ更なる豊かさを約束された果実を、胸回りだけを覆う白堇色の筒状弾力胸衣*1に包み込み、緩やかに癖のついた母譲りだがより色素の薄い日に透ける銀髪をきつめに纏め、未だあどけなさを残しながらも美と精悍さを併せ持つこれも母譲りの相貌を持つ少女が居る。

愛用の大薙刀「秋草」あきぐさを傍らに、上半身をほぼ完全に肌蹴た白藤色の着流しも威風堂々たる艶姿。

姓は巖げん、名は寿*2。

字を慶祝けいしゆく。

真名を——薺華しゆんかと言う。

当年とつて十二歳、益州巴郡太守*3巖顔*4が一人娘。

いや、いねーよ、そんな娘……。

何処からかそんな突つ込みが聞こえてきた気がして、少女は眉間に一本、小さな皺を

縦に刻んだ。

第一回 蝶在桔梗

誰に言われずともそんなことは分かっている。

時は光和年間、ここは益州巴郡、英傑は父ではなく母、記録にないその子供たる己。
ふんつ、と鼻白む。

それがどうした。私は敬愛する母が腹を痛めて生んでくれた娘だ。

時は後漢末、ここは恋姫外史——それも真・恋姫、英傑が母なのは、女なのは当たり前、数々の有名武将を差し置いて居るはずのない架空人物たる己。

疾うの昔に意味を喪失した自問だ。それでも時折、不意に浮上するこんな思索とも言えぬふわふわした思惟に不快気に口の中で呻った。

柳眉を顰め、自分がいまこの巴蜀に生きる一人の人間である事を意識する。態々そう強く意識する事でやっと不快感を払拭する。

とつづくの昔に今の自分を受け入れたというのに、溜息一つついて気を落ち着ける。

こういうのもフラッシュバックと言うのだろうか？

強く拒絶し過ぎていたのだろうか？ 嘗ての、もはや名前も思い出せぬ嘗ての己を自然体で受け入れれば良いのだろうか。

とは言え、

頭の中で捏ね繰り回した考えを簡単に心に落とし込む事が出来れば誰も苦労はせんな。

「巖伯長*5」

「ん、来たか」

呼び掛けに思考を現実に戻し、半身を起こす。

身体ごと振り返り、丘向こうの低林から湧き出てくる人の群れを確認し、背後に控える兵達をちらりと見遣る。適度に緊張しているのが五十、過度に緊張しているのが五十。後の五十は新兵だ。

何か気の利いた事でも言つて新兵達の緊張を解するのが良いのだろうか、面倒だ。相手はちんけな匪賊、山に森に林にと、度々拠点を移す厄介さを除けば規模も練度も大した事はなく、そのうえ今は姉弟子の部隊に追い立てられ這う這うの体であろう。

無駄な力が入っているとはいえ暴発する気配もない。そも、この程度の任で、揺り籠

を揺らすように優しく導いてやらねば役目を果たせぬ様では、この先碌に遣えやしないだろう。

視線を前方に戻し片手を上げる。

脇目も振らず此方へ逃げてくる賊徒共。数は二百程か、初めに聞いていたよりも数が多いが、魏文長率いる隊は僅かに五十だ。板楯*6兵を中心に精鋭で固めてあるとは言え情けない連中だ。こちらに気付く気配もない。

もつとも、数の上では自身の率いる隊の半数だが、本隊より選り抜いた急襲部隊の五十、戦力では十倍はあろう魏延*7隊相手に、賊如きがそう意気地を見せられるとも思わないが。

そんな事を考えながら、つと視線を此方へ逃げ向かってくる賊徒の最後尾に向けると、此度の征伐隊指揮官が巨大な金砕棒を振り上げながら匪賊の尻に喰い付いていた。

魏延。字を文長という、巴蜀きつての猛将。その圧倒的な膂力から繰り出される武は既に敵顯義*8を越えているだろう。

本来ならば荊州に居る筈の彼女は、敵慶祝が初陣を迎える一年程前に敵家へとやって来た。それ以来寝食を共にしており、敵家の一人娘にとつて母の次に近い人間となつていた。

母ほどではないが見事な肢体をしておりながら、女性的な面はあまり見せず、武一辺

倒の非常に活動的な人物である。

短くさんばらな黒髪の一部が白砂の様に色抜けしており、彼女を識別する大きな特徴の一つとなっている。染色している訳でも脱色している訳でもなく生まれつきらしい。出会ったばかりの頃、つい気になって聞いたところ、不機嫌そうにしながらも答えてくれた。

拙い事を聞いてしまったかと内省していると、「やっぱ変か？ おかしいかな？」と躊躇いがちに聞いて来たので、格好良いと素直に返答すると、口から奇妙な音を漏らして一頻り慌てた後、顔を耳まで赤くしながら小さな声で変な奴だと言われてしまった。その様を見て、髪を持ち主は可愛いな、とこれまた素直に思った。口に出すと今度は殴られそうな気がしたので言わなかったが。

「ごん！」と鈍く重い音と共に数人の賊が吹っ飛んだのをみて、やはり匪賊が逃げ惑うのも無理はないな、と思ひ直した。あれに立ち向かう胆力があるのなら、こんなところだけちな賊なんぞせずにとこそにでも仕官すべきだ。どこでも立派にやっつけていけるだろう。

視線をずらし此方へ逃げてくる賊の最前を見遣る。人間、その気になれば随分と速く走るものだと僅かに感心する。もう射程圏内だ。だが、まだだ。まだ先端が入り込んだばかりだ。もつと引き付けなくては。もつと、もつと、そうだ、もつとこつちに来い。

十分に引き付け、賊の悲鳴だか怒号だかに新兵の誰かが生唾を飲み込む音を聞いて、上げていた手を振り下ろした。

「桔梗様！ 魏文長、嚴慶祝戻りました！」

「うむ、ご苦労だったな」

焰耶えんやの元気すぎる声に鷹揚に応えたのは、巴郡太守嚴顔その人であった。記録に残っていない字を顯義といい、記録にあるわけのない真名を桔梗という。嚴慶祝の母にして、魏文長の師。

成程、薜華はこの女傑の娘であろうと誰もが納得するほど似ていた。娘よりも色濃いい銀灰色の髪、上背なお高く、薜華が成長すればいつかはこうなるであろうと思わせる精悍なる美貌、そして、なんといつても豊満という言葉では足りぬほどの圧巻の乳房を誇る傑人。

ただ其処に在るだけで他を圧倒する噎せ返る様な色香と共に、いやそれ以上に立ち上る武人の鋭気は、近頃は戦場に立つことも少なくなってきたも尚、巴蜀きつての武人である事を如実に語っていた。

「報告よりも数が多かった様だがどうであつた？」

「なに、大した事はありませんでした！ 少々頭数が増えようが我等の敵にはなり得ません！」

「ふむ、寿よ。お主はどうであつたか？」

敵顯義は公務中は娘の事を名で呼んだ。主に公私の別をつける必要を感じていたからである。後の理由は……

「敗残者の群れと言つたところですね。実際、連中の多くは元は江東こうとうの山越賊さんえつぞく*9だつたようで、孫文台殿そんぶんたいに追い散らされてここまで落ち延びてきたようです。新兵達には、まあ、良い当て馬だつたかと」

最後、少しだけ言い淀んだ。

「そうか。しかし、山越賊か」

「はい。最早逃げる気力もなくし帰順を申し出た者達を引つ立ててきましたが、帰陣途中に連中から話を聞いたところ、東から逃げて逃げて遂にこの巴郡までやつて来たのだと」

拠点を一つ所に絞らず、こちらが軍を出せば鮮やかに引いて見せた賊徒の正体がこれだつた。数度かち合つた時も大して手応えを感じず、やはり練度は低いかなどと思つていたが、それ以前の問題だつた。

江東で余程恐ろしい目に遭ったらしく、力無き領民に対しては虚勢を張れるが、少しでも手強いと感じた官軍には臆病風を帆に受けて逃げの一手であった。

逃げ癖のついたならず者。

「役に立つのか？ そんな連中」

魏文長が素直に疑問を口にした。

目論見としては軍で鍛え直し、精強な兵へと轉身させ、それを以って恩赦とするつもりだったのだが。

「そうは言っても、一度帰順を赦したのに『臆病者はやっばいらないから』って斬り捨てる訳にもいかないでしょ」

「そりやそうだけど……」

基本的に新兵の訓練は文長の役目である。司馬*10の役職も受け持つので練兵と共に規律も徹底的に叩き込むのだ。時には愛器「鈍碎骨^{どんさいこつ}」を以って物理的に。

帰順してきた賊徒の扱いも同様だ。難色を示すのも仕方ない。

「どの道、賊徒共を服属させるには一度その性根を叩き直してやらねばならんだ。逃げ癖も多少矯正の手間が増えるだけの事よ」

顯義の言葉に、うつ、と気まづげに呻る文長。

「ふむ、焰耶が否やと言うならば、寿よ、お主が鍛え直してみるか？」

「いえ、大丈夫です！ ワタシにお任せ下さい!!」

「では魏郡司馬に任せるとしよう。いつも通りにな」

「はっ！ お任せ下さい!!」

母の言葉に反応する隙もなく流れるように話が二人の間で決まってしまったが、よくある事なので気にせず報告を続けた。

「張巫医ちようふい*11の力でも完治は難しいか」

「……はい」

張脩ちようしゆう*12。五斗米道ごとうし*13、いやさゴツトヴェイドーの伝道者。

長身の厳顯義よりなお上背高く八尺約184cm*14にも達するが、威圧感などはなく、寧ろ安心感を与える雰囲気を出し、短く刈られた清涼感のある黒髪と、その柔らかな表情と相俟って自然と人が集う優男。

だが、ひとたび病魔を前にすれば、普段の優男振りには鳴りを潜め、巨悪に立ち向かう勇者の様な鬼気を纏うのだ。その時、人はその背に朱雀を視るという。

その奇跡の様な鍼灸術で、漢中かんちゆうから巴郡にかけて多くの人々を救って来た凄腕の巫

医。官にも軍にも所属せず、ゴットヴエイドーの教えのままに、そして己の中で燃え上がる使命感の命ずるままにその医を奮う。

薙華はこの巫医に真名——火鳥かとり——を預けられるほど気に入られており（何故なら、彼女だけがゴットヴエイドーを正しく発音してくれたから。その際、「感動だあ」と涙ながら真名を預けてくれたのだが、薙華は内心、その様に少々引いていた）、丁度折良く巴郡に滞在していたので、その伝手で今回の出兵の際、予め重傷者が出た時の事を依頼しておいたのだ。

此度の賊征伐では賊の及び腰から幸い此方側の死者は出なかったが、新兵の中から一人、重傷者を出していた。

確かに多くの賊徒は既に恐怖に屈し済みであったが、当然全員ではなかった。その一部の活きの良い賊徒が新兵とかち合った。

狙われていたのだろう。

新兵の硬さは落ち着いてみればすぐに知れる。たったの百人。少し戦に馴れた者なら一瞥で見分けるだろう。

だが、その新兵を率いる己は賊を注視してはいなかった。悔っていたのだ。総崩れで逃げ惑ってくるその姿だけで判断して、その中で未だ牙を失っていない者共を見逃した。

無様だ……。

兵に本来負わずとも済んだ傷を負わせた。

戦場に出れば誰でも傷を負うもの。時には命を落とす事も是とするのが兵であり将である。甘えは通じず、血と鉄の現実だけがある。

だが、だからと言っていたずらに損耗させて良いものでは決してない。

熟練した兵達は戦場で帯びるべき緊張を纏っていた。新兵達は飼い馴らせてはいないが緊張を身に帯びていた。

だが薙華は緩んでいた。一騎当千に届く武を持つ少女には緊張するに値しない相手であった。弛んでいたわけではないのだが、無意識下での緩みを律する事が出来ていなかった。

それは経験の不足によるものだったが、当人にはそれが解っていなかった。幾度も戦場に出ているのだ。不足など。だが、本当に必要な経験を積むことは殆どできていなかった。戦場には赴いているが、彼女にとって死地といえるのは初陣で雪崩れかかってきた氏族*15に単身で殿を務めた時だけであった。

余りに苛烈な初陣は、その後の戦場の温さを少女に齎してしまっていた。

それでも新兵が牙研ぐ賊徒に圧されるのを察するや、即座にその場に跳び込み匹夫めらを一時で膾斬りに仕留めて魅せた。そのあまりの手際に残りの賊共の心が完全に圧

し折れ、降伏に繋がった。

此方側の死者を出さず、息巻く賊徒を瞬殺せしめ、以つて早期の降伏をはじきだした。周圀から見れば、巖伯長に落ち度は見当たらない。だが、薺華は自身の失着を気にしていた。

「だが最悪の事態を避け得たのはお主の功績。余り氣に病むでないぞ」

「はい」

返事は返すが、それだけだ。やれやれと小さく溜息を吐いて桔梗は続けた。

「自罰的なのがお主の悪い癖だ。確かにより上手く立ち回っておれば損害は更に軽微であつたろうが、その場での挽回を果たし、結果も出した。余り完璧を求め過ぎるものではないぞ」

現状に甘んじる事無く高みを目指すのは良い事だ。反省する事を忘れず自己を戒めるのも良いだろう。

だが、何事も過ぎれば毒となる。己の失着や欠点ばかりを見続ければ如何したつて人は歪んでいく。また、完璧を目指せば無理が生じる。其処は人の到達できる領域ではないからだ。

この娘は何事とも加減を知らぬ。と、顯義は見取つていた。

完璧などと遠い処を目指している積りはないのだが、自身の失敗は殊に強く眼につい

てしまう性向は自覚していた。それに改善がみられないことに俄かに落ち込んでしまふ。つい視線が下がってしまったところ、ふわりと、この世で最も薺華を安心させる芳香に包まれた。

何時の間にか立ち上がり、目の前にまで来ていた母に優しく抱き留められていた。

「重傷を負った新兵とて、完治は難しいが命に別状はあるまい。兵卒としての道は閉ざされたが、別の道を用意してやることもできよう」

頭を撫でながら愛し子に言い聞かす。

「その者の進路はお主に任せる。戦場での挽回は既に果たした。次はこれを以つて戦後の挽回とせよ。それでこの件は決着だ」

こくり、と母の胸の中で頷く。普段の厳慶祝からは考えられぬ仕草であった。

「お主はよくやった。母は誇りに思うぞ、薺華よ」

一層強く娘を抱きしめる。と、

自然と柔らかな母性に顔をうずめ、きゅつと抱きしめ返してしまふ。

厳顯義が公務中は娘を基本的には名で呼ぶ今一つの理由、それはこうした初心な反応を観る為であった。

それに気付いた瞬間、弾かれた様に母から身を離し視線を顔ごと横に向ければそこにはによよと妙な擬音が響いてきそうな笑顔を張り付けた文長を確認した。

その次の瞬間には義姉の尻を思いつ切り蹴つぱぐった。

あまりの激痛に蹲った文長が文句を言おうと顔を上げた時には既に薙華の姿はなかつた。

「くそつ、相変わらず素早いな」

尻を撫でながら立ち上がる文長の横でくつくつと愉しげに笑みを溢す顯義の姿。

いつも通りの、巴郡群府の日常風景がそこに在った。

第一回——了——

娘の飛び出ていった部屋の戸口を眺めながら、桔梗はもう一人の娘とも言うべき弟子に問い掛ける。

「お主の目から見て寿の采配はどうであつた？」

「特に問題はなかつたと思います。確かに賊の中で比較的元気な連中がいて新兵を蹴散らしましたが、意気があるうがなからうがあ程度の賊相手にやられるようなら本格的な戦では働きを期待できませんし、命を落とすことなく向かない道から降りられるなら

僥倖でしょう」

魏文長の言う事はもつともである。何せ、この益州での軍の相手は本来あのような匪賊ではない。西方から漢土を窺う精強な異民族なのだ。つまりは護軍である。過去幾度も侵攻を繰り返しており、非常時に開府される將軍府が巴郡においては常置している最大の理由である。嚴巴郡太守は同時に嚴安遠將軍*16であり、益州牧劉焉*17より要請あらば即戦場に馳せ参じる用意が常にしてある。最も、近年は劉州牧旗下の三軍（それぞれ益州兵、東州兵*18、青羌*19兵からなる）のみで討伐を行う事が増え、嚴顔軍の出番はそう多くない。

「大体、あいつはいちいち深刻になり過ぎですよ」

「戦場に出たならば全て覚悟の上でしょう。寧ろ、その程度の覚悟もなく戦場に出て泣き言抜かしたらワタシがぶつ飛ばしますよ」

「ふむ。まあ、そうよな」

それにひとたび戦場に出れば覚悟のあるなしなど関係なくなる。誰もそんなことは勘案しない。そんな暇も余裕も殺しの野にはありはしない。

しかし、少し違う。娘が気にしているのは自身の采配の拙さであり、究極的には重傷を負った新兵の安否ではない。それは飽く迄も判り易く明示された結果の一つに過ぎないのだ。

「うむ、お主もまだまだだな」

「ええー?!」

気持ちの良い反応に微笑を浮かべながら、心底驚いた表情を形作る愛弟子に論点のずれを説明してやった。

第二回 血雨腥風

益州巴郡。

巴蜀四郡の1つ。蜀郡しよくけんの東、漢中郡かんちゆうけんの南に接し、嘉陵江水系流域を治めた。

巴郡群治・江州かうしゆう県。

県北に御糧田があり、毎年皇帝に献上米を納める。清流である粉水の水で作られる江州だきゆうふん墮だ休粉*20と名付けられた白粉も同様に献上されている。また、れいし枝*21も特産で、毎年初夏になればし枝畑の木の下で群府の皆でもぎたての実を味わう。薜華はこれれが何よりも好きで、毎年栗鼠の様に頬張るのだ。

母桔梗は臨江りんかう県の生まれだが、薜華はここ江州で生まれた。その頃、嚴顔と言えは既に武名高く郡兵を束ねる將軍だった。娘を身籠つてからは一時軍を辞し、それを補おうと亡き夫は奮闘した。奮闘し過ぎた。

薜華が生まれて一年にも満たぬ冬頃、遠く并州へいしゆうにて鮮卑せんび*22の侵略に対する鎮圧軍に、当時の中郎將*23に従い別部司馬*24として従軍。そのまま帰らぬ人となつた。

桔梗は喪に服しながら薜華を育て、喪が明けてからも育児に勤しんでいたが、度重な

る推挙と、当時の巴郡太守の悪評から郡が乱れるのをみて軍への復職を決めた。

太守が悪ければ異民族が暴れるもので、そもその乱の原因は精強で知られ神兵とまで称された板楯蛮に対し苛劔かれんを極めた租税、重過ぎる賦役ふえきを課した為であった。

板楯蛮夷の叛乱を重く見た中央から派遣された御史中丞あきよしちゆうじゆう*25の蕭瑗しょうえん*26と、その指揮下に入った益州刺史*27郤儉けきけん*28が鎮圧にあたっていたが上手くいかずいた。

そこにかの嚴頭義が参陣の意を示すと、待つていましたとばかりに蕭瑗の上奏で安遠將軍に推挙されすぐさま戰場へと舞い戻る事となった。

しかし非は明らかに官吏にあった為、無暗に攻め立てる事はせず防備に専念し、板楯が攻めて来ればこれを撃退した。捕虜に対しても恩徳を以つて遇した為、次第に板楯の態度も軟化しだした。

攻勢に出ない安遠將軍に焦れた御史中丞が命じると討つて出る事もあったが、板楯蛮は敵の軍旗を見ると戦わずに退いた。これを見た蕭瑗は上奏し、桔梗は安遠將軍のまま巴郡太守に任官される事となった。

またこの時、益州刺史も郤儉が罷免（正確には監軍使*29として派遣された劉焉に逮捕された）され、劉焉が新たに牧伯*30として益州入りした。そして取り調べの結果、板楯の乱の原因となった租税賦役の重税化は元を辿れば郤儉の思惑であり、その税

取によつて随分と私腹を肥やしていたのだった。

かくて劉君郎くんろうはその野望の第一歩を正史よりもはるかに早く、しかして巴郡に目の上のたん瘤を一つ据えながら踏み出したのだった。

こうしてしばしの間、軍務に追われるだろうと他県に預けられていた薺華は、しかし半年程で桔梗が太守に推挙されるのに合わせて江州の自邸に戻る事となつた。

因みに、反乱があつて少し経つた頃に巴郡太守は空席となつていた。しかし、下手な人選で乱をこれ以上拗れさせる訳にはいかなかつた為、空席のままですら、郡丞*31が群府を取り仕切つていた。何故、太守の席が空いたかと言えば、評判の悪かつた前太守が、当時、計掾けいえん*32にも推挙された程の新進気鋭の若手郡官の甘興かんこうにはブチ切れられ半殺しの目に遭つて職を辞したからだ。逃げたとも言うらしい。どの道、近く罷免されただろうとの群府官吏のみならず群民皆の見解であつたが。

その甘興かんこうも家を棄て州外に逃げ江賊*33に身を落としたが、今は江東で孫家に仕えているのだとか。

そして家に戻つてみれば、甘興かんこうと同じように上役を殴り倒して荊州に居られなくなつた魏文長ぶんちやうが居た。

母の古くからの親友である黄漢わうかん升しやうの紹介でやつて来た若き(幼さが残るほど若き)女丈夫は、嚴家の気性に合つたのか直に薺華と姉妹同然の存在となつた。

第二回 血雨腥風けつうせいふう

未だ尻を撫で摩る厳慶祝の姉貴分は、厳將軍への報告を終え軍舎に向かいながら、先ほどのやり取りを思い出しつつ過去を回想していた。

(指揮の失着ねえ)

成る程、比重としてはそちらの方が重いか。だがやはり新兵の事も気に病んでいるだろう。あの義妹は本来的に戦いを好んでいない。そんな素振りは億尾にも出さないが、間違いないと姉を自認する焰耶は確信していた。

いや、これも少し違うか。戦いの、その結果が齎すものが厭なのだ。うん、こつちの方がよりしつくりくるな。

そのくせ、いざ敵を斬り捨てる段には微塵の容赦もなく羅刹の様な武者振りを魅せるのだ、あの妹御は。初陣の時からそうだった。いや、初陣こそが最も苛烈であったか。

(まあ、もつとも……)

それと指揮官としての資質にどれだけ関係があるかは分からないが。

兵を率いて戦の中で確かな役割を担うことを躊躇しているのだろうか？いや、それはないか。

(躊躇する方が危ないことぐらい心得てるし、第一、あいつ躊躇って事だけはしないよな。やるとなったら即断即斬、そこら辺は親子だな)

個人の武では目を見張るものがある。巴郡に来たばかりの頃は自分との力量差はそれほどなく、手合せでは危ない場面もいくつかあった。いや、実際何度か負けを喫した事もあった。業腹だが。

その度に我武者羅に鍛え直したお蔭で、今では妹分を寄せ付けないだけの卓絶した武を体得していた。真・恋姫無双を知る薙華が焰耶姐ってここまで強かったの？と一人密かに瞠目するほどの武を。

一方で、戦場指揮官としてはどこか大雑把な印象を受ける。普段はどちらかと言えばむしろ細かい方の性質であるのに。とは言え、今のところ致命的な失敗はない。失着に気付けば即座に対応するだけの能力がある。大体、豪腕で何とかする感じだが。

彼女の母である顯義も割合大雑把な指揮官だが、長年の経験と練達の武に裏付けされた指揮は、旗下の将兵に逆風苦境にあっても勝利を信じさせるだけの重みがある。

(うーん……)

単に向いてないだけの様な気がしてきた焰耶であった。が、ふと慶祝の初陣を飾った

あの戦場を思い出した。思えばあの時、形ばかりとは言え部曲将*34として戦場に出て、戦が終着した時には単騎で血塗れでいたあの戦。

(そうだな、思えばあの時から…)

足を現在のの仕事へ向かつて進めながら、意識は過去を鮮明に思い起こそうとしていた。

蜀郡西北部、岷江流域。成都平原の北西、東の龍門山脈と西の邛崃山脈の狭間、北か

ら流れてきた岷江が山地に沿って大きく弧を描き北東へ流れを変え平原へ流れ出ようとする直前の地。龍門山脈側北面に巨人の振るう大槌で均された様な草原が広がる地。

東と南を山に囲まれ、西を江が流れ、北を江と山地、その間にある平地が抜けるその草原に、氐蛮軍と嚴顔軍が互いに陣を構えていた。

北方から成都へと攻め込まんとする氐族。南側に陣取り侵攻を阻む嚴顔軍。

それが嚴寿——薜華の初陣の地であった。

薜華はこの戦場に部曲将として従軍していた。しかし、それは形ばかりのもので、自分の脇で副官として振舞っている趙弘*35こそが本来の将である。前評判も高く安

寧將軍の娘とは言え破格に過ぎる待遇だが、薜華が率いるのは敵家の部曲*36千人で正規兵は一人もいない。仮に全滅しても正規軍には影響はないという最低限の体裁は整えられていた。

整えられているのはこういった体裁ばかりではない。身を包む鎧も、軍馬に付けられた馬具も真新しく随分と人目を惹いた。

(目立つよねえ)

身に馴染まない鎧甲を傍目からは判らぬように気にしながら、母の意図するところを読み耽る。ここまであからさまにお膳立てされているのだから明白だ、と思う。しかし……

ちらりと視線だけを大柄な副官に向ける。

趙弘。字を子鷹*37。真名は黒水。荊州南陽郡から流れてきた避難民の一人であった。多くは蜀郡の劉君郎の元へ流れ、見込みのある者は東州兵として練兵されているが、一部、蜀郡には定着せず巴郡へ流れてきた者達もいる。

こうして流れてきた者達の多くは、田畑の耕作に精を出し戸籍への再編入を目指したが、能ある者は流民としてではなく仕官を求めた。郡吏に取り立てられる者、軍に入隊する者もそれなりにいた。

そんな中、豪族の部曲になる者達もいた。子鷹はそんな中の一人であり、頭角を現し

部曲を率いるに至った。

黒い剛毛に赤土の様な肌、他者を圧する雰囲気に加えて鷹鼻鵠眼ようびやうがん*38（字の由来だそうだ）だが気のいい男で、腕つぶしも十人前はある。酒好きで適度におちやらけていて、それでいて越えてはならない一線は固く守り、他人が踏み越えようとすれば殴つても止める男気がある。荒くれ共を纏めるにはうつつけの人材であつた。そして敵家の人間に対する敬慕の念が強かつた。

敵家の部曲を率いるにこれほど適した人材はいなかつたが、今この時に於いては……
「小令愛お嬢様、何も御心配することありません。この趙子鷹に万事お任せください」

いい加減こちらの視線に気付いたのか、快活な笑顔で請け負つてくれた。この男が笑うともみあげと繋がった横に長く伸びる髯げんが更に大きく広がり威嚇的（本人はこれを大鷹の羽搏きだ、などと言っている）に映る。ただでさえ凶顔であるのに笑顔まで怖いと言われる元南陽侠客に、笑顔で応えながら内心で小さく嘆息した。

（私の出番あるのか？）

あまり張り切られても本当にお飾りで終わってしまう。そこまで読み切つてのこの装いであろうが、そうすると今度は自身の率いる曲が危険だ。練度も高く、実戦も幾度か経ているがこれほどの大戦は初めてである。官軍との連携もだ。

ふむ、どうも自身の初陣というだけは済みそうにない。求めるところ多く、実入りは、

さて、どうだろう。

戦は小康状態に陥っていた。前線兵が疲弊すれば機を見て下がらせ、控えていた部隊が戦列を組み直し再度突撃する。それを双方幾度か繰り返していた。どちらも相手と呼吸を合わせて交代突撃を繰り返している。だが、地力の差か將の差か、じりじりと此方側が押していた。となれば、拍子を外して主導権を掴もうとするのはあちら側だ。いつ仕掛けてくるか。

その緊張感の中、薜華率いる嚴家部曲は、右翼指揮官魏文長直營と入れ替わり、遂に最前線へ躍り出た。

馬上で最前線を睨みながら戦況の推移を見守る薜華の左やや後方から趙子鷹が声をかける。

「いやあ、初陣とは思えぬ見事な指揮。惚れ惚れしますな」

「お前はいつから私の太鼓持ちになったんだ」

聞き慣れぬ世辞に軽口を叩く。その反応に子鷹はにんまりと大鷹を羽搏かせ、

「やはり大したものですな。落ち着いていらっしやる」

どういう確かめ方だ。ちよつとあきれれる薙華。と、その耳が敵陣營の変化を掴んだ。左前方、敵前曲の喧騒が薄い？ 大軍の発する音の厚みがない。視線を敵軍後方へ流すと、土煙が忙しく上がっていた。どうやら本隊を後方に下げ陣形を再編しているようだ。決戦を挑むつもりか？

味方陣營に意識を移すと、こちらにも本隊をやや後方に下げたようだ。敵本隊より前線から近い位置、陣形もそのままか。

自曲の最前線に意識を戻す。今も激しく斬り合っているが、直に敵は下がるだろう。敵本隊が突撃してくる以上、前曲を捨てる訳でもない限りは左右翼がそのまま前線に居れば、敵前曲は動きようがない。そのまま下がるか、前曲の半分と糾合し再突撃を仕掛けてくるか、どちらにせよ切り結びながらできる事ではない。となれば一旦下がるだろう。此方はどう動くか。下がろうとする敵に喰らいついて敵本隊の動きを制限するかいや、此方も併せて下がるだろう。本隊同士の正面決戦。母が好むやり方だ。

そこへ伝令が来た。敵の動きに合わせて後方へ下がるように。やはり。

「敵はじき下がる！ そこに合わせて一発かましてやってからこちらも下がるぞー！」

「てめえら、敵の動きを見逃すんじゃないぞぞ！」子鷹が怒声で復唱する。復唱だろう、多分。

しかし薙華にはそこまでの細かい機を読むことなどできない。子鷹に目配らせる

と心得ているとばかりに頷いた。心強いものだ。太鼓持ちなぞやらせておくなど勿体無い。

そこへ、またしても薙華の耳が何事かを感知した。いや、それは音として届く前に意識に、そして肌膚きぶに届いた報せ。反射的に右方を振り返る！そこはちよつとした断崖だ。山肌がむき出しになっている。断崖の上は木々が生い茂っている。布陣時に放った斥候は異常無しを伝えた。ならばなんだ？戦が始まつてから山を駆け抜けてきたのか？緑豊かな道なき山中を全く気付かれる事なく静かに、騎馬で。そう、騎馬で。

断崖の上に多数の騎馬兵が姿を現した。その時、薙華の動きに一拍遅れて断崖を見遣った趙子鷹が薙華よりも先に大声を張り上げた。

「右方敵襲——!!!」

右方から敵襲。右？右は断崖だ。そこから敵が？敵兵が急報を理解する寸前に、

断崖から地を震わす戦叫が響き渡った。

断崖から派手に上がった土煙の為、右翼の異変は本陣にも直ぐに知れた。まさかの伏兵。誰もそんな所から敵が来るとは思つてもみなかった。それでも警戒した敵將軍の

命で斥候を放って確認したのだ。敵陣から兵が減ったようには見えない。ならば始めから本隊とは別に山中を越えて進軍してきたのか、この機に合わせるように。

「なんて連中だ」

誰かがそう呟いた。誰かが、誰でもよい。重要なのはその呟きが終わるまでに安遠將軍敵顔は決断を下し、全軍に命を発した事だ。

「本隊突撃！ 前曲に即時伝令！ 我らに踏み潰されたくなければ死ぬ気で敵前衛を扶け開けよ!!」

「右翼は魏延に任せる！ 左翼板楯兵は己が敵を逃すな！ 後曲は万事に備えよ！」
一瞬の騒めき。しかし次の瞬間、「疾れ!!」將軍の檄に全軍が動き出した。

氐蛮軍は動揺していた。こちらの伏兵に敵右翼は総崩れになる筈が思ったほどの損害が出ていない。確かに崩れているが、最後の一线で踏ん張っている。不可解なのが敵前曲だ。確かに敵の動揺は前曲にまで達したはずなのに、あつという間に意気をあげて戦端を開いてよりもっとも激しい攻勢に出てきた。

そして、敵本隊だ。此方が最後の詰めとして突撃を敢行するその機先を制するようにあちらが突撃を開始してきた。右翼の惨状には目もくれず、前曲と合流し勢いを増して嵐の夜に荒れ狂う岷江の如くに押し寄せてくる。

なんだこれは。

何故、奇襲を受けたあちらが攻め寄せてきているのだ。その意識の空隙が氐軍の必殺の突撃を消し去り、受けに回らせてしまった。それが戦を決した。

本陣の奥深く、敵本隊の動きに合わせて此方の本隊も下げ、決戦の時を待ち焦がれながら馬上から戦況を見守っていた桔梗は右翼の異変に逸早く気付いた。

龍門山脈の尻尾、窪みの様な草原と袂を分かたつ断崖、きな臭さを感じ戦端を開く前に斥候を放った其処から騎兵が姿を現した。

ちっ、と舌打ちを打つ。確かに気になつていたのに、注視していたのに、戦が始まつてからは意識の外に完全に締め出されていた。

しかしまさか騎兵とは、あそこを駆け下りるつもりなのか。敵ながら天晴れだ。

そして伏兵に合わせて敵本隊が突つ込んでくるだろう。既に敵伏兵は呐喊を開始している。右翼には薙華を配してある。焰耶はこの程度心配いらぬが、あの娘はこれが初陣だ。流石にこの状況は厳しいか。だが……、

雪崩れかかる伏兵に周囲の者も気付き始めた。皆が右方を確認する中、前方を見据え

敵の動きを窺う。

(いかなな)

ここで胎は決まった。敵に先んじての本隊突撃を以つて戦況を引つ繰り返す。娘の事はこの一時、意識から消す。と、右翼で瑞々しい軍気を感じた。口の端が上がる。憂いはあつという間に消えた。

後は勝つのみ!

子鷹の警告の直後、薺華は動いた。

「総員撤退! 伝令、伏兵だ! 子鷹は曲を纏めろ!」叫びながらもすでに駆け出していった。敵へ、敵へ向かつて。

「ちよ、お嬢小令!」

「黒水!」

止めようとする子鷹を一喝で黙らせ奔る。

「! 分かりやしたよ!」

返事を聞く間もあらばこそ、薺華は最右翼を目指し軍馬を駆った。

皆混乱していた。陣形が崩れ始め、隊から転び出て馬路を塞ぐ者もいたが、時に避け、時に飛び越え、可能な限り速度を落とさず駆け抜けた。やがてそれも難しくなる。最右翼だ。すぐ前方から悲鳴と怒号が響いてくる。眼球だけを回して左を一瞬見遣る。前線はそこまで崩れていない、子鷹の采配か。

「退け退けー!!」

大喝で呼びわりながら馬を進める。すれ違う兵が増えてきた。と、それが途切れる。最前に出たか？

三馬身向こうに敵騎兵。此方に逃げてくる僚兵二人。届かない。向こうの方が速い。敵兵を捉えた氏蛮兵は大刀を振り上げ、胸から大薙刀を生やして後ろに倒れそのまま落馬した。

すれ違う兵に「退け」と一声掛け、主を亡くし並足で通り過ぎる馬には一瞥もくれず、大の字になって絶命した敵兵を通り過ぎざま、投げつけた秋草を引き抜き右手だけで半回転させて構えると、殺傷圏内に新たに二人の敵兵が、瞬斬二閃、歯牙にもかけず斬り捨て大喝一声。

「我は敵寿！ 安遠將軍敵顔が娘也!!」

それで一瞬、氏兵の動きが止まった。

今、この小娘は何と言ったか。敵顔の娘。それがこんな所にこのこやつて来たど？

雑兵を刈り取る手を止め、見定める。気の早い奴が狼牙棒を振り回しながら呐喊した。数合も持たず斬り捨てられた。

間違いない。顔の造作よりも、上質な鎧甲馬具よりも、その武で確信した。

目論見通りに敵が雪崩れかかって来た。これで生き延びる味方も増えるだろう。このまま軍を立て直す時間を稼ぐ。自慢の大薙刀「秋草」を握る手に力を込める。

まるで灯りに群がる蛾だな。知らず捕食者の笑みを浮かべながら独り言ちた。その間にも一人二人と敵を斬り捨てていく。野火の様な勢いで血を、それ以上に死を戦場にばら撒く稚氣混りの武。見誤った毒蛾の群れは焼き尽くされていく。

敵伏兵による右翼の動揺は激しかったが、本隊からの伝令を受け取ると焰耶は判り易過ぎるほどに奮起した。

断崖を騎馬にて越えてきた常識外れの敵に浮足立った兵達は、碌な抗戦も出来ず討ち取られていく。特に敵左翼と激突している最前線は酷い。敵もそれが判っているから前衛側から進攻してきている。刈り入れの様に容易く討ち取られる味方の姿を見せつける事で心魂も攻めて来ているのだ。このまま恐怖が蝗の群れの様に兵卒の心胆を食

い荒らせば壊滅は目に見えている。

「落ち着けつ!!! 不意を突かれようが三千に満たぬ寡兵など我等の敵ではない!! 我等の仰ぐ旗を思い出せ!!! この私の名を思い出せ!!! 陣形を組み直せ!! あの匹夫め等に自分達の浅はかさを叩き込んでやるんだ!!!」

そんな兵達に向け、焰耶は戦車*39上(超重兵器を振るう彼女は騎馬には乗れなかった。馬への負担が大き過ぎる為である)から右翼全兵に届かんばかりの大声を張り上げ鼓舞した。

名将の条件の一つに声がある。戦場にあつても良く通る声というのはそれだけで一つの資質である。しかしそれだけではまだ足りない。声に力がある、或いは込められることが必要だ。士気を上げ、或いは取戻し、不安や焦燥を消し去る力。自軍の強さを思ひ出させる力。自分達を率いる将の強さを信じさせる力。魏文長の持つ確かな力。

歌の巧さを義妹に羨ましがられる事があつたが、こうして戦場で大声を張り上げている方が性に合うな。頭の片隅でそんな事を考えながら、焰耶は反撃に向けて手綱を振るつた。

右翼は焰耶率いる正規兵五千と厳寿率いる部曲一千の合わせて六千兵で構成されていた。うち、三千が焰耶の直営であり、現在右翼中央から後方を占めていた。最後方の一千は厳寿達の前に最前線で戦っていた曲だ。この最後方の一千を副官に任せ、ここと

本隊との間に布陣させる。奴らに右翼を突破させる事だけはあつてはならない。

自身は二千を率いて逆襲を掛ける。前衛側三千の右端には大分取り付かれているが、此方はまだ手薄だ。前衛へ伝令を走らせてから一氣に飛び出し、その勢いのまま敵伏兵に喰らい付く。

焰耶直營が抜け出た事で空いた後方へ前衛側二千が下がり、陣形を急いで組み直す。再編が完了次第、最前線の敵家部曲救援に向かう手筈だ。その最前線が崩壊する前に向かわなければならぬ。時間との勝負だ。

二頭牽きの戦車が騎兵の群れに突つ込む。機動力では劣るが突進力はこちらが上だ。特にこの戦車を牽く二頭は軍中で最も大柄で馬力と耐久の高い軍馬だ。騎兵と正面衝突しても馬ごと弾き飛ばしてしまう。そして、戦車の右側に居た騎兵はそれを遙かに超える鈍砕骨の一撃で馬ごと絶命する事となった。左手で手綱を握り、右手一本で巨馬二頭分の突進力を超える破壊を齎す猛将の出現に、奇襲を仕掛けた側の氐蛮兵が浮足立った。そこへ焰耶直營の二千が躍り掛かる。徒歩かちの不利など物ともせず渡り合う兵達の軍気を受けて更に猛り立つ焰耶の武は、半ば勝ちを確信していた氐軍の勘違いを糺していった。

「哈あつ！」

気合いと共に振り下ろされた秋草が鎧ごと敵を斜めに両断する。横合いから突き出された槍を左手で引つ掴み、そのままぐいと引き寄せると、槍を突き出した体勢のまま、抗う事も手を離す事も出来ず引き摺られた敵兵に向かつて、槍を離れた左の肘をその鼻梁に叩き込んだ。短い悲鳴を上げて落馬したその敵には目もくれず反対側から振り落とされた大刀を右手の秋草で受ける。更に万力を籠めた瞬間を狙って馬ごと相手に向き直りながら右手を振り下げ、左手を秋草の刃背に叩き付けるように添えて秋草を廻して敵の大刀をいなす。そのまま相手が大刀を構え直す前に馬を走らせ通り過ぎ、後方に詰めていた別の敵を切り伏せる。更に馬を進め右回りで途上の敵を切り伏せ、或いは引き連れ、大刀使いに向き直る。

馬の腹を蹴って一気に速度を上げる。あちらも同じ考えだ。擦れ違いざまに互いに切り結ぶ。いや、大刀は砕け散った。信じられないものを見た大刀使いの氏族の男は、その表情のまま絶命した。それを確認する間もなく、薙華はまた新たな敵と打ち合う。左右同時。右からの大刀を秋草で受け、左の狼牙棒は肩当で受ける。が、強撃によつて肩当が砕けた。その衝撃で狼牙棒が跳ね上がり、左肩に喰い込む事はなかったが、肩の付け根から強烈な痺れが伝う。受けた大刀に押し負けそうになる刹那、馬ごと押し進み

互いの刃を滑らせながら挟み撃ちから抜け出る。

だがそこへ前から槍が突き出される。左へ身を倒し逃れるが頬を浅く裂かれた。左へ傾いだ勢いを使つて秋草を下から搦り上げる様に振り上げ槍手の腋を切り裂く。背後頭上からの風切り音に振り上げた秋草をくるりと廻し、左手を無理やり上げ両手で秋草を支えて上段からの一撃を何とか受ける。肩当を砕いた狼牙棒だ。勢いを殺せず、馬上に仰向けになりながらもぎりぎり堪える。周囲から多数の気配が詰めてくるのを感じて両手に満身を込めて跳ね上げ、体勢を整える間もあらばこそ馬の腹を蹴つて飛び出す。鎧*40を踏みしめ腹筋を使つて立ち上がる、起き上がるのを越えて。そのまま大上段から一番接近して来ていた敵を一刀の元に切り伏せる。

前方から更に三騎、行先は馬に任せ腰を捻り横溜めに構え、一気に開放する。馬首ごと敵を両断。その隙に鎧の隙間を衝いて裂かれた。双剣使いか。そつちは無視して先の一撃に怯んだもう一人の首を刎ねる。反す刃腹で刈つた首を後方に弾く。当たりはしなかつたが、双剣使いはそれに反応して一瞬足を止めた。

その隙に馬首を巡らせ向き直る。大きく息を吐き、尚も群がる敵を凝望^{ぎやうぼう}する。

その姿は既に煌びやかな初子ではなかつた。鎧は傷の付いてない箇所はなく、左肩当に至つては強烈な一撃の元に完全に砕け散っていた。薙華自身も大小細かな傷に覆われ、自分の血と敵の返り血で赤い豪雨にでも打たれたかのような有様だつた。激戦を支

えてくれている軍馬もまた同様に、艶やかな鹿毛が血で黒々と染め上げられていた。新品の皮革特有の匂いを振りまいていた馬具も、今は血臭しかしい。

もはや何人斬り捨て、何度切り付けられたかまるで分らない。

それでも琥珀色の瞳は爛々と輝いていた。秋草を握る腕には力が充溢していた。鎧を踏みしめる脚には全精が込められていた。（鎧は新品の癖に悲鳴を上げていた）

薙華を囲む兵は怯んでいた。怯まざるを得ない。その武威にはない。その武威を支える心魂にだ。予想だにしなかった難敵の出現に進退を考え始めていた。飽く迄もこの娘を討ち取るか、躲して敵右翼を改めて攻めるか、或いは退くか。どうやら本隊の旗色も悪そうだ。敵顔の娘という餌に釣られ過ぎ、いや、手間取り過ぎている。と、そこに細く長く、しかし騒音激しい戦場にあつても良く通る笛の音が響いた。撤退の合図。見れば陣形を立て直した敵右翼が迫つて来ていた。

口惜しい。が、ここは退くしかなかった。

氏軍前曲は、何故自分達が混乱の坩堝に陥らなければならぬのか全く理解できなかった。此方の策が成つたはずだ。全く気付かせる事無く奇襲は成功した。なのに何

故こいつらは意気軒昂に此方を攻め立ててくるのだ。

始めは確かに動揺していた。なのに今は何が何でも此方を食い破ろうとする気概に溢れている。

そこへ敵顔軍の陣営から盛大な太鼓の音が響き渡った。すると、あろうことか此方と切り結びながら陣形を変えだした。何を考えている？ いや、どうでもいい。兎に角そんな事はさせるものか。

だが敵顔軍前曲は激しい戦闘の最中、犠牲を出しながらも幾隊もの細く長い縦列を組んだ。そして、その縦列の間を疾風も斯くやあらんとばかりに駆け抜けてくる騎兵隊。先頭を征くは將軍敵顔。己が前に障害なぞ存在しないとばかりの猛進で、一気に氏軍前曲を突破した。

「続けー！！！！」

「？ 呀？ 呀呀呀！！！！」

堤を破壊し全てを飲み込む洪水の如き進撃。生半可な抗戦などあつて無きが如し。立ちほだかる全てを粉碎する剛力の軍勢。小癩な罫などは踏み潰して撃進する敵顯義の戦がここにあつた。

敵本隊に雪崩れ込んだ桔梗の軍勢は尚も勢いを減じる事無く猛進する。その先頭を、寧猛な喜色を浮かべて突き進み敵兵を蹴散らしていく。その手には奇妙な武器があつ

た。

連結鉄杭。初めてこの武器を見た時、娘は目を真ん丸に開け、何とも言えない表情をしていた。娘に武の手解きを始めた頃は弓を使っていた。まだ幼かった娘は知らないだろうが、若き頃の巖頭義と言えば天下五弓に列せられる程の弓の名手だった。だがいつか弓では満足できなくなっていた。より高い破壊力を求めていったのだ。

そこで手にしたのが鉄杭だった。「何をどうしたらそこに行き着くんですか」と問われても何とも答えようもなく、ただこれだ！と直感しただけなのだ。

当初は強弩を改造して撃つてみたりもしたが今一しつくりこず、撃剣*41の要領で投射する事に一先ず落ち着いた。そして、数を揃えねば話にならぬこの武器を、鉄鎖とそれに幾つも連結した鉄環に鉄杭を嵌めて携行するようになったのだ。それを見た娘の感想は「杭を地面に打ち込んで囲いを作るおつもりですか？」であった。大不評である。こつそりとへこむ母であった。

無論、まだまだ改良の余地はある。いつか納得する形に仕上げる為、各地の武器職人の情報などを密かに集める桔梗であった。そして彼女の娘は密かに（あれが近い内に轟天砲に謎進化するのか）と戦慄していた。

そんな桔梗の理想の過渡期にある奇天烈兵器が唸りをあげて斥兵に襲い掛かった。

この武器は何も鉄杭を環から引き抜いて投擲するばかりではない。軟鞭の様に敵を

打ち据えた時、非常に恐ろしい近接武器と化するのだ。鉄鎖が鞭のように降りかかってくるだけではない。連結された鉄杭も予測困難な動きで襲い掛かってくるのだ。防御は困難で大きく回避するよりほかない。そして距離を開ければ鉄杭が馬の首すら貫通するような恐ろしい威力で飛来してくるのだ。厄介極まりない。

例え鉄杭を撃ち尽くしても鉄鎖鞭としての機能は失われぬ。寧ろ振るいやすくなるのだ。無茶苦茶な割に意外と使える。というのが娘の批評であった。

そして今この戦場においても、その力を余すことなく發揮し、縦横に戦火を広げている。

鉄鎖が振るわれる度に何人もの敵兵が纏めて吹き飛んでいく。中には打ち据えられながらも鉄鎖を掴む剛の者もいたが、桔梗は意にも介さずその者ごと鉄鎖を振るった。哀れ桔梗の武器の一部と化した兵は味方と強かに激突し果てた。進路上に居る者は誰であれ吹き飛ばされていく。鎖の届かぬ位置にいる閻や屯を率いる指揮官級には容赦なく鉄杭がぶち込まれる。

誰にも止められない、どころか満足に触れる事すら敵わない。人の形をした戦禍が精強な兵軍を蹂躪していく。

たった一人で戦局を決定付けてしまう者、或いは覆す者を指して一騎当千と称する。氏族はたった今、正にその一騎当千足る存在が如何なるものかを身を——命を——以つ

て知る羽目に陥っていた。それを敵に回す事の意味を。それは単に桁外れの強さを指して言うのではないと。桔梗の武威に引き摺られて桔梗に率いられた漢兵にまで容易く討ち取られてしまう現実に直面して初めて識しった。一対一ならば脆弱な漢人如きに後れを取る弱卒など氏族にはいない。にも拘らず、今また一人、また一人と討ち取られていく。此方の力は萎え、あちらの力は弥増しているのだ。

敵に絶望を、味方に熱狂を齎す者。戦局を決定付けるとはこういう事。桔梗に率いられた軍はその全てが強かった。

「随分と派手にやったなあ。斬りも斬ったり、百人くらい斬ってんじやないか？これ」

周囲に散らばる兵の死体を見渡しながら文長が戦車を寄せてきた。

「ん、ああ、どうだろ？ 数える余裕もなかったし」

何処か気の抜けた声で応える義妹に、ん？と顔を向ける。熱に浮かさされているような、逆に醒めてしまったような、何とも判別しがたい雰囲気だ。明後日の方を見ていた。義姉の視線に気付いているのかいないのか、肩から力を抜き、目を閉じ、ほうと息を吐き、そして目を開いて、嗚呼と呟いた。

「嗚呼、母上に会いたいな」

「好し、じゃあ、行つて来い」

「はへ？」

「なんだよその間抜けな反応は」

「いやでも、戦が終わつてもやることはまだ色々あるし……」

「いいんだよ、お前は正式な武官じゃないし、部曲のまとめは黒水にでもやらせておけ」

「でも、それじゃ示しが……」

「いいから！」

こうして、半ば強引に本陣への伝令の随行として送り出された薺華の背を見送り、

(折角久し振りに子供の顔を見せたんだから、まあ、良いよな)

と、誰にも聞かれぬよう独り言ちた。

その姿に誰もがぎよつとした。全身これ赤で彩られた血みどろの幼武者。どこか茫洋とした表情で本陣に帰参したのは、誰あろう安遠將軍敵顔の愛娘敵毒であった。

戦を勝利で終え、勝鬨が止みその余韻冷めやらぬ中、各部が戦後の各種処理に当たろ

うとしたその時、右翼より伝令と共に本陣に姿を現したのだ。

戦が始まる前とは余りに隔たりのあるその姿に、皆固まってしまった。そんな中、一人笑みを濃くするのは、無論、薺華の母であった。

「見事な戦働きであったぞ。流石、我が娘、我が誉れよ」

何も聞かず確かめず、まるで全てを承知しているかの様にただ称賛の言葉を送る母。

一方の娘はその言葉に、初めて眼の焦点があつたような顔をして、そして、年相応の愛らしい笑顔を浮かべた。

「ただいま戻りました、母上」

「うむ、おかえり。薺華」

こうして、厳武の娘はやはり厳武であると内外に知らしめた厳寿の初陣は幕を閉じた。

第二回——了——

全ての報告を終え文長も退室した太守執務室で、近頃よく記憶に浮上する娘の初陣を回想していた桔梗は、しばし娘の進退に想いを馳せていた。

「そろそろ、巢立ちの頃合いなのやもしれんな」

自らを未熟と断じ士官の素振りも見せぬ娘だが、近頃はこの国の末を気にしている節がある。さて、あの娘は如何なる道へと進むのだろうかと、やや複雑な面持ちで考えていると、ふと戸口が少し傾いでるのに気が付いた。薜華が飛び出ていったときに強く開け過ぎたのだろうか。時折見せる年相応の姿を何よりも愛でる桔梗は鼻歌混りに立ち上がり、戸へと向かった。

「やれやれ、仕方のない娘よ」

そんな事を言いながら、どこか機嫌よく戸の傾きを直す。

ベキツ

「あ」

「厳太守様、資料をお持ちしま……なんですか、この戸は」

仕事を再開しようと席に着くと、折良くやって来た郡丞が上部の留め金が外れてふらついている戸を避けながら入室してきた。

「ん、いや寿の奴が、な。その戸の修繕費は寿の此度の俸禄から差し引いておくように」
その言葉に、先程廊下で会った巖慶祝の様子を思い出し、ああ、と笑顔で応えた。
「畏まりました」

母、郡丞に白を切る。並べて世は事もなし。

第三回 巴郡人士

「どうしました？ 慶祝殿」

「曹郡丞殿」

そうけん

曹謙*42。字を和光*43。正史では板楯蛮の叛乱を治めた巴郡太守であるが、こ

の外史では郡丞として嚴顔の補佐を——民政面において絶大なる——務めている。

彼、曹和光は薜華が（そして母も御同様だ）頭の上がらない人物筆頭の一人であり、公私両面において様々な相談を受けてくれる、薜華にとつてある意味最も得難い人物だ。

柔らかな枯葉色の髪を後ろへ撫で付け、高い額に筋の通った鼻、内面の穏やかさを窺わせる弓形の眉、おっとりした眼差しの黒い瞳、丁寧に切り揃えられた口髭、笑みを絶やさぬ薄い唇、一目で誰にでも好印象を与える清潔感を纏った壮年に手が掛かろうかという年代の男性。背丈は魏文長とほぼ変わらない、七尺三寸程か。しかし線は細く、並んで立てばいかにも頼りなく映るだろうが、最低限の筋肉はしっかりと付いている。

清廉且つ謹直な名士で、この巴郡で最も柔和な人物と噂されている。正式な官職を待っている訳でもない小娘にも親身に接してくれる見た目通りの好人物であった。

その曹和光が廊下の向こうから、両手に竹簡の束を捧げ持ちながらやって来た。

「厳太守様に不意討ちでも喰らいましたかな？」

「……職務中に親の顔をするのは狡いです」

「このような時に攻めてくる筈がない。その時こそが不意を討つ好機ですからな」

完全に内政の人であるが、こういう時の読みは深い。此方の様子を見ただけでこんな事を言ってくるくらいには。執務室でどんなやり取りがあったか、全て知られてしまっている様な気がするほどだ。無論、そんなことはあり得ないが、その筈だが。まさか義姉の尻を思いつ切り蹴つぱぐったなんて事まで読み解ける筈はない。

「ところで文長殿は御一緒ではないのですな」

「ふえ?!」

「御一緒に報告に上がられたのでしょう?」

「え、ああ、はい」

話しながら曹郡丞がちらりと薜華の背後、今し方飛び出してきた太守執務室の方へ視線を飛ばすのを見て、

「ええっと、あの、それではこれで。負傷者の様子を見に行かなければなりませんので」
思わず即時離脱を選択してしまった。

第三回 巴郡人士

「じゃあ、日常生活には支障はないんですか？」

「ああ、短い距離なら走る事もできるようになるだろう。無論、無理は禁物だけどね。あと、重い物を持たせるのは厳禁だ」

「そうですか」

曹郡丞の前からそそくさと辞したその足で軍舎の施療所に顔を出した薺華は、一通りの治療を終えた張脩と面談していた。死者は出なかつたとはいえ、少なくとも怪我人を出していた。中でも重傷を負つた新兵の経過は、彼の今後の進路を考える上でも重要だつた。

件の新兵は腕と腰、特に腰を強かに打ち据えられ、立つ事はおろか蹲つたまま動く事もままならなかつた。診断によれば腰椎を骨折していた。この時代では致命的な負傷だが、張巫医はなんと骨を縫合して治療したというのだ。「鍼灸だけが鍼ではない。傷の縫合出来ずしてゴツトヴエイドーは極まらない！」とは張巫医の言だが、心霊医療よりも余程不可思議だと感じるのも致し方ないことだろう。

だがお蔭で制限があるとはいえ、日常生活には復帰できるのだから有り難いことこの

上ない。少なくとも自活できる程度に回復するのであれば、予後の進路も選択肢が広がる。ほっと安堵の溜息が知らずに漏れた。

そんな薺華の様子を微笑ましげに見詰める視線に気付く。

「なんです？ 火鳥兄さん」

「いや、何でもない。それより、俺相手にそんな畏まる事ないよ」

「いえ、まだ職務中ですから」

「薺華ちゃんはしつかりしてるなあ」

うんうん、と腕を組んで感心しきりと頷く。ちよつとした事でも感激し、感心し、喜びを露わにする。それが張伯腊はくろく*44と言う好青年であつた。

「普通です。普通ですからね、こんな事でいちいち褒めてこないで下さいよ、もう」

「ははは、ごめんごめん」

恥ずかし気にほんのり頬を赤くする少女に笑顔で応じる青年。薺華はいつもこの青年の前では必要以上に自分が子供になつたような気になる。その為、意識して態度を堅く保とうとしていたのだが、伯腊の発散する空気の前では無駄な努力だつた。それでも、小さな咳払いでもう一度意識を取り直す。

「それで、面会は可能ですか？」

「今はまだ鍼麻酔の効果が抜けきつていないから、ちよつと難しいかな。これには個人

差があるから何時ならとははつきり言えないけど、それでも明日には抜けきつていていると思ふよ」

「そうですか、では後日の方がいいですね」

後にこの新兵は將軍府で事務仕事を担当する吏卒*45として再出発する事となった。

輕傷者への見舞いと、細々とした雑務を済ませ軍舎を出た薺華は、そのまま裏手にある練兵場へと足を運んだ。軍舎の窓から見知った顔が調練に精を出しているのが見えたのだ。

果たしてそこには二頭の立派な德國狼狗*46、劍司けんしと秤司しょうしを従えた若き部督郵*47が居た。

董幼宰とうようさいは巴郡官吏の若手の中でも逸群の士として名を馳せている。荊州南郡枝江なんぐんしこうけんの人であるが、近年の政情不安、治安の悪化から益州へと逃れてきた一人だ。

劉益州牧の移住政策に乗って南郡董氏は一族揃って避難してきたが、蜀郡へとは渡らずにここ巴郡に落ち着いた。理由の一つとして、先祖が巴郡江州県の人であったから

しい。

しかし、幼くして名が知られていた幼宰が仕官を求めて劉君郎の元へ行かなかつたのは、一族の者に合わせて一時滞在していたこの巴郡を見定めての事だつた。

敵太守の治定（じてい）に感銘を受けて仕官した少女は、見る見るうちに頭角を現した。異例の速さで督郵にまで上り、そこでも確かな能力を示した。誰に対しても公正で、法を汚せば豪族であろうと容赦せず、善良な郡民であれば賤民であろうと侮らず。また、異民族ともよく協調し、属県巡行への随行兵も板楯兵をと願ひ出た。そんな彼女の道中は非常に穏やかなものとなつた。

今では忙しく管轄の郡東部を巡視する日々を送っている。と言つても、年がら年中郡内を駆け回っている訳ではなく、普段は郡治で過ごしている。そして、時折こうして体を鍛えるため軍にも顔を出していた。

きつめの三つ編みで一つにまとめられた肩甲骨の辺りまで伸びた鮮やかな橙色（約15.4cm）の髪、髪よりも色濃い瞳を持つ切れ長の鋭い眼、色素の薄い肌、年少の薜華より低く六尺七寸（約15.4cm）しかなく、なにより全体的に細く薄い肢体はおよそ武に生きる者の肉体ではない。それでも日々の弛まぬ鍛錬によって、そこらのならず者などは一刀の元に切り伏せるだけの力量は得ていた。

今も鍛錬に訪れ、一心に剣を振るっている。その剣は彼女の実直さを示すように素直

な、それでいて鋭い軌跡を描く。丹念に磨き上げた武には人柄がよく顕われるという。成る程、彼女の振るう劍には董幼宰が良く顕われている。

いや、劍だけではない。彼女の嚴格さは常の立ち居振る舞いから職務に臨む態度まで、全てに顕われている。それを若さからくる逸り、稚氣に煽られた熱氣と軽んじる者もいる。そいつらは解っていない、と薜華は述懐した。董幼宰の事を全く解っていない。大した信念も持っていない癖に他人の信条を考えもなしに軽く見下げ様な愚者共などが実際に彼女と対峙すれば、その鍊鉄の意志を前にすれば、赤熱する鋼を眼前に突き出された人のように後退るだろう。

真名はその人の本質を表す最も神聖な名だという。

巴郡督郵董和*48。字を幼宰^{ようさい}。真名を、鋼^{はがね}。

彼女ほど己の真名を体現している人物を薜華は知らない。

「精が出るね、鋼」

「薜華か、急に声を掛けるな。驚くだろう」

「それならそれっぽい反応して」

「む……」

趙伯腊とは違つて気軽い感じで声を掛けた。群府幹部最年少の幼宰とは年も近く、すぐに気安い仲となつていた。背後からこつそり、という訳でもなかつたのだが、よほど

集中していたのだろう。軽く文句を言われてしまったが、同じく軽く受け流す。

鉄面皮、という程ではないのだが、こういう時、董幼宰は反射的に内面の動揺を外に出さないよう硬い反応を示す癖がついていた。それを知る薜華の軽口であった。

「劍司、秤司、元氣か？」

薜華のそんな軽口に小さく唸る幼宰を放つて置いて、その飼い犬に優しく声を掛ける。中腰になり両手を広げ、受け入れ態勢を万全に整える。微動だにしない犬二頭。飼いに目配せを送る少女。真劍に、必死に、真摯に、目で訴える。

呆れるほど真剣な視線を送られた督郵殿は、そんな薜華を若干冷たく眇めつつ、ふう、と嘆息一つ、「よし」と愛犬に許可を出す。と、主から許しを得た二頭は弾かれたように薜華に突進した。

「好し好し好し好し、愛い奴等め。はははは」

相好を崩し、埋もれるように二頭に挟まれる形で抱きしめ、存分にそのふかふかの毛皮を堪能する。通常、剛毛気味な狼狗シバドだが、今は冬毛だ。ふかふかである。もつふもつである。濃密な毛皮を誇る犬種だけに、薜華の幸福指数も鰻上りだ。

主人に非常に忠実で警戒心の高い彼等に、ここまで心を許してもらうまでには長く険しい道程があった。己の初陣を回顧するよりもよほど長大な物語となるであろう交流の歴史は割愛するとして、この時代に漢犬以外の、それこそ世界中の様々な犬種と触れ

合える機会のある外史の幸運を想った。跋扈將軍*49唯一の功績を想った。

今の世にあつても些かも減じる事無く悪名を轟かす梁冀*50の趣味の一つに競犬というものがあつた。要するに犬に競争させる娯楽(当然の様に賭博を伴う)なのだが、これに嵌つていたかの跋扈將軍が、その権勢に飽かせて文字通り世界中から犬を掻き集めたのだ。それによつて絲綢之路*51を辿つて実に多くの犬が移入される事となつた。一部の文化・文明面の時代の進みが早いのは何も中華大陸に限つた事ではなかつた。らしく、時代にそぐわぬ新しい犬種も普通に渡来した。

お蔭で今こうして劍司と秤司を愛でられるのだ。控え目に言つて最悪の屑であつた梁冀をほんの少しだけ許してやろうと寛大な心持ちになれた。何様であらうか、そんな益体もない事を思いながら二頭を愛でる薜華を、やや呆れた表情で眺める友人に気付き、咳払いをして表情を引き締めた。二頭を撫で摩るのは止めなかつた。

「いや、いい加減離れないか」

「暖かいんだもん」

「……もん? いや、いい。人の犬で暖を取るくらいならもつと厚着しろ。常々思つていたのだが、見ている此方が寒い」

「別に寒い訳じゃないんだけど。冷えてきたらちゃんと着込むよ、偶に雪が降る時は外套羽織るし」

「……前に降雪があつた時は南蛮辛子*52を齧れば平気だ。と言つて實際それで済ませていたな」

益州、特に広大な盆地に位置する巴蜀の地は温暖な土地柄だ。季夏六月から孟秋七月にかけては南蛮かと思う程気温の高まる日もあり、雨量も一年で最も多い時期故に湿気も高く過ごしにくい。また、巴蜀を囲む山脈群が寒気を遮る為に冬になつてもそれほど気温も下ならず、朝方にも桶の水が凍り付かない日もそれほど珍しくない。

とは言え、薜華の服装はこの地にあつてもかなりの薄着ではあつた。鍛錬で汗をかく為にいつもより薄着でいる幼宰よりもなお薄着であつた。

「ほ、北方に行つたら流石に厚着するから」

その言葉に、幼宰が片眉を上げて驚いて見せた。その理由が判らず、はて、なんだろう? と思つてしていると幼宰の口から最近になつて——實際、初陣以来この話は度々話題に上つたが最近は頓に、だ——薜華の周囲を賑わす話題がついて出た。

「ようやく仕官を決めたのか?」

「ああ、いやそうじゃないよ。ものの例えで……」

「なんだ」

幼宰はこの年下の傑物の去就を普段から気にかけていた。

今や中央は豺狼当道*53の有り様。いや、もう随分と前からか、それこそ自分達が

生まれるずっと前からそうだ。もはや限界なのだ。今以つて後漢が存続しているのがいつそ不思議なくらいだ。このような憂いを持つ者は多い。自分も勿論そうだし、巴郡に来て得た目の前の友人もそうだと確信していた。

だからこそ、薜華がいつまでも進路を決めない事に氣を揉んでいた。

「でも、本当に北方、に限らないけど此処を出ていくかも」

「うん？ 遊侠*54にでもなるのか？」

「放浪すれば必ずしも遊侠つて訳でもないと思うけど、まあ、世間的に見ればそうなるのかな？」

「目的は仕官先探しか？ やはり薜華も中央に依らず、か」

「というよりは、本格的に乱世が到来する前に大陸を見て回りたいっていうのが大きいかな」

乱世、と言う言葉に幼宰は大きく反応した。見た目では判らなかつたが。

「確定的に言うのだな」

「ん」

「ろうちゅうけん 中県とくしんじゆつに居るといふとくしんじゆつ 凶讖術*55を得意とする友人か？」

「秋に会いに行つた時にね」

かつて、母が軍に復歸したばかりの頃、一時期だけとくしん 中県に預けられた事があつた。

薺華はその時、二人の友を得た。それまで、同年代に友と呼べるほどの関係を結んだ相手の居なかつた薺華にとつて、とても大切な二人だ。家族以外で初めて真名を預けた二人。その内の一人は幼い頃から図讖の天才と評されていた。

そういうえば、あの時以来だな。と心の中で独り言ちる。あの秋の夜から再び、再び真・恋姫無双に関する記憶とも知識ともつかぬ靄が思考に浮上するようになった。二度目の契機だ。一度目は迂遠な所から記憶を攻めてきた。二度目は、友の口から語られた二度目は、より直截な部分を投げつけられた。真・恋姫無双の核。

もはや確かめずには居れない。

「そうか、乱世か。いよいよもつて益州も騒がしくなるだろうな」

「そうなる前には帰つてくるよ」

「いつ出るんだ？」

「春になったら、かな。孟春^{一月}だとまだ寒いから仲春^{二月}になったら」

「年中、同じ格好している奴が言つてもな」

「そこに話し戻さないでよ!？」

一瞬の間を空けて、二人で向かい合つて笑つた。年相応の二人分の子供の声が軍舎裏に響く。幼宰は特にだが、薺華もこのような姿をあまり他者に見せなかつた。だが、二人が揃えばなんとなしに笑いが漏れる。大して愉快な事でなくとも二人は良く笑い

合った。薺華が益州を出るなら、こうして笑い合う時間も貴重なものとなるだろう。暫しの別れだ。だが、今生の別れになるかも知れない。こんな世だ。おまけにこれから更に酷くなる世だ。一寸先に何があるかなど誰にも解からない。決まりきった筋道などないのだ。だから二人は笑った。いつものように笑い、いつもよりも笑い合った。

「さて、そろそろお暇しようか」

一頻り笑い合った後、幼宰が愛犬達を見ながら切り出した。見れば二頭とも軍舎のあ
る一点に顔を向けていた。

「焰耶殿が先程軍舎に戻って来たのだ。降伏した賊徒共の調教があるだろうし、私達が居ては邪魔になろう」

「ああ、うん。そうだね」

具体的には剣司と秤司が、であろう。義姉の犬嫌い（というか苦手なのだが）は一部ではよく知られた事実だった。思えば、この年の近い郡幹部と友誼を結んだ切っ掛けも、それが原因で相談を受けたからだった。

「私は文長殿に嫌われているのだろうか？」真顔でそう聞いて来た新任督郵に、

「いえ、犬の所為です」と即答したのを昨日の事の様思い出して、もう一度小さく笑った。

「なんだ？ どうした」

「いや、焰耶姐に嫌われているのか不安でおどおどしてた鋼を思い出して」

「……おどおどはしていない」

「でも、結構落ち込んでたよね。あの時は気付かなかったけど」

「訳も分からず嫌われでもすれば私でも傷付く」

「繊細な乙女心がね」

「そうとも」

再び練兵場に暫しの笑い声が響いた。

幼宰の着替えを待つて軍舎を後にした二人は、歓談しながら城市を軽く見回っていた。二人は良くこうして亭卒*56の様な事をしていた。実際にはただ散策しているだけなのだが、この二人は顔も名前も人柄も江州の民に知れ渡っていた。それ故に何かと声を掛けられ、時には厄介事に出くわす事もあり、本職の亭卒にまで頼られる事態まであった。それが重なりいつしか自主的な見回りと認識されるに至った。そして、二人揃ってそれに異議を唱える事もなかった。

だが今日声を掛けてきたのはそんな厄介事ではなく、よく見知った者の声だった。

「小令愛！ 董督郵様！」
おじょうさま

薜華をお嬢様などと呼ぶのは敵家の者だ。そしてこのただ呼び掛けているだけなのに、恫喝めいた響きを滲ませてしまっている声の持ち主と言えば、ただ一人だけだ。

振り返ればそこに、久方振りに見る趙子鷹の姿があつた。

「黒水、帰つて来てたのか」

「へい、今し方戻つて参りやした。御二人とも御元気そうで」

「子鷹殿も壮健そうでなにより」

「頑丈なのが取柄でして」

凡そ五カ月振りに江州に姿を現わした部曲長は、現在の肩書を総鏢頭そうひょうとう*57と言つた。

敵家部曲は現在、鏢局ひょうきょく*58を営んでいた。

この時代、運輸業はその規模が非常に大きく隆盛していた。内情の安定している巴郡は必然、商業規模も大きくなっており、各種事業で新規参入を目論む商賈もまた多かつた。敵太守が職人を保護し、その流れを活かす為に商業を奨励した事もそれに拍車をかけていた。

そんな情勢の中、薜華の発案で敵家部曲は運輸業の新規参入を果たした。実は大規模化していたのは敵家部曲もそうだった。私有地の耕作などもさせていたが、それにも限

界がある。とするとあとは訓練くらいしかやる事がなかった。

將軍府の官軍が西方異民族に対していた頃は、郡内の盜賊退治などを代行させたりなどもしたが、劉益州牧の軍が第一陣として戰場に立つようになると、對異民族戦は減り、官軍が盜賊の征伐を行うようになった。そうなると部曲の出番はない。あつてはならない。(薜華の初陣は例外として)

無駄に遊ばせておくという選択はなかったが、さりとて嚴顯義には良い案が無かつた。そこで娘に相談してみたところ、鏢局の設立と相成つた。

鏢局は商品を商わない商売だ。人や物を目的地まで運ぶ事で金銭を得る。

道中の安全は保障されていない。約4,14km十里每*59に置かれた亭はあるが、賊への対応は基本事後だ。普段は睨みを利かせているだけ。亭長の威名によつて効果がまちなのだ。最悪、盜賊と繋がっている事すら有り得る。とても安心できる材料にはならない。

そこで荒事には一日の長がある部曲が護衛を兼ねて人品を運ぶところに商機があつた。既存の商人も子飼いの護衛部隊を持っていたり、信用のおける傭兵団を雇っていたりしていたが、後ろ盾に猛將嚴顔が鎮座する新興の鏢局『巴鷹鏢局』はようひょうきよくは瞬く間に益州運輸業界の一席を占めた。

「お前が出てたつて事は新地か？ 今回は何処まで行つてたんだ」

「へえ、暫くは長安支局ちやうあんに居たんですがね、そつから并州太原郡たいげんまで行つてきやした」

鏢局を束ねる子鷹が外回りに出る時は、賊征伐か未開拓商路を回る時である。益州内では巴鷹鏢局が敵家所縁である事は誰もが知っていたが、他州ではそうではなかった。薜華が母の名を使わぬようにと言ひ含めた（州内では名を使うまでもなく知れ渡つたが）からである。故にその真価が發揮されたのは、州外へ勢力を伸ばしてからだった。

普段の業務はそこらの運輸業者と特段の違いがある訳ではなかった。業域を拡張したばかりの頃などは、大口の顧客がそれ程ついていない事もあつて小規模な鏢隊ひやうたいが主だった。

匪賊に対して名も売れておらず、見ケみかしめも払わない新興業者はいい的だった。敵家で鍛えられているとはいへ、傑出した武勇を誇る者がそういる訳でもなく、土地勘もない小規模鏢隊では盗賊にしてやられる事もあつた。そうなれば顧客に対して損害賠償を支払い、信用も失う。それを防ぐには普段から鏢師ひやうしを増やすか、賊と繋がった土地の顔役と渡りをつけるか。普通はそうだ、そうする。だがその後はそこらの運輸業者と違つた。

彼等は報復した。徹底的に報復した。少なければ十人に満たぬ少数で運送している鏢隊が、賊狩りに出張ると途端に千人規模にまで膨れ上がったのだ。鏢隊を襲つた賊は全て狩られ、道端に巴鷹鏢局の旗印と共に首を晒された。仇の賊が見付からずとも、周

辺の盜賊山賊は見つかり次第に狩られた。無関係だろうが賊なのだろうと、ならば見逃す道理無し。賊徒を殲滅する以外の全てを度外視して巴鷹鏢局は報復を完遂した。

このような事を幾度か繰り返す内に、「巴鷹鏢局には手を出すな」という話が賊社会に広がった。こうして信用を取り戻した上で上乘せして巴鷹鏢局は躍進を続けている。

それでも商路の新規開拓時には人員を増し、総鏢頭の子鷹も出張る。出先で商機を見出せば、支局開設の為の人員も改めて派遣される。その時には長である子鷹がその場に居た方が二度手間を省ける事もあった。とは言え并州はかなりの遠方だ。総鏢頭の不在が長期に亘るのも具合が悪い。洛陽以東以北にまで手を伸ばすとは薜華は考えていなかった。

「并州は遠過ぎないか？ それにあそこは異民族勢力が強いだろう」

「仰る通りで、何とかつてえ鮮卑の单于*60が死んで勢力が弱まったと聞いてたんですがね。支局開設は見合わせやした。荷がありや運んでも良いが、地盤を築くとなると鬼の口がちとでかい」

「弱体化したとはいえ、やはりまだ鮮卑の勢力が強いのですか？」

「鮮卑そのものですが、あそこは他に匈奴キョウトも住んでますし、なにより単純に荒れてんです。山賊共のまあ多い事多い事。牛だの燕だの呼ばれてる渠帥キョウシ*61が名を売ってるみてえです」

并州の現状に気を惹かれた幼宰の問いに返ってきた答えは惨憺たるものだった。二人の少女の顔付きが深刻なものに移り変わるのを見て、この空気はまずいと読んだ子鷹が努めて明るい声で話題を転換した。并州土産にと買い込んでいた酒瓶を掲げながら。

「まあ、詳しい話は後にしやしよう。天下の往来でする話でもありやせんや」

「そうだな。つて、なんだその、酒？」

「こいつは茲じし氏し県の薬酒で竹叶青ちくようせい*62と言いやして、土産にと買って参りやした」

「竹叶青？ 酒なのか？」

軽く驚きながら隣を見れば、幼宰も驚いていた。益州で竹叶青*63と言えば茶である。茶発祥の地とされる益州に於いて緑茶の代名詞として親しまれている品種と同名の酒とは、何とも世の中広いものである。

「驚いたでしょう？ あっしも名前を見て思わず買っちゃいました」

「土産では？」 すかさず幼宰が突っ込んだ。

「いえね、薬酒つてんで、あんま期待してなかったんですがね、呑んでみたらこれがなかなか！ なかなかのもんでして、改めて土産として買い込んで来たんでさ」

「今買い込むって言った？」 薺華も突っ込んだ。

「へい、樽で」

「樽!？」

「三樽ほど」

「買い過ぎでは？」

「大丈夫です。瓶でも十本ほど……」

「だから買い過ぎだろう。わざとか？」

「いやあ、次の機会が何時になるかも分かりやせんし」

「それはそうかも知れないけど」

完全に入れ替わった空気に子鷹はほっと胸を撫で下ろした。そんな子鷹を気にする事もなく話は進む。先程顔を出そうとした深刻さはどこへやら。興味は酒、となれば酒宴だ。

「鋼、今夜暇？」

「ああ」

「じゃあ、決まりね。行こうか」

「いや、流石にこのままではな。身を清めてから改めて伺うよ」

汗は拭き、着替えもしたとは言え、薺華の邸に招かれるという事は太守の邸に招かれるという事である。僅かな礼も失するわけにはいかない。そこまで気にすることは無いのにと、薺華は個人的にはそう思うのだが、矢張り周囲の目もある。気にしないわけにはいかない。

子鷹が話についていけない内に二人の間で話が纏まり、一旦別れる事となった。阿吽の呼吸である。

「じゃあ、黒水。家の者に言っておいて」

「へ、へい。小令愛はどうなさるんで？」

「母上に話を通しておくとよ」

言いながら早くも足を郡府に向け直していた。

再び郡堂へとやって来た薺華を呼び止める声に足を止めた。幼い頃より聞き慣れた声に振り向けば、そこに居たのはやはり厳めしい顔付きの巖の様な初老の男性。郡府の上級幹部である功曹掾こうそうえん*64であつた。そして、

「党舅父*65」

薺華の親戚でもあつた。

巖げん霸*66、字を奉霆ほうてい。真名を檜ひのき。

紫がかつた銀髪は結上げられ進賢冠の中に納まり、同色の顎鬚は一房の筆の様、意志の強さを示すかのような太い眉に、常に睨んでいるような眼つき、皺皺が刻まれる度に威

敵を増す顔立ち、ずんぐりとした肉厚の体型は七尺一寸程約163cmと然程上背こそない（薜華よりもわずかに高い程度。あと数年もすれば追い抜くだろうが、薜華にはこの党舅父いとこおじを見下ろすところがまるで想像できなかつた）ものの、見る者を圧する雰囲気を醸し出していた。但し、本当に醸し出しているだけだが。

巴郡敵氏の名士で、敵顔母娘と違い武はからつきしだが、高い事務処理能力から若い頃より群府で活躍してきた。一時、中央にも出仕したが失望と共に直に帰郷する事となつた。

人を見る目が確かで、嘘を吐くのが下手な性分だつた為、敵顯義が太守に就任すると直ぐに功曹掾に取り立てられた。

「どうした。今時分まで居るとは思わなんだぞ」

「いえ、一度辞したのですが、黒水が土産を持って帰つて来たので、今夜、屋敷に人を招こうかと。それで母に報告と許可をと」

「あやつ、長安から戻つたか」

私用で郡堂の、それも太守を訪ねるなど叱られるかと思つたが、黒水の件に食い付いてきてくれたので、内心で胸を撫で下ろしながら話を続けた。

「いえ、并州まで足を伸ばしてきたそうです」

「手ではなく、か？」

「考えていた以上に荒廃していたようで、思い留まったみたいですね」

「賢明だな。そもそも司隸しりの支局も地固めが済んではおるまいに」

自然と並んで進みだした。どうやら党舅父も太守執務室に用件があるらしい。

「順調に事が運び過ぎて足元が見えておらんようでは先は短いぞ。どうなのだ、その辺りは」

「確かに調子には乗っていると見えますが、今回の事も最後の見極めは出来たようですし、私は黒水を信任していますよ」

驚くべき速さで拡大を続けている巴鷹鏢局だが、今だ新興の域を出ていない。確かにこれからは勢いだけではやっていけないだろう。釘を刺しておくか。それにしても、

「長安ならば今は安定しておる故、下手な色気など出さずにそこで地歩を固めよと云うておけ」

「党舅父、意外と黒水を気に掛けていらしたんですね」

「喧伝している訳ではないとはいえ、あれで敵氏所縁の者だからな。可笑しな評判が立っても困る」

ふん、と面白くもなさそうに応えているが、どうやらそれなりに趙子鷹の事を買っているらしいな。と薜華は見取った。

「長安は安定しているのですか？」

「今、京兆尹*67を務めておられる司馬建公*68殿は恐ろしく厳正な方だそうだ。あやつには肌合わんかも知れぬがな、三輔さんぽの中でも最も民が安んじて過ごして居られるのは、質実剛健な京兆尹殿の施政あつてこそであろう」

「お詳しいのですね」微かな驚愕と共に聞くと、

「二期期、三輔と南陽からの移民がいやに多かつたのでな。それで気になつただけの事よ」

「そうでしたか」

劉益州牧が地縁勢力に依らぬ軍事力を得る為に施行した大規模移住政策。三輔地方と南陽郡から、数万戸に及ぶ人民が流入した。その影響は巴郡にも及び、当時、太守に任官したばかりの嚴顯義の目を激しく回らせた。半年振りに実家に戻つたというのに、碌に母と話も出来なかつた當時を思い出し、知らず苦い顔になつた。

軽く頭を振つて思考を戻す。遣り手の長官がいながら棄民を大量に出すとは考え辛い。

「司馬京兆尹殿は領民の大流出後に就任されたのでしょうか？」

「うむ。あの頃は周辺でばたばたと行政長官級が入れ替わつたな」

右扶風、左馮翊さひようよくもだろうか。と思考を巡らすと

「南陽太守もな。全く驚いたものだ」

別の地方を持ち出された。南陽。

党舅父がこちらをじつと見詰めていた。なんだろう？ 視線に込めた意図は読めないが、何かあるらしい。南陽太守に。南陽太守。

「四世三公と言えば？」

「名族汝南袁氏ですね」

「次代の本流がな、南陽太守に就いたのだ。それも当時にな」

もう、か。いや、既に、だ。

「袁公路えんこうろ殿は当時齡僅かに八つだったそうだ」

「それは、……大丈夫なんですか？」

「少なくとも悪評は聞かぬな」

「えっ?!」

「当人が幼子と言つても名家の威信にかけて周囲は固めよう」

「あ、ああ、そうです、よね」

思つたよりも反応の大きい族子を不思議に思いながら先を続ける。

「そう言いたいところだが、属吏にこれと言つた人材は多くないな。呉郡ごぐん四姓りく陸氏の娘が一人、仕官しておるようだが」

「それでも治まっている、と？」

「そのようだ。傑出した能吏は少なくとも、及第以上が揃えば並の舵取りでも船は動くからな」

「ただ風であれば、ですよね」

「そうだ。郡民が多数抜け荒廃した郡を立て直すとなれば、俊髦しゅんぼう一本程度ではとても足りぬ」

「と言う事は」

「袁南陽太守殿自身も、少なくとも俊器であろうな」

「はあ」

予想外の話について気の抜けた溜め息が漏れた。色々と想像を超えていた。まず八歳から太守を務め上げるといのが理解を超えている。党舅父の言う通り、周囲を人材で固めれば可能かも知れないが、それでは祭り上げられた幼帝と変わらない。しかし、それしかない気がする。真面に運営するなら、問題なのは、幼子を祭り上げるような連中が真面に仕事をするかだが。

だが、党舅父の話し振りから察するにどうもそうではないらしい。

実際にどれだけの人材が揃っているかは分からないが、少なくとも袁公路自身が太守としての手腕を発揮しているという。操り人形などではなく、主従は逆転していない。本当にか？

南陽郡はただの郡ではない。漢土最大の郡だ。州とほぼ変わらない。その南陽に施政を行き渡らせる年下の少女には戦慄しか感じない。

一族の最も有望な新芽のそんな様子を見ながら、嚴奉霆は言葉を続けようとした。

「五世三公も確実かも知れんな、もつとも……」

「……なんです？」

「何でもない。それよりも、先にお前の用件を済ませて来い」

気付けば太守執務室の前まで来ていた。傾いでなどいない戸口の前に。

「宜しいのですか？」

此方は私用だ。後回しで全く構わないのだが

「こちらを待てば長くなるぞ。良いからさっさと済ませよ」

「分かりました」

「それとな、薜華」

「はい」

「私用で郡太守の時間を削るのは感心せんぞ。次からは気を付けよ」

「すみません」

結局叱られた。

(もつとも、それまで後漢が存続しておればの話だが)

執務室の前で暫し待つ間、とても口には出せなかつた考えを反芻した。或いは件の南陽太守が新たな皇帝となつて大郡どころか大陸全土を差配するなどという未来もあるのかも知れない。その時、——後漢が崩れ落ちようとする今の先その時の中で、嚴氏の次代を担う若き俊傑はどう生きるのだろうか。どのように時代に挑むのであろうか。

(見てみたいものだ)

その為にも、早く進路を決めて欲しい。

巴郡嚴氏の嚴のような男は嘆息交じりに独り言ちた。

第三回——了——

報告を終え執務室を辞す直前、ふと首だけを振り向かせてすでに執務机に向かつて仕事を再開している一族の出世頭を見遣つた。一瞬だけ。立ち止まる事もなくそのまま今度こそ執務室を辞した。

廊下を進みながら、それにしても、と嚴霸——檜——は先程見た執務室に陣取る党妹いとこ

の姿にむず痒い様な不思議な感慨に包まれていた。

執務机に鬩り付いて政務をこなす姿は如何にも似合わない。こういったは何だが……。

彼女はやはり戦場が似合う。でなければ酒宴の席か。若き頃の厳顯義であれば酒飲みたさに仕事を押し放り出すくらいは平気でしていた。それでもなんのかんの赦されてしまう得な人柄であつたが。

しかし、今の彼女を見てその話を信じる者はどれ程いるだろうか。郡太守に任じられたと聞いた時は、人柄を重視し過ぎる風潮の弊害が出たかなどと思つたものだが、他ならぬ顯義に功曹掾に任命され、その下に付いた時は正直言つてかなり驚いたのを憶えている。

酒好き、戦好きは変わつてはいなかつたが、慣れない政務に愚痴の一つも零さず奮闘しているその姿に、人間、変われば変わるものだなどと感心したものだ。

その事について檜は酒の席で顯義に訪ねた事があつたのを思い出した。

「なに、ただあの子にとって誇れる母でありたいだけのことよ」

そう、はにかみながら答えた顯義の顔は、かつての自由闊達な荒武者ではなかつた。

子が親を育てるといふ事が。

檜自身、憶えのある事であつた。今は家を出て出仕している息子や娘達の事を不意に

想つた。思えばもう随分と会つていないな。そして、顯義が慶祝を未だ何処にも仕官させていない理由を知つた気がした。

昨今、仕官の低年齢化に拍車が掛かつている。長きに亘る政情不安に止めを刺すかのような党錮の禁から、中央のみならず何処も慢性的な人手不足に陥っており、有能の才子は年齢性別に拘わらず引く手数多だ。今や四十以上でなければ孝廉に推挙されない時代があつたなど誰も信じないだろう。

郡官吏など、かつては太守や郡丞などの勅任官を除いて郡民で構成されるのが当たり前であつたが、中央が腐敗するにつれその慣習は廢れていった。宦官に敗れた清流派閥の二の舞を嫌つて有望な人材が地方政府に流れ、当然のようにこれに目を付けた太守達は挙つて彼等を登用した。そして地元の豪族勢は当然これに反発した。そこで起こつた壮絶な足の引つ張り合ひで、地方でまで人材が不足しだすという大陸の誰も得をしない事態に陥つた。陥つてしまった。

こんな状況だ。慶祝の歳で世に出る事は決してない話ではない。現に、この巴郡においても督郵を務める董幼宰は若手の中でも齡十四と、慶祝と大して変わらないのだ。南陽太守袁公路に至つては年下である。

徳目申し分なく、一騎当千に届く武があるとなれば、成人前であることなど些末事も些末事だ。少なくとも、それほどの人材を遊ばせておく余裕はないと、この大陸の行く

末を憂う誰もがそう考えている。それが漢土の現状だ。

だが慶祝は今も母の膝元にいる。時折、軍に戦時臨時職として徴用されるが、正式な任官は受けていない。

あの娘自身も今は仕官を考えていない事もあるが、何より顯義が今暫くの間、娘を手元に置いておきたいのだろう。ああ見えて親ばかであるし、心配性でもあるのだ。

郡太守となれば毎年孝廉を挙げなければならないのだが、次も厳慶祝の推挙は見送られるだろう。

一騎当千の猛将であり、巴郡に繁栄と安寧を齎す太守であり、しかし何よりも愛する娘の為に奮闘する一人の母である。

それが現在の厳顔、桔梗という女性であった。

檜は近頃足の遠のいてしまっていた亡き友の墓に近いうち必ず参ろうと決めた。

この厳奉霆の考えは、半分当たって半分外れた。

確かに厳寿——字を慶祝——は次の孝廉にも挙げられなかった。しかし彼女もいつまでも雛鳥のままではいられなかった。

第四回 暢飲歡宴

江州県の中央付近にある嚴顔邸は元は嚴顯義の夫の持ち家だったが、夫の死後、顯義が相続し嚴邸となった。しかし今は主に便坐べんざ*69に居住しており、この広い邸には一人娘が義理の姉と十五名の従僕と三十三名の警護と共に暮らしている。

元々、地元民で自邸も官衙かんが*70に程近く、公邸の模様替えには公費が充てられることもあつて、顯義は自邸から出仕する積りであつたが、任官直後から目の回るような忙しさに少しの時間も惜しんで便所に寝泊まりする機会が増え、結局は仕事上の利便性から其処に住まうようになった。それでも公務に余裕があれば数日に一度、どれだけ忙しくとも十日に一度は私邸に帰り娘と過ごしている。

そんな事情の元、基本的に薜華が切り盛りしている嚴邸は非常に広い。広大な敷地は二重の門壁に囲まれており、南門が正門。第一門には小さいながらも門楼があり、門衛の詰所にもなっている。門の内側には厩舎も備えられている。門を潜ると広い庭園になつており、程良く手入れの行き届いた庭木に小さな池や水路、涼亭りやうてい*71などが点する。

また、第一門壁四隅の一角には門壁内側に沿うように警護兵の寮と馬丁や園丁の寮が

建てられている。

庭園を抜けた先に第二門、その奥は回廊に囲まれた大小の堂からなる邸がある。堂の半分は二階建てで、中央の一際大きな堂が本邸。奥に厨房や倉に厠、修練場に中庭、菜園まである。県内でも有数の豪邸であった。

厳顯義の亡き夫君が新婚の折、奮発して親族から買い上げた新居は十年以上経った今、厳家の者達にとって掛け替えのない生活の、そして人生の一部となっていた。

第四回

暢飲ちやういんかんえん歡宴

董和——鋼——が厳邸に着いたのは夕刻が訪れようかという頃合いだった。

門内の厩舎に愛犬達を預け、いつもの家かど僮*72に案内されて庭園にある涼亭へ足を運ぶと、厳家の二人娘が熱く議論を交わしていた。

「で、長安とさえ奪とれば、一気呵成に洛陽まで……」

「いけいけ過ぎだつて。長安はそれで落せても兵が持たないでしょ」

「でも時間を掛ければ体勢を整えられてしまうじゃないか。同じだけ時間があれば此方

も同程度の戦力強化が、つて訳にはいかないんだぞ」

「それはそうだけど、焰耶姐の計画じや補給線だつてままならないよ」

「いざとなつたら現地調達だな。それでも足りずとも洛陽を落とせばたらふく食えるだろ」

「いきなり決戦仕様の死兵とか絶対兵が付いていかないよ。あと洛陽の蔵に期待かけ過ぎない方がよいと思うよ」

思わず周囲を見回すが、涼亭内やその脇にも控えている者は居らず、自分を庭まで案内してきた家僮も既に下がっており、庭のあちこちで従僕達が忙しく働く姿が見えるが近くには誰も居なかつた。冷や汗を垂らしながら二人に近づき声を掛ける。

「何を物騒な軍略を練っているんだ」

「鋼」よつ、と軽く手を挙げながら慶祝が友を出迎えた。

「いや、違うぞ。劉州牧は矢張り天下を狙っているのか？つて話をしてただけでだ……」文長が弁明するが、

「それでも十分不穩ですよ」

「で、鋼ならどうする？」

「私に振るな。第一、何故益州牧の野望の話で自分達が洛陽攻めする事になっているんだ」

勧められた席に着きながら、呆れ顔で話に加わる。慶祝が手ずから茶（ご）丁寧に竹葉青が用意されていた）を淹れながら尚気軽く続ける。

「まあまあ、ただの思考実験だよ」

「気軽に扱う題材じゃないだろう。それに私に軍略を問われてもな。……矢張り、長安で地歩を固めて洛陽に揺さぶりをかけるかな」

「流石に長安は喉元過ぎるからね、諸侯に弱った姿を見せられない。なんて見栄を張る余裕もなく討伐軍が列を成すんじゃない？ 能々考えると策源地としては全くの向きだよ、函谷関かんこくかんまで落とせるなら話は変わってくるだろうけど」

「むう、確かにそうだなあ。しかし、討伐に諸侯軍を使うなら列を成す何て事せず大軍を組織して討伐に出すぞ、ワタシなら」

「しかし一度は中央官軍のみで討伐軍を編成するのでは？」

「だとしても相手にもならないだろうなあ」

両手を頭の後ろに組みながら文長が誰に言うともなく呟いた。想定しているのは劉焉軍対中央官軍であろうか？ それとも……、鋼は怖くなつてその思考を打ち切った。

どちらにせよ、確かに中央軍では相手にならないだろう。精強な異民族軍と幾度も事を構えている益州軍だ。敵軍も賊征伐が主となつてきたとはいえ、異民族との戦闘が全く途絶えた訳でもない。練度も実戦経験も士気も何もかも中央軍に劣る物など無いだ

ろう。となれば、次に構えるのは諸侯連合軍か。それに対すると……、

「体よく連合諸侯雄飛の贄になるだけか」意識せず言葉が漏れた。

「贄、か」神妙な顔で慶祝が続いた。

「王朝の弱体を見せ付ける事になるからなあ。益州軍を退けた後は諸侯の喰い合いか、ありそうな話だな」

「そうなると、劉州牧はそんな貧乏籤を引くでしょうか？ 寧ろ、逸つた誰かが贄になるのを待つのでは」

「それじゃ、ワタシ達の想定は端から大的外れかよ」

ぐったりといった感で茶ちやくに身を投げ出す文長に、愉しそうに慶祝が後を続けた。

「それなりに有意義だったしいいじゃない。取り敢えず、焰耶姐に全軍を預けるのは危険だと解つただけでも収穫でしょ」

「なんだとこのやろー」

「だって焰耶姐の想定は全軍焰耶姐じゃなきや通じないよ。そりや、焰耶姐ばかり一万でも揃えれば無敵の軍団ができるだろうけ、ど……ぷふっ」

「吹きながら言うなっ！」

言いながら迂闊にも地を埋め尽くす魏文長の軍勢を想像してしまい堪らず吹き出した慶祝の頭を、文長がさつと捉えて脇に抱えて締め上げた。

「痛たた!? ごめつ!降参、降参!!」

仲睦まじくじやれ合う義理の姉妹を微笑ましく眺めながら、妹の方が淹れてくれた緑茶を味わうこと暫し、生温い視線に気付いたのか、じやれ合いを止め居住まいを直す二人であった。そんな義姉妹の様子を眺めながら、ふと気になっていた事が口を衝いて出た。

「劉益州牧の戦略が『待ち』だとすると、益州は今暫しは静かだろうか」

「待ちと言うか、私としては天下獲りよりも益州独立の方が有りそうだと思うけどね。どっちかと言えば、だけど」

「なんか今とあまり変わらないなそれだと」

「上計も三年は誤魔化せるしね」

代々そうではあるが、特に今上帝劉宏は中央以外は目もくれない皇帝である。地方政府の思惑など想像しようとする気すら起こらないだろう。周囲を固める宦官も同様だ。中央さえ、より正確に言えば自分達の生活圏という酷く狭い範囲が安泰でさえあればそれで良いのだ。諸地方など搾取されるだけの田舎に過ぎない。そんな驕りと侮りと無知と無能の吹き溜まり。世が乱れるのは当然だ。

地方であればあるほど、中央から遠く人も物資も情報も遣り取りが薄くなる地方であるほどに、そんな中央の態度を敏感に感じ取っている。独自判断の元に行動を決定する

地方官僚が現れるのは自然の成り行きと言うものだ。

だから劉君郎は望んで中央官僚から地方官へと轉身して来たのだ。そう考えると

……

「成る程、防衛には向いた土地だな」

一人頷くと、その眩きに合わせたわけでもなからうが拍子良く庭火が灯された。日が落ちる前に到着してよかったと、何気なく篝火に目を向けると庭院の其処ら中に火の明かりが見えた。

「やけに多くないか？」

「ああ、母上に話したら郡府の皆呼んで酒宴を開く事になったから」

「そうになると、今度は酒が足らなくないか？」

「土産の酒だけだと流石にね。だから家の倉も開放するよ。臘賜ろうちよう*73、臘賜」

「臘日ろうじつは過ぎたろう」

臘賜という大袈裟な表現に思わず失笑しながら成る程と改めて庭を見回す。庭園中、幾つもの庭火に囲まれるように多くの大鍋が用意されていた。郡府官吏は吏卒まで含めれば百を超える。宿直勤務や私事などで全員もれなく集まるわけではないだろうが、今夜もまた賑やかな酒宴となりそうだ。

厳太守は時折こうして郡府や將軍府、或いはまた県府の官を上から下まで皆々集めて

酒宴を開いた。無類の酒好きで知られる嚴顯義ならではともいえるが、これには年俸百石に満たぬ斗食としよく*74や左史さし*75などの吏卒に対する施しの意味も大きかった。

桔梗は太守に任命された時、二つの大きな方針を定めた。それはこの時代の政の二本柱に関わる方針であった。後漢時代の政二本柱、即ち、『足の引つ張り合い』と『汚職』である。

桔梗はただでさえ本来有り得ぬ本籍地への太守任官である。普通に考えれば、周囲悉くを一族の者で固めてしまえば足を引つ張られる心配は随分と減るだろう。しかし、だからこそある事ない事中央に吹き込まれる隙ともなる。

そもそも、本当に嚴氏で属吏を固めてしまえば、如何に桔梗が清廉を貫こうとも汚職が蔓延るのは目に見えている。権力は常に人を誘引する。負の面に引き摺られ歪みを生じる人のなんと多い事か。そうなってしまうえば、嚴然とある事として中央に上表されてしまう。郡府を掌握できても、郡を監察する部郡従事ぶぐんじゆうじ*76は州の属吏である。こういった外部の目も賄賂によって視界を塞ぐ事は珍しくもないが、桔梗が斯様な手段を取る筈もない。

故に、桔梗は宣言した。

「一族の者であろうと能無くば任用せず、罪あれば容赦なく此れを断ず」

はじめ、人々はその発言を見せ掛けと判断した。郡別駕ぐんべつが*77と郡主簿ぐんしゆぼ*78こそ安漢趙氏あんかんちゆうしきの趙笹ちゆうささく*79、充国張氏ちゆうこくちゆうのうの張納ちゆうのう*80を任命したが、人事を掌握する功曹掾こうそうげんに同族の嚴あざなを充てたからである。

しかし、郡少府ぐんしよふ*81に任命された嚴氏の若手が不正を働いた時、その認識は改められた。

その郡吏は嚴氏の中でも若く将来を嘱望されていた。手を出した不正も、見逃されても特に弾劾が起ころうようなものでもなく、不満が募る程でもない取るに足らない微罪であった。この時代、この大陸の官僚であれば問題にする者が少ないであろうその罪を以つて太守嚴顔は断罪した。

これに嚴氏の者は驚愕し、桔梗に詰め寄つた。だが、嚴奉靈を除く一族の者共は桔梗の事をどうやら理解していなかった。桔梗はそんな一族に怒気を孕ませ一喝した。

『一族の者であろうと能無くば任用せず、罪あれば容赦なく此れを断ず』

「そう言つたな？ 主ら、耳でも遠くなつたか、それとも脳を失つたか？」

嚴氏きつての豪傑嚴顔の睨みに抗せる者などいなかった。普段、少なからずその威名を身に浴している者共が、まさか自分達がその眼光に曝されるとは夢にも思つていな

かつたようだ。こうして嚴氏は当初夢想していた權勢を誇る事無く襟を正すようになった。

元郡小府を推挙した奉靈自身が肅々と従っていた事も大きかった。そもそも、奉靈は件の若者がその才幹と評判から次第に尊大な態度が表に出始めていたからこそ郡小府に充てたのだった。重責に態度を今一度改めるならばよし、そうでなければ今度は桔梗の出方を見定める丁度良い試金石であった。果たして桔梗は奉靈自らの手で報告を受けると即座に小府の元へ飛んでいった。

その行動は予想通りではあつたが、多少は此方の思惑に気付く気配はないものかと僅かばかり期待していたのだがそれもなかつた。余りに実直過ぎる新太守の遠ざかる背中を眺めながら、それを支える苦勞を楽しみにしている功曹掾の内心を知る者は居なかつた。

こうして足の引つ張り合いに対する方針である一族への対応は称嘆を持って迎えられるた。

より根深く厄介な汚職への方針は単純明快であり、特に汚職の代表格たる賄賂に対して厳正なる態度でもって挑んだ。これには吏卒が悲鳴を上げた。

清流派などと気取っている名士共も賄賂はしつかり取る。いわんや吏卒が取らぬ筈がない。

賄賂を取らぬ。たったそれだけの、本来ならば当たり前だと言えることだけでも世の称賛の的となる程、この国の官吏と賄賂の間には切つても切り離せぬ深い根が張つていた。その問題の根底の一つ——無論、全てではないが——に吏卒達の低給があるのは間違いないだろう。

蔽顯義の様な高級官僚が一切の賄賂を断つて清廉であろうとする事は難しくない（その割にそのような人物が少数である事実が問題の根の深さをよく顕わしている）。それは高潔な人物である以上に、高給取りである事が挙げられる。元々、豪族の中でも格式の高い家の出でもあり、賄賂など取らずとも十分な財があるのだ。私腹を肥やす事に興味があれば、実際必要ないのだ。

しかし、下級官吏達にとつては死活問題であつた。何せ彼等の俸禄は低い。とてもそれだけでは生活は立ち行かない。比喻でもなんでもなく彼等にとつては賄賂は生命線だつたのだ。

兵糧を算出する時、兵一人辺り一日五升穀約1L*82を消費するとして計算する。一石約20L*83は百升、つまり一石で二十日分の食糧となる。

斗食の月俸は十二石、左史は八石である。実際の支給は半穀半銭でそれぞれ、三穀約4.8L・三穀約1.60L・三穀約7.20L・三穀約6.6L石五百銭と二、四石四百銭。*84（因みに桔梗は太守の月俸分だけで三十六石六千

銭）

単純化された計算ではあるが、實際左史などは独り身でならばなんとか食っていける程度である。収入の全てを食費に充てるなど現実的とは言えない。最低限の生活費以外にも色々とお費が嵩むものだ。人付き合いが重要な社会での吝嗇は道を狭め、また、上を目指すならば勉強は必須でありそれにも金が掛かる。血縁の乏しい単家でもあつたらなら目も当てられぬ困窮ぶりを発揮する事請け合ひである。

このような状況では手数料と称する民衆からの搾取を賄賂と認識していない者すらいる始末である。

これに対し桔梗は元々將軍であり太守を加官され、更に氏族侵攻を防いだ功によりかんだいこう関内侯*85に封じられていた。その俸禄たるや官秩合わせて四千石と田宅約3,027九十五頃*86分の租税である。更にここに先代から受け継いだ莊園収入が加わる。

桔梗はこの有り余る余財を吏卒を中心に分け与えた。折に触れて披かれる酒宴なども、単純に愉しむ為や官吏同士の連帯を強める目的などもあるが、生活が困窮しがちな吏卒達の実際的な救済策の一面があつた。

豪族として生まれ育つた桔梗にとつては、土地で困窮している貧民を救済するのは至極当然の事であつた。その範囲が今は郡屬吏や軍兵にまで及んだだけの事であつた。

そう、桔梗の育んできた倫理からすれば当然の行動だつた。

短期間で土地から去つていく標準的な中央官が地方でやる事と言え、程度の差はあ

れどまず第一に搾取である。桔梗が太守となる契機となった板楯の乱も、当時の太守や刺史が私腹を肥やす為に搾取に勤しんだ結果、対象を板楯族にまで広げ取り返しのつかない事態を招いたのだ。あの時の叛乱で暴れ回ったのは板楯人だったが、不満を溜めていたのは益州人も同様であった。

土地に根付いた豪族はそのような無法は働かない。そのような事を事すれば地元民の憎悪が集約し、他の豪族が立ち上がり、その地方から排除されてしまうだろう。寧ろ、本来官吏がすべき救済を行い、農政を布き、治安を担った。中央の管理下にある戸籍から農民が消え、豪族の運営する荘園が繁栄する背景がここにある。豪族が問題視され、中央に不服従を示すのはそもそもこのような問題が恒常的に発生していた事情も大きかった。

ともあれ、桔梗が私財を惜しみなく分け与え、善政に努め、厳正なる態度で臨んだ事から、皆汚職を恥じ入るようになり巴郡は近年にない程良く治まった。

「薜華様、皆様お見えになりました」

「わかった、今行く」

庭中の大鍋から良い匂いが漂い出した頃合い、未だ涼亭にて三人で歓談していたころ、家宰*87に呼ばれ客を出迎えに向かう。正門に向かいながら来客の確認を行う。

「どなたが来られた？」

「趙別駕従事様と嚴功曹掾様で御座います。郡吏の皆様方を引き連れて御出です。それと、」

「ん？」

「黄県令様もいらつしやいました」

「夜明小母様が？」

今宵は郡吏を呼んであるが、県府には話はいっていない筈である。別件であろうか？ 家宰が一旦区切つて告げたのもそういう事であるからか。いや、酒の匂いを嗅ぎつけて馳せ参じたのかも知れない。思えばあの小母様とは酒の席でばかり会っているような気がする。現在は同県内に住んでいるとはいえ、県府にはまず立ち寄らないので会う機会は確かに少ないが、黄県令は同時に將軍府で長史も務めている。だが、軍内でもすれ違う事も無い。記憶を辿れば、中県に預けられていた頃から酒を飲む姿ばかり思い出される。

黄県令。黄権*88（字を公衡、真名を夜明珠）とは、嘗て母桔梗が軍に復帰し板楯

乱討伐に参陣した際に、中県の黄家に預けられて以来の付き合いである。

鼻筋の通った美人で、くりつとした空色の瞳は実年齢よりも随分と若い印象を人に与える。落ち着いた藍色の髪は背の半ばまで艶やかに伸びているが、前髪は眉の上で切り揃えており、それがまた若く見える要因となっている。全体的に愛らしさを感じさせる妙齡の女性であるが、こんな見た目でとんでもない大酒豪である。江東の虎と言えはその猛き武勇と血気に逸る獸性をして畏れを含んだ二つ名であるが、巴蜀の虎と言えばただ只管に酒を呷る様からきている。

正門に辿り着くと、多数の郡吏に囲まれて件の虎と郡幹部が談笑していた。党舅父いとこおじは笑っていないが、一度でいいからあの人が大笑いしているところが見たいなあ、などと益体もない事を考えながら客を迎えた。

「ようこそお越し下さいました、皆様方。生憎と母はまだ戻っておりませぬゆえ、母嚴顔に代わりまして御挨拶致します」

「こちらこそ本日は御招き頂き有り難うございます。郡吏皆を代表してお礼申し上げます。ふふつ、それにしても相変わらず固いですね」

趙別駕が代表して挨拶を交わすと、ころころと笑いながら此方の態度を解してきた。しかしこれには苦笑を返すしかできなかった。趙別駕などは気にしないが、気にする者も確かに居る。幼宰が身を整えて来るのと同様、体裁は整えなければならぬものなのだ。母の様な人徳でもあれば自然体で接しても格好がつくが、自分には無理だ。少なく

とも何者でもない小娘のうちは。普段から郡堂に平然と立ち入ってはいるが、矢張り郡府の上級幹部と接するとなれば緊張するものだ。薺華がそれほど緊張せずに済む上級幹部と言えは曹郡丞くらいのものである。

「幽邃殿、此奴を甘やかしてもらつては困りますぞ」

「あら、檜さんが手厳しい分はどこかで緩和しませんと」

むつつりとした強面の党舅父が妙齡の美人と真名で呼び合っている姿に激しい違和を感じていると、じろりと睨み付けられてしまった。しまった、顔に出たか。つい反射的に視線を逸らすと黄県令と目が合った。

「暫く振りね薺華ちゃん」

「小母様もお変わりなく」

「今日は別件で来たんだけど、好い時に来ちやつたみたい。ね、私達もお呼ばれしても良いかしら?」

「勿論です。……私達?」

「やー、薺華。しばらくぶりー」

「紅玉っ!?!」

黄県令の背後からひよっこり顔を出したのは、 中県に居る筈の親友の一人であつた。

黄崇*89、字を仲峻ちゆうすう ちゆうしゅん*90、真名を紅玉。黄公衡の娘であり、薺華が最初に得た親

友。父譲りの燃える様な緋色の髪色を除けば母によく似たやや小柄な娘で、薺華よりも一つ年上であるが年相応に元気が良くいつも澆刺としている。

「え、なんでこんな所に？ 仕事はどうしたの？」

「いや、仕事だからここににいるんだって。県の計掾に任命されたんだよん」

「おお、出世したなあ」

「紅玉ちゃんが薺華ちゃんに会いに行くって言うからついてきちゃった」

「そうだったんですか、てつきり」

「てつきり？」

「いえ、何でもありません」

酒宴の気配を察知して来たのかと思つたなどと言える筈もない。ついまた視線を逸らしてしまうと再び党舅父と目が合った。

「薺華よ、何時までもこんな所で立ち話でもあるまい。そろそろ皆を案内せんか」

「はっ、失礼しました。それでは皆様、どうぞお入り下さい」

乾杯の直前で間に合った母が音頭を取り、恐らく今年最後になるであろう酒宴が始まった。郡府の主だった幹部に一通りの挨拶を済ませ、主会堂から辞して友等が飲み食いしている区画へゆつくりと向かう。

「あゝ、危なかつた」と冷や汗を拭いながら薺華が漏らせば

「くく……、まあ、見てみたい気もしたがな」と母が受けた。

「母上」

振り向くと、会堂の入り口に母桔梗の姿。宴も始まったばかりと言うのに良いのかな？と思いつながら、母と語らえられるのなら何でも良いかと小走りに寄っていく。

「遅れて済まなかつたな。それと案内ご苦労であつた」

「いえ、母上こそお仕事お疲れ様です。それに乾杯には間に合つてくれましたから」

「あのまま檜の言う通り、乾杯の挨拶まで済ませて良かったのだぞ？」

「冗談が過ぎますよ。年少の私が音頭を取るなんて」

酒の席では長者が音頭を取るものであるが、郡府の主だった面子が揃つたところでその長者である巖奉暉が薺華に音頭を取れと言つて来たのだ。寸前で母が到着した為に事無きを得たが、あれが冗談だったのか無茶振りだったのか今一判断の付かない薺華であつた。

結局、母が遅れてきた挨拶序で乾杯の挨拶まで済ませて宴が始まったのだが。

「最近、党舅父の視線が妙に鋭いんですけど」

「あれもお主の進路を気に掛けておるからの。まあ、何事も経験させようという事であらう」

「う、やっぱりそういう事なのかな」

近頃の薺華の周囲で誰もが気に掛けている案件がもたげた。今現在の薺華の立場と言えば、太守の娘で、時折軍に協力し、稀に郡府で母の遣い走りを熟し、県下で亭卒の真似事をする、小さな便利屋と言った感である。

初陣を飾った後、そのまま武官となると皆が思っていたが、結局薺華は臨時任官と言う形で正式に仕官する事はなかった。

「実際、此れまであれこれとやっておるが、どうするのだけ？」

その言葉に参ったな、と下げていた頭を上げて母の顔を直視した。これまで母からの話題に関して水を向けられた事はなかった。だが今、その母の眼を見て『嗚呼、これは内心を悟られているな』と感じた。そう感じた途端、ふにやりと相好を崩すのを止められなかった。

「うん？ どうした」

「いえ、なんでもないです」

母は自分の事を本当によく見ている。それが無性に嬉しいのだ。自分の中に芽生え

たばかりの小さな決意にすぐに気付いてくれたその事が、寿という名を父から、葬華という真名を母から贈られた娘にとつて何物にも代えがたい慶びであり幸福であつた。

巴郡を出でて諸州を回ろうと決め切つたのは、昼に幼宰と話した時だつた。あれが最後の一押し。それまでであつた迷いも躊躇も、友と話す流れの中で自然と落ち着くべきところに落ち着いた。一步を踏み出す為の、或いはそれを阻む様々な要因の全てが整理され解消された訳ではないが、兎も角ようやく先へ進む事になる。その果てに何処へ辿り着き、何を見て、如何に感じ、自分は果たして何者になるだろうか。

周囲の期待、友の言葉、自身の中にある前世という重石、未だ明瞭には見えない自分の心の赴く先、そして母の存在そのもの。今の自分を取り巻く様々なもの。それらに対し、どれ程の答えを得る事になるのだろうか。

少しの不安と、少しの期待。まだ少し締めりのない顔で母へと告げた。

「旅に出ようかと思ひます」

「そうか」

「うむ、そうか。それで何時になる？」

「年が明けて二月には発とうかと」

「今暫し時間があるな。ではそれまではなるべく邸に帰るとしよう」

「本当ですか!」

思わず小躍りしたくなるのを抑えて声を上げた。続く言葉で躓きそうになった。

「ついでに久し振りに鍛え直してやろう」

「おうふ」

「わしも近頃は鈍つていかん。互いに良い機会であろう」

「そ、そうですね」

物心ついた時より受けてきた母の鍛錬はただ苛烈の一言であつた。戦場是死線とは母の教えだが、母との鍛錬の方が余程死に近いというのが幾度かの戦場を戦い抜いた自分の今のところの結論であつた。

「お前が世に出るのならば、今一度その武を磨き上げねばな。これも親の責務よ」

愉しげに呵呵と修羅の笑みを浮かべる母の姿は、近頃で一番生き生きとして見えた。

母と別れ義姉達の卓へやつてくると、中からやつて来た親友と親交を深めていた。話題はもっぱら昔の薺華の事だ。ここに居る全員を繋げる話題と言えば薺華しかない。ので仕方ない事だった。本人は居心地悪かったが、だが、特に董幼宰は良く喰い付い

た。三人の中で最も付き合ひの短い彼女にとって、自分の知らぬ友の姿は十分に興味を惹かれる事柄だった。

「薺華はさー、出会った頃から他の子供達とは違つてたよ。いや、子供っぽいところもあつたよ？ 興味を惹かれた物には一直線だったり。でも、決定的な部分で大人びてたよね」

「よね、つて言われても」

「子供つてさ感情の生き物つしよ。でも薺華は道理の上に居たんだよー。だからいつも何かしら騒ぎや厄介事があると薺華が治めてたでしよ」

「ああ、うん、まあ」

「それで自然と他の子供とは上下の関係になつてたんだよねー」

「そうだったのか」

「いや、お前の事だろ」

すかさず文長が突っ込んでくるが、薺華には自覚がなかった。避けられている訳でもなく寧ろ何かあれば頼られる事があつたが、それでも友達と言えるほどの仲になれなかつたのはそういう位置関係が形成されていたからなのかと、今更に気付かされたのだった。

「子供つて基本横並びの関係じゃん？ 単純な力関係による上下はあつても視点による

上下はない訳でさー、それは子供にとつては目上の人との関係になるでしょ」

「だから私には友達が中々できなかったのか」

項垂れる薺華に幼宰が相槌を打った。

「私も憶えがあるな」

「友よ!!」

「似た者同士め。てことは、紅玉も?」

もう真名を交換したのか、早いな。初対面の相手と真名を交わし合うなどという高度な対人能力を持たない薺華は驚愕の面持ちで義姉を振り返った。隣で幼宰がうんうんと頷いていた。

「いや、わたしはなんちゃってだった」

「なんちゃって?」

「無理してそうであろうとしてただけ。だから自然体で“そう”ある薺華を見てうわー!!ってなったよー」

「あー」

うわー!!ってなんだと思ったが、どうやら義姉には通じているらしい。くそう、仲良いなこいつら。

「その時、わたしは決めたんだよー。よし、私はこいつに付いて行こうって」

そう言いながら笑顔をこちらに向ける初めての親友。

「だからさ、薺華がどこに仕官してもいの一番に連絡してよ。必ず駆けつけるからさー」
「それは凄く嬉しいんだけど……」

「どっ」

「私が旅に出ようとしてるの知ってる？」

「おお、そうだ！ 水臭いぞ薺華。なんで最初にワタシに言わないんだ」

「いや、さつき鋼と話してて心が決まったばかりと言うか……」

「そうだったか、済まない。先程、話の流れで私から漏らしてしまった」

「ああ、いやいいよ。この場で言うつもりだったし」

こうして話は薺華の今後の事へと移っていった。

「それで、何処を見て回るか決めてるのか？」

「そうだね、まずは……南蛮に行こうかと思ってるよ」

「象か」「象だな」「ああ、象ねー」

「違うよ！なんで満場一致なのさー！」

「だつてお前、中原で象が絶滅してるの知って泣いたんだろ？」

薺華はこう見えて無類の動物好きであった。犬猫に限らず、哺乳類に限らず好きだった。有毒生物などの害獣の類以外は何でも愛でれる少女だった。

『山海図経』をはじめとする自然誌が幼い頃からの愛読書だった。中華大陸に象が、そして犀も生息していた事を知った時は興奮のあまり母の元に走って行って訪ねたものだ。そして母から申し訳なきような顔で、中原にはもはや象も犀も居ないと知らされた時は確かに悲しかった。だが、

「泣いてはいないよ！つかなんで焰耶姐が知ってるの?!」

「桔梗様が以前 酒の席でな」

「もー、母上え」

「む」

「あら、どうしました？ 桔梗様」

「娘がわしを呼んでおる」

「何故そのような事が判る」

「馬鹿め檜。母たる者、何処に居ようと娘の呼ぶ声には応えるものなのだ」

「馬鹿は貴様だ、そんな訳があるか。もう酔ったか」

「なんだと、わしがこの程度で酔うはずなかるう」

「まあまあ、御二人とも」

「……で、版図上では漢土だけど実効支配してるのはもうずっと南蛮人でしょ？ 西方の氏や羌と違つてそれ以上の侵攻はして来ないけど、最近になって大王が代替わりしたらしいんだよね」

「ふむ、確かに気にはなるが」

「じゃあ結局、象は見物しないんだー」

「見れるものなら見たいよ、そりや勿論」

「なんだよ、結局見に行くんじゃないか」

「なにさー、いいじゃんかよー。象だよ象。でつかいんだぞー。ばおーと鳴くんだぞー」

「いかん、薺華が壊れた」

「い、いや、駄目とは言つてないぞ。うん、存分に見物したら良いんじゃないか？」

「それにしても薺華は本当に動物が好きなんだな」

「いやこの娘、虫とかでもお構いなしだよー。一回、とんでもなくでつかい蚯蚓を引つ捕まえてきた事があつてさ、あれは流石に引いたわー」

「蚯蚓っておま……」

「それは、なんとも……」

「いやいや、あれは本当に凄かったんだって！ 蛇みたいに大きくてさ、未だにあれ以上の大物には出会って……」

「いいよそこ拵げなくて！ なんで喰い付いた!？」

「なんだよ、焰耶姐は犬も駄目、蚯蚓も駄目って……」

「蚯蚓は誰だって引くだろ！」

二人の友人に目を向けるとうんうんと義姉に同調していた。流石に蚯蚓は駄目か。まあ、自分も積極的に好きという訳ではないのだが、あの時見付けた蚯蚓は本当に見事な大物だった。見付けた瞬間、引つ搦んで皆に見せびらかしに走り回ったものだ。思えばあの時も誰も喜ばなかったな、と回想していると、当時の被害者（当事者視点）からさらりと爆弾発言が飛び出した。

「あの時は薙華との友情もここまでかと思つたよー」

「そこまでの危機だったの?!」

「お前、本当自重しろよ」

「むむむ」

「なにがむむむだ」

「それにしても、なかなか意外な一面があったのだな。蚯蚓を含めた動物好きは別にしても、周囲に目もくれず突っ走る薺華の姿はなかなか想像し難いよ」

「む、昔の話だよ」

「付いた幼名が阿奔^{アベン}だっけ？ 突っ走る幼児ね、お前 足速いしぴったりだな」

「ぐう、幼名まで。またしても母上か」

「確かに桔梗様は酒が入ると良く薺華の話をするな」

「初耳なんだけど、え、なに？ もしかして私の知らない内に過去の恥部が曝されてたりしてるの?」

「恥部かどうかは兎も角、よく話されてはいるよ」

「ねえ、鋼。こつち、こつち見ようか、こつち」

「まあまあ、薺華。桔梗おば様も悪気がある訳じゃないんだし」

「なきやいいつてもんじやない!」

遂に爆発する薺華。その頃、母はほろ酔い気分で矢張り娘の話を郡府幹部に披露していたが知らぬが仏である。

「それじゃあさー、薺華と飲んでる時はどんな話すんの?」

「え?」

黄仲峻の何気ない問いに一瞬固まる薺華。見る見るうちに耳まで赤みを帯びていく。

ふと見れば、魏文長もほんのり頬が朱に染まっていた。

「あー、このお酒、お茶と同じ名前の割に美味しいねー」

「うむ、竹の風味が心地良いな」

なかったことにした。

「并州産だっけ？ 薺華、仕官先は并州でもいいよー？」

「酒で決めてたまるか。全く、この子虎は。んー、でも確かに美味しいな。結構癖になるかも」

子鷹の買って来た竹叶青をじっくりと味わって飲む。飲みながら考える。并州は父が散った地だ。檀石槐たんせきかい*91の軍勢と戦ったが、詳しい仇は判らない。退却する本軍の殿を務め多数の矢に貫かれて果てたと聞いた。追撃を掛けた隊の詳細も判らぬ程混乱した中の撤退であつたらしい。軍全体を率いていた檀石槐も既にこの世を去つたという。直接の仇が知れているのなら兎も角、鮮卑憎しと一部族全体を仇と狙う気はなかつた。まさか殲滅できる筈もないし果てがない。

それに、それほど酷い撤退戦であつたにも拘らず遺体は返還され故郷に埋葬する事も出来た。そして、父の愛用した大雑刀「秋草」は今自分の手元にある。

戦場での普遍的な死だ。恨み辛みを募らせるような最後ではなかつた。その死を辱められる事もなかつた。

悲しくない訳ではない、悔しくない訳ではない、討伐の機会があるのならば参陣するだろう。だが、積極的に人生を掛けるつもりもない。鮮卑を仇と恨むよりも、父の振るつた秋草を手に恥じぬ生き方をしたかつた。

亡父を想いながら杯を重ねていると、話題は并州の現状に移っていた。自分も話に加わりながら今少しこの時を楽しむ事とした。旅立ちに近い。だから今は皆と楽しもう。

第四回——了——

「なあ、未究^{みく}」

「なんだい？ 蕪華^{みく}」

「……最近、星に何か異変はあるか？」

「ほう」

蕪華の唐突な問いに未究——周仲直^{しゅうちゅうちよく}——は如何にも面白げに片眉を上げた。流麗な顔立ちの仲直がそんな仕草をすると、同姓から見ても見惚れる程良く似合つた。

その反応に気を良くしたのか、足元に届くほど長く伸ばされた新月に卦ぶる夜のように

黒い美髪を一房、右手人差し指で弄びながら続けた。

今日は頓に機嫌が良いようだ。或いは良くなつたのか。

「君から星詠みを問われるとはね。これは近々月蝕でも起きるかな？」

「う……」

仲直の言葉に思わず怯む。確かに、日頃運命や天命と言つたものに否定的な感情を向ける自分がそんな事を言い出せば、彼女ならずとも気になるだろう。

だが、仲直はそれ以上突つ込んでくることはなく、上弦の月に視線を移しながら淡々と語つた。

「数年の後にこの大陸は大きな転換を迎えるだろうね。最初の兆しは再来年にも顕われるだろう」

事も無げに紡がれた言葉に、心臓が蹴鞠のように跳ねた。一瞬。

やはりか、という思いがほんの一瞬で薙華を冷静にさせる。酒から醒める程に。

「だが終局までの道はまだ見えない。恐らくだが、まだ星が出揃つていない」

「君の待ち望む星は未だ見えず、だよ」

こちらを振り向き透明な笑顔で不意討ちを仕掛けてきた。

だが、続く仲直の予見は予想していた事なので大きな反応を示さずに済んだ。ただ一点を除いて。だから慌てふためく事は抑えられても、その眩きを留める事は出来なかつ

た。

「待ち望んでいる？」

「そうとも」

彼女はそれも予測していたようで即座に肯定してきた。

「君はそれを待ち望んでいる」

白磁のように白い頬を酒精で僅かに紅潮させて、周仲直は幼い頃からの掛け替えのない友に笑顔で、愉しげに、当たり前のように断言した。

周羣しゅうぐん*92。字は仲直。真名は未究。

☒中県に住む葬華の二人の親友のうちの一人で、幼い頃から母周舒しゅうじよについて図讖術を学ぶ才媛。

半年ほど黄家に預けられていた時、早朝走をしていた葬華を仲直が櫓の上から呼び掛けて以来の仲だ。

周仲直が自邸の庭に天の異変を観察する為に建てたその櫓の上。二人並んで夜空を肴に巴郷清を飲み交わしたある秋の夜。この夜以来、葬華は来る大乱の時代を前に自分の往く道（或いは人によっては運命や天命と呼ばれるそれ）を意識し始めたのだ。

やがて季節が一巡りして冬となり、行動の指針を得るに至る。

また巡り春を迎えれば、彼女はようやくやく歩き出す。

第五回 像箭女孩

未だ太陽が朝を告げぬ暁の刻限、それでもいつもならば空が明るくなり始めようかとする頃合いだが、この日は朝霧が立ち込め世界は仄暗く茫洋としていた。巴蜀の地において霧は珍しいものではないが、つい最近まではつんと冷えた冷気に、あつても僅かな朝靄の日々だった。これからは徐々に霧深い朝が多くなつてくるだろう。

そんな季節の移り変わりを感じさせる巖家の中庭で、薺華はいつもと変わらず身体を解していた。

春の到来。薺華は一つ齡を重ね、十三となつていた。

「今朝も早いな、薺華」

「お早う御座います、母上」

「うむ、お早う」

珍しく早くに起きてきた母桔梗に澆刺と挨拶を交わす。いつもは巖家で最も遅くに起きるが、時折こうして早朝走に出掛ける前に起きてくることもある。更に珍しい事に

今日は既に着替えも済ましてあるようだ。

娘の視線に気付いた桔梗は軽く肩を竦めた。そろそろ県の巡察に出発する日が近づいている。それまでに片づけるべき仕事は捌けていないので早起してきた次第である。重要度のそれほど高くない仕事は出仕前に済ませる積りであった。

薺華も事情を察し、余り根を詰めぬよう母を労った。

「今朝は霧が深い。気を付けるのだぞ」

「はい。では行つて参ります」

元氣良く母に応え、たった一つ、嚴寿として生きる己がたった一つだけ前世から引き摺られた習慣である早朝ランニングに出掛けた。

第五回 像箭女孩

しょうせんによが

地を蹴る足裏の感触、機嫌良く跳ねる鼓動、じんわりと上がる体温、それを冷まそうと頂の辺りから浮き上がり始めた玉の汗、それら全てに心地良さを感じながら城街を往く。

高級官僚や有力豪族の邸宅が軒を連ねる区画を抜け、大路を横切り、水路を飛び越え、細々とした区画をするとすり抜ける。縦横に江州を堪能するように駆ける。

漸く明かりが茫洋とした世界に差し始めた中を軽い足取りで更に進む。陽の光が薄つすらと透ける霧に浮かぶ街並みはどこか幽玄な気配を漂わせている。

早朝の静寂、それもいつもより静かだ。霧が音を吸い取っているんだ。そんな事を考えながら自分の呼び以外の音を探るように耳を澄まし心持ちゆつくりと走る。周辺に耳を向けながら進めば、其処彼処から人の気配を聞き取る事ができた。

こんな朝でも人々の活動はいつも通りだ。陽の光に抗しながらも徐々に薄れゆく霧の向こうから、人々の営みが姿を現し始めた。

薺華もいつも通りに行き合う人々に声を掛けて行く。挨拶を返してくる声は殆どが子供、そうでなくとも若い声だ。早朝から商家や工房で準備を進めるのは年若い丁稚なのは何処も変わらない。彼等は毎日、陽が出る前からあくせく働く。万が一、朝餉に間に合わねば大変なことになるし、かと言って適当に済ませば、朝食抜きよりも酷い目に遭うのだから朝から気が抜けない。

彼等の中には郷や里から奉公に出てきた子供も多い。

朝の仕事と朝食が終われば、彼等の多くは書館*93へ登校し勉学に励む。書館では識字教育と、初級の算術を学ぶ。奉公へ出された子供達の真の目的はこれだ。教育が奨

励されるこの地では、余程の理由がない限りは子供達は初等教育を受けられる。

識字教育だけなら郷や里でも受けられるが、県校*94への進学を目指すのならば、県へ奉公に出す方が良い。進学ならずとも、県で学んできたというだけで箔が付くと考える庶人は意外と多く、そう考える者が多いのならば、実際に郷里では箔が付くのだ。

庶人の県校への進学率がどれ程のものなのか薺華は知らない。自身も年齢的には県校へ通っている時分なのだが、一年ばかりほぼ形だけ通って卒業してしまったので実態を余り知らないのだ。元々、母が家に招いた舎人*95を家庭教師に五経*96の大事業を修めていたので、県校に進学した時点で学ぶべき殆どを修得し終わっていた。いわゆる飛び級のような形で入ってすぐに卒業したのだった。こうした事例はそれほど珍しくもなく、仕官の低年齢化の影響なのか、寧ろ積極的に促進する為なのかもしれない。

その後、郡国学*97へ進学する事もなかったため、学舎での思い出は殆どない。己の道は飽く迄も武の上にあると考えている為、そこに特に思う事もなかった。

太陽がその威容を地平から浮き上がらせ世界がほぼ完全に形を取り戻した頃、薺華はようやく折り返し帰路に就いた。

自邸のある区画にまで戻つてくると、呂季陽*98が珍しく朝早くに呂家の門前で伸びをしていた。群府で郡司空*99を務める呂常*100の娘、読書と音楽をこよなく愛する年下の少女とも挨拶を交わす。

眠たげな眼で（この少女は常時そんな目つきだが）挨拶を返し薜華の姿が曲がり角の向こうに紛れるまで見送つてから家中へ引き返した。今日、書肆に届く筈の新書待ち切れずつい早起きして家を出たが、こんな時間から店が開いている訳もないと気付いての事だった。

そんな事情など判る筈のない薜華は、随分と珍しい事もあるものだ、と呂家の娘にっ
と軽く思いを巡らせた。

幼くして才媛と評判の少女。家族からも周囲からもその期待は高い。自分も且つて、短い期間ではあるが天才ではなどと一族の大人達から持て囃されていた時期があった。母がやんわりと否定して回つてくれたお蔭で大騒ぎにならず済んだが。

この時代、意外なほど世間の教育水準は高く、庶人でも識字教育ならば大概受けられるし、頑張れば中等教育も受けられるのだ。更に上を目指すとなれば困難を極めるが、最高学府である太学*101へ進んだ貧農出身者もいるのだとか。

おまけに益州は学問が盛んだ。特に蜀郡は景帝*102治世の時、太守文翁*103が当時蚕地であった蜀に学問を広めた。この揚州廬江郡舒県出身の偉人のお蔭で以来

巴蜀の教育水準は高まった。

そんな中で、単に下駄を履いた状態で人生を開始しただけの凡夫が天才扱いなど、後々失望されるのは目に見えているだけにきつかった。

結局、自分の評判は秀才であるという評価に落ち着いた。それでも過分だと思つたが、自分に五経を授けてくれた師に「謙遜も過ぎれば厭味となりますよ」と窘められ、確かにそうか、と思ひ直し他人から見ても過剰に謙るのは止めた。

客観的に見て書館に上がろうかという年齢で曲がりなりにも五経を読み解けるのなら、確かに妥当な評価なのだろう。持ち上げられると反射的に謙讓してしまうのは、前世の民族性によるものなのだろうか。そう考えると苦笑が漏れてしまう。

自分はそういった周囲の期待や評判に気疲れしてしまつたが、季陽は泰然としたものだ。少なくとも傍から見ている限りは。書館を飛び越え、既に郡国学で学んでいる本物からすれば、態々気に掛ける程の事でもないのかも知れない。

太学への進学も母が推薦しようかと話を持ち掛けたが、「ここが好きだから」という理由で固辞していた。呂郡司空が街道が修復された後も巴郡に留まつた理由がこれだつた。

きっと近い将来、巴郡を支える一人となるだろう。自分も負けていられないな、と氣を引き締めて邸の正門を潜つた。

思えば昔から走るのが好きな娘だった。桔梗は自室で簡単な仕事を捌きながら、今朝方も元氣良く走りに出た娘に想いを馳せていた。

周囲の様々なものに興味を示し、また止まることを知らず次々とその対象を変え、あつちへこつちへと走り回った。

体力は自分達夫婦に似て人一倍あるので、子守がへばつてしまふ事すらあつた。常々まつしぐらに駆け回る娘を指して、最初に阿奔アイベンと綽名したのは誰であつたか。

虫や草花、遠く聳える山々に、空を漂う雲、雨上りの虹などは特に気に入りで、虹の根を指して駆け出した時は流石に胆が冷えた。何処まで行くつもりだつたのだ。其処へは誰も行けぬし行つてはならぬと能々よくよく言い聞かせねばならなかつた。

また、自分の住む邸や街並み、そこに暮らす民草、行き交う商賈や遊侠にも興味津々であつた。特に遊侠は傾いた格好をしている者が多く、娘の気をこれでもかと惹いた。

古きを尊び見識ある儒者などは昨今の風潮を嘆いているが、順帝じゆんてい*104治世の頃より才幹ある者は奇矯な装束を纏いだした。それは己は他とは違ふという強い自負の発露であつたとされるが、それでも始めの頃は襟の素地に凝つたり、帯に変わった素材

を用いたり、派手な簪を指したり、衣装の中の一点で自己主張を現わしていたが、時が下るにつれ派手に大仰になっていった。

桔梗自身も漢が成ったばかりの頃ならば誰もが眉を顰める装束に身を包んでいる。いや、その頃であれば衣装云々の前に、そも女である自分が太守や將軍を務める事がまずあり得ないが。女性の社会進出は光武帝*105の漢再興を待たねばなるまい。

ともあれ幼い娘の目には、庶人と一線を画す母や才子の衣装は強い興味の対象として映った。

かと思えば机や筆筒、窓枠の意匠などを飽きもせず一日矯めつ眇めつ観察する事もあり、一体そんな有り触れた物のどこにそれほど惹かれる要素があるのかとんと解らなかつたが、子供からすれば世界の全てが初めてに満ちており興味の対象となるのだろうと納得しておいた。

後にそれが職人の卓越した技量や精緻な細工に感心しているのだと知り、それが発端となつて桔梗も職人達の技術というものに注目するようになり、太守となつた折、職人達を厚く保護し、結果として商業が盛んになつた事を当の娘は知らない。

そんな幼少の頃、娘は阿奔などと呼ばれつつも周囲に神童ではないかと持て囃されていた。自分も半年も経たぬ内に媽媽ママと呼ばれ一時は浮かれていたが、直ぐにそうではな

いと気付いた。

この娘は天才なのではない、早熟なのだ。

地頭は良い方だろう。だが文人名士とされるほどの卓抜した頭脳を有してはいない。書館に入る前に『訓纂篇』は修めたし、算術も理解が早かった。『史記』や『山海図経』を好んで読んだりはするが、大体の内容を把握しているだけで一言一句違わず諳んじられはしない。五経を暗誦するなどは無理であろう。

とは言え、自分よりも遙かに出来がいいのは間違いないので、中央から逃れてきた儒者を舎人に迎えて教育を施したりなどはした。

五経を学ぶよりも洛陽の様子や社会情勢に大きな興味を示し、その儒者には辟易とされたようだが。しかし、基礎教養も疎かにしたわけではなく、完全暗誦こそできずとも五経のみならず論語、老経も大要を掴む程度には修め、「将来、郡太守程度ならば問題なく務められましょう。武は私には計ることはできませんが、それでも高よりも高くあることは明白。文武合わせれば更なる出世も決して望みが高いとは申しますまい」と太鼓判を押されるに至った。

とは言え、やはり智者として立つには不足もあり、神童と騒ぐ一族連中にはあまり過大な評判を流布させぬよう釘を刺しておく必要があった。

一通りの教育を終え、丁度、前任者が高齢のため職を辞して空いた文学主事掾*10

ぶんがくしゅじえん

6の席に着く事となつた慶祝の家庭教師、杜基*107を酒に誘つた時にこんな話をした。

「知において単経伝授であれば暗誦までいけたと思われます。少なくとも能力的には」

「しかし実際にはできぬ、と？ それは何故だ？」

「当人が暗誦するという事に価値を見出していません。簡単に言うことやる気が、そこまでのやる気がないということです。一言一句違わず諳んじるよりも、内容を理解し吟味する事が肝要であると考えているようです。個人的には賛同できませんが、学徒としては通じないでしょうな。経師に鞭打たれるでしょう」

「ふむ」

「それが許されるのは郡国学にまで進学し、暗誦を完璧に熟し、章句しょうくを修めて、その後からとなります。が、ご息女は恐らくここで躓くでしょう」

「と云うと？」

「章句、つまり經典解釈は解者によつて様々で、ご息女にもご息女なりの、幼いながらの解釈があるでしょうし、今より深く学べばそれはより強固となるでしょう。しかし、章句の段階では師の解釈を学ぶ事のみが重要で、そこで自説を展開するのは許されないのです。『お前はまだその段階に達していない』という事です」

「あれも、ああ見えて気の強いところがあるからな」

「流石は壮烈將軍殿の娘御ですな。武の人ならばそれでも好いのかも知れませぬが、文の道には向きません。少なくとも、内心でどう考えていようとも億尾にも出さず機を探れるようにならねばなりません」

それはある程度武人にも必要な資質であるのだが、智者のそれは我等とは比較にならぬ程の腹の探り合いがあるのだと思えば、成程、娘が文の道で大成するのは厳しかろう。以来、桔梗は娘に対して武の鍛錬をより厳しく施すようになったのだった。

矢張り我が娘は天才ではなかったと、見誤る事のなかったのは喜ばしいが、一方で早熟である事も確かでありそれが五経を学んで以来、より顕著な問題となってしまうていた。

道理をよくし、礼節を重んじる姿勢は大人達からは大層評判が良かったが、同年代の子供達からは精神的な距離がより離れてしまい、子供達の中に混じると浮いた存在になつてしまつていた。結果、娘には友と呼べるほど近い関係を結んだ相手が出来なかつた。気にしていない風を装つてはいるが、そこに寂しさを感じているのは明白だつた。

どうかしてやりたいとは思いますが、こればかりは自分が出張つてどうにかなる類の問題ではなかった。そう解かかっていても何とかしてやりたいと思うのが母心だ。

そんな折、ろうちゆう中県に住む友人が同じように子育ての悩みを持つことを知った。その頃は手紙での遣り取りしかなかったが、その中で娘の事に触れたところ、薺華と同年代の第二子が矢張り友人に乏しいと零してきた。

折しも巴郡で板楯の乱が大きくなり、軍への復帰を強く要請され始めていた時であった。戦に出るようになれば今迄のように娘と過ごす事は出来なくなる。

これを好い機会として中中の友・黄公衡の元に預け、あわよくば先方の家の娘と友誼を結んでくれればと送り出した。結果として乱は半年程で治まり、娘はすぐさま邸に戻る事となったが、嬉しい事に黄家の娘のみならず、凶讖で名を成す周家の娘とも真名を預け合う程の友となっていた。

そして、その間に我が家で預かる事となった魏文長とも互いに良き関係を築くに至り、桔梗の憂いはすべて消えたのだった。

——
蔽邸の庭に劍戟の（正確には薙刀と槍の）激しくも甲高い音と、母娘の裂帛の気合い

が木霊していた。

大薙刀「秋草」を奮う薙華に、素槍で応じる母桔梗。戦場で最も相見える機会の多い武器の一つである。

出立を間近に控え、母が喫緊の仕事も捌き終えてからは連日こうして鍛錬に励んだ。愛用の得物を奮う薙華に対し、母親は何の変哲もない素槍で娘の鋭撃を捌いていく。簡単に、とまではいかないが、それでも致命の一撃——一本を取られる事無く渡り合う。しかし、薙華に焦りはない。徐々にだが、確実に戦況は薙華に傾いている。一合打ち合う毎に着実に。

袈裟斬りの一閃は一寸深く切り込み、反撃の一突きを半身を捻って避けつつその捻りを秋草に乗せて横に薙げば母の反応を半瞬遅らせ、弧を描きながら上段に構え振り下ろす連撃は一分強く踏み込み、刃を返しての振り上げは寸毫の間も置かず繰り出された。

そして、一合毎に追い詰められる度、桔梗の笑みは深くなった。手練れと渡り合う歓喜と愛娘の成長を実感する喜びに溢れた笑顔だ。

「くはっ」

その笑みからつい笑い声が漏れたのは、薙華の刃が己の首筋を捉え、寸でのところで静止した時だった。

「見事だ。よくぞここまで成長したものだ。母は嬉しいぞ、薙華よ」

「有り難う御座います。でも母上がいつもの得物だったらこれほど上手くはいきませんでしたよ」

「それを言うならば、お主が馬上であれば最早わしには勝ち目はあるまい」

「いえ、そこまでは……」

「好い好い、子が己を越えてゆくは親の悦びよ」

そうまで言われて薙華は照れたように賛辞を受けた。いや、實際照れていた。

確かに馬上における薙華の武威は、徒歩におけるそれとは一段違うと言える。乗馬を教えたのは勿論桔梗だが、生来の動物好きからか非常に熱心に鍛錬し、今や巴郡は勿論の事、恐らくは益州でも並ぶ者はないのではなからうかと噂されるほどに上達していた。馬術に対して特段の才覚があった訳ではないが、馬に対する特段の愛情ならばあった。自らの騎馬の世話は可能な限り自分で熟すし、よく語り掛け、暇さえあればその背に乗って江州郊外を風のように走り回った。因みに、その時もつともよく足を運ぶのは、江州葬地に埋葬された父の墓所である。

無論、鍛錬は馬術だけではない。いや寧ろ、薙華が必要以上にのめり込んだだけで、実際には武器を取つての武芸にこそ重きを置かれていた。

桔梗の最も得意とするのは弓である。しかし、娘に武の手解きを始めた時、最初に教

えたのは劍だった。次いで槍、その次が弓。三種の基本的な武器を教えた後、薙刀、戟、朴刀、刀、棍、変わったところではヒ首や鏢、硬鞭・軟鞭に鴛鴦鉞など様々な武器を一通り教えた。そして選択を迫った。これまで教えた武器、或いは未知の武器でもよいから一つを選び、以後その武器を修練せよ、と。

己の得意を教える事はなかった。夫の得物もだ。果たして娘が選り取ったのは薙刀であった。

あの瞬間の事は今でも鮮明に想い起せる。歡喜に一瞬固まった自分を見つめる娘の不思議そうな眼差しも。きつと娘が弓を選んでいたらああまで心が揺り動かされはしなかつたらう。父の記憶などほとんどないであろう一人娘が、その父が最も得意とした得物を選び取った。娘の中に、契りを交わした男の血が確かに息衝いているのを強く感じたのはあれが最初だったように思う。

亡き夫の愛用した大薙刀をその由来を語って渡した時の、娘の嬉しそうな、或いはまた切なそうな、それでいて愛おしげな表情かおにどれ程の想いが込められていたかは分からない。だがきつと、その時の自分と大差なかりと、そう思った。

出立を明日に控えたこの日、薜華は父の墓所を訪ねていた。度々訪れて墓参りしているが、故郷を旅立てば当然それも出来なくなる。だから朝早くから馬を飛ばして父に会いに来たのだった。

今日はその手には白い陶とうげん匣ち*108があつた。両手に丁度良く収まる卵型の土笛。前面に見事な職人技で朝顔の図柄が象嵌されており、薜華のお気に入りの一品であつた。

母桔梗の影響もあつて、薜華は音楽、殊に笛が好きだ。母の見事な演奏にはいつも心を蕩けさせている。

匣ち*109を手にした桔梗からは普段の豪放磊落な威気は影を潜める。視線を落とし、そつと笛に唇を当てるその様からは、武の道に生きる豪傑を見出す事は出来ず、氣紛れに地に舞い降りた天女を幻視させた。

その天女から紡がれる繊細で嫺やかな、しかしどこか雄飛ゆうびさを纏つた楽の音。ただ美しいだけではないと、幽玄の神気の中に熱い血肉を通わす調べが身を包む。

その有様は只々美しいのに、奏でる笛の音は確かに武人の厳顔が息衝いている。だが、そこにちぐはぐさはなく、調和のとれた一つの世界が顕われていた。それは、命芽吹く柔らかな朝陽に照らされた峻巖な山間を切り裂く様に飛ぶ猛禽の美。

スフィ〜ヒヨロロ……ピヒー

その母の血を受け継いだ薙華の奏でる笛の音と言えば、死に掛けの隼の嘴から漏れ出した末期の一鳴き。いやさ、干乾びた隼の死骸を撫で摩る枯風の如くと言ったところ。

有り体に言つて才能が無かった。努力で補う余地も無いほどに。

「うう……、申し訳ありません、父上。全然上達しなくて……」

せめて一曲くらいは真面に吹けるようになりたいと、空しい努力を続けているのだが一向にその成果は表れなかった。唄は少なくとも人並みには歌えるのだから、音楽的才能が全く無い訳ではないと固く信じて頑張っているのだが、結果は常にご覧のありさまだった。

それでも薙華は諦めない。歌謡については益州では誰も寄せ付けない実力を誇る焰耶も、楽器はからつきしであるという事実には目を伏せながら。

父の話は色々な人から聞いたが、そう言えば楽才についてはどうだったのであろうか？聞いた事がない。

じつとりと墓碑を見詰めるが答えは当然出ない。……ふう、と一息つき詮無い疑問を吹き散らす。そもそも今日はそんな事を確認しに来たのではないのだ。気を持ち直し、襟を正して父に語り掛ける。

「父上、私は明日、この巴郡を離れる事にしました……」

ゆつくりと、本当に父が目の前にいて語り聞かせるかのように言葉を紡いでいく。今迄の事、現在の自分の想い、これから向かう先への不安と期待、一つ一つ言葉に乗せる毎に静かに気分が高揚していく。

父のことは殆ど憶えていない。赤子だった当時、世界は茫洋としていて、ふわふわと常に夢見心地だった。だが、それでも大きく堅いごつごつとした手、逞しい丸太の様な腕に優しく抱かれていた、記憶とも呼べない感覚が今も自分の中に残っている。その感覚を思い起こすといつも心が温かくなる。今も、あの感覚に包まれながら父と話していた。

どれ程の時間が経ったか、いつか葬華の口から言葉が漏れる事もなくなり、静かに墓前に佇んでいた。

祈るように瞑目し、心の中で最後の語り掛け。ゆつくりと眼を開ける、晴れ晴れとした顔で、きっと父が誇りに思うような顔立ちで。

「それでは父上、行って参ります！」

「それでは母上、行つて参ります！」

元氣よく宣言し、脇目も振らず一目散に愛馬を駆つて駆け出して行つた娘を見送つて、桔梗は暫し、江州県南門に独り佇んでいた。

薺華の見送りに来たのは母桔梗のみであつた。魏延——焰耶は折悪く久し振りに要請の舞い込んだ氐蛮討伐の軍編成に追われている。桔梗もゆつくりはしていられないのだが、親友の黄公衡の計らいで今こうして豆粒よりも小さくなつた娘の後姿を眺めていられる。

黄公衡の娘、黄崇——紅玉は既に中県に戻っている。次に会うのは薺華が世に立つた時だねー、と軽く言つていたのが何ともしつかつた。

周羣——未究は、出立の直前に手紙が届いた。そう言えば、未究には旅立つことを知らせてなかつたな等と考えながら手紙を開くと、そこには彼方の近況や此方の息災を窺う特に変哲のない手紙であつた、にも拘らずどうして自分には知らせないのかと責められているような気分になり、薺華は慌てて返事を書いた。

そして董和——鋼は今、洛陽に居る。上計掾に任じられ、年が明けると巴郡を出立した。私の方が先に巴郡を出る事になつたな。出立前夜に薄く笑いながらそう言つた鋼に、洛陽で再会しようと約束した。

「行ってくるが良い、薺華よ。大陸を見定める為に、そしてお主を世に知らしめる為に」

もはや影も見えなくなった娘に向かって、桔梗は激励を送った。

第六回 南蛮志怪

拜啓、母上様

世の中は私の想像を遙かに超えて広いものなのだ、巴郡より出でて南に進み南蛮入りして身に染みて実感しました。大陸全土から見れば近場に過ぎない南蛮でさえ、これほどの衝撃に出会うとは想像だにしておりませんでした。自らの矮小さ、不識を恥じるばかりです。

現実逃避気味に頭の中で母への手紙を綴る敵氏の若武者、薙華は鬱蒼と茂る原生林で器用に二種の汗を掻きながら秋草を奮い猛っていた。

春とは思えぬ熱気の中、温い汗が全身を伝い、縦横に死線を躍動する度に飛沫となつて舞う。そして、埒外の難敵が振り撒く荒れ狂うような暴威、或いはその敵存在そのものに対して冷や汗が背筋を這つた。

南蛮の奥地、人里離れた広大な原生林。完全に植生が入れ替わり、版図上のみとはいえ、ここが漢土であるなどと誰も信じないだろう。そんな異郷の地。鬱蒼と生い茂る種々様々な草木はそこに多様な生物相を期待させる。しかし俄かに戦場と化したここには鳥獣はおろか、虫の子一匹たりとも近寄らないでいた。

今ここには二人の少女。着流し姿の一人は大振りの薙刀を奮い、虎の毛皮で僅かに身を包んだ一人は涙目で蹲る。そして……、

「ホホホホウ」「ホッホ ホホウ」「ホッホ ホッホ」

「ホッホ ホッホ」「ホ ホホ ツホ」「ホホホホウ」

「ホホッホ ホッホ」「ホホホホウ」「ホッホ ホッホホッホ」

何処か木菟みみずくに似た不吉な鳴き声が響く。てんでんばらばらに九つの奇声が敵から常に漏れている。敵はたったの一匹なのに……。

だが本来は十の声を響かせていたのだろう。血の止まりかけた、それでも今尚血が滴る首元にあったはずの頭部は今頃この原生林の何処かで早くも腐り掛けているのだろう。まさか、切り落とされた首だけで鳴いてはいやしないだろうな。そんな恐ろしい想像を頭の中から追い遣り、目の前の怪鳥に集中する。

そいつは奇妙に木菟に似ていた。泣き声だけでなく。無論、木菟には九つ（若しくは十）もの首はないし、拵げた翼が約29.9cm一丈三尺*110に達したりもしない。

それは巨大な多頭木菟。それは有形の害意。それは人世の化外。それは、グイッシュイ鬼車*111と呼ばれる妖異だった。

第六回 南蛮志怪

「暑いな」

知識の上で知ってはいしたが、実際に体感するとその違いに矢張り戸惑う。今は二月、肌寒さの抜けきらない陽気な季節の筈である。が、ここ南蛮では既に、或いは常に夏の様相である。巴蜀も温暖な土地柄で、周囲にそびえる山脈のお蔭で他州のように寒冷化の影響からも逃れているが、南蛮は最早完全に別世界と言えるほど環境が違っていた。

ここは益州南中四郡の一つ、益州郡。

益州の南部に位置する四つの郡、即ち、益州

郡、しやうかぐん 越えつすいぐん郡、永昌郡えいしやうぐんは今現在、

まとめて南蛮の地と呼ばれ一部の例外を除いて

漢族の支配の及ばぬ土地である。とは言え、漢人が全くない訳ではなく、主に商魂逞しい商人達が南蛮、或いは南蛮以南以西の品々目当てに一定の勢力を成していた。

「南進すれば気温が上がるのは確かに道理だけど、いくらなんでも極端だよな」

初めての一人旅で独り言の増えた薜華は、漢族商人が築いた街にある巴鷹鏢局はようひやうきぎやくの支局に愛馬を預け、益州郡の奥地、完全に南蛮人の領域に足を踏み入れ、更に進み広大な

熱帯雨林に入ろうとしていた。

丘を超え、ようやく眼前に目指す見渡す限りの密林、正に樹海とも呼ぶべき威容が姿を現した。

「成る程、これは騎馬では無理だな」

支局で忠言され、愛馬を預けたのは正解だった。その街からここまで随分な距離があつた為、馬を預けるのは途中立ち寄つた南蛮人の街でも良かったとは思うのだが、鏢局に詰める部曲の者達から止められた。街に居住する南蛮人は漢人馴れしており、朴訥な南蛮人の中でも相応に擦れている者が多く、特に一見の旅人などは食いものにされかねないとのことだった。

簡単に食い物にされる気はないが、異民族の中では特別驚異的ではないにしても、それでも漢人に比べれば壮健な彼等とその領域内で事を構える愚は避けたいので、余計な騒動に発展する可能性は積極的に排除すべきと、大人しく忠告に従つた。

だが、忠言だけでは終わらず、馬の代わりに鏢師ひょうしが南蛮の街を出るまで警護に付いて来たのは流石に警戒し過ぎではないかと思つたが、彼等からすれば主家の娘が蛮地に単身赴くのだから当然の処置であつた。

しかしいい加減、警護付の一人旅には辟易としたので街を出るところで鏢師を帰し、改めて一人南進して来たのだった。

「この先が南蛮王の直轄地。南蛮の中枢か」

南蛮大王孟獲もうかく*112。先頃即位したばかりの南蛮の新王。漢人の街ではそれだけしか判らず、南蛮人の街では幼過ぎる不安と、それを覆す武勇への信頼が見て取れた。自分達を率いる王に求めるはまず第一に武、力ある者を好しとするが南蛮の気風なのだろう。

王権交代も円滑に行われ、混乱や動揺とは無縁のようだった。特に目新しい方針が示された様子もなく、南蛮の普段の雰囲気は知らないまでも、特別な空気が蔓延している様子もなかった。警護の者に確認したところ、矢張り普段通りと言った様相であるようだった。

南蛮に関しては当分の間は動きはなさそうだと判断し、それでも奥地を目指した。南蛮の代名詞とも言える大樹林を。そこは丸ごと南蛮大王の居城でもある。

都合よく調見できたりなどはしないだろうが、可能なら一目くらいは見てみたいものだ。それが叶わずとも、眼前の密林には自分が目にしたことのない未知ばかりが満ち満ちている。気分も高揚してくるといふものだ。しない筈ないじゃないか、と誰に向かつて言っているのか不明な眩きを知らず口にしながら、薜華は意気揚々と密林へと足を踏み出した。

「ふにや〜!」

虎の上顎を被り、その毛皮を僅かばかり纏った少女が道無き密林を駆けていた。健康的な浅褐色の肌、肌よりも濃い茶色の髪、起伏のない矮躯、いつもはくりくりと元氣よく輝く赤みの強い栗茶色の瞳は涙に濡れていた。

常に行動を共にする二人の僚兵は居ない。珍しくたつた一人で行動していたのが完全に裏目に出た。大王に献上する美味しい果物を採取しに来ただけなのに。ああ、それだけなのに。二人を出し抜こうとしたばちが当たったのか? ごめんや、と心の中で二人の友達に謝った。しかし、事態は好転しない。当たり前だが。

「ホー ホッホホ ホッー」

背後から不吉を告げる声が近づいてくる。段々と距離を詰められている。全力で疾駆しているがそろそろ体力も限界だ。このままではいざれ追いつかれる。奴が真面な鳥であれば少女はとつくの昔に魂を啄まれていただろう。人と鳥の競争など勝負にもならない。だが、追跡者はあらゆる意味で真面ではなかった。首が跳ばされているのに飛んでいるのだ。不細工な合唱の合間にぼたぼたと血の滴る音が厭過ぎる伴奏となつて耳に届く。だが怪鳥は気にする事もなく翼を広げて追翔して来ている。一つくらい

どうという事もないのか。いや、もしかしたら怒っているのかも知れない。知らないが。知りたくもないが。

めいさまが獲物を仕留め損ねたと話していたのを唐突に思い出した。その後、逃した獲物を仕留めるまで外出禁止を言い渡された事までは思い出せなかつた。

だが、人ならば致死に至る傷の理由は何となく察せられた。多分そうなんだろう。だからと言って何故自分をしつこく追い回すのか。めいさまと自分とでは何もかも違い過ぎるだろうに。ばか鳥め！

それも別に関係ないのかも知れない。判らないが。何もかもが判らない。解つているのはあの化け物に追いつかれれば死ぬ、という事だけ。そしてその未来は徐々に確定に近づいて来ていた。

「おおー、綺麗な子だなあ」

薺華の目の前には大きな葉の上で休む掌に丁度収まるくらいの蛙。淡黄色の体表に頭頂から背にかけてややくすんだ朱色が上塗りされた二色の対比が美しく映える。背面に点在する黒っぽい疣いぼからも巴郡でも見掛ける蟊蛙の一種だと思いが、随分と色味が

鮮やかである。流石南蛮、とよく判らない賛辞を心中で送りながら、刺激しないように葉ごとそつと掌に乗せてよく観察する。なかなかの美人さんだ。

葉の上で休んでいた時と同じように、じつと大人しくしている蛙を一時の供に密林をゆるゆると進む。これは幸先がいいぞ、などと浮かれ気分で未開の地を往く薺華の耳に何やら不穏な空気を含んだ音が届いた。その空気から逃れるように蟄蛙が掌上の葉から跳び退いた。

「にゃー!!?」

それは密林の奥から響き渡ってきた悲痛な獣の鳴き声。いや、ニャーと言っているが、明らかに人の声帯から漏れた音だ。獣の振りをして狩猟を行っている訳でもなさそうだ。それにしても随分と切羽詰まった響きである。

なんだか良く判らないが愉快な事態ではなさそうだと、声のした方向へ当たりを付けて駆け出した。

道無き道を疾駆する薺華の耳に、葉擦れの音に紛れながらも前方の様子が段々と鮮明さを増して届き始めていた。じきに遭遇する。肩に担ぎ持つ秋草に力を込め、更に足を速めた。道先を覆う草葉や小枝など一顧だにせず、身体を擦るに任せて猛進する。

鳴き声の主と、それを追う大型の獣、いや、鳥か? 羽音がする。兎も角、大きな何

者かとの距離はもう幾ばくもなさそうだ。更に急ぐ。少女がすつ転んだ派手な音と短い悲鳴。拙い。だがもう目の前にある背の高い草の向こうだ。一気に跳躍して少女が蹲っていると踏んだ辺りを飛び越して秋草を構える。何が襲ってきても迎え撃てるように。しかし、襲撃者は正に慮外の化者^{けもの}であった。

「なんだこいつ?!」

言いながらも怪物に向けて秋草を横薙ぎに振るつた。驚愕が強過ぎて精彩を欠いた一閃であったが牽制にはなつた。凶鳥はぱつと後ろ斜め上方に飛び退き、そのまま手近な木の枝に止まつて新たな闖入者を九対の瞳で観察した。

「なんなんだ……」

居心地悪く不安を煽る視線に曝されながら、思わず呟く。厭な汗を掻きながらも油断せずに構える。

どうみても真つ当な生物ではない。傷を負っているが、その箇所と大きさからいつて、まさかあそこにも首が繋がっていたのか? 本来なら十首の怪鳥というわけか。

突然意味不明な事態の渦中に飛び込んでしまったが、背後から感じる視線に、まあ、仕方ないよな、と口の中で独り言ちる。

「いや、姉^ねーは……?」

「大丈夫? 怪我はない?」

小さな少女の問いには答えず、視線は怪物に向けたまま訪ねる。

「にや、にやー」

（大丈夫って事かな？）「好し、もう大丈夫。って言いたいところだけど、あれは何？」

「わかんないにや」

不快な視線はそのままにホーホーと騒めき始めた巨鳥を睨みながら更に問うが、芳しい答えは得られなかった。元々、期待してはいなかったが。だが、応答している内に少し調子が戻って来たのか、声音から怯えと焦燥が薄れてきたようだ。更に言葉を紡ごうとしたところで、遂に怪鳥が襲い掛かって来た。

「ちいっ！」

「ひいっ!？」

此方の頭上を越え、褐色の少女を狙った怪鳥を、その爪が少女を捉えようと急降下して来たその機に、横合いから秋草を差し入れるようにして爪とかち合わせた。秋草に巨体の重みを感じた瞬間、満身を込めて振り抜いた。

丁度、秋草に乗り掛かる様な形になったところへ経験した事ない力でぶん回され、化鳥は初めて自分以外の力で宙を舞い、その身を樹に強かに打ち付けた。

「哈あっ！」

機を逃さず追撃を仕掛けた薜華の一撃は上空に逃れ躲された。鳥はそれほど耐久に

優れた生物ではないが、なるほど怪物相手に常識で計つても意味はないか。

だが、怒りの為か更にホッホ、ホッホと喧しく騒めく凶鳥は今度こそ薙華に狙いを付けたようで、その頭上をゆっくりと旋回し始めた。

「ふん、仕切り直しだな」

「ふにゃあ……」

「そこから動かないでね」

「にゃっ！」

怪鳥に狙われた衝撃で固まっていた少女が、骨が抜けたように脱力して再起動を果たしたところに、釘を刺しておいた。奴の意識をこちらに向ける事は出来たが、元々奴はあの少女を狙っていた。下手に逃げようと動かれたら、また奴の狙いがあちらへ向いてしまうかもしれない。

ゆらゆらと旋回を続ける怪鳥と、微動だにせず大薙刀を構える若武者。両者の間で緊張が高まる。脇でへたり込みながらその様子を窺う虎被りの少女が生唾を嚙下する音がやけに大きく耳に届いた。ほんの僅か、その音に意識が向いた瞬間に怪鳥はするりと急降下を仕掛けてきた。

急接近してきた巨大な猛禽の黒爪に逆撃を仕掛けるが、速度の乗った巨体から繰り出された一撃に今度は此方が弾き飛ばされた。

強かに背を地に打ち付けたが後方へ流れる勢いを利用してそのまま後転しながらすぐさま立ち上がり、追撃を、今度はしっかりと両足を踏ん張り受け止める。そのまま、力押しに相手を押して退け間合いを開け構え直す。

今のは危なかった。上空から襲い掛かる敵など経験がなく、構えがやや中途半端になつてしまい、十全に力を伝える事が出来なかった。徒歩で馬上の敵と対するのは全く違う感触だ。追撃が正面から来たのは幸いだった。

怪鳥もそれを理解したのか、再び上空へと舞い上がり、ゆっくりと薺華の頭上を旋回しました。長引きそうだ。口の中で小さく漏らし、ふつ、と短く息を吐き気を取り直した。

薺華の予感通り、その後長く膠着状態が続いた。

ぼとり、と不快な音を立てて木菟の様な頭が一つ、散々踏み荒らされた地面に転がった。

出鱈目な八重奏を上げながらばたばたと上空に逃れる化鳥に向かって薺いだ追撃は薄皮一枚にとどまった。

「やつと首一つか」

普通ならそれで決着なのだが、常識の外からやって来た化け物はやや意気を挫きはしたが今も頭上から此方を狙っている。だがすぐに逆襲を仕掛けてくる気配はなく、一度大きく息を吐いて秋草を握り直し、意識を新たにする余裕を得た。

おおよそ半時程^{約一時間}*113も戦っている。体力には自信があるがそろそろ決着したい。とは言え、この難敵相手に焦りは厳禁だ。単純に戦いにくいという事もあるが、どうもあの奇怪な姿を目にしているからなのか、それともあれに見詰められているからなのかは判然としないが、どうにも心がざわつくのだ。化鳥と対峙しているだけで平常心を保つにも苦勞させられる。真つ当な生物でないどころか、真つ当な存在ですらないのだから。正に化生である。

旅に出て早々こんなものと遭遇するとは……、今自分が立っている場所が解らなくなりそうだったが、思えば南蛮には赤龍が生息しているんだったな、と思い至った。ヴリトラと言ったか、天竺の神話に登場する怪物にあやかった名を持つ龍。どうせならあつちの方が良かった。ヴリトラはヴリトラで災害の様な暴龍らしいが、今日の前に居る怪異は、間違いなく人類にとって不倶戴天の敵対者だ。本能の領域で察せられる程に不快な存在だ。

自然と凶鳥を睨む目に力が籠もる。気を強く持つて対せねば、あつという間に逆転を

許すだろう。

油断無く敵を見据える薙華に対し、今や八頭となった怪鳥は怒りからか焦りからか、判りやすく攻撃を仕掛けてきた。先程までは旋回しつつ慎重に機を窺い、予備動作もななくするっと急降下に移行していたが、今や翼を大仰にばたかせて襲撃してきたのだ。その分、勢いは凄まじい。威力重視か、だがそんな、謂わば大振りの一撃など喰らう筈もない。正に降つて湧いた好機にしかし、薙華の一閃は怪鳥を裂くことはなかった。それを成したのは……、

急降下してきた怪鳥は何処からか投擲された大振りの三叉槍に貫かれ、薙華から大幅に逸れて地面に叩き付けられた。

「なっ?!」

怪鳥にのみ集中していた為、闖入に全く気付く事も出来ず固まってしまった。故に怪鳥を仕留める絶好の好機を逃してしまった。横腹に槍をぶら下げたまま大慌てで上空に飛び立つのを見送ってしまった。あの傷でも尚それだけ動ける怪鳥の驚異的な生命力に驚いたのもあった。

「トラーツ!!」

そしてその直後、三叉槍が跳んできた方向から豊かな緑髪を振り乱して少女が跳び込

んで来た。背格好は怪鳥に狙われていた少女と大差ないが、その装束は白虎の毛皮であった。そして手には巨大且つ独特な形状の打撃武器があった。南蛮大王孟獲に違いくらいには考えていたが。

「みいさま」

トラ*114と呼ばれた少女が新たに現れた少女とひしと抱き合う。微笑ましい場面だが、上空の怪鳥が煩かった。怪鳥を気にしつつ、緑髪の少女が出てきた方向に注意を向けると、彼女が三叉槍の持ち主だろう。長身の女性が茂みの向こうから姿を現した。

見上げる背丈は八尺六寸約198cmにも及び、二人の少女と同じような浅褐色の肌と、少女達と違って爬虫類の鱗皮に覆われた肢体は、強力な戦士としての能力を内に閉じ込めるように引き締まっているだけでなく、女性としての魅力を十全に備えている。鰐の上顎を兜の様に被り、その下から覗く短く刈り込まれた髪は明るい空色、青紫の瞳は南蛮人らしくくりくりと愛らしい。

ゆつたりと進み出てきたが、その実まったく隙がない。かなりの武人、それも自分なほどより遙か格上と見た。

「邪魔してごめんだわい」

頭を掻き掻き、申し訳なきげに告げてくるがなんと返答したものだろうか。確かに決着をつけるつもり的好機に文字通りの横槍を入れられたが、相手が誇りを持ち出してくる武人ならば兎も角、これは謂わばいわば害獣退治である。なんとしても自身が仕留めるといふ拘りがあるでもない。

それにだ、いくら怪鳥相手に集中していたとしても周囲が見えていなさ過ぎた。だから横槍に全く反応できなかったし、その後の絶好の好機を黙って見過ごす事になった。己の未熟に考えを至らせていると、孟獲が声を荒げてきた。

「邪魔なわけではないじよ！ みい達は助太刀してやったんにゃ!!」

「美以ちゃん、この娘は一人でも化け物鳥を倒せてたにい」

「むー」

「それにトラちゃんを助けてくれたでしょ？」

「まあ、成り行きで」

「礼を言うにゃ！」

言い合いを始めてしまった二人にどうしたものかと、実際そんなのんきなことしている場合でもない。上空を気にしつつ経緯を見守っていると、こつちに水を向けられたのでそれには返答を返すと、孟獲に勢い込んで礼を言われた。良い娘だ。

「姉ー、ありがとにゃ」

「どういたしまして、つと言いたいたいところだけど、まだ終わってないよ」

トラからも礼を受けて、和みそうになる空気を引き締める。上空で未だ旋回している怪鳥は、突如増えた傷と敵を前に慎重さを取り戻したのか、ホッホ、ホッホと若干弱弱しく鳴きながらも逃げる素振りも見せず、此方を窺っていた。相変わらず注視しているのは薺華と、自分の腹に突き刺さっている得物の持ち主と見抜いたか長身の女性。

薺華の言葉に全員が上空を確認し、南蛮の新王様が不敵に宣言した。

「ならさつさと退治するじよ。めい！」

呼ばれた女性は薺華をちらりと見るが、薺華が気にするでもなく頷いて見せたので、すっかりと笑顔を向けてから元気良く白虎の少女に応えた。

「まつかせるにい！」

ぐつと空手で中腰に構えると、なんとそこに孟獲が跳び込んだ。

「んにいつ！」

孟獲が掌の上に片足で着地すると、練達の女傑はそのまま岩でも投擲するように孟獲を投擲した。上空へ、怪鳥に向かって一直線に。

人間投石器から放たれた南蛮大王はあつという間に凶鳥を捉え、器用に空中で縦回転しながら巨大な猫、いや虎か？の前足を模した武器「虎王独鈷」を振り下ろした。

ずぶん！と凄まじい衝突音に押し押されて落下して来た化鳥。その八対の瞳にまだ

生気がしぶとく残っているのを見て取った薺華は即座に間を詰めて一閃。残った首のうち六つを斬り飛ばした。と同時に腹に刺さっていた三叉槍がその胴を寸断していた。薺華と同様に間を詰めていた女傑の一撃であった。

どしやりと、ごろごろと、忌まわしい音を立てて地に撒き散らされた怪鳥はようやくその不吉な活動を止めた。

怪物を退治し終えた後、トラの先導で近くの沢に移動し、各人身を清めてから改めて四人は向かい合った。

特に薺華は怪鳥の返り血塗れだった。対峙していた時は気付かなかったが、怪物の血で汚れているというのは非常に気分の良くないもので、念入りに身を清めた。

「まずは改めてトラを助けてくれた事、この南蛮大王みい、正式に礼を言うじよ」

「ありがとにゃー」

「は、いえ恐縮です」

予想外の言葉に思わず固まりかけたが何とか返事を返す。いま、この小さな王様は孟獲ではなくみいと名乗った。いきなり真名を許されたという事か。生まれて初めての

経験に対処がおぼつかずにいると、孟獲の隣で見守っていた女性が孟獲に耳打ちした。

「美以ちゃん、彼女は漢人だから漢名で名乗るんだにい」

「によっ！」

ひそひそと話しているが、薜華の耳にはしつかりと届いていた。どうやら思っていたのと違うようだ。どうやら孟獲とは漢王朝に向けた対外的な名であるらしい。つまり、美以は本当は真名ではなく、本名という事か。

「なんで漢人は二つも三つも名前があるんにゃ、めんどくさいにゃ」

「美以ちゃんはもう大王なんだからそんな事言っちゃ駄目だにい。大丈夫、すぐに馴れるよお」

「にゃ〜」

「だにおー、がんばるにゃー」

そうだ、頑張れ！ と見守っていると、此方の視線に気付いたのか、咳払いで誤魔化しつつ改めて名乗って来た。

「んんっ、南蛮大王孟獲として礼を言うじよ」

「ありがとにゃー」

律儀にトラも復唱して来た。

「あ、でも真名で呼ぶ事を許すにゃ！ 特別にゃよ？」

「有り難う御座います。私は嚴寿、字は慶祝と言います。そして、」

僅かに上つて来た緊張を封じ、後を続けた。初対面の相手に預けるのは初めてなのだ。真名の重みが彼我で違おうとも関係ない。自らが決めて預けるのだから。

「真名を薺華と申します。この真名、御三方に預けます」

「うむ、確かに預かつたじよ」

鷹揚に（威厳を出そうとしているのだろう）満足げに頷く孟獲の隣で、

「おさん？」とトラが首を傾げていた。そこへ孟獲の反対隣りから

「私達みいんなに大切なお名前預けてくれたんだにい」と長身の女性が優しく教えていた。

「にや!? トラにも?」

「勿論」

「姉ー!!」

凄いい勢いで此方を振り返り聞いて来たので笑顔で応じると、思った以上に感激したトラが胸に飛び込んで来た。反射的に抱きしめて頭をなでなでしてあげた。可愛い。

「申し遅れたけど、私は兀突骨*115。真名の芽衣めいで呼んで欲しいにい」

「兀突骨!!」

「ん、知ってるにい?」

「え、ええ、まあ」

つい声をあげてしまった。しかしなるほど、兀突骨か。人の領域を超えた武威と、強力な武装を纏った大軍で蜀漢を苦しめた南蛮烏戈国王。知っていると言つても、今生で聞いた話ではないので言葉に詰まってしまうが。

「むむ、めいの事は知ってるのか」

「美以ちゃんもすぐに有名になるにい」

「あつたり前だしよ」

孟獲が喰い付いてくれたおかげで追及はなく、ほつとしつつ二人のやりとりを微笑ましく見守っていると、胸元からトラが疑問を呈して来た。その疑問に他二人も喰い付いた。

「ところで姉ーはなんでこんなところにいるんにや？」

「そーにや、この大密林はみいの庭なんだにや！」

「旅の途上でして。諸国を見て回っているんです」

「いろんなところを見て回ってるんだにい」

「話を聞きたいにや！」

「あ、いや、巴郡を出たばかりで最初に立ち寄ったのが南蛮でして……」

「にや？ 巴郡？」

「ここから北にある大きな郡だにいい」

「ごきんじよさんだにや？」

「それでも聞きたいじよ！」

「分かりました。私の故郷の話でよければ」

とにかく外の話を聞きたがる孟獲に、笑顔で応じる薺華。自慢の故郷の話だ、自然と顔もほころぶというものである。

広大な密林の只中に南蛮の都はあった。都、と言う言葉が適切かはさておき。規模としてなら、密林の外にある漢の都市を模した南蛮人の街の方が大きく発展している。対してここは密林の中に半ば溶け込むように住居が点在している。最低限だけ切り開いており、密林の景色そのままに人の領域が出現しているのだ。

南蛮人は穴蔵暮らしと記す書もあるが、それは所詮漢族中心主義の生んだ無知と偏見の産物である。実際には大自然の中で独自の発展を遂げた、漢人の意識からすれば一見奇妙だが見事な文明がそこにはあった。

トラの救出と、怪鳥退治の祝いと、新たな友の歓迎と、そして外の話を聞く為に、薺

華は南蛮の最奥、この密林都市へと誘われていた。

「凄、い……」

その薙華の素直な感想に、ふふん、と誇らしげにない胸を張る南蛮大王様が嬉々として街を案内しつつ、住民に薙華を紹介していった。

「トラー!!」

「……トラー」

「ミケー！ シヤム！」

そんな中から青緑色の髪の毛の元気な子と、鶺鴒色の髪の毛のぼんやりした空気の子が群衆から飛び出してトラと抱き合った。南蛮兵三人衆のミケとシヤム。実に微笑ましい再会劇に頬を緩ませながらも、気になっていた事をふと兀突骨に訪ねてみる。

「それにしても、随分と若い住民ばかりが目につきますが」

若いというか、ぶつちやけ殆どが幼いと言っても過言ではない気がする。多くが孟獲と同年代ではなからうか。大人達は密林に出払っているのだろうか？

「それはね、ここが美以ちやんの為の新都だからだよお」

「美以殿の為の？ もしかして、王権交代の度に都市が建造されるのですか？」

「そうだに。もつとも、建造というほど大仰じゃないけどお。それと、」

「それと？」

「敬語禁止だにいい！」

背後から覆い被さるるように抱き着きながら耳元に口を寄せて大声で禁止されてしまった。

「ぐへあつ?!」

「基本的に旧い人達は先王と共に旧都で隠居だにいい」

そして抱き着かれたまま話を続けられる状況に少し戸惑いながらも、平静を装って聞き入る。

つまり、新たな王にはそれに相応しい新たな諸々のものを用意されるという事か。しかしそれだと、継承すべき様々な事項に弊害もでるのでは? いや……

「その為に私がいるにいい」

豊かな胸を誇らしげに張り、此方の懸念を制するように告げた。

「成る程」

「姉ー!!」

「おふっ」

今度は正面からトラが突進してきた。いきなり何事?と思う間もなく、左右からも「姉ー!!」「……ねー」と抱き着かれ最早身動きも取れなくなってしまった。

「トラ、どうしたの? お友達も一緒に……」

「ミケとシヤムだにや！ 姉ーにしようかいするにや！」

「ミケだにや!!」

「……ふあ、シヤム」

「宜しくね、ミケにシヤム」

今もねーねー言いながら抱き着いている二人に挨拶を交わすと、元氣過ぎる声が割り込んで来た。

「あー！何してるにや!! みいだけ除け者にしてずるいじよ!!」

言いながら跳躍一番、顔面に飛び付いて来た大王様を避ける事も出来ず、そのまま頭にしがみ付かれてしまった。

「……なんだこれ」

「たーのしいにい」

「にやはは、楽しいじよ〜!」

「それはなにより……ん?」

そろそろ自棄っぱちな心持ちになりつつある薜華の耳は、それでも正確に周囲の騒めきが此方に集中している事を知らせた。

なんだろう、嫌な予感がする。とつても嫌な予感がする。そして、予感というものは嫌なものならば当たるのだ。

「だいおーしゃまたのしそー」「みいさまー」「……ふあ」

「いいにやー、ミケたち」「だいおうさまー」「みーさまあ」

「たのしそー……にや」「だいおーしゃまいいにやー」「いいにやいいにやー」

トラ達に似た多数の声が此方を囲んでいる。大王の凱旋に集った若き、或いは幼き住民達。周囲の視線に気付いた大王様は、自らの寛容さと偉大さを示すように自らに従う良き民に号令を下した。

「皆の者も我に続くにやー!!」

「ちよおっ!!」

「がーんばーるにい」

「どおおおおおおおおっ!!?」

この日、厳慶祝は小山になった。小山の、その土台に。

一連の騒ぎも落ち着きを取り戻しやや陽が陰った頃、密林都市の中心広場——ここだけ相応に切り開かれている——にて、漸く宴が始まった。

「ああ、酷い目に遭った」

「お疲れだにいい」

衆目に向かつて身振り手振りを大仰に振るつて怪鳥退治の武勇伝を語る孟獲を眺めながら、首をこきりと鳴らしてぼやくと、隣に座つた兀突骨が、にこにこ此方を勞つてくる。そもそも彼女が事の発端の様な気がしないでもないが……。

「姉ーおつかれにやあ!」「おつかれにや!」「……………ふにやあ」

ミケ、トラ、シャムの三人も勞つてくれた。

「トラ達も大丈夫? 一緒に土台になつちやつてたけど」

「姉ーのお蔭で平気だにや!」とトラが元氣良く抱き着きながら礼を言えば、

「姉ー、ありがとうだにや!」「……………ありがとにや」ミケとシャムも続いた。

よしよしと三人を撫でていると、隣でうずうずと気配を漂わす兀突骨に「いや、駄目だからね」と釘を刺しておいた。下手をすれば先程の二の舞である。

それに対し兀突骨はうにゆく、と全身で残念さを表現して、おもむろに姿勢を正して話を切り替えてきた。

「ところで、美以ちゃんにするお外の話なんだけど」

「ん? うん」

「あまりあの娘を刺激するのは避けて欲しいにいい」

「刺激、と言うとどういう方向で?」と問えば

「みいさまはいっぱいりょうどがほしいにや」

「そうすれば、もつといっぱいのひとに『ははー』つてしてもらえるにや」

「……………むにや」

別の方向から答えが返ってきた。

「それつて」

「今は大王になつたばかりで、一杯一杯、一く杯やることあるにい！つて言つて抑えてるにい」

そして抑えが効かなくなった時に南蛮の外征が始まるという事か。なんとも頭の痛い問題である。

「トラ、ミケ、シヤム。ちよつと芽衣と大切なお話があるから、あつちで美以のお話のお手伝いをしてくれるかな」

「わかつたにや!!」「わかつたにや!」「……………にや」

実に素直な三人娘を見送つて、兀突骨と膝を突き合わせて対策を練る事になった。と言つても實際にやる事は大した事でもないのだが。南蛮人らしく寒いのが苦手という事で、北へ進めば進むほど寒くなり、大王の領土に相応しくなくなるという方向で話を誘導する事に決まつた。

そして宴もたけなわといったところで、思い出したようにせがまれて南蛮の外の話を

する段となった。

「それにしても南蛮は暑いね。巴郡から少し南に下っただけでこれほど違うとは思わず驚いたよ」

「南蛮が暑いのは当たり前だよ。これからもつと暑くなるよ」

「うん、でも巴郡ではまだまだ吐く息が白くなるくらいに寒いから」

「によ?! 息が白くなるってどういう事にや?」

「寒い時はそうなるんだよ。皆、白い息を吐いて……」

「み、みいもなるのかにや?」

「勿論」

「こ、怖いじよ——」

(えっ、そこで!?)

割と簡単な所で躓いてくれたので、少なくとも暫くの間は大丈夫だろう。兀突骨のお墨付きも出たのでひとまず安心していいだろう。

しかしそれでも外への興味自体は薄れる事はなく、トラ達にも一斉にせがまれて話を続けた。話の中心は当然の様に巴郡とそこに住まう人々の事だ。特に自分の周辺の人達に関してはいつ熱く語ってしまった。

「姉ーのかあさまはどれくらいつよいにや?」

「私の十倍は強いよ」

「……じゅー?」

「薺華ちゃんが十人居るくらい強いってことだに」

「しゅんか十人!」

当人が聞けば、何を馬鹿など呆れるような批評を下す薺華。無論、そこまで実力の開きがない事は自覚している。がしかし、心情的には今でも母に敵う気がしなかった。

「じゃあ、めいさまよりもつよいにや?」

「いや…、芽衣は今のところ私が出会った中で多分一番強いよ」

「さすがめいさまにや!」「さすがにや!」「……すごいにや」

「めいはしゅんか十一人分かにや?」

「盛り過ぎだに」

流石に苦笑を抑えきれない兀突骨であった。薺華とその母親に実際そこまでの差はないだろうが、娘から見た母の姿はそれくらい大きく見えるのであろう。そしてその母よりも強く、益州最強と目する義姉よりも自分を強いと判断した。

身内びいきもなく（十倍はさて置いて）、此方を立てる為でもなく、冷静に判断を下した薺華の武人の部分に強く興味を惹かれた。武人が武人に興味を抱けばする事は一つだけだ。

「薺華ちゃん、今から私と立ち合つて欲しいにいい」

それに対し、薺華は一瞬目を見開いて驚いて見せたがほんの一瞬だけ。

「ごうよ」

すぐに母譲りの寧猛な笑みを浮かべて快諾した。

思つてもみない好機を得た。静かに興奮しながら薺華は秋草を構えた。対して、兀突骨は怪鳥を貫いた大振りの三叉槍「河王三尖」かおうさんせんを手にゆつたりと佇んでいる。

広場の中央。孟獲の一声で余興としてこの宴の場で立ち合う事となつた両者は、周囲のお祭り騒ぎから切り離された世界に没入していた。二人だけの戦場に。

共に準備が済んだとみると、即座に薺華が間合いを詰めた。合図も何もなく唐突に始まつた決闘に、周囲のざわめきが一層大きくなる。

後ろ腰下段に構えていた秋草を掬い上げる様に振り上げた一撃は、河王三尖の石突を正確に鐔に当てられ抑えられた。そのまま拮抗する。薺華は両手で、兀突骨は片手で。早くも両者の差が現れていた。

薺華はくいつと手首を捻つて秋草を軸回転させ石突を滑らせ、そのまま河王三尖の柄

沿いに秋草を振り上げ兀突骨の持ち手を狙った。が、兀突骨は河王三尖を秋草に向かつて倒し込むように弾いてこれを防ぐ。

薜華は弾かれた秋草に従って自身も半転し後廻し蹴りを放つ。と同時に左手を離し右手一本で振り回される秋草をそのまま背後に向かつて横薙ぎにし、蹴り足を狙った兀突骨の一撃を辛うじて弾いた。無理な体勢からの薙ぎだったが、相手を僅かに後退させる事が出来た隙に向き直る。

一瞬の攻防で予測が確証になる。矢張り、芽衣は私が出会った中で一番強い。

まさかこんな所で、こんなにも早く焰耶姐よりも強い相手と出会えるとはね。そう心の中で呟きながら、満身の全てを研ぎ澄ませて兀突骨を見据える。

矢張りゆったりと佇む兀突骨。その顔には今もにこにここと変わらぬ笑顔が輝いている。だが、身を包む雰囲気は先程までと同一人物とは思えぬほど猛り狂っている。怪鳥など問題にならぬ、赤龍すら単騎で屠るだろう圧倒的な武威。

此方を見据えていた兀突骨の笑顔が一層輝きを増す。自分は今、どんな表情かおをしているだろう。格上に対し、それでも捕食者の笑みを浮かべた薜華は埒もない考えを消し去って目の前の相手に最速最強の一撃を見舞った。

孟獲達が観たのは、瞬きする間もなく兀突骨に斬り掛かった薜華が、次の瞬間には背後の観衆に突っ込んで、いや、吹き飛ばされたところだった。

それは実際その通りで、ただ薙華の袈裟斬りを紙一重で躲しながら逆撃を喰らわせた兀突骨の動きだけが一切見えていなかった。何時の間にか河王三尖は両手で握られ振り抜かれていた。

「思つた以上だつたにいい」

「く……は、強いなあ」

巻き込まれた観衆に大丈夫？と声を掛けながらふらふらと起き上がる薙華に、兀突骨は心配そうに声を掛けた。

「薙華ちゃんこそ大丈夫？」

「ん、暫く大人しくしてれば立てるくらいにはなるよ」

「頑丈だにいい」

「丈夫な体に産んでくれた両親に感謝だね。それよりも最後の一撃」

「刃を入れなかつた事を除けば本気の一撃だつたにいい」

「そつか、全く反応できなかった」

言いながら、どこか清々しい顔で再度寝転がる薙華。その脇に大きな身体でちよこんと座り込む兀突骨。

「嗚呼、本当に世界は広いな」

「薙華ちゃん、嬉しそうだにいい」

「芽衣だつて」

「ん、嬉しいよお」

二人は互いの顔を見合わせ、そして笑い合つた。

「姉ー、大丈夫にやかか？」

「めい、見事だにや！ しゅんかも良く戦つたにや！ 感動したにや！」

そこへととととトラ達が近づいて来た。上体だけを起こして皆を迎えた。周囲の歓声が良く聞こえる。心配そうなトラの顔も、心底楽し気な孟獲の顔もとてもよく見えた。身体は痛み緩慢にしか動けないが、感覚はまだ研ぎ澄まされていた。

必要以上に肌を感じる南蛮の熱気が今は心地好かつた。

第六回——了——

すつかりと痛みの退いた薙華は今、密林の入り口に立っていた。周囲には見送りに来たトラ達三人と、大王の執務とその補佐はいいのだろうか孟獲と兀突骨も居た。

「姉ー」

「トラ、随分と世話になったね。有り難う」

きゅつと、いつものように抱き着いてくるトラの頭を撫でながら感謝の意を伝える薺華。皆が笑顔で今日を迎えた中、ここ数日で完全に薺華に懐いたトラが一人、寂しそうにしていた。

薺華にとつても妹のように想うトラとの別れは寂しいが、出会いがあれば別れもあるものである。それにしても、他の皆はやけに和やかだ。トラを気遣う気配もない。はて、と考えを巡らせていると、孟獲が偉そうに咳払いしつつ一歩前に進み出て（本人的には）厳かに告げた。

「トラ」

「にや?」

「にや、汝に特命を下すにや」

とくめー?と首を傾げるトラにとつても特別なお願いだよお、と優しく兀突骨が教える中、薺華は何となく予感がした。だがこれは別に悪い予感じゃない。でも当たる気がする。そんな予感。

ちらりと兀突骨を盗み見る。視線に気付いた女傑と目が合い、互いに頷き合う。その時には薺華も笑顔だった。

「みいの代わりに南蛮の外の世界を見定めてくるのにや!」

「にや!? ト、トラがそとに……?」

突然の事態におろおろするトラの頭に、ぽん、と優しく手が置かれた。トラが見上げれば舜華が笑顔で頭を撫でていた。

「じゃあ、私と一緒に行くかうか?」

「……姉ーと?」

「そう」

「いつしよに?」

「そうだよ」

「いいのにや?」

「勿論」

笑顔で語り掛ける舜華。初めは戸惑い、徐々に笑顔となり、そして最後には喜びのあまり抱き着いて来た。

「姉ー!!」

今やすっかり馴染んだ小さなトラの体温を抱き寄せて、辛い事や大変な事もたくさんあるよ?と問い掛ければ、「姉ーと一緒になら平気だにや!」と輝く笑顔で応えるのだった。

「しゅんか、くれぐれもトラを頼むじよ」

「お願いね」

「うん、責任もって預かるよ」

「トラ、羨ましいにやー！」

「…………お土産欲しいにや」

「にやー、ミケ、シヤム」

三人娘の微笑ましい別れの挨拶を眺めながら、孟獲達と正式にトラを預かる旨を確認し合う。普段は見たまま子供の振り舞いをする南蛮大王だが、三人で抱き締め合うトラ達を見守る姿は、人の上に立つ者の面差しを確かに宿していた。

「トラ、がんばってくるにやー!!」

「がんばるにやー!!」

「…………がんばれにや」

見守ること暫し、三人の別れの儀式は南蛮人らしい元気で幕を閉じた。

「よし、それじゃそろそろ出発しようか」

「にやー！」

これから始まる二人旅を暗示するかのような高く青い南蛮の空の下、小さくも活力に満ちた南蛮兵の少女の声が鮮やかに響いた。

「みんな、いつてくるにやー!!」

第七回 荊州南乱

南蛮を発した薜華とトラはさらに南へ進み、後漢最南の交州こうしゅうに渡つた。そこで二人揃つて生まれて初めての海に日が暮れるまではしゃいだり、噂を頼りに山へ分け入つて非常に珍しい羚羊に遭遇したり、香蕉バナナ*116だけで腹が満たされるほど堪能したりと大いに楽しんだ。が、しかし街での生活経験のないトラは各地で騒動を巻き起こし、非常に大変な旅でもあった。特に貨幣経済を知らず、理解していないのが致命的であった。それでも交州蒼梧郡そうごくんから荊州零陵郡けいしゅうれいりょうくんへ移る頃には何となくではあるが、金銭の仕組みを理解し始めていた。

季節は孟夏四月月へ移り、薜華達は荊州南部へと至つた。

第七回 荊州南乱

天気は快晴、風は微風、東側に瀟水しょうすいを眺めながら、江沿いに命芽吹く平野の中を細く

長く続く街道を往く馬一頭、馬上には二人の少女。薺華とトラである。

肌を優しく撫でる薫風に多分に含まれた緑の香りに、良い土地だな、と心地良く馬を進める。しかし、トラには少々不評のようだ。

「はー、さむいにゃあ」

「そりゃあ、南蛮や交州に比べればね。夏入りしたと言つても、まだ四月だし……と言つても巴郡と比べてもまだ低いな」

「やつぱりさむいんにゃ」

「寒いってほどじゃないでしょ。でも、ま、これが冷夏つて事なのかな?」

「れーか?」

「夏なのにそんなに暑くならないって事」

「にゃ?! そ、そんなことが……」

戦慄するトラを可笑しそうに見守っていたら、視線に気付いたトラにじと目で睨まれてしまった。つい視線を逸らす。すると、左前方に豆粒ほどの人影を捉えた。

「ん?」

「どーしたにゃ?」

不意に左方へ顔を向けた薺華にトラが同じ方角へ首を捻った。すると、平野の向こうから誰かがふらふらと駆けてくるのが見えた。今にも倒れ込みそうだ。と、馬がそちら

へ駆けだした。

「……賊か？」

近づくとつれ、相手の様相がはつきりしだした。薄汚れたお粗末な武装の三十絡みの男。如何にもな風体をしており、やや虚ろな目つきで馬で近づくと此方に気付く事もなくよたよたと何とか足を進めている。原因は肩口に刺さったままの薄刃の剣だろう。撃剣の使い手が好む造りの直剣だ。傭兵や用心棒という線もあるが、この男がどちら側にせよ、その先に荒事が待ち構えている事だけは間違いない。

「その者」

「……へあ？」

十分に接近してから声を掛けた。それで初めてこちらに気付いた男は、それでも十分に認識していないのか、鈍い反応でこちらを窺った。意識の焦点が合うと、ぼろぼろの抜身の刀ををこちらに向けてきた。矢張り賊徒の側のようだ。

「ひっ!! くそ、また女か！」

撃剣の使い手も女性らしい。一人か？ 少なくとも少数なのだろうと、男の反応から当たりを付ける。

「仲間を捨てて逃げてきたのか？」

「ち、違わあ!! お頭達に援軍をだなあ……!!」

適当に鎌をかけたが簡単に乗つて来た。ちらりと背後の平野を見遣る。自分達が進んできた街道を越えれば直ぐに瀟水に行き当る。とても匪賊の根拠地があるとは思えない。野営地も見渡す限りありそうにない。この怪我で後何里進む気だったのか。河をも泳いで渡るつもりか？ 恐らく、朦朧とした意識で進む方角を見失つていたのだろう。此方が何を確認しているのか、遅まきながら気付いたのだろう、きよろきよろと辺りを見回ししたのが気配で知れた。

「あ、ああ、畜生」

「かつてにおちこんじゃったにやー」

「……うるせえ」

なんだかなあ、と力が抜けるのを自覚するが放つて置く訳にもいかない。少なくとも本隊と別働隊に分けられる規模の匪賊がこの辺りに潜んでいるのだから。そして、そいつ等と戦っている誰かが。

「で、お頭とやらは本当はどの辺りに居るんだ？」

「誰が言うかよ」

力なくそう言った。言葉に力は籠もっていないが、それでも拒否した。ならば仕方あるまい。いや、どの道、賊徒を見逃す理由もないが。

「賊なんぞ止めて真面目に働けばどうだ？」

「…つ、今更、んな道に戻れるか!! どうせ、どうせ……!!」

「こんな所でつまらない賊徒として滅ぶより余程ましだと思うがな」

力を込めて睨んで来た。先程の虚無的な、半ば抜け殻の様な半死者は立ち消え、一匹の賊徒が憎悪を込めた眼で此方を射抜いて来た。

「……」
「持っている」私に言われても癪に障るだけか?」

「ああ、そうだよ! てめえなんぞに俺らの気持ちなんざわからねえだろうよ!」

「勝手に代表して言うな。お前と似たような境遇でも、故郷を棄てざるを得なかった人達でも、懸命に生きている人達は居る。私ではなく、そんな人達が言えばお前は納得するか?」

「……………」

「それとも奪うか? かつての自分から」

「ああ、そうだよ。おらあもう骨の髄まで山賊なんだよ」

「ならば是非もないな」

そこではじめて薜華は秋草を構えた。トラはきよとんとしていたが大人しく事の成り行きを見守っていた。それはすぐに終わった。怒声をあげて突っ込んできた男を、無造作に振るつた(少なくともトラにはそう見えた)秋草の一閃で斬り伏せて終わらせた。

なんだか覇気のない薜華を見上げる。らしくなく見える。わざわざ男を挑発して立

ち向かわせた意味も解らなかつた。

「賊徒なら賊徒らしく死ねばいいと思っただけだよ。こいつがその道を選んで最後まで違える事がなかつたのだから。辛うじて動いているだけの屍みたいな奴斬るのも嫌だつたつてのもあるけど……」

言われてもやつぱりよくは解らなかつたが、「んにゃ」と頷いておいた。それには追求せず、薙華は男の、死体に刺さつたままの劍に注目していた。

劍身の薄く、やや短い小劍。投げつけられればそれつきりである撃劍最大の欠点を補填する為に、複数本携行できるように工夫された劍だ。無論、撃劍と言えど常に劍を投擲し続けている訳ではない。しかし、打ち合うに不向きな造りだ。多数に囲まれる状況では避けるだけでは追いつかなくなる事態も大いにあるだろう。

「欲しいにゃ?」

「いや、持ち主に返した方が良いだろうな、と思つてね」

「じゃあ、取つてくるにゃ」

言うが早いか、ぴよんと馬から飛び降りて薄刃小劍を引き抜いて戻つて来たトラを再び馬に乗せ、先を急ぐ事にした。

「よし。じゃ、取り敢えずこいつが来た方角へ向かおうか」

「元氣ないままでいいじょうぶにゃ?」

「ん、もう大丈夫だよ。ありがとね」

いつもの様に頭を撫でてやると、にやあと喜んできた。そんなトラの様子に元氣付けられる。相手の意気を取り戻させるためとはいえ、馬鹿な事を聞いた。相手の経歴など判らない。だからこそ、適当に聞くべきではなかったか。

「でもほんと、賊徒なんてさっさと止めれば良かったんだけどな。止められれば……」
最後に視線だけで振り向いて、小さくそう呟いた。

乱世はもう来ている。

巴郡は概ね平和だ。南蛮に混乱はなかった。交州は驚くほど発展していた。荊州に入つてようやく薜華は漢の現状の、その一端に触れたのだ。

乱世は既に来ている。まだ大波になっていないだけで、既にその波は打ち寄せているのだ。

小さな丘の向こうから剣戟の音が響いて来たのを聞きとめた薜華は更に馬を急がせ、すぐさま丘の頂上に達した。そこから見えたのは、一人の少女が四人の匪賊と渡り合う

姿だった。周囲には三人分の死体。少女の戦果だろう。

その小柄な少女は、見た目に適わぬ俊敏な戦いを展開していた。両手に薄刃の小剣、腰には左右三対の皮革製の鞘、剣が収まっているのはうち一つ。矢張り打ち合うのを嫌って大きく間合いを開けるような回避で、縦横に踊る様に剣を奮っている。相手の刺突を背後へ跳躍する事で躲しぎま、投げつけた剣は賊の首元に突き立った。賊が倒れる前に着地した少女は、傍に転がっていた死体に突き刺さったままだった剣を引き抜き、双剣を構え直した。ざりつ、と編み上げの長靴が踏みしめた大地が鳴った。肩は上下しているが、足元はまだまだしつかりしている。

上手いな。敵の動きと自分の位置と周辺情報を正確に把握している。技量自体には目を見張るほどのものはない（賊からすれば十分な脅威を備えているが）が、戦い方の巧みさで実力以上の力を発揮している。とても智に生きる者とは思えない。いや、その智力が発揮されているからこそその戦果か。

そう、彼女は智者だ。深く被った牛仔帽*117の下の顔は見えないが、肩口までふわりと広がる櫛色の髪には見覚えはない。だが、今生では初めて見るその制服には見覚えがあった。帽子と同色の墨色の色調こそ記憶にないが、その意匠は間違いあるまい。つと、いけない。少女の戦いぶりに感心してる場合ではない。何をしに来たのだから。

薜華が気を入れ直すと、残り三人の賊が悪態をつきながらも少女を包囲しようと駆け

ずり回っていた。

「ちつくしよう！ このちびが!!」

「こんな無様、お頭には見せられねえぞ」

「おお、そうだ！ じき援軍が来る。俺たちはどやされるが、おめえはもうお終いだぜ」
「来ないよ」

「は？」

そう疑問符をあげた賊の一人は、何処からか飛来した少女の小剣に貫かれて絶命した。

予想外の出来事に、皆止まった。まるで時間を縫い止めたようだな、と馬鹿な事を考えながら愛馬を戦場に滑り込ませた。

「トラ、すいさんにや！」

「ん、じゃあトラがやる？」

「いいにや？」

「いいけど、生かして捕らえた方が良いかな？」

と言いながら少女に顔を向けると、既に構えを解いて成り行きを見守っていた少女は頷いて見せた。

「んな、なんだてめえら!!」

「お待ちかねの援軍だよ」

「来ねえつつつたのはおめえだろ！」

「お前達にはね。それよりいいのか？」

「は？」

「にやにやにやー！」

「ずーん！と交州で新調した戦棍、虎侍独鈷こじどつこがやはり疑問符をあげた賊の腹にめり込み、そのまま二丈程約4.6mも吹っ飛ばして悶絶させた。

「んな……」仲間の惨状を目で追った男は、その隙を突かれて自分も同じ末路を辿った。「御披露目の相手としては物足りなかつたかな？」

「にやー、齒応えないにや」

元氣良く駆け戻つて来たトラに声を掛ける。蒼梧郡こうしんけん広信県でトラに贈った新武器は、良く手に馴染んでいるようだ。南蛮大王自慢の虎王独鈷を小振りにしたような戦棍は、目にした瞬間からトラの気に入りで、毎日時間を作つては振るっている。

「活躍の機会はまだあるさ」

そう言いながら撃剣使いの少女の方を向けば、剣を収めて此方に寄つて来ていた。目の前まで来ると、丁寧さくゆうに作揖*118し、礼を述べてきた。

「御助力感謝致します」

「顔をお上げください。こちらこそ、もつと早く駆け付けければ良かったのですが、貴女の戦いぶりに少々見惚れてしまいました」

「お恥ずかしい。貴女ほどの武人にそのような言われる程の武は持ち合わせておりませんよ」

「いや、実に巧みでした。智に生きる人の戦い方も良い参考になります」

薙華のその発言に少女は瞠目した。続く言葉と視線で納得した。

「水鏡女学院の名は故郷の益州にも届いていますよ。私の場合は恩師の妹さんも通っているようで、よく話を聞きましたから」

「それにしても風聞のみで私の装束から見抜くとは、お見逸れました」

少女は再び頭を下げ、そして上げた時には頭髮と同色の櫛色の瞳に強い興味の輝きを宿らせて名乗りを上げた。

「我が名は徐庶じよじよ*119。字を元直げんちよくと申します。お察しの通り、この春に水鏡女学院を卒業し、今は旅の身の上です」

「私は厳寿、字を慶祝と申す者。私も春に故郷を出でて今は大陸を見聞して回っています」

「トラだにゃ！ なんばんだいおー孟獲しやまのみよー……みよ？」

「名代」

「みよーだいとして漢のししやつちゅーにや！」

「南蛮大王の…!？」

「にや！」

徐元直の驚きに、誇らしく元気に返事を返す。

「それに敵と言うと、もしかや巴郡の…?」

「太守敵顔は我が母です」

此方も誇らしげであった。

「見えてきました。あの村塙そんかう*120です」

村塙、と言う言葉通り、その村は周囲を塙壁うへきで囲まれていた。いわゆる環濠集落の形態であるが、村塙は漢朝の戸籍から消えた棄民達が寄り集まった自衛共同体であり、王朝から自立（若しくは孤立と言っても良い）している。

簡単な自己紹介の後、なんとか話せる程度に回復した賊を尋問したのち縛り上げ、徐元直に請われてその案内の元、ここまでやって来た。馬上にトラと徐元直、薜華は賊二人を担いで歩いている。

「高さはそれほどでもないけど、結構立派な土塁ですね。三十戸に満たない集落とは思えないな」

「ええ、それだけあそこに暮らす方々の決意が強いという事でしょう」

「そこを山賊に狙われた、か」

「なんでにや？」

トラの疑問に元直が答えた。

「拠点とするに都合がいいのです。營浦えいほけんじょう県城に程近く、戸籍を棄てた人達の共同体だから官軍に助けを求める事も出来ないし」

「自衛団も大した数はないだろうし、よく引き受けましたね」

「私も故郷を逃げ出した身ですから。新天地で頑張っていこうとしている方達を見捨てる事は出来なかつたんです」

こうして乱れている荊州からもまた逃げようとしている私では頼りないでしょうが。と、力無く自嘲して続けた元直になんと声を掛けたものかと考えていると、集落の方から声が掛けられた。

「先生――！ 御無事でしたかー!!」

見れば素鎗を持った若者が、土塁の上から手を振って声を張り上げていた。

「御心配お掛けしました！ それと、頼もしい助っ人の方をお連れしました！」

「おお!!」

若者が改めて此方を見遣る。大の男二人を軽々と担ぎ、立派な軍馬を伴った薜華の姿に喜色満面。すぐさま後ろを振り返り、村塙中に聞こえるような大声で吉報を伝えた。

塙主の家へ案内され、歓迎もそこそこに件の山賊に対する軍議がその場で開かれた。塙主*121と自衛団の代表者もその場にいる（ついでに捕虜とした二人の賊も転がっている）が、発言するのはもっぱら徐元直と薜華、時々トラといった具合だ。

「斥候部隊が全滅したわけだけど、連中の行動に変更はあるでしょうか?」

「捕虜の話からすると、賊の頭目はどうも堪え性のない女のようなようですから、この村塙が得た助っ人が少数と知れば結局は数で押し潰してこようとするのではないでしょうか?」

「こつちの数わかるのにな?」

「戦闘痕を見れば、斥候を屠ったのが少数であると知れるでしょう」

「そういや、連中の死体野晒しのままだしな」

「それでなくとも、この周辺に官軍以外でそれなりの規模の軍集団には目を光らせていると思います。わざわざ脅しを掛けて猶予を与えたのは、この近辺で今後自分達の脅威

として立ちほだかる勢力が居るか見極める為もあるのかと」

「成る程。一緒くたに潰してしまえば、後の活動が楽になると」

「? 官軍はむしかにや?」

「そう言えばそうだ。ここが国に頼れないとしても、山賊が派手に活動すれば放つてはおかれないでしょう」

「それが、現在荊州南部三郡は武陵郡を巡つて州軍と睨みあっているのです」

「ええ…」

「?? 意味わかんないにや」

突然出てきた意味不明な荊州の現状。その詳細を聞いて薜華は思わず頭を抱えた。

「現在の長沙太守張羨*122と荊州牧劉表*123は折り合いが悪く…」

「いや、折り合いつて」

「張羨は民心を掴み郡政に励んでいたのですが、劉表からは全く評価されず無礼な扱いを受け続けたと聞きます。その恨みが積もり積もって、かつて歴任した桂陽と零陵二郡の民心をまとめ上げて、劉表に対して公然と『州牧として相応しくない』と叛してしまつたのです。それに激高した劉表は南郡と江夏郡をまとめて対抗しているのです」

「いやいやいやいや、それで国から預かつた官軍を動かしてるの? 両者とも?」

「信じがたい事でしょうが」

「ええー」

「わけわかんないにやー」

完全に内乱状態じゃないか。そりや山賊への対応など鈍くもなろう。棄民も出よう。予想外にして想像以上の惨状に、薙華は暫し山賊退治の事を忘れて唾然としていた。驚きのあまり、徐元直への口調が普段の物になっているのにも気づけなかった。

「いや、もうこの現状は一先ず脇に置いておこう。今は山賊をどうにかしないと」「そうですね」

改めて本格的に尋問し、賊から聞き出したところ、山賊の頭目は名を郭石かくせき*124と言い、普段は百人程を率いて近辺を荒らし回っているが、一声かければ五百からなる荒くれが集うのだという。近年の荊州南部の乱れを利用して伸び上がって来たこの女悪漢は更なる勢力拡大を目論んでおり、その為の拠点の一つとして目を付けられたのがこの村場であるという。

「で、明け渡すよう脅しを掛けてきたわけだ」

「なるべく無傷で手に入れたいでしょうから、いつもの襲撃の様に村内で暴れ回るわけにもいかなかったのでしょう。無論、それ以外にも狙いがあるからこそ、このような悠長な真似をしているのですが」

「さっき言つてた先の障害となる勢力の見極め、か」

「まだあります」

「にや?」

「頭目の名を聞いて思い当たることがありました」

桂陽郡で暴れ回る山賊に周朝しゅうちやう*125という男が居る。千を優に超える賊を率いる大頭目で、県が招集できる程度の兵では手も足も出ず、郡が討伐に乗り出すもこれとは真面に戦わずのらりくらりと躲して悪事を重ねている。

この男には恋人がおり、その情婦もやはり山賊を率いて此方は零陵郡を、まるで周朝と競い合うように荒らし回っているのだとか。

「もしかして、その恋人というのが」

「郭石と言う名と聞き及びました。周朝と同程度の賊を率いている筈です」

「いきなり倍に膨れ上がったな」

「うそついたにやー」

「せ、千人なんて、そんな集まったの見た事ねえよ!」

「本当かよその話!」

元直の説明に間の抜けた顔で呆けていた賊二人は、トラの言に反応して再起動を果たし逆にこちらに詰め寄って来た。それに「にや?」と疑問の声を上げるトラに元直が説明を続けた。

「恐らく、この二人は比較的最近になつて郭石の勢力に取り込まれた連中なのでしょう」
「頭目の全貌を知らなかつたつて訳か」

「それなら万一こうして捕まつても、重要な情報が敵に漏れるのを防ぎますから」

「誤算は、元直殿の様な情報通が此方に居た事か」

「すごいにやー」

「い、いえ、それほどでも」

「しかし、五百が千となると相当厳しいけど、実際のどの程度の戦力を引き連れてくると思
う？ それと、郭石の勢力に対抗できそうな豪族は近辺に居るのかな？」

「零陵に限らず荊州南部は異民族が多く、自衛の為に部曲を抱える豪族は多いのですが、
昨今の王朝や州の乱れから郭石らに限らず匪賊が蝗の様に湧いております。更に、今や
この村塢の様に後漢王朝にも地元豪族にも従わない不服従民も増え、情勢は混沌として
います」

「純粹に千の軍勢に対抗できる豪族も居ない事もないですが、当てにはできませんね」

「ふむ」

「しかし、郭石もまたこのような情勢下では軽々に全勢力をこの村塢に傾ける事はしな
いでしよう。恐らく五百を以つて圧力を掛けてくるかと」

「それでも半分持つてくるんだね」

「捕虜の出した数字にはそれなりに検討する価値があるかと」

「ああ、今回出す全戦力としては五百と」

「五百なら姉ーだけでじゅーぶんによ！」

「簡単に言わないの。それに五千や万の中の五百を蹴散らすのと、五百しかない五百を殲滅するのでは訳が違うよ」

「三々五々散つてしまえますからね。それにしても、如何に山賊と言えども五百という数に動じないのですね」

「いや、山賊だからですよ。これが真つ当な訓練を受け軍規で統制のとれた五百なら大言は吐けません」

薙華のその自信に、顎に手を当て僅かな時間、沈思して元直は方針を決めた。

「ふむ……、それなら慶祝殿に侵攻してくる五百を蹴散らしてもらいましょう」

「え、でもそれじゃこの場しのぎにしかないんじゃないじゃ」

「攻め寄せてくるのは五百でしょうが、まず間違いなく残り五百も近くに潜んでいる筈です」

「それは、豪族が、或いは異民族が反応するかもしれないから？」

「そうです。慶祝殿の仰る通り、我々、いえ慶祝殿がこの村塙に何時までも留まっていられないのですから、ただ攻めてきた連中を蹴散らしても意味がありません。そしてそれ

「はこの村場単独戦力で成したとしても同じです」

「郭石か」

「そうです。彼の女が居る限り、根本的には解決しません。郭石、それと周朝はただの賊ではないのです」

「じゃー、どうゆう賊にや?」

「長沙郡に区星おうせい*126という“將軍”を自称する盜賊の巨帥がいます。確証はありませんが、私は周郭兩名がこの巨帥の配下ではないかと睨んでいます」

「……なんかどんどん話が大規模になっていつてない?」

「ええ、そうですね。これは私が見立てた話ではありませんが、この区星と言う賊、国家に対して大規模叛乱を目論んでいるのだとか」

「ここまで来て遂に薜華は頭を抱えた。実際に頭痛に見舞われた気分になるほどに酷い。荊州の為政者達は何をしているのか。下らない、個人的な事で安んじるべき領地を乱れに乱れさせるなど言語道断である。薜華は今、荊州牧と長沙太守を極自然に諱で呼びつけてしまう程に憤っていた。」

「劉表と張羨はその事は?」

「どちらにも水鏡女学院から警告が発せられました。張羨は流石に警戒しているようですが、劉表は……正直、判りません。少なくとも、何らかの行動を起こしたとは聞き及

んではいません」

「益州じやそれなりに良い評判を聞いてたけど」

「確かに手腕も良く、学問の振興とそれに伴う学士の庇護など見るべきところも多くありますが、実際にはそれ以上に野心の強い男ですよ。彼の元には豊富な人材が揃っていますが、それも劉表の徳の元集つたなどと流布させていますが、あの手この手で掻き集めた家臣団です」

ろきようわう
魯恭王の後裔は野心がないといけない家系なのかも知れない、と詮無い事を考える華であつたが、徐元直の言葉で現実に引き戻された。

「話を戻しましょうか。私はこの機に郭石を討ち取りたいと考えます。その為の策をこれより授けます」

日が高くなつた頃、人口百人程の村塙の目前に五百もの軍勢が詰め寄せていた。装備・装束はまとまりがなく、隊列なども碌に組んでいない。緊張感もなく集落に向けて進んでいた。烏合の衆といったところだが、小さな集落には致命的な外敵であつた。

郭石率いる山賊、と言つてもこの場に郭石はいない。元々、この程度の規模の集落を

落とすのに態々出張る事もないと侮っていたが、斥候が返らず、誰かにやられた痕跡を見付け、村塙に攻め寄せる直前に改めて十人ほどを先行させると、村塙の正門上に白旗が翻り、門が開け放たれているとの報告を受けた為だ。

斥候は旅の武芸者か何かにやられたようだが、そいつ（或いはそいつ等）はちんけな村一つの為に自分達と本格的に事を構える事無く去ったのだろう。賢明な判断だ。

脅しは利き、豪族も自衛以外には動かない、官軍は州と睨みあっている。全く楽な仕事だ。予定していた五百で集落をさっさと要塞化させる為、材木等も一緒に運ばせていた。おかげで進みは遅いが別に何の問題もない。村塙の門に一人の騎馬武者が姿を現しさえしなかつたら……。

「全く、姿が見えてからだったこれだけの距離を何をのろろとしているのかと思えば、何か運んでいるな？ 拠点化する為の建材か何かか？ 気の逸い事だ」はな

門の陰に身を寄せて待つていた薜華は、賊徒共の顔がはつきりと見分けられる距離にまで接近してきた所でその姿を見せた。

「なんだあ？ てめえは!!」

「婆のしよぼくれた狗共に名乗る名はないね」

「ぼつ、お前殺されるぞ!」

「へえ、そりゃ面白い。殺れるものなら殺つて欲しいものだ。出てきたらどうだい?」

そのまま中央を文字通り切り裂いて駆け抜ける。直前まで完全に油断しきり、命の取り合いに對して心も肉体も何の準備も出来ていない烏合の衆など、何らの脅威どころか障害にすらならずただ命を散らしていった。

そうして彼女が通り抜けた後には、やけに障害物の多い赤い道が出来ていた。殊更にゆっくりと馬を返して振り返る。

「どうした？ 掛かってこないのか？」

「な、なんだこいつ。やべえぞ」

「馬鹿野郎！ どれだけ強かろうが向こうはたった一人だ、困め!! 馬を走らすな!!」

そう言われて群集に突っ込む奴など居ない。右回りに外縁の敵を屠っていく。村塙の正門に戻って来る頃には、山賊は恐慌状態に陥っていた。此方に掠り傷一つ負わせられず、味方だけがただ無残に斬り捨てられるのだ。あつという間に戦意は萎えていった。これには薺華の戦い方も一役買っていた。

薺華は敵の四肢を（時には胴さえも）両断する事が多い。この時、寸断された腕やら首やらが四方に飛び散るのだ。前方で味方の悲鳴が上がったかと思えば、その肉体の一部が血の雨と共に降ってくるのだ。これは堪らない。戦の狂騒に乗る事も出来ず、ただ死をぼとりと突き付けられるのだ。大した覚悟も持っていない賊徒には一溜まりもなかった。

また、そのような派手な屠り方をすれば、薙華自身も戦えば戦うほど血に塗れていく。ただ其処に己の血だけがなく、捕食者の笑みを浮かべた紅の荒武者と化す。五百の山賊の心を押し折るに十分な恐怖の体現が戦場を駆け抜けた。

「やっぱ、やべえええええ！」

「に、逃げろっ!!」

「はっ、なんだなんだ情けない奴等だ！ 所詮うらぶれた婆に跪くような屑共だな！」

「ひいいいっ！」

「この様子では周とかいう賊も虚名頼りの木偶であろうな！」

「ただ助けてくれ!!」

このまま本隊毎撤退されては意味が無いので、入念に挑発しておく。できるだけ数を減らしながら、挑発を聞き届けたであろう連中はそれなりに逃がす作業を、山賊どもが散り散りになるまで続けた。

「ハ、ハ、ハ、ハ、この私を虚仮にただけでなく、愛しいあの人まで馬鹿にしやがったてえのかい?!」

山賊本隊が屯するたむろ小さな盆地に、妙齡の女の怒声が轟いた。零陵を荒らし回る山賊の大頭目郭石である。

まさかの村塙奪取失敗に加え、それを成したたった一人の小娘がある事か、自分とその恋人を散々に扱き下ろした事を知った女悪漢は、かつてないほどの憤怒に燃えていた。

「行くよお前等！ その小娘ばらばらに引き裂いて胆を豚に喰わせてやる!!」

「ま、待つてくませえ お頭!」

「待てだど?! 小娘一匹怖気づいたんじやなかうね!」

引き留めた配下の襟元を引つ掴み、ぎりぎりと締め上げて喚き散らす、その配下も何とか冷静になってもらおう大声で言葉を尽くす。

「その小娘、間違ひなく一騎当千の化け物ですぜ! 散り散りになった連中を集めて腰据えて掛かった方が……」

「この私が負けるつてのかい? 逃げ散った連中なんざ役に立つかい! そいつ等の落とし前は後で付けるよ!!」

「周の兄いの事まで知つてやがるんですぜ!」

その言葉に、郭石が動きを止めた。一瞬前までの激情が嘘のように静かになる。

「こつちの事に随分と詳しいようだねえ」

「となりや、お頭達を討ち取る為に万全を期してるとしてもおかしかねえ」

「となると伏兵かい？ おい！ 近辺の豪族に動きはないんだね？」

「そいつは間違いありやせん！」

脇で経過を見守っていた別の配下に確認を取るが、考えていたような状況にはなっていないようだ。ならば他には……

「ふむ、小娘と同程度の奴があと何人か居るのかも知れないね」

「そりや、下手な援軍よりやばいっすよ」

「ふんっ、どれだけ強かろうと少数にできる事なんざたかが知れてるよ。だが、今回はこつちも村そのものに手を出すのは避けたいからね……」

郭石はしばし考えを巡らすと、がしがしと頭を搔いて目の前の配下に命を下した。

「ちっ、しゃあないね。散った連中を呼び戻しな。こつちも万全を整えて攻めるよ」

「へいっ!!」

陽が中天を過ぎ暫く経った頃、村塙正面の戦場後に泰然と佇む薺華の元にトラが戻って来た。

薺華と共に村塙の門陰に潜んでいたトラは、薺華が賊を蹴散らした後姿を現し、そ

のまま逃げ惑う賊共の中で最も大きな群れを追跡し敵本隊の場所を偵察していた。薺華、正確には徐元直からの指令で敵情を探り、すぐさま逆襲してくるのか、或いは、可能性は低いが撤退するのか、それを見極めて戻って来た。

トラはこう見えて優秀な斥候だった。その資質があった。薺華がそれに気付いたのは交州の山中にて羚羊を探し求めていた時だった。獣の通った僅かな痕跡を発見し、自身の痕跡は可能な限り無くし、気配を殺して目標に近づく。野生児であり、日常的に狩猟生活を送っている南蛮人ならばこれくらいは誰でもこなせるというトラの言には驚きと共に妙に納得した。ただ、南蛮兵はこの特技を戦に活かすというトラの言には驚きで、トラに斥候の重要性を説いてもきよとんとされるだけだった。しかし、「姉ーのやくに立つにやら！」と張り切って斥候としてのいろはを旅路の馬上で聞きかじっていた。

そして、今正にその資質を開花させ、見事役目を果たして帰還したのだった。普段は騒がし過ぎるくらいに元気なトラの成果に、喜色満面で薺華は出迎えた。

「姉ー、賊はぜいんしゅーごうしてこつちに向かつてくるにや！」

「有り難う、トラ。お疲れ様だったね」

「にや！ 鹿や猿にくらべればらくしよーだったにや！ 連中にぶすぎにや！」

這う這うの体で逃げ惑う賊徒と、警戒を怠れば無残な死がすぐ横にある野生の獣では確かに比べ物になるまい。それでも油断せず、気配を殺しきっていたからこそその成果で

あろう。今もこうして傍に居るだけで元氣満身な心配を発散させているトラの初働きに、薙華は下馬して、頭をいつもよりも愛情を込めて撫でてやった。にやー、と喉を鳴らすトラを一頻り堪能した後、報告の続きを行った。

「連中は何処に居るの?」

「あつちの方、約4.14km十里くらいにや」

言いながら南西の方角を指し示すトラの指を辿る。十里、それほど起伏もない、逃げ散った連中を糾合すれば八百は超えてくるだろう、軍集団としては大した数ではないが整然と行軍できるとも思えない、敵頭目の聞き出した性質から急がせるだろうか、しかし再集結を選択したのならある程度は冷静に事を運ぶか、それでも到着して即交戦は間違いない、となれば十分な余力を残した行軍、小休止を挟むだけの堪え性がなければ

約二時間一時は超えまい、約一時間それでも半時を割る事はまずあるまい。

「トラが見た時、どれくらい集まってた?」

「一番おつきなかつたまりしか戻ってなかつたにや」

「どれくらい散ってたか分かる?」

「にや……、西にも東にも逃げてつたやつらがいたにや」

「ふむ……」

となれば再集結にはそれなりに時間が掛かるか、万全を期すならかなりの時間が、堪

えきれなくなれば時間的余裕は少なくなるが敵数も減るだろう、それでも七百は来ると見た方がいいだろう。

しばし黙考する。この場に徐元直が居れば直ぐに対応を弾き出すだろうが、生憎と彼女はここには居ない。夜までは時間を稼がなければいけない。

「……よし。それじゃ、村塙の人達に予定通り準備に掛かるように言ってきた。そして、トラは暫く休んでいいよ」

「わかったにゃ！」

疲れを見せずに村へと駆けて行くトラの背中を見送ってから、視線を山賊共の居るだろう方向へ向けた。

このまま敵駐屯地に単騎で突っ込み郭石の首を討てばそれで終わりだ。自分以外の戦力がこの場に在れば、有力な選択肢だ。しかし、村塙の自衛団は薜華から見てとても戦力とは言えない。

「郭石が私を十二分に警戒してくれる事に期待するか」

ふう、と溜め息を吐きつつ独り言ちた。

陽が傾き地上が朱味を帯び始めた頃、八百と五十にわずかに届かない山賊の群が遂に村塙の前に現れた。

先頭には郭石と思しき女。体格的には見るべきところは特にない。周囲の男共より頭一つ分は低く、よく引き締まった肉体の上にはうつつすらと程良く脂肪が乗り、特に胸部は己の性別を充分に主張している。顔付きは険が強いが、切れ長の黒い目と細く長い眉はこの山賊にまざまずの美を与えていた。肩まで伸ばされた波打つ深黄色こせきの髪は、今はべつたりとした橙色に見えた。

鎧甲の類は纏っていないが、その手には特徴的な蛇尾傘槍だびさんそうが握られていた。槍頭下部に下向きの短い鉤が四本、更に下部に上向きの長い鉤が二本、下向き鉤を覆うように伸びている。見た目にも奇怪で扱いの難しい武器だが、使いこなせば攻守ともに優れた武器である。

随分と珍しい得物を振るう女悪漢は、元々険のある顔を不機嫌そうに更に顰めていた。ここに到達する前から臭い始めていたが、目の前に来ると最早我慢できずに悪罵した。

「臭い！ 臭いったらないね！ なんなんだい、忌々しい!!」

「糞尿の臭いっすね。なんでこんなもん撒きやがったんだか……」

山賊共の眼前には踏み荒らされた糞尿の臭い滾る戦場後。よく見れば（見たくもない

が、倒れ込んだ草々の其処彼処に糞が降り掛かっている。

その戦場後の両側を囲むように手下共の無残な死体が、踏み荒らされていない茂みの境界とばかりに並べられている。片づける時間もなく、戦場の邪魔にならぬよう脇に除けただけのような様相だが、それで肝心の場に糞を蒔くなど意味が不明である。

そして、糞尿の野の向こう側には、脇に篝火を焚いて悠然と単騎で佇む馬上の少女。心なしか嫌そうな顔をしている馬と違い、うつすらと笑みを浮かべ平然としている若武者を睨み付ける。

斥候の報告通りではあるが……。

「本当に伏兵は居なかつたんだらうね？」

「へ、へい」

どうだかね。心中で疑問の声を挙げながら周囲を軽く見回す。この臭いだ、偵察など早々に切り上げたに違いない。糞尿を避けて茂みを行けば、何を喰らうか判つたもんじゃない。ええい、忌々しい!!

「ふん、伏兵があつたとしてもどうせ村の連中だらうさ。問題にもなりやしない。あの小娘さえぶつ殺せばそれで終いだ」

「ですな」

「よし、行きなお前等！」

「へ?」

「何、ぼつとしてんだい?」

「い、いや、ここを突つ切るんですかい?」

「当たり前だろうが! こんなあからさまな事されて、茂みの罠にかかりや一発でお陀仏だよ!! いいから行きな!!」

「へ、へい! いくぞ、てめえら!!」

郭石の怒号に、いやいやながらも突貫を始める山賊達。それを見て、さすがの薺華もほんの僅かだが彼等に同情した。とは言え、彼女の中には微塵の容赦もない。罠に掛かった獲物はただ仕留めるのみだ。愛馬の首筋を撫でて宥めながら山賊共が十分深みに嵌るのを待つ。

あと数歩で先頭の賊が自分の殺傷圏内に入るというところで、脇の篝火に突つ込んでおいた松明を手に取り、糞野の中央へ投げ入れた。

そして、悪臭の中、先陣を切ってきた賊を一瞬で切り伏せ篝火をそちらに倒し込むと、中央と先頭で火の手が上がった。

「糞尿の上からさらに油撒いていやがったのかい?!」

糞尿は油の匂いを誤魔化す為と、周囲に罠の気配を匂わす為だったのか。本命は逆。火に巻かれ絶叫を挙げる手下の姿を目の当たりにして、ようやく思い至った。確かにあ

からさまに過ぎたが今更だ。火の勢い自体はそれほどでもないが、悪臭と熱波で一氣に大混乱に陥っている。まだ火の届いていない所に居る連中も慄いている。

「ええい、くそっ！ 脇を抜けて行くんだ!!」

まだ糞野に足を踏み入れていなかった手下共に指示を出すのが、火から逃れようとする連中も死体を跨いで我先に茂みに踏み入っていた。そこでかち合えばまた多少混乱するだろうが仕方がない。だが、そうはならなかった。

茂みに進入した者共も、ぎゃっ！と悲鳴を上げて倒れ込んでしまったのだ。

茂みの死体沿い、そして、山賊側には板から飛び出させた竹釘の罠が張られていた。それ程の数は用意できなかったが、設置個所を限定する事でそれなりの効果を發揮していた。山賊が最初に糞野を選択してくれた事でその効果は本来のものよりも大きくなっていた。

「こ、こつちにも?! ええい、悪辣な!!」

だが、まだ終わりではなかった。更なる追い打ちとして西側の茂みの奥から喊声かんせいと銅鑼、多数の金属を打ち鳴らす音が響き渡った。落ち着いてよく聞けば、声を上げている者は多くて数十、金属音も一か所に固まっている。しかし、この場である程度落ち着いて居る者など郭石以外には居なかった。最早、恐慌状態に陥った山賊共は我先にと逃げ出してしまった。あつという間に半数以下に減った手下共に喝を入れようと口を開い

たところに、なんと炎の糞野を駆け抜けてきた騎馬武者が目の前に現れた。

ぶるるつ、と実に不機嫌そうに鼻を鳴らす愛馬を宥めすかして、敵頭目に向き直る。

「郭石だな？」

「小娘が!? 狡すつからい手を打ちやがって!!」

「ここまで上手くいくとは思わなかったよ。あつという間に瓦解したな」

「それでも、これだけの手勢が残ってりやこの村落とすくらいわけないよ!!」

「お前が無事ならば、だろう？」

「殺れるつもりかい？」

「お前こそだよ」

両者の間で言葉が交わされる間にも殺気が膨れ上がっていく。やがてすぐにそれは臨界に達し合図も何もなく殺し合いが始まった。

馬上からの大上段を下部上向きの長鉤が受け止めた。力任せにはなく、受けると同時に引いて力を受け流しながら受けきってみせた郭石に、薙華は相手の評価を一段改めた。油断や慢心はなかったが、少々見誤ってはいたようだ。秋草を引こうとすれば、上部下向きの短鉤に引つ掛けて此方の体勢を崩そうと力点をずらしながら引つ張る所なども巧者振りが光る。だが、

「?!!」

「んなあつ?!」

だが、それを満身を込めた膂力で跳ね退け、絡んだ蛇尾傘槍ごと郭石を振り上げ、大地に叩き付けた。

「ツかつはあ……!?!、ば、化け物め」

「おいおい、私なんぞに向かつて化け物などと評するような体たらくで天下を窺うような大乱を引き起こす気だったのか? 身の程知らずにも程があるぞ」

「くっ……」

衝撃と痺れにがくがくと震える身体を無理やり引き起こしながら、それでも戦意萎えず薙華を睨む郭石とは裏腹に、二人の一騎討ちが始まってから周囲を囲んで見守っていた残りの山賊達は、最後の支えを半ば失い今度こそ完全崩壊しようとしていた。

無論、それを黙って許す郭石ではない。伊達に多くの山賊を率いてはいないのだ。手下共の及び腰な空気を敏感に察知し、薙華に向かつて槍を構えながらも即座に怒号を以って命じた。

「ぼさつとしてんじやないよ! 茂みに隠れた連中をぶつ殺してきな!! 大した数じゃないよつ!!」

「へ、へいつ!」

「こやーつ!!」

頭目の首が落とされ、完全に心が押し折れた山賊の残党は、無様な悲鳴を上げながら一目散に逃げだしたが、それも叶わなかった。

朱色の空が半ば以上暗い藍色に染め直された中、急ぎ駆け付けた営浦県の県兵達に追い回され狩られる羽目に陥ったのだ。その県兵を率いて来た営浦県令の脇に控えるのは徐元直その人であった。

抗戦するような気概もなく、逃げ惑うしかできない残党を眺めて、終わったな、と肩から力を抜き、此方へと駆け寄って来る徐元直を、すでに傍に寄って来ていたトラと共に出迎えた。

「お疲れ様でした、慶祝殿」

「元直殿こそ、本当に官兵を、それも日が落ちきる前に引つ張って来るとは感服しました」

「感服したのはこちらの方ですよ。官兵など必要なかったようですね」

「それこそ貴女の策あつての事です。連中、面白いくらい罠に嵌つてましたよ」

「それは、是非とも自分の眼で見たかったですね」

互いにほんの少し前に纏っていた緊張の痕跡すら見せずに言葉を交わし合う。笑顔

も覗かせ、街角で談笑でもしているかのような空気は、異臭漂うこの場に非常に似つかわしくなかった。

「それに、トラが良い仕事してくれましたから」

「にや！　トラ、頑張ったにや！」

「ああ、よく頑張ったよ」

「そう、トラちゃんもお疲れ様」

「にやー」

真つ平らかな胸を誇らしげに張るトラに、柔らかな笑顔で労う元直を眺めていると、なんだか無性に嬉しくなる薺華であった。

こうして、とある村場を巡る山賊との戦は幕を閉じた。

第七回——了——

山賊が追い立てられ脅威が目の前から去った村場の者達と簡単な挨拶を済ませ、薺華とトラは元直と手早く口裏を合わせて県令に謁見し、此度の一件は落着くと相成った。

そして今、蕪華達は營浦県に滞在していた。

蕪華とトラにはもともと旅の進路上にあつた為、特に問題はなかつたが、荊州を抜くようとしていた徐元直も營浦県に留まつていた。否、彼女こそがこの地に滞在する最も強い理由があつた。

「それにしても、良かつたのですか?」

「問題はありません。何もずつと仕える訳ではありませんから」

元直が營浦県に滞在する理由。それは、營浦県令に客将として暫くの間、智恵を貸すという条件で賊討伐の兵を出陣させたからであつた。

この場に長々と逗留する積りもない。すでに幾つか献策したい事案があり、具体的な方策もほぼ練り終わっている。それを果たせば再び身軽な身の上だ。

「そうは言いますが……」

「ふふ、大丈夫ですよ。私とその気になれば、止められる者など此処には居りませんから」

「ならいいのですが」

「それよりも、此方こそ申し訳ありませんでした」

「? 何がです?」

「郭石の首級みしるしです」

「ああ、いいんですよ。あんなもの」

条件はそれだけでなく、郭石討伐の手柄の全てを県令のものとする事も含まれていた。更に言うならば、郭石は討たれるものとして話を持ち出したのだった。頭目亡きあとの山賊を、頭目喪失の混乱から立ち直る前に叩くという名目で県令は兵を出す決断を漸くしたのだった。

この交渉の際、村塙の事は一切話に出さず、ただ一騎当千にあたる旅の武芸者が郭石を討たんと、山賊退治に乗り出したと切り出したのだ。県令はその尻馬に乗るだけで良いと、知己である武芸者から郭石討伐の執り成し図れると、何となれば己が智謀を駆使すれば県令を勝利者にするは容易いと、あの手この手で県令の腰を持ち上げ戦場まで馳せ参じたのである。

こうして少数ながらも全てを騎兵で纏めて押っ取り刀で駆けつけてみれば、正に郭石は討たれ戦意を喪った山賊の残党が呆然とあるだけであった。それでも急遽掻き集めた県兵より数は多かつたのだが、直前まで殆ど一人に翻弄され続けた山賊達にこれ以上抗う意気などある筈もなく、ただ追いつてられ狩られるだけの木偶と化していた。

思つた以上の状況と戦果に気を良くした県令は、元直の進言・忠言によく耳を傾けるようになり、一連の流れの中で小規模な村塙の存在などは問題とする事もなく簡単に黙認される事となった。

誰にとつても満足のいく結果が訪れたが、元直は薜華の、そしてトラの奮戦が無かつた事になったのを気にしていた。一方の薜華は、下手に名が売れる事で動き難くなる可能性を疎んでいた為、寧ろ助かったと言つた心地であつた。

「旅は身軽な方が好いですからね」

「そう言つて頂けると助かります。旅と言えば、御二人はこれからどちらをを目指すのですか？」

「まずは洛陽に……と、その前に南陽もよく見てみようかと思ひます」

「南陽、そして洛陽……ですか」

つと黙考に沈む元直。なんであろう？と思ひつつも、薜華も訪ねたい事が、そして提案したい事があつて口を開いた。

「元直殿は此方の務めが済まわれたら、どちらへ向かわれるお積りですか？」

「元々は交州まで逃れようかと考えていました」

元直は薜華の言に何かを感じ取つたのか、僅かに期待を込めて返答し続く言葉を待た。表面上は何も気取らせず平然としたものだったが。

「交州、ですか。確かに思った以上に安定し、発展していましたが」

「そう言えば、慶祝殿達は交州を巡つてこられたのでしたね」

「ええ、まあ」

「……あの、もし良かったら、巴郡に渡り母に御助力願えませんか？ ……元直殿？」

「……あ、いえ、失礼しました。巴郡、ですか」

思っていたのと若干違う提案に、一瞬、反応を示せなかった自分に苦笑しつつ答えた。「そうですね、巴郡も安定していると聞き及んでいますし、なにより慶祝殿の御母堂でしたら何らの憂いもありません」

「そうですか！ 良かった!!」

「しかし、私のような若輩でかの壮烈將軍の力になれますかどうか……」

「何をおっしゃいます。それにお恥ずかしながら、母は安遠將軍府を開府以来、軍師らしい軍師が傍に居たことがないのです」

「そうだったのですか？ 寡聞にて存じませんでした。幾度も異民族を跳ね除けた武勇は伝わっておりますが……」

「今迄は母の経験と戦場勘でやってこれましたが、これから先の事を考えると……」

「昨今の乱れが益州にも届けば、異民族を睨むだけでは確かに足りなくなるでしょうね。益州にも魯恭王の後裔が鎮座している事ですし」

「はい。実際に州牧が何を考えているのかは、私などには考えの及ばぬところですが、元

直殿が母の傍に居てくれたら心強い限りです。母に宛て紹介状を書きますので」

「ふふ、それでは、ここでの務めを早々に片付けて向かわせてもらいますね」

「宜しく願います」

晴れ晴れとした顔で嬉しそうに母の事を託してくる舜華に、元直は気持ちを切り替え、まだ見ぬ益州巴郡を想い、己の往く先を見据えた。己の智が世に出る時が来たのだと。

今の大陸では、これから乱れゆく大陸の情勢下では求められるは権謀軍略。平穩な世であれば政への道を進めたであろうが、己の資質を顧みれば、軍略こそを求められるだろう。嗜好よりも優先されるべき戦場の才覚。それを嫌って隠遁を選んだが、結局は軍師の道を歩みだそうとしている。

しかし、今はそれほど悪くない気分だ。欲を言えば、目の前の少女と同道したかったが、他ならぬその少女が何よりも大切に想っている母親を己に託して来たのだ。ならば応えたいと思った。自分でも驚くほど素直に。

「ふふ、楽しみです」

人知れず零れた眩きは、風に乗って西に流れていった。

第八回 南陽太守

豪奢な、それでいて品良く纏められた部屋。大きく間取られた窓枠に嵌った透明度の高い琉璃*127を通して、夏の残り香を纏う陽射しが広々とした部屋の奥に飾られた調度品までも明らかにしていた。一目見ただけで、それと知れる高級感を漂わす品々が並ぶ。しかし、そこに権勢を誇る様な驕りの気配は見えない。こういった場に縁のない庶人が迷い込んだとしても、圧倒されるのではなく、思わず感嘆の溜息を吐くであろう。正に上流階級の善き手本のような広々とした部屋で、二人の人物が飲み交わしていた。

一方は親し気に、往年の戦友に接するかのようには振舞う熟女。女性にしては大柄な部類であるが、漲る覇気はそんな彼女を更に必要以上に巨大に魅せる。強靱な意志を美貌に変えて象つたかのような秀麗な顔立ち。豊満と言う言葉では全く足りず、そこから更に逸脱し圧倒的な威容を魅せ付ける乳房を誇る褐色の女丈夫。

一方は気だるげに、面倒な相手に接する、しかし決定的には嫌がってはいない様子の少女。今はまだ成長を待つ蕾のように華奢でありながら、そこらの満開の花々を掠れさせる可憐さを誇り、且つ瑞々しい気品をただ在るだけで発散している。それでいて、その幼げな容姿からは似つかわしくなく、老成した気配を漂わす儁才。

「なあ、美羽うら、なんか面白い事ねえのかよ」

「ない。さつさと揚州へ帰れ」

「つれない事言うなよ」

「はあ。何故、妾が昼日中から酔っ払いの相手をせねばならぬ」

「そりや、お前、俺の相手が務まるのは美羽くらいのもんだろ」

「業腹じゃ」

「ああ、いや。ここの新しい県令は中々良さ気な奴だったな。なあ、あいつを俺にくれよ。いいだろ、おい」

「物のように強請るな阿呆が。そも、お主には公覆がおるじやろうが」

少女のその言に、元々鋭い女の眼がすうつと細くなる。そして愉し気に告げた。

「ほおん。美羽の見立てじゃ、祭に伍するか」

「さて、どうであろうな」

にやにやと笑みを絶やさぬ女丈夫に対し、少女は澄ました顔で蜜酒*128を口に付けながら、少なくとも子育てならばお主よりも上であろうよ、と内心で呟いていた。

少女のそんな内心も知らず、女丈夫は半身を乗り出し更に言葉を続けた。が、

「でもよ、もつと面白れえ奴居んじやねえのか？」

「？ 何を言うておる？」

「……あれ？」

「……………」

暫しの沈黙が部屋を満たす。褐色の英傑が居るにしては珍しい光景であった。

「つれ々？　つかしいなあ、ここ来りや絶対面白いもんと遭遇できると思つたのによお」

「お主、そんな下らん勘の為に態々わざわざこちらに寄り道して来たのかえ」

「んだよ、俺の勘は滅法当たるんだぜ？　知つてるだろ」

「ふん、だが今回は外れじやの。お主の勘の行方は今頃とつくに洛陽よ」

「……はっ、なんだよ！　やつぱ居たんじゃねえか!!」

「歳喰つて鈍つたの炎蓮イエンレン。そのまま寝込んで死んでよいぞ？」

「くつくつく、俺を寝台に縛り付けたきやお前がそれを成せよ？　美羽」

少女の直截過ぎる悪態に、しかし誰もが英雄と称えるに足る女は実に愉し気に返してきた。本心からそれを望んでいるが故に。それを喰い破る日を心待ちにしているが故に。

それに対し、少女はしまったと顔を歪めて嘆息を吐いた。面倒この上ない悪癖を刺激してしまつた。思えば幼少のみぎり、この豪放に過ぎる女に何故か見初められてしまつたその日から、自身と敵対し、戦にて相食む事を暗に明にと要求してくるのだ。

「あれは妾が三つの頃であつたか……」

憶えず遠い目で独り言ちてしまった。常識と言うものが一欠片足りとも通用しない目の前の豪傑に遭わされた目に、当時の恐怖や混乱が甦り蜜酒がほろ苦くなった。

何故、母君は目の前のこれを認め、自分を預けるを好しとしたのか今以つて全く理解できなかった。自分の理解を超越した事態。今、自分の目の前で肩肘付いて機嫌良く酒を呷っているこの女に見初められたあの瞬間、あの時、自身の運命の道筋が書き換えられてしまったのだと、少女は強く信じていた。

「おお、懐かしい話だな？ 美羽の初陣の事だろ？」

「何が初陣じゃ。幼児を戦場いくさばに拉致するでないわ」

じろりと睨み付けて文句を言うが、相手は何処吹く風だ。

「ああくん？ 何言ってるんだ。雪蓮シユレンは乳飲み児の頃から戦場を駆けずり回ってるぜ？」

「だからそれはお主が引き摺り回しておるだけであろうが！ はあ、初めて伯符に同情したわ」

「あいつも最近、ようやくモノになってきたな」

「此度の并州行にも従軍させたのであったな。どうであつた？」

「おう、愉しそうに鮮卑共を血祭りに上げてたぜ」

「堕ちたか、伯符」

女傑の三人の娘の中でも、長女は最も色濃くその血を受け継いでいると専らの評判で

ある。最も似てはならない部分を強く継承してしまつたと、少女は嘆息と共に嘆いた。似ているだけでは駄目なのだ。その形質を収めきれぬ器を持つておらねば、長くは生きられまい。並の英雄足らんとするならば過不足なからう。大湖を収める器はあると見る。しかし、荒れ狂う大海を収められる程の器ではあるまい。

次女はよく知らぬが、この豪傑の持つ印象からは少々意外な一面が遺伝していると聞く。生真面目で仕事に手を抜かず、実直な人物であるという。

三女は、末娘は、あれはあれで厄介な性質を母から譲り受けたと見える。

「美羽もこんな所でこそこそ悪巧みしてねえで、早くこつち来いよ。嬉しいぜえ？」

「人聞きの悪い事を言うでないわ。妾はただ安穩と蜂蜜に耽溺できる日々の為に骨を折っているにすぎぬ」

「つまんねえ事言うなよ」

「少なくとも、お主の愉しみの為に妾の人生と民草を浪費する積りなぞ一切ないからの」
「何処で育て方を間違つちまつたのかねえ……」

「端からじゃ、ど初つ端からじゃ。いや待て、お主などに育てられた憶えなぞないぞ」

極自然に応えてから、はたと根幹からの間違いに気付き慌てて訂正するが、大女傑はにやにやと厭らしい笑みを浮かべるだけであつた。確信的な笑みを。

「それでもお前は俺が見込んだ好敵手だけ、美羽。お前はぜつてえ俺の期待を裏切ら

ねえよ」

「ふん、お主のその下手糞な予言取りを覆す為ならば、妾の人生の幾許かを消耗しても構わぬぞ」

老成した気配を漂わせながらも未だ未熟な大器と、既に完熟しながらも尚衰えを寄せ付けぬ英器の不穏な談笑は、陽が傾くまで続いた。

第八回 南陽太守

先導に従って肅々と回廊を進む薜華は今、柄にもなく緊張していた。南陽太守府官衙かんがの中廷ちゆうていを抜け、巴郡のそれよりも大きな郡堂を横切り、最奥の便坐べんざ——太守公邸——に至り、薜華はひどく緊張していた。隣を歩くトラも、薜華の身を覆う緊張が伝染し、訳も解らず身を硬くしながら付いてきていた。

何故かは解らないが、南陽太守袁公路に招かれ、こうしてトラと二人、のこのことやって来た次第であるが、頭の中は混乱の極致であった。

何故、自分の事を知っているのか？　そして何故、自分を招こうとしているのか？

更には何故、南陽入りしたのが（より正確には宛入りしたのが）判ったのか？
分らないことだらけである。

ここまで自分達を先導して来た紀霊*129と名乗る女性は多くを語らない。ただ己が袁家部曲を率いる者である事、主袁術*130が面会を希望している事を端的に伝えてきた程度である。その姿さえ銀色に輝く重厚な鎧甲に覆われ、目深に被った兜と面頬から、顔立ちも分からない。声色で女性と知れたほどである。それでこんな所までのこのこと付いて来るのは、我ながらどうなんだろう？ 事態のあまりの突拍子さ上手く頭が働いていなかったようだ。

見れば、隣のトラも四肢が檜棒にでもなってしまったかのような有り様だ。全く以つてらしくない。だからいつものように頭を撫でて、四肢に血を通わせてやった。うにやつ？と小さく驚いて、此方を見上げてようやく相好を崩してくれた。嗚呼、この笑顔だ。この笑顔と大熊猫パンダのもふつとした白黒の毛皮さえあれば……

「大熊猫?!」

「うにやつ?!」

何時の間にか視界に入っていた大熊猫に、思わず驚きの声を上げてしまった薜華。釣られて声を上げるトラ。声こそ上げなかったものの、前を歩く紀霊も流石に驚いたよう。で此方を振り返り、次いで回廊の外から上半身を乗り出し両肘を付いてこちらを窺う

(回廊は半吹放ちになつており、腰程の高さの壁面が梁間を埋めている) 大熊猫に視線を移した。

「主の舎人しやじんが飼つておられる大熊猫です」

「撫でてでも大丈夫でしょうか？」

端的に説明した紀霊に、既に手を伸ばしながら問う薜華。内心、何を思ったか片眉を僅かに上げて、しかし即座に表情を消し、「大丈夫、だと思ひますが」と答えた。ただ、その表情の変化は誰にも見えなかつたが。

その答えを聞いた薜華が大熊猫に抱き着くのを見て、「撫でるんじゃないんだ」と漏れた紀霊のごく小さな呟きは、トラの耳にだけ届いた。

一頻り大熊猫を堪能した薜華(とトラ)は、豪華な、それでいて品良く纏められた応接間に通された。大きく間取られた窓枠に嵌つた透明度の高い琉璃を通して、目映い夏の日差しが広々とした部屋の奥に飾られた調度品までも明らかにしていた。一目見ただけで、それと知れる高級感を漂わす品々が並ぶ。しかし、そこに権勢を誇る様な驕りの気配は見えず、部屋の主の品格が見て取れた。こういった物にまるで縁のないトラ

は、物珍しそうに眺めて回っていた。不用意に触れる事もなさそうなので、させたいままにさせながら、改めて薺華はこの状況に思考を割いた。が、やはり満足な推測すら立てられなかった。

ここまで案内し、今も部屋の入りに口付近で静かに立ち尽くす鎧武者に改めて聞いても無駄であろう。宛県郊外で迎えを受けた時に聞いたが、芳しい答えは得られなかった。

余計な事はしないと言わない。直立不動を貫く紀霊の姿に、常に友の両脇に侍る剣司と秤司の姿が重なった。そう思うと、紀霊の姿が銀製の見事な犬の彫像に見えてくる。

ただ、その姿は德國狼狗ジャーマンシェパードというよりは寧ろ杜賓犬ドイベルマンに似る。艶やかな極短の毛並み、細身

でありながら引き締まった筋肉質な肢体。鎧の中の姿は見えないが、既に薺華の中では、紀霊は犬に例えるならば杜賓犬に確定していた。凛々しい杜賓紀霊を幻視し、うんと満足げに頷くのであった。

そんな薺華の内心など及びもつかず、彫像の様に佇む紀霊。トラは正に彫像と思い込んでいいのか、調度品を順繰り眺める流れのまま、紀霊を観察し始めた。それに対しても身じろぎ一つしないのは立派だが、内心困っているであろうというのは察せられた。今は洛陽に居る筈の、普段、表情変化の乏しい親友のお蔭であろう。

あ、ほら、やっぱり困ってる。紀霊と目が合い、確信を得る。兜の奥からでも良く判る程の困惑を浮かべていた。目が合ってしまったのなら仕方ない、もう少し二人の様子

を眺めていたかったが、助け舟を出そう。

「トラ、紀霊さんをあまり困らせちゃいけないよ」

「にや?」

紀霊、と諱で呼ぶ事に抵抗を憶えないでもないが、本人からは謙っているのか、姓名しか名乗られておらず、字を知らぬため致し方なかった。

一方、声を掛けられたトラはというと、一瞬、何を言っているのか?という顔をこちらに向けて、再度紀霊に向き直り、まじまじと眺めまわした後、

「にや?! ぎんぎらのねえねえ!」

「ぎんぎら?!」

「そうだよ、ぎんぎらのお姉さんを困らせないようにね」

「ぎんぎらのお姉さん?!」

「にや! ごめんにや!!」

「あ、いえ、どうかお気になさらず」

客人二人のやりとりに戸惑いながらも、トラの元氣過ぎる謝罪に何とか返事を返す鎧武者であった。

「こちらから呼び付けておいて、待たせて申し訳なかったの」

あれから更に待つこと暫し、その声を掛けながら、小柄な美少女が入室して来た。

背中まで垂らされ、毛先だけ巻毛にされた春の陽射しの様に輝く金髪に、染み一つない白磁の肌、理知を湛えた翠玉の瞳、山吹色を基調とした丸い肩の露出した袒領襦袢たんにりようじゅくわん* 131を可憐に着こなす深窓の令嬢然としたこの美少女こそ、南陽太守袁術その人である。

薜華の対面にゆるりと座り、愛らしくも威厳に満ちた声で名乗りを上げた。

「妾が南陽太守袁術である。楽にしてたもれ」

「厳寿です。本日は御招きに……」

「ああ、よいよい。無理に呼び付けたのは此方じゃ。そのような口上は不要じゃ」

「あ……、はあ」

薜華の発した定型の挨拶を、ひらひらと小さな手を振って止める南陽太守。その視線はとてとてと此方に近寄って来たトラに注がれていた。

薜華の隣に用意されていた椅子にぴよこんと座り、いつもの調子で元気良く名乗った。

「トラにゃ！……にゃ？」

そのトラの挨拶に特に反応するでもなく、じつと視線を注ぐ小さな太守に、トラが小首を傾げて疑問の声を上げた。

「いや、失礼した。トラ殿は南蛮から来られたのであったな」

「にや！ 南蛮だいおー孟獲さまのみよーだいとして漢を觀てまわつてるにや！」

そこまで一息に言つて、薜華を振り返るトラ。喜色満面、名代のくだりまで詰まらず言えたのが嬉しいのであろう。太守の面前ではあるが、薜華はゆつくりと頭を撫でてやつた。

「ふふ、仲睦まじいの。聞いておつた以上に良好な仲と見える」

「聞いていた、ですか？」

「うむ、ぬしも疑問に思つておるであらうから、先に話しておくとするかの」

そもそも発端は零陵郡での郭石との一件であつた。袁公路は元々、自称將軍の山賊区星の動向を監視していた。無論、その重要な配下の一人である郭石の足跡も追つていた。そこに營浦県令が郭石を討伐したとの報が舞い込んだ。袁術陣營の誰も信用しなかつたが、ともかく事実確認だけは為された。結果、討伐者以外の情報は事実であることが確認された。

となると、次は誰が実際に郭石を討つたのか、である。そこで追跡調査が行われ、思ひのほか簡単に割り出された。

「そんなに簡単にですか？」

「おぬしら目立つからのう。自分で気付いておらなんだか？ 異民族、それも荊州では

まず見ない南蛮人の子を連れて、行く先々で燥い^{はしゃ}でおれば嫌でも目に付くであろう？」

「いえ、はしゃいでいた訳では……」
トラが平常通りだっただけなのだ。が、それは周囲から見れば正しくはしゃぎまわっているとは映らない。

「ともあれ、それで興味が湧いての」

「そうでしたか」

「異民族の娘を供に付け旅する遊侠の士。或いは逆かも知れぬがの」

「ぎやく？」

太守の言に、トラがまたも小首を傾げた。

「トラ殿が南蛮大王の名代であるとなれば、厳寿は護衛兼案内役とも見れよう」

「なるほ、ど……」

成る程確かに、と納得する過程で薺華はある事に気付いた。いや、思い立ったといふべきか。王の名代。これは気軽に言い触らす事ではなかったのではないか。

「当然、洛陽には赴くのである？」

「……は、」

そんな薺華に袁公路が声を掛ける。見れば全てを察し、見透かしている様子であった。確かに洛陽には行く。しかしそれは友に会う為であったのだが、今や別の意味を

持つてしまつていた。いや、元々持つていたものに漸く気付いたのだ。

「姉—?」

俄かに固まつた舜華を、心配そうに見上げるトラにも碌に反応できずに黙考するが、上手く頭が働かない。妙な焦りが足元からゆっくりと、むずがる様に這い上がつてくる。

「トラ殿」

「にや?」

そこへ袁公路からトラに声が掛かった。先程から何やら自分に関する話が為されて、いる事には気付けても、その肝心の中身がいまいち見えてこないトラは、若干の不安を憶えながら自分と同じくらい小さな、しかし随分と大きく感じる南陽太守に向き直つた。

「王の名代という大役。その身に浴する榮譽は無論のこと、御身に掛かる重責もまた想像を絶する事でありましょう」

「う、うにや……?」

「恥ずかしながら、旅の途上にて現在の漢の恥部をお見せしてしまつたと聞き及んでおります。漢の臣下として、謝意を述べさせて頂きたい」

「き、気にしてないにや。あ、頭を上げてほしいにや」

慣れない、というよりも生まれて初めての扱いを受けて、しどろもどろになりながらも何とか受け応えるトラ。その焦りは、見た目、自分とさほど変わらぬ幼さでありながら、自分と大きく掛け離れた大人たじんさを見せ付ける袁公路が相手である事も大きく関係していた。

「ここ南陽より洛陽への道中は、我が袁術の名を以って安全を確約させて頂きますぞ。無論のこと、当郡に滞在の間も、どうぞ心安らかにお過ごし下され」

「う、はにゃあ」

言葉を交わす度に自分がとても小さく思えてしまい、トラはどんどん意気消沈していった。

トラは言うまでもなく薜華の事が大好きだ。その薜華が、時折見せる「大人おとなな」一面がある。畏まった物言い、偉そうな連中に堂々と対応する薜華の姿はとも格好良く見えた。トラはそんな薜華の姿にも仄かな憧れを抱いていた。いつか自分もあなれるだろうか、こつそり思い描く事もあつたりしたが、自分には縁のないものだとも理解していた。しかし……。

しかし、今、目の前にトラの理想像が在る。薜華より尚堂々とし、凜として、立派な、大人よりも大人びて見える自分と同年代の少女。

自分に語り掛ける南陽太守の姿は薜華よりも大きく見え、自分はなんだか豆粒よりも

小さくなってしまったかのように感じてしまう。心細く、足元がおぼつかない感覚に陥る。そんなトラがいま世界で一番求めるもの、温かな掌、いつも優しく自分の頭を撫でてくれる薺華の掌が、いつもよりも優しく優しくトラの頭を愛でてくれた。

「袁太守様、どうかその辺りで」

「ふふ、すまぬな。意地悪をするつもりはなかったのじゃが」

「姉え〜」

若干涙目になってしまっているトラを抱き寄せて、膝の上に座らせてやって少しだけ覆うように背後からやわく抱き締めてやる。それでやっとトラの身体から強張りが抜け、ふにやりと背を薺華に預けてきた。

対面にて微笑まし気に二人の様子を眺める袁公路が、溜め息の様に言葉を吐いた。

「それにしても、ほんにぬしら仲が良いの」

「勿論です」

「トラも姉ー大好きにや!」

トラの声に張りが戻ったのをみて、公路は徐に頭を下げた。

「トラ殿、先程の非礼、どうかご容赦下され」

「にやー、気にしてないにや」

一瞬、身を硬くしかけたトラだったが、背せな中に感じる温もりがもたらす安堵せなによって、

自然体で応える事ができた。

「とは言え、これで尻込みされてしまうようでは、矢張り心配じやの。とても皇帝陛下と謁見できるとも思えぬ」

「う、それは……」

「えっけん？」

「トラは美以の代わりに漢に来ていいるのだから、漢で一番偉い人に会うんだよ」

「だいおーのみよーだい」

「そう」

「じゃ、こーてー……へーかに芽衣さまのおみやげ渡すにや？」

「土産？」

「献上品である。まさか手ぶらで陛下の御前まみに見える訳にもいくまいて」

成る程、言われてみればそれはそうだ。いや、言われる前に気付くべき事であった。

それにしても流石は兀突骨である。元々、孟獲の思い付きで旅に出る事となったトラである。確かに孟獲の代わりに漢を見聞せよと言われたが、正式に漢への使者として派遣された訳ではない。しかし、旅の途上で南蛮大王の名代であると折に触れて名乗っていたのでは、周囲はトラを南蛮の使者と見るだろう。その幼さと言動の自由闊達さから本気に取られる事は少なかったが、それでも事実として残る。知らず既成事実を積み上

げ、洛陽への道筋を築き上げていたのだ。迂闊な自分に溜め息が出そうになる。

兀突骨はこのような事態になる事もある程度は予見していたのだろう。トラに大切なお土産と言いつつ含めて、献上品として通用する品を持たせていた。

「それにしても流石、芽衣。助かった」

「話に出ておるその御仁は？」

「兀突骨と申しまして、南蛮大王の後見人です」

「兀突骨……。確か、若年でありながら先王の代からの重鎮であったな。領国を一つ任されるほどであるとか」

「よくぞ存じで」

彝華の感嘆に、にやりと笑みで返すに止め、この迂闊な南蛮使者達に確認作業を続けた。

「それで、肝心の品じゃが」

「あ、トラの、というか荷物は全部馬に括つてあります」

「ならば、客間に運ばれておろう。後で確認に行くとしようかの」

「にや」

トラの荷物はそれほど多くはなかったが、まさかそのような貴重品を積んでいたとは……。乱雑な扱いはしていないが、まさか破損などはしていないだろうか？ 俄かに気

になりだし、そわそわし出すのを必死に抑える薜華に、袁公路は気にもせず先を続けた。「ところで、先触れは出ておるのかや？」

「……どうでしょう？ 芽衣が献上品まで気を回していたのなら、いやでも」

「妾の方で確認しておこう。先使いが出ていないようであれば、南陽より使者を出してもおこう」

「お手数お掛けします」

「ありがとうございます」

「それと」

深々と頭を下げる二人。手間の掛かる二人の頭頂を、取り分けトラを眺めながら、ふむ、と一息。

「良ければ、トラ殿に謁見の際の手順礼節の類を教授してせんじようかの」

「！ よろしくお願いするにや!!」

「う、うむ、それでは……」

「お嬢様、そろそろ宜しいでしょうか？」

思つてもみなかつたトラの勢いに、少々驚きながら今後の予定を詰めようとしたところ、部屋の外から声が掛かった。

「む、七乃ななのかや。もうそんな時間かえ？」

「はいー、そろそろお仕事に戻ってくださいますよう」

「うむ、すぐに向かう故、七乃は先に戻っておれ」

「はいー」

「ふむ、では続きは今夜にでも詰めようかの。夕餉も共にしようぞ」

「はい、お手数お掛けします」

「ありがとですにゃー！」

「よいよい、それでは後での」

微妙に変わったトラの言葉遣いに、何とも微笑ましいものを愛でる柔らかな笑みを浮かべて応じる袁公路。その視線が己が配下に向いた時には、既に賢能な太守の顔になっていた。

「しよ……」

「美羽様っ！」

「……はあ、紀霊よ、後は任すぞえ」

「はっ」

「それではこれで失礼する。何かあれば紀霊に申し付けてたも」

「にゃー」

袁太守が入室以来、より完璧な彫像と化していた紀霊が直立不動のまま鋭い返事を発

した。ただ、直前の不可解な遣り取りに心の中で首を傾げながら薺華は袁太守を見送った。

「ねー、美羽ー。誰が来たのー」

袁術——美羽が郡堂を目指し回廊を進んでいると、向かう先から半吹き放ちの回廊壁面上に腰掛けた褐色の少女が声を掛けてきた。

健康的な小麦色の肌、猫のような好奇心を映す真空色の瞳、桃色に輝く髪を非常に大きく特徴的な唐子鬚からこまげに結び上げ、余り肌を露出しない美羽とは対照的に活動的な桜色の短衣に身を包んだ美少女。美羽とはまた違った魅力を湛えた孫尚香そんしょうこう*132の問い掛けに、歩を緩める事無く通り過ぎざま答えた。

「客じゃ。厳寿と言うての」

「げんじゅ?」

軽やかに回廊に降り立ち、美羽に付いて来ながら先を促す孫尚香。

「長沙に区星がおるじゃろう?」

「うん、そいつ頂戴」

「いや、いきなり何を言うておるのじゃ」

「人材として欲しいんじやないよ。首級くびが欲しいの、首級が」

「……全く、孫家の女というのは」

げんなりとする美羽に、尚香は可愛らしく頬を膨らませて抗議してきた。

「なによー、だつてシャオだけ初陣もまだなのよ！ おかしくない?!」

「あれもああ見えて子育てに関しては何々と考えておるのじやろう」

「むー」

「まあ、考えておこう。どの道、郡として兵を出す訳にもいかぬしの」

「ほんと！ もー、だから美羽って好き!!」

満面の笑みで飛び付くように抱き着いて来た尚香に、「確約はせぬからの」と釘だけは刺しておいた。

「それで、その敵寿?と区星がどう繋がるの?」

「うむ、その敵寿がな、区星の配下の一人を、率いる軍勢諸共討ち取ったのじや」

「へえ、やるじやない」

「それになにやら面白そうな人物であつたからの、興味が湧いて足労願つたという訳じゃ」

「変な奴なんだ」

「何故そうなる？」

「だって、美羽の集める人材って皆そうじゃない。張勳とか紀霊とか……」

「妾の周りに居るのはあやつ等ばかりではなからう」

「否定しなかつたねー」

「嚴寿は一見すればただ生真面目なだけの武人なのじゃが……」

尚香の突っ込みも軽やかに無視して話を続ける美羽であった。

袁公路が辞して暫し、薜華達も応接間を後にして、紀霊先導の元、今夜（から）世話になる客間へと足を運んでいた。済し崩し的に逗留する事になったが、先方はもとよりその積りであったのだろう、紀霊からはお気になさらずとの言葉を戴いた。

「……白虎だ」

そして、来た時とは別の回廊を進んでいた薜華が目にしたのは、矢張り白黒の毛並みを誇る獣であった。大熊猫と白虎、なんだろう、ひどく憶えがある気がする。

「あれも舎人の飼っておられる獣です」

「その舎人とは、どういった方なのか窺っても宜しいでしょうか？」

「はい、揚州刺史孫文台*133殿の御息女で孫尚香という方です」

「江東の虎……」

「ご存知でしたか、益州にまで名が轟いているのですね」

「ええ、一度ばかり孫刺史に追い散らされて、益州まで逃げ落ちてきた匪賊を討伐した事がありました」

「それは、孫文台殿からそこまで逃げ延びた賊共を褒めてやるべきでしょうか」

「ははは、それはいい。そうしてやれば良かったですね」

「？」

「この人、冗談とか言うんだな。と思いつつながら笑つて応じると、不思議そうな視線を感じ、はたと止まった。何か面白い事でもあったのだろうか？　と言わんばかりの空気を感じる。くそう、天然か。少し頬を紅潮させながら、咳払いで誤魔化して話題を転換した。

「ところで、御厄介ついでにお願いしたい事があるのですが」

「はい、何なりと」

「黄忠*134という方をご存じありませんか？　元は長沙に仕官しておられたのですが、最近になって故郷の南陽に戻つたと聞き及びまして」

「黄県令ですか？　御知り合いましたか」

「県令？　紫苑小母様がこの宛県の県令？」

「はい。正確には守県令ですが、美羽様が先頃中央に上表しましたので、直に正式に任官されるかと」

出立直前に母から「紫苑の奴、長沙の官を捨て故郷に戻ったと手紙を寄越してきおつた。どうせなら此方まで来れば良いとは思わんか？」と酒の席で軽く話題に出された時には、そう遠くない内に巴郡へ渡ってくるだろうと呑気に考えていた。故郷へは一時の羽休めであろうと。しかし実際には仮とは言え袁公路の御膝元で県令を務めているという。

本来、郡県の長官は朝廷が任命するのだが、刺史や太守が令や尉の官を仮に任命する守官というものが度々あった。故郷巴郡でも江州県令の黄公衡は、元は嚴太守が守った守県令であり、後に中央に上表する事で正式に県令として認められて印綬を授かった。

黄漢升は南陽郡宛県の守県令である。任命したのは当然、袁公路であろう。素直に読み解けば、黄漢升は袁公路の配下となったのである。

「連絡を入れておきましようか？」

「お願います」

半ば呆然としながらも、紀霊の言葉に反射的に応じていた。

ゲームとは違う。当たり前だ。考えるまでもない事柄だ。だが、実際にはどうだ、

たったこれだけの事で戸惑っている。

黄漢升とは幼児の頃に会っている。その時分には以前に強く引つ張られていた為、随分と緊張していた憶えがある。その時の印象は、イメージ通りだった。イメージ。そう、これが厄介だ。普段は意識に上る事もなくなつたが、決して忘れた訳ではなかつたのだ。今もまだ頭の中にこびり付いている。指先まで力を込めて擦つても、或いは細部にまで目を光らせ丹念に磨いても、尚落ちない古い油污れのように無意識の領域にへばり付いている、イメージ。

袁公路等も随分とイメージとかけ離れている。しかし、党舅父いとこおじから予め聞いていた為か、割とすんなりと対応できた。

孟獲は脇に一人増えていたが、母の周囲にだつて恋姫未登場の歴史上人物はわんさか居るし、本人は大してズレはなかつた。

黄漢升も人物像はイメージ通りだ。だが、立ち位置が大きくズレている。恋姫とだけではなく、演義とも、正史ともかけ離れている。幼少の頃に得たイメージと実像の合致が、たったこれだけの違いに対して、意識の足を引つ張つたのだろうか。

たったそれだけの事で固まるな厳慶祝。しっかりしろ。お前は今を生きる厳顯義の娘なのだぞ。今でない時の事などに今更引つ張られてなんになる。

「……根が深いんだな」

「何か仰いましたか？」

「いえ、何でもありません」

自分の中にあるモノは、自分で思っていた以上に大きくとぐろを巻いていた。今はそれに気付けただけ良しとしよう。とは言え、これから先、より多くの人と出会うだろう。見知らぬ知っている人物とも、そうでない人物とも、一々狼狽えてはられない。気をしっかりと持たなければ。

「ねえ、貴女が美羽の言ってた厳寿？」

快活な少女の声に振り向けば、特徴的な髪型の美少女がそこに居た。

「……畳み掛けるなあ」

「？ なあに？」

「いえ、失礼。何でもありません。確かに私が厳寿です。字を慶祝と申します」

「そ、シャオは孫尚香よ。字はまだつけてないから、尚香でいいわ」

「そうですか、貴女が」

「あら、シャオの事、聞いてたの？」

「はい、あそこに寝そべっている見事な白虎と、大熊猫の……」

と、白虎の方へ視線を向けると、そこには虎に跨るトラの元気な姿が……。

「ちよつと、シヤオの周々しゅうしゅうになに勝手に乗つてるのよ!!」

「にや?」

「申し訳ありません。駄目でしたか」

「紀霊いゝ」

反射的に声を上げた孫尚香に、努めて冷静に謝罪してくる紀霊。頬を膨らませながら不満を表す少女に重ねて愚直に謝罪すると、気が抜けたように鞆を収めた。

「申し訳ありません」

「はあ、もういいけど」

「ほらトラ、降りて」

「にや、ごめんだにや」

「いいわ、周々が背を許したんだし。シヤオも怒鳴ったりして、淑女として相応しい振る舞いじゃなかったしね」

トラの謝罪に鷹揚に応える孫尚香の姿に、感情の切り替えはやいなあ、と感心しながら眺めていると、改めて此方を振り返つて来た。その瞳に宿る輝きに、若干嫌な予感を憶える。悪戯に無上の喜びを感じる猫のような瞳だ。

「それに蚤ぞ……嘘、嘘、何でもない、だからその物騒な殺気をしまつて!」

「尚香殿、おかしな試し方をしないで下さい」

「はい、ご免なさい」

やれやれ、受けた印象通りの困った性質の御仁のようだ。素直に頭を下げてはいるが、実際にどれ程反省しているだろうか怪しい所である。

「それにしても、確かに面白いかもね」

「なにがです？」

「美羽からいろいろ聞いたの、貴女の事」

「色々、ですか」

色々と話す時間など無かったのだが、先程の会見はトラ絡みの事が殆どだった。と言う事は、袁太守が自分の事を知ったのは郭石討伐よりも前？ 将軍府にて臨時任官を受けたりなどはしたが、正式に仕官していた訳でもない小娘の事まで知っているのだ。母の事はどれ程知っている？ 益州の事情については？ 何故、益州の事に関心を寄せているのだろうか？ 考え始めると切りがない。

そして、既に猫の瞳を取り戻して此方を見詰める孫家の末娘にも溜め息が出た。

「七乃や」

「なんですー？ 美羽様」

「ぬしは嚴寿をどう見る？」

執務室にて、木簡の山に埋もれるようにして仕事を熟しながら、美羽は脇に据えられたもう一組の机で齧り付くように木簡を捌く腹心へと不意に問い掛けた。問われた女性には困ったような笑顔を浮かべながら、気軽に主へと答えた。

女性の名は張勳ちやうくん*135、字を功路こうろ*136、真名を七乃という美羽の懐刀である。短めに清潔に纏められた紺青色の髪、奥までよく覗けば偏狂な輝きを灯す紫紺の瞳、緩く、且つ何を想っているのか不明な笑みを象る唇、何処か胡乱気な印象を与える女。主の為だけに存在し、それ以外はいつでもいい女である。

「えーっと、私、まだ嚴寿さんとお会いしてないんですけどー？」

「じゃが嚴寿と僅かにでも接した者達から話を聞き集めておろう？」

「そうですねー、大体は真面目な人柄っていうどうでもいい感想でしたけど、徐庶さんという人から美羽様好みのお話が聞きましたよー」

郭石討伐の報を受けて、現地にまで飛んで調査を行ったのは、美羽の片腕であるこの張功路であった。そこで嚴慶祝の存在を知り、南陽への帰路を急ぐ中、可能な限り慶祝の情報を集めたのである。トラを伴う慶祝の発見は難しくなく、その後の追跡は容易だった。

「郭石を討つた場に元々居合わせていた水鏡女学院卒業生であったな」

「はい。その郭石討伐では、厳寿さん矢鱈と強かつたらしいですが、その割に『武人としての我』をほとんど感じなかったそうです」

「『武人としての我』？」

「徐庶さんが厳寿さんに授けた策は排泄物を利用したものだつたそうなんです」

「排泄……？」

「嫌ですよー？ そんなもの戦場にばら撒くなんて。只でさえ、武に自信を持つ人つて策を軽視しがちなのに。そんなばつちくてせこい事しなくても我が武があればよく、つてなるじやないですか」

「流石の薔薇花しょうびかも躊躇するであろうな」

「ですよー。でも厳寿さん、全く異論も唱えずその策を実行したそうですよ」

「ほう、郭石の首級を営浦県令にくれてやったとは聞いておつたが」

異民族に対して礼を尽くしたり、敬意を払って接する能吏の話は時折聞くものだ。しかし政治的な思惑もなく家族の様に愛する者の話は聞いた事が無かつた。更には一騎当千と目される武勇を誇りながら、武人としての我も感じさせぬという。漢人としても、武人としても一風変わっていると云える。

「矢張り面白い奴じやの」

「……美羽様、厳寿さんの事欲しくなりましたか？」

「うむ、欲しいの」

「段々、孫堅さんに似てきましたねー」

「不吉な事を言うでない！」

「でもでもー、余り強い人掻き集めちゃうと、孫堅さんが乗り乗りで攻めて来ちゃうかもしれないよ？」

「そうならぬように、あれこれ手を打っておるのじゃ。しかし、もしもの事態はあるものである？、これは転ばぬ先の槍というやつじゃ」

「厳寿さんの得物は薙刀ですけどねー」

「そこはこだわる所ではなからう?!」

「何にせよ、靡かないと思いますよ？」

「ああ、母離れ出来ておらんらしいの。孝心高いのは美德の一つではあるが、行き過ぎれば何事も欠点となる」

「孫堅さんをはじめ、美羽様の周囲には行き過ぎた人が多いですからねー」

「お主の忠もな」

「いやですよー、美羽様ったら。まだまだ足りないくらいなんですからー」

「何処に行き着く気なのじゃ、お主は」

ちくりと刺した釘にさらりと笑顔で返され、げんなりとしながら先の友の言葉を思い起こす美羽であった。

第八回——了——

「用意しておいてよかったにいい」

遙か南陽から届いた急ぎの手紙に目を通し、そう独り言ちるのは南蛮新王の後見人である長身の女傑であった。

兀突骨——芽衣は、慶祝の予定の中に洛陽行きが含まれていると聞いた時から、こうなる事を予想していた。トラが一人で言い触らす分には問題なかったかもしれない。しかし、慶祝が共に居ると状況が変わってくる。彼女は目に留まる存在だ。乱れた地にて有為の人材を求める立場ある者達からすれば、食指の伸びる存在であろう。その武は即戦力として望ましく、その生まれから官吏への対応も淀みなく熟せる。のみならず、異民族を蹴散らす事も、懐柔する事も出来る。多少欠点があつたとしても軽く無視できただけのものを持っている。

その敵慶祝が南蛮大王の名代を自称するトラを大切に扱っているのだ。トラにも衆目の目が留まるのは自明だと芽衣は考えた。だから、トラに渡した荷物の中に目録と宝物を忍ばせておいた。

洛陽へ至る前に余裕をもつて気付ければ、こうして目録の品々を送り届ける事が出来る。直前にやつと気付いた場合でも、最低限体裁を整えられるだけの宝物を忍ばせておいたが、どうやらより良い方向へと行けそうだ。

「漢の都、楽しみだにいい」

そも、初めから慶祝に口添えしておけば良かったものをこのような手段を取ったのは、献上品運搬と先触れの使者として自身が洛陽へ赴く口実を得る為であった。

南蛮大王後見人兀突骨。

ちよつと羽を伸ばしたいお年頃であった。

第九回 黄家母子

麗らかな夏の午後。冷夏ゆえか肌を灼く熱量はなく、ぽかぽかと暖かな陽射しが便坐べんざの中庭を柔らかく、それでいて鮮やかに照らす。

庭に据えられた涼亭りょうていの長椅子には、日光の布団に包まれて寝そべる少女が一人。小さな膝枕の主に頭を撫でられながら、心地良く夢と現を揺蕩くつている。幼い頃にも良く母の膝枕でこうして午睡を堪能していたが、さすがに最近はその事もなくなっていた。

少女の名は嚴寿。字を慶祝、真名を薺華という。

遠く故郷の益州巴郡を夢に見て、今は南陽太守袁公路の元で、小さな同行者と共に客として迎えられている。元は長逗留する積りもなかったのだが、諸事情あつて夏も（冷夏なりに）盛りのこの時分まで、こうしてのんびりと過ごす事となっていた。

「……………ん、母上」

「はい、おかーさんですよー」

「ん、……………んん？」

微かな、いや、微かどころではない違和感に微睡みから這い上がると、そこは現実でした。そう、ここは荊州南陽郡。故郷の益州巴郡では、ない。なんだかひどく懐かしい

夢を見ていたような朧気な感覚が急速に遠退いていく。それと共に意識も体も目を覚ましていく。こんな昼日中に惰眠を貪るなんていつ以来だろう？ 既に天穹よりも彼方へと去った夢の頃以来か。思いながら目を開く。見上げれば愛らしい幼女の笑顔。嗚呼、自分もこの娘と同じ年の頃、あの夢の中の頃はこうして良く母上に膝枕してもらって、膝枕？

「うわあっ!？」

「きゃっ!」

漸く自分の現状を完全に把握した薺華は急いで幼女の膝から退こうとして、長椅子からずり落ちた。

無様な音を立てて転んだ薺華だが、特に怪我などはない。例えあつたとしても、今はそんな事などよりも重要な事があつた。

「大丈夫？ 璃々ちゃん。重かったでしょ」

「だいじょうぶだよ」

「そう？ それならいいんだけど。……それで、そう、うん……あ、あのね？」

「なあにー？」

「うん、そのう……」

歯切れの悪い薺華に、にこにここと首を傾げながら続く言葉を待つ璃々と呼ばれた幼

女。名を黄叙といい、宛県県令黄忠の一人娘である。母譲りの鮮やかな藤紫の髪を左右で結び、汚れを知らぬ露草色に輝く瞳は愛らしさを湛えている。

今年で四つになったという、こんな愛らしい幼児に、いやまさか、夢現だったとはいえまさかそんな事を口走るわけがない。でも一応確認しておかないと、落ち着かない。そう、落ち着け、落ち着いてちよつと確認してみるだけだ。

「私、その、何も言つてないよね？ 寝言というかその……」

「うふふ、おかあさんですよー」

「ぬおおおおおっ!?!」

「きやつー!」

あまりの羞恥に思わず叫んでしまった薺華を誰が咎められよう。半分以上夢の中だったとはいえ、大分年下の幼児に包容力という名の母性を感じたのだと気付いてしまったのだ。それ故にまろび出た無意識の使者『母上』という寝言。薺華、まさかの完全敗北の瞬間であった。

「そう、桔梗がそんな事を」

「はい、焰耶姐の事もありましたし、紫苑さんも何かあれば自分を頼って欲しかったのだと思います」

「そうね、私も初めはそのつもりだったのだけれど、やっぱり益州は遠いじゃない？ だから、あの人の墓参りも中々出来なくなるだろうし、それで一度故郷に戻ってよく考えようと思ったのよ」

午後半ばを過ぎようとする頃、黄叙を県令公邸に送り届けた薜華は、折良く早目に仕事の捌けた黄漢升と茶を囲んでいた。

やや硬質な生真面目さを窺わせる部屋の内装は、恐らく前任者の調度であろう。薜華の対面に座る女性にはそれほど調和しているとさえ言えないが、部屋の空気に堅苦しさを感ぜないのは、そこかしこに飾られた拙いながらもほんのりと暖かな画や書のお蔭だろう。この幼い力作達が、ともすれば息苦しさを覚えそうになる客間の空気の中に、ただ眺めているだけで自然と頬が緩む景色を創り出していた。

これら偉大な書画の作者は今、薜華の膝の上でにこにこことご機嫌な様子で茶菓子を頬張っている。

薜華の膝上は、最近の黄叙のお気に入りであり、トラとの熾烈な領土争いの的でも

あった。その抗争相手のトラも今ここには居ない。存分に堪能できるのだ、ご機嫌も鰻上りである。

「そんな時にね、美羽様にお声を掛けて頂いたのよ。それも、直接ご本人から」

「そうでしたか。それにしても、ご本人自ら勧誘に来られたとは、公路殿の本気具合が判りますね」

「あの時は突然の訪問だったから、正直かなり驚いたわ。でも、とても真摯に誘って頂いてね。それに、此方の事情も御存じだったみたい」

話を聞いていると、袁公路の手は随分と長いようだと感じる。長沙郡を出走した黄漢升の動向を、それも内情までもしつかりと把握した上での行動。今も睨み合う荊州牧と長沙太守を注視しているのならば、黄漢升の事は把握できもおかしくはないのだろう。しかし、益州の一太守の娘や、南蛮の幹部の事まで知っているのだ。党舅父いとこおじは能吏が少ないと言っていた。袁太守の元を訪れたその日の晚餐の席で紹介された腹心と呼べるほどの郡官吏は、確かにそう多くはなかった。しかし、私兵に紀霊が居るように、表に出てきていない能臣が他に居てもおかしくはないだろう。

「流石にその場では決められなかったけれど、遠く益州への道中にも何があるかわからないし、袁家の傘下に入ればこの子にとっても安心だと思つてね」

「張羨はそれほど紫苑さんに執着しているのですか？」

「張羨は何処まで私を狙ってくるか判らないけれど、寧ろ韓玄かんげん*137の方が執念深いわね」

「ええつと、確か前太守韓玄との繋がり張羨に疑われて出奔なさったんでしたよね？」
「ええ、そうよ。全く、私と韓玄の不仲を知っていた筈なのにね」

漢升が官を捨てたその理由、それは現長沙太守張羨の疑心にあつた。漢升は劉表と繋がり深い前太守韓玄の代から長沙で郡兵を取り纏めていた。州牧と睨み合っている今、軍の掌握は平時より尚重大事であり、州との軍事衝突に公然と反対する黄漢升は頭痛の種であつた。そこへ、誰が口を差し挟んだものか、韓玄を通じて劉表と繋がっているのではなどと疑われたのだ。張羨は決して無能な男ではないが、こと劉表が絡むと平静を喪う嫌いがある。

しかし、これは漢升からすれば堪ったものではなかつた。ただ疑われるだけではない。よりによつて韓玄との関係を疑われたのである。

「本当、有り得ないわ」

「前太守とも折り合い悪かつたんですね」

意外な面持ちでそう零す。温厚で人当たりが良く、凡そ人といがみ合う心象からは遠い人物であるが、だからこそ妬み、忌み嫌う輩も居るものかも。と、心の中で納得していると、漢升から義姉の話題を振られた。

「焰耶ちゃんの事は知っているのよね？」

「それは……、焰耶姐の出奔の事ですか？ 正直、詳しくは知らないですよ。我が家に来た当初、ちよつと焰耶姐の繊細な部分に触れてしまった事もあつて聞き辛かつたというか」

「それって、彼女の髪の話かしら？」

「はい。私は格好良いと思つてゐるんですが、本人は気にしてゐるようで……つて、紫苑さん？」

何故かあつげにとられた後、くすくすと笑いだした漢升に、何か可笑しな事を言つただろうか？ と問い掛けると、そこから先は聞き逃せない事実を告げられた。

「焰耶ちゃん、吃驚したでしょうね」

「はあ」

どうやら義姉の髪には何やら曰くがあるらしい。が、その中身が良く判らない。珍しくはあるが……、と不意に漢升が襟を正して此方を見据えた。

「そうね、薺華ちゃんなら知つておいてもいいでしょうね。 璃々、少し大事なお話があるからお庭で遊んでらっしゃい」

「はい」

返事は元氣良く、しかし少々名残惜しそうに薺華の膝から降りて「またあとでね、薺

「華おねーちゃん！」と笑顔で退室していく黄叙に、手を振りながら笑顔で応え、改めて漢升に向き直った。

微笑ましく二人の遣り取りを見守っていた漢升も、愛娘が部屋を出ていくのを見送ると此方に向き直り、話を続けた。

「あの娘のあの髪こそが、彼女が長沙に居られなくなった理由なのよ」

「どういう事ですか？」

「当時の長沙太守韓玄は、漢への忠心高く、その点では評判の高い男だったわ。でも、そこが行き過ぎて偏屈な人物でもあった」

当初から韓玄は魏文長の事が気に入らない様子であった。当時、誰もがその事に首を傾げていたが、特に実害がある訳でもなく、文長側からも馬の合わない上役位の認識であった為、それほど問題視されてはいなかった。

ある時、武陵郡澧水流域れいすいから洞庭湖どうていこを越えて澧中蛮れいちゅうばんが長沙を寇した。これに呼応する形で長沙蛮も叛乱を起こし、長沙郡は上へ下への大騒ぎとなった。

太守韓玄自ら兵を率いて鎮圧に乗り出したが、乱の勢いは衰えず長期化した。

「当時、私は長沙蛮に占拠された益陽えきやうけん県の奪還を、焰耶ちゃんは韓玄に従ってさらに北上し澧中蛮に対応していたわ。最も、焰耶ちゃんは実際には殆ど用いられなかったそうよ」

「何故です？ それ程の大乱ならば、日頃の不仲など捨て置いて武勇優れた焰耶姐を前線に出すべきでしょう」

「私もその場に居なくて又聞きなのだけれど、韓玄は徹底して焰耶ちゃんを信用してなかったようね。それも最初から」

「最初、から？ それは、仕官した時からという事ですか？」

「ええ。痺れを切らして食って掛かった焰耶ちゃんに韓玄はこう言ったそうよ『反髪 of 相など戦に出せるか』と」

「……………なんです？ それ」

「髪色が二色に分かれていますのは二心ある表れ、だそうよ。焰耶ちゃん、その場で韓玄を……………って、薙華ちゃん？ どうしたの？」

話の途中でガタンツと荒々しく立ち上がった薙華に、漢升は訝し気に問うた。

「いえ、ちよつと南郡に」

「待って、落ち着いて薙華ちゃん」

「大丈夫です、落ち着いていますし私は冷静です。何も劉表と事を構える訳ではありません。ただ、韓玄の首を落として来るだけですから」

「駄目よ、全然冷静じゃないわ。とにかく落ち着いて、平静になって」

何とか薙華を宥め賺して再び席に着かせると、溜息を吐いてぼやいた。

「桔梗でもここまで切れ易くはなかったわよ」

「う……、すみません」

母の名を出されて項垂れる少女の姿に、今度はくすりと笑みが漏れた。漢升は目の前の娘の幼い頃しか知らないが、その当ても母である親友に非常にべつたりであった。

初夏のある日、袁公路に母子共々晩餐に招かれ、太守公邸に赴いたあの晩、薜華が袁公路の元を訪れたその日の晩餐の席で、若き日の親友に再会した時は非常に驚いたものだ。すぐにそれが成長した親友の娘であると気付いたが、その時は随分と立派に成長したと思っていたが、根っここのところは

「変わらないのねえ」

現在の君主袁公路はこの事に関して、孝心高過ぎて美德が即ち欠点ともなっておる、と評していたが、それでも好いのではないかと、照れ臭そうにしている少女を眺めながら漢升は感じていた。

「でも、私の呼び名は変わってしまっていたわね」

「う、いや、あれはその」

あの再会の席での薜華の第一声は「紫苑小母様！」であった。在りし日は「紫苑お姉さん」だった。時の流れとは斯くも無常であるが、それを認めぬ黄漢升は笑顔で「紫苑さん」と改めさせたのだった。生まれて初めて笑顔に恐怖を覚えた薜華は、あの時の寒

気を思い出し言葉を詰まらせた。

その後、大幅にずれた話の流れを修正し、義姉が巴郡に來た理由と、漢升が官を捨てた訳を知った。

魏文長は、韓玄の言葉を聞くと反射的に殴り倒した。そして、氣絶した韓玄を捨て置いて一隊を率いて出陣。あつという間に澧中蛮を蹴散らし洞庭湖の向こう岸まで押し返したのだった。そして、返す刀で益陽まで進軍、怒濤の勢いで急襲して來た魏延隊の攻勢に、長沙蛮は大した交戦もなく退いた。

こうして、乱は治まった。収まらなかつたのは韓玄である。意識を取り戻した時には澧中蛮は退却しており、制止する間もなく長沙蛮征伐にまで向かわれ、慌てて追いかけるも、追いついた時にはやはり長沙蛮も退いた後だつた。面目は丸潰れ、喝采を浴びるのは理不尽な（当人はそう思っていないが）理由で遠ざけていた反髮者。

蛮族を蹴散らした英雄に与えられた褒賞は、太守暴行の罪科だつた。

流石にこれには反発する者が多く、太守韓玄の評判は地に落ちた。それでも決曹掾*けつそうえん 138を引き連れて文長を獄に繋ごうとしたが、その動きを察知していた漢升が親友への手紙と共に文長を逃がしたのだつた。

「それで今度は紫苑さんに鉾先が向いた訳ですか」

「そういう事。最も、私が焰耶ちゃんを逃がしたという確たる証拠は無かつたから、公然

と罰せられる事はなかつたけれどね」

それでも、何かと有形無形の嫌がらせが続いたが、文長捕縛未遂を契機に評価を谷底に投げ捨て続けた為、程無く韓玄は罷免された。しかし、能力は決して低い男ではなかつたので、劉表に拾われその幕下に加わつた

そして、そこまでの事があつたにも拘らず、現太守張羨は漢升と韓玄の繋がりを疑つたのである。憤懣と呆れで言葉もなかつた。

一連の話を聞き終わり、薜華が最初に発した言葉は、

「矢張り、韓玄の首を落としましょう」

「どうしてそう直ぐに首を落としたがるの」

「ちよつと待つて下さい。私は何も好きで首を落としたがつてゐる訳ではありません」

「そうなの？」

「ただ、後顧の憂いを断つには首を断つのが最善だと愚考しただけで……」

「愚考……、そう、愚考ね」

「あ、あれ？」

漢升の反応に焦りを覚える薜華。冷静に鑑みてみれば、確かに自身の言動はまるで危険人物のそれである。身内を害する者に対する容赦の無さが浮き彫りになつた形だが、故郷に居た頃はそのような不埒者に遭遇したことなど無かつた為、薜華自身も知らな

かつた己の一面に、今更ながらに戸惑いを覚えるに至つた。

そんな薺華を、少々危うげに見詰める漢升。この娘には、普段は億尾にも見せぬこの激情を抑えられる者が必要だと感じていた。薺華とは別の側面を見られる者が良いだろう。となれば智の道を往く者。生憎と自分には当てがないが、これから先も続く目の前の少女の旅路で、そのような者と出会える事を心中で静かに祈つた。

「姉ー!!」

「おかーさん!!」

二人の話が一段落着いたところで、愛らしい闖入者達が客間に文字通り飛び込んで来た。

袁公路の元で宮廷作法を訓練されていたトラが慶祝目掛けて、その後を追って慌てて黄叙が母の元へ走り寄る。

「トラ、今日はもういいのか? お疲れ様」

「にゃー」

トラが慶祝に抱き着いて労ってもらおう。

「おかーさんー！」

「あらあら、璃々つたら」

そして、黄叙は母にしがみ付く。奪われないように、母の愛を一身に受け取る為に。

そんな娘の様子に、もう少し娘との時間を取ろうと思ひ、優しく抱き上げてやりながらあやす黄忠——紫苑。

「おかあさん」

「うふふ。はい、おかあさんですよ」

何故かぐらりと少し傾いだ慶祝に、にや？ と不思議がるトラをそつと見詰める。

娘がここまで自身を求める原因となつた南蛮の少女との出会いは、薜華との再会の席でのことだつた。

一頻り慶祝との再会を懐かしんで、視線を南蛮の少女に移すと、妙にもじもじしていた。どうかしたのか声を掛けようとしたその時、此方を「はは」と呼んで我慢できないという風に抱き着いて来たのだ。それを隣で見ていた娘は、暫し呆然とした後、はつと気付く「だめー！」と叫びながらトラを両手で押し退けたのだつた。

以来、二人は不倶戴天の敵同士という訳である。困つたものだ、慶祝と共に苦笑しながら見守っている次第である。娘が慶祝に懐いている何割かはトラへの対抗心もあるのだろう。よく彼女の膝上を巡つて火花を散らしたりなどしている。

そのトラも今は慶祝に夢中で此方には見向きもしない。娘の此度の心配は杞憂だったが、しつかりと抱き締めてやる。

そも、何故トラが自分を母と呼んだのか？ それは南蛮の習俗に関わる問題だった。

南蛮では誰が誰の子であるかは重要視されないらしい。出産経験のある女性は基本的に子供達皆の母として扱われるのだとか。皆で産み、皆で育てる。誰もが母であり、誰もが兄弟姉妹である。このような育児方を確立する為、長きに亘り同時期に子作りに励み、同時期に一斉に子を産む周期を代々繰り返してきた結果、発情期と呼べる体質を得るに至ったのだという話だ。

更に、トラは同年代の孟獲が大王に戴冠した事で、矢張り同世代の子等と共に新都へと移住し、親世代と離れて暮らしていたらしい。母が恋しくなるのも当然と言えた。

とは言え、黄叙には全く関係ない話である。自身の母が、唯一無二のおかあさんが、いきなり見知らぬ年上の少女に母と呼ばれるなどあり得ない事だった。母の娘は自分只一人なのだから。正に青天の霹靂。ここに、馬爾濟斯マルチスと茶虎猫（慶祝談）の仁義なき戦いが勃発したのだった。

慶祝の膝上でのおしくらまんじゅう、おやつのお早食い競争、字の書き取り、かけっこ、お手玉等々、何でも対抗し合うが、根っここのところでは何だかんだ楽しそうにしているので心配はしていないが。

このようにして、二人の間には奇妙な友情が芽生えていたのだった。後日、トラが荊州を離れる日には、二人抱き合いながら再会を誓う姿があった。

「今日は早かったね」

「にや！ 美羽にきゅーだい点を貰ったにや」

「凄いじゃないか！」

「にや〜」

しかも袁公路に真名を許されている。薜華自身は、執務外でまで官名で呼ばれるのは堅苦しいと言われ字で呼んでいるに留まっている。

トラは本当に凄い。対して、自分はここ最近腑抜けている。今日なども、昼日中から惰眠を貪るなど、巴郡に居た頃はなかった事だ。況してや、トラよりも年少の子に向かつて、……いや、もうよそう。

「後は芽衣の到着を待つて洛陽入りか」

「にや。それまでにより完ぺきしておくにや！」

「ふふ、その意気だ」

そう、洛陽へ行く日は近い。自分も何時までも弛んではいられないと、薜華は一人密かに気合いを入れ直した。

「そろそろ戻って来る頃だと思っていたわ、慶祝！」

「尚香……」

漢升の元を辞し、郡府官衙かんがに戻って来ると、中庭である中廷ちゆうていの半ば程で孫尚香が立ちはだかった。

随分と張り切った様子（いつもこうだ）の尚香に対し、少々疲れた様子の薜華。出会ったその日に手合せして以来、幾度となく繰り返されてきた光景だ。どういう気に入りられ方をしたのか、度々、それもあの手この手で挑みかかってくる。しかし、ここ最近は挑まれる事もなくゆるゆるとした日々を送っていた。久し振りの襲撃である。いや待て、今日は随分と堂々と正面から来たものだ。非常にらしくないと感じた薜華は、振り返りもせずに背後からの一撃を後ろ手に掴んで防いだ。

「あゝ」

背後からの焦っているにもかかわらず、何処か間延びした声には反応せず、即座に跳

び掛かつて来た尚香に今し方得たばかりの得物を振るつた。本来の持ち主と共に。

「あゝ!？」

「うええっ!？」

矢張り間延びした声で連節棍打撃部の穀物と化した軍師が尚香に頭上から襲い掛かった。

「もー! 絶対上手くいくと思つたのにい!! 穩のん!」

「可笑しいですねえ、かなり気が緩んでると思つたんですけど」

「丁度さつき気を入れ直したばかりだね」

「それでも上手く不意を付けたと思つたんですけどね」

「お蔭様で不意討ちには滅法強くなつたよ」

「それより穩、早くどいて」

二人折り重なつたまま平然と話を続ける十代後半の女性に苦い声音で告げる尚香。

それに対し、のんびりと応える穩と呼ばれた見事な肢体の女性。名を陸遜りくせん*139、字を伯言はくげん。尚香が呼び掛けるは真名の穩。

肩口で切り揃えられた明るい若竹色の髪、穩やかに垂れた濃藍の瞳はほわほわとした雰囲気の中に確かな知性を感じさせる。胸も尻も大きく、それに見合うだけの身の丈を包む露出の多い衣装は、振袖を除けば身体の線を良く浮き上がらせている。揚州、特に

呉郡の才子が好んで纏う意匠の衣服だ。

呉郡四姓陸氏一の才媛。現在は給事^{きゆうじたいしゆふ}太守府*140という特定の職掌を持たない侍従のような微妙な地位にある。これは郡府内に居られるように図られた仮置きのものである。ありていに言えば客将として南陽に在籍している訳ではあるが、これは真名を預けている孫尚香に付いているためではない。将来的には、師と仰ぐ人物の仕える孫家に正式に仕官する事になるだろうが、現在のところは袁家に仕えるまだ幼い族妹の補佐の為であつた。

彼女ともやはり最初の晩餐にて出会つた。伯言とその族妹も太守便坐に寝泊まりしている(族妹はかなり期待されているという事だろう)ので、顔を合わせる機会も多く、それなりに友誼を結んでいた。

「すみません、小蓮様。紫燕^{しえん}が絡みついで」

「あー、もー！ 慶祝!!」

「はいはい。大丈夫?」

「トラも手伝うにや」

「御二人とも有り難う御座います」

伯言の振るう九節棍「紫燕」は中々に扱いの難しい武器だ。軍師と言えども賊徒程度ならば自力で蹴散らせなければ、孫家に仕える事もできないらしいが、それにして

も武器の選択を間違えているのではなからうかと思ひながら、身に絡まった連節棍を解いてやる。

「伯言さんも毎度大変だね」

「いえいえ、そうでもないですよ。中々に得るものも多いですし」

「そうよ！ それに穩がシャオの補佐をするのは当然でしょ！」

「でも今は公紀こうきちゃんの補佐の為に南陽に来てる訳でしょ？」

「う……」

薜華に突つ込まれ、少々分悪く怯む尚香。何といつても、伯言は未だ正式に孫家の配下となつている訳ではないのだ。

「それにしても、シャオも懲りにないや」

「うっさいわね」

「ん？」

「にや？」

「トラ、何時の間に尚香とそんなに仲良くなったの？」

「ふふん、美羽の元で作法教室してる時にね」

「ああ、尚香も習つてるのか」

「違うわよ！」

「シャオのれーぎ作法もなかなかと美羽が言ってるにや」
「嘘っ！」

「慶祝、そこに直りなさい」

「ええー」

「今のは慶祝ちゃんが悪いと思いますよ〜？」

弓腰姫とまで仇名される尚香の普段を見ていれば当然の反応だと思うのだが、どうにも不服のようである。尚香が尚も不満をぶつけようとすると、そこへ袁公路が郡堂の方から此方へ近づいて来た。

「これは公路殿、どうしました？」

「どうしたもこうしたも、またぞろお主等が騒ぎを起こそうとしておると報告を受けたのじゃが」

「ちよつと待って下さい。それって私も入ってるんですか？」

今度は舜華が不服そうに抗議する。

「まあ、主たるは小蓮じゃが」

「にやはは」

「むー」

「それにしても、わざわざ太守が直々に来ずとも」

「孫家の女が問題を起こせば妾以外には対処できぬからの」

「ああ、成る程」

「なに、その目は」

「いや、なんでも」

薺華の当然の疑問に、公路も当然と答えた。妙な説得力に尚香を眺めながら納得する薺華。そう言えば、大体において尚香が何かすれば公路が出張つて来ていた。伯言がやんわり止めようとしていた時も、最後には公路がやつて来て事を収めていた。思えば、伯言のあれは公路が尚香の元まで来るまでの時間稼ぎだったのだろう。

「尚香、余り迷惑かけるものじゃないよ」

「あのね、シャオはいつも仕事ばかりで息の詰まつてる美羽に息抜きさせてあげてるの」
「どんな言い様だよ」

「その点も否定せぬが」

「しないんですか?!」

「それにしても、慶祝が来て以来、ちと頻度が高過ぎるのじゃが?」

「だって、何時まで経つても区星の頸を奪りにいけないんだもん」

「ああ、その事か。仕方あるまい、今は薔薇花を遣いに出しておる故、戻るまで待つ
のじゃ」

「あ、そうだ！」

「ん？」

「慶祝がいるじゃない！」

「いや、それは駄目でしょ」

「何、大軍の指揮に自信がないの？ 何事も経験でしょ。それに慶祝は区星の手下も

殺ってるんだし、因縁もばつちしじゃない」

「ばつちしつて……」

いきなりの無茶振りに否定で返すが、尚香は諦めず挑発も交えて食い下がって来た。余程賊征伐に出たいらしい。しかしそこに、公路から矢張り駄目出しが入った。

「駄目じゃ」

「なんでよー」

「慶祝が妾の部曲を率いて見事区星退治などしてみい。また薔薇花の自己評価が地に落ちちてしまうであろ」

「どんだけめんどくさいのよ……」

「なに、どういう事？」

「紀靈さんは、内気で恥ずかしがり屋さんで自己評価が螻蛄おけら並と専らの評判なんですよ」

二人の話し振りから疑問に思い、伯言にこそそこそと小声で尋ねると、ひそひそ声で応えてくれた。それにしても螻蛄並みと来たか。

その間にも二人の話は進み、何とか纏まったようだ。

「既に郡境を超え南陽に入ったとの報せを受けておる。もうじきじゃ、それまで待つておれ」

「分かったわよー」

「公路殿、それでは」

「うむ、兀突骨殿も無事南陽入りしたという事じゃ」

いよいよ洛陽へ赴く日が近づいて来た。自然と身が引き締まるのを感じた。見ればトラも期待と不安の入り混じった表情かおをしている。自分も似たようなものだろう。

漢の中心、腐敗の蠱毒壺。鬼も出よう、蛇も出よう。そんな評判ばかりが耳につく。だが、実際に行ってみなければ結局何も解らないのだ。案外、拍子抜けするような安穩とした滞在になるかもしれない。自分でも欠片も信じていないそんな想定に、少しだけ頬が緩んだ。

第九回——了——

「うおーい、帰るぞ。祭、雷火^{らいか}」

「お母様！」

鷹揚に近づいて来た孫堅——炎蓮に、名を呼ばれた二人よりも先に反応したのは彼女の末の娘であった。

「おう、小蓮。元気だったな？ 流石、俺の娘だ。そうでなくつちやいけねえよ」

「うん！ シャオは何時でも元気一杯だよ!!」

実際に元気良く母に抱き着きながら答える尚香。そんな二人を暫し微笑ましく見守ってから、炎蓮に呼び掛けられた二人の内、小柄な少女のような女性が声を掛けた。

「それで、結局面白いものは何だったのです？」

「んあ、……空振りだったわ」

「おや、大殿の思惑が外れるとは」

「ま、偶にやそんな事もあらーな。今頃は洛陽だとよ」

「では入れ違いでしたか」

「おお。雷火、最近になって洛陽入りした面白そうな奴探しとけ」

「……………」では、我が弟子を放っておきましょう。そういった人材を嗅ぎ付けるのは

得意な奴ですのぞ」

「よし、任すぜ」

余りにもぎつくりとした指示に、流石に眉間を指先で揉みながら腹心が答えると、この場に居た最後の一人、炎蓮の娘でも配下でもない一人が声を上げた。

「あのく、それって慶祝ちゃんの仕事でしょうか？」

「慶祝とな？ 何者じゃ？」

「はいく、夏の間、暫くこちらに逗留してた方で——」

炎蓮配下のいま一人、褐色の熟女が聞き返すと、陸伯言は厳慶祝の事を話し始めた。

「んー、面白そうではあるが、思ったより小粒かあ？」

「では如何致します？」

「それでも一応探させとけ」

「はっ！ 礼を言うぞ、穩。これで包パオの奴めの負担も減るじやろう」

「いえいえく、お役に立てて何よりですう」

揚州刺史孫文台とその一党が嚴寿という少女を知った、これが最初の契機であった。

第十回 遭紅少女

青く澄んだ秋の空。遠く、高く、無尽に広がる天穹。

気付けば空を見上げていた。仰向けに転がったまま、全身隈なく激痛に支配され、それでも秋草を手放さずに遙かな青を眺めていた。吸い込まれそうな青空に、地に張り付けられたままなのに、何故か落下していくような、空に向かって落ち行くような錯覚に囚われ、その身を強く地に押し付けた。その所為で痛みがより鮮明に襲い掛かって来たが、お蔭で意識に掛かっていた霞も晴れ、思考も鮮明になった。

気を失っていたのか……。漸くそこに思い至り、痛む身体に鞭打って起き上がる。こんなところで何時までも寝こけてはいられない。そんな勿体無い話はない。

なにせ、今日の前には天下無双が居るのだから。

首都洛陽。

黄河中流南岸に位置し、周囲を丘陵に囲まれた盆地に存在する。北に邙山、東に嵩山、南に伊闕山と万安山、西に周山を擁する山脈の支脈に取り囲まれ、盆地中央には伊水・洛水という二条の河が西と南西から東へと流れている。東に虎牢関、西に函谷関の関所が鎮座し、古代より多くの王朝がその中心と見定めた兵家必争の地である。

東西に六里十歩*141、南北に九里七十歩の城内は、その殆どを皇城(宮廷施設)と各種官衙(政庁機能)が占めており、その他諸施設や庶民の住居は城壁外に県城として外殻城を築き、洛陽城を中心とした洛陽盆地全域をして洛陽と成している。

今、その二重の城門の内側、都城の中の更に内、南宮を囲む城壁の上に薜華は居た。常に共に在るのが既に当然となったトラの姿はない。今頃は兀突骨と共に謁見の最中であらう。トラの頑張りを知っているし、信じてもいる。兀突骨も付いている。それでも心配でそわそわしてしまうのは致し方ない事だろう。

「トラ、ちゃんとやれてるかな……」

城壁西南角から眼下に見える四つ辻に建てられた銅製の駱駝の頭頂を眺めながら、ぼんやりと呟く。中々に稀有な景色だが、心配が先に立ってそれほど楽しめずにいた。巴郡に居た頃は、宮城の内側に立ち入る機会が来るなどとは夢にも思わなかったのだが、それもまさかこんな気分であらうつく事になるとは……。

「いや、余りうろつくのも拙いか。一応の許可を得ているとは言え……」

ん、と伸びをしながら気を入れ直して控えの間に戻ろうとすると、小さく軽快な足音が此方に向かつてきているのが聞こえた。人のものではない。首を回して音の方を見遣れば、一匹の小型犬が近づいてくる。

「柯基犬だ」

胴長短足にふさふさの毛並み、天を衝く大きな耳、殆どない尻尾。自身の体格を遥かに凌駕する牛や羊にも物怖じせず任務を果たす勇敢さと、賢さと、従順さを併せ持つ牧畜犬。

一人、強烈な人物を想起するが、今や目の前にまでやって来た柯基犬は赤い襟巻をしていない。世に柯基犬が一匹しか居ないわけでなし、決めてかかつては危ういだろう。「どうした？ お前、こんな所で」

しゃがみ込み、そつと手を伸ばしながら話しかける。対して柯基犬は、薔華の指先をすんすんと匂うと、得心がいったという風にその場にちよこんと座り込んだ。

その様子に、ふむ、と一つ頷き、ふかふかの矮躯を撫で始めた。始めは優しく、次第にしつかりと掌で味わうように、やがて全身余すことなく愛でだした。

暫し無言の時が過ぎる。一度などは見回りの兵卒が、何をしているのか誰何の声を上げようとしたが、一人と一匹の様子を見てそそくさと去っていった。両者ともそんな事

には目もくれず愛で、愛でられながら時を過ごした。

「ふう」

満足げな吐息が少女から漏れる。「わふ？」と、もういいのか？ と、問い掛ける様な

柯基犬に、頷いて答えた。

「そろそろ、本当に戻らないとね」

そう言つて立ち上がると、柯基犬も立ち上がりその横に控えた。付いて来るらしいが、拒否する理由もないので好きにさせる。

「それにしても、柯基犬やお前では少し不便だな」

流石に犬の喉では名乗りを上げる事は出来まい。仮でもいいから、何か名付けようと頭を捻りながら歩を進める。隣を歩く柯基犬に目を向ければ、この事に関して興味もないのか、素知らぬ顔である。それを見て、先程までの柯基犬の様子を思い起こした。如何に撫で摩ろうとも姿勢を崩さず、耳をぴんと真つ直ぐに立て、一声も上げず、時折気持ち良さそうに目を細めたかと思うと、はつと目を開いて襟を正すかのように佇んでいたあの様子。

「愛でたいんだろう？ 構わないが、俺は媚びたりしないぜ。と言わんばかりのあの態度。」

「ふむ、柯基犬には柯の字が充てられてたな。頑ななまでに凜と立つお前には、寧ろ梗の

字が相応しいな。暫し、お前を梗子こっしと呼ぼう
「ワン」

好きにすればいい。そう聞こえた気がして、薺華は足取りも軽く控えの間へと戻った。

控えの間に戻った薺華が目撃したものの、それは死屍累々の南蛮娘達。ではなく、骨抜きにされた南蛮娘達であった。其処等から「はにやあ」だの「ふにゆく」だのと気の抜けた吐息が漏れている。すわ、発情期か？ と一瞬思ったがそうでもない様子。皆、至福の表情で眠りこけているだけのようだ。

兀突骨が献上品の運搬に連れてきた娘達は、比較的大人しく落ち着いた性格の子が選ばれている。だから薺華も安心して一人散歩に出かけたのであるが、その間に何があつたのだろうか？

薺華がやや呆然と考えにふけていると、その足元をすり抜けて梗子が南蛮娘達に近づいた。鼻先を寄せ、ふんふんと匂いを嗅ぎ取ると、短い尻尾を振りながら「ワン」と一鳴き。安心しな、と言って来た。

「梗子がそう言うなら」

無論、実際に何と言っているのかなどは解らないが、何となくそんな意志を感じるのだ。長く付き合いのある獣達からも同様に感じるこの感覚を、出会ったばかりの梗子からも感じるのだ。随分と意志の強く、賢い犬だ。

それにしてもどうしたものか、と考えながら入室し、一番手近で眠りこけている娘の脇に屈み込み、頭をやわやわと撫でてやる。フニヤア、と寝ぼけた声を上げ、すりすり」と此方にすり寄って来たので膝枕してやると、気配を察知したのか、それでも半ば夢見心地のまま皆すり寄って来た。あつという間に葬華を中心として身を寄せ合い改めて眠りこける南蛮娘達。うむ、可愛い。

その様子を見届けると、気を使ったのか幾分か小さな声で一鳴きし、梗子は部屋を辞した。その背に「またね」と声を掛けると、一度振り返り、視線で頷いて去っていった。それから暫くして、トラと兀突骨が無事戻って来た頃には目を覚ます子もちらほら現れ始めた。何があつたのか気にはなつたが、それよりも、何よりも優先すべきトラ達の話に耳を傾ける内に、意識の奥に追い遣られ、結局聞きそびれてしまうのだった。

そして、トラが話し終える頃には殆どが目を覚まし、話し終えた途端にトラがストンと眠りに落ちた。緊張の糸が切れたのだろう、葬華はそんなトラをやさしく抱き寄せ、背を撫で労いながら、兀突骨と話を続けた。

「お疲れ様、トラ」

「トラちゃん、すつごく頑張つてたにい」

「ふふ、目に浮かぶようだよ。それで、芽衣の眼から見えてどうだった？」

その問いは無論、トラの事ばかりではない。

「最初は良くも悪くも反応薄かったにい。……興味の問題が大きいと思うけど、なんだか調子も悪そうだったにい」

「陛下の御加減が？」

「にい。宝物の献上で機嫌は上がったけど、気分は……つて感じで、謁見は思ったより短く終わったにい。トラちゃんのボロが出ることなく首尾よく終われたから、こちらとしてはいいう事はないけどお」

皇帝の反応に不満気に眉を寄せた薜華だが、続く言葉でより深く眉根を寄せることとなった。程度が判らないが、樂觀視できる対象ではない。その玉体に何かあれば一大事である。漢に対する忠心はそれ程ないが、皇帝の早逝など良い事は一つもない。だが、頭のどこかでそれは避けられない事態だと囁く声もする。

「心配事を一つ消化できたと思つたら、全然別のところから懸念が飛んでくるとは……」
「謁見できる元気があるなら、今すぐどうこうとは思いたくないねえ。漢の混乱は望むところじゃないにい」

二人が深刻そうな気配を纏いだすと、自分達には理解できず関係もない話が始まったと、それまで聞き入っていた南蛮娘達の集中力が切れ始めた。それを察し、兀突骨は近くにいた一人に、外で控えている給事謁者きゆうじやくしや*142に宿泊先への案内を頼むよう言付けた。

銅駝街。
どうだがい。

二体の駝駝の銅像が宮殿の西南の街（太尉・司徒府官衙の間）にあり、四つ辻で道の東西を挟んで向かい合っている。故に銅駝街と呼ばれている。

先日、南宮の城壁上から眺めていた駝駝像の足元で、約207cm九尺もの銅像を見上げる薜華一行。今日はここで親友と待ち合わせをしていた。

「本物とおんなじくらい大つきいにい」

「いいなあ、芽衣は本物見た事あるんだね」

「トラも見たことないにや」

「西方からの隊商が乗ってたにい。樹海のある南蛮中央まではこれないけど、西端では交易があるにい」

「交州にも駱駝通商隊がちよくちよく来るらしいけど、時機が合わなかったのか見れなかったんだよなあ」

駱駝談議に花を咲かせる三人。他の南蛮娘達は、南宮内の迎賓宿画でのんびりしている。角々した漢の街並みよりも、広い庭園の方が落ち着くようだ。数日様子を見て、留守を任せても大丈夫だと兀突骨が判断した事で、薜華の約束に二人も同行した次第である。

洛陽行きが決まり、日程計算をしてある程度の余裕を持った日時で落ち合う約束を交わした後、連絡を取り合えずにいた為、向こうは南蛮使者が二人居る事は知らないが、薜華は特に問題視していない。予め言っておけ、くらいは言われるだろうが、それだけで済む話だろうからだ。

しかし、その約束相手は少々困惑していた。約束の場所を目指して歩を進めていれば、周囲の意識がある一点に集中している事に気付いた。それは正に落ち合うための目印のある場所。遠目にも目立つ異民族の娘に誰しもが注目していた。駱駝像と殆ど遜色ないほどの長身、しかも今は小さな同族の少女を肩車して駱駝像よりも高く聳えている。二身一体となった少女が短い手を伸ばして駱駝を撫でようとしているその光景は微笑ましいが、とにかく目立っている。

今からあそこに行くのか、と思うと少しばかり気が重くなった。南陽から届いた手紙

に書いてあつた南蛮の友人に違いあるまい。となれば、今は人波の向こうで見えないが、あの二人のすぐ傍に居る筈なのだ。一言くらいは文句を言わねばなるまいと、足取り鋭く近づいていく。しかし、一向に親友の姿が見えない。困惑を深めつつもさらに近づく。常に両脇に侍る愛犬達は迷いなく進んでいる。ならば二頭の先導に素直に従い進むと、漸く見つけた。何やら足元に屈んでいた為、遠目では全く見えなかつたのだ。何をしているのかと目を凝らせば、洛陽で得た友の飼ひ犬と戯れていた。相変わらず動物には手の早い奴だと、呆れ半分、感心半分で声を掛けた。

「葬華」

「おお、鋼！ 久し振り！」

兀突骨に肩車されるトラを微笑ましく眺めていた時、蹠をつんつんと突かれ足元に目をやると、ここ数日で何度か訪ねてきた小型犬が此方を凝視していたので、屈み込んでいつもの様に撫で摩っていると、今度は頭上から久方振りの伶俐な声が聞こえ、笑顔でそちらに向き直つた。勿論、梗子を撫でる手はそのままに。

「その前にだ」

「うん？」

「南蛮の友人を同行させるなら、予め言っておけ」

「あはは」

「いや、何故そこで笑う」

「予想通りの反応だな、と」

「薺華……」

「ごめん、ごめん。じゃあ、改めて。久し振り、鋼」

「ああ、久し振り、薺華」

気軽い調子で謝罪しながら漸く立ち上がり、故郷の友と再会の挨拶を交わす。短い取りの中で、半年程振りに会った友人に変わりが無い事を知り、互いに喜んだ。

そんな二人の様子、頓に幼宰をじつと見詰めるのはトラだ。幼宰が薺華に声を掛けた時にそわそわと兀突骨から降りて、薺華が折に触れて話題に出す人物の一人を興味深げに見詰めるのだった。

自分の知らない薺華を知る人。それは、薺華が自ら語る事の出来ない、トラのまだ知らない薺華の側面を知っている人。教えて欲しいな。でもどう聞けばいいのだろうか？

薺華の大切な人となら、絶対仲良くできる。無根拠にそう信じているトラであったが、実際にそのような人物が目の前に現れると、どう話し掛ければ良いのか解らなかつた。

そんなある種不躰な視線を浴びる幼宰が、不意にトラの方を振り向いた。外見上は余り表情が豊かな性質ではない幼宰に見詰められ、更に物怖じしてしまうトラ。

「傷付かない、傷付かない」

「そんな事を言うくらいなら、早く紹介して欲しいものなんだが？」

本人的にはただ見つめ返しただけなのだが、年下の女の子の反応にやや落ち込みかけた所を狙って薺華が茶化す。流石にじろりと薺華を睨み付けながら、幼宰が零す。もう少し私に優しくしても良いんじゃないか？という想いを込めて。

それに対し、どこまで本気なのか、申し訳なさそうに謝罪しつつ南蛮の少女をあやしながら紹介を始めた。

「この子はトラ。私の可愛い妹分だ。ほら、トラもそんなに緊張しなくていいんだよ？でも、ちょっと珍しいところが見れたかな」

「んにゃー」

薺華の軽口に、トラも若干恥ずかしそうだ。どうにも一人浮き上がってる薺華に、呆れた溜め息を漏らすと、もう一人の南蛮人と目が合った。こちらは小柄な少女と違い、しっかりと笑い掛けてきた。薺華の陽気を楽しんでる風だ。大物だな、と幼宰は見て取った。

「今、見詰め合ってるのが芽衣ね。漢名は兀突骨」

「可笑しな言い方をするな。……漢名、と言うのはどういう事だ？」

長身の女性が兀突骨というのは噂で聞き及んでいた。何せ目立つ御仁だ。こうして

相対してみれば、それが良く解かる。その兀突骨を、いきなり真名で紹介したと思つたら、漢名等と言ひ出す。

そんな幼宰の疑問に、薺華と兀突骨は簡単に南蛮の命名法に付いて説明する。

「成る程、本来は真名はなく本名ただ一つ。漢の習俗に合わせて漢名を名乗り、本名を真名と位置付けている、と」

「それも対外的に必要な者達だけに限るにいい。トラちゃんは漢名をもつてないし。……でも、今回の事で持った方が良かったかもしれないねえ」

「にや、トラがかん名名乗るにや？」

「考えておくと良いにいい」

「はいにやー！」

「それでは、」

「私の事は芽衣と呼んで欲しいにいい！」

「……宜しいので」

「た・だ・しい……」

漢名は持っているが、字までは付けていない兀突骨に対してどう呼び掛けたものか、逡巡が口から出た幼宰にかぶせるように兀突骨は本名、或いは真名で呼ぶようにと提案した。

この流れに既視感を感じた薺華は半歩下がった。何を感じ取ったのか、足元で梗子も同様に下がった。

「敬語禁止だにいい!!」

一瞬で間を詰めて幼宰に抱き着く兀突骨。余りの速さに両脇に侍る幼宰の愛犬・剣司と秤司も全く反応できなかった。気付けば主が長身の同族に抱き着かれています。半瞬遅れて身構えようと身を沈めかけるがしかし、敵意も害意も感じず、主の親友も笑顔で見守っている為、自分達も事の推移を見守る事にした。

一方の主も、突然の事態に目を白黒させていた。とは言え、外面からでは判り難いが。今日初めて会った兀突骨には当然判らず、「あり?」と呟いて幼宰の両肩を掴んで身を離し、じつと見詰めた。興味深く。

「動じないにいい」

「いえ、充分驚愕してま……してているよ」

「そうそう、鋼の吃驚した顔なんて中々貴重な代物を拝んだよ」

「今、びつくりしてたのにな?」

じつと見詰めるトラ。声も上げず、表情も動かさず、とてもそうは見えなかったのだが、薺華に言わせれば違うらしい。

「あ、照れてる」

「言わなくていい」

「姉ー、凄いにゃー!」

自分の表情の硬さで盛り上がるのは勘弁してほしい。話しの流れを無理やり変えるべく、視線を足元に落とした。それに気付いた薺華がすかさず紹介して来た。

「この子は梗子。最近、ちよくちよく止宿先に姿を現わすんで遊んであげてるんだ」

「ほう」

「ま、仮の名だけどね。人馴れ具合が明らかに野良のそれじゃないし、すごく賢いんだ。多分、南宮内の誰かの飼い犬なんだろうけど……」

「いや、宮城内ではないよ」

「え?」

「セキト。お前、また襟巻を外して勝手に外に出たのか。しかも南宮に忍び込むとは……。あまり、恋れんに心配を掛けさせるな」

「……ワウ」

「鋼、この子の事知ってるの?」

「ああ、この悪戯小僧はな……」

最初に気付いたのは兀突骨だった。背後から誰かが近づいてくる。通り掛かりではなく、明確にこちらへと向かってくる気配には、敵意や殺意といったものはなく、闘気

や覇氣といったものもまるで感じない。当然だ。街中の、それも皇帝の足元で不穩な氣配を漂わせながら練り歩く者など居る筈もない。だというのに、首筋がちりちりと熱くなつた。僅かに遅れて犬達も気付いたが、劍司と秤司は特に反応しなかつた。ただ、榎子だけは石像の様に固まつた。警戒しながら静かに振り向いた兀突骨も、俄かに固まつた。

紅い少女だつた。

深紅の髪に、同色の瞳、露出の多い短衣に包まれた褐色の肌には所々刺青が浮かぶ。ゆつくりとした足取りで、此方を一瞥もせず、どこか茫とした眼まなこはある一点に注がれており、その一点を指して歩み寄つていた。

兀突骨は自然と半歩下がつて、少女に道を開けた。それにトラが気付き振り向いた。そして、目を奪われた。無意識のうちに薜華の裾を掴み、そこで漸く薜華と、その様子を幼宰が気付いた。

その少女を視界に収めた瞬間、視線が釘付けにされた。いや、視線だけではない。全神経を注いで注視した。前知識など必要ない。一目見ただけでそれと解かる程の超絶の存在。武に心得のある者なら誰もが感じ取るであろう。練達の武を修めていればいる程に、隔絶した差を感じる。正に武の極み。今、目の前に現れた少女はそういう存在だつた。

彼女を初めて見る武人は皆同じ反応をするな。そんな事を考えながら、幼宰は紅い少女に声を掛けた。

「セキトを探しに来たのか？ 恋」

「ん……」

視線を一点から全く逸らさず、殆ど声を発しないその短い返事に、薺華の足元で石像と化していた柯基犬がびくん！と跳ねた。悪戯が見付かった悪たれのように恐る恐る少女の方を振り向く。

「セキト……」

「ワウ」

「勝手に居なくなっちゃ……だめ」

「ワン」

「襟巻も、取っちゃ……だめ」

「クウン」

少女が声を掛ける度にしおらしくなる小型犬の様子に、幼宰はくすりを笑みを漏らした。その僅か漏れた弛緩した空気に、固まっていた者達から漸く力が抜けた。それを見て、幼宰は故郷の親友に、洛陽の友を紹介しようと声を掛けた。

「薺華、昨年末の宴席で并州の話が出たろう？

彼女こそが呂布*143、字は奉先だ」

そこで初めて此方に気付いたように、恋と呼ばれた少女は薺華に目を向けた。じつ、と見詰める。無垢な幼子のような深紅の瞳。吸い込まれるように見詰め合う。

「宜しく、奉先殿。私は巖……」

「恋」

「……ええ？」

「恋で、いい」

今度は別の意味で固まってしまふ薺華。真名を預かる最速記録である。以降、この記録が破られる事はないだろうと確信できるほどの速さ。しかも、その要因がとんと解らない。思わず全ての動き止めてしまうのは致し方ない事だろう。

そんな薺華に、隣に立つ幼宰から助け舟が出された。

「薺華、恋はこういう奴なんだ。私の時もそうだった」

その言葉に、ゆっくりと、と言うよりぎこちない動きで幼宰の方を振り向く薺華。その薺華を見て、随分と面白い顔になってるな、と内心で独り言ちて続けた。

「私の場合は、剣司と秤司が主な要因だったな。恋、薺華に真名を預けたその心は？」

「セキトの匂いが……する」

「だそうだ」

つまり、梗子改めセキトが懐いているので、真名を預けるに足ると判断したという事

だろうか？ それにしても随分と鼻がいい。それとも比喻か何かだろうか？ ともあれ、これほどの人物に真名を預けられる榮譽（と言うと聊か大袈裟だろうか）を得たのだ。是非、此方の真名も受け取ってもらいたい。

「では、私の事は薺華と呼んで欲しい」

「ん、……よろしく、しゅんか」

「ああ、改めて宜しく、恋」

互いに真名を交換し、一段落着いたところで呂奉先の視線が斜め下にずれた。何やらもじもじしているトラに。

「ああ、紹介するよ。この子は……」

「ねい」

「ねこじやないにやー！」

「そうだよ、トラはこう見えて虎だよ。子虎だよ」

「薺華ちゃんも何言ってるにいい」

二人の呆けたやり取りに、南蛮勢から突っ込みが入る。

奉先は突っ込みには特に反応せず、困ったように眉根を寄せて小首を傾げながら薺華の言葉を反芻する。

「……………とらっつ」

「そう、トラ」

「トラだにや!」

「トラちゃんだにいい」

「皆して言わなくていいからな」

今度は幼宰が突つ込む番になった。

「……トラは、ねこじゃ……ない?」

「ちがうにや」

何故か執拗にトラを猫ではないかと主張しようとする奉先に、何かこだわる訳でもあ
るのだろうか、幼宰はその訳を尋ねた。ぽつりぽつりと返つてきた答えは、以前、南
宮の一角で出くわした猫集会で屯たむろしていた猫達に似ているからだと言う。そして、それ
はトラと芽衣が皇帝と謁見していた時に重なった。

「私が梗子、じゃないや、セキトと初めて会った日でもあるね」

「控えの間に戻った時、皆至福の表情で寝こけてたにいい」

「にや」

「つまるところ、恋が遭遇した猫集会というのは、南蛮使者の少女達の事か」

「……?」

「そこで不思議そうな顔をするな」

「……」

「いや、何も困らせようとしている訳ではないぞ」

「幼宰のねえねえも凄いにゃ！」

「恋は割と表情に出てるだろう。それとトラ、に芽衣も私の事は綱でいいぞ」

「にゃー！」

「確かに預かったにいい」

こうして取り纏めのない初顔合わせが済んだところで、奉先が兀突骨に目を向けた。妙にうずうずしている長身の女傑に。

幼宰やトラなどは、兀突骨の落ち着きのない理由を推し量れなかったが、薜華にはその気持が良く判った。自分も同じだからだ。奉先にも伝わったのだろう、暫く兀突骨を眺めた後でおもむろに提案して来た。

「……うちに、来る？」

「是非、お邪魔するにいい！」

「あ、でも得物を取ってこないと」

「何かと思えばそういう事か」

武人と武人が出会えば、そこには言葉より尚雄弁な語り合いが待っている。しかも、ここで出会えたのは特級の武。普段は保護者然とした兀突骨も、南蛮人らしい欲求に対

する素直さを抑える術を持たなかつた。

都城内の光禄勳府官衙の一角にある中郎将の公邸。薺華達は取り急ぎ南宮に得物を取りに戻り、鋼の案内でここに通された。

「恋つて中郎将だったのか」

「東のな」

「他の方角もあるにや?」

「四位中郎将は、あとは盧北中郎将だけだな。他にも皇甫左中郎将と朱右中郎将がい
らつしやるが」

「と言うか、勝手に上がり込んでるけど大丈夫なの?」

「ああ、恋はあまり従僕の類いを雇い入れていなくてな。私も初めは戸惑つたが、来たい時に好きに上がり込んでいいと言われてな」

「なんか凄いな。でも、その割に庭は結構綺麗だね?」

「偶に園丁を入れて手入れさせているらしい。住み込みは動物の世話役が数人いるくらいなんだ。あとは……あの娘が取り仕切っている」

邸の庭を進みながら話していると、奥から一人の少女が此方目指してずんずんと歩み寄つて来た。

トラと殆ど変わらない背格好。年齢も似たようなものだろう。二つに結んだ青竹色の髪を左右に揺らしながら、小豆色の強気な瞳で睨み付けて来ている。明らかに丈の大きい黒い外套を翻して、堂々と薙華達の目の前までやって来た。

「よく来たのです、鋼。で、こやつ等ですか？ 恋殿に挑もうなどと言う身の程知らずは」

「なんにや、このちみっこ」

「ちびはそつちですぞ」

いきなりの物言いに、幼宰が返事をするより先にトラが不満の声を上げた。外套の少女もすぐさま言い返し、俄かに険悪な空気が場に漂い出した。

「ほらほら、二人とも落ち着いて。喧嘩は良くないよ？」

「姉ー、でも……」

「子ども扱いするなです。ねねはこう見えて恋殿の専属軍師なのですぞ」

「へえ、そりや凄いな」

「そんな事よりも、ねね」

「そんな事とはなんですか！」

「私達を迎えに来たのではないのか？ 第一、このままではお前を皆に紹介も出来ないぞ」

「ぐぬ……」

舜華が仲裁に入り、幼宰が突つ込む事で一先ず場を治め、そのまま幼宰が少女を紹介した。

「先程、自分でも言っていたが、この子は恋の軍師で陳宮ちんきゆう*144だ。この齡で并州に居た頃から恋を支えてきた、正に忠臣だな」

「字は公台ですぞ。それと鋼、齡の事は言うななのです。ねねは年齢の事でとやかに言われるのが一番むかつくのです」

「ああ、済まない。しかし、齡の事を言うならこの場に居る皆若年だ。誰も気にしたりしないさ。芽衣もまだ十代という話だしな」

「よく見えないと言われるにいい」

兀突骨の言葉に陳公台はそちらを見上げ、納得したように頷いて応えた。

「成る程、みえないのです」

「よく言われるにいい」

「それはもう聞いたのです」

それを機に皆で自己紹介をし、改めて奉先の元へ案内される事となった。広い邸では

あるが、程無く庭園の一角へ辿り着く。

そこに、方天画戟を片手にぶら下げた呂奉先の姿があった。

手入れをされたのは最近なのだろう、形よく整った庭木で、身を寄せ合いながら羽を休めている小鳥をぼんやりと眺めていた。

「恋殿、連れて来ましたぞ」

「ん……」

陳公台が傍に寄り声を掛けると、ゆつくりと此方を振り向く。ただその様を視界に収めるだけで肌が粟立つのを感じる。先程、街中で遭遇した時とは明らかに違う。闘気を逆らせている訳ではない。しかし、得物を携えている。それだけで武人の完成形を観た。実際に刃を交わらせたなら、ここから更にどれ程跳ね上がるのだろうか。

「先に戦^やらせてもらうにいい」

最早、我慢も限界といった風に出る兀突骨。大人しく先番を譲った薜華の二元に、兀突骨と対峙した奉先から離れて公台が近寄つて来た。

「さて、あやつはどれ程持ちますかな」

その公台に対し、如何にも不満気に呻るトラ。余程、悔しいらしいが、実際に言われ放題の二人が何も言い返さない為、仕方なく大人しくしているようだ。そんなトラの頭をいつもの様に撫でるが、今はあまり嬉しくなさそうだ。それでも、若干肩から力が抜

けたのを見て、奉先と兀突骨の立ち合いに集中する。

すると、隣にまでやって来て、同じく二人の立ち合いを振り返って見学に入った公台が小さな驚きの声を上げた。

「ほう、なかなかやりますな」

「なんだ、ねね、珍しいな」

「ふん、恋殿に挑んだ殆どの者が、ねねが振り向く前に地に伏せますからな。ここまで持ち堪えているだけで大したものですよ」

「恋つて、そんなに頻繁に挑まれてるの？」

中途半端な防御を捨てて、奉先と打ち合う兀突骨の頑強振りに感心しながらも、漏れ聞こえてきた二人の遣り取りに横から質問する。

「お前達のように嬉々として挑んでくる者は、それ程多くはないのです。大体は圧倒的な実力差を感じ取って引き下がる。ま、当然ですよ」

「鵜ルオも委縮してたな」

「あやつは己の分を弁えていますからな。ただ、弁え過ぎの感もありますが」

誰だろう？と僅かに疑問が湧いたが、公台の話が続き、鵜なる人物の事は一先ず意識の奥に仕舞われた。

「ただ、恋殿の評判を聞いた連中が、子飼いに立ち合いを命じる事が偶にあるくらいです

な」

「成る程ねえ」

「ま、そんな連中は悉くねねが距離を取る僅かの間に、無様に這い蹲っていますな、と。……むむ」

公台の言葉尻に、奉先の強撃が兀突骨の右脇を強かに打ち据え、遂に片膝を付いた。公台はそこで決着と思つたが、次の瞬間には跳ね上がつて大上段から奉先に向かつて一撃を加える兀突骨に、驚きの唸り声を上げた。

だが、そこまでだった。誰にも奉先の動きが見えなかった。恐らく、兀突骨もどうやって自分が吹き飛ばされたのか判つていないだろう。刹那の間に放たれた一撃。決着である。

「めいさま!?!」

「トラ、と言いましたな」

「にやつ?」

「先程、あの者を侮つた発言をしたこと、撤回しますぞ」

悲痛な叫びをあげるトラに、公台が声を掛けた。なんだか冷静な声音に無性に苛立ち、つい強い声で返事を返し振り向いた。だが、続いて紡がれた公台の突然の言葉に、動きを止めて眼を見開いて公台を見詰める。視線に耐え切れなくなったのか僅かに頬を

紅潮させて、ふいっとそっぽを向く公台。そんな二人を眺めて薺華と幼宰は小さく笑んだ。

「さて、芽衣が一分を魅せたのなら、次は私だな！」

もうこの二人の関係は大丈夫だろう。少し気に掛かっていたが、それが晴れた今、ほんの僅かの引つ掛かりもない。一切の憂いなく濁りなく挑めるといふものだ。元々充溢していた気合いを更に込め、秋草を手に呂奉先に向かって進み出た。

「……また、立ち上がりましたぞ。あやつは何で出来ているのですか」

「薺華ちゃん、凄いいい」

「姉〜」

「……」

もう幾度目になるか……。打ち倒されてはその度に立ち上がり、尚も奉先に挑みかかると薺華の姿に、誰もが驚愕と、称嘆と、そして戦慄を覚えていた。

今もまた袈裟掛けに切り掛かり、易々と避けられるとそれを見越していたのだろう、奉先が避けた方へ深く一步踏み込んで斬り上げ、その勢いを以つて更に前進する。逆撃

を狙っていた奉先の横薙ぎは、前進によつて間合いを潰され、穂先ではなく柄の半ばが薙華の横腹にめり込んだ。互いに懐深く対峙する。双方共に長物を振るうには適さない距離だ。奉先は下がろうとするが薙華がそれをさせない。腹に方天画戟をめり込ませたまま、秋草の柄と左肘を上段から奉先のこめかみに打ち込んだ。

そして、吹き飛ばされた。

めり込んでいた方天画戟をそのまま振り抜いて、薙華を三丈程吹き飛ばした奉先は、右手を右のこめかみに当てた。立ち合いが始まつてから、初めて受けた一撃である。

倒れる度に動き自体は鈍っている。当然だ。だが、身のこなしは徐々に洗練されてきている。

だが流石にもう限界だろう。僅かに笑んだ奉先が目を向けると、震える身体を鞭打つて、尚も立ち上がろうとする薙華の姿がそこにはあつた。

「まだやるつもりなのですか……」

「ああ、大した奴だ」

「……？」

感心とも呆れともとれる声音で呟く公台に、聞き覚えのない声が答えた。疑問符を頭上に掲げながら声の方を振り向くと、矢張り見覚えのない、しかし知己の面影を映す女傑が大きな胸の下で腕を組み、頻りと感心した様子で薙華の立ち合いを見守っていた。

「誰ですか？ お前は」

「済みません、勝手にお邪魔してしまつて」

「何だよ、いい筈だろ。そう言つたじゃないか、鶯」

「確かに言つたし、普段から恋さんからもそう言われてるけど、取り込み中みたいだから出直そうつて言つたじゃないですか」

問い掛けると、女傑の脇からひよこつと顔を出してその知己が謝罪して来た。良く似た二人、会話から推し量れる関係性、公台にはすぐさま女傑の正体が解かつた。

「お前が西涼の錦馬超ばちよう*145ですか」

「お噂はかねがね。鶯にはいつも良くして貰っています」

「おう、妹がいつも世話になつてる。あんたが陳公台で、董幼宰。それであれが呂奉先、か」

挨拶もそこそこに、立ち合いに目を向ける新たに現れた武人。座り込みながら立ち合いを観戦していた兀突骨が、興味深げに横目で窺う。

長い栗色の髪を後頭部で一つにまとめた、強い意志を宿す葡萄色えびの瞳を更に強調する太眉が凜々しい、快活な印象の美人。満身に漲る闘気は一流の武人である事を声高に主張している。

馬超、字を孟起。西涼きつての猛将。常に異民族の脅威に晒され続ける後漢の西端に

て武勲を上げ続ける若き豪傑。若年でありながらも、今、この大陸でもっとも実戦経験豊富な武將の一人である。

「なあ、呂奉先と立ち合ってるあの子は？」

「あいつは私の親友でして。名を嚴寿と申します」

「嚴寿……、聞いたことあるな。確か、益州巴郡太守の一粒種、だったか」

「よくご存じで」

「最近は、益州の評判を結構聞くんだよな」

「鶻も以前、そんな事を言ってたな」

「うん、本当にここ数年で増えましたから」

益州と、その土地の才子の噂の流布。公台には見当がついていたが、その事については口を挟まなかった。それに、今はそれよりも注視すべきことが目の前にあった。

「構えたまま動きませんな」

「氣息を整えているのさ」

「本当はもうとつくに限界を超えてるにい」

「ああ、次が最後の一合だ」

馬孟起の言葉に、トラが心配そうに息を呑む。そのトラの視線の先で、無理矢理に体の震えを抑え、じりじりと摺り足で間を詰める薜華。その先には悠然と佇む天下無双。

「それにしても……」

「ん？」

「あやつは何故、あそこまでぼろぼろになってまで挑むですか。最早十全どころか、満足な一撃を見舞う事も出来ませう」

「だろいな」

公台がぼつりと漏らした疑問に答えたのは、疑問を持たぬ二人の内、馬孟起の方だった。

「あれだけ満身創痍じゃあ、立つてるだけでも辛いだろう。次の一撃、どうなろうとその後ぶつ倒れるのは確定だな」

「翠姉さん、それじゃあの人は勝機も何もないのに闇雲に立ち向かってるんですか？」

「勝機、か。厳寿は今そんなもの為に立つている訳じゃないさ」

「じゃあ、なんにやあ？」

泣きそうな顔でトラが会話に割り込む。そんなトラを窘めるように頭を撫でて、兀突骨が後を接いだ。

「今、薙華ちゃんは凄い速さで成長してるにいい」

「せーちよう？」

「動き自体は倒される度に鈍っている。だが、立ち上がる度に身のこなし、力の入れ加

滅、太刀筋から無駄が無くなっていつてる。敵寿自身の理想の武に少しづつだが近付いて行つてるんだ」

「薺華の理想の、武……」

幼宰のその眩きと共に、遂に薺華が仕掛けた。引き絞る様に後ろ腰に構えた秋草を横薺ぎに一閃。そこには確かにいつものような疾はやさは微塵も無かった。しかしその分、武才に乏しい者達にもはつきりと、その美しいとさえ感じる白刃の軌跡が視えた。

そして、庭園の植木にまで吹き飛ばされて、今度こそ完全に薺華は意識を失った。

第十回——了——

目を覚ますと、視界一杯に心配そうなトラの顔が映った。

「……おまよ

「姉——!!」

感極まつて、ぎゅむつ、と抱き着いて来たトラによって完全に覚醒した薺華は、痛む身体を無視して、寝台から半身を起こして周囲を見回した。どうやら、皆揃っている。

自分の無茶に、随分と心配やら迷惑やら掛けてしまったようだ。

「あー、随分面倒かけちゃったかな」

「全くですぞ」

「恋もありがとね」

「ん、いい。……しゅんかは、へんな奴。でも、面白かったから、……またやつてもいい」

「お、本当？ やった」

「少しは懲りやがれです」

「あはは」

「ねねの言う事も尤もだぞ、薺華。余り無茶するな」

「まあまあ」

「心配に押し潰されそうになるトラの姿を見せ付けられる此方の身にもなれ」

「う……、ご免なさい」

「姉」

「ご免ね、トラ。もうあそこまでの無茶はしないから」

トラの背を撫でながら抱き寄せて謝る。やれやれ、という空気が部屋に蔓延する。その中で、好奇の視線を感じ薺華は顔を上げた。そして、疑問の声を上げる前に相手が名

乗って来た。

「よお、私は翠ってんだ。宜しくな」

「翠姉さん、いきなり真名で……!?!」

「なんだよ、いいだろ。あれだけのものを魅せられたんだし」

「最速記録、か」

「ん？ なんだって？」

「いえ、何でも」

まさかの名乗りについて漏れた眩きは適当に誤魔化す。何故、彼女がこんな所に居るのはよく分からないが、ともあれ返礼をしなくては。

「私は薜華です」

「ん、確かに預かったぜ」

生まれて初めて真名で自己紹介してしまった。と言うか、そんな経験をする事になるとは夢にも思わなかった。妙な感慨に耽っていると、もう一人の少女も名乗って来た。

「あの、私は馬休*146字を仲承*147といひます。済みません、姉が突飛な事を」

「いえ、お気になさらず。馬休さん……、という事は翠はあの錦馬超」

「まあな！」

「まあな！ じゃないですよ！ もう、順序が目茶目茶じゃないですか」

「な、なんだよ、そんなに怒るなよ。人様の前だぞ……」

「いえ、ここは言わせてもらいます。そもそも——」

突如始まった姉妹喧嘩？に取り残される一同であった。そんな中、元々妹の方と友人関係に会った二人が最初に再起動した。

「話しに聞いていたよりも、随分と自由人な姉上のような」

「ですな。話に聞く妹や従妹はあれよりも酷いのですか」

「……でも、好いにおい、する」

恋は匂いで人を判別するのかな？　と思いつつ、事情に明るそうな二人に声を掛ける。

「えーっと、結局あの二人はどういう事？」

「鶯、妹の馬休がな、私と同時期に涼州の上計掾として洛陽に召し出されてな。共に朝議に参与するうちに友誼を結んだのが始まりだ」

「へえ。じゃあ、翠は？」

「あたしは中央に報告する事があつてな」

「ここで妹の説教から逃れる為に、馬孟起が話に加わって来た。

「西方異民族に何事かあつたのですな？」

「良く判つたな」

「ふん、これくらい類推できなければ軍師は務まらないのです」

「で、具体的には何があつたのさ」

「それがなあ、上手く言えないんだが、なんか違和感があるんだよな」

「なんですか、そのふわつとした物言いは。そんな報告じゃまるで役に立たねーですよ」

「いいんだよ！ 報告には母様の報告文書を上表したから!!」

「まあ、元々期待はしてなかつたのです」

「おい！」

「聞くのです。丁并州刺史からも、手紙で鮮卑の様子が可笑しいと送って来たのです。それも長年鮮卑と対峙してきた丁刺史殿でも何やら違和感を感じる、といった程度のものらしいですよ」

「鮮卑も……?」

「変つて、言つてた……手紙で」

「薜華、益州はどうだった？」

「どうだろ? 私が出立したその日に、州牧から安遠將軍府に氏族討伐の要請が来てたけど……」

「何やら俄かにきな臭い情勢の気配が漂つて来た。内に大乱の気配があると言うのに、外患までが活性化すればどうなる事か……」

「あー！　ここどうだうだ言つてもしょうがない！！　なつたらなつたであたし等で蹴散らしてやればいいさ！！」

「頼もしいにいい」

「ねねは逆に不安ですぞ」

「なんだとー」

「翠姉さん、落ち着いて」

不安な空気を消し飛ばす孟起の激。反応は各々様々だが、蕤華はなんだか故郷の義姉を思い起こして、場違いに微笑ましい気分浸った。

「賑やかにゃ」

「だね」

「ん……」

こうして洛陽でも新たな出会いを果たし、蕤華の京師での滞在も賑やかになる事となつた。

第十一回 秋天過去

女はひどく緊張していた。表情には出さないだけの術は心得ているが、緊張を消し去るだけの胆力は未だ完璧ではなかった。

そんな自身の緊張を、目の前に居る年下の美少女には気付かれているかもしれない。それだけの経験を彼女はして来ている筈だ。良い機会ではある。自分ももつと経験を重ねる必要があるのだから。

師から仰せ付かった用件自体は詰まらない上に面倒なものだが……。

「それで？ 妾に訊ねたい事とは、妾の興味を引く事であろうな？」

薄く笑いを浮かべながら訪ねてくる美少女に、肚の底で寒気を覚えながら言葉を紡ぐ。どんな経路を辿ればこんな似合わない、本来であればこの年頃の少女に似合っていない筈がない笑顔が板に付くようになるのだろうか。そんな戦慄を億尾にも出さずに言葉を告いだ。

「厳寿なる者の事を是非にお訊ね致したく」

その言葉に、僅かに眉を上げた美少女は、続いて小さく息を吐いた。

「なんじゃ、炎蓮のやつめ。そこまで執着しておるのかえ？」

「私は師の言い付けに従っているに過ぎませぬ。師の主の事までは与り知らぬ事」

そして続く言葉に、対面する傑物は、瞳に強い興味の色を灯した。

はて、今の短いやり取りのどこに少女の反応を引き出す要素があったのか？ それは待つまでもなく少女の口から語られた。

「そうか、お主の立場は陸遜のようなものであるか」

「はい……」

戸惑う。どうやら自分自身がその対象であるらしい。

確かに、陸伯言と似た様な立ち位置と言えばそうだろう。未だ孫家に正式に仕えている訳ではない。が、このまま師に付いて行けば早晩そうなるだろう。

「それで、中身の方はどうなのじゃ？」

「ひゃわっ?!」

思考の隙間に差し込まれた南陽太守の言葉。何が言いたいのか。いや、解る様な気がする。だから反射的に上ずった声が漏れた。そうなのだろう。

「ふむ。……そうさな、厳寿は、あれは中々に先が楽しみな奴じやの」

「は、はあ」

「しかし今のままでは駄目じゃ。当人も薄々は気付いておろう。大陸を見聞して周ると言うのも、幾分かはその理由を見出せような。何処まで自覚しておるかは不明じゃ

が」

「親離れ、でしようか？」

そこから更なる追求はなく、本来の用件を前振りもなく始められた。これは駄目だ。主導権を完全に掌握されている。ぼかした言い方は試されているのだらうと中りを付けて答えた。少しでも挽回せねば、早々に会見は打ち切られるだらう。

「それよ。今のままでは結局は益州に帰り、母の幕下に収まってしまふ。それでは凡百の孝行者で終わってしまうであらうよ」

何とも勿体無い。と続けて頼杖を付いた。どうやら正解だった。ある程度の事前調査はしておいたので、それ程難解でもなかった。昨今、彼女の人物評は益州を越え荊州にも届き始めている。調査が楽だったのも幸いだ。

そう、渦中の人物は評判が良い。普通に考えれば、近い内に立身するための前準備として嚴氏が世間に流布しているのだらうが、肝心の本人がまさか旅鳥になつてしまふとは、一族の者達の溜息が聞こえてきそうではある。

一族に心労を掛けているのは自分も同じか、と未だ見ぬ少女に僅かに親近感を憶えながら心の中で苦笑した。

と、頼杖を付きながらしばし黙考していた小佳人が徐おもむろに提案、或いは命じてきた。

「洛陽へ向かうのじゃ。今からなら間に合うであらうよ」

それは無論、この後で向かうつもりだった。それを態々口にしたのだ。何かある。と心中で身構えると、一拍置いて望外の言葉を放ってきた。

「何なら、妾の名を使つても構わぬ」

「では、河南尹かなんいんとの取り次ぎをお願い致したく」

「ほう」

間髪入れず応えると、太守の瞳の中の興味の色が一段濃くなった。どうやら合格点に達したようだ。反応の速さではなく、恐らくはその内容で評価されたを見た。

「お主もなかなか面白い奴じゃの。遂高すいこうに繋げと来たか。ならば、一つ条件を付けよう」
「なんなりと」

「何でも好い。あやつを官に嵌め込んでしまえ」

「……宜しいので?」

「うむ、構わぬ」

愉快気な条件を付して来たところを見るに、思い付きであろう。しかし、それにしては内容が聊か意外であつた。

「言うたである? このままでは凡百の孝行者と。確かにあやつの事は欲しいがな、保留という体ではあるが既に断られておるしの。況して、炎蓮のものにはなるまいよ」

「ならばいつその事、と……?」

「という程でもないがの。ただ、あやつには大きな変化が必要なようじゃ」
「そこまで目に掛けておいでとは」

俄かに興味が湧いて来た。つまらぬお使いかと思っていたが、案外これは拾いものかもしれない。奇貨である事を願おう。

「お主もな」

「え？」

「精々、好きに振舞うが良いぞ？」

「ひやわっ!？」

此方の反応に余程満足したのか、実に愉し気に笑ってくれた。いやはや敵わぬものだ。だが別にいい。自分以上の存在などいくらでもいる。だからと言って、それで道が閉ざされるわけでもない。切り開きようなどいくらでもあるのだ。それが面白い道に続くのならば言う事はない。

洛陽へと続く道。そして、更にその先へと続いていく道を夢想しながら、女も静かに笑った。

第十一回 秋天過去

その日は珍しく肌寒い日であった。年が明けたばかりの、春とは名ばかりの冬曇りの日であった。

明日、董幼宰は旅立つ。巴郡を離れ、遠く京師洛陽へ。巴郡最後の夜に、幼宰は親友と二人で酒を酌み交わしながら語らっていた。

「鋼が上計掾かあ。ま、鋼ならどれだけ昇つても驚きはないかな」

「持ち上げて何も出ないぞ」

「そんなんじゃないって。でも、中央に赴く事になるとはね」

「私の方が先に巴郡を出る事になったな」

薄く笑みながら杯を傾ける幼宰。薜華はつまみを口に放り込みながら気軽に続けた。

「でも、すぐに戻るんでしょ？」

「それなんだがな……」

珍しく齒切れの悪い幼宰に、つまみを飲み下し、慎重に確認するように薜華が問い掛けた。

「……まさか郎官になるの？」

「中央に残るのならば、そうなるだろうな」

驚きながらも、矢張りかと頷く薜華。とは言え、王朝での栄達など望む手合いでもない。何が親友にその選択をさせたのだろうか。

「とつくの昔に中央には見切りをつけてたと思つてたよ」

「それは今も変わらないさ。……ただな、大陸全土が混迷しようという時に、居心地の良いこの地だけに目を向けていても良いものか、と思つてな」

自分が旅に出ると決めた時に出た話が、親友の進路に影響を与えたのか。鋭い眼つきの奥に優しい心を持つ親友は、世が乱れた時に響き渡る民草の悲鳴を憂い、決断したのだろうか。そんな事を考えていると、その鋭利な眼が此方を射抜いていた。曰く言い難い感情を乗せて。

「なに？ 私の顔に何か付いてる？」

「いや……。実は先頃、ろうちゅう中を訪ねてな」

「え、それって、もしかして未究、周羣を訪ねたの？」

「ああ」

何事か言い淀んだと思つたら、予想外の言葉が返つて来た。そこまで確認して来たのかこの娘は。生真面目と言うか何と言うか、呆れながら感心してしまう。

「鋼はもう少し、脇目を振る事を憶えてもいいんじゃないかなあ」

「なんだそれは」

「驚いてた？」

「いや、全く」

「やっぱり」

人生二人目の親友である周仲直は、常に余裕有り気で驚愕とは程遠い人物だ。その程度では眉一つ動かさないだろう。

「何とも不思議だな、彼女は。『おや、何とも珍しい御客人だ』などと言われたよ。珍しいも何も、初めて訪ねたのにな」

「未究らしいや」

くつくつと笑い、湧きだした陽気を身中に行き渡らせるように一杯呷る。爛のついた黄ホアンチユウ酒が心地良く胃の腑に落ち着く。

そんな薜華を眺めながら、幼宰もちびりと酒杯を傾けた。周仲直の言葉を思い出しながら。

『そうか、それ程長きに亘る混乱となるのか』

『正確にはその契機となる乱だね。とは言え、正直読み切れない部分も多いのだよ。原因は判っている積りだがね』

『その原因とは？』

『薜華だよ』

『……………なに?』

『ふふ、冗談の類いではないよ。実はだね、私はあの娘の星が詠めたことがないんだ』

『今一どういう事なのかが解らないのだが。例えば、私の星は詠めるのか?』

『詠もうと思えばね。無論、一挙手一投足とまでは利かないが、人生の節目となるような大きな事柄ならば。しかし、君の場合は曖昧になるだろうがね』

『それは、私が薺華に近しいから、か?』

『ご明察』

『……………近く起こる大乱の渦中に薺華が居るという事か』

『実に心地良いね。要因はまだあるがね』

『これ以上まだ何かあるのか』

『これは薺華にも言った事なんだが、未だ星が出揃っていない。それも極星が』

『言葉の強さからか、そちらの方が重要な要因のようにも思えるのだが』

『それは恐らくその通りだろうね。そして、その極星こそが薺華の追い求める星ではないかと、私はそう考えているのだよ』

『なあ、薺華は本当にそんな大きな天命を背負っているのか?』

『それは誰にも分らないさ。私に分かる事は凶讖とんせんによる星詠みと、そして天文の運行が全てではない、という事くらいのものさ』

此方を眺め、しかし心はどこか別の所へとやつている親友を肴にもう一杯。物思いに耽る鋼も好いな。なんてことを考えながら杯を進める。

何を考えているのだろうか。巴郡に来てからこれ迄の日々か、二人の思い出か、それとも矢張りこれから先のこの国の事か、或いはまた……。

「ねえ、鋼」

「うん？　なんだ、薺華」

「余り無茶しないでよ」

「しないさ」

「京師は魍魅魍魎ばかりで、後ろ盾も碌にないんだからさ」

「心配せずとも、その辺りの分別くらいは付けるさ」

この親友に限って心配はしていない。しかし、心配の種は尽きない。明日は笑顔で送り出そう。そして、自分が旅に出たら、出来るだけ早く洛陽を訪れよう。そう心に決めて、また一杯、ぐいっと喉奥にほろ温くなった酒を通した。

「——なんて話をしたっけね」

「ああ、なんだか随分と懐かしい気がするな。一年も経っていないと言うのに」
「じゃなくって」

「うん？」

「十常侍の親族を獄に繋いだって何さ?! 無茶しまくりじゃん!!」

深い秋の夜。巴郡でならば既に冬と言つても差し支えないほど冷え冷えと星の瞬く夜の宴席で、薜華はつい声を荒らげた。

ここは洛陽。益州巴郡から遠く離れ、栄華と退廃が塗り分けられる事無く同居する帝都である。

薜華達は、河南尹に招待されて盛大な宴の席に居た。そのような場で声を張り上げた薜華に、馬仲承などはおろおろと周囲を見回すが、彼女以外の同行者は平然としたものだった。

「罪ある者はそれが如何なる連なりを持っていようと断罪すべし。それだけだ」

「ああ、この娘は……、分かつていた。分かつてはいたけど、ほんとにもう、ほんつつとうちに、もう……」

「落ち着け薜華。私は今もこうして此処に居る訳だし」

「薜華の気持ちも解かるのですぞ」

「ねねまで……」

「私も正直、心臓が止まるかと思いましたよ」

「鶉もか……。陛下も事の善悪を明らかにして言上すれば、賢明な判断を下して頂ける御方だ」

「運が良かったのですぞ。上表など途中で握り潰される可能性の方が高かったのです」

「いや、私の上表したのではない。段珪*148が陛下に泣きつき、それで私が直接召し出されたのだ」

「どちらにしても運が良かったよ。そのまま処罰されてたかも知れない」

因みに、その時の天子の裁下は『話聞いてみたらさあ、これ結局悪いのはあんたの親戚じゃん。はい、これでこの話は終了了う』という軽々しいものであった。

「なんにしても無事で何よりだよ。それにしても、この短期間で侍御史*149に任じられていたとはね。流石と言うか何と言うか」

「実際、郎中のままで燻っている連中も多い中、大したものですよ」

「それを言うなら、鶉だつて奉車都尉丞*150に任じられている。私だけが褒めそやされる様な事ではないさ」

「そ、そんな私なんて……」

「謙遜なんてすることないよ」

「そうだと鶉！ あたしも姉として鼻が高いぞ!!」

「なんや、翠でもお姉ちゃんぶることもあるんやなあ」

「ぶるとはなんだ！　ぶるとは！」

馬孟起をおちよくる特徴的な訛りに目を向けると、随分と傾いた格好の女僕が孟起の肩を組んで絡んでいた。

宴が始まった時には見掛けなかつたが、今宵の酒宴には多くの客が招かれている。離れた席から、随分と仲良く見える孟起を訪ねてきたのだろう。

紫色の髪を鉄鉞環の髪留めで纏め、下は袴履き、上は何と晒し巻きに羽織を肩から掛けるだけという大胆な出で立ちで、浅焼けた肌がなんとも眩しい。實際目の当たりにすると凄いい格好だと、不躰な視線を向けていると、猫科の肉食獣を思わせる自信に満ちた常盤色の眼差しが此方を捉えた。そして、にんまりと笑顔を寄越してきた。孫尚香と似てはいるが決定的な部分が違う笑顔。じゃれつきがそのまま死に直結する、食物連鎖の上位に在る者の笑顔だ。

その笑顔に見惚れていると、幼宰の向こう隣りに座っている公台が声を掛けてきた。「恋殿に自ら挑む者はそう多くないと言いましたな」

「言つてたね」

「あれがお前の数少ない同類ですぞ。名を張遼*151……」

「字は文遠ぶんえんや。よろしゅうな。厳寿いんじゆうつち」

僅かに公台の方に視線を向けた隙に、目の前まで来ていた張文遠が公台の後を接いだ。

「宜しく、文遠殿」

「なんや固いなく、殿なんていらんて」

「そうそう、霞シヤに遠慮なんて必要ないからな」

「確かにそうやけど、なんで翠が言うねん」

「なんだよ、いいじゃないか」

「仲良いなあ」

何時の間にやら寄って来ていた馬孟起が横から口を出し、目の前で二人じゃれ合い出すのを見てぼつりと漏れた眩きに、文遠と孟起は互いに顔を見合わせた。互い、何とも言えぬ表情で。

「なんや、正面から言われるとこそばいなあ」

「ま、馬が合うのは確かだけどな」

「ウチら二人とも馬得意やしな！」

「いや、そーいう意味じゃなくてだなあ……って、なんだよその顔」

「……あかん、翠あかんわ。なんやのその返し、真面目か」

「なんだよ！ そっちの方が意味わかんないだろ！」

「いやあ、翠にその辺の機微を求めるのは酷だと思ふよ?」

「なつ、薺華まで:!?」

「まあ、せやなあ。翠やもんなあ」

そこで文遠は今度は此方と顔を見合わせてきた。目と目が合い、くくつと笑いが漏れ、呵々と大笑する。からかわれていたと気付き増々慚然とする孟起に、ごめんごめんと二人で口先だけの謝罪をした。

「厳寿つちとは気が合いそうやと思ふとつたけど、思つてた以上やわ」

改めてよろしゆうな、と挨拶してきた文遠に、此方こそを返事を返した。こうして薺華はまた新たな友を得た。

張文遠と酒を酌み交わし親交を深めていると、河南尹の従僕が文遠の元へやって来た。少し離れ、何事か言葉を交わすと文遠が此方を見遣つて、ほほう、と面白げに呟いた。はて、なんであろう? 従僕も此方に向き直り、恭しく、恐らくは主の伝言を伝えようとすると、文遠が手で制した。

「ああ、ええよ。ウチから伝えるわ」

機嫌良く従僕を制すると、その従僕は「では宜しくお願い致します」と頭を下げ、そそくさと辞した。

「で、なに？」

「いやな、今からウチと立ち合うてんか」

「それは全然良いけど、意味わかんない」

「河南尹がな、アンタの力量を觀たいんやと。ウチの同僚にしたいんちやう？」

「何河南尹が？」

「何、不思議そうな顔してんねん。アンタ今、この洛陽じゃちよつとした話題の的やで」

「……なんだつて？」

自分の評判が世間に流布している事は既に把握している。陳公台から意図的に流布されている節があると聞き及び、答えを得た。公台は嚴氏が母の治定を流布するに合わせ、自分の何時かの立身の為に流したのだろうと考えているようだが、恐らく違う。州内であればそうだったかも知れない。州の有力者の耳に止まれば、そこから仕官の道が開ける。この時代では普遍的な手段だ。だが、母がその有力者のひとりであるし、何より、嚴氏に州外にまで人物評を広める伝手はない。ただ一つを除いて。

そこに思い至った時、凶顔の総鏢頭そうひょうとうの笑顔が脳内に煌いて頭痛を憶えた。良かれと思つてやったのか、或いは天然か。どちらにしても今の薜華にとっては余計な事であつ

た。とは言え、叱り付ける訳にもいかない。普通に鑑みて、自分の足を引つ張っている訳ではないのだ。何とも悩ましい問題である。

しかし、今の洛陽で話題となっているとはどういう事であろうか？　そこが解らない。

「あんなあ、嚴寿つちは南蛮の朝貢の立役者で、十常侍に煮え湯を飲ませた侍御史の予てからの親友で、一人五絶なんて呼ばれ始めとる恋に喰らい付いた若武者やろ。あとんや、袁家との繋がりも噂されとったな。そら話題にもなるわ」

「そして河南尹の宴に応じたのです。宦官勢力は今頃何を考えていますかな」

「ちよつと待つて、私、まだ無官だよ？　宦官がそこまで……」

「だからこそ、どの勢力も今迄様子見程度だったのですぞ」

「覚えず絶句する薜華に、徐に十常侍に煮え湯を飲ませた親友が頭を下げた。

「済まない、薜華。私の軽率がお前にまで累を及ぼすとは、考えが足りなかつた」

「謝る事なんて何も無いよ。鋼は正しい事しかしてないんだから。これは私自身が迂闊で、高を括つてた事だ。と言うか、それくらい自分の事をこそ心配して欲しいんだけど」

人の事となると途端にこれだ、と困つた笑みを小さく漏らしながら応じた。

それにしてもである。どうやら、これ以上洛陽に長居するのは避けた方が良さそう

だ。兀突骨も南蛮へ戻つた事だし、久し振りにあつた親友や新たな知己との日々が心地

良く、つい長逗留してしまつたが、そろそろ本来の目的に戻らねばならない。

それはそれとして、

「話を戻して、立ち合うのは好いけど得物はどうするの？」

「剣でええやる。ウチとしても、こんな見せもんみたいな場で尋常の勝負つちゆう気にはならんし」

その点は自分は気にしないが、戦場で武を奮う事こそを至上とする文遠にとつては観衆の前、というのは大いに気掛かる部分であるらしい。

場の準備が整えられ、上座に座する河南尹何進かしん*152に長揖ちようゆうすると、張文遠と向き合つた。その時、何河南尹の脇に侍る女性の視線が気になつたが、剣を構えるとその事は意識から取り除かれた。

「ふうん、これが嚴寿か。袁術の奴めが執心するのも判る、か？」

怪しく輝く琥珀色の瞳が、慶祝と文遠の剣舞を眺める。そう、それは正に舞の様であつた。申し合わせたわけではない。だが、互いに繰り出される剣戟は振るわれる度に

鋭さを増しながら、相手の呼吸を読み取る様な軌跡を描いた。両者の実力に大きな隔たりがあれば成立しない白刃の舞。無論、見る者が見れば文遠が上手である事は解かるだろう。極一部の達人ならば、振るわれるのが互いに愛用の得物であれば、今少し差が明確に見て取れただろう事まで見抜いたろう。それでも敵慶祝の実力が噂倒れではないと、この夜、多くの者に認められる事となった。宴の主催と、慶祝をこの場に招くよう進言した者にも。

一際甲高く剣が打ち合わされる音が響き、その直後、文遠の剣閃に多少の変化が表れた。数合振るわれる中に一閃、時折指導するかのような軌跡を描く剣筋が顔を出したかと思えば、また数合の中の一閃、殺気を纏った剣刃が閃いた。

対する慶祝もその変化に驚きながらも慌てる事無く対応する。文遠の変化を歓迎するように、その顔には一種獍猛な笑みが張り付いていた。

「張遼も本気ではなからうが、それでも付いていける敵寿は確かに大した者よな」

「仰る通りかと」

「それで？ 余には取り込む事は出来ぬと？」

「河南尹様だからという事ではありませぬ。あの者を官職につけるには、機を見ねばなりません」

「ふん、まあ良い。王朝の役に立つのなら、その機とやらを待とうではないか」

何進——真名を傾^け——には先の変化を捉えるまでの審眼はない。だが、全く武から縁遠い訳でもない。大牧場主であつた傾は盜賊対策の為に少なくない部曲を抱え、必要とあらば自ら騎馬に跨り指揮を執つて賊共を蹴散らしていた。

今も浅く焼けた肌は、貴種にはみられぬ健康的な美をこの成り上がり者に与えていた。但し、その内面は健康的とは言ひ難かつたが……。女として過度に恵まれたその肢体は、この外戚筆頭に止まる事無き快樂の探究者としての資質を与えた。異母妹のお蔭で多大な権力を手に入れてからその性向はより強くなり、その点をして十常侍には取るに足らぬ愚物と侮られ、だからこそ何氏は外戚として迎えられたが、それだけの人物ではなかつた。

傾は内に取り込んだ配下に対しては温情深く、大店を切り盛りしていた事務能力は政務にも發揮され卒なくこなした。賤業の出でありながら、本来身に余る地位を少なくとも今のところは順風に渡つていた。

間違つても傑物ではない。だが、ただの小物と断ずるほどに暗愚ではない。それが何進という人物であつた。ただ情弱な外戚を求めていた宦官の思惑は見事に外れ、将来の禍根を自ら招き入れたのだった。

そんな外戚の出世頭の前で、薜華と文遠の劍舞は終着を迎えようとしていた。

「なあ、ねね」

「なんですか？ 改まって」

特に興味もなく、ただ何となく劍舞を眺めていた陳宮——音々音——は、隣から掛けられた真剣みを帯びた声音に、其方を振り向いて答えた。

声の主、董幼宰は硬い表情で、やや声を潜ませて訊ねてきた。

「外戚と宦官の関係はどうなっているんだ？」

「それ程悪いものではないのですぞ、少なくとも表面上は」

「しかし先程は」

「宦官、それも頂点たる十常侍も決して一枚岩ではないという事ですぞ。薜華に限らず、今この場に居る事で我々も蹇碩*153を随分と刺激しておるでしょうなあ」

この言葉に、幼宰の向こう側に座る馬仲承の肩がびくん！と跳ね上がるのが見えたが無視した。

「応じるべきではなかったと思うか？」

「それはそれで河南尹に角が立ちますぞ。ところで、そも何故薜華が招かれたのです？」

あやつ自身は無官であるからと軽々に応じた様ではありませんが」

「元は私が招かれたのだが、その場にいた薺華にも『御友人もお気軽に御出で下さい』と言われてな。格式張った宴ではないと言い含められて、それならばという事になったのだが」

「成る程、恐らく薺華が同席していた時機を狙われましたな。海内かいだいから掻き集めた名士十名の中に、助言した者があるのでしような」

「……黄門こうもん侍郎*154殿だろうか？」

幼宰が、自身を侍御史に押し上げた人物を持ち出したが、流石にそこまでは判らない。だが、ありそうな話だ。何遂高が招聘した海内名士二十名の中でも、黄門侍郎に任じられた才媛は凶抜けている。呂奉先を中央へ招聘する為に并州へと遣わされた十名は勿論、共に中央に参内する事となった残り九名と比べても、そして、死んでも口には出来ないが、恐らく自分と比べても……。

「さて、そこまでは……」

言いながら何気なく視線を河南尹に向けると、その脇に見覚えのない女の姿が見えた。

こいつだ。

軍師の直感、などというあやふやなものではない。今も文遠に喰らい付いて劍舞を披露する慶祝を観察する眼を見れば、直ぐにそうと知れた。

見覚えはない。最近、招聘された人物であろう。その眼を見れば智者である事は間違いない。と同時に、通り一遍の武技も修めているようだ。その身をよく観察すればそれなりに鍛えてあるのが見て取れた。珍しい部類ではある。自身も主と共に戦場を駆け抜ける為に馬術は鍛え込んでいるが、それだけだ。智の道に生きる者が、武に感^{かま}けていられる時間などない筈だ。だが、そのような奇矯な智者が集う勢力には聞き覚えがあった。褐色の戦狂い。

となれば、招聘された訳ではない？ それ以上は推測の域を出る事は決してないが思考は止まらない。

「ねね？」

「あれですな」

俄かに反応のなくなった此方に、幼宰が問い掛けてきたので短く応答した。幼宰ならば一言で事足りるだろう。その証拠に、鋭さを帯びた声音で応えてきた。

「知らない顔だな」

「ねねの聞き及ぶ中にも、あの者に該当する軍師は居りませんな」

「河南尹様の属官ではない、のか……？」

「恐らくは、ですな」

そこで慶祝と文遠の剣舞は終着した。文遠の剣が慶祝の額に、慶祝の剣は文遠の脇腹

に僅か届かず。河南尹が立上つて決着を宣言し、二人が劍を引き河南尹に向き直り長擯すると、歓声が沸き上がった。

それに紛れて幼宰と二人視線を互いに戻すと、当たり障りのない話題に移行した。二人の空気に入り込めずにいた仲承と、劍舞を真劍に観ていた孟起も加わり、表面上、この話は棚上げされた。

しかし、音々音は心中で思考を続けていた。幼宰はなかなか得難い友人である。その親友の慶祝も悪い人間ではない。愚図でもないが、少々迂闊な所も散見される。さて、憶測混りの話をどこまですべきだろうか？

「それで、一人五絶ってどういう意味なんですか？」

「どうやら文遠が語っていた称号が気になっていたらしい馬仲承が、陳公台に問い掛けました。」

「例えば、翠は天下五騎に数えられておりますな」

「おう」

「あとは、北方の勇。ま、霞も直にその称号を得ましような」

「霞さんが加わっても三人なんですな」

「必ず五柝埋めなければならぬものではないのですぞ。その時代に『天下』を背負えるほどの傑物無くば一人もいない事も、逆に五人を超えても構わないのですぞ。ま、後者は殆どあり得ぬでしょうが」

仲承が不思議そうに言うが、そもそも超絶の域に達する者がそうほいほい出現する事はない。

「ふむ」

「そう言えば、薜華の御母堂も且つて天下五弓に数えられておったそうすな」

「今は違うのか？」

思い出したように言えば、孟起が首を傾げた。

「戦場で弓を奮う機会が減ったのでしような。自然、人の口の上る事も減ったのでしよう。その親友の黄忠などは、今でも荊州に神弓在りと言わしめる活躍を見せておるようすな」

「天下五騎に天下五弓か。他にもあるんだな？」

「然り。天下五剣に天下五槍、そして天下五将ですぞ」

幼宰はどうやら答えに近づいている。五種の超絶の武人。指折り数えていた孟起も答えに達したようだ。

「おい、じゃあ、恋の一人五絶って……」

「劍槍弓騎將、全てに該当するという事か」

「流石、恋さんと言うか……。本当に凄い」

「ま、当然の評価ですな。しかし近い将来、世の者共はもつと明解な呼び名で恋殿を讃えるでしょうな」

「それは？」

幼宰の問い掛けに、待つてましたとばかりに誇らしげに宣言した。

「即ち、天下無双」

「確かに、恋以上つてのが居るとは考えられない、か」

「お、なんや翠。いきなり恋に白旗上げとるんか」

「そんなんじゃないつての」

「何、なんの話？」

そこへ薙華と文遠が戻つて来た。二人とも一仕事終えた爽快な表情である。

「恋殿の凄さを知らしめていただけですぞ」

「それは最早語るまでもないよね？」

「確かにその通りですな」

ふふん、と我が事のように胸を張る公台に、微笑ましさを憶え、くすりと小さく笑み

を漏らす。主の事となると年相応の愛らしさをみせるが、これでこの場に居る誰よりも知に長けるのだから侮れない。そんな公台に、一呼吸置いてから問い掛けた。

「ところで、ねね。話は変わるけど……」

「薜華の聞きたい事は判るのですぞ。ただ、ねねも見覚えがなく、憶測でしか語れませんぞ」

「……それでもいいよ」

これが智者の凄いところだ。一瞬、あっけに取られたように瞠目し、頷いて見せた。そして、この夜の宴のすぐ後、何ともやもやする思いを抱えながら洛陽を後にする事となった。

第十一回——了——

河南尹主催夜宴の呂奉先。

「……ねい」

一人静かに胡坐をかいて座る恋。その胡坐に乗つかつてゐる丸い毛皮をなでなで摩りながら呟き、はつ、と気付いたようにふるふると小さく頭を振った。

「ねこじや、ない……」

そしてまた、そうつと毛皮を撫でた。いや、それは毛皮ではなくトラだ。寒さに弱いトラの為に慶祝が買ひ与えた虎柄の外套に包まり、うつとりと寝こけているのだつた。その様は確かに猫のようだつた。大ききささえ気にしなれば。

「トラは、……しゅんかの、大切」

周囲の喧騒から切り離されたかのように静かで穏やかな空間に、二人は時間の流れさえ緩んだかのような時を過ごしていた。

いつもなら慶祝の傍を離れる事の方が珍しいトラであるが、寒さが増してからは恋にすり寄る事が増えていた。それは実に単純な話で、恋の方が慶祝よりも体温が高いがためであつた。この事に関し、慶祝は一度ならず親友の幼宰に愚痴混りに泣きついて、少しだけ、ほんの少しだけうざがられたりしていた。

そんな慶祝に申し訳なきを感じながらも、身を切る寒さには勝てず、恋が同席している時は、より暖かい方へと自然とその身が向いてしまうのだつた。

それでもトラは最終的には慶祝の元に居る。

「しゅんかも、……トラの、大切」

兀突骨をはじめとする南蛮使者の少女達は、既に南蛮へと戻った。秋が深まる前に、それでもやや身を縮こまらせながら。

トラは、天子との謁見の際、正式に漢土を周遊する勅許を得ていた。無論、天子の許可があるうとなかろうと、トラの選択に違いはなかったろうが、これは取りも直さずトラの身の保証となった。「これで薜華が無闇と刃傷沙汰を起こす心配も減るでしょうな」とは公台の言である。

トラはうつらうつらと夢を見る。未だ見ぬ地、未だ訪れぬ時間、何処へ行こうとも、何処まで行こうとも、隣には厳慶祝の凜とした姿が在った。

「……姉」

トラのいつもの寝言に、小さく優しく、恋は微笑んだ。

第十二回 立于人寰

「(ハハ)の郷もか……」

幾分の虚しさを、それ以上にやり切れぬ義憤を含んだ呟きは、びゅうびゅうと半壊した家屋や防柵を叩く虎落笛に掻き消された。明らかな襲撃の爪痕に、仲冬十一月の寒風が容赦なく吹き荒んでいた。

ここは豫州よしゅうえい潁川郡いんぐんえい潁陽県。秋が終わる前には京師を旅立ったにも拘わらず、薜華の道程は遅々として進まずにいた。

豫州汝南郡じよなんぐんちよう陽侯国ようこうこくに葛陂かっぴという郷がある。この郷にて何儀かぎという男が徒党を率いて旗揚げした。世に言う葛陂賊かっびぞくの出現である。

この葛陂賊、蜂起以来暴れに暴れ、瞬く間に根拠地の汝南郡のみならず、潁川郡もその支配下に収めてしまった。豫州兵はお世辞にも強兵とは言えず、有能な指揮官にも恵まれず、一万を超える軍勢にまで膨れ上がった葛陂賊を討伐どころか、抑える事すらも出来ずにいた。先進文化と名士の地であるが、このような情勢下では無力に近かった。

豫州入りして以来、往く先々で目にする光景を前に、薜華とトラにできる事は少なかった。それでも、荒れ果てた聚や郷をただ素通りする事など出来ずに、家屋の修繕、廃

材の処理、死者の弔い、そして時には未だ周辺をうろつく葛陂賊の小部隊（どうやら本隊は既に潁川にも汝南にも居ないらしい）を征伐などした。微力でも自己満足でも、何かせすにおれなかった。

年を越すまでに豫州を越える事は出来ないかもしれないな。そんな事を考えながら、薜華は暗い影を落とす郷に足を踏み入れた。

第十二回 立于人寰^{りつうじんかん}

潁陽城門亭。打ち破られた門扉が修繕もされずに無残を晒すこの場所に、一人の女が陣取っていた。このところ、毎朝こうして暫しの間、ここで立ち尽くしている。

緩やかに波打つ明るい空色の髪を肩口で切り揃え、淡い桃色の牡丹を象った髪飾りが左右の側頭部で微風にふわふわと揺れている。緩く垂れた梅紫色の瞳は緊張感もなく、城門の外を見詰めている。肩を露出し、胸元の開いた赤を基調とした衣装は、この寒空の下では如何にも頼りないが、それを身に纏う女は平然としたものである。

目元より尚緩い口から、荒廃した県城に似つかわしくない気軽い呟きが漏れた。

「さつてさて、そろそろ到着してもいいんじゃないですかねー？」

全体的に緩く、周囲の空気を気にも留めぬ立ち姿。人によつては鼻につくであろう雰囲気を纏わせた女は、その実、内心少々焦りを募らせていた。先の独り言も、その内心が漏れた形である。

待ち人（と言つても一方的に待ち構えているだけだが）未だ来たらず。ここ数日、女は故郷より呼び寄せた手勢をこの潁陽城に集結させ、ある人物がこの県治に立ち寄るのを待つていた。状況は逼迫している。しかし同時に、これを天の機と見た女は、この地を自分の出発点と決め込んだ。その為には、目的の人物——厳慶祝——がどうしても必要だった。

彼女が洛陽を発ち、豫州に向かうと見定めるや、かひこく下こく国こくの一族郎党を豫州に集め、情報ほうほうの収集を命じた。そして、潁川郡の凡その現状を知ると、集める情報を絞り精査した。結果、葛陂賊はどうやら北へ向かった事が判った。黄布を標とした賊に合流する積りらしい。なんでもその黄巾を巻いた連中は天下を平らげる気でののか。

嗚呼、遂にこの時が来たか。

その情報を得たその時、知らず漏れた眩きは、諦めと期待が入り混じっていた。

幼少の頃よりこの国はもう駄目だと思つていた。だから軍略を学んだ。身体を鍛えた。武術や馬術に手を出した。長じても家業に身を入れず、名士と通じ、救民に精を出

した。そんな自分に対して郷里の人達は口々に「魯家の娘は気違いではないか」と噂した。確かに時勢は悪いが、国の滅亡を確信しての行動は行き過ぎにしか見えなかつたろう。だが見るがいい！ 遂にこの時が来たのだ！ 滅びの時が芽吹いたのだ。腐った土壌でしか咲かぬ呪わしい花が、遂に芽を出したのだ。

自分が先走っているだけならばそれで良かった。人々の言うように自分が狂っているだけならば、それでも良かった。だが狂っていたのは時代の方だった。いや、時代の方も、だ。

そこまで見越しているのなら、師の後に続いて褐色の英雄の旗の元に集えればいい。そこで存分に力を発揮し、新たな天下泰平の為に死力を尽くせばいい。元々、師の詰まらない言い付けに過ぎないのだ。適当に自分なりの人物評を付けて報告すればいい。

なのに、今、自分は彼女を待っている。

将器はある。きつと一角の将になるだろう。だが、果たして王器はあるだろうかと問えば、そんなものはないだろう。

「包パオよ。厳寿なる者の事を探って来い。……大殿が言うには、『面白そうなやつ』であるらしい。大殿がそう言うからには、近い将来、我等の前に立ちはだかるやも知れぬ。まあ、大殿にとつて障害になるかは疑問じゃがな」

不意に師の声が脳髓の奥の方で甦った。確かに面白そうな子ですよ。包は記憶の奥

に向けて心中で答えた。

彼女よりも強い者はそれなりに居るだろう。儒に沿う為ではない孝行者だって他にも居る。異民族と友誼を結んだのは彼女が最初ではない。だが、それでも嚴寿という少女には他の傑物にはない何かがある。

包は、一度だけ一人で洛陽の街を歩き回る慶祝を見掛けたことがある。あの時、彼女は何かを探していた。それも多分、無意識の内に。何気なく散策しているだけに見えて、時折、不意に視線を周囲に彷徨わす事があった。しかも本人はその仕草に気付いていないようだった。

此方の視線に気付いて僅かに警戒しているのが見て取れた。にも拘らず、そのような不用意な事する人物ではないだろう。だが彼女は明らかに何かを、或いは誰かを探し求めていた。少なくとも包の目にはそう映った。

面白そうな人物であるという評には異論はない。だがきつと彼女はそれだけに止まらない。あの少女の中にはまだ何か眠っている。そんな気がする。……矢張り、自分は狂っているのかも知れない。

偉大な師を得て、大陸の未来を託すに足る英雄を知ることができた。幼き頃から予見していた滅びの上に敷く道が整備されたのを感じた。その時、詰まらなさを感じたのを今は認めるしかないだろう。だからと言って、そこから逸れるなど愚かにも程がある。

きつと自分は、あの少女に在りもしない夢想を抱いているだけなのだ。そうやって理性で蓋をしようとしても、もはやこの衝動を抑え込める気は微塵もしなかった。

その衝動に任せて、本来辿るべき道を自らの意志で放棄した女は、包という真名を持つその女は、姓を魯、諱を肅、字を子敬*155といった。

薺華が潁陽城に着いた時、まず困惑し、次に疑念が湧き、そして呆気にとられた。溜め息を一つ吐いて、覚悟を固めた。魯子敬と呂子明と共に、葛陂賊三千を討つ覚悟を。

「お待ちしておりました。厳慶祝様で御座いますね」

開口一番、県城門亭で待ち構えていた門亭長と思しき男にそう声を掛けられ、薺華は一瞬、馬上で固まった。

「確かに私は厳寿ですが……」

「困惑されるのも無理からぬ事。ただ、この県城は貴女様をお待ちしており申した事、どうかご理解頂きたい」

「潁陽城、の人達が……ですか？」

「はい。つきましては、県堂へ御出で下さい。詳しくは其処でお待ちになって居られる

魯子敬様がお話になられるでしょう」

県城を上げて自分を待つていたなどと言われ、きよとんとした顔で此方を振り向いたトラと顔を見合わせ困惑していると、警戒を煽る名を出された。河南尹の宴にて自分を観察していた女。後日、陳公台が調べて、洛陽を発つ前になんとかその名が判明した。

しかし、目的が判らない。どうやらこの街の人々に何か吹き込んだようだが、一体何を考えているのか……。頭の中でぐるぐると思考を巡らせながらも亭長に受け答えし、二人の亭卒に先導され、潁陽城へと足を運んだ。そして、更に困惑する羽目になった。「にゃー。皆、姉ーを歓迎してるにゃ」

トラの言葉の通り、目抜き通りを行く葬華に気付いた人々が、期待に満ちた目で歓声を上げていた。だがその期待は、心中の不安を塗りつぶす為のものだ。どこか必死な、縋りつくような粘っこい期待。ただでさえ身に覚えがないというのに、なんとも居心地悪かった。

だが、段々と解かりかけてきた。武力しか持たぬ身だ。何を期待されるかと言えば、それだけだろう。そして、県城門からここまで、戦の跡が其処彼処に伺える。修復はあまり進んでいないが、それなりに時間が経っているように見えるが、賊が再び現れたのだろう。詳細は判らないが、一度強かに打ち据えた街をまたも狙うとは……。

そうこうしている内に県府の堂に着いた。後はもう魯肅に直接問い質せばいい。そ

う強く心に決めて、薺華はトラと共に県堂に足を踏み入れた。

「お待ちしてましたよ」

堂内の議場に案内されると、透き通った朝の空のような髪色の女が長指して此方を出迎えた。この場には、今入室した薺華とトラ、挨拶して来た魯肅と、その背後に一人。他には誰も居ない。県令とその副官、故吏達は先の襲撃時に我先と逃げ出してしまったらしい。全く以って嘆かわしい事だが、賊は中央からの勅任官は必ず殺して回っていたらしく、汝南での暴れっぷりを聞き及んでいた県令には遁走以外の選択肢など存在しなかったのだろう。

だが、今はその事はどうでもいい。まずは目の前の女の事だ。

「説明、してくれるんでしょうね」

「まあ、そうつんけんしないで下さい。まずは御挨拶を。既にお見知りおきかも知れませんが、私は魯肅といいます。字は子敬。そして、この美少女が呂蒙*156。字は子明ちゃんです」

「……確かに可愛いけど」

「御二人とも何を言ってるんですかっ?!」

此方の棘も意に介さず自己紹介してくる魯肅にやや苛立ちが募る。が、魯肅の斜め後ろに隠れるように控えていた少女を紹介され、つい頷いてしまった。そして呂子明の反応に、思わず和んでしまった。長過ぎる袖で、鬼灯の様に真っ赤になった顔を覆い隠す仕草などは反則であろう。トラなどはその反応が余程気に入ったのか、楽しそうに子明の顔を覗き込もうとしていた。

いかん、こんなところで和んでいる場合ではないと、咳払いを一つ、気を取り直して本題に入った。

「それで、賊がこの街に迫っている、って事でいいのかな?」

「話が早くて助かります。なので、私達を率いて黄邵こうしやう*157率いる葛陂賊の一派三千を討つて下さい」

話が早いのは魯肅の方だ。早過ぎて付いて行けず、一瞬、呆氣に取られてしまった。「……意図が解らないな」

「解かりませんか? 今の漢土に貴女程の人を遊ばせておく余裕なんてないんですよ」

若干、目の輝きを強くして告げてきた。やや非難するような、しかしその顔には強気な笑顔を張り付けて。

「洛陽からここまで、ずいぶん時間が掛かりましたね? まあ、お蔭で追跡は楽でした

し、こうして先回りも容易に出来ましたが……。素通りできなかつたんでしよう？ 貴女はきつとそういう人だろうとは思っていました。でもですね、そんな事ちまちまとしてる場合ですか？ 違うでしょう。そんな事は力のない庶人が必死になつてやるような事ですよ。おっと、力ない人達を馬鹿にしてるわけじゃありませんよ？ ただ、貴女は力ある側の人間なんですよ……」

「……何が言いたいのさ」

「世に立て厳寿!! 力の使いどころを間違えるな！ 民草の悲鳴を止めたいのならば、同じところに立つな！ 貴女は上に立たなければならぬ人間だ!! 私達の上に立つて獣に墮した賊を討て!!!」

魯子敬の怒号のような激が議場に響いた。その場にいた者達の心魂にも、頓に、薙華の心魂に。

真正面から激を受け瞠目した。息を呑み、数瞬呼吸を忘れた。思い出したように大きく息を吐いた。息と共に、胸に溜まっていた何かを吐き出した。

「好き勝手言ってくれるよね」

「気に入りませんか？」

「ああ、気に入らないね」

「そうですか」

「でも、有り難う。やるよ」

「ひやわっ!? …… ……ふっ、ふっくく、くふふふふ」

二人の遣り取りに、おろおろとしていた呂子明は、肩を振るわせ笑い出した魯子敬に、もはやどうしていいか判らず困惑し切りであった。トラは不思議なものを見るように子敬を眺めていた。

「面白い人ですねえ」

「益州を発つて以来、ちよくちよく言われるようになったけど、そんなに変かな?」
「気にしなくていいですよ。さ、あまり時間もない事ですし、本題に入りますか」

「それにしても、子敬は結構無茶苦茶するよね?」

「ひやわわっ!? なんですかそれ、そんな事言われる筋合いないんですけど?」

「いや、この街の人達に無断で、葛陂賊にこの県城で討伐隊が結成されたなんて情報流して誘き寄せるとか、なにしてくれてんの。しかも担ぎ出そうとしてた私がこの街に立ち寄る前につて」

「私の思った以上に慶祝さんがもたもたしてたのが悪いんですよ。機を逃して葛陂賊本

隊、更には黄巾賊と合流されるわけにはいかないじゃないですか」

「そう言われてもなあ。人を遣つて呼びに来れば良かったのに」

「驚かせたかつたんです」

「なにしてくれてんの」

城門の上に据えられた門楼で、葛陂賊がやつて来るのを待ち構えながら言葉を交わす慶祝と子敬には、戦前の緊張が感じられなかった。緊張に身を包まれながら傍に立つ呂子明——真名を亞莎^{アーンシェ}——は、そんな二人の話を聞くとはなしに聞いていた。

呂蒙。長い胡桃色の髪を大きな二つのお団子にして項で留め、視力の悪さからややきつくなつた枯茶色^{からちやいろ}の瞳には愛らしさと凛々しさが同居している。小豆色の朝帽と、袖長だが裳を履き忘れたかの様な裾短の衣装が特徴の、薜華と同年代の少女。

亞莎は、故郷である汝南郡富波侯国^{ふうは}が葛陂賊に荒らされ父を失つた。腕つぶしには自信がある為、賊を蹴散らし父の仇を討とうと考えたが、母を残して行けぬと一時はこれを諦めた。しかし、運命は彼女に待つたをかけた。汝南を調査していた魯子敬の部曲と遭遇し、その力を見た部曲の者達によつて、魯子敬と引き合わされた。こうして、母と共に江南へと落ち延びる筈だった少女は潁川へと導かれた。そして、孫仲謀に見い出されるのではなく、嚴慶祝に出会つたのだつた。

意識せぬうちに、その慶祝を見詰めていた事に気付いたのは、慶祝と目が合つてから

だった。

「どうしたの?」

「い、いえ、なんでもありません。」

慌てて目を逸らすも、失礼な態度を取ってしまったと、俄かに落ち込んだ。反面、大して齢も変わらないだろう少女に何を気後れしているのだろうかとも思った。いや、答えは解っている。魯子敬が城内に喧伝した彼女の評判を知っているからだ。幾度も実戦を経験している遠く益州出身の荒武者。対して自分は所詮小さな郷の中で一番の腕つぶしと言っただけの詰まらない女だ。少ない稼ぎを何とかやり繰りして得た丈の合わない古着を、何とか自分で仕立て直して、不格好ながらも遊侠を気取っているだけの小さな女。そんな自分が不躰な視線を向け、あまつさえあんな態度を取ってしまうなんて。劣等感がじくじくと亞莎の小さな胸の内に沸き上がって来た。

しかし、慶祝はそんな亞莎の内心など知らず、先の挙動も気にせず声を掛けてきた。「緊張してる? そう言えば、初陣だったね」

「う……え、はい。少し、緊張してるかも知れません」

「大丈夫だよ。相手は所詮数と勢いを頼みにするだけの賊徒共。子明が遅れを取るような相手ではないよ」

「わ、私の実力なんて分かるんですか?」

「最近、見れば大体判るようになってきてね」

「それに、相手の数こそが問題だと思っただけ……」

「ただそうだけど？ 子敬」

「相手は三千。此方は私の郎党五百に、県兵と義勇兵混成の五百、合わせて千。急拵えですが城門、城壁の修復も出来ましたし、特に問題ありませんねー」

「そうなんですか？」

「城ぜめには三倍のへーりよくが必要なんにゃー」

「そ、そうなんだ」

「おー、トラちゃん、よく知ってますね」

「えっへんにゃ」

小さな異民族の少女にまで教授されてしまい、流石に落ち込む。自分の名前を書く事も覚束ないようでは当然か。と自虐的に沈思した。今迄はそれでも特に不自由はなかった。しかし、きつとこれからはそうはいかないだろう。まず文字を覚えよう。小さく密かに決意する亞莎であった。そして、そこでふと気付いた。

「あの、三倍の兵力という事は、丁度その条件を相手は満たしているのでは？」

「ふっふっふ、数の上だけでしたらね。しかし、連中と我が方ではもつと決定的な差がありますよ」

「決定的な？」

「一騎当千の慶祝さんと、兵法に通じたこの魯子敬ですよ！ それに賊共に勢いがあるうと、此方だつて士氣の高さは負けてません。そして……」

「……そして？」

「子明ちゃんも居ますからねー！ 期待してますよ」

「私……ですか？」

「勿論ですよ！」

にこにこ笑顔で告げる子敬。半ば呆然とその子敬を見詰め、視線を感じそちらに目を向ければ、矢張り笑顔で頷き掛ける慶祝の姿があつた。いつもはぼんやりとしている視界の中、その笑顔は、やけにくつきりと見えた。

「が、頑張ります」

だから、月並みだが精一杯の意気を込めて宣言した。

陽が中天に差し掛かる半時ほど前、遂に葛陂賊が潁陽城に攻め寄せてきた。いや、あれを葛陂賊と呼んでいいのだろうか？ 薜華の視線の先には、蠢く人の群れの其処彼処

から生える粗末な旗が寒風に柵引いていた。

「黄布の旗印……」

「おやおや、もう黄巾賊気取りのようですね」

「どういう事だ？ 本隊は今頃黄巾賊と合流してるのかも知れないけど、あいつ等にそんな密に連絡が取れているとは思えないんだけど」

「そりゃあ、勝手に掲げてるんでしょう」

彝華の疑問に、脇に控える子敬が事も無げに答えた。それに対し、トラが更に疑問を投げかけるが、子敬の返答は気楽なものだ。内容は馬鹿々々しいが。いや、だからこそ気楽に応えたのだろうか。

「そんなことして大丈夫にや？」

「そんな事でもしないと、あれだけの数にはなりませんからねー」

「ああ、なんで三千も未だにこの辺りを彷徨うろついてるのかと思つてたけど、要するに募兵でここまで膨れ上がったのか」

「そういう事です。ただの賊には靡かずとも、腐つた漢王朝を打倒し自分達が天下を差配しようとなれば、転ぶ連中も出てくるって訳です」

「馬鹿げてるな……」

「同感です。でもね、この豫州ではその馬鹿な迷妄にこそ、縋りつく価値を見出す弱者が

それなりに居るんですよ」

子敬の言葉に、子明の眉音が寄った。豫州の現状は酷いものだ。連中がどんな勧誘の仕方をしたかは分からないが、あの中には糾合された匪賊の他にも、王朝と現状に絶望した庶人も混じっているのだろう。

子明のその反応を横目に、薜華は子敬に更に疑問を重ねた。

「黄巾賊にはそれほどの求心力があると？」

「のようです。私も直接は知らないんですけど、どうも頭目の張角ちようかく*158なる者が大陸を手に入れると宣言して、信徒は大盛り上がりらしいですよ」

「信徒、ね」

子敬のその言には溜め息で応え、背後を振り返った。城壁には子敬の郎党の一部と義勇兵の中で兵役経験者が、手に弩を携えて揃っていた。城門内側には郎党の残りと県兵が槍を担いで控えている。残りの義勇兵は物見や、矢や石の補充等に就いている。

「確かにこの国の現状は酷いものだ」

大きな、よく通る声で薜華は告げた。門楼下の槍部隊にまで聞こえるような声で。

「官吏の腐敗、天候不順による凶作、賊の横行、数え上げれば切りがない。多くの者が、この国はもう駄目だと、限界だと感じている」

賊軍が徐々に近づき、その行軍の騒めきが大きくなる中、直に戦端が開かれると誰も

が緊張するその中で、薜華の言葉は続く。

「皆の中にもそう思っている者は居るんじゃないか？ 県令がいの一番に逃亡するなど、目の前で失望を味わわされた事だろうし。正直に言おう。私も今のままではこの国に先はないと思っている」

確かに多くの者が常々思っていた事だ。だが、それを高らかに明言して見せた薜華に、どよめきが起こる。誰も思っていない口をするに憚れる。下手な事を言えば、我が身がどうなるか……。しかし、目の前の少女は事も無げに告げた。一縷の希望を託して指揮官として迎えた、まだ年若い少女。自分達は誰を将に迎えたのか、それが解かっている。今この時気が付いた。皆が薜華に注目した。声を荒らげ県城に攻め寄せってくる黄巾賊も、昼へと昇り続ける太陽を以つても上がらぬ冷めた気温も、戦へのそれぞれの意気込みも、今この一時は忘れてただ薜華だけを意識した。

「そんな中で、群雄として次の天下を窺う地方領主の噂なんかも広まってきた。後漢王朝を再生させるか、新たな天を戴くか、何が最良の道なのかは卑小な私には判らない。だが、奴等にだけは次の天下を任せてはならない。それだけは確かだ」

魯子敬は腕を組みながら悠々とした笑顔で、見守るように聞いていた。呂子明は直立不動のまま聞き入っていた。

トラは、眩しそうに見詰めていた。ああ、ここから始まるんだ。と思いながら、何が、

かは分からない。ただ、薙華との楽しい旅はここで終わり、別の何かがここから始まるんだと、それだけは判った。

「卑劣な賊のまままで天道を往けるなどと、厚顔な思い違いでこの地を蹂躪した奴等を許しておけるか？ 奴らの妄想する天下に生きたいか？」

嫌だ。と誰かが呟いた。当然だ、そんな事が許せるか。別の誰かが声を上げた。騒めきは次第に広がり、やがて大きなうねりになった。

「ならば思い知らせてやろう。奴等に自分が何者なのかを思い出させてやろう。何者にもなれずにここで只無造作に滅ぶのが相応なのだ、理解させてやろう」

うねりは一つの意志となり、鬨の声を上げさせた。

薙華は再度振り返り、黄旗に導かれ迫る賊軍を見据えた。此方の鬨の声に、負けじと怒号を上げる賊の群れを。

「誅滅の時は今！ 弩弓隊構え!!」

薙華の檄に導かれるように壁上の弩兵が一斉に構える。練度も経験もばらばらな混成軍だが、不思議ともたつく者はなく、足並み揃えてその時を待った。

「放てえっ!!」

その一言で、薙華の乱世が始まった。

開戦と同時に亞莎は門楼から降り、槍兵隊の指揮に就いた。粗末ながらも、荷車に丸太を括った簡易な撞車どうしゃが用意されているのを見た子敬の指示だ。合図を待つて簡易修復された城門を崩し、敵に逆撃を加えるのだ。

三千の兵では城を取り囲めない。一方向から攻めてくるだろう。となれば、以前の夜襲で打ち壊した城門側から攻めようとするだろう。だから子敬は修復の際、門扉に仕掛けを施しておいたのだ。打ち込まれた楔に繋がった縄を引っ張れば門は崩れ落ち、侵入者を押し潰す兵器にも、進撃を阻む障害物にもなる。

大切なのは適切な機を逃さない事。それは門楼上の子敬が請け負った。

どれだけ待ったのか。ほんの少しのような気もするし、随分と待たされた気もする。どちらにせよ、遂にその時は来た。子敬からの合図。寸分の遅れもなく縄を引く。各所に打ち付けられた楔に繋がる十を越える縄を、亞莎はひとまとめに苦も無く引き抜いてみせた。

崩れ落ちる寸前に大きな音を立てて撞車が城門に突進して来た。ただ一度の突撃で門を崩壊せしめたと、戦果ににやつく間もなく賊兵共は門扉に押し潰された。ただ、撞車だけが突進の勢いのまま、門の内側に到達した。

黄巾賊は思いもよらぬ事態に一瞬間まったが、門楼の上からの矢や投石が雨霰と降り注ぎ、慌てて城門へと殺到した。門扉の残骸と、そこに埋もれた仲間を乗り越えて、押し合い押し合い県城内に侵攻しようとする。しかし、待ち受けるのは一人の少女と、無数の槍袞であった。

城門の攻防は凄惨を極めた。門扉の残骸と撞車、更には時と共に増える賊の死体が障害となり、黄巾賊は侵入を果たせずにいた。しかし、後から後から味方が押し寄せてくるため満足に退く事も出来ない。外から見れば、侵攻速度は遅いが、それでも続々と城内へと進入しているのだ。開いた城門へ殺到するのは当然であった。城壁への攻勢が不利な現状、如何に速く城内へ兵を送り込めるかが勝負だ。碌な攻城兵器を持たぬ軍ではこの一点突破のみが勝機だった。用意できたのは撞車を別にすれば精々が弓と梯子で、城壁に取り付くところまでは出来たが、壁上へ到達するまでには至りそうもなかった。

だが、城内へ到達した僚兵はもれなく死体となっている。それが賊將の黄邵まで伝わらない。何故なら、城門の攻防から背を向けて後方へ下がろうとする者の後頭部には、

例外なく矢が額まで貫通していたからだ。

今もまた、伝令に走ろうとした賊兵を射抜いたのは誰であろう薙華である。

「いやあ、一息に三人射抜きますか」

「流石にそろそろ限界かな」

「それにしても、積極的に旗持ち狙ったり、伝令を潰したり、慶祝さんつて割と性格悪いですよ」

「子敬、後でちよつと正座ね」

「ひやわわっ?! なんですか! 折角褒めたのに!」

「今の褒めてるつもりだったの?!」

細かな指示の合間に子敬が感嘆の声を上げる。それに対し、薙華はそろそろ次の段階に移行する気が近づいてきた事を知らせる。すると子敬が軽口を叩いてきたので、同様に応えると、予想外の言葉が返って来たので純粹に驚いた。そんな戦場とは思えぬやり取りを交わす二人だが、その間にも淀みなく己の為すべき事を熟している。

「姉!、また二人逃げてるにゃ」

「ん」

そんな二人に動じず敵兵の動きに集中していたトラが報告すると、次の瞬間には二人の敵兵を射抜いていた。それを横目で確認すると、子敬は戦場を次の段階に進めるべく

動き出した。

「では、子明ちゃんに伝令を」

「じゃあ、私も一足先に行つてるから」

「へ？」

言いながらトラに弓を預け、傍らに立て掛けてあつた秋草を手に取りながら子敬に告げる。

「後の指揮は任せるね」

「ちよ、ちよつと、慶祝さん!？」

さつと左右を見回し、一番手近な梯子まで進む。胸壁に飛び乗り、そこに掛けられた梯子に片足を乗せ、そして後ろ足に胸壁を蹴りだして梯子を倒した。片足で自身を乗せたまま。

「結構無茶苦茶するのは絶対に慶祝さんの方ですよね？」

倒れ込む梯子が地面に激突する寸前に敵中に飛び降り、そのまま賊兵を薙ぎ倒し始めた薙華を、ぼかんと見送って暫し、魯子敬は誰にもなく呟いた。その呟きに、トラが律儀に「にゃ！」と返事を返した。

子敬からの伝令を受け取ると、亞莎は槍兵隊を後ろへと下げた。そして、障害物として放置されていた撞車を睨むと、ばさりと長すぎる袖を翻した。すると、ジャラリと幾本もの分銅鎖が袖口から垂れた。暗器手甲「人解」の「れんげ」の一機能である。亞莎は両腕を激しく振り分銅鎖を操ると、撞車の荷車を破壊した。一つ一つの分銅は親指よりも少し大きい程度だが、破壊力は十分だ。そして、残った丸太を分銅鎖で絡め取ると頭上でぶん回し始めた。

槍兵が下がった事で好機とみて城内へ殺到しようとした黄巾兵は、目の前で木っ端に破壊された撞車を見て足を止めた。次いで、丸太が凶暴な風切り音を立てて振り回されるのを見て後退ろうとした。しかし、後から詰めてくる味方に邪魔されて無様な押し合いとなるだけだった。

亞莎はそんな賊兵に向けて無情に丸太を放った。撞車を超える勢いで射出された丸太は、賊兵と障害物を蹴散らしながら、轟音を立てて城外まで素っ飛んでいった。一瞬の沈黙が下りる。その中を鋭い足取りで進む亞莎。城外へ歩みながら両袖を振るい分銅鎖を仕舞う。

突然の事態に付いて行けず、戦場で致命的な隙を晒す敵兵をぐるりと見まわし、背後の味方に向けて震えそうになる声音を無理やり抑えて大声で命じた。

「槍兵隊前へ！ 敵を蹴散らしてください！」

その声に、敵も味方も一斉に動き始めた。逃げようとする敵は放っておき、まだ向かってくる意気地のある敵を殴り倒しながら、人に命じると言う慣れない緊張から解放されて、密かにほつと息を吐いた。その立場に立った以上、命じた後も、無論その前からその責務は続いているのだが、亞莎にはまだその意識は育っていなかった。なんと言つても彼女はここへ至る前はただの村娘であり、これが初陣であつたのだから。だが、その働きは上々であつた。

後方で喊声が上がった。子明が城門から打つて出たのだろう。

「おお、早いな」

賊徒を薙ぎ倒しながら感嘆の声を上げた。子敬の策を聞いた時、攻勢に出る為には侵攻を防いでいた障害物を取り除かねばならない問題をどうするのかと疑問を投げかけた時、子敬が何か言う前に「任せて下さい」と意気込んできただけはある。

これなら最早この戦は決したも同然だ。敵共の動揺が周囲の全てから伝わってくる。薙華は軍気を読むにそれ程長けてはいないが、軍の振りをした賊の群れは読み易かつ

た。全体の動揺が向く先、賊徒共が頼りとする者がどの方向に居るか、容易く読み取れた。

薺華は即座にその方向へ向けて一人進軍を開始した。あとは敵頭目の頸を落とすだけだ。

戦後の処理が一段落着く頃には日が暮れようとしていた。

薺華は再び県堂の議場に居た。今、この場には薺華を合わせて四人。最初にこの場で出会った四人だけであった。つい先頃までは地縁の県吏や祭氏などの豪族もいて先々の事を協議していたが、四人の、特に魯子敬と呂子明の空気を察して、必要な事項だけ手早く纏めて退室していた。

その二人は、四人だけになつてから一言も発さず薺華を見詰めていた。薺華はその二人の視線を泰然と受け止めていた。何となくそうなる気もしてたし、この議場で他ならぬ子敬に発破をかけられてから、とつくに腹をくくつていた。トラは場の空気に吞まれたのか、一人訳もなく緊張していた。

そのトラの緊張を和らげるためでもなからうが、ふつ、と子敬が静かに笑んだ。そし

て、綺麗な所作で跪いて拱手した。子明もそれに倣い、静かに続いた。

「我が名は魯肅、字は子敬。真名を、包と申します。どうかこの真名、貴女に受け取って頂きたい」

「私は呂蒙、字を子明。真名は、亞莎です。私の真名もどうか受け取って下さい」

薺華は不思議な感慨に包まれながら二人の真名を預かった。遂に自分にもこのような時が来たかと、それも無官のままでは予想だにしていなかった。母の幕僚となるか、或いは他の誰かの旗の元に参集するかして軍功を積んだのち、その時、自らの配下を得る事もあろうと考えていた。寧ろ、故郷に帰らなかつた場合、自分こそがまず誰かにこうして跪いていただろう。

「確かに二人の真名預かった。これから私の事は薺華と呼んでくれ」

現実時は時として突拍子もない事態を目の前に運んでくるものだ。この時の薺華は頭の何処かでそんな風感じていた。しかし、現実というやつが本当に突拍子もない事態をこの少女に届けにやつてくるのはまだ先の事だった。

ある時、ある場所にて――

それは肌寒い夜の事だった。県城から阡陌農道を外れ、農地の向こう側に広がる枯草の草原を二人の女性が歩いていった。

明かりもなく、道もない。目を凝らせば夜闇よりも黒々とした県城の影姿が、草原の向こうに辛うじて見える程度の頼りない深々とした空気の中、二人の態度は悠然としたものだ。

その余りに静かな空気の中、二人の会話は驚くほど遠くまで届いていたが、それを聞くものは他に誰も居なかった。話題は近頃俄かに流行り出した管輅かんろ*159の占いである。

二人の内、年若い方はその胡散臭さに眉を顰めたが、年配の方はそれでも信じる者の多い現状を憂いていた。しかし、怪しげな占いではあるが、年配の女には何か思うところがあるのか思案深げに言葉を続けようとした。

その時、周囲に不可思議な音が響いた。短く、透き通った、何かが破裂したかのような、そんな音。

すぐさま警戒態勢に入る二人。荒事に慣れた、慣れ過ぎた者の反応。油断なく周囲を見据える。すると、今度は音が連続して響き、突如として視界が白に染まった。

それは強烈な光だった。まるで夜が破け、裂け目から朝が顔を覗かせたような明るさだった。そしてそれは発生した時と同じ様に、突然に止んだ。

元の頼りない夜に戻ると、二人は周辺にまだ何か異変はないかと目を凝らし、気配を探った。すると、年配の女性が何かを見付けた。

それは人だった。先程まで、確かに二人以外には誰も居なかつたのに、忽然とすぐ目と鼻の先に現れたのだ。ただ、その人影は倒れ伏していた。一見して危険はなさそうだが、それでも油断なく近づいてみれば、それはまだ少年といつてもいい年頃の男だった。実に奇妙であつた。光と共に現れた少年。不思議な白い衣装を纏つた少年。二人の脳裏には、直前に話していた占いの内容が浮かんでいた。

即ち、——天の御遣い。

こうして、北郷ほんごうかずと一刀はこの外史に光臨した。

だが、今は未だその天命は定かならず、大陸の行く末も見えぬままである。

第十三回 黄天當立

「あ……、あ、あんの、馬鹿弟子があああ!!」

背まで波打つ秘色色ひそくいろの髪を怒りに震わせ、弟子と同様に垂れた濃紫の瞳は今昂る感情に合わせて赤紫にも見えた。細く滑らかな四肢には、普段からは考えられぬほどの力が込められていた。

揚州刺史の便坐に用意された己の私室で、華奢な少女が、少なくとも少女にしか見えない女性が全身から憤激を発散させていた。

そんな推定少女に声が掛かる。声の方に振り向けば私室の入り口が開いており、長年志を共にした戦友が呆れたように巨大な胸の下で腕を組んで立っていた。

「何じゃ、雷火。またぞろ大声を出しよってからに。廊下にまで響いておったぞ」
「……祭か。これを見よ」

無遠慮に入室して来た同志に、今し方二つになった手紙を乱暴に渡した。

「せめて破く前に渡してほしいものなんじゃ……。勿体無い事を」

随分と上質な紙を用いた手紙を受け取り、ぼやきながらも少女(?)の弟子から届いたその文を読み進める。そして、視線が引き裂かれた後半の紙に移る頃には、その精悍

さと秀麗さを熟成させた面おもてに愉快気な笑みを浮かべていた。

「流石の慧眼というべきかの、我らが主君は」

その言に、苛立ちを収めさせられた細身の女は、大きく息を吐いてより深く自身を落ち着かせた。が、あまり効果は出なかった。

「我が弟子を籠絡するとは……。厳寿め、忌々しい。あの馬鹿者も馬鹿者だ！ 血迷いおつてからに、正気とは思えん!!」

「言い過ぎではないか？」

「言い過ぎなものか！ 包の奴めは我らが主と小娘を天秤にかけて小娘を取ったのじゃぞ!!」

「それよ。儂も俄かに厳寿なる者に興味が湧いたぞ。のう、雷火。お主の弟子はその孺子に何を見たと思う？」

「才覚や器ではあるまい。そういったものとは全く別の要素じゃろうな。それが何かまでは流石に判らぬが」

「ふうむ」

「ここでこれ以上考えても無駄よ。近々顔を合わせる機会もあろう。その時に、篤と見定めてやろうではないか」

ぐつ、と強く胸の下で腕を組み直し考え込む戦友に、苛立ちを増した視線を向けなが

ら告げると、褐色の巨乳熟女はその視線には頓着もせずに応じた。

「おう、手紙にもあつた大乱の気配というやつじやな」

「必ずや我等にも声が掛かるう。忙しくなるぞ、祭」

「望むところよ」

民草の事を想えば望まぬ内の大乱。しかし、己等の主の雄飛を考えれば待ち望んだ機会だ。背反する二つを合わせ呑んだ古強者の笑みを浮かべた二人は、揃つて己が主君の元へと向かつた。

第十三回 黄天當立

年が明けて十四となつた薺華は、潁陽城にて何故か県令の真似事をさせられていた。葛陂賊襲来の際、逃げ出した県令の後任が未だ中央から派遣されておらず、潁川郡太守が守県令を仮置きするということもなかつた為であるが、それにしても何故に自分が……と考えずにおれない薺華である。

はじめは既成事実を足元に積み上げる算段かと思つたが、それについては魯子敬に強

く否定されてしまった。曰く、こんなところで県令なんぞに収まってもらつては困る、だそうだ。

「あいつ、私をどこに昇らせる気なんだろうな」

息抜きのために県堂を出て城街を散策する薜華は、ふと鼻息荒く語つた子敬の顔を思い出しながら市場へと足を向けた。そして、懐かしい声を聞いた。

「薜華には順当に將軍辺りが似合うと思うよー」

市場へと繋がる辻を曲がったその先に、待ち構えていたように親友が居た。いや、ようにはなく、どう考えても待ち構えていたのだろう。

薜華より一つ年上の、しかし頭一つ分小柄な少女。いや、頭一つ分よりもう少し小柄に感じる。それは、薜華の背がその分成長したからだ。序でに言えば、身体つきもより女を主張する成長を遂げていた。そんな薜華に対し、変わりなく見える対面の少女は黄崇、字を仲峻、真名は紅玉ホンユキであつた。益州巴郡に居る筈の最初の友が何故か今、目の前に居た。

「どういう事？」

「いの一に連絡しろつて言つたじゃんかー」

「いやまだ何処にも仕官してないし……」

「配下は居るのに」

「あー、それは事の成り行きで……」

「わたしが一番じゃないなんてな」

「そう言われても……」

驚愕から漏れた言葉を継いで、そのまま四つ辻の端で話し始める旧知の二人。何故、私はこんな所で親友に責められているんだろう？ 当然の疑問が薺華の脳裏を掠めた。

「去年の暮れに未究に聞いたらさー、早い内に益州出ておかないと置いてけぼりくらうって言われたんだよねー」

「未究は何時から皆の相談役に収まったんだ？」

「いや、実際あいつの凶讖は大したもんだよね」

顔に出ているのだろう。此方の疑問に応えるように、さらっと話題を変えてきた。彼女の行動にはどうやら二番目の親友も絡んでるらしい。巴郡を発つて以来、再会していない唯一となった親友の隙のない笑顔を思い出しながら話を続けた。

「まさかそれで一直線に此処に？」

「いんや、薺華の文が洛陽から届いてから急いで洛陽に行つたんだよ。着いた頃にはもう出てつた後だったけどねー」

「ん？ それじゃあ……」

「で、暫く鋼んところに厄介になつてた」

「おいおい」

「まあまあ。鋼も益州の現状を聞きたがってたし、わたしとしても葬華が豫州に向かったって事だけは聞いたけど、それだけじゃまだ広いからね」

「じゃあ、私が鋼に宛てた手紙で潁陽まで来たのか」

「そういう事」

「紅玉にも宛てただけけど」

「実家の方に、葬華からの文は鋼ん所に送り直してって連絡入れといたから」

「紅玉はもうちよつと……」

「まあまあ、まあまあ」

やれやれと溜め息を吐く葬華。時折、目の前の友が見せる周囲を巻き込みがちな行動力の高さには、感心もするが呆れもする。まさかこんな不意打ちで再開する事になるとは思ってもみなかった。そこで傍と気付いた。

「それにしても、なんでここで待ち構えてたの？」

「ああ、巴郡を出た日にねー、未究の奴がさ『どうやら市場の程近くに君の吉兆がありそうだよ』なんて言ってきたからさー」

それでこんな所で驚きの再会となったのか。周仲直の凶讖術にはもはや瞠目するしかない。

「あ、そうそう。あいつ、近く桔梗おば様の元に行くつて言つてたよー」

「え、未究が？ まさか仕官する訳じゃないよね？」

「いや、分かんないけど。だとしたら似合わないよねー」

自邸の庭に設えた天文台の上で、日がな一日 天の運行を測っている姿ばかりが思い起こされる友が、真面目に出仕して書類仕事を熟す姿というのは中々に想像し難いものであった。

「でも、未究も動き出したつて事だよね」

「だねー、皆それぞれ先を見越して動き出してよ」

時代が動く、か。口中で呟き、氣を引き締め直す。ここから先は激動が続く事となるだろう。故郷の家族や友人達、旅路であつた新たな友や知己、そしてまだ見ぬ群雄豪傑達、それぞれがそれぞれに時代へと挑みかかろうとしている。無論、自分も。自然ときりりと引き締まつた表情を浮かべる薺華に、対面する友は気軽に声を掛けた。

「桔梗おば様と言えば、薺華に預かつてきたものがあるんよー」

「ここじゃなんだし、便坐に行こうか。皆にも紹介するよ」

「相変わらず、ぶれがなくて安心するなー」

何の事やらと嘯いて、故郷から遙々やつて来た親友を皆に紹介する為、薺華は仲峻を伴つて道を引き返した。

「おー、君がトラちゃんかー。薺華の心を驚掴みにするとは、やるねー」

「にやにや!?!」

県令便坐に呼び集められた包達一同は、厳慶祝から、故郷からやって来たという親友を紹介された。一通りの挨拶を済ませると、その友は一直線にトラに近づき、その頭を虎帽ごとわしやわしやと撫で回した。

「こらこら、トラが吃驚してゐるだろ」

「いいじゃん、いいじゃん、可愛いじゃん」

「聞けよ」

「にや、姉ー」

戸惑うトラを余所に、けたけた笑いながら無遠慮に撫で繰り回す黄仲峻。そんな仲峻を暫し眺め、包は徐に声を掛けた。

「それで仲峻さん……」

「紅玉で良いよー」

「では、私の事も包とお呼び下さい。それですね、不躰ですが紅玉さんの能力を把握し

ておきたいのですが」

あつさりと真名を許してきた仲峻に此方も真名で応え、質問を続けた。二人の真名に關するあまりに軽い遣り取りに、慶祝が「ええ……」となつてゐるのを視界の端に捕らえたが氣にも留めない。仲峻も同様の様で、今やしつかりとトラを抱きしめながら頭を撫で練つていた。

「わたしが薙華より優れているのは軍氣を読む事くらいだね。あー、あとは県吏としての経験かな」

「軍氣を……」

「紅玉は用兵に關しては凄いいよ。同数の隊を率いての模擬戦だと、殆ど勝てないし」

「薙華の率いる隊が読み易過ぎるだけなんだよねー」

「うぐ……」

包は心中静かに歡喜した。この娘は主の足りない部分を補う資質を抑えている。

軍氣とは、軍の発する意気である。兵士一人一人の士氣や戦意の多寡、統率具合、それが指向する先、そうした諸々を読み解くのは戦場での明暗を分ける大きな要因となる。軍中に士氣の低い一隊があればそこを突く、足並みに乱れがあればその隙を逃さず、対面する此方以外に意識を向けているようであればその意識の先を警戒する。

黄仲峻がそれを得手とするのなら、慶祝の副将として実に得難い人材であつた。そ

れだけではなく、子明の良い先達ともなろう。武にも文にも高い資質を秘める子明の事だ。これで軍気を読み解ければ、一流の用兵家となるだろう。

その呂子明は、早くも仲峻を尊敬の眼差しで見詰めていた。余程、慶祝より優れた部分を持つ仲峻に感銘を受けたのであろう。彼女はどうも慶祝に対して気後れ、もつとはつきり言えば劣等感を抱いている。それが負の方向に向かつてはいない為、放置しているが、慶祝などは良く共に鍛錬に誘つては子明に自信をつけさせようとしている。一定の成果は出ているようだが、根本的な部分を拭い去るのは矢張り難しいだろう。或いはいずれか一つの道に専念させれば、すぐにでも慶祝を追い抜くかも知れない。そして、だからこそ自分も慶祝も彼女の持つ全ての可能性を伸ばしたくて堪らないのだつた。

そこまで思い至つて、案外と自分達は似た者主従なのかも知れないと考え、綺羅々キラキラとした瞳で仲峻と交流を深める子明を眺めながら、一人ほくそ笑むのだった。

黄仲峻が皆にあつという間に馴染み、県の仕事にも慣れ、時折湧いて出る賊征伐をこなして日々が過ぎ、気付けば暦は二月となっていた。ちょうど一年前に巴郡を出た薜華

は、今日この日、新たな出発の時を迎えていた。

漸く中央から新たな県令が就任し、引き継ぎもつつがなく終える事が出来た。そして、時機が重なったのは果たして偶然か否か、黄巾賊が遂に兵を挙げた。それまでも肥大化を続け、散発的な暴動が起きていたが、此度は全黄巾賊が一斉に蜂起したのだ。

黄巾の乱の勃発。魯子敬により、逸早く報を受けた蒯華はしかし落ち着いたものだった。子敬の眼には、それが非常に頼もしく見えた。

今、潁陽城に二千五百からなる義勇軍が集っていた。

何事も経験であると蒯華に県令の仕事をさせ、トラと呂子明が勉強に励む中、魯子敬は早くから潁陽郡各地から義勇兵を募っていた。更には私財を投げ打って軍備を整え、各地から情報を収集し精査していた。それも、蒯華の補佐とトラ・子明兩名の勉強を見ながら。蒯華の補佐は途中から合流した黄仲峻が引き受けたが、それでも子敬は人の二倍も三倍も精力的に働いていた。

「包」

「なんでしよう、蒯華さん」

「張り切り過ぎて早死にしないでよ?」

「もうちよつと好い劳いの御言葉を戴けませんかねえ?」

良い笑顔で呼び掛けに応えた子敬が続く言葉で仰天の声を上げた。

隣で仲峻がけらけらと愉し気に笑い、トラも釣られて笑った。子明は困ったような乾いた笑いを漏らしていた。

門楼の上で義勇軍を見下ろしながら談笑する五人。それぞれ胸に期するものがあつた。

トラは新たに始まる戦いの旅路に、新たな名で挑もうとしていた。

「姉ー！　トラの新しい名前が出来たにゃ!!」

「お、遂に漢名を決めたんだね」

「にゃー!」

トラはそう言つて、後ろ手に丸めていた紙を広げてみせた。そこには、『**嚴虎***160』の二字が拙いながらも堂々たる筆致で書き込まれていた。

「**嚴虎**！　いいじゃん、いいじゃん、格好良いじゃん」

「トラちゃんらしくて素敵ですね」

「にゃー」

仲峻と子明が褒め、トラが照れるその間に、薺華はちらりと子敬に視線を送つた。すると、こくりと小さく頷いて、顔を寄せごく小さな声で囁いて来た。

「よくご存じですねえ。でもまあ、随分と前に孫揚州に殺られちゃってますから、少なくとも本人と鉢合わせする事はありませんよ」

ならまあ、いいかな。と自分を納得させた薺華。トラが懸命に考えた漢名に否やを出すのは非常に憚られた。ただ、あまり縁起が良くないのも確かだが……。

「トラ」

「にや！ 姉ー」

「私とトラが集約したとても好い名だね」

「にや〜」

言いながら優しく抱き寄せ、ゆつくりと愛おしむように頭を撫でてやる。トラは両手を紅潮した頬にあてて、にやんにやんと照れていた。

勝手に敵姓を使った事に若干の不安を感じていたが、まさしく杞憂であった事にほつと胸を撫で下ろしながら、薺華の掌を堪能するトラ。全ての不安を消し飛ばし、勇気を与えてくれる魔法の手。何処までも往ける。薺華と一緒にならば、きつとあの蒼天の果てまでも。

トラは無邪気な確信と共に、今日も薺華の傍に在った。

「本当に仲良いですよね、御二人って」

「いやー、薺華が動物以外にあんなに愛情注ぐ姿を拝めるとはねー」

「薺華さん、トラちゃんを愛でるのは好いですがそろそろ……」

「ん、ああ」

子敬に促され門樓の胸壁に立ち、薜華は集った義勇兵に向かい合つた。そんな薜華の姿を敬慕の念を込めて見詰めながら、呂子明は胸中で改めて誓いを立てていた。

今日まで薜華は事あるごとに子明を気に掛けていた。慣れない仕事を熟しながらも、時間を作つては共に鍛錬に励んだ。勉強に詰まつた時も、かつて自分が教わつた経験を基に助言を与えた。右目の視力が極端に低いと知ると、片眼鏡を贈つた。

子明の武力も知力も、日に日に上昇していった。それと共に、尊敬と忠心も日増しに高まつた。

学も名もない自分にこれ程までに目を掛けてくれる主に報いる為、呂子明は己の存在の全てを賭けて仕える事を誓つた。

熱い眼差しを薜華に送る子明の隣で、黄仲峻もまた長年の友を笑顔で眺めていた。

自分は文も武も中途半端だ。人品も取り繕う事は出来るが、それだけだ。だから自分は平凡な生涯を送る事になるだろうと、幼い内に見切りをつけてしまつていた。

しかし、仲峻は薜華と出会つた。そして、一点だけ彼女を越える才を持つ事に気付けた。決して敵わないと思つた相手でも、完璧などではないのだと、そう気付けた。その

時、仲峻は己の生き方を変えた。私はこいつに付いて行こう、きつと楽しくなる。その予感に従って、仲峻は豫州まで遙々薜華を追ってやって来た。そしてこの時を迎えた。さあ、遂に来た！ 今、そんな心地で薜華を眺めていた。

歓声のような鬨の声を上げる義勇軍。その氣勢を上げさせた薜華を満足げに見詰めながら、魯子敬もまた心躍らせていた。

自らの進むべき道を破棄して選んだ年下の豪傑。実際の所、何処まで彼女の事を把握しているのか、自分でも未だ掴めていない。正体不明の衝動と予感に突き動かされた事に後悔はなく、寧ろどこか愉しみを見出しているのを最近は強く自覚していた。

きつとあの娘は他の群雄英傑とは違う結末に辿り着く。実に無責任な期待だ。まさか自分がそんなものに己が道を賭けるとは想像の埒外だった。子敬は自分自身でも知らなかった一面に気付かせてくれただけでも、今ここに立っている価値を認めていた。視線の先にある少女にも、己でも把握していない隠された何かがあるだろう。そしてそんな彼女を自分が支えるのだ。

魯子敬は今、嘗てないほどのやる気に充ちていた。

眼下にある義勇兵達の歓声を身に受けながら、薜華は人の上に立つ重圧と、期待を掛

けられる重圧に挟まれて動きを止めていた。先程、自分が何を語ったのか殆ど憶えていない。冬に葛陂賊の一派を討った時に飛ばした激とあまり変わらなかつたような気がするが……。すつと目を閉じ、数瞬の間、内面を顧みる。そして気付いた。

ああ、私は今頃実感しているのか。そこに思い至り、自分に対して呆れる事で少しだけ平静を取り戻した。

静かに深呼吸し、意識的に胸を張り、表情を今一度引き締める。そして、大声で出立を宣言した。

鋭く振り返り、順々にこの場に居る四人の顔を見渡した。少しだけ肩の力を抜き、今度は自然な笑顔で言葉を紡いだ。

「さあ、往こうか」

薜華のその言葉に応えるかのように、彼女達の頭上でバサリと旗が翻った。薜華の門出を祝するような青い、力強い太陽を抱く蒼天の如き紺碧の敵旗。母が娘に贈った真新しい軍旗の元、義勇兵二千五百と魯家部曲凡そ五百、約三千の軍勢と共に乱世に名乗りを上げた。

数か月の後――

黄巾賊殲滅の為の決戦地に多くの官軍、諸侯軍、義勇軍が集っていた。そして、厳行（ぎんぎょう）屯騎校尉（とんきこうい）も。

「我々は二分後発のようですねー、屯騎校尉*161様。どうやら殆ど揃ってるようですよ」

「行、行を付けて」

馬上で片手を庇のように額上に翳し、並み居る軍旗を数えながら、魯子敬は楽し気に声を上げた。それに対し、やや微妙な面持ちで応える薜華。

「薜華ー、またそんな顔してー。もつとシヤンとしなつてー」

「そうは言ってもね……」

「まー、薜華の成り上がりっぷりには、あそこに集う誰もが注目するだろうけどねー」
「…… ……」

明らかに面白がっている調子で告げる黄仲峻の言に、増々微妙な表情になる薜華。そのやりとりを気にもせず在意気込む子敬に、疑問を呈する薜華であるのだが。

「……で更なる軍功を上げて行の字を取れば、連中の眼を更に剥き上がらせる事ができ

ますよー！」

「今でさえ大分無理のある状況なのに、正式任官なんて……」

「大丈夫です。いけます、通してみせますから、安心して武功をあげて下さいね」

自信を満面に湛えて請け負う子敬に、なんと返せば良いのか逡巡する薙華。兎に角、矢鱈と頼もしさを感じるところが逆に不安を煽った。

一体、どんな手練手管を發揮すれば、ほんの少し前まで無官の小娘だった自分を、仮置きとは言え屯騎校尉に任官させ得るのか。流石に皇帝陛下直属の下軍校尉*162は無理でした。などと好い笑顔で宣った軍師殿にちよつと、いや、かなり戦慄していたのは内緒である。

屯騎校尉とは只の校尉*163ではない。宿衛兵を掌する、皇帝に近侍の高級武官である。何処の馬の骨、とは言わないが、何の功も実績ない者にいきなり就かせるような軽い官では断じてない。

不満などはある筈もないが、身の丈に合っているとは思えぬ現状に、若干の居心地悪さを感じているのも確かだった。

「ま、薙華の内心はどうあれ、ここからは辛気臭い顔しないでよー？」

「ああ、解かっている」

友の言葉に気を引き締め、薙華は集結地へと馬を進めた。

第十四回 歳在甲子

下軍校尉鮑鴻*164は実戦経験豊富な中央武官の一人であり、その戦歴から西園軍指揮官の一人として拔擢された。特に屯騎校尉として涼州での異民族征伐に出征した折の功績が高く評価されての事であったが、これは実際には共に戦場に出た董卓軍の果たした戦果が大であった。特に董卓の腹心たる若き軍師の強気にして果敢な戦術は、強健な先零羌を大いに痛めつけた。しかし、この時の董卓軍の働きは殆ど中央に届く事はなく、その戦功は鮑鴻が己が物とした。

元々尊大で、士大夫には諂うが出自の低い者は極端に軽視するような輩であったが、先零羌の乱以降は増長が弥増し、次第に名士層に対しても傲岸な態度を取るようになっていった。

そして、皇帝直属の西園八校尉に任じられた事によって、膨れ上がった自我は最高潮に達した。何時しか奪い取った功績はこの歪な土甕のような女にとつて真実になり、その才覚を鼻に掛けるようにもなり、天子の威光を己の威勢と思ひ込むようになった。

そんな鮑鴻に潁川郡の葛陂賊討伐の勅が下った。また一つ、自分の栄光の歴史に燦然と輝く功績が増えると、無根拠に妄信して出陣したが、鮑鴻にはその機会すらなかった。

意気揚々と潁川に到着した下軍校尉が目にしたのは、地を埋め尽くす黄巾の旗印ではなく、威風堂々と翻る紺碧の嚴旗であつた。

第十四回 歳在甲子

潁川義勇軍を立ち上げた薜華達がまず向かつたのは、潁川郡治である陽翟県ようたくけん、その県城であつた。

果たしてそこには潁川太守李旻りびん*165と共に、この度の乱に合わせて党錮の禁が解除されてすぐに豫州牧に任命された黄琬こうえん*166が薜華を待つていた。無論、子敬の手回しである。

黄琬。字を子琰しえんは、幼い事から評判の才媛であり、若くして中央で出世を重ねる名士であつた。しかし、血筋だけの無能を酷く嫌い、優秀でさえあれば貧農出身者でも取り立てた事から、名族を中心とした上層部から不興を買つた。硬骨の士であつた彼女はそれを一切気に掛ける事無く、己の信念を全うした。結果、二十年に亘つて中央政界から遠ざけられる破目となつた。

そして今回、大陸各地で引き起こされた大規模な農民叛乱に慌てふためいた権力者達によつて、再び官界に呼び戻され、要地にして混乱の地である豫州に牧伯として立つ事となつたのであつた。

子敬はこの情報を得ると、即座に接触を図つた。黄子琰側でも豫州の現状を把握する為に手を尽くしており、薜華の事は既に耳に届いていた。その手の者が会見を求めてきたのは正に渡りに船であつた。豫州には軍事に明るい者が少ない。戦術、軍略を語れるだけの者ならば未だ居ないでもないが、実践できるものが自身を除けば殆ど居なかつた。出自や来歴に拘らない黄子琰は、この現状を打破できる将を求めていた。強く、正しくある者を。

両者の思惑は一致し、こうして薜華は義勇兵に加えて州兵もその指揮下に取り込む事となつた。尚、薜華がそれを知つたのは陽翟城に到着してからであつた。その際、主従の間で一悶着会つたのだが、それに対し黄子琰は生暖かく見守るのみであつたという。

「もう、せつかく吃驚させてあげようとしただけだったのに」

「なんで包はそう私を驚かせたがるの」

「え？」

「なんでそこで不思議そうな顔するの」

「それはもう……」

「いやいい。良い予感は全然しないから聞きたくない」
「いけずですなー、薜華さんは」

にまにまと笑みを浮かべながらそんな事を言ってくる子敬に、溜め息を吐きたくなる薜華であつたがぐつと堪えた。この口の悪く、そのくせ高い交渉能力を持ち、豪胆過ぎる行動力で此方をぐいぐいと引つ張ってくる軍師相手に、この程度で溜め息を吐いていたら先が持たないとの確信に至つていた。

州兵を指揮下に入れ、一万を越す軍勢を率いる事となつた薜華。義勇兵を呂子明に任せ、その補佐に黄仲峻を付けた。本来であれば、仲峻には薜華の副将として傍らに控えて欲しいと考えていた子敬であつたが、現状では経験が圧倒的に不足している子明にこそ彼女は必要であつた。そして、輜重隊を新たに加わつた黄州牧の娘に預けた。とは言え、状況によつてこれらの構成は随時変動すると子敬に念を押された。

また、明らかに足りていないと思われた部曲中級指揮官将級には魯家部曲の中から選抜した者を当てた。此方の懸念などは既に解決済みだつたという訳だ。それだけではない。中級指揮官選抜の際に気付いたのだが、魯家部曲は何時の間にか随分とその頭数を減らしていた。道中の小規模な小競り合いで減つた訳ではあるまい。一応確認してみれば、矢張りと言うか各地に放つて主に情報収集の任についているらしかつた。

そして、その部曲からもたらされた情報によれば、何儀*167率いる葛陂黄巾賊が

再びこの潁川へと舞い戻つて来たという。その数、実に五万。真つ直ぐに陽翟を目指しているという。対して此方は黄州牧、李太守の軍勢と合わせても二万と五千に僅かに届かない。援軍は期待できない。討伐軍は既に長社ちやうしやけん県にて別の黄巾と激突している。寧ろ、彼方が援軍として此方を期待しているだろう。州牧などは元々その積りでいた。そこへ新たな敵の来襲である。皆焦つていたが、一人、魯子敬だけは落ち着いたものだった。

向かつてきているのは黄巾を巻いているとは言え、その内情は葛陂賊だ。ならば連中の狙いは己が主の頸である事は明白。賊の分際で生意気にも敵討ちを望んでいるのだ。ならば思い知らせてやらねばなるまい。薜華を得た子敬にとつて、頭に血の上つた狗を駆逐する事など大した難事でもなかつた。

そしてそう思っていたのは子敬一人であり、長社県への救援を急ぎたい州牧にとつては一大事であつた。事を急いだ黄子琰は駄目元で洛陽へ援軍要請を出していた。その判断が薜華の成り上がりの切つ掛けとなつたのだが、この時点では魯子敬にすら見通せぬことであつた。

葛陂黄巾五万の末路は呆気ないものであった。葛陂黄巾は何儀の他に劉辟りゆうへき*168、何曼かまん*169という二人の渠帥がそれぞれ五万の内、一万づつを率いていた。

この三人に率いられた黄巾賊に対し、子敬の提示してきた策は野戦であった。それも、先ずは薜華揮下の一万二千程の兵のみを出陣させた。

狙いは『刹天夜叉せつてんやしや』などと臆面もなく自称する何曼の頸。何曼率いる右翼一万に対し、薜華自ら率いる三千を以つて高台からの奇襲突撃で先制を仕掛け、すぐさま離脱。すると驚くほど簡単に何曼が釣れた。これに薜華は肩透かしを食らつたような気分にもなった。無論、此方の狙い通りに敵が動いているのだから肩透かしどころか喜ぶべきところなのだが、その為に子敬が幾重にも策を重ねて確実性を高めていたものが全く必要なくなったことに起因していた。敵の不甲斐無さや己が物足りなさを感じている事に呆れながらも、出陣前に子敬の言っていた事を思い出していた。

「最初の狙いは何曼か。それにしても刹天夜叉とか、よくもまあ、恥かしげもなく名乗れるものだな」

「それだけ自惚れが強いという事ですよ。どうやら官軍の将を討つた事で調子に乗つたようですね。最も、正直聞いた事もない将ですが」

子敬の人物考査は実に正確だった。何曼は傲慢な自惚れ屋で、だからこそ簡単に釣り上げる事が出来た。楽と言えば楽であったが、矢張り薜華としては拍子抜けも甚だし

かった。ともあれ、予定通り何曼が此方に向かつて迫つて来ているのだ。ならばやるべき事をやるだけ。薜華は自ら殿を務めながら、何曼を引き離し過ぎないように見せかけの撤退を続けた。

「黄巾賊には三つの色がある。最初は首魁と目される人物達の信奉者だけだった。そこへ大賊と勘違いした賊徒が集つた。そして最後に食い詰めた貧民棄民の類いが合流した。」

葛陂黄巾は賊徒である。だが、肥大化する黄巾全体に合わせて、葛陂黄巾もその数を膨れ上がらせた。しかし、その増加した人員の多くは食い詰め農民であり、両者には明確な差があつた。それはあらゆる面で浮き出るものだが、今この時においては、その運動能力による格差が両者を二つの群れに分けていた。

薜華を追撃する何曼隊は、その率いる渠帥と同様に猪突気質の者が多く（染まつたともいうが）、目の前にぶら下げられた餌に喰い付かんと、脇目も振らず殿に見える薜華目指して猛進していた。しかしその数は明らかに減つていた。にも関わらず、誰もそれを気に留めていなかった。だからこいつ等はここで簡単に滅ぶことになつたのだ。

後方を確認しながら敵を引き寄せていた薜華は、追撃者達の巻き上げる砂塵が減少しきり落ち着いたところで、頃合いとみて反転した。

「全隊停止！ 即時反転し槍構え!!」

薙華の指示に能く反応したのが二千五百、僅かに反応の遅れたのが五百。この五百は吸収したばかりの州兵であった。今回の作戦を実行するにあたり、幾度か戦場を共にした義勇兵が望ましいが、州兵にも早い内に薙華の戦に慣れてもらう必要があると、子敬が州兵から五百ばかり胆力に自信があるという者を選抜した。薙華には選抜基準が良く解からなかったが、義勇兵達は成る程と密かに納得していた。

「私が何曼を討つたら奴等を囲め」

そう指示を残して一人 賊軍の群れに呐喊した薙華に、新たに加わった州兵達は僅かに騒めいたが、義勇兵達が当然のような顔で従っていた為、一先ずそういうものと納得して待機した。

追い立てられていた獲物が突如こちらに咬みついて来た。何曼は愚かにもそう思った。にたりと汚い笑みを浮かべて、向かってくる薙華に自慢の六角鉄棒ろっかくかなぼうを振り被った。そして振り下ろす事も出来ずに縦に両断され絶命した。

一方その頃、残りの全兵を率いた呂子明と、その補佐に就いた黄崇——紅玉——は、勝手に分断した何曼隊の後曲を包囲していた。農兵中心の後曲も僅かに手向かってきた

が、散々に走り回されて疲弊していたうえ、それほど意気のない事もあって殆ど抵抗らしい抵抗もせずに大人しく囲まれるに任せていた。

この現状に、紅玉もまた拍子抜けしていた。数と勢いだけだとは子敬に聞いていたが、その勢いもどうやら一部だけみたいだな、と分析する。正直、もつと手古摺るかと考えていたが、余裕綽々だった子敬が正しかったか。流石だな、と心の中で称賛しながら隣に目を向ければ、そこには緊張に身を包んで賊軍を睨み付ける子明の姿があった。

「亞莎さー、そんな肩肘張つてなくても大丈夫だよー？」

「……はい。でも、何があるか分かりませんから」

真面目だなー、とぼやきながら能々観察してみれば、子明の意識は背後の味方に向いていた。成る程、味方、それも編入されたばかりの州兵に無様は晒せないってか。本来なら任されたのは義勇兵だった筈が、いきなり変更を言い渡されたのだ。ただでさえ経験不足の呂子明に、緊張するなと言う方が無茶というものか。

一人納得しうんうん頷いていると視線を感じたので子明に視線を返すと、感心したようにぼつりと言葉を漏らしてきたので、多少は緊張を解せるかと会話を試みた。

「紅玉さんは慣れてるんですね」

「ま、わたしも言うほど従軍経験はないけどねー。結局のところ、巴郡は平和だったし。

偶に外から流れてくるならず者を征伐してたくらいでさ。薙華の奴も初陣では異民族相手の大戦おわいくさだったけど、あとは賊征伐ばつかだつたつて話だし」

「初陣で……」

「あいつ、そんな時に単身敵に斬り込んで百人斬りかましたらしいよ」

「やつぱり凄いですね、薙華さま」

「そりゃ、一面的な見方だよ亞莎」

親友に対する様付けに、全く慣れる気がしないなー、と心中ぼやきながら告げると、随分と意外な事を言われたような様子できよとんとされた。美少女がこういふ表情かおするのはずるいよなー、と思いつながら言葉を続けた。

「武人としちや申し分ないけどねー、将としては自分が任された部から単身飛び出してつてのは拙いでしょ」

「それは……確かに、そう、かも知れません」

「ぶつちやけ、将としての資質は亞莎の方が高いよねー」

「ええ!!? そ、そんな恐れ多いですつ!」

「いやいや、そこで縮こまっちゃ駄目だつてー。薙華も包も鼻肩目で亞莎に期待掛ける訳じゃないんよー? 二人共すつごい嬉しそうに亞莎の成長ぶりを語って来るんだから」

「御二人が、そこまで……」

そこまで言つて、これじや余計に固くさせちやうかな? と、失敗したかと思つたが、子明は己の胸に手を当てて感慨に浸り、目に強い意志の光を灯していた。その様を見て、良い方向に向いた、かな? と紅玉は内心胸を撫で下ろした。

そこへ、慶祝率いる一隊が戻つて来たので紅玉が出迎えた。

「お疲れー。……首尾はどうだった?」

「ああ、殲滅した」

「やっぱりねー」

いつもの如く身を朱に染めて戻つて来た親友に、いつもの調子で声を掛ける紅玉。降兵の姿がまるで見えないので一応確認してみたが、予想通りの答えが返つて来たので、州兵に目を向けながら納得の声を漏らす。紅玉の視線の先の州兵達は若干顔色悪く、引いているようにも見えた。これはあとで補足が要るなあ、と一人小さくぼやいた。

「んじや、こつちはどうするー?」

紅玉に言われ、取り囲まれた賊軍に目を向ける慶祝。ざつと見回し、その眼を覗き込む。そこには怯えと疲れ、諦念が見て取れた。濁りは見えなかつた。先程の連中は目が濁り切つていた、だから降伏は認めずに殲滅した。此処が益州巴郡で、魏文長が軍中に

居たのならば、そんな連中の降伏でも受け入れていただろう。義姉はああいった連中の調練が得意だ。賊徒共の腐った性根を鈍才骨で叩き直すところを幾度も見てきた。だがここは故郷ではなく、頼りになる義姉も居ない。余裕があれば義姉の真似事しても良いが、そのような猶予はない。故に何曼の周圍に居た賊徒共は殲滅した。

対して今日の前に居る連中には、匪賊特有の濁りは見えない。これならば問題はないだろう。若干、怯えが濃いのが気になるが、と自らの血姿が原因とは気付かずに、大きくはないが良く通る声で告げた。

「大人しく降伏するのならば受け入れよう」

慶祝のその言に、残された黄巾賊から安堵の呻きと弛緩した空気が漏れた。その空気を敏感に察した紅玉は、気楽なもんだよ、と小さく鼻を鳴らした。ここに屯している連中は、そりゃあ自ら望んで賊徒に身を落としたわけではないのかも知れない。それでも結局は自分で選んだのだらう。王朝に絶望するのは解かる。逃げ出す事も別に悪い事だとは思わない。だが、そこから先の選択肢は、決して賊徒一つつきりではなかった筈だ。

故郷で何年もの間、多くの流民と接してきた。中には今回のように賊に成り下がった連中も居て、もちろん容赦なく征伐した。だが、もつと別の選択をした者達が多くいたものだ。開拓民として戸籍の再編入を果たし、漢民としてやり直した者達が居た。国に

嫌気が差して清流豪族と評判の一族の私有民となつた者等も居た。何処にも属さず、塙壁うへきを築いた者達と折衝を重ねた事もあつた。あれは慣れない仕事だつたなあ、と頻り回顧してから目の前の降兵を改めて見遣る。

實際のところ、こいつ等は賊にすら成り切れていない。匪賊に寄生してただけだ。見ているもやもやする、いや、もつとはつきり言つて苛々するのは、その中途半端さが自分の眼には明らかだからだつた。

こいつ等が私の預かりになつたら最悪だな。州牧辺りに押し付けるよう、軍師殿に進言しておこうと固く心に誓う紅玉であつた。

紅玉の誓いを余所に、慶祝は自分が戻ればいの一番に駆け寄つてくると思つていた少女が、未だ自身の隣に居ない事に疑問の声を上げた。

「ところでトラは？」

「あー、トラ吉なら斥候に出たよ。そいや、もうそろそろ戻つてもいい筈だな？」

「そうか」

「あれ、意外ー。心配じゃないのー？」

「してないわけじゃないけど、連中程度にトラが見付かるとも思えないんでね」

「それ以上に信頼してゐるってかー」

「まあね」

そう言つて何故だか誇らしげに笑む親友が、なんだか無性に可笑しかった。

何儀率いる葛陂黄巾本隊は、進退を決めかねていた。

何曼がいとも簡単に敵の策に乗せられたのは流石に判つた。急いでその後を追ひ、合流を目指したがそれは叶わなかつた。足並みの揃わぬ数万の軍勢で、縦に伸びながら追えば当然のように横槍を入れられた。正確には後背を突かれたのだが……。

陽翟城から出陣した黄豫州率いる官軍が、遅れていた最後尾に突撃。強かに打ち据えられた貧民出の黄巾兵はあつという間に士気を崩壊させていった。貧民兵がどうなるうと何儀の知つた事ではないが、数の優位が崩れるのだけは不味いと分かつていた。後方に喰い付かれた事に気付いた何儀は、劉辟を差し向けた。だが、劉辟が最後尾に辿り着いた時には州軍は既に低い丘（と言つていいのか迷う程度の起伏）の上まで引いており、そこから弓矢の一斉射で劉辟隊を貫いた。

これは堪らぬと退こうとした劉辟であつたが、よく目を凝らせば敵は弓ではなく弩を用いていた。それも全隊で一斉に次矢の装填を行っている。ならば今の内に全速を以つて距離を詰めれば、猪口才な官軍に目にも見せてやれると全隊に突撃を命じた。

或いは丘上に到達するまでもう一射喰らうかも知れないが、その程度で怯む葛陂賊ではない。先程まで相手取っていた貧民兵と一緒に考えているのならば、勝機は此方に在りと高慢な笑みを浮かべた。

だが、賊徒のそんな浅はかな考えが通用するほど魯肅——包——は甘くなかった。

そう、州牧の傍にはこの一時だけ包が脇に控えていた。弩の運用に隙があるのも当然、賊軍が自分の想定よりも更に浅薄であると、早々に見切った包の釣り餌であった。

低丘に陣取る州軍は三段で構成されていた。第一陣は第一弩兵隊。第二陣に槍兵隊が控えており、敵兵の接近に合わせて第一陣が左右に割れつつ後方へ下がると同時に前線に躍り出た。これに劉辟隊は動揺し、俄かに出足が鈍った。そこへ第参陣の第二弩兵隊が丘の麓から反対側の中腹、即ち敵黄巾兵へ向けて一斉射が放たれた。丘向こうから雨のように降り注ぐ矢によって動揺は混乱へ変わり、槍兵隊の呐喊によって遂には恐慌へと成った。

こうして劉辟は敗走し、その劉辟を差し向けた後で何曼と同様に釣り上げられたのはどの考えに遅まきながら達し、追うか戻るか決めかねていた何儀の元へ這う這うの体で舞い戻ったのだった。

この段階で、何儀は漸く斥候を放った。遅きに失しているが、やらないよりは確かにましであった。何曼隊は敵に取り囲まれ恐らく降つたものと知れたし、州軍は陽翟城ま

で引き返した事を確認できたのだから。

そしてトラは「うにゃ〜？」と首を捻っていた。

今回、トラは珍しく慶祝の傍ではなく、子明や仲峻と共に第二陣に居た。トラの感覚ではお留守番といったところであった。子明達と共に簡単に敵を取り囲み、あっさりとする事が無くなってしまい正直退屈していた。それを紛らわせるために包囲陣の外縁をぐるぐると散歩していた時、敵の斥候に気付いた。それはトラの眼から見れば、隠れる気があるのか分からないほど至極簡単に発見できた。

その場ではそのまま散歩を続け、子明達が待機しているところまで近づくと陣中に分け入り、真つ直ぐ子明の元へ走って行って報告を上げた。

こういった場合の対処は予め子敬から授かっており、敵に味方の現状を知らしめてやれば良いと言われていたので、そのまま手を出さずに置く事とした。子明がそれをトラに伝えると、

「じゃー、トラも斥候に出るにゃー！」

と、元氣良く宣言したのだった。

「じゃーの意味がまるで分かんないけど良いんじゃない？」

「そうですね。では、お願いできますか？」

「まっかせるにゃー！」

こうして、なんとも軽い乗りで斥候へと出る事となった。張り切つて敵斥候の跡をつけ、悠々と敵本隊を発見。そして、トラは首を捻つた。

「なんか聞いてたのと違うにゃ？」

と、一人呟き、きよろきよろと周辺の情景を確認する。やはり、予め子敬から聞かされていた予測地点とずれている。これはもしかして良くない事ではないだろうかと考え、どうすればよいのかを更に考える。結論は解かりそうな人に聞く、であった。元より考えるのは子敬のお仕事だ。ここからならば、戻るよりも県城の方が近い。さつと行つて、さつと聞いて、さつと帰ろう。

そう決めた後のトラは速かつた。その矮軀からは想像もつかない程の速さで県城まで駆け抜け、門楼上の物見兵に「にゃーいにゃーい！」と手を振ると、特徴的な異民族の少女など一人しかいない為、何の疑問も持たれる事無く直ぐに城門は開かれた。そして案内されるまでもなく、鼻をひくつかせながら子敬の元へと辿り着いたのだった。

「ひやわわ、どうしたんですか？　トラちゃん」

「にやー、かつぴのれんちゅー、包の言つてたこと違う所に集まつてたんにや」
「ほほう、それで気になって来た」と

言いながら地図を広げ、出来る限り詳細な場所をトラから聞き出し、正直に言つて驚いた。トラの普段からは考えられぬほど、実に詳細な報告だ。此方が放つた斥候が戻るのを待つて情報を照らし合わせる必要もなさそうだ。そして、この情報がもたらしたものに、くくつと我慢できないという風に噴き出した。

「にや？　なんか面白いんにや？」

「ええ、何とも中途半端な連中ですよ」

進退決めかねているのがありありと判る。陽翟城からも巖寿軍からも距離を取つてゐる。しかし退路には向いていない。ここまで来て退くなど矜持に関わるとでも考えてゐるのか。だが、それにしてはどちらにも攻め気の見えない位置だ。

伸るか反るか、最終的な正解など所詮誰にも解かりはしない。だからこそ、決断は迅速に決め切つてしまわなければならないのだ。退くにせよ、攻めるにせよ、迷いながらではどちらにせよ上手くいく訳がない。

数的優位は未だ黄巾側にある。降兵を抱える慶祝を叩きたい。一方で陽翟城の動きが気になって仕方がない。挟撃は無論避けたいだろう。ならば軍を二つに分けてもいい。

先程取り逃がした劉辟に、三分の一でも預け、陽翟城からの州軍を受け止めるよう布陣させておき、残り全兵で嚴寿軍に進撃。それでも倍以上の兵力で挑める。大した決断でもない。まあ、私なら既に長社城に向かっている。子敬は頭の中で嘲笑しながら、葛陂黄巾を滅ぼす最後の一手を組み上げていた。

だが何儀はその程度の事でも決めかねている。ここまで良い様にやられている為、何が正解か判らないのだろう。そんなものは私にだつて解からない。声に出さずに呟きながら、竹符に慶祝宛ての指示を手早く書き込む。

「さて、トラちゃん。これを舜華さんに渡して下さい」
「任せるにや」

「ここから陣営までどのくらい掛かります?」

「にや、半時も掛からないくらいにや」

「では、それに合わせて此方も仕掛けます。これで連中も終わりですよ。ちやつちやつやつつけちやいましょう」

「にや!」

澆刺とした返事を返し、一目散に慶祝の元へと飛び出したトラを見送って、子敬も州牧の元へと向かった。

葛陂黄巾賊は最も避けるべきであつた挟撃によつて滅びた。

ぐずぐずしていた匪賊とは違い、トラから子敬の竹符を受け取つた慶祝の行動は速かつた。降伏者達は輜重隊に任せ、飯を食わせるようにと命じておいた。少なくとも、その間は下手な事をする者は出ないだろう。

そして自分達は即座に出陣。一気に黄巾賊へと迫つた。前曲を任されたのは、呂子明と紅玉だ。

子明は紅玉の助言通りに兵を進め、敵の最も脆い部分から突つ込んだ。尤も、紅玉に言わせれば、黄巾の前線は何処も彼処も弱所であつたが、全く馬鹿な連中だと、紅玉は不快気に呻りながら、敵中深く子明と共に切り込んでいった。教科書通りの鋒矢の陣形ではあつたが、それにしても余りにも呆気なく切り込めた。当然だ。こいつ等 弱兵を、食い詰め農民だけを外縁に配してやがる。使い潰し前提の攻め手なら兎も角、防衛においてわざわざ脆い前線を用意するなど愚かにも程がある。戦える連中は大将の周囲を固めるだけ。まるで大鋸屑おがくずの鎧を着て短剣を振り回して飛来する矢を防ごうとしてるようだ。

元々低かつた前線の士気は最早見る影もない。それに引き摺られて、敵陣中央の軍気

も見る見る萎んでいくのが紅玉には手に取るように判った。そりや当然そうなる。盾にしようと、生贄のように差し出した連中が、その役目を全く果たすことなくただ無残に散つていく様を見続ければ、そりや当然そうなるに決まつてるんだ。自分達自らの手で勝ち目を薄くして、賊軍に飽きれるとともに、こんな連中に言い様に荒らし回られている後漢の現状がほとほと情けなかった。

嗚呼、こりやあ全く、別の天を戴きたくなるのも仕方ないよなー。そんな事を考えながら、紅玉は敵陣中央を指して猛進を続けた。と、その視線の先で、敵中核が揺らいでいるのを感じた。逃げる気だ。不味いな、まだ州軍が届いていない。思った以上に敵に意気地がなさ過ぎた。散々、汝南と潁川を荒らし回つて良い気になっていた癖に、劣勢に立たされた途端にこれか。つくづく見下げ果てた連中だ。

「伝令っ！ 後曲の薜華へ！ 李太守の元へ！！」

唾棄しながらも手早く対応策を打つ。奴等が逃げようとしている方角は、子敬の読み通りだ。そこには潁川太守李旻が伏兵と共に待ち構えている筈である。しかし、敵の動き出しが想定より早いので、兵数だけはまだ多い。太守の軍勢だけでは受け止められないかも知れない。

紅玉の左斜め前方を往く子明には、紅玉の伝令の意図が解らなかつた。だから前方を強く見据えた。敵方の動きをこれでもかと注視した。すると、敵軍中央の動きが慌ただ

しくなり、これは逃げる気だと気付いた。

「凄いですね。どうして判ったんですか？」

「奴等の揺らぎが良く視えたからねー。動揺と焦燥、そんなもつて連中の意識が東に向いた。となればこれは逃げるなーってね」

「それが軍気を読むという事ですか」

「まーねー。こいつが読み解けるようになれば、今みたいに機先を制して先手を打てる。意志を固めてから、実際に動き出すまでにはどうしたって時間差が生じるからねー。そいつは集団が大きくなればなるほど、顕著になる。このずれを出来得る限り小さくするのが強軍の条件の一つだぁーね」

「勉強になります」

「ふっふっふ、この真面目っ娘めー」

最後に茶化すように話しながらも、敵陣深くさらに突き進む。すると遂に、というか漸くと言えばよいのか、敵本陣が退却を開始した。しかしそれは本陣のみだ。周囲の賊軍は何も知らされていなかったのだろう、一気に動揺が広がった。自分達も逃げようと、自らを見捨てて逃げようとした何儀率いる本隊に纏わりつくように逃亡を始めた。まるで飴が伸びるように重く粘ついた退却である。さながら何儀は飴に突っ込まれた菜箸か。

呆れながら敵の痴態を見ていると、敵の更に向こう、軍勢が此方に迫っているのを感じた。人波の向こう、僅かに砂塵が舞い上がっているのが視覚でも捉えられた。

「来たね」

「はい」

問い掛けた訳でもなく一人呟くと、即座に返事が返って来た。子明も味方の接近を捉えていたのか。参ったね、これが傑物つてやつ怖いとこだよ。心中で苦笑しながら言葉が続けた。

「良い機に来てくれたよ」

「はい、この場で制圧出来そうですか？」

「いやあ、何儀の必死さも相当なもんだ。奴と手勢の一部はこの場からは逃げ延びるかもね。ただ、葬華を向かわせるほどでもなかったかなー」

「成る程」

ふむふむと頷きながら、子明は先程からずっと此方を一瞥もしていない。戦場に神経を集中し、あらゆる情報を吸収しようとしている。こりや成長が早いはずだよと、深く納得しながら、州軍と連携を取れる最適な位置取りへと自軍を動かした。この自分の用兵も、次の戦場では子明が自ら行えるようになっていだろう。全く頼もしい限りである。

紅玉は戦場に似つかわしくない楽し気な笑顔で、勝利への詰めを一手一手確実に打ち込んでいった。

何儀が逃亡した後の黄巾残兵は呆気ないの一語であつた。殆どが逃げ散る事も出来ずに降伏を申し出た。黄州牧はこれを受け入れ、此度の征伐はほぼ終わった。そして、この場から逃げ遂せた何儀に関しても、子敬をはじめとした嚴寿軍の誰も心配していなかった為、降伏者の処遇を含めた戦後処理をそのまま進めた。

それから程無くして、何儀と劉辟の首級をぶら下げた薜華が潁川太守と共に戻つて来た。

こうして葛陂黄巾賊は滅んだ。

下軍校尉が潁川郡に到着した時には葛陂黄巾は影も形も無かつた。どころか、長社を攻めていた潁川黄巾賊本隊も散り散りになっており、残党狩りの様相であつた。

鮑鴻にとつては面白くもない事態ではあつた。この現状の功労者が田舎豪族の娘と
いうのもその一因だ。だがまあ、いい。適当に残党でも狩りながら、足代を頂戴して
さつさと帰ろう。無駄足を踏まされたのだから、多めに徴収せねばな。などと手前勝手
な論理で官有物を横領した。そしてそれは、すぐに田舎娘の知るところとなつた。それ
を知つた娘——薺華——は激高した。俗な言い方をすればブチ切れた。

「おおおい?! ちよつと待つて薺華!!」

怒りに任せて陣幕を出て往く薺華。行き先は当然、鮑鴻の元であろう。そこで何をす
るのか、手にした秋草が雄弁に語つていた。

「やばいよー、こんな薺華見たことねえ!」と焦る彼女の親友は、慌てつつも事態の打開
を求めて行動を起こした。

「あ、あの、私……」

「亞莎は包を呼びに行つて! 私はその間 薺華を止めるから!!」

「は、はい!」

薺華にこの事を知らせた子明が事の推移に戸惑つていたが、仲峻の指示で知恵袋の元
へ走つた。よもやこんな事になるとは思つてもみなかつた。何らかの対策を打つてく
れるだろうと期待しての進言だったのに、先ず相談する相手を間違えた子明であつた。

そうして皆が出払つた陣幕で一人、トラはうにや?と首を傾げていた。怒髪天を衝い

た薙華に悪い意味で馴れていた。

仲峻が薙華に迫り着いた時、そこは既に修羅場だった。薙華の怒声が下軍校尉の天幕の外にまで響いていた。天幕入り口に転がっている兵士が、強かに打ち据えられ悶絶しているだけなのは、ぎりぎりの理性が働いたのかと、こんな事でも胸を撫で下ろしたくなった。しかし、天幕の中は殺気立っており多数の気配を感じるし、周囲からも何事かと人が集まってきている。完全に拙い事態であった。

「貴様等もこの芥屑と同類か？ 薄汚い汁に甘露を感じる様な汚物であれば、……諸共斬り捨てるぞ!!」

「ご……芥だと!!? お前ら何をしておる！ とつとつこの不埒者を殺せ!!」

あく、行きたくない、と心中で盛大に愚痴りながら仲峻が天幕に踏み込むと、うんざりする程の怒気と殺気と動揺が絢い交ぜになっていた。酔いそうだ、しかも悪酔い。

「はい、薙華、そこまで。流石にこれは拙いって」

「止めてくれるな紅玉。こいつは許しておけない。こんな屑がのさばっているから、この国は駄目なんだ。黄巾賊を産み落としたのはこいつ等だ」

「あー、解かる。痛いほどに良く解かるよ。屯騎兵の皆さんも心情的には薙華に賛成なさってるよ。でもねー、ここで薙華にこいつを成敗させるわけにはいかんでしょー」

「何だ貴様は!! 貴様もこの糞田舎者の同類か!!」

「喧しい!! 空気読め、この豚!! 今、お前の命運を握ってるのは私だぞ!! 真つ当に棄市死罪になりたかつたら黙って震えてろ!!」

闖入者を止めに来たと思つた者が、闖入者同様ブチ切れた。下軍校尉を護る屯騎兵（鮑鴻は下軍校尉として出征したが、率いる兵は屯騎校尉時分の兵をそのまま継承していた）は早く誰か何とかしてくれと祈つた。

先程の仲峻の言は間違つていなかった。屯騎兵は常々頭に乗る鮑鴻に嫌気が差していたし、薄々不正を働いていることにも気付いていた。中には鮑鴻におべつかを使つて甘い汁を吸っている奴が居ることも知っていた。その一部は現在、天幕の外で蹲つており、幸いこの場には居なかつた。

「き、き、き、貴様等あ、ただでは済まさんぞ!!」

「そこまでだ」

憤激した鮑鴻が無様な贅肉を震わせ声を荒らげると、天幕の外から冷や水を浴びせる様な凜とした声が響いた。天幕に居る誰もがその声を無視する事は出来なかつた。威厳のある落ち着いた声音。張り上げている訳でもないのに、身体を中心にまで染みわたる声の主が、ゆつたりとした足取りで天幕の中に姿を現した。

黄瓊。豫州牧黄子琰その人であつた。その後には魯子敬と、呂子明が続いていた。

「こゝ、黄豫州牧」

呻くように呟く鮑鴻に、冷たく一瞥しただけで無視するように黄子琰は薜華に言葉をかけた。

「嚴寿よ。其方そなたの怒りは尤もだが、そのように後先考えず暴発させるのは感心せぬな」

「う……、その、申し訳ありません」

「これから先の漢土には其方のような若者こそが必要なのだ。それを、このような事で投げ捨てさせるような真似はしてくるな。何より、其方に未来を託した者達に申し訳が立つまい」

「はい、仰る通りです」

母と同年代の人物の、それもより落ち着いた静かな叱責に、寸前までの激憤もどこへやら、身を小さくして猛省する薜華であった。

「やー、助かったよ 包」

「間に合つて良かったです。何故か貴女の怒声も聞こえた気がしましたけど」
「それは気の所為つて事で」

薜華が叱られている脇で、小声で合流を果たす仲峻達。互いにほっと胸を撫で下ろしながら、こゝそこそと軽口を叩き合つた。

「こゝ、黄州牧！ 先程から何を温い事を!! 早くこの小娘を拘束せよ!!」

「黙れ鮑鴻。拘束されるのは貴様の方だ」

「な、なにを……!?!」

「貴様の罪は明白。証拠も既に、その魯肅めが一通り揃えておるわ」

「私は、下軍校尉だぞ！ 皇帝陛下より直々の……」

「ここは豫州で、私は陛下よりこの地の牧伯の印綬を賜つておる。我が職権に於いて貴様を弾劾する」

「う……あ……う……」

静かな圧を以つて淡々と告げる牧伯に、鮑鴻は遂には二の句も継げられなくなり、体重を支え切れなくなったかの様にへたり込んだ。

これにて騒動は終着し、屯騎兵はほっと安堵の息を吐いた。

第十四回——了——

鮑鴻は罪人として洛陽へ送られ、処刑される前に下獄死した。

鮑鴻の護送時、黄豫州からある上奏文が共に送られた。それに先んじて、大將軍にあ

る早文が届いていた。南陽太守の元にも似たような文が届いており、それを面白がった袁公路は、母に宛てて手紙を書いた。近々、引退を考えていた公路の母は、普段滅多に我が儘を言わぬ娘の久方振りの頼み事に大いに張り切った。張り切り過ぎて、妹まで巻き込んだ。妹は大將軍と親交があり、同様の案件を抱えると知った。

洛陽を巡ったのは文だけではなかった。魯子敬も一時、主の元を離れ洛陽に足を伸ばしていた。

氣付けば薜華は行屯騎校尉に任じられていた。

「何が起きたの。というか何をしたの、包」

「ふむ、如何にも無理筋と思うておったが、其方の軍師はやり手よの」

「黄州牧様は何かご存じなんですかね？」

「其方の腹心は大したものよ。よく労ってやるが良いぞ」

「は、はい……」

こうして、薜華は此度の黄巾征伐に於いて注目の的となった。それも、戰場よりも洛陽での注目度が非常に高まったのだが、勿論、当人には全く判らぬ事であった。

第十五回 蒼天未死

「旅芸人〜？」

魯子敬がもたらした情報に、黄仲峻が鸚鵡返しに聞き返した。黄巾賊に潜入させていた間者が漸く掴んだという、黄巾首魁張角の正体であるという。

「はい。俄かには信じがたいでしょうが……」

「俄かについて言うか、何がどうなったら旅芸人が反乱首謀者になるの〜？」

「えー、どうもその芸人姉妹の熱狂的な支持者達が暴走した結果のようですね」

「余計訳解かんなくなつたな〜」

「その姉妹は歌舞で生計を立てていたんですね。その芸能に惚れ込んだ者達が、熱狂の余り大陸を揺るがす反乱を起こした、と」

「噛み砕いて説明されても、やっぱり意味わかんね〜」

お手上げ、とでもいうように伸びをしてぼやく仲峻に、あはは、と乾いた笑いで追従する呂子明。まあ、そう思うよな、と納得しながら薜華は、討伐軍本営から渡された手配書から顔を上げた。

「討伐軍に流布してる人物像からは凡そ懸け離れてるな」

「その手配書もどうかと思うわー。方向性が違うだけで信憑性はどっこいじゃない?」
 「いや、紅玉。怪物つてのは意外と居る所には居るもんだよ」

「だとしても、怪物に心酔して王朝転覆謀るのはないわー」

「まあ、そうだよね」

南蛮での経験を基に熱く語るが、仲峻の当たり前すぎる指摘に同意せざるを得なかった。そもそも怪物の实在云々は置いておいて、黄巾賊が異形の者に率いられているとは欠片も信じていないのは、薙華も同様だ。

手配書に描かれていたのは、身の丈一丈三尺約3mを越える、八腕五足の偉丈夫だった。その額からは恐ろし気な角が生えており、顔の下半分を覆う髭は黒い炎の様、腰からは長い尾が波打つように伸びている。

大真面目な顔でこの人相書き(?)を記室督きしつとく*170から渡された時、薙華はどう反応すればいいのか非常に迷ったが、迷った末に「手強そうだな」とぼつりと呟いた。神妙な顔で「全くですな」と返されてしまい、もう何も言えなかった。あ、信じてるんだ。と微妙な面持ちになり、そそくさと退出した。

「姉ー、トラも、トラもそれ見たいにゃ」

「ん、はー」

微妙な記憶を思い起こしていると、トラが興味津々と手を伸ばしてきたので『黄巾首

魁張角想像図絵』を手渡してやる。わつくわくで鑑賞するトラ。「ほほー」だの「ふむふむ」だのと声を上げながら実に楽し気だ。その様子に興味を惹かれたのか、子明がそつとトラの後ろから手配書を覗き込む。そこには変わらず微妙な怪人が描かれているだけであった。

「これはなかなか……、なかなか格好良いにや!!」

「そ、そうなんだ」

「にやー、亞莎にはちよつとはやいかにや〜?」

「えつ……と、うん、そう……かも」

やけに得意げなトラに、苦笑しながらも微笑まし気に返事を返す子明。そんな二人を優しく見守りながらも、薺華は別の事を口にしていた。

「それにしても、旅芸人の姉妹か……」

「んー? なに、なんか懸念でもあるの?」

「どうしたものかと思つてね」

「何、薺華。甘つちよろい事言う気ー?」

等と言いつつ、ちよつと愉し気な仲峻。常識的な判断なぞ一顧だにせず、何か面白い事を言い出す事をありありと期待していた。

「いや、と言うか、今更になって叛乱の首謀者はただの旅芸人ですつて言つても、それこ

そ信憑性が、ね。女の子の頸三つぶら下げて、この娘達が此度の反乱を企てた何の力もない旅芸人に御座います。つて上に差し出したら、なんと言われるか……」

「あー、確かに。手配書似の強面の頸の方が説得力あるよね。たとえそれが真つ赤な偽者でも」

「黄巾の捕虜からも張角の正確な情報が全く得られていない現状では、芸人姉妹を差し出しても、誰も信用しないというのは有りそうですね」

「頭の痛いところです。彼の姉妹の信奉者達の心酔振りは、少々どころでなく常軌を逸していますねー」

「よく包んとこの間者はこの情報持ち帰ったね」

「……その間者からは、情報と共に姉妹の助命嘆願をされましたよ」

「取り込まれ掛かってんじゃない」

呆れた調子で仲峻がそう言えば、本当に頭の痛いところです、とこめかみを揉みながら子敬が応じた。

「助命するとして……」

「するんですか？」

「ん？ 包は反対か？」

「それはもう、抱え込む厄介事としては大き過ぎるでしょう」

まあ、常識的な判断だ。薺華の眩きに素早く反応した子敬の言は、当然のものだろう。

「駄目かな？」

「薺華さんがそうしたいと言うのなら」

「良いんですか？」

今度は子明が子敬の意外な言葉に反応した。

「それは無論、良くはありませんけどね。主が望むのならば、どうにか手を考えますよ」

「包も意外と薺華を甘やかすよねー」

「貴女だつてその方が面白いとか考えてるくせに」

「ま、ねー」

「亞莎はどう？ 反対かな」

「私は……、確かに一介の旅芸人を謀反人として、一切合切を背負わせて処断する事には抵抗があります。でも、その姉妹になんの落ち度もないとも思えません」

「確かに、何か切つ掛けはあつたはずだし、それに本当に何の力もないのかつてところにも疑問の余地はあるしね」

「どのみち、行き成りばつさりつて訳にはいかないかー。となると、他の軍を出し抜けるのかつてところなんだけど、どうよ包、その辺は」

「件の間者の情報から、最短経路は既に割り出しました。幸いにして、我々は強力な騎兵

隊を擁してます。他軍に先んじるのはそれほど難しくはないでしょう」

薙華が行屯騎校尉に任じられたという事は、屯騎兵がその指揮下に入ったという事である。対異民族戦の経験を持つ重装騎兵は、馬術を得意とする薙華と非常に相性が良かった。付け加えて言うならば、鮑鴻に率いられていた時よりも士気は高く、薙華がこの地に合流するまでに名を上げるのに大きく貢献していた。

子敬はこれを天意と感じていたが、天意や天数といった考え方が余り好きでない主の前では口にしなかった。

「とは言え、実際には配置次第ではありませんねえ」

「うちは騎兵を運用してるんだから、大体の予測は立つんじゃないの？」

「素直に勝ちだけを見据えるなら、そうなんですけどねー」

薙華はとにかく目立っている。これ以上功を積ませたくないと思っているのは一人や二人ではあるまい。子敬としても、明日の軍議であまりがつつくところを見せたくはない。それでもまだ打つ手はあった。

「それで彼女等の身柄ですが、玄徳げんとくさんに預かってもらおうというのはどうでしょう？」

「桃香とうかさんに丸投げしようっての？」

「ただで軍糧を食むというのも、彼方としても気後れする事でしょう」

「貸し借りはさっさと清算しようぜーって？」

「ええ」

「しかしそうになると、玄德殿にも事情を説明しなかりませんけど」

「それに関しては劉玄德という人物は信用できると思いますが。そして、あそこの勢力は主が是とすれば、身命を賭して厳守するでしょう」

にまにまと笑顔で語る子敬に、悪い顔だなあ、と吐息を漏らす薜華。しかし案外、良いかも知れない。正直、自分では持て余しそうな案件だが、劉玄德という稀代の器ならば、容易く収めてしまえそうだ。勝手な期待ではあるが、彼女はそれをこそ是として突き進む理想の人だ。

「……頼んでみるか」

薜華のその言葉に、魯子敬はにんまりと笑みを大きくした。

第十五回 蒼天未死

水鏡女学院出身を示す装束に身を包んだ少女は、頭を悩ませていた。ここ最近はずっと同じ案件が付いて回っている。これ以上、曹操軍には頼れない。腹は膨れても、戦死

者が多くなり過ぎていて、これ以降は借りの方が大きくなるだろう。元より、この討伐軍集結地までという約定である。

それにここから先は本格的な戦功の奪い合いだ。そんな局面で、あの底の知れない英傑に良い様に使われる訳にはいかないのだ。

短めに切り揃えられた光沢のある亜麻色の髪が、傾けた頭に合わせてさらりと頬に流れるのを、細く嫋やかな指で掬う。愛らしくも深い知性の輝きを灯す紫檀色の瞳は、直面する問題を前にしても聊かも曇る事無く、桜貝のような可憐な唇は、今は固く閉じられていた。身の丈は六尺約143cmを二寸超えるか否かといった程度の矮躯だが、その身に負う決意は泰山たいざんよりも大きかった。

この少女、名を諸葛亮しよかつりやう*171、字を孔明こうめいといった。

陣營を張り終り、兵員、軍糧、武器資材等々をまとめた報告書を睨み付けるようにしながら黙考していると、自分と親友用に張られた陣屋の外から、自分を真名で呼び掛ける声が聞こえてきた。

「朱里ちゃん、朱里ちゃん！」

「どうしました？ 桃香様」

手早く木簡を巻き、陣屋を出ると、敬愛する主が義妹の一人を引き連れて現れた。いつもの笑顔に、いつもの元氣。目にするだけで活力を与えられる陽の人。

「到着したんだって！」

「厳行屯騎校尉殿だ」

「ああ……」

誰が？という疑問の声を上げる前に、主の義妹であり、右腕とされる人物が面白くもなさそうに補足した。それは、今注目されている立身伝の主人公である。

厳寿、字を慶祝という。益州巴郡出身の清流豪族の出で、諸州見聞の旅の途中、黄巾賊の脅威に曝されていた潁川郡某県にて義勇軍を結成。その類まれなる武勇を以つて黄巾賊を蹴散らし、世に躍り出た新進の英傑。そして、次に噂を聞いた時には行屯騎校尉に出世していた。

有り得ぬ成り上がり振りである。この黄巾征伐で功を立ててある程度の地位に就く、というのは解かる。自分達も正にそれを狙っている。しかし、今はまだ征伐の最中だ。それも禁軍を率いる要官に、つい最近まで評判こそ上がっていたとはいえ無官の娘を就けるなど、どんな手品であろうか。仮官であっても無理筋であることに変わりはない。

主は自身と同じく義勇軍から身を立てたこの人物に、強い興味を抱いていた。

「どんな人かなー？ お友達になれるかな？」

「桃香様、あちらは既に中央の高官。そう簡単にお会いできるとは……」

自分と同じように世の為人の為に義勇軍から立ち上がった人物だ。色々と期待する

ものがあるのだろう。無邪気に語る主に、美髪の義妹が思い止まらせようと声を掛けた。内心面白く思っていないのだろう。義姉とは違い、自分達と同じ様に身を立って、それでいて先を行かれています事に。いや、内心どころか、うつすら表面に滲み出ている。良い傾向ではないな、と小さな軍師は心の中だけで小さく嘆息した。

確かに自分にも思う所はある。しかし、こちらとあちらでは様々な要因が違っている。無官の身から義勇軍を立ち上げたという共通項だけで比べるのは間違いだ。それに、厳寿なる人物は、決して桃園の次姉が妬心を向けるような人物ではない。出来れば良い出会い方をして欲しい。そう願って口を開いた。

「んー、無理かなあ」

「あちらも任官したばかりで何かとお忙しいでしょうし……」

「厳行屯騎校尉様は……」

「朱里？」

「厳行屯騎校尉様は孝心高く、義気旺盛で、仁愛に富んだ御方です。貧民や異民族にも分け隔てなく接し、汚吏を蛇蝎の如く嫌うと聞き及んでおります。桃香様が無官で、自身が成り上がったからと言って、こちらを侮るような態度を取られたりはしないでしよう」

「朱里ちゃん、慶祝さんの事知ってるの？」

「それほど詳しくは存じ上げませんが、水鏡女学院時代の一学年上の学友が、荊州南部で彼の御仁とお会いした事がありました。その時に寄越してくれた文に、厳慶祝なる人物の事が認め^{した}ててありました」

そう、自分と、そして女学院時代からの親友は話題の人物の事を少しだけ知っていた。人品申し分なく、武勇高らかで、初めて会った学友の策に己の武を賭けるなど、人を見る目も確かであろう。彼女達にとつて、惜しむらくはその志が天下を向いているようには感じなかった事だ。将器充分なれど王器なし。それでは駄目なのだ。肩を並べて戦う仲間としてなら、とても頼りになつたろう。しかし、自分達が求めていたのは、大陸を託すに足る主であつた。

無謀とも思える様な大望であるが、そこを指向する大人物にこそ仕えたいと、親友と共に願つていたので。そして、幸運にも自分達は天下の人民を遍く救いたいという志を持った英雄と、理想の主君と出会う事が出来た。

そして、自分と親友が劉玄德を選んだように、厳慶祝を選んだ者もいる。強力な人脈を持つ何者かが。

主君は純粋な興味から会いたがつているが、自分も早い内に会つてみたいと考えていた。そして見極めたかつた。その人となりに実際に触れてみたかつた。彼女を押し上げた腹心の事も深く気になつていた。

その機会は意外なほど早く訪れた。主が厳慶祝の事を更に訊ねようと此方に身を乗り出したその矢先、「桃香様くっ！」と愛らしい声が響いて来た。

その場の皆でその声の方へ振り向いてみれば、女学院時代から志を共にする親友が息せき切つて此方へ走り寄つて来ていた。

「と、桃香……しゃま……はひい……お、お客様、です。是非に、……お会いしたいと……はあ、はあ」

「お、落ち着いて雛里ちゃん。誰が訪ねて来たの？」

余程急いできたのだろう、主に両肩を支えられ、何とか倒れ込まずにひいひいと息を荒らげている。ただ、焦燥の色は見えず、緊急事態という訳でもなさそうだ。会見の申し込みでここまで慌てるとは、一体どれほどの大物か、或いはまた意外な人物なのか。

「はあ……はあ……、ふう」

「大丈夫？」

「は、はい。すみません、桃香様」

「それで雛里、一体どなたが来られたのだ？」

「はい……。厳行屯騎校尉様でしゅ」

思わず三人で顔を見合わせた。噂をすれば、というわけでもなからうが、まさか向こうから接触してくると思っていなかった。あちらもこちら同様に興味を抱いていた

のだろうか。だとすれば、少なくとも悪い事にはならないだろう。

顔を綻ばせた主が嬉々として出迎えに向かうのを慌てて追いながら、この会見を転機と出来れば良いのだが、と期待をかけていた。

「あう……噛んじやつた」という、もう一人の小さな軍師の恥ずかし気な呟きは、幸いにして誰の耳にも届いていなかった。

手早く陣営を張り終り、皆が細かな雑務を片付ける中、薺華は少々手持無沙汰であった。この機会に確かめたい事もあり、ついうずうずとしていると子敬と目が合った。というよりも此方を窺ってきたので、試しに声を掛けてみる。

「ねえ、包。時間ってあるかな」

「そうですねえ、少なくとも本営に出向いて挨拶して下されば、少しくらい出歩いてもらっても構いませんよ。どうやら、未だ参陣できていない諸侯もいるらしいので、全体軍議は明日以降になりそうですし」

「ありがと。じゃあ……、亞莎、一緒に行こうか」

「え、私ですか？」

突然の指名に驚いた子明が子敬を窺うと、笑顔で頷かれたので「はい」と憂いなく返事をし、薙華の随伴に付いた。

「で、何も言われていないトラ吉も極自然に付いてったな」

くそー、わたしも出掛けてー、と愚痴る仲峻をまあまあと宥める子敬であったが、後に自分も出払えばよかつたと思う羽目になるのであつた。

本營の天幕を辞して、子明に手配書を渡しながら各陣營を見渡す。子明の「うわ……」という珍しい呻きを聞きながら目を凝らせば、ここから見える範囲には目的の三陣營の内、二つの軍旗が翻つて見えた。

さて、矢張りまず最初はあの陣營だな。と、二人を伴つて歩き出した。普段は無意識の奥底に沈んでいる記憶とどれ程の差異があるだろうか。珍しく意識してそれを浮上させながら歩を進める。自分の存在によつて、或いは全く無関係にも色々と相違がある。変に囚われ戸惑つたりしないようにしなければならぬ。気を引き締めて行こう。

そう言えば、あの噂は戦場にまで流布されていたが、今以つて確たる話は聞こえてこないな。ふと気になって、手配書を眉根を寄せた微妙な顔で凝視している子明に声を掛

けた。

「ところで亞莎は『天の御遣い』って知ってる？」

「え？ はい。この乱世を終結に導くとかなんとか……」

「どう思う？」

「……そうですね。胡散臭い噂話だと思いますが、それを信じたがる人達の気持ちも解かります」

「ふむ」

「トラは居て欲しいにや。それで天の国のお話ききたいにや！」

「天の国か……。トラはどんなところだと思う？」

「にや。きつと美味しいものがいっぱいあるにや！ それで美味しい獲物もいっぱいいるんにや！ それでそれで、美味しい香蕉バナナもいっぱい生つてるにや！」

「香蕉？」

「南方の果物だよ。交州に立ち寄った時に食べる機会があつてね。それにしてもトラ、食べ物のことばっかりじゃないか」

「にやははー」

悪びれもせず笑うトラに、薙華も子明も釣られて笑った。この数か月、ずっと軍糧を大鍋で煮込むだけの大味な食事続きで飽きが来ているのだろう。南蛮に居た頃のトラ

ならば、それでも美味しい美味しいと喰らったであろうが、もう一年以上も薺華と共に旅をして来て随分と舌が肥えてしまっていた。薺華もそろそろ麻婆豆腐でも腹一杯にかつ込みたい気分だった。南蛮辛子たっぷりのやつがいい。

そんな中、腹一杯に食べられるだけでも満足な子明が、話題を元に戻した。

「それで、薺華様は信じておられるのですか？」

「……故郷の友人がね、私が求めているというんだ」

「その、天の御遣いを……？」

「うん。実際、私が彼をどう想っているのか。求めているのかどうなのか、私自身にも判らないんだけどね」

「そう、なんですか」

天の御遣いは男性なんですか？とは聞けなかった。御遣いの事を語る主が曰く形容し難い表情をしていたから、そこにどれ程の想いがあるのか計れなかったから。だから中途半端に頷くくらいしかできないかった。それと同時に、呂子明は天の御遣いは本当に居るんだと、引つ掛かりなく納得した。

天の御遣い——、どんな方なんだろうか。

子明がまだ見ぬ遠い存在に俄かに想いを馳せていると、目的地に着いたのか、主がその歩みを止めた。その視線の先には、小さな、トラと同じくらいの背格好の少女が長大

な得物を手に、兵士の一団を訓練していた。

周囲を見渡してみれば、すぐ傍に劉の軍旗棚引く陣營が目に入った。恐らく、その一隊であろう。視線を訓練中の兵隊に戻せば、その軍装はまちまちであり、とても官軍には見えなかった。翠^{すいりよく}緑の劉旗、まともりのない軍装、軍規模に対して不釣り合いなほどの武威を放つ猛将。北方は幽州で旗揚げした義勇軍で間違いないだろう。

子明が答えに行き着くと同時に、薜華は眼前の一隊を見据えたまま、問いを発した。「どう見る?」

「荒さは目立ちますが、実戦で練度を上げた叩き上げの軍。能く統率され、士気も高く、何より率いる将が飛び抜けています」

淀みない子明の分析に、うん、と満足げに頷く薜華。そんな主従に恐る恐る近づくと小さな影。三角帽を被り、淡藤色^{あわふじいろ}の長い髪を左右で結んだ気弱気な少女。松葉色^{まつばいろ}の瞳は何かを確認するかのよう^{よう}に薜華に注がれている。しばしの逡巡、やがて意を決したように声を上げた。

「あの、何か御用ででしょうか?」

「ああ、失礼」

か細い誰何の声に振り向く薜華。声を掛けてきた少女の被る帽子の、その先つちよに興味津々のトラの頭をそつと撫でながら、応対する。

「私は嚴寿と申す者。劉玄徳殿に御目通り願いたく參上致しました」
 「やっぱり、嚴行屯騎校尉様……」

「? やっぱり?」

自分の噂くらいは耳にしても今更何の疑問も沸かないが、やっぱりという文言は少々引つ掛かった。それはつまり、人相風体まで流布しているという事か。自分もここに集っている諸侯の中で有力な者達の噂は幾つか耳にしているが、それはあくまでどんな人物かの評判であつて、どんな外見なのかなどという話は全く聞いていないというに……。

「あ、いえ、その……、お噂は勿論ですが、探花タンファちや、元直ちゃんのお手紙にあつた通りの方だな、と……」

「元直殿の……、そうでしたか。彼女の智謀には荊州で大いに助けられました」

と納得しかけて、いや待て、あの人どれだけ細かく私の事を文に認しためたんだ。と新たな疑問が沸き上がったのだつた。

此方の疑問を余所に、鳳統ほうどう*172と名乗つた目の前の少女は、やや興奮気味に今は遠い学友の凄さを捲まき立ててきた。真名を交わしてもいるし、よほど尊敬しているのだろう。徐元直の事を熱弁する少女は我が事のように誇らしげでもあつた。

自分の知らない知己の話に興味は尽きないが、このままでは日が暮れてしまうかも知

れないと、やや大袈裟な危機感に押されて、やんわりともう一度用件を伝えると、舌を噛み噛み大慌てで頭を下げてきた。

「あわわわ!! し、しちゆれいしました! 今、お呼びしてきましたしゅっ!」

「ああ、いや……」

訪ねてきたのは此方だ。話さえ通してくれば、此方から赴こうと言いたかったのだが、小動物のような軍師はまるで脱兎の如く駆けて行ってしまった。

「……じゃあ、待たせてもらおうか」

「はい」

「にや!」

期待に胸膨らませて劉備りゅうび*173——桃香——が陣營の外れ、義勇兵の訓練場所に着くと、そこには着流し姿の若武者が、異民族であろう小さな少女と共に居た。此方に気付く様子もなく、二人して熱心に声援を送るその視線の先に目を移せば、そこにはもう一人の義妹と、見知らぬ美少女が立ち会っていた。

末妹がその身に似合わぬ長物を縦横に奮う。一見、無手の少女には分が悪過ぎるよう

に桃香に思えた。

実際、満足に近づく事すらできていない。しかし、対戦相手の少女に焦りの色はない。妹の振り下ろしに臆することなく、間合いを詰めながら身を捻り寸でのところで躲す。柄の半ば程の距離まで詰め寄ったが、まだまだ無手の間合いには遠い。にも拘らず、片眼鏡の少女はその腕を横薙ぎに振るつた。長過ぎる袖が風音を立てて妹の眼前を横切つたが、そんなものが武器になるとは思えないし、そもそも届いてすらいなかった。が、背後で次妹がはつと息を呑んだ。桃香には見えなかつたが、振るつた袖から極薄のヒ首ひしゅが飛び出していた。しかし、末妹は動じることなく、なんとそれを歯で咬んで受け止めていた。暗器を投げ付けた少女も、それに動じることなく更に間合いを詰める。

桃園の三女は旋風を起こすように得物をぐるりと振り回す。少女の横腹にぎりりと撓つた柄が喰い込むが、少女はそこを軸に側転して辛うじて受け流した。だが、そこに自身が投げ付けたヒ首が迫る。末妹が首の捻りだけで投げ付けたのだ。桃香はそこで初めて末妹がヒ首を啜えていた事に気付いた。ばざりと音を立てて少女の長袖が翻ると、ぞろりと凶悪そうな鉤爪が袖口から顔を覗かせていた。桃香は見逃していたが、鉤爪を袖口から伸ばすと同時にヒ首を受け止めていた。得物の準備と防御を一つの動作でこなして見せたのだ。

にやりと大きな笑みを浮かべた末妹が、あろう事か自ら間合いを詰めた。「えっ!？」と

桃香が思わず声を上げる。驚いたのは桃香だけではなく、暗器使いの少女も同様であった。しかし、動揺を即座に抑えて迎え撃つ。桃香の義妹は長大な得物を棍のように小器用に振るい、不利なはずの近接の間合いで互角以上に渡り合った。

片眼鏡の少女も意地を見せて打ち合うが、十合、二十合と打ち合う毎に末妹の荒れ狂う武威に押されていった。そして遂にぎりぎり保っていた均衡が破られ、少女が後方に弾かれた。そしてそれは、ちょうど末妹の振るう丈八蛇矛じょうはちだぼうの最適の間合いであった。体勢を立て直した少女の直上にびたりと鬩きりされた波打つ独特の刃先。決着であった。

「参りました。流石にお強いですね」

「お姉ちゃんもなかなか筋がいいのだ！ 戦い方も面白くて、鈴々りんりんすつごく楽しかったのだー！」

「翼徳よくとく殿程の方にそう言われると……」

「鈴々のことは鈴々でいいのだ！ それに殿もいらわないのだ。そんな呼ばれ方はなんだかこ、こ、……こそばつたい？のだ！」

「ふふ、では私の事も亞莎と呼んで下さい。鈴々ちゃん」

「わかったのだ！」

先程まで刃を交わして立ち合っていた二人の笑顔を見て、嗚呼、皆が皆こうであれば好いものなあ、と桃香は思わずにはいられなかった。戦うにしても、力を振るうにして

も、後腐れなくこうして笑顔で友誼を交わせられたなら、それはどんなに素敵な事だろう。蹂躪する為でなく、支配する為でなく、屈伏させる為でなく……。

解かっている、現実はそのなにごくなく、自分も己の意を通す為には武力を必要としている。誰よりもそれを忘れているくせに、そんな力など持ち合わせていないくせに、それでも、譲れぬ想いの為に多くの人達から力を借りて今自分はここに立っているのだ。

理想ははるかに遠く、自分はあまりにも矮小で、それでも絶対に諦めたくなくて、残酷で当たり前過ぎる現実にもどうしても負けたくなくて、だから私は……

「良い眼をしている」

「ふえ……？」

不意に横から聞こえてきた声に、一気に現実には引き戻された。末妹達を見ていた筈が、いつの間にか遠く高い青空を見据えて決意を新たにしていた。噂の人物に会いに来たのに、一人で勝手に盛り上がってしまった。今、桃香は最高に恥ずかしかった。穴があつたら入りたい。切実にそう思った。しかし当然そんな訳にはいかない。

「わっ、私、すみません！ え、えと……」

「？ いえ、どうかお気になさらず？」

「と、桃香様、落ち着いて下さい」

「う、うん、そうだよ。よし、落ち着け、私」

すう、と大きく息を吸い込んで、ゆつくりと吐き出し気を落ち着けて、今し方声を掛けてきた若武者と正面から向き合い、漸く自己紹介をした。

「私がこの義勇軍を率いる劉備、字を玄德です」

まだ少し声の上擦っていたが、意識的に無視して（恥かしいから）、知らぬ間に此方に寄つて来ていた末妹も含めて、頼もしい仲間達を紹介した。桃香自慢の仲間達を。

「私は厳寿、字を慶祝と申す者。突然の訪問にも関わらず玄德殿から出迎えて頂き、まことに忝い」

綺麗な拱手で桃香に応ずる厳慶祝。と、その横に立つて同じく拱手を模る小さな少女。

「トラは厳虎にやー!」

「ふふつ、よろしくね、厳虎ちゃん。……厳?」

「血は繋がっていませんが、私の可愛い妹分です」

少女の可愛らしくも元氣満点な名乗りに、自然と笑顔になる。しかし、如何にも異民族といった風体のその少女の姓名におや?と思うと、慶祝が少女の頭を優しく撫でながら補足するように言った言葉に、桃香は、良いなあ、と素直に思った。いや、その言葉ではない。その言葉を口にした時の慶祝と厳虎の表情や仕草、二人の間に流れる何とも暖かな空気が、言葉以上に雄弁に二人の関係を物語っていた。そこから感じ取れる絆の

強さにこそ、好感を抱いたのだった。

桃香はもうすでに敵慶祝とその陣営の事が好きになつていた。

「あのつ、私、慶祝さんとは是非お話したいと思つてたんです!」

「私と、ですか?」

「はい!」

片眉を上げて驚いた慶祝に勢い込んで返事をする、話題の校尉殿は暫し瞬きを繰り返し、それは光栄ですね、とはにかむ様に答えた。

討伐軍軍営から程近い川辺。全軍の水源地として利用されているそこに、今は二人の英傑の姿が在った。

折角なら、二人きりで話したいと薙華が誘いだしたのだ。そうして二人連れたつて何処へともなく歩きながら話している内に、ここへと辿り着いたのだった。

ここへ来る途中、殆ど玄德が喋りつ放しだった。漢土の現状、それを憂いていた自分、二人の義妹と出会い、三人で誓いを立てた事。義勇軍を立ち上げ、二人の頼もしい軍師を得て、旧友に頼りながらも少しづつ前進してきた事。そして、黄巾の乱が本格化した

事で各地を転戦し、その中で薺華の噂を聞いた事。

「私達の他にも立ち上がった人がいるんだ！って嬉しくなっちゃって」

邪気のない笑顔でそう言われ、薺華はなんとも面映い気分で照れ隠しに頬を搔いた。笑顔で真つ直ぐに踏み込んでくる劉玄徳という年上の少女に、多少の戸惑いと、それははるかに上回る好意が薺華の中で急速に膨れ上がっていた。だからこそ、確かめたい事があつた。彼女の言葉の端々に顔を出す、彼女の理想、その想い。

「玄徳殿、貴女は何を想つてこの乱世に立ち上がったのですか？」

「私は、大陸の誰もが傷付かず、笑顔で暮らせる世になつて欲しいって、ずっと想つてる。……いろんな人にそんなの無理だつて言われちゃったけどね」

自らの願いを口にした後、その願いを誰かに告げる度に言われ続けたのであろう否定の言葉を、えへへ、と眉根を寄せて力無く笑いながら告げてきた。その顔は見たくないな、と思ひながら更に訊ねた。

「でも、諦めないんですね」

「うん」

此方の言葉に、今度は力強い輝きを瞳に宿らせて即答して来た。その顔は非常に好ましかつた。

「人は色んな道を歩みますよね。王道、霸道、忠孝の道に、仁義に殉ずる者、愛しか視え

ぬ者、武を極める事だけに邁進する者もあれば、厭世観故に何処にも行こうとしない奴まで色々だ」

「だが玄徳殿、私が思うに貴女の前には道はない。貴女の目の前に広がるのは矛盾と不可能性に満ちた無尽の荒野だ。誰も足を踏み出したことのない荒野を前に、貴女はそれでも往きますか？」

「……うん、往くよ。私の前に道がなくとも、ううん、道が無いのなら尚更私が往かなきゃ、私の望みは永遠に実現する事はないんだから。矛盾に身を千切られても、不可能が越えられない壁として立ち塞がっても、それでも諦めない、諦めたくない」

誰にも曲げられぬ強き意志に輝く青玉せいでんくの瞳に射抜かれた。腰まで届く艶やかな赤紅色あかべにいろの髪が風に揺れ、陽光を反射し煌いている。包容力が形を成したかのような柔らかな曲線を描く肢体は、今は女性的な弱さを感じさせず、頼もしさに充ちていた。春の陽射しのような暖かな女性だと思っていた。それは間違いではなかったが、それだけではなかった。陽射しどころではない、この人は太陽そのものだ。

「玄徳殿」

「はっ」

「私は嚴寿、字を慶祝と申します。そして……、我が真名は舜華。こんな私にも、己の道を託してくれた者達が居ます。だから貴女と共に往く事は出来ないが、どうかこの真

名、貴女に受け取ってもらいたい」

「確かにお預かりします。薺華さんも、私の事は桃香って呼んで下さいね」

「喜んで。それと、私の方が年下なんですし、さん付けなんていりませんよ」

「じゃあ、薺華ちゃんも殿なんてつけないでね」

「分かりました、桃香さん」

気付けば自然と真名を交わし合っていた。なんだか無性に心が浮き立ってきて二人して笑い合い、和やかな時間を過ごした。

大戦の前の僅かな隙間、二人の若き英傑はこうして最初の出会いを果たした。

劉玄德の元を辞して、薺華を含むの四人はそれとなく各陣営を観察しながら、自陣営に足をつけていた。自陣営、といっても内一人にとつてはそうではない。薺華に同行しているのは諸葛孔明、劉玄德の二軍師の片翼である。

何故彼女が居るのかと言えば、玄德と二人連れたつて皆の元に戻った時、互いに真名で呼び合っていることに気付いた孔明が、薺華に頭を下げて願い出てきたのである。聞けば、兵糧が不足気味であるという。これに薺華は安請け合いして子明に窘められてし

まったのだが、結局は子敬に相談しようと言いつつ半ば押し通してしまった。子明としても、薨華がいない間に劉備陣營の者達と友誼を結んでおり、その力になること自体は吝かではなかった。

こうして、孔明は事前交渉の為に薨華に同行していた。薨華に請われて、通りすぎる各陣營の自己評価や分析を披露しながら。孔明の各陣營解説を、子明は細大漏らさず頭に叩き込み、トラは半分も理解できないが、ふむふむなどとそれらしく頷きつつ話を聞いていた。そして薨華は、そんなトラを微笑ましく眺めながら耳だけ傾けていた。

そして、そんな一行に声を掛ける者があつた。声の方に振り向けば、そこには煌びやかな金髪を骸骨意匠の髪留めで左右に結わえた小柄な少女とそのお供の姿があつた。

強靱な意志と才知に彩られた青玉の瞳は、色合いこそ玄徳と同じだが、受ける印象は懸け離れている。自信に満ちた勝気な面貌は輝かんばかりで、威風堂々とした立ち姿は実際以上にその少女を大きく見せている。一目で逸群の才器である事が解かる。ただ視界に収めただけで、薨華は感嘆の吐息を吐いていた。

その傑物が、ちらりとトラを一瞬見遣つてから薨華に話し掛けてきた。

「貴女が噂の屯騎校尉殿かしら？」

「行屯騎校尉ですけどね」

「ふふっ、そう、そうだったわね」

わざとか。と訂正して告げると、やはりそうであつたらしく、悪びれもせず頷いて来た。それにしても、先のトラへの視線。どうやら私の広告塔にしてしまつていようだな、と思ひ至り『主ら目立つからのう』という南陽太守の声が脳裏に甦つて、俄かに微妙な気持ちになつた。そんな此方の内心を知つてか知らずか、いや、知つた事ではないだろう、目の前の少女が名乗りを上げた。

「失礼、私はえんしゅうちんりゆう州陳留太守曹孟德*174よ。此度の征伐では、陛下よりてんぐんこうい典軍校尉*175の節も与えられているわ。尤も、此方は有名無実な代物だけれど、ね」

「華琳様……」

孟徳の物言いに、脇に控える一人が窘めるように声を上げた。が、窘められた方は何処吹く風といった感である。何ともまあ、大胆不敵な御仁だな、と薜華は見取つた。

「それで孟徳殿、私に何か?」

「少し貴女に興味があつて、ね」

「成り上がり者の顔を拜んでやろうと?」

「只の成り上がり者なら興味はないわ」

鼻で笑いながら視線を孔明へと向けた。

「兵糧の無心でもされたかしら?」

その言に、ちらりと孔明に視線を向けると、固い表情で小さく頷いて来た。

「ここに来るまでの間は、曹孟徳様に御助力頂きました」

成る程、自分達は子敬が私財を投げうった上に、官軍と成り上がって下軍校尉の輜重隊と、豫州牧から預けられた州兵分の軍糧があり、更に正規軍として補給を受けられたが、数千の義勇兵を寄る辺ない劉玄徳達が食わせるのは一苦労だろう。

しかし何故、そんなところをあげつらうのか。意味があるとも思えないし、曹孟徳という人物から受ける印象からは似つかわしくもない。そう思つて孟徳に視線を戻すと、先の発言など忘れたかのように別の質問をぶつけてきた。

「貴女は劉備に何を見たのかしら？」

「貴女の興味はそこですか」

「さて、どうかしらね」

「桃香さんは尊敬に値する人ですよ」

「へえ、それはあの子の夢物語に共感しての事かしら」

「彼女以外が口にすれば確かに夢物語で終わるでしょうね。でも、あの人は全てを呑み込んで征こうとしている。あんな生き方は誰にもできないでしょう。私にも、無論貴女にも」

最後に付け加えた一言で、曹孟徳の周囲を固める空気が軋みを上げた。我らが主はそのような愚かな道を歩もうとなどとしなただけだ、ふざけたことを抜かすな。とても言

いたげだ。ただ、孟徳自身と、薺華の纏う空気には聊かの揺らぎも見えなかった。

「全てを呑み込んで、ね。それは理想を語りながらも拳を振り上げている現実をも、という事でいいのね」

「彼女が拳を振り上げなければならぬのは、彼女の話聞ける程の者が少ないからでしょうね」

「ふうん、全肯定なのね」

少し詰まらなそうにした孟徳に、今度は薺華が問い掛けた。

「ねえ、孟徳殿」

「なにかしら」

「世の人達は皆、戦乱を望んでいるだろうか？ 庶人から官吏、奴婢に豪族、士人から宦官まで、皆、世が乱れば良いと思っっているかな」

「平和であるに越したことはないでしょう。宦官共にしても、少なくとも自分達の周囲だけは平穏である事を望んでいるでしょうね」

「でも今、世は乱れている」

薺華が何を言いたいのか、それが解からず曹孟徳の供人は困惑したが、彼女達の主は少しの間ぼかんとしたが、直ぐに何かを察したのか、肩を震わせ始めた。孟徳の他に、孔明にも薺華の言いたい事が解かったのか、目を見開いて薺華を見詰めていた。そして孟

徳も強く薺華を見詰めた。

この時、初めて曹孟徳の興味が此方に向いたな、と薺華は感じ取った。

「貴女、面白い考え方するのね。そんな事、劉備自身だつて思つてもいけないでしょうに」
「でしようね。あの人はこんな事をせせこましく考える必要なんてありませんし」

「その分、あの娘の元に集つた者達は苦勞するでしようね」

「彼女の臣下にとつてはそれこそ望む所でしょう。己が必要とされていると実感できる事は慶びだと思いますよ」

不意に言葉が途切れた。暫し見詰め合う二人。その間に何が通つているのか、周囲の者には判らなかつたが、誰もが固唾を呑んで見守つていた。

「どうやら少し、劉備という英雄を見誤つていた様ね。貴女には礼を言うわ」

「若しかして余計な事だつたかな」

「あら、どうしてそう思うのかしら？」

「貴女には見縊られていた方が楽そうだ」

「あら、駄目よ嚴寿。そんな事を言つていてはいけないわ」

に、と強者の笑みを浮かべながら、孟徳は威嚇するように告げた。それに対し、薺華は徐に子明の脇腹をつついた。

「うひゃん?! な…何をするんですか薺華様!」

「固い固い。亞莎、もつと肩の力を抜きなつて」

子明の抗議も何処吹く風とばかりに気軽い葬華に、曹孟徳は今度こそ我慢できずに声を立てて笑つた。その脇に侍る者達は呆氣にとられ、毒気を抜かれてしまった。

殺気を放つ孟徳の臣下に、敏感に反応していた子明は、孟徳が主を諱で呼ばわつた事で我慢の限界を越えようとしていた。そこを主に不意打ちを喰らつたのだ。戸惑うのも当たり前である。

「此方の失言だつたわね、謝罪するわ。それと、私の配下が失礼をしたわね」

「なに、お気になさらず」

一見して和やかに言葉を交わす互いの主君に、それぞれの臣下はしおらしく頭を下げるしかなかつた。

「なかなか楽しい時間を過ごせたわ。それじゃあ、また全体軍議で会いましょう」

「ええ、それでは」

「はー、やれやれ。傑人つてのは居るところには居るもんだね」

軽く伸びをしながらばやくよくように独り言ち、さて、行くかと皆に声を掛けようとする

と、子明が申し訳なきような顔で俯いていた。

「亞莎？」

「申し訳ありません、薜華様。私が堪え切れずにとんだご迷惑を……」

「そんな気にしないでいいよ。向こうも殆ど堪えられてなかつたし」

「それにしても薜華様は流石です。あれほどの殺気を浴びて涼しい顔をしておられて」

「この娘はすぐに私を褒め称えて来るな、と内心照れながら、自分が平然としていられた訳を語った。

「意識的に放つような鬼気なんて、所詮大した事はないと洛陽で知る事が出来たからね。ただ其処に在るだけで圧倒的な空気を纏うような逸脱した傑物と何度も立ち合えば、あれくらいはどうという事もなくなるよ。亞莎も機会があれば彼女と立ち合ってみると良い」

「いつかお話しして頂いた呂東中郎将様の事ですか？」

「そうそう。恋以上の武人なんていないからね。うん、この戦が終われば洛陽に行くことになるだろうし、私から頼んでみるよ」

「あ、有り難うございます。……鈴々ちゃんよりも、お強いんですよね」

「あの子は恋を除けば私が見てきた中で一番強いけど、彼女が三人いても恋には勝てないんじゃないかな」

「そ、そんなにですか……」

自分が全く歯が立たなかった相手が三人がかりでも勝てないとは、もはや想像する事すらできない高みだ。絶句するしかない子明の隣で、孔明も息を呑んでいた。

そんな二人の様子に、小さく笑みを浮かべながら「天下は広いからね」と呟いて、さて陣営に戻ろうと前を向いて、思わず「うわ……」と声を上げてしまった。

前を振り向いた薜華の眼に、前方から歩いて来る二人の女性が映った。別段、その二人は此方を目指していた訳ではなかったが、薜華の呻きを耳聴く聞きつけた桃色髪の女性が不満気な様子で此方に向かって来た。

しまった。と思ってももう遅い。此方にずんずん歩み寄せてくる女性が、とある少女を強く想起させた為、つい声が出てしまった。それにしても、先程はその軍旗を見掛けなかったのだが、劉備陣営に出向いている間に到着したのだろうか。だとすると、着陣してから時間も殆ど立っていないだろうにこんな所を出歩いているとは、仕事をすっぽかしてきたのだろうか？ ああ、実にあの子の姉らしいな、などと思いつつ、間にもう目の前に立っていた。怖い。

「ちよつと、初対面だと言うのに随分じゃない?」

「あー、いやその……」

「私に向かつて言つたでしょ。判るのよ、そういうの」

「えー、いや、真に申し訳ない」

何とか誤魔化せないものかと言葉を彷徨わせるが、ぴしやりと断言されてしまい、逃げ場を失つた。尤も、そんなものは初めから無かつたが。

「で、なんで人の顔見て『うわ』とか言つたのかしら?」

「……おつきい尚香が居る、と思つてしまいました」

「ぶ。ふ。ー。ー。ー。つ」

当然の疑問をぶつけられて、全てを観念して正直に話せば、何かと事の成り行きを見守つていた桃髪女性の連れ合いが、堪らず噴き出した。

「ちよつ、梨晏りあん!! 吹き出してんじやないわよ!!」

「ごめつ、だつて雪蓮シユレン……、おつきいシャオつて、ぶ。ふ。つ、ふひやははは」

「変な笑い方してんじやないわよ! この!!」

「わー! ごめん、ごめんつて!?!」

「あの、本当にご免なさい」

薜華の重ねての謝罪に、きつと睨み付けてきた女性の鬼気が、トラの次の言葉で一気

に霧散した。

「にやー、シヤオのお姉ちゃんにや?」

「えっ、……シヤオの真名を? えっと、お嬢ちゃんは?」

「トラは敵虎にや! なんよーでシヤオと美羽とは友達になつたにや!」

「公路ちゃんまで。へえ……ふうん」

感心したようにトラを見詰め、次いで薺華とトラを交互に見比べた。先の不機嫌は何処へ行つたのか、一転して愉し気な表情を刻む女性に、やっぱりあの娘の姉だなあ、と薺華は心の中で大いに頷いた。

「成る程ねえ、確かに面白そう」

「ほう、そうか」

「ええ、………えう」

嘗て南陽で妹が告げてきた事と同じようなことを、よく似た笑顔で呟く女傑。しかし、その言葉に応えた背後からの声に、楽しげな顔から一瞬にして気まぎれな、悪戯を見咎められた子供のような顔になった。こっちの表情の方がより似てるな、と薺華は今度は実際にうんうんと頷いた。

「軍営のまともめもせず、もう楽しみを見つけたのか。大したものだな、雪蓮?」

「め、冥琳……、いや、あの、これはね?」

「諦めようぜ、雪蓮。やー、もう見付かっちゃったかあ」

「見付かっちゃったかあ。ではない！ 梨晏、お前まで一緒になつてなんだ！」

「だあつて、いつもは雪蓮と冥琳二人だけで出掛けちゃうからさあ。偶には私だつて雪蓮と二人きりでいちゃいちゃしたいじゃん!!」

「はあ……、お前という奴は。もういい、二人共 早く戻るぞ」

「ちえ……」

「雪蓮？」

「はーい、戻るわよ、戻ればいいんでしょ」

「全く……。雷火殿と祭殿まで飛び出して人手が足りないんだ。余り手間を掛けさせるな」

「えー、それで私達だけ呼び戻すの？ なに、あの二人だけ狡くない」

「雪蓮」

「はい、戻ります」

「んじやーなー、次の時はもつとゆつくり話そうなー」

目の前で展開される寸劇を見守っていると、梨晏と呼ばれていた女性が手を振り振り別れを告げてきたので、此方も小さく手を振って「はあ、どうも」と気の抜けた返事を返した。なんだろう、この置いてけぼり感。まあ、大事にならずに済んで助かった。安

堵の息を吐いて、今度こそ陣營に向けて足を踏み出した。

「で、どうだったのだ？ 噂の赤將軍は」

「すつごい失礼な子だったわ」

「ぷふっ」

自陣營に引き返ししながら、不意に黒髪の軍師が問い掛けた。先程は一瞥もしなかったというのに、しつかり気にしていたようだ。それに対し、接触する原因となった対象の眩きを思い出しながら、わざとらしく怒った体で言い放つ尚香の姉。釣られるように笑いを漏らす戦友。

二人の友人に呆れながらも（そのくせ自分も少しそれに乗りつつ）、眼鏡の位置を直しながら、孫家の頭脳が孫家の後継者に再度問い掛けた。母を越える、もはや超常の域に達していると思わされることも度々ある彼女の「勘働き」がどう反応したのか知りたかった。

「り〜あ〜ん〜？」

「ごおめんって雪蓮。にしても、あの子が噂の屯騎校尉様だったのかあ」

「そうだ。雪蓮の笑い話は後で着にするとして、お前の所感を聞きたいな? 雪蓮」

「さらつと聞き捨てならない事言わないでよね……。はあ、まあいいわ。そうねえ、多分だけど、あの子は大陸に生きる者は誰も敵とは見ていないわ。だから、私達が戦場で見える事があつても、最終的な敵とはならないわね」

「……じゃあ、あの子にとつての敵ってなにさ?」

「知らないわよ、そんな事。私は別に預言者でも何でもないんだから」

よく言う、とは口に出さずに大陸でも有数の智謀を誇る才媛は、厳慶祝と戦場で見える可能性を見据え、今後の方策を練り始めていた。

第十五回——了——

自陣營に戻つて来た薺華を出迎えたのは、珍しくも憔悴した魯子敬であつた。

「なに、どうしたの? 大丈夫? 包」

「ああ、薺華さん。お帰りなさい」

何処か煤けた気配の軍師の姿に、何事かと気遣うと、脇で見ていた親友がその訳を話

してくれた。

「薺華達が出掛けてる間に、包の師匠って人が押し掛けて来てさー。やー、凄かったよ。包の陣屋で出迎えてたんだけど、外にまで怒声が響いてたからねー」

「包の師匠って、確か江東の二張の一角だったよね。と言うか、その辺の事は済ませたつて言つてなかつた？」

「あちらさんの気は全く済んでなかつたつてことだねー」

「いやー、参りました。やつぱりあの方 苦手ですー。公覆さんが居て助かりました」

「それで結局大丈夫だったの？」

「ええ、まあ、何とか清算は済ませました。今度こそ」

「ならいいけど……」

未だどこかよれよれしながらも、ぐつと握りこぶしを小さく掲げて断言する子敬。いまいち不安を隠しきれない薺華であったが、信頼する知恵袋がそう請け負うのならば、あれこれ言う事も出来なかつた。

そんな薺華の様子に構わず、子敬が薺華の背後で事の推移を見守る少女を眇めながら声を掛けた。

「それよりお客さんですか。水鏡女学院卒業生とは、また難物を連れて来ましたね？」

「お初に御目に掛かりましゅ……。諸葛亮、字を孔明と申します」

「彼の伏龍ですかー、お噂はかねがね。さて、それでどんなご用件なんでしょうか」

この後、蕤華が持ち込んだ厄介事に疲れた頭で対応した魯子敬は、小さな軍師の願いを洩りながらも受ける事にした。こうして、蕤華と劉玄德の間に、正式に盟が交わされる事となった。

この先行投資は、諸葛孔明が辞した直ぐ後に帰還した問者の持ち帰った情報によって、早くも芽を出す事となった。

第十六回 天下不静

太陽が地平を目指し夜空を押し退けようとすゝる刻限、東の地平に朱い帯が布かれ、夜色が薄れ青みが広がる空を眺めながら、薜華がいつものように走り込みの準備運動をしていると、見知った気配が二つ、此方に近づいてきた。そちらに顔を向ければ、洛陽で友誼を交わした女傑達が軽い足取りでやって来た。随分と早起きだな、と思つたが、よく見れば一方は酒気で顔が赤らんでいる。呑み明かしたのか……。

「おー、なんや変わった導引やな？」

「霞、久し振り。相変わらずそうだね」

「あたしも居るぜ！」

「なんで翠は此処に居るの？」

「おいっ!? ご挨拶だな!!」

「いや、そうじゃなくて、西涼は大丈夫なの？」

「……ん、ああ。そういう事か」

久し振りに顔を合わせたというのに、またぞろ^{からか}擲揄つてきたのかと声を荒げた西涼の姫騎士だったが、そうではなかったよう^かで気を落ち着けた。

「西羌せいきやうは静かなもんだ。あんまり静かなんで、母様の指示もあつてあたしがここに来たつて訳さ。未だに呼び戻されてないつて事は、動きがないままつて事だろうな」

「そっか」

「去年の益州の氐蛮も直ぐに退いたらしいし、なんや外患については暫く楽できそうな雰囲気やな」

「それなら有り難いんだけどね」

「だな。つつても、静かすぎるのも不気味ではあるんだよなあ」

「二人共、考えすぎなんちゃう？ それに今は黄巾の連中ぶつ飛ばすこと考えなアカンで」

文遠に言われ、孟起と二人顔を見合わす。確かにその通りだ。今、目の前にある問題を片付けない内に、遠い国の端の事を思い煩つても仕方ない。

「そーだな、ちゃちゃつと片付けてやるか」

「実際、これだけの軍が集結すればあつという間でしょう」

「無駄に多くおるよか、ウチら三人の軍勢だけの方がやり易いやろけどな」

「違う。実際に三人で戦場を共にした事はないが、初めて顔を合わせたばかりの中央将校や地方諸侯よりは、互いの呼吸が読み解けるだけの友誼を結んでいた。皆、同時に同じ結論に至り、同じような笑みを顔に刻んだ。」

第十六回 天下不静

すっかり冷めてしまった酒を飲み干し、ふう、と息を吐く。軍糧の一部として大量に持ち込んだ官権酒かんかくしゆ*176だ。それ程良い代物ではない。それが冷めきつてしまえば、最早僅かの満足も得られなどしない。

「まだ終わらんのかいな……」

徳利を引つ繰り返して未練がましく杯に酒滴を振り落しながら文遠がぼやいた。華も同感であつたので、もう少し建設的な事をぼやいたら、孟起から突つ込みが入った。「新しく酒を用意してもらうか」

「これ上呑んだら、もうただの酒宴になっちゃうぞ」

「ええやん。大体、いつまで続けるんや。そない揉める事なんあるか?」

本営中央に張られた大きな帷幕に、主だった中央軍高官、地方諸侯及びその参謀が参集し、喧々諤々の議論を交わしていた。

中央に拮げられた地図を囲む軍議の中心集団と、幾つかの小集団に分かれ、それぞれ車座になって軍議が進められていた。その集団の間を此度の総司令である大將軍何進が、それぞれの意見に耳を傾けながら練り歩いたりなどしている。

蒯華は端の小集団で、口を滑らかにする為にと用意された酒をちびちびやりながら軍議の終わりを待っていた。予め、子敬から主たる出番はないだろうと聞かされていたので、余り目立たないようにしていた。

「蒯華んとこの軍師は随分頑張つてるみたいだな」

「ふん、まだ功が足りんと見えるな」

その子敬が帷幕中央で他軍の軍師と白熱の議論を交わしているのを眺めながら孟起が呟くと、この車座では唯一の初顔合わせとなる董仲穎から大將軍に貸し出された銀髪紫装束の武將華雄*1777が慥然と応じた。それに対し、蒯華は事も無げに答えた。

「誰がどれくらいがつついて来るか、他陣營の軍師の戦術眼がどれ程のものか実地で知れる良い機会だ。つて張り切つてたよ」

「まさかそれで議論を引つ掻き回しとるんちやうやろな？」

「さて、ね」

実際には劉備軍の配置を少しでも良い位置に着ける為の奮闘だろう。一人挟んだ右隣に居る孔明も、その智力に早くも高い注目を集めているようだが、如何せん立場が弱

過ぎる。薜華の考えている通り、子敬はそれとなく孔明を補佐するよう具申ししていた。

「ところであいつ、洛陽で薜華の事嗅ぎまわってた奴じゃないか?」

「おつそ!? 今頃それ言うんかいな!」

「い、いいだろ別に!」

事情を全く知らない銀髪の将が「嗅ぎ回っていたとはどういう事だ?」と尋ねてきたので、簡単にあらましを説明すると、軽く目を見開いて驚かれた。

「そのような者を懐に迎え入れたのか?」

「うん。……まあ、改めて考えると、なんだか妙な感じはある、かな」

如何という事もなく首を縦に振ってから、思い返してみると魯子敬とは不思議な縁だとも思った。仲間となつてからは深く考える事などなかったが、思えば最初は随分と警戒していたつけな。と、思い出すとなんだか無性に可笑しくなつた。酒を呑み過ぎたかも知れない。いや、寧ろもう少し酔いたい気分になつてしまった。それを敏感に察知されたのか、「軍議中だぞ」と孟起に釘を刺されてしまった。

「ふむ、噂の赤將軍はどんな人物かと思つていたが……」

「ん? 誰?」

「お前だ、お前」

聞き慣れぬ異名に首を傾げると、錦馬超が此方を指し示した。まさかとは思つたが自

分の事だった。いや、まあ、流れからいってそうだろうという気はしたけれども……。

「なんや、自分の事なんに知らんかったんかいな」

「自分の風聞を収集するなんて恥ずかしくてできないっての」

「まあ、それもそうか」

「それにしても、どういう意味？」

「薨華がいつつも返り血浴びまくつとるからやんな？」

「ええ……」

実際に戦場での戦いぶりを目にしたことのない文遠がさらりと言った。それだけ薨華の戦い方が広まっているという事なのだが、当人は少し不満だった。友人達の異名を知るからこそである。

「因みにウチは神速の驍将や」

「ずるくない？」

「いや、なにがだよ……」

「そない言うても、薨華の戦いぶりから付けられたんやから、しゃあないやん？」

「それにしたつてもう少しこう、さあ……」

「ならば、自分好みの異名と共に名乗りを上げればよいのでは？ 実際、そうやって己の

異名を定着させる者もいる」

「……それはそれで恥ずかしい」

「あのなあ」

勇将にして猛将の提案に恥ずかしげに難色を示すと、孟起が呆れ声を発した。それに對し、薜華はややいじけるように言うのだった。

「翠はいいよ。錦馬超だもん、錦馬超、錦て」

「だああつ、何度も言うな!」

繰り返し眩かれる事で流石に恥ずかしくなくなった孟起が声を荒らげたが、薜華は何処吹く風で愚痴った。ああ、酒が呑みたい。

「なんで私だけ血みどろの羅刹らせつめ女めみたいな異名なの……」

本陣が構える高台で、暇そうに戦場を眺めていた薜華だが、隣で戦況を見詰めていた魯子敬が俄かに動き出したのを見て、出番が近い事を知った。屯騎兵に出撃準備を指示し、気合いを入れ直して子敬の準備が整うのを待つ。

今回出撃するのは薜華直下の屯騎兵のみ。補佐に子敬が就く。州兵・義勇兵は黄仲峻指揮の元、待機。これは機動力が求められるのと、一軍で敵を殲滅するのが目的ではな

い為だ。

「さー、薙華さん、いつきまつすよー」

「やれやれ、張り子の虎で終わるかと思つたよ」

「出番と言つても玄徳さんの補佐ですけどねー」

「手古摺つてるようには見えないけど」

「ですねー。しかし、曹操軍の動きがそれ以上に強く早い。ですので、あちらさんの助攻に参りましょう」

「成る程ね、了解」

さて、いよいよ出番か。と小さく呟いて愛馬を駆つた。屯騎兵が後に続き、この数か月ですっかり様さまになった魚鱗の陣形を形作つた。先頭を往くは常に薙華である。この姿勢こそが、屯騎兵がこの新任行官に心服する大きな要因の一つである。前任の鮑鴻との落差がより強く屯騎兵の心を惹いたのだ。鮑鴻とて最初の内は真面に兵を率いていたが、それでも最前に出張るなどという事はなかった。それが時を経るに従つて、肥大化する醜心に呼応するように馬に跨るのも苦勞するほど無様な駄肉を膨れ上がらせていった。いい加減、辟易としていたところに現れた若き英傑の姿は、余りにも鮮烈だった。

無論、はじめから心服したわけではない。だが、先ずその技量には文句の付けどころ

がなかった。鎧を二領纏つて尚、屯騎兵の誰よりも速く馬を駆つた。

その武は舌を巻くしかなかった。什伍を組んで取り囲んでも、全く敵わなかった。

その精神は既に知れ渡つていた。鮑鴻の天幕に怒鳴り込んだ経緯は皆が知つていた。

そして、誰よりも疾く雄々しく戦場を駆け、常に先陣を切つて敵を蹴散らす武者姿に、屯騎兵は惚れ込んでいったのだつた。

今また屯騎兵はその背を目に焼き付けながら戦場に躍り出た。

曹操軍前曲を率いる夏候惇かこうとん*178——真名を春蘭しゅらん——は、不本意ながら愛しの主の

命を遂行できず僅かに苛立った。曹操軍は張角本陣を目指し、途上にある賊軍は適当に躲し、或いは蹴散らして敵陣奥深くへひたすら進撃する手筈であつた。始めは順調に進んでいた。最前を征く自由は群がる賊徒の群れなど物ともせず猛進した。多少歯応えのある連中が突つかかつて来ても、妹の弓隊と連携して上手くいなしていた。しかし、こちらに噛み付いてきた敵大部隊を受け止めた時、それは起こつた。

敵陣深くへ攻め込めば、それだけ多くの敵と対するのは自明だ。それまでで最大の敵兵であり、自軍の他部隊も増加する敵軍への対応にそれまでよりも時間が掛かり、連携

に僅かな隙間が空いた。その隙間を埋めるように敵後背を衝いた一軍が出現した。紺碧の敵旗。先日、主の興味を惹いた女の軍旗が、賊の群れの向こう側に柵引いた。

好し！　と思つたのも束の間、春蘭は自由を敵大部隊へと押し進めざるを得なくなつた。

「ええい、突つ込み過ぎだ！　未熟者め!!」

敵後背から挟撃する形で突つ込んだ敵旗は、明らかに敵中深く突き刺さり過ぎていた。大した突破力だとは思ふが、如何せん数が少ない。敵は大兵力というだけではない。それなりの指揮能力を有している事は、敵と接触してすぐに感じ取れていた。このままでは、敵は敵中で孤立してしまう。

そこまで判断した春蘭の行動は早かつた。殆ど反射的に突撃の号を発したのだ。こうして春蘭率いる曹操軍前曲は、敵騎兵隊と連携し、敵を分断。以つて反攻を防ぎ、敵戦力を壊滅しなければならなくなつた。

「もう！　何してるのよ、あの猪！」

「仕方ないわ。春蘭にそこまで読み切れと言うのも酷でしょう」

一方、曹操軍本陣では、大将曹孟徳とその腹心が、前線で展開される一連の流れをより深く読み切っていた。

孤立しかねない程の敵中突撃。あれは此方をこの戦場に縫い止める為の一手だ。夏侯元讓の指揮能力と性質を読んだ上での深度だろう。最も突破力のある元讓の曲を切り離しての進攻は、作戦の確実性を著しく欠く。元讓を釣り上げた時点で、彼方の策は成った。

「孤立しかねない程の突撃も、春蘭ならば即応できると踏んでの事ならば、一気に敵陣を崩せる強手。春蘭が応じず、我が軍の進撃を優先していたなら苦境に立たされる賭けの一手ではあるけれど、恐らく春蘭の性状まで読み切つてそうはしないと判断した上での策でしょうね」

お蔭で自軍はこの場で足止めを喰らつてしまったというのに、随分と愉し気に語る孟徳。その華琳を横目に観察し、己の主が今何を求めているのかを読み解いて手早く伝令を放つたのは、世に「王佐の才」と謳われる荀彧じゆんい*179、字文若ぶんじやく、そして真名桂花ケイファである。

「これで劉備軍は張角の首級に大きく近づく事になりますか……、厳寿はあの事を知っているのでしょうか？」

「恐らくは、ね。昨日も彼女の軍師が随分と劉備の為に骨を折っていたけれど、仁愛と共

に生きる彼女なら三姉妹の事を知れば放つてはおかないでしょう」

孟徳達もまた、嚴寿陣營と同じく張角の正体に気付いていた。そして両者とも討伐軍にその情報を齎すことなく独自に行動を起こそうとしていた。孟徳は自らの覇道を成す為の手駒として利用する為だったが、嚴慶祝はどうやら密かに保護する積りらしいと気付いた。それに劉備を巻き込んだか。確かに、保護するという名目ならば彼女が適任であろう。

一つの手段に固執する積りもない。ならば、と孟徳の視線が紺碧の嚴旗に固定された。そこへ、腹心である桂花が一応の確認を重ねる。此方が手中に収める事が出来ないのならば、根本から潰すという選択もあるのだが、愛しい主君はそれを選ばないだろうという事も解かった上での問い掛けだった。

「宜しいのですか？」

「劉備では彼女達を使うという発想は出てこないでしょう。あの娘の腹心や、それこそ三姉妹が自発的に協力する事も考えられるけど、組織の長の号令無くばそれほど大きな動きにはならないわ」

果たしてそうだろうか？ 主の分析に内心で疑義を唱える。普通に考えれば確かにそうだ。特に、絶対なる長として君臨する曹孟徳旗下であれば、正にその通りだろう。曹孟徳の意志とその決定こそが唯一至上である我が陣營であれば、独断専行など決して

赦されない。だが、彼の陣営は違う。それに、あの女を通常の尺度で計るのは間違いだ。

曹孟徳はあくまで霸王であり、組織の長だ。思想は違えど、立場を同じくする劉備を、結局は自身を基準に捉える。だが、桂花は軍師だった。あらゆる角度、あらゆる立脚点から物事を捉えるだけの才知があった。より深く劉備を考察し、見極める事が出来た。

劉備に張三姉妹を使うという発想は出てこない。それは確かだろう。だが諸葛亮ならば、その有用性にすぐさま気付くだろう。それに、主の善性に惹かれながらも、そこに耽溺することなく軍師として行動するだけの意志と才覚が確かにある。間違ひなく独断で動く。そして、劉備はそれを許すだろう。多少意に添わぬ事でも、仲間が自分を想って行動してくれたのなら、決定的な乖離がない限りは許すだろう。全くお優しい事だ。

それに、劉備は人徳の王だ。張角の人心掌握術がどのようなものかは判らないが、黄巾賊の現状を見るに、掻き集める才はあっても、それを収めるには器が足りていない。劉備以上という事はない。

劉備であれば、一度集つた者達の心を掴むのは容易だろう。張角が集め、劉備が掴む。この相乗効果が発揮されれば、恐ろしい結果を生むのではないだろうか。

愛しき主人は劉備の認識を改め再評価した。ならばと己も、改めて劉備なる人物とその勢力を見極めんと目を凝らし、思索を深めた。危険だ。その結論に至るにはそれ程か

からなかった。劉玄德は、曹孟徳の対極に立つ英雄だ。主君とは全く別の地平を征く者。今すぐ叩き潰しておきたい。だが、主はそれを許さないだろう。少なくとも、今はまだ。

曹孟徳は霸王なのだ。だから敵を求める。絶対的強者に通ずる欠点。弱点とも言える。弱敵を蹂躪するを善しとしない。道が平坦である事に安堵しない。分かりきった勝利に価値を見出さない。

劉備が強敵となり得ることに喜びすら感じている。だがこのままいけば強敵どころか、恐るべき脅威に成りかねない。それでも今この場は見過ごさねばならない。曹孟徳の陣営では、主君の意志こそが絶対であり、そこから外れる独断は許されないのである。この場は、主の劉備に対する洞察の程が知れただけで良しとするしかなかった。

「ふむ、矢張り春蘭に花を持たせたわね」

桂花が考え込むその隣で、戦場の推移を観察していた孟徳が声を上げた。

前方で沸き上がる歓声。黄巾渠帥を夏侯元讓が討ち取ったのだ。賊将としては、曲がりなりにも万の軍勢を率いだけの能力を示したが、流星に猛将二人相手に一度崩れた陣形を立て直す事は叶わなかったようだ。それまでの氣勢から考えると呆気ないほど簡単に首を奪う事が出来た。それ自体は歓迎すべき戦果だ。だが……、と桂花が前曲か

らさつさと意識を外し、次の獲物を脳内で物色しだすと主君が更に言葉を続けた。

「でもまだ足りないわね……、あと三つは首級が欲しい。桂花」

「はっ。既に彼方にはその旨 伝令を差し向けています。直に返答が来るでしょう」

「流石は我が子房」

主の歎美たんびの言葉に、それ以上の色を感じ取り、下腹から湧き上がる歓喜に身を震わせながらも、桂花は次の、更に次の次までの算段を頭の中で弾き出していた。

戦場から外れた位置にある雑木林。

延々と平原が続く中でも、木々が生い茂る箇所が幾つかあった。その中でも広範に広がる林の辺縁に、二十騎程の騎兵が弾む息を何とか整えながら潜んでいた。

そうしながらも林を出て戦場へと続く、いや、戦場からこの雑木林へと逃げ落ちる比較的遮蔽物の多い経路の途上、黄巾を巻いた一人の男に先導された三人の年若い女性達が緊張した面持ちで対面する自軍の将と軍師の背中を見守っていた。

その騎兵から離れた、やや林の奥まった叢。そこに、誰にも気付かれる事無く潜む一人の少女が居た。健康的な褐色の肌、長く艶やかな黒髪、あどけなさを残した可愛らし

い顔立ち、小柄で主張の薄い女体。一見すると街角で猫でも愛でていたのが似合いそうな少女だが、その見事な隠形は影に生きる者としての血腥さに満ちていた。

少女の名は周泰しゅうたい*180。字は幼平ようへい。孫家に仕える斥兵である。此度の黄巾征伐では、今後の為に将としての経験を積ませようと千人を率いる部曲将として参陣していたが、最終決戦のこの局面では、本来の、影としての能力を求められた。

その少女の視線の先には、美しい黒髪的女将と貝雷帽を被った小柄な少女。そして対面する三人の女と、傍に待てる男が一人。女将と少女は近くに潜む義勇軍の部将と軍師だろう。そして、戦場から離脱してきたと見える三人娘。恐らくはあれが標的。

鋭く見つめる視線の先で、不安気な様子の娘達を気遣いながら、先導してきた男が軍師の少女と何事か言葉を交わしている。義勇軍の二人は後頭部しか見えないが、男と、三人娘の顔は良く視えた。その口の動きまで。

目を眇め、男の唇の動きを読み解く。『御三方』という言葉で確信を得る。情報とは何もかも違うが、人数だけは合う。あれが、張三兄弟ならぬ張三姉妹なのだろう。

生命を帯びて急いで来たのだが、どうやら先を越されたかと歯噛みしたが、どうにも様子がおかしかつた。

少女が受けた指令は、万が一張角が逃亡した際、その逃走経路で待ち伏せし討ち取る事であった。孫家が誇る軍師の読みは鮮やかな的中を見せ、張角は予測された逃走経路

に現れた。しかし、それを読んでいたのは自軍だけではなく、またその速さに於いては遅れをとった。だが、先んじて張角を捉えた者達は、自分達とは全く目的を異にしているようだ。それは、あろう事か張三姉妹の保護。義勇軍の思惑は解からないが、これは重大な情報だ。美髪の女将、遙か格上の武威がある為、この場で手出しは出来ないが、ここで起こった全てを持ち帰る。全神経を集中させ、一瞬にして背後を振り返った。

周泰の振り返った先、僅かな動揺に叢が揺れた。殺気の滲んだ誰何の声に、観念して姿を現したのは、周泰同様主命を帯びてこの場へ参じた亞莎だった。

劉玄德陣営に張三姉妹を確保させる為、魯子敬は黄巾に潜ませた間者に新たな指令を送り、玄德陣営にも間者の事も含め出来得る限りの便宜を図った。更に万が一の場合の補佐として密かに亞莎まで派遣されていた。そして、その万が一が起きた上に発見が遅れてしまった。非常に拙い事態だ。油断なく相手を見据える亞莎が次の行動を起す前に、相手の視線が自分から僅かにずれた。

「もう一人、居ますね」

静かな、それでいて斬り削ぐ様な声音。亞莎は苦々しく眉根を寄せた。ばれている。かざりと小さな音を立てて同行者もその姿を晒した。その姿に、息を呑んで「お猫様……」と掠れた声で呟いた眼前の手練れに、今度は疑問から眉根を寄せた。

此方の僅かな戸惑いに気付かれたか、直ぐに気を入れ直し油断なく構える褐色の少女

を前に、亞莎もだらりと両腕を下げた。一見して無防備な立ち姿。しかしこれが亞莎の構えであった。

そして、周泰はその構えを正確に見抜いていた。亞莎の長過ぎる袖に隠された脅威を、確りと感じ取っていた。

相手の警戒具合から、自分が暗器使用である事を見抜かれている可能性が高いと踏んだ亞莎は、迂闊に動けなかった。それでも視界の端に張三姉妹を捉え、関雲長との交渉が上手くいき、その保護下に入ったのを見届け、一先ずの大目標が達せられたのを確認した。魯家部曲の間者が黄巾内部への再潜入から張三姉妹まで接触するのが間に合わない可能性も高かったが、どうやら杞憂に終わってくれた。

そこまで確認して、視界を眼前の褐色の少女のみに合わせた。今の際に掛かって来るかとも思ったが、向こうも迂闊には動けないようだ。それは何故か？ 亞莎は思考を巡らせる。巡らせながら、現状の維持に努めた。できれば雲長達がこの場を離れるまで、感付かれる事無くやり過ごしたい。だが、事態は動いた。目の前の少女からではなく、新たな闖入者によつて。

「しえ、雪蓮様?!」

それに最も早く気付いたのも、最も動揺したのも周泰であった。その反応から、本来ここに来る筈のない主が姿を現したのだと知れた。その人物に顔を向ければ、先日、慶

祝に絡んで来た（慶祝が原因だが）人物であつた。孫家の長女。成る程、こんな所に來ていい筈のない人物だ。

「ふうん、ちよつと面白そうな事になつてゐるじゃない」

「な、何故このような所に？」

「勘が疼いたのよねえ」

「ええ……」

え、なんだろう、この人。ちよつとあり得ない。それが亞莎の偽らざる気持ちだつた。慶祝も戦場にて一人で突出しがちな悪癖があつたが、突如現れたこの女性のぶつ飛び具合は桁が違う。目の前の少女も余りの事に絶句している。

しかし当の本人はまるで意に介することなく林の外に目を向けていた。

その視線に気付いた亞莎が不味いと身を強張らせると、孫伯符はにんまりと笑みを浮かべ、此方に向き直つて気軽な調子で話し掛けてきた。

「貴女、嚴校尉と一緒に居た娘ね。貴女の主と軍師に言つておきなさい。貸しにしておいてあげるつてね」

「……!?!」

「戻るわよ、明命」

「はっ、はい！」

そして、あつけらかんと、言いたい事だけ言つて此方の反応も見ずに去つてしまった。配下の少女も慌てて主の後を追つて行つた。

正直助かつた。のだが、釈然としないものが胸にわだかまつた。条理を逸した地点に立つ英傑を測る事の出来ない亞莎には、虎の娘との邂逅は聊か荷が勝ち過ぎた。

そうして暫し呆然と固まつてしまつていた亞莎は、ちよいちよいにやーにやーと袖を引かれてようやく再動した。傍と気付けば、どうやら張三姉妹を保護した義勇軍も林から離脱を始めていた。

「ご免なさい、トラちゃん。私達も急いで戻らないといけませんね。薜華様と包さんに早くお知らせしなければ……」

「にやー……」

縦横に戦場を駆ける薜華。曹操軍と合流し、いい様に扱き使われ、屯騎兵にも流石に疲れが見えてきていた。

戦も終盤。黄巾本隊には既に劉備、皇甫嵩こうほうそう、何進の三軍が取り付いており、陥落は時間の問題だ。大勢が決した戦場で、それでも休む事なく薜華は愛馬を奔らせる。

「まったく、遠慮なく酷使してくれるね」

「後で三姉妹に関して横槍入れられないように、ここは我慢して下さい」

つい漏れた愚痴に、後方から魯子敬が応えた。曹操の要請に応じる判断をこの軍師が下したのは、張三姉妹の事を曹操が掴んでいると読んだからだ。そこに異議を申し立てるつもりはないが、今更になって何故そう判断したのか気になった薜華の問いに、子敬は曹旗に目を向けながら答えた。

「この共闘要求は諦めたうえで黙認する事の対価を要求しての事と思うんですよ」

「後々になって持ち出してきたりは？」

「誇り高い人って良いですよー、勝手に自縛してくれますから」

「ああ……、うん」

「それに、後々持ち出そうとしても無駄ですしね」

「そうなの？」

「立証できませんでしょう。だからこの場で搾り取ろうとしてるんですよ。さて、次の獲物が決まったようですね」

ふむ、と頷き、子敬に倣って曹操軍に目を向ける、と伝令旗が振られていた。まだ首級が足りないと思える。貪欲な事だ。馬を進めながら、ちらりと黄巾本隊へと視線を走らせた。劉軍は上手くやっているだろうか？ 曹操はここで留めたが、皇甫左中郎將と

何大將軍の軍勢も張角の頸に届く位置にいる。

皇甫軍は元々大本命だ。主戦として敵本陣を攻める手筈を軍議にて整えられていた。

劉備軍は敵左翼を釣り上げる囷として先陣を切った。その役割を熟した上で、敵左翼を主戦場から切り離し、右翼朱右中郎將の軍に押し付けて、敵本隊に東から突撃した。皇甫左中郎將に遅れを取る事無く、敵本隊に到達したのは流石と言える。今、あの義勇軍は指揮官と軍師を一人ずつ欠いているのに関わらず、これだけの働きをしてみせている。開戦以降、最前線で蛇矛を奮い続ける張翼徳の才智を越えた突破力と、総合力では伏龍に一手譲るものの、こと軍略に於いては水鏡女学院歴代最高と評される鳳雛の戦況判断の賜物であった。

一方、大將軍の軍勢の実態は、張・馬・華の三将率いる騎馬隊だ。此方は薜華が本陣の高台から出陣した時には、まだ大將軍の傍で暇そうに待っていた筈だ。神速の驍將は伊達じゃないな。と薜華は感嘆の息を吐いたが、それだけではなかった。今も大將軍の脇に侍り、高台から戦場を睥睨する者の働きが大であった。

その女性は、此度の最終決戦に合わせて、大將軍が海内から掻き集めた名士の中でも隔絶し引つ張り出してきた傑物であった。大將軍が海内から掻き集めた名士の中でも隔絶した尤物、現在は黄門侍郎を務める女賢、犬耳頭巾を被ったその軍師は、戦の流れを読み切り、最小の労力で張文遠をはじめとする騎將を敵本隊まで届かせた。

この働きに大將軍はご満悦だったが、当の軍師からしてみれば、この程度の敵相手では特に心に響くものはなかった。実に簡単な仕事だった。そんな軍師の視線は、最早黄巾にはない。いや、最初から黄巾賊など眼中になかった。態々こんな所まで大人しく引つ張り出されてやったのは、漢の現状、その一端を實際に目の当たりにできる機会だったからだ。彼女の視線は友軍であるはずの者達にこそ注がれていた。その視線の先で、薜華はこの戦最後の奮戦を魅せていた。

「なんか、曹操軍の動きが鈍くない？」

「ふむ、そうですね……」

薜華の言葉に、子敬が視線をぐるりと見回す。そして、曹操軍軍師が、台車の上で此方をじつと睨み見ているのに気付いた。

「どうやら薜華さんに花道を駆け抜けて欲しいみたいですわね」

「なんでまた？」

「魅せ付けて欲しいんでしょう」

「へえ……」

詰まる所、此方の力量を直に見極めたいという事か。そして、子敬の口振りから遠慮する必要もなさそうだ。まあ、こそこそ力を隠してというのも性に合わないし、屯騎兵

達も鬱憤が溜まっている。ならば、存分に魅せてやろうではないか。

赤將軍の異名で呼ばれる荒武者が、真つ赤な死を撒き散らしながら黄巾渠帥へと襲い掛かるのを台車の上から桂花は浚面で見詰めていた。

実に厭らしい戦い方をしてくれる。あれは兵の心を折る。あの羅刹女のような血姿を前にすれば、黄巾賊如きの賊徒の群れなら、単騎駆けでも十分潰走させられるだろう。精兵と自負する我が軍であっても、一兵卒では怯み上がってしまうだろう。戦場で今見せているあの姿だけでも恐ろしいが、嚴寿は評判の良い人物だという風聞が厄介だ。それがまた効くのだ。伝え聞くその人柄と、戦場で目の当たりにした時の落差が、兵の心を折るだろう。嚴寿の人物評は、功績に対して明らかに広範に流れ過ぎている。魯肅といったか、あの軍師は世評の重要性和その威力をよく知っているに見える。

その鬼に続く屯騎兵も、想定していたよりも遥かに強い。そしてそれ以上に速い。屯騎兵は重装騎兵だ。ただの騎兵と並べて強いのは当たり前だ。だが、今の屯騎兵の強さの理由はそれだけではない。禁軍であるという誇り、これを汚した前校尉を真正面から引き摺り下ろした嚴寿への心酔、彼女に率いられて以降負け知らずの自信と経験……。

最大の要因は矢張り嚴寿だ。あの猛将と屯騎兵は一目見るだけで解かるほどに相性が良い。生半可な攻撃など物ともせず敵を蹴散らせる重装騎兵と、馬術を得意とし敵中突破を好む猛将。嚴寿が率いるようになってから未だ数か月だろうに、ほぼ完全に将兵一体となっている。

擦れ違い様に黄巾渠帥を両断した嚴寿を見収めて、桂花を分析を終えた。

「大したものね」

「もしも我が軍が同数の兵で嚴寿を討ち取ろうとするならば、虎豹騎こひょうきが必要です」

最精銳の親衛騎兵隊を持ち出されて、愉し気に戦場を眺めていた孟徳の表情が引き締まった。

「春蘭では駄目かしら？」

「春蘭は嚴寿に劣るものではありません。馬術と騎兵を率いる事こそ奴に一日の長があります。それでも総合的に将とみるならば春蘭に軍配が上がるでしょう。ただ……」
 主の問いに、つらつらと答える桂花だが、とある要因を告げる直前につい言葉に詰まった。

「ただ？」

「私との相性が悪過ぎます」

無然としながら告げた事実には、堪らず吹き出す主を横目に解説を続けた。

「嚴寿と春蘭は共に突撃氣質の猛将ですが、嚴寿は己の軍師を信頼しきっており、従順とも言えるほど素直にその献言通りに動きます。猛将と評される者にありがちな驕りや、策を軽視するきらいがまるでありません」

「そこへいくと春蘭は猛将の典型中の典型と言つてもいいわね。単純な戦力で上回つていても、戦場での立ち居振る舞いが一呼吸、悪ければ二呼吸遅れるのは、あれだけの将相手には致命的ね」

「はい」

「秋蘭では率いる兵種の相性が悪過ぎるわね」

「おまけに重装騎兵らしからぬ速さですから、最悪一方的に蹂躪されかねません」

夏候元讓が駄目ならばその妹は？と言つと、弓兵を率いる彼女では更に相性が最悪だった。そうなると、成る程虎の子の精銳部隊を持ち出さねばならないらしい。

「柳琳りりんと嚴寿、か」

「僅かに嚴寿に分がありますが、大した差ではありません。私と魯肅の差で勝てます」

孟徳が虎豹騎を率いる従妹と嚴寿を並べる。曹操軍中で最も騎兵指揮に長ける従妹。その点で嚴寿に劣るとは思わないが、純粹な馬術では遅れを取るか……。武威については気性の差が大きく、これも嚴寿に軍配が上がるだろう。矢張り桂花の言う通り、軍師の差で決まりそうであった。

「屯騎兵がこれほどとは思わなかったわね。嚴寿という将を得た事が大きいのかしら」
「恐らくはその通りかと。あと二度三度、いえ、戦場によつては後一度で屯騎兵は完全に嚴寿の私兵となるでしょう」

それは今より更に更に難敵になる事を示唆していたが、桂花としては寧ろ望むところである。それを察した孟徳が、桂花に問い質した。

「屯騎兵は嚴寿にとつて非常に得難い戦力です。あれだけの重装騎兵隊を一から築き上げるとしたら、人材も金も時間も大きな労費を迫られるでしょう」

「成る程ね、足枷となるか」

漢王朝は既に巨大なだけの泥船だ。沈む船の上にどれだけの戦力を並べようとも意味はない。屯騎兵は禁軍なのだ。好きに連れて行けるものではない。嚴寿が屯騎校尉であり続けるならば、中央に縛られるという事だ。

今後の雄飛を考えるならば、中央に留まるのは悪手だと桂花は考えている。地方で力を付け、王朝が沈んだ後に中央を押さえるべきだろう。今辛うじて保っている権威もいずれ喪われる。それまでにどれだけの力を蓄えられるかが勝負だ。

どれ程魅力的であろうとも、一戦力の為に大局を見失うようであれば脅威足り得ない。此度の戦功と、魯肅の人脈があれば、それなりに任地を選択した上で地方長官として栄達できるだろう。さて、嚴寿と魯肅の決断が見物だ。桂花はその愛らしい面おもてに意地

の悪い笑みを浮かべるのだった。

第十六回——了——

「雪蓮!! お前という奴は、何を考えている!!?」

「そんなに怒らなくたっていいじゃない」

「これが怒らずにいられるか!! お前は荊州に派兵された大殿の代理として、この場の責任者として任命されているのだぞ!! そ、それを…最終決戦での指揮をすつぽかすとは、な、に、ご、と、だああああ!!」

「お、落ち着いて、冥琳。深呼吸しましょう、深呼吸」

「私は十分に落ち着いている!!」

肩で息をしながら激昂する親友に、孫家の長女はどうどうと宥めようとするが、当然無駄だった。

「それにしても、張角共を保護するなどは、彼奴等めに何があるというのじゃろな?」

「雷火様落ち着いてますねー」

「すぐ其処で他の者が憤激しておると、返って心が落ち着くものよ。しかしな、梨晏よ」
「なるほどなー、つてなんすか？」

「もう少し策の手綱を握っておくれ。お主が後押ししてどうする」

「やー、流石に明命ちゃんの後追っかけるとは思ってたんでー」

「うむ、まあ、誰にも思いもよらぬわな」

喧々譁々の二人を余所に動じもせず、話を進める先達に、周幼平は冷や汗を掻きながら話に加わると、憤懣遣る方ない美貌の軍師が更に吠えた。叱責を受けたかと思つた幼平だったが、実はそうではなかった。

「あの、連中を見逃しても良かったのでしょうか？」

「良い訳があるか!!」

「ひゃうつ?! す、すみません!」

「ちよ、ちよつと明命を責めないでよ! あの場では、この子には荷が……」

「お前に言っているんだ! 雪蓮!!」

「ええつ?!」

「貸しなどにしてしまつては、最早公然と問い質せないではないか!!」

「えー、でも……」

「いいか？ 官軍の誰も張角の正体を知らんし、劉備が討つたという首級が公的に張角と認められて終局したのだぞ。今すぐに追及するのならばまだしも、後々になつて証拠もなしにどうやって糾弾する気だ？」

「う……」

「おまけに包の奴が、以前我等に開放した蔵一つの借りを帳消しにすると既に通達して来た。当然、釣り合わん。だが、貸し借りの取引をしてしまったのだ。今更これを放り投げて張角の件を明るみにするか？」

「そんな事出来る訳ないでしょ」

「だろうな、矜持に瑕がつくだろう。包はその辺をつつくのが好きだからな。まんまと手を打たれたのだよ」

「そこまで言つて、はあ、と深く溜め息を吐く親友に、孫伯符は珍しく萎れて謝罪した。一頻り感情を爆発させ、普段通りの冷静さを取り戻したのを目聡く感じ取ったからでもある。

「え……つと、ごめんね、冥琳」

「まあいい。過ぎた事だ。ところで貸し借りの件、どうする？」

「？ どうするって？」

「先程言つたように釣り合わんからな。追加要求くらいなら出来るぞ」

「しないわよ、格好悪い」

「やれやれ……」

下手を打つたのだからこれ以上上塗りは出来ぬと跳ね除ける英雄と、下手を打つたのだから少しでもその分を回収した方が良くと考える軍師。しかし二人の間に蟠りのようなものはない。

この黄巾征伐では大きな役割を演じる事は出来なかつたが、まだまだ大陸には有傑が居る事を知つた。

これからだ。

この大陸が我々を知る事になるのはこれからだと、孫家の次代を担う女傑達は静かに燃え上がるのだった。

第十七回 論功行賞

巨大な外城門をくぐり洛陽の城市へと入城すると、黄仲峻が一人喝采を上げた。

「やあやあ、帰つて来たぜ洛陽〜!!」

「益州生まれの巴郡育ちが何言つてんの」

呆れ半分に笑いながら応じるも、気分の高揚を抑えられない仲峻には何処吹く風だ。

そんな親友に、やれやれと肩をすくめる薜華も常より浮き立っていた。凡そ半年に及ぶ黄巾の乱が終結したのだ。長くは続かないだろうが、それでも東の間の平穩に、気分が上向くのは当然であつた。

約一年振りになる洛陽の大路を、薜華は魯子敬を除く仲間達と共に凱旋していた。

後には屯騎兵が続くが、義勇兵達は城外で陣幕を張つて待機している。義勇兵に限らず、殆どの軍兵が入城できずに城外で陣を張っている。この場合、元々宿衛兵である屯騎兵が特別と言えた。

なので、殆どの諸侯が最低限の供回りのみを率き連れているのに比べて、屯騎兵を統率する薜華は非常に目立っていた。

「にゃー、皆 姉ーをみてるにゃ」

薜華の隣、最近は一人で馬に乗れるようになってきた（それでも戦場を駆けるにはまだ不足だが）トラがきよろきよろと周囲の群集を眺めながら、嬉しそうに声を上げた。

「薜華もすっかり有名人だからねー」

「洛陽民にまで広まつてるなんて考えてなかったな」

「包が宣伝して回ってたりして」

「やめて」

一足先に洛陽入りした腹心の、腹に一物抱えた笑顔が鮮明に脳裏に瞬いた。目の前の友に言っても意味ないのだが、つい反射的に静止してしまった。尤も、事前工作やら根回しの為に別行動をとっている訳だから、その一環としてあり得なくもないのかも知れない。確認する気にはとてもなれなかったが。

「でもまあ、注目を集めているのは私ばかりでもないし……」

言いながら、最も民の感心を惹きつけているであろう二者のいる前方に目を向けた。

直接その後ろ姿は見えないが、先頭付近、大將軍何進のすぐ傍には、黄巾首魁張角の首級を挙げた劉玄德と、司隸まで迫った三万の黄巾兵を比喻なしに単騎で全滅させた呂奉先が居る。戦功第一と第二はこの二人だろう。

「我等が赤將軍様はどこまで昇いるかねー？」

「それやめて」

人の論功に付いて考えを巡らせていると、それを察したのか、仲峻が水を向けてきた。確かに他人の事よりまず自分の行賞が何処まで届くのかを考えるべきである。それはそれとして、あまり気に入ってない異名で呼ばれるのをまず嫌がった。

「大体にして、私は將軍じゃないし」

「異名に野暮な突つ込みはなしだよ。それに、その内なるでしょ？」

「その内、ね。武官の昇進の機会が多いのはあまり歓迎できないね」

「そりゃ、しょーがないんじゃない？ 私らの大分前の代からの負債がいい加減貯まりに貯まってるからねー」

全くその通りで溜め息しか出なかった。現状ではそこを思い煩っても詮無いので、話題を自身の事に戻す。漢の負債云々も、先ず自身の立ち位置が決まらなければ如何とも言えない。

「取り敢えず、屯騎校尉に正式任官されるのは確実みたいけど……」

「中領軍*181くらい一気に入かないかなー？」

「いや、それはないでしょ。一応言っておくけど、官歴ないからね私」

「うん、知ってる」

「思わず、本当だろうな？ といわんばかりの表情^{かお}で仲峻を見ると、にまつと笑いながら幾分真面目に話を修正してきた。

「下軍校尉くらい加官されないかね」

「どう、かなあ。前任者と同じ官を加えなきゃならない訳じゃないし、西園軍は皇帝陛下直屬だよ？」

言つてから、そもそも「くらい」などと軽く言える官位ではない事に気付いて、微妙な面持ちになつた。今迄気楽な立場に甘んじ続けてきたため、どうにもこの辺りの感覚が掴めない。武官とは言え、中央官界で生きていかなければならないのだから、何時までもこれじゃ駄目だな、と氣を入れ直した。

「つつても、古くからの忠臣ばかり据えてるでもないじゃん。包も結構意欲的な人事が為されてるつて言つてたし、芽はあると思うなー」

「ふむ……」

「うにやつ!？」

仲峻の話の聞いてるうちに、子敬も動いてゐる事だし或いは、と薜華も思い始めていた。と、そこへトラの素つ頓狂な声が響いた。

何事かと其方へ顔を向けると、はしやいだ様子で後方へ視線を送るトラと、そのやや後ろでかたかたと小刻みに震える呂子明の姿があつた。全く違う様子の二人に、仲峻と顔を見合せて互いに首を傾げた。それから自分の後ろに控える様に馬を進める黄奎

*182、字を宗文そうぶんへ振り向く。と、此方も困つたように首を傾げて来た。どうやらト

ラと子明の二人だけに何かあったようだ。

「どうしたの？ トラ」

「姉ー！ すっごい筋肉にや!!」

「は？」

「いけません薺華様!!」

端的過ぎるトラの言葉に、なんのこつちやと疑問符を掲げると、子明が勢い込んで言葉を被せてきた。なんというか、随分と狼狽している様子だ。

「あ、あ、あんな悍ましい……」

「えー、そんなことないにやあ。むつきむきなんにやよう？」

そこまでトラの話を聞いて、薺華の脳裏に閃くものがあった。はつとした顔で振り向くが、そこに目的の人物を見つけ出す事は出来なかった。

その様に子明が悲鳴のような声を上げたが、薺華には気に掛ける余裕がなかった。軽く混乱していた。

何故、自分はこれほどはつきりとした反応を示したのだろうか。きつと自分が知る人物であろう。だが、ある特定の知識上で知る人物は他にも多くいる。動悸が収まらない。私は彼女(?)を見付けて、それでどうしようというのだ？ 解からない。だが何故だろう、胸がざわつくのだ。私は何を忘れている。

いや、待て。……忘れている？

第十七回 論功行賞

南宮に着く頃には落ち着きも取り戻し、論功式典も恙なく終了した。

血の気を失い、化粧でも誤魔化し切れないほどに白い顔をしていた皇帝の容態は気に掛かったが、式典を最後まで終えるだけの体力は未だであると、前向きに捉える事にした。しかし、垂れ込めた暗雲が帝室に滂沱の雨を降らせるのは、矢張りそう遠くはないだろう。

ともあれ、薺華は正式に屯騎校尉に任官され、更に侍中じちゆう*183・下軍校尉・帰義侯丞きぎこうじゆう*184を加官された。謹んで拝命し遂に正式な官吏となったが、思うところが様々ある。

屯騎校尉は良い。既定路線だ。

下軍校尉も想定内ではある。実際に任命されると、その官の特殊性から緊張を余儀なくされるが。

帰義侯丞はトラが帰義侯*185の称号を受けた事による。此方は寧ろトラが皇帝陛下にそれほど気に入られていた事が驚きだった。帰義侯とは、本来は異民族の大人に贈られる称号である。贈られる異民族の規模によつて称号は変わるが、共通するのは、基本的に王に与えられると言う点である。実際、トラの王である孟獲は先の朝貢の際、南蛮国大王の金印を漢王朝から賜与されている。

今回、トラに賜与された帰義侯はかなり特殊な例で、トラ個人に漢内において列侯に準じる身分を与えたのである。これは完全に帝個人の我が儘によるもので、誰も何も言えなかったようである。実質的に誰にとつても障害にはならない為、通されたとも言える。別の面から見れば、蛮族の一個人を優遇する皇帝の風聞を誰も云々しなかつたという事実もある。

ここまでではいい。問題は最後の加官。侍中である。

宮殿宿衛の屯騎校尉と皇帝直属の下軍校尉が、皇帝近侍の侍中を兼ねる事自体は有用な面が多い。問題は薜華自身にある。巷に流れる人物評だけで、皇上の傍に侍るのは無理がある。この無理を、一体誰が通したのか。その疑問に応えたのは、薜華が頼りとする智囊・魯子敬であつた。

「蹇碩でしようね」

「またえらい大物が出てきたね。十常侍に見初められる理由がわかんないんだけど」

意外な答えに、驚きながらも軽口を叩いた。子敬は気にした素振りも見せず、一見関係無さそうな方向から話を続けてきた。

「薙華さん、屯騎校尉は何処に属しているか知ってますか？」

「え……、うん？ ……めん、何処だろう。北軍中侯、かな」

「ですね。北軍ではありませんが執金吾しつぎんごから分化された八校尉が元ですから、そこから上はないんです。通常の軍機能から切り離された、宮殿を護る為だけの独立した番犬なわけですねー」

ふむ、と頷く。間違っていないくて幸いだ。官の変遷は結構ややこしく、官名が変更したり、官名そのままに職掌が変化したり、所属が別府に移ったり独立したりと色々ある。正直な話、薙華は現在の官府の全貌を把握していない。

「ところがこの番犬の鎖を横合いから引つ張れる非常置の高職が二官あります。即ち、衛將軍と大將軍」

「大將軍……」

「黄巾の乱は収まりましたが、何遂高は引き続き大將軍の地位にあります。未だ非常時であるというのは官民の上下を問わず、諸所の別を問わず共通の認識ですね」

「つまり、有事の際は私は何大將軍の命で動くわけか」

「だから私は蹇碩と交渉して、薜華さんを下軍校尉に推しました」

さらつと告げられたその内容に絶句した。そんなところまで喰い込んでいったのか。そして言いたい事が解かった。と同時に、何を考えているのか解からなかった。

蹇碩は上軍校尉だ。皇帝直属の西園校尉筆頭として、陛下に代わって実質的に統括している。

「対立している二人が共に私の上官とか……、どうしようつての？」

「このままでは、薜華さんは大將軍の手駒として政争に巻き込まれます」

そうなるだろうな。容易く想像できる極近い将来を想像し、小さく頷く。

「しかしですね、私は薜華さんにそんな事に関わつて欲しくはないのですよ。薜華さんもそうではありませんか？」

「そりゃあね」

王朝の現状や将来には思うところ大であるが、中央武官となつたばかりのひよつ子のまま、己の立ち位置も碌に判らないままに、周囲に流されるのはご免である。のんびり構えるつもりもないし、早々に見極めなければならぬとは思ふが、いくらなんでも現状のまま政争の渦中に放り込まれるのは危険過ぎる。

頷き返せば、そうでしょうとも、と得意気に頷く子敬。主の意を汲んで先回りできた事が嬉しいらしい。その割に泥沼に嵌りに行つていような現状はどういう事か？

疑問がそのまま顔に出てたのだろう。此方の視線に気付いて、表情そのままに話を続けた。

「蹇碩としては大將軍の手駒を減らしたいのですよ。薜華さんを下軍校尉に就けたのは、手駒として使う為ではありません。端からそんな事は期待していません。でも、直接大將軍とかち合わない軍令であれば、下軍校尉を動かせると考えたんですねー」

「考えたというか、包がそう売り込んだんでしょ？」

「ここまですれば薜華にも解かった。蹇碩と何進が事を構えるその時、薜華が何進側に立って蹇碩の頸を狩りに来るのを防ぐ為に、下軍校尉として遠征にでも出して中央から締め出すのだろう。」

「そういう事です」

「でも、侍中にまでするのはやり過ぎだよね？」

「そう指摘すると、子敬は途端に表情を曇らせた。宮廷の怪物を甘く見ていた悔恨が透けて見えた。」

「済みません、少々悔っていました。蹇碩がどこまで考えているのか、今はまだ何とも……」

「ま、仕方ないね。でもそつちの方は引き続き包に任せるよ」

「勿論です」

新任官吏を侍中に就けるような無理筋を打ってきたのだ。予想しろという方が無茶だし、予測を立てろというのも難しい。だからこそ恐ろしい。そして、だからといって震えているわけにもいかない。何を仕掛けてくるかは判らないが、心構えだけは整えておこう。実際のところ、薜華にできる事と言えばそれくらいであった。出来ない事は出来る者に任せよう。そう考え、至極あつさりと魯子敬に丸投げしてみた。

こうして薜華は、内城内の北宮近郊にある宿衛兵兵宮すぐ傍にある屯騎校尉の公邸に、仲間と共に居住する事となった。なったのだが……。

「なにこれ、賊の襲撃にでもあったのー？」

「いえ、鮑鴻の後始末です。私財没収の為に踏み込まれたんですねー」

「いや、それはいいけど、荒らしたまま放置ってどうなの……」

荒れ放題の邸の前で脱力する薜華達。前任者が横領や賄賂によつて得た不正蓄財を没収されたその邸は、不正財どころか一切合切を持ち去られて、まるで伽藍堂のような有り様だった。

「修繕の手配はしておいたんですけどねー。まさか着手すらしてないとは……」

「杜撰だなあ」

「全くです。内に向けてさえこれですから、政府機能の鈍化は全く以って深刻ですね、これは」

まさかこんな所で早々に中央の無能っぷりを見せ付けられる事になるとは、薺華達の誰も予想だにしていなかった。

とは言え、何時までも呆然とはしてられない。子敬が再手配に向かい、薺華達は比較的無事な部屋に手荷物を纏めて置き、厨房で茶の用意をして、庭園に建てられた涼亭で一息吐くこととした。

「やれやれ、先行きが思いやられるな」

緑茶を啜りながらぼやく薺華。皆も同様に思っていたのか、追従するように乾いた笑いを漏らした。

「やっぱ地方に身を躲した方が良かったんじゃないのー?」

仲峻が今更な事を言ってきたので、今更だよ、と返した。別に仲峻も本気で言っている訳でもない、ちよつとした軽口だ。だから軽く返した。

黄巾本隊を征伐したその晩、子敬が今後の方針を訊ねてきた時、薺華は特に深い考えがある訳でもなく、そのまま中央武官の道で良いんじゃないか。と言った。その時も仲

峻は地方長官を望むべきだと、中央からは距離を置いた方が良いと主張した。

仲峻の言う事は尤もだとも思ったが、薺華としては郡太守を務める自分の姿に激しい違和感を感じてしまっていた。無論、それで進路を決めてしまうのもどうかと思い、子敬に助言を求めたが、子敬の答えは意外なものだった。

「それはもう、薺華さんの思うままに」

「うおーい、包ー！ 丸投げかよー」

「薺華さんが郡太守を望むであれば、私の能力の限りを尽くして地方への栄転が成るようには働きかけましょう。武官として昇るといふのであれば、その為の道を最大限に拓きましょう」

「なあ、包……」

朗々と告げる子敬に、仲峻は尚も言い募ろうとした。中央ではこの先、ごたごたが起こるのは目に見えている。ぽつと出の親友が下手に目立てばどうなるか。軍師として忠言すべきなのは子敬が一番良く解かっている。その筈だ。だが、子敬は仲峻に最後まで言わせなかった。

「紅玉さん、私は薺華さんの軍師となると誓った時、決めた事があるんです」

「決めた事？」

「はい」

仲峻の疑問符に明朗に返事を返し、薺華に向き直つて言葉を続けた。にっかりと、強
い意志の籠もつた笑顔で。

「私は貴女の往く先を見届けます。道中にある障害は我が知略を以つて排除しまし
う。その為に力を尽くしましょう。しかし、往く道を決めるのは薺華さん、貴女です。
私はそこに関しては何も口を差し挟みません」

なんとまあ、何時の間にもやら随分と惚れ込まれていたらしい。尤も、これは薺華が氣
付くのが遅過ぎるくらいである。

魯子敬は元々、孫堅陣営への参画を望まれていた。師の後に付いて行けば、もつと將
来の展望が望める陣営に加われたところを、出会つたばかりの小娘を選んだのだから相
当なものである。

漸く氣付いた薺華は、少々呆氣に取られた表情を晒したまま、氣を落ち着けようとし
て何故か輕口を叩いていた。

「私を知らぬ間に行屯騎校尉にした奴とは思えない言葉だな」

「ふふつ、それは言いつこなしですよ。ただの義勇軍じゃ、後の選択肢を得るところまで
来れませんでしたからね」

輕くいなされ肩を竦める。特に意義のある遣り取りでもなく、なんとなく尻しりこ擽すねさを
誤魔化したかっただけだ。自分の何が彼女をここまで惹き付けているのだろうか。そ

の視線は、自分の中の何を視ているのだろう。自分でも知らない一面を見付けられているような、そんな慥つたさがあった。

その慥つたさを追い払うように息を吐いて、思考を今後の進路に戻した。

望めば郡太守の官位を得られるという。仲峻からすれば、中央を捨て地方で力を蓄えるのが常識的な判断だと言う。確かにそうなのだろう。故郷で母の姿を見つけてきた葬華からすると、少々尻込みしてしまう部分もあるのだが、今はそれ以上に思う事があつた。太守となつた後、何を目指すのだろうか？

その考えには、直前に告げられた子敬の言葉に少なからず影響を受けていた。

ずりよう受領した任地の郡民の為のみに働くのか。いや、この時勢を鑑みれば、来る群雄割拠に向けて力を溜めるのか。それはつまり、自分が群雄として立つという事か。雪崩れ来る英傑達と覇を競う？ この私が？

何か違うな。

翻つて、中央に留まり武官として榮達を目指すのはどうだろうか。民政を考えなくていい分、単純に此方の方が自分には向いていると思える。それに、漢朝中枢の情勢が気になるのも確かだ。これには、董幼宰の存在が影響を与えていた。嘗て、葬華が幼宰の進路に影響を与えたように、今度はその幼宰が葬華の進路に影響を及ぼそうとしていた。

地方に身を躲すという事は、中央の権力争いから距離を置くという事だが、もつと端的に漢王朝に見切りをつけるという事でもある。故郷に居た頃はそうだった。外側から眺めるだけで見切りをつけていた。しかし、今にして思う。そんなに簡単に見捨てて良いものなのだろうか？

一旦すべてを破壊して、更地に新たな家を建てる。多くの傑物がその判断を下している。だが、古くなった家はもう修復は不可能なのだろうか？ 解からない。だつて私はその判断が下せるほど漢王朝を知つてはいない。今、中央官界で奮闘している親友も、だからこそ中央に踏み止まっているのだろう。

外から見ていた通りだったとして、その判断を改めて下した時、もう何もかも手遅れだろうか？ そうは思わない。元々、自分が国主となるなんて考えもしていないのだ。その時、天下を求める英雄の元に馳せ参じればいい。天下を託すに足る、本当の英雄に。

「中央に留まろう」

「分かりました。ではそのように」

何時の間にか、そう口にしていた。そして、その言葉を受けて、薜華をじつと見詰めていた軍師はすぐに動き出したのだった。

仲峻の軽口を切つ掛けに、正式に武官として身を立てることを決めた夜の事を思い出

していた薺華だったが、子明がお茶の御代わりを注ぐ音で意識を現在に戻した。それと共に視線も子明に向いていたのを気付かれて、「薺華様もどうですか？」と伺いを立てられたので、遠慮なく茶盞ちやざんを差し出した。

「にしても、どうしようか？」

「今日中に片付く気がしないよな」

子明が注いでくれた茶で喉を潤す。ふう、と一息。改めて邸の方を眺めながらぼやくと、子明は軽く首を傾げたが、続く仲峻の言葉で、嗚呼、と納得の声を上げた。

「恋のところは厄介になろうか」

「綱んところじゃ、手狭になるしね」

寢室だけでも使用できる程度に整える事は出来るかも知れないが、楽観して駄目でした、では目も当てられない。となると、どうにか寢床を確保しなければならぬ。そこで、洛陽に居る友の中でも、空き部屋が多くある広い邸宅に住む飛將軍に白羽の矢を立てた。

子敬が薺華の部曲（魯家部曲と、ここまで付いて来た義勇兵達で構成されている）の為に用意した外殻城の邸宅という選択肢もあるのだが、そちらも改築する必要があると子敬が言っていたのを思い出し、候補から外した。後になって薺華が確認した時、殆ど一坊区画を占拠する勢いで邸宅群が買い上げられており、啞然としたのは別の話である。

「それじゃあ、私が行って頼んでくるから、その間は皆 好きにさせてよ」

「私が先方に向きましようか。わざわざ薺華様自ら出向かずとも……」

「いや、恋は従僕のためぐいを殆ど雇い入れてないし、面識のない人間が使いに行くには向かないから」

黄宗文が名乗り出るが、呂奉先邸の事情を考えると、矢張り自分が出向いた方が良かったと説明する。

「そういう事でしたら。……それでは、私は留守を守っております。全員出払う訳にも参りませんし」

「んじゃ、わたしは書肆*186に行つてこよつかな」

「え？」

「おい、何その反応」

「いや、なんでも。……何買いに行くの？」

「阿蘇阿蘇の最新号」

「うん、まあ、そんなところだろうと思つたよ」

「いいじゃん」

「いいけどね」

もしかして洛陽入りして機嫌が良かったのは、これが理由か？と軽く話を振ってみれ

ば、「普通に最新号が手に入るなんて流石京師だよー」と上機嫌で返してきた。やつぱりか。

故郷の巴郡では少なくとも一か月は遅れて入荷されるし、更に遅れる事もあった。子供の頃から愛読している仲峻からすれば、最新号が発売日に書肆に並ぶというだけで、洛陽に滞在する価値があるのかも知れない。

「あの、阿蘇阿蘇って何ですか？」

「ええっ?! 亞莎知らないの? 年頃の女の子としてそれは駄目だよー」

「いや、駄目って事はないだろう」

仲峻の大仰に過ぎる反応に、薺華が突っ込みを入れる。子明は小さな邑の農民出身だ。おまけに薺華に仕えるまでは書館にも碌に通った事が無かったらしい。女性情報誌など知らないのも無理はない。

しかし仲峻の驚きは大きく、子明に阿蘇阿蘇の重要性和素晴らしさを得々と語り始めた。何気にトラも興味深げに子明の隣に立って拝聴している。その姿を見て、反射的にトラに似合うお洒落を脳の片隅で検索し始める薺華。と同時にこの場に居るもう一人、宗文に視線を向けると、あまり興味なさそうな面持ちだ。知ってはいるかな。と心中独り言ちる薺華も、それほど熱心な読者ではなく、仲峻の蔵書を時折借りて読むくらいであった。

此方の視線に気付いた宗文が、一度自分の衣装に視線を落としてから此方に伺うような視線を寄越してきた。思つたより興味を惹かれていたらしい。落ち着いた白緑びやくろくの襦裙じゆくんが良く似合っている。もしかしたら、流行とは遠い露出の少ない服装を気にしているのかも知れない。可愛いし、良く似合ってるよ。と小声で告げれば、ほっとした様子で頷き掛けてくれた。

豫州で黄州牧より預かつて以来、殆ど自己主張することなく役割を淡々と熟してきた宗文のそんな姿に、自然と薜華の頬がほころんだ。

薜華が黄宗文と小さな交流を果たしていると、何時の間にもやら子明が仲峻と一緒に書肆へ出掛ける事になつていた。仲峻の高揚振りに比べて、子明はまだ少し戸惑つていた。

「最新号どころか既刊まで買い漁りそうな勢いだな」

「ふっふっふ、それに関しては抜かりはないんだよねー」

子明に語るうちにどんどんと盛り上がったのだらう仲峻の様子に、ふと言葉を漏らすと、したりと返事が返つて来た。

「過去号は綱に預けてあるんよー」

「ん？」

端的な言い回しに、疑問の声を上げる。ただ、何となく分かつた気がした。

「わたしが薺華を追つて豫州行つたあとに刊行された阿蘇阿蘇を確保しておいてつて頼んどいた」

「紅玉……」

まるで遠慮と言う言葉を知らない友の行動に、しかしやっぱりなあという諦観にも似た眩きが漏れた。

そこでとある事実気付いた。

「ちよつと待つて。て事は、鋼が阿蘇阿蘇を毎月欠かさず購入してるの？」

「そうなるねー」

……暫しの沈黙。

子明と宗文が、はて？と見守っていると、二人同時にぷつ、と吹き出した。あまつさえ、「似合わねー！」と声を揃えてからからと笑い出し、子明達は未だ見ぬ二人の友に同情した。

「しかし、よく承知したね」

「いつも行く仲任書肆にも置いてあるから構わないぞ。つてさ」

「仲任？……どつかで聞いたな」

「彼の王充おうじゅうが在りし日に立ち読みを重ねて遂に諸子百家を極めた、という伝統ある書肆なんだとー」

「ああ、『論衡』の王仲任か。つて、王充の名前を利用しておきながら阿蘇阿蘇を取り扱っているのか、その書肆」

「薜華、これも時代の流れだよ」

「無常だなあ……」

「むしろ歓迎すべき文化の発展でしよー」

確かにそうかもしれない。娯楽が充実するというのは、それだけ余裕があるという事だ。阿蘇阿蘇の刊行が制限されたり、滞るほど逼迫する事こそが憂慮すべき事態なのだ。だが、時代はどうにもそちらの方へと舵を切ろうとしている。婦女子が大通りの茶房で流行誌の話題に花を咲かせる。そんな光景を遠くに追い遣ろうとする時代の流れ。

その潮流に、例え僅かでも抗う為に、薜華は洛陽での闘いを開始したのだ。

取り急ぎ、今日の宿を確保する為に知己の元へ向かいながら、締まらない第一歩だと独り言ちるのだった。

第十七回——了——

良く晴れた夏空の下、北郷一刀は鎧曹掾*187の工房へ足を向けていた。鎧曹掾は武器を管理する部局であり、兵庫へいこがその管轄となるが、補修の為の工房も併設されている。だが、一刀が今向かっている工房は、製造所どころか開発室まで備えており、補修用の工房とは思えないほどに本格的なものであった。ここまできると最早考工令こうこうれいだな、などと愉し気に太守が評する程の兵器工房。それは、この軍に仕官した一人の武官の為に拡張されたものであった。

一刀はその件の武官（普段は將軍府で鎧曹掾を務め、戦場では軍候として一曲を束ねる）を探してやって来ていた。開け放された工房の入り口に立ち、なかを軽く見回し、手近にいた工兵の男に声を掛けた。

「真桜、居るかな？」

「ああ、これは御遣い殿。李鎧曹りでしたら、街へ昼食を摂りに出掛けましたよ。もうそろそろ戻ると思いますがね」

「そつか。じゃあ、待たせてもらおうかな」

未だ慣れない肩書に少しだけ気後れしながら、目的の人物が戻るのを待つ。待ちながら考える。ふとした空白について考えてしまう己の現状。天の御遣いという着慣れない肩書。

極星としての働きを喪った君は、ただの生きる民間伝承のようなものだよ。とはこの

地に来て知り合った女の子の言だ。瑞獣ならぬ瑞人というわけだ。実際、お年寄りにありがたやありがたやと拜まれてしまった事もある。縁起物になる為にこんな処に来てしまったのかと思うと、なんとも言えない微妙な気持ちになる。お蔭で衣食住には困らないのだから文句も言えないが。だが……。

もしも、彼女の言うところの“極星としての働き”を得ていたら、今頃自分はどんなっていたのだろうか？　ここは、自分がそれなりによく知る歴史の転換点に似ている。小説で、或いは解説本で、漫画で、ゲームで、映画でそれなりの知識を持つある国のある時代によく似ている。それでいてかなりズレている。そんな処である種の役割を与えられるのが本来の運命だったら、何らかの働きを得ていたのなら……。

少なくとも、こんなに呑気にしてはいられなかつたらうな。そう、溜め息を吐きながら独り言ちた。

「お、なんや一刀はん。ウチに会いに来たん？」

物思いに耽っていると、いつの間にか戻って来ていた女の子に声を掛けられて、意識を現実に戻り戻した。そうだ、彼女を呼びに来たんだった。

「ああ、桔梗さんが呼んで来いってさ」

「桔梗様か？　なんやろ、豪天砲ごうてんぱうの改良ならもうちよい待って欲しいんやけど。一刀はんの言うてた『らいふりんぐ』の再現が難しゆうてな〜」

「それとは別件だと思うけど」

遙々^{えんしゅう}州から発明の才を見込まれ招聘された才媛が、ぼやきながら連れ立って歩き出す。その明るい笑顔を横目に、誰にも理解されないであろう違和感を心の奥に押し込めて、一刀は努めて明るく振る舞った。

巴郡太守の部曲が運営する巴鷹鏢局は、主の為に大陸各地から様々な情報を収集していた。直々に命じられたわけではないが、常の恩義に報いる為、己等の出来る事は全てやろうと決めていた。その中で、腕の良い武器職人を長年求めている事を知っていた総鏢頭^{そうひょうとう}趙弘が、発明の評判を聞きつけるやいなや、支局もない州にまで乗り込んで頭を地に擦りつけて口説き落とした才媛。

本来ならばそのまま州に居続け、その内に曹操に仕える事になる筈の、この世界では快活な十代後半の少女のその存在が、北郷一刀という、天命から外れ、外史の特定因子と擦れ違った少年の、戸惑いを一層大きなものにしていった。

ここは益州巴郡。北郷一刀の知る歴史では、まだまだ表舞台に出てくる事のない大陸の辺境。他州と比べれば平和でありながら、混乱の火種だけは同等に燦る遠隔地。主演を張るには聊か以上に外れた片田舎。大陸に覇を唱えんとする誰も注目していないその土地で、外史の中心点である少年が先の見えない道を歩き始めていた。

それは、日本とは曆のズレた夏が終わろうかという、そんなある日の情景。

第十八回 為明天酒

「太平要術の書ねえ」

「はい」

呂奉先の私邸に用意された客間にて、蒯華達は劉玄德一党と保護された張三姉妹と面談していた。

劉玄德は此度の黄巾征伐における勲功で豫州刺史に任じられており、任地へと赴く前に蒯華の元に訪れていた。その目的は、黄巾の乱の中心人物・張角とその二人の妹について話し合う為であった。

そして今、蒯華の目の前には一卷の妖術書がご丁寧に書盆に乗せられて卓上に鎮座している。

対面に座る玄德と孔明はやや緊張した面持ちで妖術書と蒯華を交互に見遣っている。玄德の斜め後方に控える関雲長ははつきりと厳しい表情だ。その隣り、孔明の後方に位置する鳳士元は不安気に孔明の後頭部を見詰めている。その孔明の脇に座る張角はのほほんとしている。凶太いというよりは、現状をあまり良く解かっているのだろう。その代わり、という訳でもあるまいが、張角の後方に座る彼女の末妹は固い表情を保つ

ている。その隣の二女は無然とした表情で俯いている。

「内容を検めても？」

「え……つと」

「それが道理とは思いますが、正直、あまりお勧めできません」

薺華の言葉に、玄徳が言葉を濁し、孔明が顔色をやや白くして答えた。そこで薺華は初めて孔明が薄く化粧を施しているのに気が付いた。注視してみれば、憔悴を誤魔化す為のものと同知れた。

「それね、とても怖いものなの」

「怖い？」

「うん。私も少しだけ読もうとしたんだけど、なんていうか、吸い込まれそうになって……」

「桃香様の言う通り、それは危険です」

「ふむ……」

どうやら対面の二人は、この妖術書に僅かにだが目を通したらしい。しかし、二人の状態には差がある。それは意志の差か、或いは知的好奇心の差か……。薺華はもう一度、張三姉妹に視線を向けた。

「私達がそれを入手した時は、正直かなり興奮したのを憶えているわ。私達が求めるも

のを手にする為の示唆が、……いえ、もつとはつきりと明示されていたのだから」

葬華の視線の意図を汲み取って、張梁ちやうりやう*188が口を開いた。

「具体的には？」

「簡単に言えば有名になるための方法が段階的に示されてたわ。あと、後半は方術・妖術の指南書でもあつたわね。その中にも、私達の舞台演出に使えるものが幾つもあった」張梁を説明を聞きながら書を手に取り、もう一度「ふむ」と呟いて、徐に書を紐解いた。その躊躇のない動作に、対面の二人は身を固くしたが葬華は平然としたものだった。

確かに今説明を受けた通りの内容のようだと、斜め読みで手早く繰り終える。しかし、危惧したような精神的な干渉は受けなかった。はて、これはどういう事だろう？ 玄德達がこうして目の前に居るからには、読み込んだだけで魂を獲られるような事もあるまいと思つての行動だったが、なんの影響も感じられないとは思わなかった。実は自分はそのういった類が効かない特異体質なのか？ などと突拍子もない事まで考えてしまふ。

くるくると竹簡を巻き戻しながら所感を述べると、張梁が唇に指を当て思索しながら同意を示してきた。そして、そのやり取りに玄德達二人が不可解と謂わんばかりの反応を示していた。

「有名になる為の方法か。しかし、何と言うか都合よく限定的だな」

「そう、ね。確かに言われてみれば……」

「えっ？」

実際に声を上げた孔明を見ると、中途半端に手が伸ばされており、それに気付いた少女が慌てて自身の手を引っ込めるのを見送りながら、彝華は脳内で疑問符を上げた。

その疑問に応えたのは隣に座する魯子敬だった。

「どうやら御二人には違うものが見えていたようで」

「……はい、その通りです」

躊躇しがちに答えた孔明の言葉を、太平要術を紐止めしながら反芻してその身に理解を漸く行き渡らせた彝華は、目を見開き感心しながら隣の軍師を振り返った。

「よくいきなりそんな発想が出てくるね」

「発想だけで済めばよかったのですがねー。事実であると認識しなければならぬとなるとなんともはや……。読み解く者の望みを書き記す書、ですか。正しく妖書ですねー」

「望みねえ……」

先程は張三姉妹の望みを覗き見た格好だったという事だろうか。じゃあ、私の望みはなんだろうか？ 武官としての立身、ではないな。大陸の情勢を少しでも良くしたいと

思つてはいるが、何と云うか具体性に欠ける。元々、大望を抱いて故郷を出た訳ではなく、御遣いとなる彼が何処に光臨するのかわかぬたかつたのだが、それも未だに見付からない。目星を付けていた三陣営には居ないし……。未究の奴が私が求めてるなんて言うから……。もやもやと考えを巡らせるが、思考が上手く纏まらない。纏まらないことを自覚して、明後日の方向へ飛ばうとしていた思考を太平要術の書に戻す。某かの大望を抱く人物にしか力を示さないのかも知れないな、と思ひながら何気に視線をまだ手にしていた竹簡に落とすと、確りと結んだはずの紐が解けていた。

おかしいな？

確かに紐止めをした筈だ。ながら作業であつたが、間違いない。こんな簡単に解ける筈がない。その筈が……。カタリ、と幽かな音を立てて簡が一札、一札だけ捲れ上がった。視線がその不自然な挙動を成した一札に吸ひ寄せられる。そこに記された一文は、確かに先程目にしたものとは違つていた。そこに記されていたのは……、

バンツ！ と一際大きな音を立てて太平要術の書が書盆に置かれた。いや、叩き付けられた、と言うべきか。客間に居た全ての人間の視線が一瞬でそこに集中した。皆、驚いていた。中でも、叩き付けた勢いとは逆にそつと竹簡から手を放した薺華が最も驚いていた。全員の視線が書から薺華に移される。その視線を受けて、長くゆつくりと息を吐き出し、薺華は静かに独り言ちた。

「確かにこれは怖いね」

背中に冷たい汗を感じながら、南蛮での事を思い出していた。妖書の矢鱈と達筆な字を目にした時、あの不吉な視線が記憶の奥で瞬いた。あの怪鳥の視線、あれは矢張り人の精神に負担を与える超常が込められていたのだろう。その経験が薺華を妖書から寸でのところで引き剥がした。

「よく平然と利用できたね、これ」

「ふんっ！ ちいには余裕よ、こんな使いこなすくらい！」

「地和」
チーホウ

「うっ……」

張梁に向けての言葉だったが、答えたのは次姉の張宝ちようほう*189だった。なかなか不遜な態度だったが、割と見掛ける範圍の不遜度だった為、薺華に特に思うところはなく、ただ妖書を扱っていたのが三女だと思っていた為に軽く驚いたくらいだった。しかし、その態度に思うところのある者は他ならぬ劉備陣営におり、雲長にすぐさま窘められていた。窘めるというには少々語調が強かったが。

「名を売る為の実践法は私が主に担当したけど、ちい姉さんは妖術を習得したのよ。姉さんはああ言ってるけど、やっぱり違和感のようなものは感じてみたい。私も、正直魅入られてた部分もあると思う」

張梁がそう補足し、薜華は頷いた。淡々と語っているが、その裏で心が小刻みに小さく震えているのが感じられた。書を手に入れた時の興奮、支持者が如実に増えていく実感、昇っていく高揚感、その時には感じなかったもの。膨れ上がり過ぎ、意図しない方向へと流れ始めた時の困惑を通り過ぎ、今ここにこうして姉妹揃って居られる安堵の裏側にある感情。畏れの感情が確かに張梁の心根に巢食っていた。一見、強気な態度を取る張宝にも同様のそれを感じた。それがどれ程根深く強く浸食しているかまでは薜華には窺い知れない。

しかし、と薜華は三姉妹の長姉に目を向けた。そこには終始にこにここと笑顔を決やさずにいる張角の姿が在った。彼女にだけは一切の翳りを感じない。全く以って大物だ。心中、感嘆し切りである。そして同時に、彼女が居ればこの姉妹は大丈夫だろうと安心出来た。ともあれ、彼女達の処遇は劉玄德に委ねられている。自分が張三姉妹の心配をするのも見当が違うのだが、それでも気に掛かってしまうのは仕方ない事ではあった。

此方の視線に気付いたのか、張角が小首を傾げながら笑い掛けてきた。その天真爛漫な輝きを見て、黄巾賊がああまで膨れ上がったのは何も妖書の所為ばかりでもないな、と一人得心した。

「もう、妖書の力なんて必要ないね」

そしてそう笑顔で返した。薜華のその突然ともとれる言葉に、張三姉妹が纏う空気が

一段、柔らかいものとなった。

その流れのまま、薺華は改めて太平要術の書に目を移して、あつさりと宣言した。

「じゃあ、これは燃やしちやおうか」

「うん、そうだね」

そして、玄徳も至極あつさりと同意して、この仕儀は決着を見る事となった。その時の、孔明の強張りながらもほっとした様子が、薺華の印象に残った。

第十八回 為明天酒

薬酒げつしゆというものがある。薬ひしほえ（穀芽こくが）を荒く挽き麴ぼらじうじを置いて酒造さ

れた古くから伝わる酒である。別名を醴れいと言ひ、酒精が非常に低く味も極薄い為、今では酒としてはほぼ流通してゐない。酒と醴は明確に別物として扱われている。調味料としての需要が主たるものだが、いわゆる甘酒として、酒精に弱い者が酒席で失礼にならぬ程度に嗜む事もある。そして、その甘酒で十分な少女が今、普段酒席で口にする薬酒ではなく、上品な芳香を放つ酒を手にしてゐた。

昼を幾許か過ぎた頃、主君に宿を借りに来た敵慶祝が礼として酒宴を披いた際に出した酒である。

告老した訳でもないのに行賞にて賜与された上尊酒だ。当初、慶祝自身も首を傾げていたようだが、どうやら黄仲峻がこつそりと魯子敬に手を回させて行賞に捻じ込ませたいらしい。呆れたものだがお蔭で今宵の酒宴は随分と豪勢なものとなり、出席者達は皆大喜びであった。普段はあまり酒を吞まぬ音々音も、物は試しと一杯だけこうして注いで貰ったのである。

ついつと丁寧^{ていねい}に御猪口を口に運び、ゆっくりと傾け、滑らかに酒を喉に通す。強いのは香ばかりでなく、酒精も相当なものだ。たつた一口で肌が上気してしまった。矢張り御猪口に一杯だけで十分だな、と俄かに熱を帯びた吐息を吐いて、周囲の喧騒を見回した。

招かれているのは、殆どが主君と慶祝共通の友人だが、初めて見る顔もあった。劉玄徳とその配下達である。

慶祝が音々音に宴の提案をしていた時、黄宗文が慶祝の元に案内して来た新豫州刺史。更には中山靖王^{ちゅうしんせいおう}の後裔であると正式に漢室に認められ、宜城亭侯^{ぎじょうていこう}にも封じられた。慶祝と同じ様に義勇軍から身を立てて、黄巾首魁の首級をあげ、皇族として認められ、州刺史にまで一気に上った時代の寵児。

在野に眠っていた傑物が次々と花開くこの流れは、歴史の転換を否応にでも感じさせるものだ。

音々音の尊崇する主・呂奉先も此度の功績で前將軍ぜんしやうぐんに累進、都亭侯に封じられた。天下無双の評価と共に、飛將軍の異名で天下に名を轟かせた。

順調だ。何処の誰が名を上げようとも、呂奉先の龍道を阻める者など居はしない。ふわふわと心地良い気分で確信に満ちながら、音々音は杯を重ねた。何時の間にか誰かに注がれていた上尊酒を重ねたのだった。

張文遠が潰してしまった陳公台を介抱する鶻は、何食わぬ顔で今度は関雲長にちよっかいを掛けている文遠を視界に収めて溜め息を吐いた。酒宴が始まる前には、新顔である玄德一党を見定めてやるなどと息巻いていた小さな軍師は、あつさりと酒に飲まれて深い眠りについてしまった。元々、酒に強い性質ではないのだから、始まって早々に強い酒に手を出すべきではなかったのだが、つい普段お目に掛かれない等級の酒に好奇心を刺激されてこの様である。

陽が沈む前から早々に始められた宴の最序盤で沈んだ奉先の懐刀の寝顔を眺めて思

う。常は自分などよりも余程頭が回り遠くまで見通せる才知がありながら、時折こうしてやらかしてしまふ小さな友人に、年相応の微笑ましきを感じて知らず笑顔を浮かべていた。

「おやおや、これは仲承さんじゃないですかー。」

「え、あ、……子敬さん」

と、そこへふらりと現れたのは、公台と違いしつかりとこの宴に集つた者達の情報収集に勤しんでいる魯子敬であつた。嘗て、慶祝が初めて洛陽に滞在した折、彼女を探つていた曲者。だつたのに、今ではその慶祝の智囊として傍に控えているのである。久しぶりに会つた慶祝に紹介された時、董幼宰と共に驚いたものだ。珍しく、幼宰の表情がはつきりと驚愕を象つていたので、その衝撃はかなりのものだつただろう。無論、自身も同様だ。

そんな訳で、鵜は正直言つて彼女が苦手だ。それは、最初の印象に基づくものであるが、彼女を平然と受け入れている慶祝に驚きを禁じ得なかつた。

「いやですねー、そんなに嫌わないで下さいよー」

「い、いえ、そういう訳では……」

此方の戸惑いも全く気に留めた様子もなく、酒気で紅潮した面をずっと寄せて絡んでくる。その様子に、この人もかなり酔つてるなあ、と内心毒づいたが、実際には子敬

の表面的な酔い加減などは擬態であつた。

「公台さんはおねむですか、残念です。色々とお話を伺いたかつたのですが」
「ねねちゃんと、ですか」

「同じ知に生きる者同士、言葉を交わすだけでも良い刺激になるんですよ」
「成る程、そういうものですか」

納得し頷く。その素直な鶯の様子に、子敬は笑みを深くした。一目見ただけで警戒している事もありありと判り、かと言って話を振られたら邪険には扱えない。そんな鶯の真つ直ぐな性情は子敬にとって好ましく、また与し易かつた。

ほんの四半時も話せば、酒の力も手伝つて子敬の話術の前に、鶯の舌は実に滑らかに回つた。

鶯は慶祝と初めて出会つた時、奉車都尉丞であつたが、現在は奉車都尉に累進していった。これには謹厳実直な勤務態度が評価されたのは勿論あるが、それよりも時勢が大きくな要因となつていた。奉車都尉は元々儀仗職であるが、有事の際には叛乱討伐に討つて出る事もある。前任者は完全な文官肌で、警護の配置や警備計画・指令はできるが外征などは無理であつた。そのように本来の職掌のみを堅実に熟していたが、大陸の情勢を鑑みればいざという時に武を揮える者が望まれた。鶯は正に適任であつたのだ。

儀仗兵としてだけでなく、実際の武官として期待されている鶯ではあるが、先の黄

巾征伐では外征することなく、天子の側に侍つて警護を固めていた。その為、子敬の求める情報の幾許かを掴んでいた。

宮殿の内では既に次期皇帝へ焦点が移っていた。

何皇后が河間王家の血筋より養子に迎えた弁皇子と、皇妹である協皇女。誰がどちらを擁立しようとしているのか。と言うよりも、誰が協皇女に肩入れするのか。を問うた方が早いだろう。

何皇后の権力志向は誰もが知るところである。十常侍との関係も良く、姉の何大將軍に対して主導権を握り、何より弁皇子を完全に傀儡として専らに擧げている。特に弁皇子に対しては、口の端に乗せるのも憚れる様な手段を用いて己の操り人形にしているなどと囁かれてもいる。

世の良識ある人々は十常侍を口を極めて糾弾するが、現在の漢王朝に於いて最も排斥すべきは何皇后ではないかと言う者までいる。どちらがより害悪かは置くとして、王朝に暗澹たる影響力を發揮しているのは間違いないところである。

ここまで揃えば、次期皇帝の座など決まりきっているように思えるが、そう簡単に話は終わらない。なにせ協皇女に皇位を継ぐ意思があるというのだ。現皇帝の姉に幾度も諫言しているのを宮中の多くの者が知っているし、皇族としての誇りと責任を強く持っているという評判である。

しかし宮中の影響力では何皇后が圧倒している。この状況で協皇女を支援する者が果たしているだろうかと思う者は多いが、世の中それほど単純な決着が付く方が珍しいものだ。

「……やっぱり、一波乱あるんですね」

「そりやそうですよー」

「個人的には皇女殿下に継いでいただきたいと思つてますけど、本当に支援者なんて居るんですか？」

「この場合は無論、皇位継承に影響を齎せるだけの力を持った支援者と言う意味である。」

「いますよ、絶対」

断言して見せた子敬に、鴉は驚きを隠せなかった。そんな鴉の様子に構わず話を進める子敬の発言に、またさらに驚き、それ以上に焦りを憶えた。

「皇女殿下を積極的に支持するだけでなく、何皇后を引き摺り下ろしたいという思惑も、皇女殿下に与する理由になりますしね」

「見目は良いけど腹黒い肉屋の娘に繰られるだけのお飾り皇帝なんて冗談じゃない、と思つている人なんかも多いですしね。仲承さんもその口でしょう」

「うえ?!……うゝ、ええ……まあ、はい」

あまりはつきり指摘して欲しくない事柄をずばり言い当てられてしまった。いくら友人しかいない酒席とは言え、こうも明け透けに口に出されては聞いてるだけで心労が溜まってしまふ。自分が溜め込む意味など全くないのだが、生来の性分という奴でどうしようもない。

一方の包は調子良く語りながらも、その頭脳を高速で回転させていた。

宮中は既に皇位継承争いが始まっている。それもまだ表面化してはいないが、深く関わっている者達は着々と準備を進めている。いや、今迄も密かに準備や根回しは行われていただろう。だが、今やさらに一段進みより具体性を帯びた行動段階に入ったと見るべきか。それも水面下の、深く潜った先での暗闘。

流石に気付けはしなかった。目の前の馬家の次女や、主の親友と密に連絡が取れていればまた違つたろうが、それはこれからの課題だ。一先ず、今宵この宴席で少しでも距離を縮めておかなければならない。

脳内で思索を深めながらも、その舌は実に滑らかに馬仲承の警戒を解いていく。そして同時に主に侍中が加官された意図を思索する。

先程、協皇女の支援者がいると断言した時、仲承は随分と驚いていたが、何の事はない。包は知っていたのだ、実際にその支援者を。

それこそが宦官蹇碩である。

皇位継承に向けて動き始めた蹇碩が現皇帝の近侍に一手を打ち込んだ意味。それが何であるのか。蹇碩と皇帝の関係は良好だ。協皇女と皇帝も悪くはない筈だ。度々、苦言を呈して煙たがられているとの噂もあるが、少なくとも皇女側からは姉思い故の行動であるのが遠くから聞き及ぶだけでも透けて見える。協皇女は良くも悪くも真つ直ぐな御方だ。行動の裏の思惑が違っているなどという真似は出来ないだろう。

その協皇女を支援する蹇碩が、皇帝に直接間接を問わず何らかの害を成すとは考え辛い。皇女の評価を愚鈍方面に下方修正すれば、間接的な行動を起こすかもしれないが、それにしたって自分の主がそのような事に手を貸す訳がない。となれば、意図せずそう動くように誘導するという手を打つのが常道だが、……結局は蹇碩が皇帝に対して何をしようとしているのかが読み解けねば警戒以上の事は出来ない。

……或いは全くの逆なのかもしれない。ああ、駄目だ。思考が良く解からない方向へ飛び始めた。現段階の情報での思索はそこで打ち切り、包は仲承との会話に集中する事とした。

庭園の片隅、酒宴の喧騒のすぐ脇で、薜華と張宝（字を公平こうへい*190）が額を突き合わせて密談に興じていた。

張三姉妹は劉備陣營の營妓*191として紹介されていた。豫州が安定すれば、州内での芸能活動も許可されるとの事だ。無論、お目付け役付ではあるが。過去曆はともかく、現状は実態に則していた。そんな姉妹の一人、張公平に話を聞く薜華の目的は芸人としてではなかった。

「昔読んだ仙人譚で、仙人が自在に鳥獸を呼び寄せる場面が結構あったんだけど……」

「嘯術しょうじゆつ*192ね。口笛で鳥獸の類いを呼び寄せるのよ。まっ、ちいほどの達人となれば、無音で呼び寄せる事も、自在に使役する事も余裕だけどね！」

「ほおお……」

こと動物の事となると、割りの見境のない薜華である。そんな薜華の素直に感心した様子に、非常に気分の良い公平であったが、ちらりと薜華の足元に目を向けながらぼやいた。

「まあでも、あんたに必要かどうかは疑わしいわね」

「あはは」

薺華の足元には、この屋敷の主の家族がわらわらと寄つて来ていた。犬が多いが、猫や兎も居る。結構な数だが、これで全てではないというのだから驚きである。以前、洛陽に滞在していた時、暇があればここにやって来て主と仕合ったり、動物達を愛でていた。そのお蔭で、久し振りに顔を見せた薺華の事をすっかりと憶えていた彼等がこうして身を寄せてきたのだ。薺華、ご満悦である。

そんな薺華の様子を眺めていた公平だが、ふと何かを思いついたように指を鳴らした。

「あんたの好かれっぷりもなかなか大したものだけど、人馴れした動物達じゃ、ちいの凄さは伝わらないわね」

そう言つて遙か上空を見上げる三姉妹随一の妖術士。釣られて薺華も空を仰げば、時刻の高空を旋回する鳶の姿が在った。まさかあれを？　そう思い、公平に視線を戻せば、真剣な眼で鳶を捉える公平の横顔。それは舞台の上で歌舞を披露する歌手とは全く別の顔であつた。

すうつと小さく一息吸い、唇を少し窄めて口笛を吹いた。が、その口からは静かに吐息が抜けていくのみ。だが、上からそれに応える声が響いた。ピーヒョロロロロという特徴的な鳴声。公平がその鳴声に応じる様に右手を掲げると、鋭い風切り音と共に鳶が舞い降りてきた。そして、驚くほど優しく、まるで氣遣うように静かに公平の右手にと

まった。

「凄……」

「ふふん。まっ、これくらいよーよー！」

驚嘆する薜華の反応に、実に気を良くした公平はにんまりと勝気な笑みを浮かべた。

得意気な公平だが、薜華はあまり其方には反応していなかった。その眼は判り易く目の前の鳶に奪われていた。野生の猛禽類をこれほど間近で見られるなど、常ならば考えられない事だ。

「触れても大丈夫かな？」

「ん、いいわよ。今この鳶はちいの使役下にあるから」

そう言うと、軽く右手をこちらに振る公平。その上に鎮座していた鳶が重さを感じさせない動きで薜華の肩に飛び乗った。深まる感動の中、手を伸ばしその羽毛を撫でる。艶やかな力強さを堪能し、深く感嘆の息を吐いた。

「なんなら憶えてみる？ 呼び寄せるだけならそこまで難易度高いわけじゃないし、結構動物に好かれる性質みたいだから、その後使役できなくても酷い事にはならないでしょ」

時間を忘れて鳶を愛でる薜華と違い、早くも飽きのきた公平は、溜息を吐きつつ提案してみた。すると、逡巡しながらも喰い付いて来た。方術の類いに軽々に手を出すのは

憚れるという常識的判断を何かが、とても判り易い何かが上回ったようだ。が……

「私にもできるの?」

「取り敢えず、口笛で鳩の興味を惹けるようになる事が第一段階ね」

「いけません、薺華様」

「?! あ、亞莎?!」

何時の間にか近付いてきていた呂子明に制止された。子明からすれば、酒宴の主催がいつまでも庭隅に捌けているのもどうかと思ひ呼びに来たのだが、まさかこんな怪しげな事をしていたとは、といったところである。

「いや、亞莎、これはね……」

「薺華様」

「はい」

「ご自分の御立場を考えて下さい」

「はい。済みません」

いつもは無邪気に慕ってくれる子明に叱責されるのは思いの外堪えた薺華。判り易過ぎるほどに縮こまってしまった。

珍しいものを見た気分（実際に珍しい光景である）で、にやにや眺めていた公平だが、当然のようにそちらにも飛び火した。

「あなたもです。薺華様に妙なものを吹き込もうとしないで下さい」

「はあ?! なんてちいが怒られなきやなんなのよ! そいつが言ってきたのよ!!」

「そいつとはなんですか!」

「お、落ち着いて二人共!!」

「何を騒いでいるんだ?」

「鋼! 助けて!!」

救世主がやってきた! 薺華の軽く混乱した頭で成した認識であるが、当然そんな訳はなく事の次第を話せばただ呆れられるばかりであった。

「薺華、お前な……。鳥獣が好きなのは結構だが、少々暴走気味ではないか?」

「う……。だって、戦ばかりだと碌に動物達と触れ合えないし、愛馬とは常に一緒に居れたけど、本当はあまり戦に連れ回したくないし」

「どんだけなのよ、あんた」

ついに今日会ったばかりの者にまで呆れられてしまう薺華に、これから先、大丈夫だろうな? と俄かに心配になる親友であった。

だがこれ以降、薺華には気を抜ける暇いとまなど訪れる事はなかった。

北宮すうとくでんの崇徳殿。一人の宦官が殿中をしずしずと歩いている。上背高く、よく鍛えられた肉体がゆつたりとした装束の上からでも窺える。なかなかの美丈夫であり、萎えた気配も陰湿な空気もなく、戦場に立つていても違和感のない気力が身中に満ちている。その手には高々と食膳が掲げられており、その上には皇帝陛下の好む茶菓子が乗せられていた。

殿内の中廷に設えられた涼亭にて茶会の準備が進められており、宦官の男はそこへ足を踏み入れた。すると、先に準備に入っていた宦官達が一斉に頭を下げた。その中を悠々と進み、一つの菓子器の前に立った。手にした食膳を脇に置き、菓子器の蓋を開け中身を確認すると、そのまままた蓋をして、自らが持ってきた菓子器と取り換えた。そして、食膳に元々用意されていた菓子器を乗せて早々と立ち去った。

そうして、その宦官の気配が遠ざかり、完全にその姿が中廷から消えると、準備に追われていた宦官達は再び忙しそうに動き出すのだった。

第十九回 御遣上洛

巴郡太守執務室。郡堂の奥、広い間取りを圧迫する書類棚に詰め込まれた竹簡の山と、それに対抗しようとしてし切れていない慰みのような調度類に挟まれた一室。太守が邸の自室よりも多くの時間を過ごす羽目となつてゐるその部屋に、北郷一刀と李典りてん* 193、字を曼成まんせいは呼び出されてゐた。

何度か足を踏み入れた事はあるが、何度来ても一向に慣れる気がしないのは、何となく校長室を連想してしまうからだろうか。その割に部屋の主は校長的なイメージとは程遠い人物である。部屋の印象とその住人のイメージが懸け離れてゐるのは、やはりそういうた事務仕事に似合わないからだろうか。と一刀は僅かに身動きしながら、目の前の執務机の向こうに泰然と座る巴郡太守嚴顯義と顔を合わせてゐた。

「俺達が洛陽に、ですか？」

「うむ、娘に祝いの品を届けてもらいたくての。引き受けては貰えぬかな？」

「そりゃ、構いませんけど、なんで俺なんです？ その、お嬢さんとは面識もないし……」

「そら、一刀はんはウチなんかと違つて仕事もなく暇人やしな」

「う……、でもその真桜も洛陽行きを俺と一緒にお願いされてるじゃないか」

からからと笑いながら茶々を入れる曼成に、苦し紛れに突っ込みを入れる。すると、いきなり真剣な顔で顯義に詰め寄る曼成。聊か必死だ。

「そこですわ、桔梗様。豪天砲の改良もまだなに、まさかもうお役ご免なんて事言わんでしょ?」

「当然じゃ。とは言え、豪天砲は現状でも十分満足しておるぞ。改良についてはそれ程急いではおらん」

「ありがたいお言葉ですけど、あれには未だウチの魂とも言える螺旋の力が籠もつとらんですわ。言わば、まだまだ未完成! 一刀はんの「ひんと」を実装したその時こそ! 豪天砲の真の姿となるんですわ!!」

「う、うむ、お主の意欲と熱意は良く分かった」

熱く語る曼成に対し、やや引け気味の顯義であるが、その仕事ぶりに感心しているのは本当だった。

当初、曼成が顯義の元にやって来た時、顯義は趙子鷹から腕の良い武器職人が見つかったと聞いていた。しかし、曼成は招聘されたと思い遠く益州まで来ていたのだった。それを知った顯義はまさか自分の武器を作らせる為だけに仕官させるわけにもいかず、取り敢えず兵器の管理と開発を任せる事にした。すると、曼成はあつという間に結果を出した。弩の改良や、盾の改造、攻城兵器の開発、更に天の御遣いと交流しだし

てからはそれが加速した。

おまけに武もそれなりのものを持っていた。娘や弟子ほどではないにしても、経験を積ませれば一軍を任せても良いと判断できるほどだ。

これほどの人材を手放すなどあり得ぬ事で、軽口とは言え、お役御免などともんでもない話である。

「お主に任せたいのは二つ。まず、一刀の護衛。そして、洛陽——中央の様子を見て来て欲しいのよ」

「中央の情勢、でっか」

成程、と口の中で呟いて、曼成は暫し考え込むと、徐に大きな胸に手をやり「ほな、この李曼成にお任せください！」と快諾した。

こうして、はぐれ天の御遣い・北郷一刀は李曼成を伴なって上洛する事となった。

第十九回 御遣上洛

何かが誰かを呼ぶ声が聞こえたような気がして、一刀は目を覚ました。

暗闇の中、見知らぬ部屋で目覚める。二度目の体験だが、最初の時は朝方だったな。と、寝ぼけた頭でぼんやり思考する。見慣れぬ異国情緒あふれる調度品で彩られたあの部屋も、今ではそれなりに慣れてきていた。

部屋の雰囲気は似たようなものだが、やはり違う部屋だ。夜闇よりもなお黒々とした影の山にしか見えないが、部屋の調度類が仮の自室と違う事は判別がつく。

自分が何処に居るのが解からなくなっている事を自覚するが、焦りは覚ええない。それよりもまだ寝惚けてるんだな、という意識が働いた。

頼りない視界に見慣れぬ場景。すん、と鼻に感じる匂いも憶えのないものだ。それ程鋭敏な感覚を持つているとは思っていない自分の嗅覚までもが、馴染みの無さを主張してくる。それでもその事自体に焦燥がないのは、見知らぬとは言えここへは何も拉致されて来た訳ではない事を、辛うじて憶えていたからだ。

ああ、早く意識をはつきりとさせないと。まだ夜中なのに？ でもこのまま寝こけているのは何か拙い。そもそもなんで目を覚ましたんだっけ……。

グラグラとする頭で思考を纏めようとするが上手くいかない。…と、起き抜けの呆けた意識と対照的に過敏になった感覚が、自分が目を覚ました原因を捉えた。

「……巖寿よー 巖寿よおお……」

それは、この邸の現在の主を呼ぶ声だった。幽かにしか聞こえてこないのに、何故か

意識に明確に刷り込まれる様な声音。凡そ人のものとも思えない不気味さを伴った呼び声だった。

全くありがたくないが、怖気に震える事で眠気を篩い落として覚醒する事が出来た。最悪と言つていい目覚めだろう。

「ホラー物だと、不用意に確認しに行つた登場人物は高確率で死ぬんだよなあ」

ぼやきながらも寝台から身を起こす。漸くはつきりしてきた意識で見渡すそこは、屯騎校尉公邸に用意された一室だった。

益州巴郡より旅に出て、混乱する漢中かんちゆうを避ける為に荊州を抜けるルートで洛陽まで辿り着いた時には、目的の人物はその避けた漢中へと外征に出ていて会えず仕舞いだつた。

どうしたものかと思つたが、主の実家からの客人をただで返す訳にはいかぬと、公邸の留守を任されていた従僕達に引き留められここに逗留する事となつたその最初の晩の出来事である。

一刀は手早くフランチェスカ学園の制服を羽織ると、護身用の剣を片手に、声が聞こえてきたと思しき中庭へ向かう為に部屋を出た。夜闇の室内から外へ出ると、僅かだが闇が薄らぎ少しは視界が利くようになった。空を見上げれば、頼りない半月が睨め付ける半眼の様に見下ろしていた。

「……月まで不気味に見えてくるな」

「なに頼りない事言うてんの」

独り言に返事を返され、ビクツと振り向けば、寝間着姿に特徴的過ぎる穂先を持つ螺旋槍らせんそうを担いだ曼成が此方に歩み寄つて来ていた。

「真桜も起きたのか」

「あない底冷えする声で呼び掛けられたらおちおち寝ても居れんわ。まあ、ウチらが呼ばれた訳やないけど……」

二人並んで客亭の小門までそろそろ進みながら、その先に続く回廊と庭園に目を凝らす。風もなく、虫の音もしない静かな庭園。不自然なほどに何の気配もしない。先程の呼び掛けは幻聴だったのか？ と考えそうになるほどの静寂が布かれている。ここに出張つて来たのが自分一人だけであったなら、そう結論付けて寝室に戻っていた事だろう。

「なんやと思う？」

「なに、つて言われてもなあ……。取り敢えず、人つぼくはない、かな？」

「……氣い滅入るわあ」

「こそこそ二人揃つて門の陰に身を潜ませながら周囲を窺う。と、曼成が小さな声で問い掛けてきた。此方も声を潜めて応える。自分で言つて何言つてんだと思うよう

な内容だが、曼成も否定することなくげんなりとぼやいた所を見ると、どうやら自分と似たような心情に陥っているらしかった。

来る世界間違えてるのかな？

突拍子もない考えが不意に沸く。間違えていると言えば、そもこの世界が自分の知る三国志と比べて大いに間違っているのだが、それにしても、いきなりジャンルが変わってしまったかの様だ。いや待て、演義にも仙人が出て来て不可思議な術を披露したりするし、出演作『封神演義』と間違つてない？ と聞きたくなるような敵キャラも出てくるし、案外ホラー展開もありなのか？ ……いや、ないな、ないない。

ぶんぶんと頭を振っておかしな考えを振り払う一刀を、怪訝な表情で窺う曼成。その視線に気付き、気まずげに咳払いを一つ、改めて深夜の庭に目をや、ろうとして全く違う所へ吸い寄せられた。

普段着よりも寝着の方が露出度が減るというインモラルな違和感に包まれながら、襟元から覗く豊満な双山に視線が引き寄せられる。この暗闇の中、半月の頼りない朧明かりでも白く映えるそれは、健康優良青少年のハートをがっしり驚掴みする魔力を放っていた。これは致し方ない。

「な訳あるかいな。ウチの魅力にめろめろなんはしゃーないにしても、緊張感無さ過ぎやで」

「う……!? ご、ごめん」

「まあ、ええわ。おかげでええ具合に力抜けたしな」

一刀は流石に節操がないと猛省するが、曼成はくくつ、と小さく笑いを漏らし満更でもなさそうな様子だ。

憎からず思っている男が、自分に女を感じているのだ。嫌な気分になる筈など無い。こんな状況でもなければ悦んで押し倒されたいところだが、生憎と向こうの闇の中に何が潜んでいるかも判らないこんな処で乙女を捧げるつもりはない。

全く、本当に状況を考えて欲しいものだ。もつと違う時ならば自分が一番乗りだったのに。そもそも、ここまでの旅路でいくらでも機会があつたというのに、よりにもよつて今この時にだなんて、この男は……。

すまし顔でその実悶々としながら、曼成はそれを吐き出すように、或いは誤魔化すように軽口を叩いた。

「ほんま大物やな、一刀はんは」

「いや、自分でやらかしといてなんだけど、その評価はおかしいだろ」

確かにそうかも、と二人目を合わせ、くすりと笑い合う。不穏な暗闇の不気味さを忘れるほんの一瞬の隙間。その隙間を狙い澄ましたかのように再びあの呼び声が響いた。

「……巖寿よー 巖寿よおお……」

反射的に昏い庭園を振り向く！ しかし、そこに声の主らしき存在を見出す事は出来ない。声も、近くもなく遠くもないところから、大きくも小さくない音量で、なんとも曖昧な、現実味を欠いた響きであった。

「あく、もう、なんやつちゆうねん」

「やつぱり、人じゃないよなアレは……」

「洛陽は魑魅魍魎がうようよしとるつちゆうんのも与太話やなかつたんやな」

「それは比喩だと思っけど……」

こんな時でも軽口を叩ける曼成に、頼もしきを感じながら応じる一刀。そこでふと気になった。

「ところで、なんで慶祝さんを狙ってるんだらう？」

狙っている、という表現が合っているのかどうかは解らないが、少なくともあの声からは良い印象は抱けない。

「なんやろなあ。桔梗様のお嬢の事は正直よう知らんけど、桔梗様や焰耶はんの話聞くと限りでは化け物モンと因縁あるようなお人とは思えんけども……」

「人じゃなくて、邸に取り憑いてるとか？」

「たまたま今の主人がお嬢やから？ うーん、どうなんやろ。そんな幽霊物件、高級武官に宛がわへんやろ」

「そりやそうか」

何となく気になったが、当然答えは出ない。それが余計にもやもやとするのだが、余計な思索に耽る余裕は不意にガサリと鳴った葉擦れの音に追い遣られた。

思わず得物を握る手に力が籠もる。音の出所を見極めようと庭園を注意深く観察する。ガサリ、とまた鳴った。木だ。庭木が風に揺れて枝葉が音鳴らしたのだ。……いや、違う。

「風もないのに……」

意識せずまろび出た眩きに反応するように、一本の木が大きく揺らめいた。違う、それも違う。

それは木ではなかった。樹木のように痩せ細った3m程の巨人であった。木の洞うろのような顔、樹皮の如き肌、節くれ立った長い腕、虎の腰巻から伸びる一本足には全く似合っていない赤い靴。それは本来南方の山中に祀られる樹怪、山？シャンシアオ *194であった。

樹怪は小器用に一本の足で此方に歩み寄って来た。窺うように、確かめるように、ゆつくりと、ゆつくりと。

「うひい、ほんまに化け物やないか!」

弱気な呻きを漏らしながらも、手にした螺旋槍を構える曼成。柄の先端、口金部に取

り付けられた絡繰りをガシャンと引いて螺旋槍を起動させた。

一刀はこの一連の手順を見る度に、ポンプアクション式のショットガンを連想する。前床フオアエンドの様にスライドさせて螺旋槍の穂先を始動させるのだ。と言つても、ロボアニメのドリルの様に高速回転する訳ではない。スライド回数を増やせば、回転力は徐々に上がるが、それよりもこの螺旋槍の回転は敵、或いは構造物を突き穿つ事で推進力を得て回転を増すのだ。突撃によつて螺旋力（曼成は好んでこの語で語る）を増し、螺旋力が上がれば突撃の威力が更に増加する。見た目通りに中々凶悪な個人兵器である。

曼成は念入りに前床をスライドさせ、螺旋槍を樹木との合いの子の様な巨人に向けた。その淀みのない動きからは先の言葉ほどの狼狽は見取れない。一刀にはいつも通りに見えた。

その様子に安堵を憶えている事に気付き、自身も剣を抜いた。情けないな、と思いつながら。確かに彼女の方が荒事には慣れてるし、実力も上だ。だが、このような奇怪な存在を向こうに回して立ち回った経験は流石にあるまい。

残念ながら、ここは俺に任せろ！　なんて格好良くは言えないが、それでも曼成の後ろで縮こまつてなどはいられない。せめて、並び立つて怪物に立ち向かわなければ、余りにも情けな過ぎて男の一分が立たない。

すうはあ、と意識して呼吸を整え、氣迫を込めて正眼に構えた。

真桜は油断なく怪異を待ち構えながら、精悍な表情で剣を構える一刀を横目に捉える。普段は朴訥な優男然とした一刀がこうして時折見せる男の子な一面が、真桜はたまらなく好きだった。判り易く気分が高揚している自身に、ウチも大概緊張感ないなあ、と隣立つ相棒に聞こえないように呟いた。

どのみち、被せる様に響いた怪物の不快な声の所為で少年には聞こえなかっただろうが。

「……厳寿うううううう？ ううーうーううう？」

のそり、と間近に迫った樹怪が何故か一刀の方に顔を向けながら、何度も口にする名をまた挙げた。それが真桜には妙に引つ掛かった。

なんやこいつは、厳寿が男が女かも知らずに探しとるんか？

だが、その疑問は取り敢えず差し置いた。置かざるを得なかった。次に呟いた怪物の言葉が耳朶を叩いた瞬間に、真桜は螺旋槍を突き出し突進した。

「……………み…遣いいいいい？ い？」

「どおりやあああああ!!」

気合い一閃、螺旋槍の穂先は過たず樹怪の腰を捉え、一気に貫いた。一刀が樹怪の言に呆氣に取られている間の出来事だった。

刹那の決着。人の感覚からすればそうだ。だが、相手は人智及ばぬ化外の生。綺麗に上半身と下半身に泣き別れた樹怪はそれでも活動を止めなかった。

上半身は崩れ落ち様、長大な腕を振るつて真桜を横薙ぎに吹き飛ばした。下半身はゆらゆらと倒れそうになるのを堪えている。あれはもしかして、独立して別々に動き回るのか？と嫌な予感に一刀の背中に冷たい汗が伝う。

今や二つとなった怪異に剣を向けながらも、ちらりと吹き飛ばされた真桜を窺えば、螺旋槍を支えに立ち上がるうとしており、大きな怪我はなさそうに安堵の溜息を吐いた。そこで邸の本堂の方からガヤガヤと人の気配を感じた。そちらの方向に振り向けば、チラチラと灯りが瞬いているのが確認できた。従僕達が異変の様子を確認しに来たのだ。

不味いな、と一刀は考えたが、この邸に従事している者は皆、元は義勇兵であり、現在には厳慶祝の部曲として活動する者達だ。荒事には一刀よりも余程慣れていた。無論、異形の化け物との戦闘経験のある者は居なかつたが……。

「一刀はん!!」

真桜の絶叫に反射的に退いた。それが寸でこのところで妖樹の一撃を躲す事となった。

振り下ろされた五指が深々と回廊の石畳を貫くのを見て、一刀は身を包む空気が二、三度冷えたような錯覚に包まれた。

「御遣いよおおお……」

「……俺が狙いなのか？」

腕立て伏せの要領でゆっくりと上体を引き起こしながら、妖樹が呼び声を上げる。攻撃の鋭さと、今の動きの緩慢さに、腕力があるのいかどうにもチグハグな巨体の妖異から更に二、三步距離を開けながら、一刀は沸き上がった疑問を口にした。

話を通じるようには思えなかったが、つい問い掛けてしまった。最初は確かに厳慶祝を狙っていた筈だ。しかし、今やその標的は天の御遣いに移っている。何故だ。どうにも繋がらない。二人の間になんの共通点があるというのか……。

だが、今はそんな疑問に思考を割いている余裕などなかった。

ふらついていた下半身が落ち着くと、そのまましつとりとした足取りで歩み寄つて来た。身体の下半分だけ、という異常もさることながら、独脚で歩くという条理を逸脱した移動法に、脳が目の前の現実を拒否しようとするのを抑えて一刀は怪物と対峙した。

二対一の構図は不味い。目の前には上半身、一刀から見て右側から回り込もうとしている下半身。左側、4 mほど向こうには立ち上がるようにしている真桜。

まず真桜と合流する。上半身と常に正面から向き合うように摺り足で横回りに真桜

をかばう位置まで回り込み、そのまま、相対したまま後退する。その頃には真桜は完全に立ち上がっており、上半身もこちらに向き直っていた。下半身は大回りで上半身の隣に立とうとしていた。

「大丈夫か？ 真桜」

「あゝ、なんとか。全く、化け物ちゆうのは随分としぶといんやな。なんであれでまだ生きとんねん。つちゆうか、どないしたら死ぬんや？」

「……定番だと、やっぱり頭を潰す。とかかな」

「天の国って、結構『でんじやらす』などこんなか？ 化け物相手の定番なんぞあるんかいな」

「あー、いや、実際に対怪物戦があつたりするわけじゃないんだが、なんというか、その……」

「ま、なんでもええわ。他に方策もない事やし、頭狙いでいこか」

「ああ」

にじり寄る怪異に武器を向けながら、手早く方針を纏める。しかし、決定的な部分で意見が食い違った。

「ほな、ウチが上半身をやるさかい、その間、一刀はんは……」

「いや、俺が上半身を引き付ける」

「?! 何言うとんのや!」

「どのみち、あいつの狙いは俺だ。上も下も、俺に襲い掛かって来るのは目に見えてる」
「だからって……!!」

上下揃って近付いてくる樹精。人の間合いでは遠いが、巨体の腕は長く鋭い。もう幾許も猶予はない。

「膝を穿てば多分動きを封じれる。正面から頭を狙うよりも横合いから刺した方が容易いはずだ!」

言いながら、左前方に駆け出す一刀。最早反論の時間すらもなく、否応なく真桜は一刀の案に乗るしかなかった。上半身は右を向いてその長腕を振り上げた。下半身は馬鹿みたいに上半身を中心に右回りで旋回している。

だから、そのまま待ち構えた。真桜の正面に来てはまだ動かない。恐るべき五指が一刀に何度も振り下ろされても動かない。寸でのところで怪物の凶指が少年の横腹を掠めても、まだ動かない。護身用にと、頑強さを第一に自身が鍛えた剣が折られても、それでも動かない。不細工な一本足が更に歩を進めるまでは……。

真桜の左斜め前方、螺旋槍の穂先と、樹怪の膝と頭部が一直線に並んだその瞬間、真桜は遂に解き放たれた。巨大な弩矢となって、一撃で決着をつける為に、一刀の信頼に応える為に、惚れ直した男の命運を取りこぼさぬ為に。

樹怪の下半身は今度は膝を支点に分割され吹っ飛んだ。螺旋槍は怪物の腿とふくらはぎを削りながら螺旋力を増し、敵の本丸を捉えた。しかし、頭部へ到達する寸前、差し込まれた大きな左手に受け止められた。

「ウチの螺旋は……っ！」

だが、それでも螺旋槍は止まらない。持ち手の突進に呼応するように唸りをあげ、掌を穿つ。樹怪は穴の空いた手でそのまま槍の穂先を握り込んでくる。五本の指と、高速回転する螺旋槍が火花と異音を上げて拮抗する。しかしそれも数瞬の事……。

「只の螺旋やないっ!!」

ミシリ、と何かが軋み、怪異の手が木っ端と砕けた。

「一刀を護る螺旋やああああっ!!!」

そして遂に、全ての障害を貫き通し、洞のような顔に、最後まで愛しい男を付け狙った。そのこめかみに衝き刺し、穿ち、削り、消し飛ばした。

翌日、ひどく爽やかな秋晴れのその日、一刀達は来客を迎える事となった。

その為、家僕達は早朝から忙しなく働いている。

前夜の痕跡を消す為だ。突如出現した怪異の事に關しては、此方が何か言いだす前に当然のように緘口令が布かれた。主人の邸に化け物が出たなどという風聞が流布するなど許される筈がないと、一致団結をみせた家僕達の様子に、未だ見ぬ嚴顯義の一人娘に対する印象が上向いたのと言うまでもない。

従僕達もあの樹怪が自分達の主を探す声を聞いて隊伍を整えて出てきたのだが、どうやらその後で天の御遣いに狙いを変えたところまでは聞き及んでいないようだった。一刀としては正直、胸を撫で下ろしたいところだが、何故後半の呼び声が彼等に届かなかったのかは解からなかった。目の前に標的が居たから、無闇と声を響かせる必要がなかったからなのかな？ くらいの考えを及ぼすのが精々だ。

怪異の死骸は、幸いに砕けた樹木の残骸に酷似していたので処分には思ったほど手間取らなかつたが、戦闘痕はそうもいかず、園丁の手が足りないが外部の職人を呼ぶわけにもいかず苦戦していた。また、大きな一枚岩で造られていた石畳なども即座に手配できず、損傷した部分だけ複数枚の石板で応急せざるを得なかつた。

本来ならば、このような事態で客を迎えるなどあり得ず、そもそも主人不在のこの邸に来客が重なる事が普通はない筈のだが、その主人が『何かあつた時には』と頼んでいた友人が訪ねてくるというのだから、追い返す事も出来なかつた。

もとより、一刀達の訪問を受け、この友人に声掛けたのが従僕自身なのだ。文句の言

いようもない。まさか、忙しい身の上の彼女が次の日にはもう訪ねてくるとは思っていないが。

そして、事前の連絡では昼頃訪ねてくるという話だったが、実際にはそれよりも少々早く訪問して来たのは、巴郡で厳慶祝と友誼を結び、現在は宮中で侍御史を務める董幼宰であつた。

「何事かあつたようだが、それは解決したのか？」

「え、ええ、まあ、はい」

本堂の応接間で簡単な自己紹介の後、運ばれて来たお茶で唇を湿らせて直後の幼宰の第一声に、一刀は少々キョドリながらも返事を返した。

「不躰で申し訳ない。この子達が随分と興奮していてな」

そう言つて、幼宰は脇に控える二頭の大型犬の頭を優しく撫でた。慶祝の実家では魏文長が居た為、正門で家僮に預けていたが、ここでは遠慮はいらないから、と親友に言われており、幼宰は二頭の愛犬、劍司と秤司を常々そうしているようにこの応接間にまで連れ歩いてきた。

犬の鋭敏な感覚が怪異の残り香でも嗅ぎ取つたのかな？ と一刀は感心し、同時に警戒もしたが、幼宰はそれ以上追及する積りも無いようで、話を次に進めてきた。

「巴郡から桔梗様の使いが来たと聞いて居ても立つても居られなくなつてな。昨日、洛

陽に到着したばかりで疲れているだろうに悪いとは思うのだが、巴郡の近頃の様子などを聞かせてもらえると嬉しい」

「はい、それくらい喜んで……」

「あ、ほな、ウチも最近の中央の事情を知りたいんやけど。桔梗様から頼まれとるんよ」「矢張り、桔梗様も気に掛けておられるか。勿論、私の知る限りの事を話すよ」

「それと、ウチ、こんなんやから敬語とか苦手なんやけど、堪忍してな」

「もとより私などに敬語を使う必要はないさ。ここには中央官として顔を出している訳でもないしな」

見た目の印象よりも割とフランクな人だな、と一刀は幼宰の人物像に修正を加えながら歓談を始めた。

まずはより詳しい自分達の話から始まった。自身が居ない間に現れた巴郡の新しい能吏の事は矢張り気になるようで、随分と喰い付いて来た。ただ、一刀は官職に就いてもおらず完全な食客状態の為、説明に少々苦慮した。

昨晩の事もあり、天の御遣いであるという事は秘密にしようと曼成と話し合っただけで決めた。元々、自分がそんな大層な肩書を背負うような存在であるとの意識など殆どなかった為、願ったりであった。服装もフランチエスカ学園の制服ではなく、質は良いが特に特徴のない漢服を着込んでいた。

因みに、旅の途上でもこの格好で通ってきた。フランチエスカの制服はとにかく目立つ。あんなものを着てふらふらしては、無駄に匪賊を呼び寄せるだけだと曼成に言われたからだ。数少ない元の世界との接点であり、この地に來てから愛着の増した一品ではあったが、無用なトラブルを避ける方が余程大事なので、特に文句なく従った。ただ、洛陽入りしてからは、押し出しがきくという事で着用していた。實際、どこぞの貴族の子息でも思われたのか、門亭などの検問も緩いものであった。

次に巴郡の現状だが、郡内は非常に安定している。だが、州内にまで視点を広げると話は変わってきた。益州牧劉焉は沈黙を保っているように見えて、その軍事力は日に日に肥大化しており、軍部には見えない緊張の糸が張り巡らされている。そして漢中郡の変事である。これには本来この場に居る筈の嚴慶祝が討伐に向かつており、宮中の噂では討伐が成れば中領軍への累進が内定しているという。

そこから宮中の話に移行した。その話題は何と言っても皇帝の病状だ。もう既にその存命は絶望視されており、早ければ数日中にも崩御するかも知れないとのことである。本来ならば、董幼宰はここへ顔を出す暇もないのだが、その玉体に何かあればそれこそ訪問する隙間など完全に消し飛んでしまう為、無理を通して今日この場へやって來たのだった。

天子崩御となれば、当然、次期皇帝の座に誰が、どちらが座る事になるかであるが

……。ここまで話して、幼宰はしばし黙考した。

「どないしたん？ 情勢は混沌としとんの？」

「……いや、恐らくはだが、協皇女殿下が戴冠なされると思う」

「え？」

幼宰の出した結論に、一刀が反射的に声を上げてしまった。しかし、幼宰はそこに特に疑問を差し挟まなかった。宮中でも弁皇子戴冠が有力視されているからだ。だが、一刀は何故幼宰がその結論に達したのかが気になった。

一刀の知る歴史では、確かに最終的に劉協が皇帝となる。漢王朝最後の皇帝に。しかし、劉弁もまた皇帝の座に昇るのだ。ほんの一時ではあるが、確かに。

その事を知るの是一刀だけであるが、曼成もやはり同様の反応を示した。

「下馬評やと皇子殿下優勢らしいやん。幼宰はんはなんで皇女殿下が勝つと思うとるんや？」

「私の考え、という訳ではないのだ。黄門侍郎殿が、皇女殿下こそが皇帝の座に相応しく、また事実そうなると仰つてな。私にもどういふ経緯を辿るのかは皆目見当がつかないが、最終的には此度の継承争いは協皇女殿下の戴冠で決着するのではないかと、な」

「……はー、その黄門侍郎様はよっほどの智者者みたいやな」

「時折、恐ろしく感じる程だよ」

「誰なんです?」

「荀公達殿だ」

出てきた名前の大物振りに瞠目して驚きを露わにする一刀。曹操に仕えた稀代の戦術家、荀攸じゆんけう*195。そう言えば、曹操に仕える前は朝臣だったつけ。と記憶を掘り起こす。

「知っているのか?」

「え、ええ、まあ」

「一刀はんは人材 “まにあ” やから」

「まにあ?」

「あー、方言や。気にせんといて」

「……ふむ」

一刀の反応に幼宰が問うと、曼成が茶々を入れるがドツボに嵌りかける。一刀が会話の中で時折漏らす天の言葉を入った曼成が、覚え込んで自分でも使い出したのだが、普段は二人きりで話をする時しか天の言葉を使わない。だが、最近はずっと二人きりの状況が続いていたので、つい幼宰の前でも口を滑らせてしまった。

特に追及してくる幼宰ではなかったが、彼女の親友がこの場に居れば、かなり大きな引っ掛かりを感じていることをその表情から気付いたろう。しかし、今日初めて彼女と

出会った二人には、殆ど表情の揺らがない董幼宰の内面は全く推し量れなかつた。

その後、洛陽の現状から各地の情勢、市井の噂、漢土内外の異民族の動向まで、互いに知り得る事を多く語り合つた。

気付けば陽が傾きかける刻限となつていた。流石にそろそろ戻らねば拙いな、と幼宰が呟き、そろそろお開きかと言う空気が場に流れた。

「ところで、二人は薜華とは面識もないだろうに、何故使者に選ばれたのだ？」

「え……つと、そう言えば、この事を頼まれた時に桔梗さんに聞いたんだけど、結局うやむやになつて俺も理由は分からないな」

「曼成は察しがついていそうだな？」

最後に振られたこの話題に、曼成はつい眉根を寄せてしまつていた。直ぐに表情を消したが、見咎められていたようだ。うゝ、と口の中で呻り、あて推量やで。と前置きしてもごもごと切れ味悪く語り出した。

「桔梗様は巴郡の名士で、地元豪族嚴氏の当主や。そのお嬢が正式に中央に仕官した。独り立ちしたつちゆうわけやな。もう、どこに出しても恥ずかしゆうない一人前つて事や」

「ほう」

曼成の遠回りな言いように、幼宰は実に面白げに相槌を打つた。一刀は、（曼成もだ

が) 今日初めて幼宰の表情が動いたのを見た。そして、幼宰は興味深そうに一刀の顔をじつと見詰めるのだった。

「ええつと、つまりどういう事?」

「君が薙華の婿候補という事だよ」

「……………ええつ!!」

青天の霹靂。正に雷に撃たれた人の様に硬直し、動きを止めてしまった一刀を横目に眇めて、曼成を深く深く溜息を吐くのだった。

「ほんま、一刀はんは助兵衛の癖に鈍ちんなんやから」

「君をお供に付けるとは、桔梗様もなかなか酷な事をする」

「ウチは温情や思う事にしとる。ほんまは焰耶はんも一緒に来させたかったんちゃう?」

「あの焰耶殿が?」

「表面上はツンツンしとるけどな。ウチの眼から見れば一目瞭然やで」

「それはそれは。北郷、君は実に興味深いな」

「ちよ、ちよつと待つてくれ、真桜。既に頭がパンクしそうなんだ。これ以上畳み掛けないでくれ」

「まあ、ウチは最悪。妾でもかまへん。けどな、三番目より序列は絶対下げんからな!」

「それはつまり、まだ他にもいるのか……」

「ねえ、お願い。聞いて？」

そこには最早前夜の緊迫など微塵もなかった。

このようにして、一刀の洛陽滞在は幕を開けた。そう、この後、一刀は暫く洛陽から離れられなくなった。洛陽が、いや、大陸が喪に服する事になったからである。

その間にも時代は流れ続ける。一刀が足を踏み入れた航路は、未だ彼をどこへ運ぶのかを明らかにしない。

第十九回——了——

北郷一刀と李曼成が山？を撃退したその時、屯騎校尉公邸の敷地内の片隅で、事の推移を見守る者がいた。いや、見守るとするのは正しくないだろう。齒軋りしながら、遠く曼成と無事を確認し合う北郷一刀を射殺さんばかりに睨み付けているその男こそが、この事態を引き起こしたのだから。

その背後、夜闇の中に黒々とした褐色の巨体が浮かび上がる。圧倒的な存在感。しか

し、男は気付かない。破滅が形を成して降臨しているのに、意識を全て北郷一刀に注いでいる為に気付けない。その所為で死神を招き寄せたというのに、想像すらしていない。だがそれも仕方ない。男はそんな事は聞いていなかった。実際にその肩を叩かれるまで、もう何もかもが手遅れになった今この瞬間まで、男は知る由もなかった。振り返って初めて知った。

絶望は、笑顔で迎えに来ることを――。

四時間
二時後、艶々とした笑顔の巨漢が見事過ぎる肢体を惜しげもなく夜気に晒して屹立していた。

「さて、どうしたものかしらね」

良い汗を掻いた後の清涼な肌艶を確認しながら呟く。

「あの娘を狙ったのなら、ぎりぎり見逃さないでもなかったけれど、ご主人様まで標的となると、彼女を狙う理由も見過ごせないものであったって事よねん」

ゆつくりと身体の調子を確認する様にポーズを決める。ダブルバイセツプスからラットスプレッド、サイドチェストへと、雄大な大河の流れを思わせる流麗な動きでその美を高めていく。

「ここで会うつもりはなかったけれど、……いえ、やっぱり止しましょう」

一通り基本のポージングを終えると、ふう、と一息吐いて、足元に転がっていたものを肩に担いで軽く跳躍した。重力を感じさせない動きで塀を飛び越えると、夜の終わりに紛れる様にその姿を消した。

——管理者は管理者らしく舞台裏で事を済ませましよう。この世に生きる全ての者が己が生を、即ち己が物語を全うできるよう整えるのが使命なのだから。

だからご主人様、もう少しだけ待ってねん。直ぐに雑事を済ませて今度こそ会いに行くからん——

第二十回 天子崩御

薨華率いる偽天征伐軍は、儻駱道とうろくどうを通り漢中郡治南鄭県なんていけんへ向けて進軍していた。この街道は峠が多く、相応に険道である。

今、一際険しい峠を越えようと、薨華の幕臣と屯騎兵は刺すような緊張感を纏って黙々と歩を進めていた。その、最早殺気とも感じ分けの付かぬ鬼気に、此度の征伐の為に徴兵された者達は訳も解らず憔悴の気配を漂わせている。この一部には薨華の部曲も混じっており、彼等もピリピリとしている為、近くに配された者達は堪ったものではなかった。

普段であれば、こういった空気をいち早く感じ取り和らげてくれる黄仲峻も、自身の不機嫌な雰囲気を外に漏らさぬように努めるのに精一杯で、そこまで気が回らずにいる。呂子明は一団の中で一番殺気立って張り詰めている。

皆の苛立ちを肌を感じ、薨華は深く溜息を吐いた。せめて道がもう少し平坦であればなあ。そう思うが、そもそもこの街道を選択したのも、この空気を生み出している元凶の為であった。

五丈原ごしょうげんと褒中県ほうちゅうけんを結ぶ褒斜道ほうしゃどうは峠も少なく閣道かくどう(ここでは栈道の事)の整備も行き届

いており、南鄭県に程近い地点へ出る為、この街道を通りたかつたが、閣道の多さから断念せざるを得なかつた。

輿車よしやが通れないのである。峠を越える道の困難さは何とかなつても、物理的に輿車が通行できる道幅がないのは如何ともし難い。

結局、次点の儻駱道を使う事としたのだつた。

輿車。およそ軍行にはそぐわぬこの荷物は、十常侍蹇碩の親類が乗り込んだ大層立派な代物であつた。

下軍校尉嚴寿は、いよいよ政争が本格化しようとする洛陽から、外征に託けて親類を逃がす為の護衛を上軍校尉蹇碩から何卒と頼まれた。という事になつている。

しかも。道中の世話にはトラを指名されており、身边にはトラ（と薜華）以外は近づく事も許されないのだ。今もトラは輿車の中で、やんごとなき貴き御方の慰み者となつているのだ。

やれやれ、と薜華はまた一つ溜息を吐いた。

それを見咎めたのは、この空気の中で一人いつも通りの魯子敬であつた。

「辛気臭いですよー、薜華さん」

「ああ、私もトラに癒されたい」

「とられちゃつてますからねー。まあ、馬相ばそう*196を斬り捨てるまで我慢して下さい」

肩を竦めて応える薜華に平常の姿を見て安堵の笑みを溢し、ちらりと背後を気にしながら子敬は言葉が続けた。

「それにしても、まさかこんな難事を押し付けられるとは……。申し訳ありません」

「何謝つてんの。包が気にするような事じゃないよ」

「するような事ですすよ」

珍しく懊悩した表情を表に出して、苦しそうに吐き出す子敬。

ここまで薜華の為に精力的に働いて来たが、流石に無官のままでは限界が来ていた。屯騎校尉には（そして下軍校尉も同様に）司馬・主簿・功曹の属官が付き、その任用権は校尉自身にあった。だが、この三官にはそれぞれ呂子明、黄仲峻、黄宗文が就いていた。子敬は薜華が將軍に昇り、開府したその時に軍師に任命して欲しいと願っていた。故に今も無官の身であり、その立ち位置は屯騎校尉の私設軍師といったところであつた。

それでも宮中である程度の働きを見せていた子敬の手腕に、薜華が不満を持つなどあり得なかつた。

「だとしても、私が選んだ事だよ」

そんなものはあつて無いような選択肢ではないか。そう言おうとした子敬を制して薜華は首を横に振つた。

「私が選んだ事なんだよ。包を迎え入れたのも、中央に残ると決めたのも、包に任せた全ての事も、あの御方を洛陽から脱出させる為の手駒となったのも、全部、私が選択して私が決めた事なんだ」

「薜華さん……」

決意を滲ませた薜華の言に、子敬はそれ以上何も言えなくなった。

子敬が珍しく固まったのを見て、先の深刻な決意を微塵も感じさせぬ軽い調子で薜華は話を変えた。余りの落差に子敬が一瞬戸惑うも、直ぐに平時の調子を取り戻した。

「でだ、トラを撫でくり愛でる為にもさっさと馬相を斬りたいんだけど、軍師殿？」

「ひやわっ!? ……ふふっ、その点についてはお任せ下さい。巴鷹鏢局のお蔭で大陸西方、頓に益州の情報は質・量ともかなりの確度で入手できますからねー」

全く、こんな良い組織持ってたならもっと早く教えて下されば良かったのに、と子敬が軽く愚痴りながら対馬相戦の戦略を滔々と語り出すが、薜華にとつて巴鷹鏢局は敵氏部曲の働きの口を造り出したただけであり、大陸広域に亘る情報網を布くために開局させた訳ではなかったのだ。

それが、鏢局の存在を知った子敬によつて瞬く間に情報局としての顔を持つに至つた。特に洛陽にある分局は人員が倍に膨れ上がり、その増員全て、つまり現在の洛陽分局の半数が魯家部曲の偵知に長けた者で構成されており、各地の情報の集積が進んでい

る。

また、劉玄徳が刺史を務める豫州にも新たな支局が開局された。この事から、子敬が劉備陣営との關係を重視しているのを蒯華は感じ取っていた。玄徳に敬服している蒯華としては嬉しい限りだが、子敬が彼の陣営との繋がりを保とうとする深い理由は察せていなかった。因みに、現在の蒯華には玄徳勢と緊急で連絡が取れる手段があった。正確には、そこに身を寄せている者との連絡手段だが……。今もその連絡手段は、胸を張って蒯華の肩に止まっていた。

急速に新たな機能が付与された巴鷹鏢局だが、仕事量の増加に対する多少の遅延は発生しても、混乱は起こらなかった。実のところ、素地が既にできていたのだ。

鏢局を束ねる総鏢頭にして嚴氏部曲の私兵長の趙弘、字を子鷹が、独自に嚴氏当主嚴顯義の為に大陸各地の情勢を探っていたのだ。その精度は荒いものであったが、素地としては充分であった。

今も漢中分局の鏢師が先遣隊と連絡を取り合い、この本隊に随時情報を上げてきている。その情報を基に魯子敬が馬相の人格と軍勢を分析し、その上で偽報を流し馬相の動きを見て、そこから既に勝利への道程を見出していた。

結果、馬相の乱は下軍校尉嚴壽が漢中入りすると瞬く間に鎮圧されたのだった。

そして、時を同じくして、皇帝崩御の報が大陸を駆け巡った。

第二十回 天子崩御

秋立ちて、凜とした空気が心地良いある日の朝。南宮の玉堂ぎょくどうへ鋭い足取りで向かう二人の少女の姿があつた。

一人は益州巴郡江州県出身の武人。故郷より出でて二年と半年ほど、当時よりも背も随分と伸び、じきに七尺四寸約170cmに届こうかというところ。成長は上背だけでなく、胸も尻も随分と大きく実り、どちらも年齢十四とは思えぬほどであり、実際、周囲からは実年齢よりも上に見られていた。張三姉妹の次女に胸を鷲掴みにされながら「なにこれ!? これでちいより年下?! 舐めてんの?! ふざけてんの!!?」と激昂されたのも記憶に新しい。当人としても、近頃は身体的にはもうこれ以上成長しなくていいな、などと頻りに思っていた。

彼女の名は厳寿。親しい者達からは真名の薺華で呼ばれる若き女丈夫。この年の夏に鎮圧された黄巾の乱で名を上げ、屯騎校尉に上った新進の中央武官である。

その薺華の隣を付いて行くのは南蛮から来た少女、トラである。漢名を厳虎と名乗

り、洛陽入りしてからは此方で呼ばれる事が多くなつた。と言つても、直接姓名を呼ばれるよりは帰義侯殿だの様だのと呼ばれる方が更に多いが。

南蛮の原生林を駆け回つていた頃からは想像も付かぬ現在の扱いに、まだまだ違和感とこそばゆさの抜けない天真爛漫な女の子は、今日もいつものように大好きな薜華の隣に在つた。

南蛮で二人が出会つて以来、二人は多くの時間を共にしてきた。それはこの洛陽で薜華が正式に官吏に就いてからも変わらない。日常、屯騎校尉として殿中警備の指揮を執る時も、今日のように侍中として召し出される時も、トラは薜華の隣にいる事が出来た。宮中で供をしないのは朝議の時くらいである。

宮中の多くの者が其処に首を傾げていたが、事実としてそうだった。トラは特に疑問も持たず、今まで通りである事を純粹に喜んでいたが、隣に立つ薜華も現状に驚いている一人であつた。特に、初めて侍中として天子に召し出された時の驚愕の様たるや、常にべつたりのトラをしてなかなか見れぬ表情であつた。

流石に拜謁にまで同行するのは拙いと薜華が諭せば、伝達官が「それが、帰義侯様も御一緒に参内されるようにとの仰せです」と横合いから応え、薜華は思わず聞き返したほどだ。

薜華はその意図が全く見え、かと言つて帝の聖旨となれば従わぬわけにもいかぬ。

自身が侍中に任命された意図同様の緊張を以つて参内すれば、体調の優れぬ陛下がトヲを愛玩する為に召し出されただけであつた。ああ、私はおまけなのか。と脱力した薺華に待つていたのは、諮問という体でトヲとの出会いからこれまでの旅路の語り部という役割であつた。有り体に言つて皇上の慰み役といったところだ。

朝臣となつてまだ日も短い薺華は、屯騎校尉としての日常勤務に加えて、割と頻繁に御前に召し出されておられ、随分と忙しい日々を送つていた。しかも、侍中としての働きがこれである。

侍中とは一体……、と思わず自問してしまふ現状、しかし魯子敬はこの話を聞いても気を緩める事はなかつた。お蔭で、薺華もぎりぎりのところで緊張感を保つていられる。

今日この日も侍中としての召し出しであつたが、今日はいつもよりも緊張していた。理由はその場所にあつた。本日、呼び出された玉堂は、ここ数か月の間全く使用されていらないらしい。突然に、ぱつたりと。理由は不明。これまでの御役目から考えれば、態々そのような日く付きの堂に召し出される理由はない。伝達官も、いつもは手の空いている吏卒であつたところが、今日は宦官であつた。蹇碩の従官であろう。

蹇碩。現在の中常侍の中では主流派ではないものの、その権勢は依然強く、宮中で大きな影響力を發揮している。およそ閹人えんじん*197とは思えぬ偉丈夫で、薺華よりも三寸約7cm

ほど嵩があり、よく鍛えられた筋肉が朝服の上からでも良く判る。惜しいな、と思う。戦場で練り上げれば一角の武将となれるだろう。実際に蹇碩は上軍校尉を兼ねてはいるが、戦働きをするにはあるまい。これだけの資質を持ちながら、何を思つて宦官の道を選んだのか、薜華には全く理解できなかった。

だが、現在の権勢を見るに、武の道よりも余程適性があつたという事か。宦官としての栄達か。

蹇碩のそれ程悪くない造作を、微妙なものにしていく特徴的な静かなしかめつ面を思い起こしながら、薜華は玉堂前殿入り口に続く階段に足を掛けた。

薜華とトラが召し出される際、蹇碩は必ず同席している。これは薜華が侍中となつた経緯を考えれば当然だろう。今以つて、その意図は不明のままだ。子敬も色々と探りを入れていくようだが、結果は芳しくない。蹇碩と皇后との対立が高まつており、おいそれと首を突つ込めないのだ。それでも奮起する子敬を、薜華が自制するよう押し止めているのが現状である。

なので、実際に蹇碩と顔を合わす薜華が最もその思惑を読み解ける位置に立っているのだが、海千山千の陰謀屋の肚の内など判る筈もなかつた。そもそも、特にこちらに声掛けする事もなく、天子が薜華の話に興味深く聴いている脇で傲然と突つ立っているだけというのが常なのだ。実に不気味である。子敬にもその印象を伝える事しかできて

いない。不甲斐無くはあるが致し方ない。この手の権謀術数は薜華の才覚の外も外の事であった。

だが、問題は他にもある。蹇碩以外に二人いる同席者の内、宦官でない方の人物だ。黄門侍郎荀攸。蹇碩、趙忠ちやうちゆう*198と共に天子の側に侍る犬耳頭巾の才媛。

此方は時折薜華の話に質問を重ねてきたりもする。だからといって取っ付き易いかと言われれば、寧ろ蹇碩よりも薜華は苦手としていた。薜華に注がれる無遠慮な視線がその原因だ。全く隠そうともせず此方を観察してくるのだ。だからといって咎める事も出来ずに、非常に居心地の悪い思いをしている。

薜華からすれば、黄巾征伐の際に大將軍の傍に居たのをちらと見た程度であったが、荀公達にとってはそうではなかった。あの時、対黄巾戦最後の戦場に於いて、荀公達はそこに集った全ての諸侯から漢臣、義勇軍に至るまでの主だった人材を観察していた。無論、薜華もその内の一人であり、特に注視した一人でもあった。

切っ掛けは嚴寿軍の曹操軍への奇妙な助勢。

公達はあるが助勢ではなく足止めだと気付いていた。双方の間に何かあるのか？

はじめはその線で考えたが、薜華が劉備と真名を交わすほどの仲であると知ってその線は直ぐに消した。

浮上したのは無論、劉玄德とその一党である。

それぞれ豫州と幽州で旗揚げした二勢力が、黄巾戦で初顔合わせであったろうに随分と親交を深めていた。似たような立場であったから、以上のものを公達はそこに嗅ぎ取った。秘密の匂い、同じ秘密を共有する者同士の結束、共犯者の繋がり、そのようなものを。

決戦前の軍議で蒯華の腹心が諸葛亮の為に立ち回っていた時には、既に形の見えない疑念があった。それだけならば、目立ち過ぎている蒯華への注目を逸らす当て馬という事も有り得た。しかし、両陣営の関係は遥かに親密であった。そこへきて蒯華の立ち回りと劉玄徳の立てた手柄である。その後も、腹心が黄琬に取り入り、劉備の論功に影響を与えた。

そうして公達が行き着いたのは、黄巾後に劉備陣営に加わった宮妓の三姉妹であった。

劉玄徳と言う人物から考えると、刺史に成り上がったばかりの大事な時期に宮妓を雇い入れる、というのは非常にらしくないと感じる。兵の慰撫は確かに大切だが、他に優先すべきものが多過ぎる。調子に乗って個人的趣味嗜好を優先させるような愚物ではない。

宮妓三姉妹の存在は明らかに浮いている。

はつきりとした答えに辿り着いたわけではないが、荀公達はかなり深い所までその智

を届かせていた。

故に公達は現状に「待った」を掛けていた。この日、薺華が玉堂に呼ばれたのは、焦れた蹇碩と見極めたい荀公達の思惑が絡み合った結果であった。

そんな事は露とも知らず、その玉堂前殿に、薺華はトラと共に足を踏み入れた。

がらんとした堂内。二人以外に誰も居ない茫漠とした空間。そこに満ちる空虚な違和を特に気にする様子もなく、トラは不思議そうにきよろきよろと周囲を見回している。その隣りで油断なく、傍目には自然体で身構えながら立つ薺華は、僅かな気配を感じて奥へ続く通路入り口へと油断なく目を向けた。直後、薺華の視線の先で静かに扉が開かれ、蹇碩が姿を現した。

「こちらだ、殿侍中」

そう言つて、此方の返事も待たずに扉の奥へ引つ込む中常侍。薺華とトラは互いに目を合わせ、やれやれといった感で後に続いた。

小走りで蹇碩に追い着くと、その後方を静かに付いていく。三者の間に会話は無い。そもそも、薺華は蹇碩の声を先程久し振りに聞いた気がした。極端に口数の少ない男

だ。自分達の前でだけかもしれないが……。

暫く蹇碩の後に従つて歩けば、どうやら後殿へと辿り着いた。それならそれで、初めから玉堂後殿とまできちんと伝達すればよいものを、この一時間を掛ける事にどれ程の意味があるのか？ 薜華にはさっぱり解からなかつた。

ともあれ、薜華は後殿の御坐に座す皇帝の御前に召し出された。トラと共にいつものように跪く。

「侍中嚴寿、皇帝陛下に拝謁致します！」

「ん、立ちなさい」

「感謝します！」

「じゃ、行きましようか」

「はっ！……は？」

「へ、陛下!? それは……!」

「いいじゃん、私も観たいし」

拜謁の挨拶を済ますと、皇帝は大儀そうに立ちあがった。そして放たれた言葉に薜華は意味が判らず戸惑つたが、脇を固める三名ははつきりと狼狽した。流石の蹇碩も驚愕に顔を歪めて思い留まらせようと説得に回つた。事態を飲み込めない薜華の前で、すつたもんだの挙句、「この間は我慢したんだから今日は絶対見物する！」という皇帝陛下の

我が儘が押し通されたのだった。

なにか、皇上が観覧するに相応しくない何事かがあり、自分はそれに対処しなければならぬらしい。それも陛下の面前で、という事だけは辛うじて読み取れる。肝心の中はさっぱりだが。

「厳寿」

「はっ！」

「陛下の玉体に何かあれば、その累はお前の身一つでは済まされないと心得なさい」

「万事心得ております」

睨み付ける様な黄門侍郎の言葉に、何の事情も知らぬまま、それでもそう答えるしかない。内心腸が煮えくり返りそうになるが、表面的には億尾も出さずに従った。この短期間でこんな腹芸を身に付けた己に感心するやら呆れるやら……、それも面に出さず、先導する黄門侍郎に肅々と従った。

「にやゝ、陛下」

「ん？ 厳寿は強いんですよ？ なら大丈夫でしょ」

流石に不安に襲われたトラが皇帝にととと走り寄ると、その頭を撫でながら事も無げに言つてのけた。その様子を盗み見ながら、薺華は少しだけ気が楽になった。

荒事なら専門だ。ただ、当たり前だが得物を持ち込んでいない。出来れば、使い慣れ

た愛用の武器で挑みたいのだが、まあ、仕方ないか。と割り切つて、思考を別の方向へ向けた。

薺華が気になったのは皇帝陛下の御容体である。初めて近侍で拝謁した時よりも、調子が上向いているように見える。いや、見えるのではなく、はつきりと快復してきている。なにせ今、トラの手を繋ぎながら自らの足でゆつくりとだが歩いているのだ。当初は寝台の様な輿の上で半身を起こすのがやつとで、謁見の時間もごく短いものだった。

そうだ、と薺華はやつと気づいた。今迄は徐々に時間が長引いて来ていただけで気付けなかった。それは慣れない御役目や、話に自分でも夢中になつてしまふ事があつた為、思い至る事が出来なかつたのだ。

実際、顔色も良くなつてきており、これまでは化粧で顔色を良く見せようといっていると見せ掛けて、実際にはその逆で青白く見える様に施していたのだが、まさかその尊顔をじろじろと観察する筈もなく、薺華は今日この時まで全く気付けていなかった。

しかし今、こうしてトラの隣に居る様を見せられて、徐々に快復してきていた事に漸く気付いたのだつた。

そしてそこから更に思考を深める。何故こうもあからさまに気付かせたのだろうか？ これから自分がする事に何か関係があるのだろうか？ それとも、もつと先の事に……。

薨華の思索はそこで打ち切られた。何時の間にか中庭に出てきたのだ。薨華の思考は完全に止まった。そして、その視線は庭の一点に釘付けにされた。

そこには虹があつた。青い虹が。薨華の腰の高さほどの中空を、蛇のようにのたうつている。良く視れば、その虹には龍に似た頭があつた。

「虹ホシニ×*199よ」

「虹の龍……」

「こいつは正確にはニ×ね。温徳おんとくでん殿に出た虹は既に呂布によつて討伐されたわ」

荀黄門侍郎が剣を薨華に差し出しながら声を掛けてきた。更に籠に入れられた黒い雌鶏を持ち出して話を続ける。

「鶏血は確かに効果があつたわ」

「そうですか」

「ただ、流石に尋常の獣を斬り捨てる様にはいかないみたいね」

「ならば死にきるまで斬り刻むまでです」

「ふん、頼もしいじゃない」

それは薨華が張三姉妹の妖術士から聞いた話だった。幽体などの物理的な干渉を受けない怪異でも、刃に黒羽の雌鶏の血を塗れば一定の効果を見込める、と。

この対処法は、薨華が南蛮での怪鳥退治の話を披露していた時に、黄門侍郎の質問を

受けて開陳したものだ。

あの時は、世にも珍しい怪物退治譚に喰い付いたのかと思つたのだが、何の事はない。目の前の脅威を取り除くための情報欲しがつていたので。

そして、雄の虹龍は友人の飛將軍が見事退治したらしい。ならば、眼前のもう一尾も任せれば良いところを、態々薺華に御鉢を回してきた。これは詰まる所、試されているという事でいいのだろうか？ 或いは、これまでの召し出しで一定の信用を得たのか？ 確かにこんなものが徘徊しては玉堂は閉鎖せざるを得ないだろうし、下手な人物に漏らす事も出来ない。故に今この場に自分が立っているという事実は、一歩前進したとみていいのだろう。それと同時に、一歩深みに嵌まつた訳でもあるが……。

それにしてもこいつはなんだろうか？ 何故宮中に出現したのか。妖異が出現するに相応しからぬ所在と薺華には思えたが……。

「お聞きしても？」

「『后妃が陰ながら王者を脅かす時、天が^{げいしや}者を投げうつ』だそうよ」

薺華の質問に、実に忌々しそうに^{げいしや}を睨み付けながら答える荀公達。その答えに、薺華も顔を歪めて^{げいしや}を睨んだ。その薺華の様子を盗み見ながら、公達は薺華への心証を一つ上げたが、薺華が真に反応したのは、天が投げうつという部分であった。

黄門侍郎から受け取った雌鶏を暫し瞑目してから斬り捨て、その血を劍身にたつぷり

と滴らせ、険しい表情のまま虹龍へと向かった。

薙華の接近を気取った \square はその鎌首をもたげて迎え撃った。

「へえ、すごいすごい！」

「にや！ 姉ーはとつても凄いですにや！」

まるで活劇の様な薙華の大立ち回りに、無邪気に喝采を上げながら観覧する帝とトラ。

その二人の脇に侍りながら、荀公達は特に感心する事もなく薙華の戦いぶりを眺めていた。先の戦場での戦働きから、この程度は使えるだろうという予測から大きく外れてはいない。ただいつものように、自分の観察眼の確かさを確認する結果になっただけだ。

公達の注目はその武ではなく、薙華の表情に注がれていた。明らかに苛立っているのが判る。時折、何事か呟いてもいる。その心情が我慢しきれずに吐き出されているのだろう。その、意図せず零れ出た薙華の心の内を、公達は正確に読唇していた。

天が投げうっただと？ ふざけるな 天意がこの王朝に駄目出しした？ 勝手に決

められてたまるか

公達にとつて有意な発語は以上のようなものだった。

それ以外の、より個人的な吐露は流した。だったら私は何なんだ！など言う他人の自己探求には一切興味はない。

薺華は確かに憤っていた。

天に決められる。というのがどうにも我慢できなかつた。幼い頃からそうだった。何故なのかは、自分でも明確に言語化する事は出来なかつたが、兎に角厭だったのだ。

天命の外からやって来た少女にとつて、それは見えない敵と言つてもいいのかも知れない。誰にも理解されない敵意、或いは叛意。

そして、少女自身気付かない苛立ちの理由がもう一つあつた。『天』という概念から連想するとある存在。天の御遣い。それは、見方を変えれば漢王朝の終焉を告げる使者と言えるかも知れないという事。新しい何かが始まる時、それ以前の古きものが終わりを迎える。その為の先駆け。

同時に、彼がそんな舞台装置ではないと信じた理想が、心の奥深いところから軋みを上げながら先の苛立ちに衝突する。

うねりながら拮抗するもやもやとした重い黒煙のような感情の大波が、心の奥から表

層に飛沫を飛ばし、薺華は「ああ、そうだ」と思い至る。

彼は何時だつて何処だつて、自分が辿り着いた居場所、ただ自分にできる精一杯の事をやって来たんじゃないか。

虹であり、龍であり、天の意志である幻獣の頸を斬り飛ばしながら、薺華は古きものの中で抗う道の上に自分が居る事を漸く真に理解した。それと共に、自分もこの場所で、ただ自分にできる精一杯の事をやるしかない事も。

彼女の戦が、本当の意味で始まった。

それは、薺華が自身の意志で決めた戦であり、意図せず予期しない敵に対する宣戦布告にもなっていた。彼女が己の戦の裏に蠢く敵を知るのは、もう少し後の事となる。

今この時、薺華の頭にあつたのは、これからの戦の困難でもなく、勿論知る事のない敵である筈もなく、今現在の状況の事ですらなかつた。

彼女はただ、こう想っていた。

——嗚呼、北郷君に逢いたいな

その泡沫の想いは、矢張り意識せずに浮上し、思い至ると同時にふわりと弾けて消えた……。

後には、ただ胸が締め付けられそうになる切ない余韻のみが残され、彼女は、今し方、自分が何を想ったのか、それに行き着く事が出来ずに小さく困惑した。

第二十回——了——

「陛下はこれよりお隠れになる」

蹇碩がいつもの陰鬱な面構えでそう言った時、薜華は反応を示す事が出来なかつた。

虹を退治し、再び玉堂後殿に戻り、皇帝が御坐に腰を落ち着け、全員が謁見当初の位置に付いて、先ず放たれた第一声がこれである。

不敬などという軽い言葉で済ませて良い言ではない。にも拘らず、言葉の意味が判つていないトラを除外するとして、自分以外は帝自身も咎めようもしない。それはつまり、全員が承知の上であり、自分はその謀劇に組み込まれたという事。

薜華は考える。必死に頭を振り絞つて思考を高速で巡らせる。

『これよりお隠れになる』つまり、予定として死ぬ。死の偽装。魯子敬が蹇碩と交わした時点での己の役割。今、この時点で求められている役どころ。

「外征先は何処になりましょう?」

「折良く…、などとは言つてはいけないのだけれど、漢中で変事が起こったわ。馬相とかいう下らない賊が、よりもよつて天子を自称して調子に乗っているの」

まずは合格点、といった雰囲気をつたせた声色で黄門侍郎が答えた。

下軍校尉としての外征。子敬が蹇碩に取り付けた約定。子敬の予想では、最大の黄巾残党が集結しつつある青洲か、長年に亘つて異民族と匪賊に悩まされる并州のどちらかが可能性が高いと言つていたが、どちらも今回の任務では除外されるのは当然だろう。首尾よく賊を討伐できたとしても、州内が荒れ過ぎている。そこへきて漢中の騒動だ。成る程、「折良く」か。

それにしても、蹇碩と荀攸。この二人が組んでいたとは驚きだった。宦官と組む清官が居ようとは考えもしなかった葬華である。荀黄門侍郎は十常侍蹇碩への牽制で同席しているものだとばかり思つていたので。

荀公達はそのらに転がっている名ばかりの清流派とは違う。ただ濁官と蔑む宦官勢と反目しているだけで、清流と見做されている、或いは自称しているだけの連中とは違う、一握りの本物の清官である。それが、宦官の頂点の一人と共に皇上の脇に立つている。

自分の単純な頭では、宮中の複雑怪奇な勢力図を把握するのは無理そうだ。少なくとも

も、一朝一夕とは絶対にいかないだろうと、蕤華は心中独り言ちて改めて二人の怪物に意識を移した。

そこを狙ったわけでもなからうが、丁度その瞬間に蹇碩が言葉を掛けてきた。

「漢中には五斗米道なる巫医の集団があるそうだな」

「はい。私の知己にも一人、凄腕の巫医がおります」

「張脩ちやうしゆう、といったか」

何処まで調べ上げてるんだよ……。何とか表情を保ったままげんなりしていると、代わって荀公達が話を続けた。

「連絡は取れる?」

「手紙、……速達を出す事は出来ます。常に巴蜀と漢中を行き来して医療活動に従事しておりますが、彼はこの地域から出る事はまずないので、足取りを追う事も難しくはないかと……」

「巴鷹鏢局ね。随分と羽振りがいいのも広げた網の目の細かさ故かしら」

「……お蔭様で」

自身の智囊がその有用性をすぐさま見出し出して活用を始めたのだ。眼前の智の怪物がその存在を知れば、当然同様の結論に至るだろう。

問題は、当然のように存在と繋がりを知られている事だ。

薨華は益州を出てよりこれまで、殆ど巴鷹鏢局と接触を持たなかつた。いつでも頼れる故郷との繋がりにはべつたりでは、母の元を発つた意味が無いからだ。南蛮で一時鏢師が同行した際にそれを強く意識した為、その鏢師を帰す時に強く言い含めておいたのだ。以後、鏢局側、それを纏める趙子鷹も心得たもので、薨華に干渉する事はなかつた。それが崩れたのは子敬に何かの拍子で話した時だつた。実家の生業の話をしている時だつたか、子敬が家業を放つて様々な事に出していたのを聞いていた時に、ぼろりと口を吐いて出たのだつた。

鏢局の存在を知つた子敬の動きは早かつたが、大つぴらに動いたわけではない。それでも、薨華を注視している者からすれば、特に荀公達のような者が視れば、気付くなど言う方が無理のある変化が鏢局に顕われていた。

「重畳、と言つたところか」

「そうね、毒を遠ざけるところまでは出来ても、その先の治癒には手が届かなかつたし」
あまりに不穏な単語の出現に、自身に対する両者の手の長さへの戦慄など一気に吹き飛んだ。

そうだ。陛下は体調を崩されていた。どころではなく、確実に死へと向かつており、だからこそ後継者争いが水面下で荒れ狂っているのだ。そして、その原因は病などではなかつた。ああ、そういう事だつたのか。

毒を断つ事で多少の改善はみられたようだが、根本的な回復などは見込めまい。なんとしても張伯腊ちやうはくろうに連絡を付けなければ。

それにしても誰がその暴挙に出たのか。いや、それは明らかだ。協皇女派の蹇碩勢が皇上の脇に侍っているのだ。一人しかない。

「いやあ、結婚なんて適当にするもんじゃないわね」

それまで御坐に浅く腰掛け、話を聞いているのかいないのか曖昧な様子であった皇帝が、自虐的な笑みと共に述べ懐した。

「その当時に私がお傍に居りましたら、何としても御止めしていました」

まさかその発言に乗る訳にもいかず、どうにも反応に困っていると、公達がにべもなく告げるのを見て絶句した。凄いなこの人。ただ純粋に葬華はそう思ったが、見倣おうとは思わなかった。

「でも今はあの子の傍にあんたが、あんた達が居るからね。……妹を頼むわ」
「一生命に代えましても」

恭しく頭を下げる公達と蹇碩を見て、そう言えばもともと協皇女派であった事を思い出した。つまり、この二人は皇女殿下の思惑でこの場に居るのだ。皇妹が皇上を密かに逃がそうとしているのだ。そう考えると、真にこの現皇帝に仕える者は居ないのかと、物寂しさが不敬に胸に湧いたが、それまで殆ど存在を忘れていた一人がそつと今上帝の

隣に跪いて、肘掛に乗せられていた帝の手に己の手を重ねた。

「私は永遠に陛下に身も心も捧げております」

「全く、あんたみたいな変態しか居ないんだから」

「はあん！ 勿体無きお言葉。愚図で鈍間な私を罵って頂けるだけで幸せで御座います」

台無しだよ。

ずつこけそうになるのを無理やり抑えた自分を褒める薜華だったが、つい眉間に手をやり揉み解すのは止められなかった。誰にも見咎められる事もなかったが。

四人の前で一頻り奇妙ないちやつきを見せ付けた皇帝だったが、満足したのか、しつしつと手で趙忠を追い払ってから（趙忠はとても嬉しそうに元居た位置に下がった）真剣な表情を形作って薜華を見据えた。

「じゃあ、頼むわね」

「仰せのままに！」

この密談の後、皇帝は遂に起き上がる事も出来ずに寝込み続け、敵下軍校尉が漢中を平定した頃に、最後までその傍に付き従っていた唯一の忠臣趙忠に看取られて、静かに世を去ったと伝えられた。

第二十一回 漢中夢記

漢中郡は益州にあつても大巴山脈によつて同州他郡と半ば分断されており、州牧劉焉の統治も未だ行き届いていない。それ故に賊に荒らし回られ、劉焉軍が討伐するに先んじて禁軍が漢中を平定した。その大將は巴郡の太守嚴顔の自慢の一人娘であつた。

誰かがこう囁いた。劉益州の心中は穏やかではなからう、と。

その密やかな声は、平定後の漢中復興に奔走する下軍校尉の耳には届くことなく虚空に消えた。

漢中盆地にも冬は訪れる。とは言え、益州らしく寒波とは縁遠い土地柄であり、南蛮から来た少女も虎毛皮の外套を一枚羽織るだけで過ごせる程には快適であつた。

その南蛮少女は今、漢中郡便坐の一室で毛皮に包まり転寝を満喫していた。

「つまんない」

「いや、そう言われても……」

その一室、便坐の中でも一際豪華な客間で、薜華は蹇碩の親類とされる女性と向かい合つていた。

「別に迷惑かけたいわけじゃないのよ。流石に私も今の立場を解かつてるつもり」

「はあ……」

「でもね」

「なんででしょう？」

「この辛気臭い空気だけは耐えらんない！」

「そうは言っても、御身の喪中ですから」

そう言うと、対面の女性は「うー」と唸りながら茶卓に突つ伏してしまった。

その姿を視界に収めながら茶を啜る薜華。内心、やれやれといった感である。薜華は逆賊馬相が荒らした漢中郡の立て直しを指揮する立場にあり、非常に多忙な日々を送っている。

皇帝が崩御したからと言って、漢中の惨状は放つて置けるようなものではない。それでも一応は服喪の姿勢を見せる為に、素服そふくを着込んで菜食さいじきで通している。正直、力が出ない。おまけに臣下の皆まで自分に倣なっている。当然と言えば当然の事であるが、無理をさせているなあ、と忸怩しゆうねいたるものがある。

その上でこれである。こうして度々、眼前の女性に呼び出されるのだ。その度に、皆の（特に子明の）機嫌が急落するのだ。事情を知らねば、宦官の親類に振り回されているようにしか見えない現状をどうにかしたいし、しなければいけないのだが、如何とも

し難い。

迷惑を掛けたいわけじゃない。その言に偽りが無いのがまた厄介であつた。当人にはそのつもりが全くないのだ。極自然体で我が儘なのだ。幾度かやんわりと窘めて、その都度、改善自体は見られるので、薺華は未だ目の前でうーうー唸っている幼い内面を抱えた女性を嫌いになれなかつた。

「まさか、三年も四年も大陸中こんなじゃないわよね？」

「それは流石にありませんよ。慣例によれば三十六日間ですから、じき解けますよ。それに諒闇りょうあん*200は皇族の方々と、我々のような臣下が服するものですから、大陸中と言うのは流石に。そもそも庶人に長期に亘る服喪は無理ですし。まあ、洛陽城内は心喪の空気に覆われてるかも知れませんが……」

実際にその空気に流されて、洛陽で身動きの取り方が判らずに長期逗留するに任せている者が居たりする。それも薺華が住まう邸に。

薺華は母からの手紙によって祝いの品が届く事は承知していたが、それを誰が運んでくるのかまでは知らなかつた。鏢局の者に届けさせるものかと思つたが、手紙には使者を送る、とだけあつた。使者と言うからにはわざわざ任命された者がいるのだろう。薺華は極自然に自分の知る知己の誰かで、それなりの期間を巴郡から離れても大丈夫な人物だろうと考えた。

案外、未究かもな。しかしそうなる则会えなかつたのは残念だ。と、故郷の親友の顔を思い浮かべたが、まさかその友が極星と例えた人物が遣わされているとは考えもしない。自分が求めていると言われた極星足る人物、黄巾の乱時に三陣營でそれとなく探したが見当たらなかつた男性、薜華の抱える見えない因業。何時かは出会わなければならぬ、向き合わなければならぬ存在。

だが、未だ彼女はそれに絡め取られてはいない。今、向き合うべきは輝く白藤色の髪のお嬢様であつた。

滔々と語る薜華に、突つ伏したまま顔だけを上げて、今は蹇寛けんかんと名乗る女性は溜め息を吐いてから億劫そうに上体を起こし頬杖をついてぼやいた。

「ん、なんか変な感じ」

「心中計りかねます。と言うのが正直なところですが、慣れて下さいね。色々」と
「そう、…ね」

ややぼんやりとした感じで返事を返す女性を見詰めながら、薜華はもう一度心中で同じ言葉を反芻した。この御方の心中如何許りであろうかと。

宮中の煌びやかな闇に耽溺し、それ以外を知らされず、それでも過ちに気付き抗い戦おうとした時には全てが遅きに失した敗残者。

国政を壟断して来た屑共によつて飾り立てられた暗愚という贅肉の奥に、心優しい本

質を埋もらせてしまった、今や亡霊の身の上の淑女。

安く同情するのは簡単だが、それでは済まされない失態の上に漢土の現状があるのだ。一代で零落れた訳ではなく、累代の負債が重なり過ぎた面も大きい、それで責任の重さが軽減される訳でもない。

それでも、こうして日々近くで接していれば、気軽に糾弾できるものでもない。寧ろ、その本質が露わになるにつれ、自身で気付かぬうちに好意すら抱きつつあった。

考え過ぎて上手く言語化できない領域にまで想いが及ぶと、薺華は頭を振って思考を一旦白紙に戻した。

そして、思考の残滓を払い落とすように話題を変える。

「ところで、お加減の方はどうですか？」

「大分良いわ。良い腕ね、あの医者」

「そうでしょう」

自分の知己が、それも真名を交わし合った仲の者が褒められると、己の事のように嬉しくなってしまう薺華であったが、その嬉し気な様子を見た蹇寛の思考は少々違う場所へ着地した。

「厳寿つてさあ……」

「なんです？」

「ああいうのが好み？」

全く想定していなかった問い掛けに、飲みかけの茶が食道を逆流し危うく吹き出すところ、寸でのところで抑えたが、思いつきり嘔せ返ってしまい酷く咳き込んだのは致し方ない事だろう。なんとか咳を抑え込み、喉奥の苦しさに若干涙目になりながら抗議の声を上げた。

「何をいきなり言い出すんですか!？」

「えー、だってほら、……ね？」

「ね？　じゃないです。兎に角、火鳥兄さんにそんな感情を向けた事はありません」

「ふーん。……もう、つまんないわねえ！　もつところ、こう……ないのっ？」

「ありませんから。何なんですか、いきなり」

「なにつて、私達つて花の年頃じゃない」

「……ええ、まあ」

「そういうお話の一つや二つは必須なのよ！」

獲物を見付けた果子狸はくびしんのような笑みで高らかに宣言する淑女。対する薜華の反応は冷ややかなものだった。

「二つも抱えるのはどうかと思いますが」

「細かい事はいいの！　で、厳寿はどんな殿方が好みなの？　さあ、きりきり吐きなさい

！ じゃないと帰さないわよ!!」

「ええ……」

この日、薜華が郡堂に戻る事はなかった。

第二十一回 漢中夢記

漢中太守の便坐。漢中復興の間、薜華達はここに逗留している。本来の主は居ない。漢中太守蘇固*201は馬相が南鄭県城に攻め寄せると、簡単に胆を潰し遁走した。門下掾*202の陳調*203が防衛戦を進言するのも聞かず、主簿の趙嵩*204に命じて安全な避難先を探させたが、その隙に賊に見付かりあっさり殺されてしまったのだ。

本来ならば、中央に手早く次の太守を派遣してもらうところだが、時期が余りに悪い。次の帝位を巡っての後継争いとその後始末でそれどころではないだろう。黄宗文が薜華の名代として大喪に参列する為、洛陽に戻っている。決着が付き次第、報告に戻るだろう。今まさに引き返している途上かも知れないが、そこに新太守同伴は望めまい。

結局、薨華は太守公邸に逗留し、太守の真似事をさせられる破目に陥っていた。それも、ただでさえ苦手な内政を、荒廢した郡の立て直しという重責付きでこなさねばならなくなったのだった。

以前、豫州で県令の真似事をしていた時とは、仕事量も責任の重さも段違いである。とは言え、あの時の経験がなければ、早々に音を上げていたかもしれない。

そのようにして忙しい日々の中、蹇寛の相手もしなければならず、短期間で随分と疲弊していた。

今日この日も、半日を蹇寛の元で過ごしてしまい、気疲れと気まずさでへとへとであった。そんな状態の薨華に追い打ちを掛けるように、郡堂から便坐に戻って来た呂子明の機嫌が最低値を更新していたのを見て、これはもう限界だな、と薨華は感じた。

「ああ、亞莎。ご免ね、今日も途中で抜け出して」

「……いえ、薨華様はお忙しいのですから仕方ありません」

にべもない。そして怖い。冷や汗一つ垂らし、さつと子敬に目配らせを送る。苦笑を返す智囊に溜息一つ。ここで薨華は決心した。触らぬ神に祟りなしとばかりに、さつさと割り当てられた部屋へ引つ込もうとしていた黄仲峻も呼び止める。

「亞莎、紅玉。二人に話がある」

神妙な表情でそう告げられた二人は、矢張り神妙に頷き返した。

先帝劉宏*205は崩御しておらず、密かに洛陽を脱した。その事実を告げられた亞莎と仲峻は、その意味することろの大きさに、暫く何の反応も示す事が出来ずにいた。

「ご免ね。今まで黙ってて」

「いえ、そのような……。本来であれば、口にできぬような事……。申し訳ありません！ 私の考えが至らぬばかりに!!」

「いやいや、ここに思い至れつてのは無理があるから。でもまあ、亞莎の言う通りでもある。言うまでもない事だけど、絶対に口外しないように」

「勿論です!」

「事情が分かったのはいいけど、薜華は厄介事を背負い込む趣味でもあんのー?」

「私も紅玉を退屈させない為に頑張ってるんだよ」

「明らかに頑張り過ぎなんだよな」

緊張が解けたと思つた途端に始まる二人の軽口。思えば、ここ最近はこの二人の言葉の応酬もまるで見られなかった。それだけ、雰囲気が悪かつたのだろう。

自分が大いに空気を悪くしていた自覚がある為、亞莎はしゅんと縮こまってしま

が、目聡い仲峻ががっしりと肩を抱いてきた。

「んー？ まあた亞莎は余計な落ち込みしてるなー？」

「え、いえ、その……」

「そりや大好きな主公が宦官の親戚に言いようにされてたら面白くないもんないしやーないしやーないしやーない」

「う……え、はい」

「それがそんなもんより遙か格上となるとぶっ飛び過ぎて文句言う気も失せるよなー」

「お、恐れ多いですよ。紅玉さん」

亞莎が驚いて窘めるが、当の仲峻は何処吹く風といったところ。慶祝が「その辺にしときなよ」と言えば、やつとで「へーい」と返事を返した。

兎も角、やつといつも通りに立ち戻る事が出来た。そう意識した途端、気付いた事があつた。魯子敬である。彼女だけは慶祝に呼ばれなかった。無論、この場に居るが、慶祝は二人に話があると言っていた。そしてこれまでの、この漢中行が始まつてからの子敬の様子を思い出す。

いつも通りだった。子敬はいつも通り慶祝の参謀として辣腕を振るい、いつも通りの笑みを浮かべ、いつも通りの調子で皆に接していた。

知っていたのだ。それはつまり、慶祝から話を通されていたという事。先帝脱洛の事

は直接命じられた慶祝とトラ以外に決して知られてはならない最高機密だ。今こうして自分と仲峻が知る事になったのは、陣營の内部崩壊を防ぐ為だ。だが、子敬はそれよりも遙かに早く、恐らくは密命を受けてすぐに知らされたのだろう。

そこにある信頼の深さに、亞莎は今迄にないほどに強い憧憬を感じた。いつか自分も。そして、そのいつかをいつかのままにしない為に、更なる精進を一人密かに誓うのだった。

益州巴郡江州県の中心部、郡府官衙の程近くにある嚴邸。薄く朝靄立ち込めるその中庭に一人立つは、この邸で生まれ育った娘であった。

「……夢の中とは言え、随分と懐かしいな」

嚴家の一人娘、薺華は感慨深げに呟いた。

こんな夢を見るのは、漢中郡南鄭県で慣れない仕事に四苦八苦している所為か、或いは曲がりなりにも益州に戻って来たからか。庭の情景を確かめるように眺めながら、何となくそんな事を考える。それにしても、

「()ういうの、なんて言うんだっけ？ 夢を夢として認識している……」

「ああ、これ、厳寿の夢なんだ」

なんとなしの独り言に反応が返って来て、慌てて振り返る。見れば、邸の客堂の方から蹇寛が周囲を見回しながら此方に近付いて来ていた。

こんなに近くに来ていたのに、声を掛けられるまで気付く事も出来ないとは……。夢の中から感覚が鈍っているのだろうか？ 幽玄な靄と、光源定かならぬ薄明りに縁取られた世界には、確かにどこかふわふわとした頼りなさを感じる。それは自身の感覚にも顕われている。無意識の内にごぶしを握り、また開く。と言う動作を数度繰り返した。

しかしながら、それよりも気にすべき事柄が今日の前にあった。

「陛下？」

「もう陛下じゃないってば」

「あ、はい。……じゃなくって、えー、何と言うか、私の夢の登場人物ではなく？」

「違うわよ。……改めてそう言われると、なんかちよつと自信無くなつて来るんだけど」

二人の人間が共通の夢を見ている。そんな事があるのだろうか？ いや、少し違う。蹇寛の先の発言「厳寿の夢」。誰かの夢の中に、別の誰かが入り込む。少なくとも、尋常の人の身ではそんな超常をほいほい起こせるものではないだろう。

なんだこれは。どういう事態だ？

その疑問は、更に割り込んで来た第三の声によつてすぐさま中断された。

「こりやまた珍しい。その上、運がないね」

「何者だつ!!」

聞き覚えのない声。何より、その声には理屈では言い表せない違和感があつた。人の声ではないという違和感が。

寔寛を背後に庇いながら振り向く。その手には何時の間にか秋草が握られている。

「なんとも恐ろしい嬢ちゃんだ。なんにも考えずに得物を取り出すなんてえ真似しよるとは、どんだけ手に馴染んでんだか。あー、こんな恐ろしいのが標的とは、とんだ貧乏籤だよ」

「標的だと……?」

振り向いた先には、紅染めの袍服を着込んだ奇妙に子牛に似た面貌の小人が居た。片足にだけ靴を履き、もう片方は竹扇と共に腰から下げている。悠々としゃがみ込んで此方を観察していた。

舜華は不快に眉根を寄せて、小鬼の発言を問い質す。

「使役される身の辛いとこだね」

「妖術士の類いに命を狙われる憶えなんてないんだけど?」

「さて、ね。歴史を正す為とか何とか言つてたがね」

ミシリ、と秋草が不穩な音を立てた。

「憶え、あるみたいだねえ」

「……歴史だと？ ふぎけるな」

「今この瞬間に正しい歴史なんぞあるわけねえ。そりやそうさな、おいらもそう思う。ただまあ、人間共の中にも訳解からん術だの力だの使う奴も、居ないでもないしなあ。そんな連中が何を嬢ちゃんの中に観てるのかは判らんね」

「そいつ等の事を知る限り吐いてもらおう。そうすれば、楽に滅してやる」

「物騒過ぎる。そこは見逃してやるじゃないのかい？」

ずいっと、一歩歩を進めながら宣告すれば、小鬼は器用にしゃがんだまま後退りながらお道化どける様に返事を返してきた。

「見逃してどうなる？」

「おいらが嬢ちゃんの側に憑く」

「………なんだって？」

吐き捨てる様に言った言葉に、予想外の返答が返つて来て思わず動きと思考を止めてしまった。何を考えている？ 何故にそうなる？ そもそも、使役されていると言つていたのに、それはそんな簡単に破棄できるようなものなのか？

「嬢ちゃんは夢の中でも揺るぎなく強そうだ。得物を容易に引き寄せた事からもそれが

解かる。夢の中だから何でも思い通り、なんて訳にはいかないもんさ。人の領分は本来的に現うつにあつて、夢の中はおいらみたいな存在の領分だからね」

それは薙華も感じていた事だ。蹇寛の接近にまるで気付かなかつたというのは、普段であれば考えられぬ事であつた。しかし、小人はそこには気付かず話を続ける。

「愛用の品だからつてそう簡単に虚空から取り出すように手にできるもんじゃあないんだよ。参つたね、やり合つたらきつと一太刀でおいら消滅しまうよ」

「だから私に付くと？ 信用できないし、そもそも使役されると言つたのはお前だろう。そう言つた契約は簡単に反故できるものじゃないんじやないか？」

「信用の方は仕方ねえが、後者は簡単さね。言つたらう、夢はおいらの領分だと。おいらを使つてる術士は夢の中で接触して来たんだ」

「……もしかして、その時点で詐術にでも嵌めたのか？」

「刃傷沙汰は苦手だがね、首尾良く使役された振りするくらいわけないのさ。ま、楽な仕事ならそのままやってやっても良かったがね。そうでなけりや、殺られたと感じさせてとんずら来きやいい」

「ますます信用する気が失せたな」

「おつと、こいつはいけねえや」

くつくつと愉快気に笑う夢魔に、これ以上言葉を交わす意義もなからうと判断を下し

たその時、秋草を振り上げようとする直前、小鬼の言葉がするりと滑り込んで来た。

「連中が嬢ちゃんに何を観てるかは確かに判んねえが、おいらにも嬢ちゃんの中に観えるもんがある」

だが薜華はそれを無視した。無視して秋草を構えた。危険だ。これ以上はいけない。そんな焦燥に圧されて。

「嬢ちゃんには以前まえがあるね？」

薜華の構えが固くなる。不必要な力が秋草を握る手に掛かる。

「ああ、そいつがおいらの琴線に触れたのさ。不明瞭で良くは観えねえが、確かにある」
「黙れ」

「なに、気にする事はない。実際、誰にだってあるもんなのさ。ただ、普通は以前の事な
んざ洗い流されちまうだけの事さね。或いは、連中もそこが気に喰わねえのかもね」

「だからなんだ!! 私は薜華だ!!!」

「そうさな、それがいい。今を生きてるのに以前に煩わされるなんざ、良いとは思えない
ね。だが、外野にやそんな事は解かんねえんじやないかねえ」

言葉を交わすことなくさっさと殺す。という判断はいとも簡単に吹き飛んできた。
秋草を小鬼の首筋にあて、冷えた声で問い質す。

「言え、私の敵は何処に居る？」

「残念ながら、おいらが知ってる事は殆どないよ。おいらと接触した李意*206って奴の口振りから複数人居るだろうって事くらいさ」

すうつと薜華の眼が細められたが、小鬼は態度を崩さず話を続けた。

「それでも嬢ちゃんがおいらを飼う価値はあるってもんさね」

「お前の価値だと？」

「おいらが憑いてりや、それだけで呪いへの耐性まじなが上がるぜ」

「……いや、ちよつと待て。その理屈は兎も角として、お前の言う付くとは『取り憑く』という意味か?!」

「そりやそーよ」

「っ冗談じゃないぞ!!?」

「心配しなさんな。寝るたんびにおいらと顔付き合わすなんて事にやらんよ」

「だとしてもだっ!!」

「でも嬢ちゃんの相手は真っ当な奴等じゃないぜ?」

「っ……………」

夢魔のとんでもない提案に喚き散らしていた薜華だったが、その一言で齒噛みして動きを止めた。

夢の中に刺客を放ってくるような連中相手に、自分が打てる手はあるのか。もしこれ

が仲間達にまで波及すればどうなるか。不吉な考えが頭を巡る。未知の敵の襲撃と、妖異を取り憑かせる危殆きたいを秤に乗せる。

ちらりと背後を見遣る。興味深そうに此方のやり取りを見物している蹇寛の姿は、この異常事態の危険性を正しく把握しているとは思えない。こうしてもう既に一人巻き込んでしまっている。

視線を小鬼に戻す。こいつは最初に何と言って声を掛けてきただろうか。「運がない」そう言っていた。自分を簡単に仕留める事が出来たのなら、背後の女性も生きて目を覚ます事は出来なかつたろう。

結局、葬華は決断せざるを得なかつた。

「おつはよー」

「……おはよう御座います」

「なんか、あんたも色々大変なのねえ」

翌朝。これまでの人生で最悪の目覚めとなった葬華に対し、実に気楽に朝の挨拶を交わすは蹇寛。しみじみと語る言葉に、葬華は諦めにも似た心地で頷いた。

「矢張り、憶えておいでなのですね」

「そりやあねえ、あれだけの珍体験はそうはないわ」

「……最近の退屈を吹き飛ばす経験をした亡帝の気分は上々のようだ。」

「ああ、安心して。誰にも喋ったりしないから」

「そう願います」

「……ふふつ、それにしても」

「? なんですか?」

「二人だけの秘密って、なんだか艶めいてるわよね」

「何言ってるんですか、全く」

何かと思えば、緊張感の欠片もない発言に、朝一でぐったりと疲れを感じる薜華であつた。

「なによもう、張り合いないわねえ」

そう言われてもなあ、とどう返したら良いかと頬を掻く薜華の脳裏に声が響いた。

「他人の夢に迷い込んだってのに、なかなか肝の太い嬢ちゃんだな」

「つなあ?!」

「えっ? なになに??」

「そんな慌てなさんなつて。おいらだよ」

「そんな事は分かつてる！　どうなってるんだ?!」

「もー、なんなのよー!」

「にやー、姉ーどうしたんにや?」

一気に混沌とした場に、何も知らぬトラが不思議そうな表情で現れた。蹇寛の抱える秘密の都合上、この三人に割り当てられた部屋は密集しており、毎朝最初に顔を合わせるのも当然この三人となる。そんな事すら完全に失念していた舜華と蹇寛の慌てぶりには、流石のトラも疑念を抱かずにはおれなかった。

「な、なんでもないよ、トラ」

「にやー、そんな筈ないにや」

「ほんとだつて!　私も保証するわ!!」

「むー」

ぷくう、と頬を膨らませて不満を露わにするトラ。

「いいんにや。トラにはむつかしくて大切な事だから話せないんにや。わかつてるにや」

トラはそこまで一気に言い放つと、そのまま駆けて食堂の方へ走り去ってしまうのだった。実際、トラも解かつてはいるのだ。自身で言った通り、舜華の立場が複雑な事も、今後、官位が上がればこういった事も増えるのだと。しかし、不意に胸に湧いた小

さな疎外感を制御する事はまだ難しく、ついついすねるような態度をとってしまっただけなのだ。ただけなのだが、

「おおおおお、トラ〜」

「ちよつと、落ち込み過ぎでしょ。私も引き摺られて訳も変わらず慌てちゃったし……。何なの、一体」

薺華の受けた衝撃は殊のほか大きかった。

「おのれ、虚耗シユハオ*207……!!」

「え、なに？ あいつ居んの？ こっちに出てくれるものなの？」

「なんか悪かったな。早い内に知らせた方が良いかと思っただが……」

「よくは解らないのですが、さっきからあいつの声が聞こえるのです」

「おいらの声が届いてる間は、軽い白昼夢に陥ってるような状態なんだ。と言うか、おいらがその状態に嬢ちゃんを誘導してるんだがね」

「……なんだって？」

何とか落ち着きを取り戻し、疫鬼の説明を受ける薺華。

基本的に夢の領域を生域とする疫鬼の虚耗と会うには睡眠をとらなければならぬが、緊急手段として日中に交信する法として、薺華の意識を半分夢に引き摺り込む事で会話だけは可能になる。無論、半分夢見状態など危険は大きい。あくまでも緊急措置

だ。

「んねえねえ、結局どういう事？」

「……ええつと、ちよつと待つて下さい」

暫し一人でぶつぶつ呟いていた傍目には危ない人にしか見えない葬華に、我慢し切れなくなつた蹇寛がその肩をちよんちよんと突いて訊ねてきた。

虚耗に聞いた事を何とか自分なりに噛み砕いて説明する。理屈は葬華にもよく解からないが、ともかく意識を保つたままでも夢魔と話せる事だけは伝わった。

また、ついでに呪いへの耐性についても葬華は聞いていた。通常、呪術の上書きは難しく、単に既に掛かっている呪を上回る呪力だけで上書きしようとするとするならば、かなりの実力差を要求されるらしい。虚耗が憑いている状態は、それだけで強力な呪術に掛かっているのと同様であるらしい。しかも、普通の呪術（葬華からすれば呪術に普通も糞もないが）と違い、虚耗は仕掛けられた術に明確に抵抗する。意志を以つて術に對抗する呪い。憑き物が厄介なのはこれが理由さね。とは虚耗の言である。

解かつていた事ではあるが、矢張り危険な存在を身の内に引き入れたものだ。

その場に居合わせた蹇寛を除き、トラにも子敬にも軽々に話せはしない。しかし、彼女には相談しなければならぬだろう。このような事態は流石に想定外だったが、連絡手段を確保しておいて良かった。

視線を上げ、庭木に止まりその威風を朝陽に晒す鳶を見据えながら、薜華は浅縹色あさはなだの髪を片側頭部に結んだ歌姫の勝気な笑顔を思い出していた。

主公の名代として洛陽での大任を仰せ付かっていた黄奎——真名を潤ルン——は、大喪を終え、帝位継承も紆余曲折の末に決着した京師を後にして、漢中郡南鄭県を目指し馬を奔らせていた。

彼女の懐には任命書と指令書、そして將軍位の印綬が大切にしまわれていた。これらは無論、潤の主公である嚴慶祝に下された勅である。潤は勅使としての任を以って主の元へ戻ろうとしていた。

新帝劉協*2008はその擁立に功を立てた董卓*2009を丞相に就けた。

この董卓、字を仲穎ちゆうえいは元々先の大將軍何進が己が野望の為に涼州から召し出した地方軍閥の長の一人であった。しかしその何進は敢え無く十常侍に謀殺され、その十常侍から董仲穎が皇帝、当時の協皇女を救出したという。弁皇子擁立の為に何進に呼ばれた筈の董仲穎が、何故皇女を救い出し擁立する事となったのか、それは潤には解からなかった。そこまでの詳しい経緯を知る者は、宮中ですら殆どいないようだった。

ともかく、こうして後漢王朝は新たな皇帝の元、新体制で国の舵取りを始めた。

敵慶祝の將軍就任もその一つである。慶祝は元々今回の馬相征伐が成った暁には、中領軍への累進が約束されていた。中領軍は北軍五營を監督する北軍中侯に指揮権を付与した非常置の偏將軍級の高級武官である。その職掌は洛陽城内での警護、実際に警備に就く五校尉を統括指揮する事である。

しかし、今回慶祝に下される新たな任はまたも外征である。それも、漢中とは叛乱の規模が違う。事態を重く見た皇帝は涼州所縁の將軍の派兵を決定。しかし、混乱収まったばかりの洛陽での徴兵だけでは兵が足りない。そこで急遽、中領將軍の号が新設された。これは号が示す通り、中領軍に外征指揮権と軍編成の権限を与える為の將軍号であった。

慶祝は急ぎ漢中で開府し、涼州へ赴かねばならない。その為に潤は駅ごとに馬を乗り換え、南鄭县城への道を直走り急いでいた。

その潤の対面から、矢張り早馬が此方へ駆けてきた。いや、正確には洛陽へ向かっていいるのだろう。何事か。潤の心臓が一瞬跳ねる。

「涼州からか!!」

「いや、益州牧の使いでござる!!」

向かってくる急使に大声で呼ばわると、間髪入れず答えが返ってくる。益州でも変事

か。だが、今は関係ない。互いに擦れ違い様、任務ご苦労などと労い合い、主公の元へ一目散に馬を駆った。その主公の出身地が何処であったかは、その時の潤には考えを及ぼす余裕はなかった。

十常侍全滅の噂は、協皇女が帝位についたという報の枝葉の一つとして、漢中にも、その郡府官衙最奥にも届いた。蹇碩も死んだのか。薜華はそう思った程度であり、このよ
うな噂が耳に届き始めたからには直に黄宗文が戻るだろうとすぐに別の方へ思考が飛んだが、蹇姓を余儀なくされている女性は違った。

「そっか……。黄^{フアン}のやつ、死んじやったの」

呟いたその名が、趙忠の真名である事は容易に知れた。十常侍の序列二位でありながら、政にも謀にも何の才もなく、仲間内でも馬鹿にされていたという。故に政争の中心からは外れており、此度の騒動でも他の者達から距離を置いていた。

趙忠は事が落ち着いたら直ぐに馳せ参じると、蹇寛との別れ際に約束していたらしく、それを無邪気に信じていた蹇寛はことある度に「黄の料理が早く食べたい」などと漏らしていた。

唯一人、最後まで先帝劉宏に忠を尽くした人物の死に、蹇寛は傍で見ていて心配にな

るほど落ち込んだ。

「ほんと、鈍間なんだから。馬鹿よね、ほんと馬鹿」

「陛下……」

「もう陛下じゃない」

「つ……、申し訳ありません」

どう声をお掛けしたのか、迷いながらも呼び掛ければ、行き成り初手を誤つてしまった。項垂れ、此方に視線を合わせようとしてもしない蹇寛と、珍しく間誤付いている華。

こんな時こそトラの出番の様な気がするが、生憎と今は子明と出掛けている。蹇寛の正体を打ち明けて以来、子明達も蹇寛と接触できる人物としてちよくちよくその世話を仰せ付かっていた。それまでは殆どトラに頼りきりだったので、気軽に外に出させてやる事もできなかった。トラは蹇寛に非常によく懐いていたが、それでもやはり日がな一日部屋に籠もつての相手役というのは息のつまる生活だった。なんととっても、トラは野生児なのだ。京師でも、邸の中では庭園で過ごす時間が一番長いのだ。なので、負担から解放される時、トラはいつも郊外まで出掛けるようになっていた。今日はそれに子明が付き合っている筈だ。

「結局さ、甘かったんだらうね。散々国に迷惑かけて置いて、今更第二の人生満喫しよう

なんてさ」

「……」

「黄は報いを受けた。その内、私も……、私はもつと碌な死に方しないんでしょね」

「そんな死に方、私がさせませんよ」

今度は薜華が強い語調で遮る番だった。

「……なんで？」

「私はそんな結末を迎えさせる為に、貴女をここまで連れてきたわけじゃない」

「そりゃ、…そうでしょうけど」

「そんな事は絶対に私が許さない」

この娘は何をこんなに入れ込んでいるのだろうか？ もはや自分には何も無いというのに……。元皇帝であった女は不思議なものを見るような目で薜華を見た。俯いていた顔をあげ、その強い瞳と目を合わせた。そして射抜かれた。

嘗て玉座に在った時、まだ自分が無能である事を理解すらしていなかった時、時折諫言する者達が居た。その中でも、一部の者達が同じような眼差しをしていた事を思い出した。だが、全く同一ではない。あれは今思えば、真剣に国を憂い、そして己の身も顧みずに使命を果たそうとする眼だった。薜華の、同じようについてほんの少しだけ違う眼差し。その僅かな違いの中に、良く知る瞳の輝きを視た気がした。それは趙忠が、彼女

だけが自分に向けた輝き。

至上とされつつも蔑ろにされ続けたあの頃と違い、その輝きの意味の価値を深く知ってしまった今、劉宏の名を棄てた淑女はそこから目を逸らす事は出来なかった。

それでも心弱気から隠せぬ本音が漏れた。だが、それだけではなく、抗いたいという想いも沸々と湧き始めていた。それは皇軍の設置や新学問の創立など、最後に僅かに足掻いてみせた後で枯れ果てたと思っていた渴望だった。

「敗残者の私に何ができるのかしらね」

「生きていればこそ拓ける道もありましょう」

「いまだに知らない事、学ぶべき事が多過ぎるわ」

「少なくとも足りぬという事を知っておいでです」

「今更足掻いたところで、爪痕一つ残せるかどうか分からない」

「こんな私を……、それでも援けてくれるの？」

纏るような言葉。しかしそこに媚びるような響きはなく、決然とした意志が籠もっていた。だから薺華は自然と跪いていた。

「我が真名に懸けまして。どうぞ、これよりは薺華と呼び捨て下さい」

「ありがとう」

「ここに礼が来るとは思ってたかった薺華は、思わず顔を上げてしまった。そして、其

処に在った透明な笑みの美しさに、暫し目を奪われた。

その笑顔のまま、劉宏は薜華の真名に応えた。

「汝の忠と真名に応え、我が真名空丹クワタンを預けます」

「ありがたき幸せ」

「立ちなさい」

「感謝します」

亡帝に宿った決意は強かったが、今はただそれだけのものだった。自覚している通りに力がなかった。だが、それでも思い立つがままに薜華に一つだけ命じた。

「薜華」

「はっ！」

「お願い、あの子の力になってあげて」

「御意のままに」

傍から見ればその下命にどれ程の意味があると感じとれるだろうか。余人には判らずとも、この意志一つを上乗せした事の意味は、薜華の中で熱を以って魂の髓まで染みわたっていった。

「それにしても……」

存在しない熱を身に宿し、決意を新たにする薜華の耳に、やや弛緩した声が届いた。

場の空気が柔らかく成るのを感じながら、声の主に意識を向ける。

「こんな亡霊に従おうだなんて、あんたどうかしてるわ」

「どうやら私は変わり者らしいものですから」

どこか皮肉気な言葉で、しかし純粹な笑顔を浮かべながら笑い合う二人。

こうして、人知れず新たな主従が誕生した。

第二十一回——了——

巴郡太守嚴顔、反旗を翻す。

郊外での休息中、益州方面からの早馬に気付き、不意に沸いた胸のざわつきに急かされるまま馬を並走させ、急使からそれだけ聞き出した亞莎がトラと共に郡堂に急ぎ戻つて来たのは、薜華が新たな決意を胸に抱いた丁度その時だった。

第二十二回 西方流乱

涼州は歴史的に重要な西域交易路であり、同時に異民族侵攻の防衛要地である。常に珍品が行き交い、と同時に血が流される。交易の旨味を越えて嵩む戦費に、中央では幾度か涼州不要論が出る事もあった。無論、そんな事を許せば、剽悍な羌族の凶矢が司隸を容易く貫くのは想像に難くない。愚官の提案はさいわい常に却下されて来た。

現在、血風吹き荒ぶこの土地には三つの大きな軍閥が鎮座し、漢西端を守護している。近年、その三つの内の一派に大きな穴が空いた。平西將軍馬超その人である。

常に侵略の瀬戸際に立たされ続けていた涼州で、雪崩れかかる羌族を蹴散らしていたその武威は、若年ながらも錦馬超の美名を大陸に広く響かせた。それでも羌族はその猛威を衰えさせる事無く、度々漢の領土を寇していた。

それがある時、ふつりと途絶えた。突如、不気味な静寂を纏つた西戎せいじゆうに、馬孟起の母である征西將軍は、孟起を涼州から中央へと榮転させた。それは娘の榮達を思つての事ではなく、羌の反応を見る為であった。果たして、沈黙は続いた。孟起が関東まで遠のき、黄巾賊相手に暴れ回つてもその沈黙が破られる事はなかった。

それ故に中央には油断が生じていた。西方は安定したと。だから何の懸念も頓着も

置かずに何進は董仲穎を呼び寄せた。

涼州に二つ目の穴が空いた。それも、今度は軍閥の長である。新帝争いしか目にならない中央と違い、涼州の人々はこれに強い懸念を抱いた。だが、それでも西の戎えびすに動きは見られなかった。代わりに別の者が動いた。

それはあろう事か三つ目の軍閥の長、韓遂かんすい*210であった。

第二十二回 西方流乱

巴鷹鏢局から上がってきた情報を精査し吟味していた包は、眉間を揉みしだきながら一息吐いた。

漢中郡の安定から逆巻くように涼州で叛乱が起きた。帝位継承が成ったばかりでこれからというこの時に、狙い澄まして兵を挙げた韓遂に、包は齒軋りして心中で罵った。ついでに既に世を去った何進にも。

何進が涼州軍閥に大穴を空けなければ、韓遂も軽拳に出る事はなかったかも知れない。しかしその場合、帝位争いがどう転んでいたかも知らない。新帝陛下を寸でのとこ

ろで救出したのが彼の董丞相であるとの触れ込みだ。詳細は不明だが、彼女が中央に招聘されていないかつたら弁皇子が玉座に収まっていたかもしれないし、最悪共倒れで泥沼化、それどころかそのまま王朝滅亡、なんて事態になつていたかも知れない。

包は頭を振つて雑念を追い払つた。有り得たかも知れない妄想に割く時間はない。

今重要なのは、最も懸念すべきは連鎖反応だ。先の黄巾の乱でも起きた現象であり、この漢中郡で事を起こした馬相も、黄巾賊とはなんの繋がりもない癖に、はじめは黄巾を巻いて挙兵した。

そして、此度の韓遂挙兵に反応を示しそうな勢力がすぐ傍に居る。

益州牧劉焉。

間違ひなく兵を起こすだろうと、包は直観していた。もとより軍備の増強に余念なく、涼州同様異民族の動向が静かである。なにより、益州出身者が口を揃えて言うようにその野心を隠そうともしていない。報せが未だ届いていないだけで、既に軍を動かしているかも知れない。そして、それは正にその通りであつた。

戸口の向こうから急報を知らせる鏢師の緊張した声音が届いた。予感に胸をざわつかせながら入室を許可する。木簡を受け取り、素早く目を通す。元々修めていた速読術はここ最近、さらに磨きが掛けられていた。ほんの僅かの間に読み終え、小さく唸りを上げた。

「これは薜華さんに変な伝わり方したら面倒ですね」

呟きながら立ち上がり、鏢師に幾つか指示を与え、執務房へ急ぎ向かう。その途中、背後から呼び掛けられ振り返ると、洛陽へ出向していた黄宗文が息を弾ませながら此方へ小走りに寄って来ていた。包はその姿に面倒事の匂いを感じた。劉焉の件は洛陽にはまだ届いていまい。とすれば韓遂か。

「包様」

「これは潤さん、今お戻りですか」

「はい」

「涼州の叛乱鎮圧の勅でも下りましたか？」

「！…よ、よくお分かりで……」

矢張りそうか。この反乱は是が非でも中央で治めたい筈だ。継承争いの末の幼帝戴冠の不安を象徴するかのような動乱だ。ここを見事に治められなければ、新体制の先は早々と闇に沈むだろう。ただでさえ衰えている王朝の求心力がこれ以上下落を辿れば、あつという間に群雄割拠の戦国時代の到来を呼び込む事になる。既にそうなりかけている。どこぞの州牧の反応が早過ぎた。

「…糞つ、劉焉め」

「ええ？」

「いえ、なんでも……」

二人並んで主の元へ速足で急ぎながら考えを纏めようとする包の口から、つい悪罵が漏れた。咳払いで誤魔化して、隣を歩く宗文に状況を尋ねた。

「主戦は翠さんですか？」

「何から何までお見通しですね」

「これはそれほど大した予測でもないですよ。涼州の変事は涼州一の猛将が鎮圧するのが最も合理的ですからねー。それでも薜華さんにまでお鉢が回って来たという事は……」

「洛陽での徴兵に限界があるとの仰せです」

「ま、私達が既に五千から引つ張って来てますし、近郊から集めるにしても時間は掛けたくないでしょう。王朝の今後の為にも、もたついていられませんからねー。丞相の軍勢を融通してもらえなかったのですか？」

董丞相は招聘の際、その軍勢毎上洛している。その軍は皇帝劉協の後ろ盾として地方に睨みを利かせているのだが、その為に空いた隙間で叛乱が起きては元も子もない。それでも動かさないのであるか？

「涼州に居残っている軍閥の残存戦力の指揮権を翠様に委譲なさるそうです」

「ふむ」

それでも足りないかと踏んだか。いや、そもそも隴西郡ろうせいぐんは漢陽郡かんようぐんの向こう側だ。韓遂が後顧の憂いを断とうとすれば先に討たれるし、勢いに任せて三輔を寇しようとするれば、糾合してる間に長安まで抜かれるかも知れない。少なくとも漢陽で止めなければならぬのだから……。

一旦、始めから順を追うか。

韓遂軍は合議の為と称して金城郡きんじょうぐんに呼び出した馬騰ばとう*211とその一党を不意討ちによつて撃滅した。馬騰の生死は現在不明。その軍勢の一部は韓遂によつて吸収された。三々五々散つた残りの戦力は、馬孟起の従妹が糾合したが、その将器に見合つた数しか纏められないようだ。漢陽郡に居残つた主力は留守居を任された末妹では到底纏めきれないだろう。孟起が涼州に戻れば、漢陽の軍閥が再統合できるだろう。丞相の留守居戦力は上手くいけば挟撃に使える程度の考えかも知れない。とは言え、これだけでも五分以上に渡り合えるだろうが、問題は矢張り時間なのだろう。

慶祝に漢中で募兵させ先の討伐軍を倍にでも膨れさせ、迅速に涼州まで進軍。孟起と合流し、以つて韓遂を叩こうという算段だ。

中央からすれば、慶祝が騎将であるというのは正に幸いであつたらう。行軍に於いても戦場に於いても、彼の錦马超に着いて行ける将は少ない。最も、現在の洛陽には飛将軍と神速の驍将が居り、史上でも稀な騎将天国の様相だが……。その中でも、偶々慶祝

が涼州に程近い地点にある程度纏まった戦力を有して留まっていたのは、天の采配というものか。

騎将天国か……。包は自分の頭に浮かんだ言の葉に捉われた。飛將軍、神速の驍將、そして錦馬超。天下五騎の内、三人の騎將が中央に属している。どうせならこの韓遂の乱で己の主を最後の一騎に押し上げたい。嚴慶祝が天下五騎の名望を得れば、称号通りに五將が揃い、白馬長史を除いた四將が中央に所属する事となる。栄名はただそれだけでも力となる。この場合は、慶祝個人にだけでなく、王朝にとつても良い影響を齎すだろう。それだけに既に呼応した益州が恨めしい。主の御母堂に期待したいところだが……。

「となると、問題は益州ですねー」

「益州、ですか？　そう言えば、途上で益州牧の急使と擦れ違いましたか……」

「それはどの辺りですか？」

「この県城程近くですから、漢中から出るのももう少し掛かるかと思いますが」

「そうですか」

それにしても、益州牧が洛陽へ急使を奔らせるとは……。

「……」

「あの、どうかされましたか？」

「初動を遅らせる、……あわよくば濡れ衣でも着せる気ですかねー」
「え？……」

思索しながらの呟きに反応した宗文に、益州の現状を軽く説明しようとした包の耳に、怒声が届いた。二人が向かう先から、聞きたくなかった声が。どうやら知られてしまったらしい。それもあの反応を見るに、劉焉は矢張り急使に仕掛けを施したのだろう。包はうんざりと天を仰ぎ、会った事もない劉焉に心中で呪詛を吐き掛けた。

驚愕し、それ以上に憔悴する宗文の肩を叩き、急ぎましようと思いを掛け、小走りに慶祝の元に馳せ参じた。

「ふっぎけるなああつ!!!」

怒号と共に振り下ろされた拳によって、落雷の様な破碎音を立てて机が木っ端と砕けた。

しかし敵慶祝の憤怒は全く収まらない。これまでも何度か激情を露わにする事はあったが、そんなものは微熱に過ぎなかったと思えるほどの激烈な怒りであった。鉄塊すらも蒸発させてしまうのではと思わせる劫火の眼光に射竦められた呂子明は、その紅

炎が己に向けられている訳でもないのに、五体の震えを止める事を出来ずに立ち竦む事しかできなかつた。

益州からの早馬。その急使が携えていた一報は、慶祝の最大の禁所に触れた。京師へ向けて駆け抜けようとしていたその急使に追いつてその報を聞きだした子明は、共に城外で羽を伸ばしていたトラの事も忘れて一目散に慶祝の元へ駆け付けた。

尋常でない慌てぶりに呆気にとられたトラも、一拍遅れて後に続いた。その様子から軽々に口を開く事も出来ず、二人足早に郡堂を目指した。

中廷で小休止と洒落込んでいた紅玉が、慶祝の名を呼ばわり乍ら駆け足で急ぐ二人に氣付くと、こりやあ只事じゃないな、と自身も慶祝の元へと参集した。

そして、折良く執務に戻ったばかりの慶祝は、決意も新たに意気揚々と仕事に取り掛かろうとしていたところであつた。そこに齎された有り得ぬ凶報。寸前の機嫌など彼方に吹き飛んだ。

最も愛し、尊敬する母が漢に対し叛逆したなどと、そのような戯言が許せようか。

氣持ちは痛いほど分かる。紅玉も彼女の母を良く知る一人だ。全く以つてあり得ない話だ。しかし肝心のその娘がこの有り様では落ち着いて話も出来やしない。さてどうしたものか。などと韜晦して思考を巡らそうとするが、自分以外の者からすれば、既に答えは出ていた。

心身全てが憤激一色となった慶祝に声を掛け、あまつさえ宥められるのは彼女との付き合いが最も長く、母親との面識も持つ者、つまり紅玉に託された。子明とトラが自然と此方へと視線を彷徨させた時、その貧乏籤から逃れられないと紅玉は悟った。

「しゃーないなあ、と溜め息と共にその役目を請け負った。しかし、紅玉の取った行動は『宥める』という表現からは聊か遠かった。

「まー、落ち着きなつて葬華」

「これが落ち着いていられつ!! つが?!」

「喧しい! いいから落ち着け!!」

激昂する慶祝の鼻っ面に思いつ切り拳をお見舞いし、紅玉は吠えた。突然の事に啞然とする子明とトラ。慶祝も、一瞬何をされたか解らず眼を瞬かせた。その隙について紅玉は畳み掛けた。

「桔梗おば様がそんな事するわけないなんて分かりきつてんだ! 直接会った事のない亞莎やトラにだつて分かることだ! 葬華を見てりやあな!! 私らの上に立つ奴がんな事で一々取り乱すな!!」

「お、おう……」

紅玉には真面な方向から宥める気など無かつた。人は予想外の事を仕出かされると一瞬反応を見失うものであり、目の前で感情を爆発されると返つて自分が落ち着くもの

だ。紅玉はそれを利用して無理矢理に慶祝の気を鎮めたのだった。

「いやあ、付き合ひの長い人がいると、こういう時助かりますねー」

「包。……それに潤も」

呑気な声に皆が振り返ると、部屋の戸口にいつも通りの魯子敬と若干顔色を青白くした黄宗文が立っていた。

表面上は何とか落ち着きを取り戻した慶祝。無論、内心は今も荒れ狂っている。なので益州行きを包に却下されると、つい声を荒げてしまった。

「なんでさっ!?!」

「ひやわわっ、落ち着いて下さい薺華さん。私には紅玉さんみたいにごり押しで抑えるなんて真似できないんですから」

「う……、ぐう」

決まり悪そうに唸る慶祝。そのまま右に左に揺ら揺ら彷徨つて、どかりと破壊された机に座り込んでしまった。何とも行儀が悪いが今この場でそれを指摘する者は居ない。包も僅かに苦笑を漏らして滔々と告げた。

「まず第一に、帝都より新たな勅命です。潤ちゃん」

名を告げられた宗文が、薺華の前に進み出て指令書と任命書、そして印綬を恭しく手渡した。受け取った薺華はまず指令に目を通し、次いで任命書を開き、最後に印綬を確認した。

「涼州三軍閥の一角が何してくれやがつてる……」

「全く同感です。まあ、色々と思うところがありますが、先ずは翠さんと共にこの韓遂を誅滅しない事には先に進みません」

ありありと不満な様子の慶祝に、包はいちいち丁寧言葉を重ねた。常ならば不要な段階だが、今の慶祝には一つ一つ言つて聞かせねばならないと感じたからだ。

「翠さんの軍だけでも韓遂を討つ事は出来ると思えますよ」

その言葉に、片眉を上げて反応する慶祝。その眼が、忙しく先を促す。早く自分を納得させろとでもいうように。苦笑しながら包は先を続けた。

「しかしそれには相応の時間が掛かります。相手も翠さんの事は良く知つてるでしょうし、下手をすれば長期化してしまいかねません。そうなれば、結果乱を鎮圧できたとしても、新政権としては失策に終わつた事になります。中央にはまだ届いていませんが、既に益州でも乱の呼応が起きてる現状、以降の巻き返しはほぼ不可能でしょう。この乱を契機に本格的な動乱の突入、群雄割拠の戦国時代へ真つ逆様ですねー」

「他の馬鹿共が騒ぎ出す前に韓遂の頸を落とさなきゃならない訳だ」

「そういう事です。時間こそが我々の敵です」

そこで黙考する慶祝。何を考えているかは大体判る。

「しかし既に劉焉が動いてしまいました。直に中央にも報が届くでしょう。何せ、劉焉自身が急使を放ったくらいですしね。薜華さんの懸念は、それによつて御母堂が討たれはしないか?というところですかね」

ぎろりと睨まれる。無論、包に思うところがある訳ではなく、その視線の先は益州牧に向けられている。それが解かつていてもやっぱりちよつと怖い。包の素直な感想だった。

「これに関しては大丈夫でしょう。劉焉としては中央の初動を少しでも遅らせたいがための、言わば苦し紛れですよ。もしかしたら、あわよくば……なんて考えてるかも知れませんけど」

「だ、大丈夫なんですかね?」

心配そうな様子で子明がそつと確認してきた。気が気でないのだろうが、包は元よりそれほど心配などしていない。

「まず事実として、劉焉が兵を起こした。敵將軍はどうするでしょうか?」

「そりゃ、軍を招集、と共に中央に報告……ああ、そつか」

「つまり、洛陽には互いが互いに兵を起こしたとの報告が上がるわけですか」

「少なくとも、いきなり薜華さんの御母堂が一方的に謀反人として討伐される事態にはならないと思いますよ」。丞相とその懐刀の判断は未だ見えませんが、荀家の怪物が陛下の脇に控えている限りは、逸った真似はさせませんでしょう」

成る程、と幕僚は皆納得を見せたが、肝心の慶祝は未だ厳しい目付きのまま、じつとりと包を見詰めていた。そして、その目付きに似合わぬ静かな声音で問い掛けてきた。

「包」

「はい」

「あわよくばの中身が知りたいんだけど」

「……確かに懸念材料が一つだけあります」

「それは？」

「天の御遣いです」

瞬間、慶祝が止まった。僅かに目を見開き、そのまま微動だにせずに固まってしまった。呼吸すら忘れたかのようなその様子に、おや？と包は疑問を差し挟もうとしたが、横からののんびりした声に遮られた。そのままその声に向き直り会話を続けるが、意識は未だ固まったままの主君に向けられていた。

「天の御遣いってなんだっけ？」

「流星と共に天降りて乱世を平定するとか何とか噂されるあれですよ」

「ああ、なんか麒麟やら九尾狐やらの親戚みたいなやつかー」

「問題は、その親戚が人の姿をしている事ですかねー」

「そりやまた繻子ベテンが埒りそうだなー」

のんびりした声の主、仲峻が緊張感の欠片も感じさせずにぼやく。彼女は既に嚴太守への疑いが、洛陽で事実と認定されるかもしれないとは考えていなかった。

「その、天の御遣いがどういう…?」

対して、窺うように問うてきた子明はまだ不安そうだ。だからなるべく気軽い調子で応えた。

「巴郡に降り立ったのだそうですよ。それで、太守様に庇護されたのだと」

子明が息を飲んだ。ああ、この子は何か知っている。何故、嚴慶祝が岩のように固まってしまったのかを。

「懸念って、もしかして桔梗おば様がその御遣いとやらを擁して次の天にくって事?

ばっかばかしい」

「同感ですけどね、時期が悪いのもあります。なんせ、この漢中で馬相が天子を僭称したばかりですからねー」

「天子の自称と、瑞獸擬きじや隔たりあるような気もするけどねえ」

「まあ、まだるっこしいですよ。本当にその気のある連中は、馬相のようにそのものずばり天子を自称しますし。補強材料として脇に置くにしても、自身が天を僭称しないのはなんともちぐはぐでしょうに」

だからあわよくばの域を出ないのだ。無論、実際に敵顯義が天子を自称しているかどうかは洛陽に座するだけでは知り様もなく、劉焉の報告にそう書かれていればそう扱われる危険性もあるが、少なくともその報告が即認定されるとは包は考えていない。

敵顯義が復職して以来、中央に対する態度を鑑みれば、その変節があまりにも突飛である事はすぐに思い至る。それも、胡散臭い噂を頼りに叛逆するというまだるっこしさが加味されれば、逆に信憑性が下がる可能性もある。

現帝は決して暗愚ではないし、脇には優れた智囊が控えており、十常侍は排除された。最後の懸念は丞相とその幕臣だが……、そこまで考えが廻った時、子明がぼつりと呟いた。

「そう言われると、御遣いが主体となるのはなんだか妙な感じがしますね」
「ん？ どゆこと？」

「あ、その、済みません。今の話と少しずれてしまいうんですけど、元々の天の御遣いの噂は、御遣いのみで完結してるじゃないですか。次の天子の元に舞い降りる、とかではなく、あくまで乱世を鎮める為だけにやって来る、というのが、ええつとつまり、なんて

言うか」

段々と自分でも何を言いたいのか解からなくなってきたのか、最後はしどろもどろになった子明の言いたい事を類推して適当に説明してみる。包にとつて天の御遣いは重要ではない。あまり時間を割きたくはないが、子明の感じている“何か”と、そこから慶祝の反応は見ておきたかった。

「つまるところ、政治利用する為の流言ではなく、社会不安から発生した救世の夢物語です。すからね。地に何事かあれば天より吉凶のいずれかを象徴する存在が出現する、というのは昔からよくある信仰ですよ。そこから考えれば、御遣いが主体でも本来問題ない話ですよ。今回のこれはそれが人である、というのが謀に利用できる隙間を生じさせたのでしよう。御遣いが何らかの獣を象っていたら、ありがたいものが現れました。やった！ 希望が見えた！ で、はい終り。なんですがねー」

「な、なるほど」

「そんな庶人の希望を野望の為に利用するたあ、業が深いやね」

長々と語った後に何の気なしにだろウ眩かれた仲峻の言葉に、慶祝の肩が僅かにぶれた。未だ判断材料が少ない為、御遣いと慶祝の間に何かあるのかは解からない、が何かあるのは確かなようだ、包はそこで考察を打ち切った。これ以上は本当に時間を無駄にしてしまう。

今は韓遂を討ち取る事に集中してもらわなければならない。だからはつきりと慶祝の方を振り返った。慶祝もいよいよ加減一時の衝撃から立ち直ったのか、目線だけで頷いてきた。よし、いつもの主公だ。

「さて、薜華さん。私の見立てでは御母堂は大丈夫です。ですから韓遂討伐に集中して下さい」

「…分かったよ」

言いながら立ち上がり、ふつと一息吐いた。慶祝が意識を切り替える時の癖だ。包のみならず、その癖を知る皆がその様子に安堵した。

皆が安堵したその空気を感じ取って、薜華は僅かに苦笑しながらも自省した。

もつとすっかりしなくちやな。いくら官位が上がるうとも、これでは母上に会わず顔がない。

何時も頼りにしている智囊が大丈夫と言ったのだ。ならば、己の務めを果たす事に全力を傾けねばなるまい。そして、その為に最初にやる事は決まっていた。此度の外征に合わせて任命された中領將軍号には、開府権限もあり、府佐の任用権まで与えられてい

た。その権限を得たならまず初めにやるべき事は以前から決めていたのだ。

「包」

「はい」

「汝を我、中領將軍嚴寿の軍師に任命する」

「謹んでお受けします」

晴れ晴れとした笑顔で子敬が応じた。薺華の軍師となる事、子敬がずっと望んできたもの。今迄も、役割上は軍師であった。しかし今、子敬は正式に薺華の軍師と成つたのだ。これで少しは報いる事が出来ただろうか？ うずうずと嬉しさが滲み出ている子敬を眺めながら思う。いや、これからだろう。これからその辣腕を存分に振るってもらおう。

「それじゃ早速、今後の方策を頼むよ」

「ではすぐに軍を編成して涼州へ向かいますでしょうか」

「早っ!? え、徴兵しないの?」

早速子敬に丸投げする薺華。それに対し張り切つて子敬が方針を打ち出せば、仲峻が驚きの声を上げた。

「先程も言ったように我々の敵は時間ですから。紅玉さんは亞莎ちゃんと先立つて涼州入りして下さい」

「そりやいいけど、なにすんの？」

「紅玉さんは現地で募兵をお願いします。一所で数を揃える事は考えなくて結構です。金城までの途上の郷邑で集められるだけ集め乍ら進んでください」

「はいよー」

「尤も、金城まで到達するかどうかは情勢次第ですけどね」

「まーそうだね。伝令は多目に連れてくよ」

「お願いしますー」

「亞莎ちゃんには策を幾つか授けておきますから、現地の地勢と韓遂の情報を照らし合わせて後は亞莎ちゃんにお任せします」

「は、はいっ！」

「韓遂軍に関しては巴鷹鏢局の涼州支局を使い倒して下さい。偵知に長けたうちの手の者も何人か連れて行ってもらいますので、上手く使ってやって下さい。こちらも連絡は密にお願いしますねー」

「心得ました」

子敬は二人の返事に満足げに頷き、続いて宗文を振り返る。

「潤ちゃんはいつも通り、輜重隊をお願いしますねー」

「お任せ下さい」

そこまで話が進むと、薺華が声を上げた。

「そうなるよ、全兵を私が直接指揮するのよ？」

「ふっふっふ、折角府佐の任用権を受けているんですから辟召すればいいんですよ」

「目ぼしい人材が居るんだね？」

「二人は予想付くよな」

「……ああ、凌霄か」

仲峻の言に依えて慶祝が呟いたのは、彼女や仲峻の巴郡での知己の真名だった。その名は王平おうへい*212、字を子均しきんという？人さいじん*213の血を引く少女である。薺華より一昨年下だが、安遠將軍府で武官として活躍していた。それが今回の馬相征伐の後、薺華が先帝の治療の為に招いた五斗米道の巫医張伯腊ちやうはくろうの供回りを買って出て、少数ながら板楯兵を率いて漢中入りしていた。

以来、王子均は漢中に留まっているのだが、薺華には旧交を温める暇が中々なく、母と義姉の息災を確認できた程度であった。今少し交流の時間が取れれば、天の御遣いの話を聞けていただろう。尤も、それで何かできたという訳でもなかっただろうが。精々、衝撃を受けて無様を晒す場が摩り替っていた程度だろう。

一方で仲峻は幾度か飲茶を共にしたりと仲を深めていた。二人は仲峻の母が安遠將軍府の長史を務めている関係で知己を得ていた。尚、主な会話の内容は阿蘇阿蘇をはじめ

めとした実に女の子の子したものであった。

「正解です！ 実は彼女には目を付けていたんで、お願いしてここに逗留してもらって
いたんですよー」

「あー、だから巴郡に戻らずいたのか」

「ええ……」

「薜華さんの累進も見えてましたからねー。本人にも快諾してもらってましたから大丈夫です！」

相変わらず裏で色々と動いてくれる軍師様である。子均もあれで中々しつかりした娘なので、母の許諾も得ているだろう、多分、きつと。しかし、今はその母が大変な時なのに本当に大丈夫だろうか？ともやはり考えてしまう薜華であった。

「まあ、桔梗おば様なら大丈夫っしょ。焰耶さんも居る事だし」

「ん、そう、だね」

顔に出てたかな？ と頬を一撫でしながら親友の言葉に応えた。

その後も子敬が幾つかの指示を出し、新たな人材を引き入れ、軍編成を手早く纏め、薜華の將軍としての初陣の幕が上がった。

敵慶祝が涼州にて韓遂軍と会敵した頃、洛陽には益州での叛乱の報が届き宮中は騒然としていた。

元巴郡郡吏で現在は侍御史を務める董和——鋼——は、その中でも一際胸を騒がせている一人だった。そんな彼女の元に来客が現れたのは、急報を受けて急ぎ出仕しようとする直前の事だった。

戸口にて鋼を待っていたのは、先日知遇を得た二人の男女。

女の方は初めて会った時と同じ大胆な露出をした衣装で、その自慢であろう見事な女体を冬の外気にも負けずに堂々と晒していた。

男の方は、——男の方は輝いていた。朝陽に照らされた新雪のような輝きを纏っていた。凡そ見た事のない生地 of 衣装。だがそれだけではない。一瞬、珍奇な品に目を奪われたが、違いはそれだけではない。寧ろ、羽織れば誰でも目を引く衣裳などは重要ではない。初見の印象を払拭する最大の変化。それは男の表情にこそ現れていた。優しげだが、何処か頼りない微笑を浮かべていたその面には、今は決然とした意志が宿っていた。

彼は誰だったろうか。確かに知り合つた筈なのに、まるで初めて見えたかのようだ。そんな考えが頭を掠めた鋼は、何時の間にか乾いていた喉で、何とか用向きを聞く事だけは出来た。

「……今、忙しいのだが、用件はなんだ？」

「桔梗さんが俺の所為で迷惑を被つてゐるって聞いたんだ」

その男、北郷一刀は迷いのない声音で告げた。俺の所為で。その言葉の意味を、鋼は直ぐには推し量れずに視線を横にずらした。その視線の先、一刀の隣りで、李曼成は誇らしげな、しかしどこか諦めた風情で腕を組んで事の成り行きを静かに見守っている。その様子を確認して、鋼は観念したように視線を白く輝く男へと戻した。

「北郷、君は……」

それは洛陽が天の御遣いを知る直前的一幕であつた。

第二十三回 如暴風雪

韓遂は馬寿成を討った後、混乱するその軍勢を蹴散らし、更には一部を吸収した。その上で軍を二つに分け、一部を隴西へと向かわせた。董丞相の居留守戦力への牽制目的であるが、その為に五万の兵を割いた。これには涼州に予備戦力を確保しておくという意図もあつての事だった。このお蔭で敗走後も影響力と脅威を完全に失うことなく、乱後の中央との交渉によつて嚴罰を免れ得た。

敗走。

そう、この涼州乱も矢張り驚くべき早さで治まった。荒れ狂う猛吹雪の如き錦馬超の攻勢に吹き散らされたのだ。だが、韓遂を襲つた嵐は馬孟起だけでは勿論なかった。

銀世界を赤く染め上げる一陣の暴風がその前に吹き荒れたのだった。俗に赤將軍と称される暴風が。

見渡す限りの白。生まれ故郷ではまずお目に掛かれない幻想的な、しかし漠とした寂寥に沈む風景。だが、今はその風景すらも観えはしない。眼前に積み上げられた白が視界を埋め尽くしている。屈み込んだ姿勢のまま、寒さに悴んで早半時^{一時}。手指だけはなるべく万全を保てるように焼き石を入れた厚手の巾着を常に握り、揉みしだいている。弓を肩にかけ、早く早くと敵を待ち侘びる。

それは冀城^{きじょう}へと続く街道（それも雪の下に埋もれ地元民でもなければどこまでが道なのか判別出来ないが）を臨む低丘に点在する不自然な盛り上がり^{の裏側}の模様。良く目を凝らせばすぐに気付かれる程度の偽装の内の事。しかし、何かに気を取られている人間の視野は、人が思うよりも酷く狭いものだ。だから大丈夫ですと請け負った仲間の言葉を信じて、黄崇——紅玉——は募兵で集めた涼州民兵と共に、半ば雪に埋もれながらじつとその時を待っていた。敵を射ち貫くその時を。

とは言え、この寒さは堪える。つい愚痴りたくなるのを周囲の気配を気にする事で抑える。紅玉の周囲、即ち、涼州民兵。土地の者は言え、よくもまあこんな糞寒い策に文句ひとつ言わず肅々と従うもんだ。有り難いけど。と振り返る事も、身じろぎ一つする事もなく思う。

三千近い人間の息遣いを感じ取りながら、紅玉はその中でも一際静かな呼吸の持ち主

に意識を割く。馬一族が慕われているのだろう事は募兵をして判った。だが、これだけの間人が余所者の官軍に従順に従っているのは、西城せいじょうで出会った女丈夫のお蔭だろう。実際、今この場にいる兵の殆どはその人物が掻き集めていたものだ。紅玉が募った兵は子明が討伐軍と共に率いている。

彼女が非常に協力的だからこそ、子明も遠慮なしに策を講じた。

包が後で声掛けそうだな。と口内で独り言ちる紅玉の予想は正しく的中し、この乱の後にその女丈夫王異おうい*214は恋人と共に厳慶祝の幕下に加わる事となった。

漢陽郡治冀県、その県城。馬軍閥の残りの主力が結集する筈のこの地にはしかし、その軍勢の影も見当たらない。血気逸った一派は韓遂に蹴散らされ、盟主不在故に動かない一派は集わず、残る一部は馬寿成の末娘が引き連れて長姉と合流する為に城を発ったからだ。

そこまでの情報を得て韓遂は事が順調に推移している事に満足していた。しかし、そこに水を差すものが現れる。赤將軍こと厳慶祝である。

馬孟起の派遣は読んでいた韓遂であつたが、漢中平定中の厳慶祝が、それも韓遂の思

惑を超える速さで涼州入りしてくるとは読めていなかった。

僅かに苛立ちを憶えたが、その軍勢が八千程と聞いて嘲笑に変わった。己の麾下には十万人からなる大軍が犇めいているのだ。それに対し、一万にすら届かない手勢で手向かつてくるとは、正気すら疑う愚拳である。しかし韓遂は油断しない。慢心すれども緩めはしない。漢中から北上してきた官軍に対して、二万を差し向けた。

そして自身は八万を率いて洛陽から来るであろう馬一族の至宝を呑み込む為の進路をとった。だが実際に呑み込まれたのは韓遂の方だった。八万の大軍は錦馬超と対峙したその時には、既に半数程を失っていたからだ。

韓遂の元に届いた情報では確かに薜華麾下の兵は八千程であった。詳細な内訳は、屯騎兵七百、北軍五千、薜華部曲二千、そして、王子均と板楯騎兵十騎。

しかし、それが全戦力ではない。黄仲峻が掻き集め呂子明が率いる民兵三千。王士同*215が呼び掛け掛け黄仲峻が率いる義兵三千。呂子明が接触を果たし、一時薜華の指揮下で合力する事となった馬岱*216麾下二千の馬軍閥騎兵。

戦場で集結するまで薜華と別行動を取り続けた涼州地縁の軍兵を、韓遂は見過ごし

た。馬寿成を慕い義憤によつて立つた民兵や、初撃で追い散らした僅かの敗残兵を特に問題視しなかつた。軍とは数だけ揃えれば良いというものではない。万が一糾合できても、碌な統率など取れる筈がない。相手がけちな匪賊ならばどうとでも出来るだろうが、自身が誇る韓軍閥が俄か連合にどうにかされるなど有り得ないのだ。当然の自負はしかし崩れ去る事となつた。

中領將軍嚴寿はそれをやつてのけた。二つの民兵には最初から薜華の幕臣が関わつていた。馬軍閥は柔軟な対応が出来る部将が率いていた。戦場では轡を並べるのではなく、相手に機動戦を強いて各所でそれぞれの軍勢が一撃を加えた。薜華自身が釣り餌として二万の敵兵の意識を釘付けにし続けた。要因はいくつもあつた。だが、それは簡単に破算に転がりかねない危ういものであつた。

その綱渡りのような戦況を、薜華はその豪腕でもつて渡り切つた。

「あれが閻行えんこう*217率いる韓遂の別動隊か」

「隊つて規模じゃないつすけどね」

長く続く坂の上から二万にも届く軍勢を眺めて薜華が言葉を漏らせば、隣で轡を並べる王子均が応えた。

白く塗りつぶされた世界の中を黒々とした大蛇が此方に向かつて這い上がつて来る

光景は、余り気持ちの良いものではない。しかし二人には臆する気配など微塵もない。

「あれに七百ちよいで突つ込めとか抜かしてくる軍師も大概だけど、あつさり請け負う
 薙姐も本^{ほん}当^とあれつすね」

「なんだ、怖いのか？ 凌^{リンシヤオ}霄」

「まつさか」

子均の言に片眉を上げながら問えば、快活な笑顔で答えを返してきた。

「半分とは言え神兵の血が流れるアタシつすよ？」

「ああ、期待してるよ」

そんな軽口に興じてる間に蛇がややきつめの勾配を上り始めた。特に身を隠している訳でもないのに、此方の姿に気付いてはいるだろうが、特段何か動きに変化はない。あちらの斥候は子均が連れてきた板楯兵に潰されており、一方的に視られているにもかかわらず、だ。

「成る程、韓遂より数段御しやすそうだ」

「完全に舐め腐りやがってますよね」

「そうだね、いい事だ。……あの派手なのが闇行か？ 随分と前のめりに居るじゃないか」

軍中にそれらしい人影を見付け、都合が良いなど算段を付けていると、隣から遠慮の

ない声が届いた。閻行軍を見据えたまま短く返す。

「聞いた話、常に最前に立つ薙姐が言うこっちゃないつすよねー」
「いいんだよ、私は」

そう答えながら、結局自分は人を率いるのが本来的に得手ではないのだと再認識していた。どんな戦であってもまず自分でやろうとしてしまう。そんな薙華に屯騎兵を得たのは正に僥倖だったのだ。戦場を縦横に駆け巡る薙華に追従できる騎兵隊。彼女の懐刀が天意と感じるのも当然と言えた。今も坂下からは見えない程度に後ろに下がった位置に屯する頼もしい騎兵達が、今か今かとその時を待つ。

此度の大戦でもやはり薙華は先頭を駆け、屯騎兵は主に続く事になる。立ちほだかる敵を薙ぎ倒しながら。いつもと違うのは、今回から新たに十一騎がそこに加わる事だ。

数ある異民族の中でも精強で知られ神兵と称される板楯兵が十騎。彼等を率いるはその神兵の血を半分受け継ぐ少女、王子均。薙華の親衛隊として期待される新戦力である。

そうこうしている内に、敵軍が上り坂の中ほどに達した。先頭付近が少々騒めいている。此方が全く動かないのを訝しがっているのだろう。たった二騎。斥候かと思えば、何故か坂の頂上で自分達を睥睨して微動だにしない。

疑念と、ほんの僅かの動揺。伏兵を気にして周囲を窺うが、たったの二騎で大軍を惹

き付けるなど常識的に考えて有り得ない。実際にそのたった二騎に注意を持っていかれているにも関わらず、閻行軍の誰もがそう考えていた。

やがて行軍の足が緩くなったのを見て、薙華が誰何の声を上げた。

「閻行つてのはどれだ？」

この人、挑発上手くなつたなあ。という子均の視線を受けつつ、閻行と目した人物を睨む。それは矢張り閻行であつたらしく、激高しながら声を荒らげた。

「っ!? 生意気な小娘め! 貴様何者だ!!」

「私は厳慶祝。此度、中領將軍の位を受けて貴様らを殲滅する者だ」

「たったの二人でか?! 笑わせるっ! 中央には阿呆しかおらんようだなあ!!」

「そうだな、この数を殲滅するのは面倒そうだ。お前の頸だけにしよう」

「……ガキイ!!」

怒りに任せて馬の腹を蹴る閻行に、周囲の敵兵も慌てて馬を奔らせようとしたその時には、薙華は既に坂を駆け下りており、更にその後方には薙華の呼吸を知り尽くした七百騎と、僅かに遅れた十一騎が追従していた。

まさかの呐喊に、閻行軍前曲が度肝を抜かれる。真正面から不意を討たれるという珍事に前曲敵兵は浮足立った。お蔭で頭に血を上らせるままに最前に出ようとする大将がつんのめる羽目になり、更に動揺が広がる。その時にはもう、薙華の刃は最初の数人

を両断していた。

「……来たか」

眼前の雪饅頭を眺めながら紅玉が小さく呟いた。

慣れ親しんだ気配が近づいて来ている。その後から想定よりも随分と怒気を孕んだ軍気が猛迫しているのを感じ取ると、あいつなんか余計な事言ったな。と知らず半眼になつて口中で呻いた。

まあいいか。敵が平静を失つたのなら嵌めやすくなるだけだ。その分、此方がとちれば反撃は手痛いものとなるが、上手くやれば問題ない。そう考えて、首だけ回して後方に声を掛けた。

「そろそろ来るよー。はい、固くならないー」

端的に告げた言葉に、義兵が身を強張らせたのを敏感に察して、のんびりと続けた。

「だーいじようぶ、私らの大将は韓遂の三下なんぞ問題にならないほど強いんだから」

「で、でも……」

「相手の数も気にしなくていいよー。この場にいる三千だけで戦う訳じゃないんだか

ら」

「は、はい」

「はい、他に疑問のある人……。いないねー、んじや、もう聴こえてると思うけど、味方が駆け抜けた後に敵さんが通り過ぎるところを狙うよ。私が合図と共に一射射るから、それに続いてー。狙う必要はない。矢を飛ばせば万々歳だ。的は阿呆程あるからね」
あくまでも緩く緊張感を伴わずつらつらと話を続ける紅玉に、次第に義兵達の肩から余計な力が抜ける。

「私らは私らのやる事だけやればいい。後の事は他の連中に任せちやおうな」

最後にニヤリと笑いながらそう言つて紅玉は正面に向き直り立ち上がった。

「立ち上がつて弓構え！」

寸前までの緩い声音とは全く違う凛とした響きに、涼州義兵は戸惑うより先に従つていた。流れる様に「放て!!」との号令と共に弓を射放てば、その鋭い放物線に続く数多の矢雨が閻行軍中陣に降り注いだ。

「反転突撃！」

低丘から放たれた矢の風切り音を捉えた刹那、敵將軍が号を發す。仲峻率いる涼州義兵の矢が敵に襲い掛かる頃には全隊反転を終え、突撃體勢を取つていた。そこから間を置かず二度目の突撃。やはり僅かに遅れる王子均——凌霄——達。敵慶祝の指揮に慣れていない以上に、雪に埋もれる足下の問題が大きかった。益州は降雪自体稀で、積雪など記憶にないほどだ。無論、そんな中を馬で走り回るなど初めての経験である為、どうしてもいつも通りとは利かない。しかしそれは、屯騎兵は兎も角として慶祝も同様の筈であつた。にも関わらず、彼女はこの戦場に至るまでの道のりで、雪中馬術をものにしていた。

雪を蹴立てて、何の氣負いもなく大軍に向かつて疾走する慶祝の煌き棚引く銀髪。導かれるように後に続く騎兵達にも怖れは見えない。人、馬、兵が一体となつて対面の巨軀を貫く。

背筋が凍るほどの興奮を覚える。野蛮な戦場でのみ姿を現す美がそこにあつた。凌霄が見惚れる目の前で、慶祝が動揺する閻行軍に更なる猛撃を加えた。

最初の突撃。挑発に乗せられた閻行の頬を裂くところまで届いた。二度目の今回は閻行の巨槍を砕いた。頭に血が上りきつていた閻行も、これには色を失つた。

冷静さを欠いたまま勝てる相手ではないと遅まきながらに氣付いた。氣付くのが遅過ぎた。何故なら、軍の最後方からも悲鳴が届いたからだ。

閻行軍後曲。長く伸びた最後方には、仲峻の不意討ちを合図として馬岱、字を伯瞻はくせん* 218が一隊を率いて喰らい付いていた。その勢いは凄まじく、韓遂に対する馬軍閥の忿怒がそのまま叩き付けられていた。後曲だけでも伯瞻率いる騎馬隊を軽く上回る兵力があつた筈が、見る見るうちに崩壊していった。

閻行軍は最早何処も彼処も混乱していた。大将の閻行が慶祝の猛攻に耐えるのが一杯で、碌な指揮を取れずにいるのが最大の要因である。その為、各曲各部の指揮官がその場の判断で兵を纏め、何とか活路を見い出すべく抗戦していた。流石に涼州三大軍閥の一角を形成する軍だけあつて、ここまで畳み掛けられても決定的な壊滅を免れていた。

しかし、そんな閻行軍を更に追い詰める軍勢が、冀城方面から雪煙を盛大に立てて迫ってきた。慶祝と共に漢中から北上してきた中領軍本軍だ。派手に銅鑼を鳴らしながら存在を誇示しての登場。最後の一押し。遂に士気が崩壊した閻行軍は雪崩を打って遁走したのだった。

嗚呼、桔梗様。この人の元に残る事、お許しただきありがとうございます。

今は遠い主君に感謝の念を送りながら、凌霄は悦びの狂笑を上げて慶祝の後に続き戦場を蹂躪した。

敗走する閻行軍を最後まで追撃していた馬伯瞻が涼州騎兵を率いて戻つて来た。

追撃、と言つても怒りに任せて深追ひしていた訳ではない。相手の敗走経路を誘導していたのだ。闇雲な追撃ではないと直ぐに気付き、伯瞻の自己判断でそこまで働いてくれたことに感謝し、素直に任せていた。

あの孟起に、彼女のように機転の利く副将があつたならば、涼州時代の錦馬超が大陸中に雷鳴を轟かせる戦功を容易く積み上げたのも納得だ。

心中の称賛を表情に出しながら出迎える薜華に、伯瞻も快活な笑顔で応えた。

「初めまして！ 厳將軍。噂はお姉様からいろいろ聞いてるよ」

「こちらこそ、伯瞻。私も翠から色々聞いてる」

「蒲公英たんぼほでいいよ。將軍には助られたしね！」

「なら私も薜華で」

薜華と伯瞻はこれが初顔合わせである。伯瞻と最初に接触したのは子明だった。そして、今この場に集うまで子明以外の誰とも接触はなかった。敵に糾合を悟られない為である。

先行して涼州入りした子明が精力的に収集した情報の網に、韓遂に撃破された軍閥騎

兵を僅かながらも再結集し、反攻に転じる機を窺っていた伯瞻が引つ掛かったのだ。その存在を知った子明の動きは早く、直ぐに会見を持ち、対韓遂軍への戦力に組み込んだ。伯瞻としても渡りに船であつた為、とんとん拍子に話は進み、反攻初戦のこの機、この場へ馳せ参じる算段を付けていた。果たして伯瞻は絶好の機に戦場に突入し、憎き韓遂の片腕を見事追い散らした。

あとは子明の仕事である。

そう、この戦はまだ終わつてはいない。しかし薜華には戦中特有の緊張はみられない。最早決した大勢を揺るがせる程の将器を闇行から感じなかつた事と、子明がこの段階でし損なう事などないという信頼故であつた。

それを感じ取つた伯瞻も肩の力を抜き、薜華と束の間の交流を楽しんだ。

——
　　這う這うの体で雪原を進む闇行の足取りは重い。それは体中を覆う痛み在所為でもあり、負け戦の屈辱の所為でもあり、何より、逃げ帰つた後で韓遂に申し開きしなければならぬからだ。

「くそつ、御大将になんて言い訳すりゃいい……」

誰にともなく愚痴が漏れる。後に続く配下と兵は何も言わない、言えない。しかしそれに応える声が響いた。

「そんな事に悩む必要はありませんよ」

その声に顔を上げれば、前方に広がる高台の上から一人の少女が此方を鋭く睨み付けていた。

憶えのある光景に、閻行の兵士が怯む。内心では閻行も同様であつたが、兵士の手前、虚勢を張る意気地だけは未だあつた。

「また待ち伏せか！ どいつもこいつもここそしやがつて!!」

閻行の悪罵には応えず、亞莎はただ静かに手を上げた。その挙動だけで敗残兵は蜘蛛の子を散らすように逃げ出し、閻行の配下は己が將を逃がす為に面前に立ち退却を促した。

しかし無駄な事。事ここに至つて亞莎が、兵卒は兎も角として敵將の逃亡を見逃す筈もなかった。

かくして、韓遂軍閥部將閻行は中領將軍府司馬呂蒙に討ち取られた。

閻行敗死の報は直ぐに韓遂の知るところとなった。

韓遂陣營の幹部は皆仰天し、それは韓遂も例外ではなかった。すぐさま事実確認が行われ、それが揺るぎない事実であると知ると、韓遂の侵攻は一時止まる。次の一手をどう打つか、閥内で意見が割れたのだ。

また一隊を差し向けるか。しかし二万で敗れたのだから半端な兵力では意味が無い。半分を差し向ければ錦馬超との決戦が危うい。隴西の五万を呼び戻そうか。それも時間的に厳しいし、董卓閥に呼応されたら余計に拙い。ならば全軍で取って返すか。これなら後顧の憂いを間違ひなく断てる。三輔を目の前に今更後進するのか――。

まるで方針が決まらない。そうこうしている間にも赤將軍は確実に韓遂に迫る。それも兵站路を潰しながら。その急報を受けて韓遂は迅速な行軍に定評のある三将にそれぞれ一万を預け差し向けた。その上で、残り全兵も一旦後退。まずは慶祝を確実に仕留めると決めた。

包は斥候の報告を受けてほくそ笑んだ。足止めは成った。

腹が減っては戦は出来ませんものね、と機嫌良く次の策を詰める。まず此方の狼藉を止める為に足の速い軍を差し向けてきた。総数では閻行軍を越えるが、内情は一万の軍が三つだ。この三軍で此方を釘付けにしておいて、本隊が合流してから確実に押し潰す、と。

ならば、それより早く一万づつ削っていけば良い。対応の速さは中々だが、同格三人を放ったのが韓遂の失策だ。包の笑みは深くなるばかりであった。

韓遂が中領軍と会敵した時にはその総兵力は五万のみとなっていた。先鋒の三万はものの見事に潰走していた。

今回も矢張り釣りによつて韓遂軍は崩壊していた。

まず大将首の蔽慶祝が釣り餌となる。そこに今回は馬伯瞻が同行した。これに一万がまず釣れる。土地を良く知る伯瞻が巧みに先導して逃げ回る事で、付かず離れずの逃走劇を繰り広げた。

諫めに回った残り二将には見え見えの伏兵に気付かせた。そちらにまた一万が釣れた。策を見破つたと嬉々として罨の巢に飛び込んできた。最初に滅んだのはこの軍だった。慶祝と伯瞻麾下以外の全兵と罨の山で殲滅した。

最後の一将は慎重だった。包としては二将同時に罨に嵌つて欲しかったが仕方ない。それに特に悲観する事もなかった。この将は慎重過ぎた。日が暮れるまで鬼ごっこに夢中になった将とは無論合流できず、その場で陣を築き野営に入った。包はこれに対し、少数を残し敵陣の周囲に分散配置。銅鑼や太鼓で不定期に連絡を取らせた。内容に意味はない。ただ夜を徹して散発的に響く音に、敵兵は精神をすり減らす事になった。

敵の手に乗らぬよう陣に籠もる敵將が、痺れを切らし一帯を探索させるも、少数故に引き払いも早く補足はされなかつた。この時点で嫌がらせと気付いたが、だからと言って夜中に陣を引き払う事も出来ず、改めて討伐隊を編成して周囲に放つても戦果は得られなかつた。

翌日寝不足に陥り士気の著しく低下した軍を率いて攻勢に出る訳にもいかず、引き続き陣に籠もつた。

その間に包は慶祝達と合流し、易々と猪狩りを果たした。

さらに翌日。引き籠もりの元に偽報が届けられた。韓遂と馬孟起の会敵である。これで援軍は期待できない、どこるか自分達が急ぎ本隊と合流しなければならなくなつた。焦りは隙を生み、正常な判断から人を遠ざける。

急いで陣を引き払おうとしたところに急襲を受ける。焦りは更に大きくなる。碌な抗戦もせずに本隊目指して遁走した。碌に軍装を整える間もなかつた者も多かつた。多少の被害が出ても戦の体裁を整えられる態勢になるまで、敵の急襲を受け止める決死隊を矢面に出すべきだった。一部を切り捨てても全体として戦支度を整えてから統制を保つた退却であれば、後の展開はもう少し違つていた。

しかし、慎重に過ぎた判断からの現状があり、盟主の危機まで重なつた。積もり積もつた焦燥によつて判断力は反転し、拙速だけを求めた。

結局、急ぐその先で簡単に待ち伏せに遭い、先の二人の後を追った。

第二十三回——了——

馬孟起が韓遂と対峙した時には既に大勢は決していた。

策に嵌められ五万を失った韓遂は、怒りと屈辱に塗れながらも、中領軍の散発的な嫌がらせに効果的な反撃を果たせずにじりじりと戦力を削られていった。大きく動けば今度はどんな策に嵌められるか判ったものではない。しかしやられつ放しでもいられない。迎撃に徹してどんな挑発陽動にも応じなかった。

戦力が削られているのは慶祝の側も同様であり、元々の兵数の違いから実際には此方の方が深刻であったが、それを悟らせないように馬孟起着陣まで韓遂をこの地に縫い付けていた。

そして、美名高き錦馬超が戦場に現れると、たった一度の交戦で韓遂軍は崩れ去った。ここに涼州乱は一応の決着を見た。

「でも韓遂は逃がしちゃったけどいいの?」

「正直どちらでも。生きてるなら涼州の重石として、今暫し異民族に睨みを利かせる役割を負わせておけばいいと、中央も判断するんじゃないですかねー」

戦後処理の場で薜華がそう疑問を漏らせば、子敬がつつらと答えた。それに孟起が反応する。

「追撃を止めたのはそれが理由か。あたしとしては奴の首を振り切つてやりたいくらいなんだけどな」

「まあまあ、お姉様。おば様も一命を取り止めてるんだし、いいじゃない」

「お前は薜華に付いて散々暴れ回ったからすつきりしてるみたいけどな、あたしは暴れ足りないんだ!」

生死不明とされていた馬寿成は危ういところで命を繋いでいた。その事実は孟起の怒りを一段下げる役に立った。伯瞻よりその報せを戦場で受け取らなければ、誰の制止であっても振り切つて、韓遂を地獄に叩き落とすまで止まらなかつただろう。

「でも喉元過ぎればまーたやらかしそうじゃない? あのおばさん」

「今暫しの間に王朝を盤石にしなれば、という事ではないでしょうか」

「亞莎ちゃん、正解です。新帝陛下の御世を安定させるのは正に急務。その為にも翠さんには中央に居て欲しいんですよねー」

「その為に韓遂も利用する、か」

韓遂征伐に出る前にも漢中で子敬が予測していた今後の展望。その為には乱の早期鎮圧は勿論、その後の土地の鎮撫には叛乱首謀者すら利用しなければならない。そして薜華達も一刻も早く洛陽へ凱旋しなければならぬ。曰く、凱旋までが反乱鎮圧ですよ、との事である。

「漢中に寄る間はないかな？」

「あー、御方おんかたと留守番のトラ吉かー」

「御方？」

「こつちの話ー。気にしないで」

「お、おう」

御方とは無論先帝の事である。下手な呼び方が出来ぬ為、回り回って曖昧な呼び方になっているのだが、そんな事情など知る筈もなく、ぼかしながらも薜華達が明らかに敬った扱い方をしていると窺える人物にまるで見当がつかない孟起が素直な疑問の声を上げた。

それに対し、直球で誤魔化す仲峻。いつにない強い調子に、つい怯む孟起。面倒な説明を一切省いて「触れてはならない」と示した。

薜華をはじめとする幕僚達もそんなやり取りはなかったと言わんばかりの態度を取

るのを見て、馬一族はこの事に関する不干渉を決め込んだ。

「そうですね、亞莎ちゃん。お迎えをお願いできますか？」

「畏まりました」

「お迎えするんだ」

「今でも不安がつのつてるんだ。長期に亘ってお傍を離れているのはどうにも……」

「いやでも、それってつまり洛陽に……」

「お前等せめてあたし等が居ない所で話せよ!!」

最後に牽制しておいてそのまま余人に知られては不味い話を続ける薜華達一同に声を荒らげて抗議する孟起。さもありません。

「ごめんごめん」

「お前のあたしに対する謝罪はいつつも軽いんだよ薜華!」

「なんか思ってたよりすつごい人だね、薜華ちゃん」

「なんか翠にはつい甘えちゃうんだよね」

「甘えなのかな? 甘えだったのか?!

わなわなと震えながら抗議を続ける孟起。そんな孟起と薜華の様子を可笑しそうに眺める伯瞻。俄かに弛緩した空気が流れる。

しかし、その空気を切り裂いて飛来するものがあつた。それは、高空から一気に薜華

の額に突っ込んだ。

「いったあ?!」

「薜華様!」

「な、なんだ?!」

「ひやわわ! 何事です?!」

「……あれ、これ地和の鳶じゃん」

突然の襲来物に色めき立つ一同。そんな中、仲峻がその正体に気付く。それは、かつて呂奉先の邸で張三姉妹の次女が使役し、薜華に預けられ、漢中にまで連れて行った鳶で間違いなかった。

漢中にて薜華が疫鬼虚耗シユハオを憑り付かせた後、彼の歌姫宛てに手紙を持たせて飛び立たせていたのが今舞い戻って来たのである。

手紙の内容は勿論虚耗に関する相談であった。それに対する返答の一部が、この鳶の帰還の仕方に現れていた。

「うう…、地和からの返信か。って、ちよつとちよつと。…分かったから引つ張らないで!」

「凄い。たんぽぽ、鳶に引つ張られて連れてかれる人初めて見たよ」

「心配するな蒲公英。あたしも初めてだ」

あまりの展開に見送るしかできない一同を代表するかのような馬伯瞻の呟きに、馬孟起だけが答えた。

鳶に引つ張られて人氣のない所までやって来た薜華。流石に途中からは周囲の目を気にして肩に止まつてもらつて急ぎ足で移動したが。

周囲を見回し誰も居ない事を改めて確認すると、肩の鳶に視線を向けた。すると、鳶はまるで大きく息を吸い込んでいるかのように身を反らした。実際、その胸が大きく膨らんでいる。あ、嫌な予感。と薜華が思い至つた瞬間その耳元で怒号が響いた。

「こんのバカ薜華！ あんた何考えてんのよ!!」

薜華の鼓膜を強かに打つたそれは、間違いなく珠玉の歌姫にして凄腕の妖術士の声だった。

第二十四回 戦陣妖夢

くわんと響く頭と驚愕に脈打つ胸を抑え込み、友人の怒声を響かせた鳶に視線を向ければ、ついつと右脚を掲げる暗褐色の猛禽。見れば、そこには紙片が括り付けられていた。

手紙かと思いほどこいてみれば、それは薙華には意味の読み取れない文様と文字列で構成された、いわゆる呪符であった。

「えっ……と、どうすれば?」

頭を捻る薙華に鳶がその嘴で大地を指し示した。その意図するところを読み取って、符を大地に貼る。実際には単に置いただけだが、気分的な問題だ。

しかし、何も起きない。暫し待つが、うんともすんとも言わない。符に書いてある文句を読み上げるなりするのかな? と思い、今一度符の内容を注視しようとした時、肩の鳶がピイツと一声鳴いた。その声に応える様に符が震えた。いや、その下の地面が震えているのだ。

何が起こるのか。緊張しながら見守る薙華の目の前で、するりと大地から歌姫が生えてきた。生えてきた、というのは語弊があるが、その時の薙華にはそう感じたのだった。

唾然とする薺華の目の前に、勝気な瞳を吊り上げた張宝、字を公平が、肩を上下させながらも堂々と出現したのである。

「……暫く振り」

驚愕したまま、何とか言葉を紡いだ薺華に対する公平の返礼は、大上段から振り下ろされた手刀だった。

第二十四回 戦陣妖夢

「こんのバカ薺華！ あんた何考えてんのよ!!」

「うん、それはさつき聞いた、かな」

鳶を通してではあるが、と心中で補足する薺華の両頬を、公平が思いつ切り左右に引っ張った。

「口答えるのはこの口いいっ!？」

「ご、ごひえん……つて」

「つたく、役鬼狐法*219すら知らない癖に鬼神附體*220なんて無茶にも程があ

るでしようが!!」

「はい、すいません」

言つてる意味はさっぱり解からないが、ひたすら謝り倒す薜華であった。遠く豫州に居る筈の彼女が尋常ならざる法で涼州にまで駆け付けてくれたのだ。相当心配をかけたしまったのを、否が応にも自覚するというものだ。それが嬉しくもあり、それ以上に申し訳なかつた。

実際、公平は土行遁術*221と迅行法*222を併用してまで薜華の元に急行してきたのだ。妖術や方術に明るくなくとも、その心配振りは察せられるというものである。

その後も暫く素人には理解不能な専門用語を交えた叱責を続けていた公平だが、薜華がやややげつそりとした頃合いにはそれも止んだ。そして、薜華がその事に気付き顔を上げれば、じつと此方を見詰めていた。その瞳は平時にない幽かな輝きを灯しているように見えた。

「……ふん、確かに憑いてるわね」

そう呟き、徐に薜華の額を鷲掴みにしてくる公平。反射的に身を硬くする薜華。公平は意に介さず真剣な目つきで息を整え、そして、くしゅんつと可愛らしいくしゅみやみを一つ。

微妙な沈黙が場に降りた。

「……寒いわ」

「そうだね」

「今更だけど、ここ何処なのよ」

「涼州だけど……」

「西の端じゃないっ」

何となく先までの空気が霧散してしまい、現状の確認となった。公平も頭に血が上っていた事を自覚し、一旦気を落ち着かせようと、話題を転換させたのだ。それには薜華の中に潜む疫鬼に、薜華を害する気配を感じなかつたのも関係していた。何を考えているのかは分からない為、油断はできないが、危急の対処をこの場で施す程ではなさそうだと判断を下していた。

「それにしても、ここが何処かも判らずによく来れたね」

「この子に出口の目印を運ばせたからね」

「ああ、あの符はそういう意味があつたのか」

「あんたの邸にも印を施しておいた方が良いかもね」

「取り敢えず、洛陽に戻ったら直ぐに参内するから、その後で頼もうかな」

「これから帰還？　もう戦は終わったのね」

周囲を見回しつつそう言ちる公平。戦の最中に乱入しなくて助かった、と言ったところだろうか。確かにその通りだと、つい口に出た。

「乱戦の最中に飛び込まれてたらどうなってたか……」

「流石にあんたの周辺が静かな時に呐喊するよう言い付けておいたわよ」

「私の額に呐喊するところまで指示してたんだね……」

半眼でそう返せば、あんたの無茶を思えば妥当な指示よ。と悪びれもせずに言い切られてしまった。結局、再度謝罪する事になったのであった。

鳶に連行された葬華が、劉玄徳の召し抱える歌姫三姉妹の真ん中を伴なって戻って来たのは四半三十分時程経ってからだった。

流石の葬華の幕僚もこれには唖然としていたが、その中でも魯子敬の立ち直りは早く、軽く問い掛けると「えーっと、偶々近くまで来てたから合流したんだよ」という見え見えの言い訳にも突っ込みを入れず、「そうですか」と流して陣の撤収を進め洛陽帰還へと周囲を迅速に動かしした。

あまりの淀みのなさに、疑問符を抱えたまままで誰も彼もその流れに従って動き出し

た。無論、言いたいこと聞き出したい事はあるが、部外者の馬家は触らぬ神に祟りなしとばかりに、仲峻と宗文は子敬に一任して出払った。公平に対して思うところのある子明はやや躊躇ったが、矢張り先の二人と同じ判断を下した。

余談ではあるが、子明が公平に対して当たりが強いのは薺華が怪しげな術に興味を示したからであり、概ね薺華の所為である。尤も、口笛すら下手糞な薺華には嘯術しやうじゆつを修める芽はまるでなかったが……。

「それで、薺華さん？　これはいったい何事なんです？」

そうして皆が忙しなく働きだし、周囲から人影が途絶えてから子敬は笑顔で問い掛けた。いつもと寸分たがわぬその笑顔が、今は酷く怖い。

「ああ、うん。……ちよつとした厄介事が、ね」

「それは解つてます。その中身をお聞かせ下さい」

「ちいも前後関係を知りたいわ。なんでそんな真似したのよ」

つい言葉をに濁せば、笑顔を揺るがさぬままに子敬が追及を強める。それに便乗してきた公平の言に、一瞬だけそちらを見遣り、成る程、と頷いて子敬は笑顔を消した。

「お一人で抱え込まないで下さい。地和さんにだけ相談されたという事は超常関係でしようけど、何のお話も通されてなければ、私達は訳も解らず貴女を失うかもしれないのですよ？」

「いめん」

言葉以上に何もつくろわぬ真剣なその瞳に、たった一言しか出てこなかった。

しかしその一言に込められた想いは通じたのだろう、子敬の雰囲気少し和らいだ。それを感じ取り、薺華は子敬と公平に己の敵の事を語りだした。

「で、結局、自分が狙われてる理由は分からず仕舞いね……」

ありありと疑いを表に出して呟く地和。

「あれで秘密の多い人ですからねえ」

それに対し、飄々と答える子敬。

洛陽への帰還途中、長安まであと一息ということろまで来ていたある日の晩。魯子敬の幕営である密談が交わされていた。

慶祝の私敵を討つ為に、彼女に憑りついている鬼怪を先導に立てて夢の中から奇襲を仕掛ける。

地和はその襲撃に同行する事となった。その為に洛陽へ急ぐ行軍の最中で準備に勤しんでおり、この日、漸くそれが整ったので決行と相成ったわけであるが、その直前に

子敬に誘われ、こうしてその幕営に訪れていた。

「なによ、興味あるわね」

「いえいえ、知ってる訳ではありませんよ。ただ、私の勘が囁いただけです」

「なあんだ」

「それであの人の軍師になろうと決めたんですよ。いや、懐かしいですね」

「……薺華もだけど、あんたも大概ね」

「ひやわわっ!?　なんでですか!　……でも、謎の術士集団から付け狙われるとは思

いませんでしたけど。いやはや、本当にあの人と一緒に居ると退屈しませんよ」

「呑気なもんね」

実際にそう思っているわけでもなさそうに地和がぼやく。

「ただ、今回の事で端緒を得たと思いますよ」

「……なんの?」

「私が薺華さんに惹かれたその理由。そしてそれは、件の術士集団が薺華さんを標的とする理由にも繋がってるんだと思います」

「へえ、聞かせてもらおうじゃない」

「連中の目的は『正しい歴史の流れの為に』、という事らしいですね」

「そうね、虚耗もそんな事言ってたわね」

「なんとも遠大かつ妙な言い回しと思いませんか？」

「大仰とは思うけど……」

「正しき世の為だとか、善き未来の為ではなく、歴史の為だなんて私は引つ掛かりますねー」

ふむ、と頷く地和。改めて言われてみれば、なんとも胡散臭い響きだ。

「地和さん、今この時を、私達が過こしている日々を歴史と感かじますか？」

「そう言われると変よね」

「歴史なんて過去のものですよ。遠い未来で今日こんにちの事が史記や漢書のように記されるのは当然でしょう。その中に薜華さんの記述もあるでしょうね。しかし、その当時に活躍

した人々が『今、自分達は歴史を生きている』なんて考えて生きていたでしょうかね？」

「そんな余裕のある奴なんて殆ど居ないでしょうね」

「ま、己の業績を後の歴史に残そうなんて太い考え方してた人物もないではないですが、普通はそうですね」

「で、連中の主張が変なのはわかったけど、結局何がどう可笑しくて、それがどう薜華に繋がるの？」

まだるっこしい子敬の言い回しに、地和が問い掛けた。自身でも考えを巡らせながらの問い掛け。何がどう友人に繋がるのか。それだけではない。何か予感がする。方術・

妖術の才能が開花してより鋭敏になったその感覚が告げる。自分にとって不快な何か
が繋がっているのだと。

「易占は未来を予測する法ですが、術士集団は更にそれを突き詰めて未来を知見できる。
或いはさらに飛躍して未来から来訪したと仮定しましょうか。すると彼の敵共から見
ると私達の生きる今現在は、連中からすれば過去の歴史となるわけですね」

「……或いは未来の史書でもあるのかもね。太平要術なんて代物もあつた事だし」
「ですね」

地和の顔が意識せず歪む。自分達が生きるこの瞬間を俯瞰して識る術の示唆。史書
に書かれる類いの事変。厳慶祝と自分達姉妹が共に渦中にあつたあの乱。

「その連中の知る歴史と今現在に相違があるとしみましょう」

「その原因が薺華にある？」

「少なくとも連中はそう考えているんでしょうねー」

「それは例えば、…例えば、征伐される筈だつた叛乱の首領が生き延びている、だとか？」
「……可能性は高いかと思えます」

嗚呼、敵だ。こんな所に不倶戴天の敵がいた。

「……ふざけんじやないわよ。ちい達はね、武力叛乱なんてこれっぽっちも望んじやい
なかつたわ。ちい達の歌で大陸中を熱狂させてやりたかつたのよ。それが、それを…、

あの大乱が正しい？ ふざけんじやないわよっ!! あんなわけわかんない動乱でちい達の顔が晒されなかったのが気に喰わなくて薙華を殺す?! 上等じやない! そんなの絶対ちいが許さない!!」

震え声での呟きは、内面の荒波に同調するようにすぐさま激昂となつて吐き出された。荒れ狂う怒りの奔流は、未だ見ぬ敵へと向けて視えない怒濤と化して渦巻き、逆巻き流れ出した。最早この激流を止める術はない。地和にその気がないからだ。

例え二人の予想が外れていたとしても関係ないと、地和の予感が割れ鐘のように告げていたからだ。どのような理由であれ、己が敵共は自分を許容しないのだと。

それはこつちの台詞よ。怒りに燃える眼で地和は心の中で宣戦布告を告げた。

「どうしたの地和? なんか凄い殺る気だけど」

「何でもないわ」

そうは言つてもなあ、と首を傾げる薙華。素人の自分が心配だから同行するという雰囲気では全くない。小さく華奢な肩を怒らせ、控え目な胸を張り、可憐な瞳には決意の輝きを湛えている。まるで自身が決戦に赴かんとしているようだ。

葬華の幕営に共にやって来た子敬に顔を向けると、曖昧な笑みで誤魔化せられた。本人の口以外から理由を語る訳にはいかない、という素振りだ。

「あんたの敵がちいの敵でもあつただけ……」

「……そつか」

公平に視線を戻すと、静かにそう告げられた。どのような経緯を経てその結論に達したのかは知らないが、どの道奴等はこの世界に生きる人々全てにとつて敵と言つても過言ではあるまい。

私だけを否定して終わるとはとても思えないしな。

心中で独り言ちると、ふっと一息気を入れ直す。

それにどの道、彼女を矢面に立たせはしない。公平はあくまでも疫鬼が妙な真似をしないかの監視役だ。不遜な術士共を駆逐するのは自分の役割なのだから。

この晩、厳慶祝は虚耗を放ってきた李意をはじめとする六人の術士を仕留めた。その殆どが不意討ちの一刀での決着であつた。術士共が如何に神秘の業を得ていようと、一級の武を揮う慶祝に不意を突かれてはその業前を披露する隙も無く散つていった。

「呆気ないもんね」

「ただの武人の嬢ちゃんが夢の中で奇襲を掛けてくるなんぞ思いもよらねえだろうし、こんなもんだらうねえ」

同じ作業を六回見届けた地和と虚耗が淡々と感想を漏らす。入れ込み過ぎるほどに気合いを入れてきただけに、肩透かしを喰ったような心持ちだ。

「地和の手を煩わせるまでもなかったでしょ？」

「まあ、元々虚耗の監視が目的だったからいいけど……」

「寿の嬢ちゃんに害なすようなことあしねえって」

鬼怪の言に、そこが不可解だと横目に睨む地和。元々人に好意的な怪異であるならばまだ分らないでもないが、虚耗は本来的に悪鬼の類いだ。どうかしてその真意を問い質さねばと考える地和の鼓膜の内側、頭の中に直接虚耗の声が響いた。それに對し、地和も声には出さずに虚耗に返答した。

向こうから理由を告げると宣告してくるとは意外だが、無論望むところだ。何が飛び出してくるのか、そも本当の事を素直に告げるのか、油断はできない。

地和が小鬼との密会に意識を向けていると、慶祝が小鬼に問い掛けた。

「虚耗、本当にこれ以上は追跡できないのか？」

「李意と繋がりの強い連中はこれで終わりさね。方士や妖術使いを探し出す事はできる

がね、それが嬢ちゃんの敵かどうかは、まあ、一々肚ん中覗いてみると判らんね。手間が掛かり過ぎておいら嫌だよ」

「そうか。なら今夜のところはお開きにしようか」

単なる確認だったのだろう、特に残念そうでもなく慶祝は話を締めた。

葬華の夢を通じての術士奇襲は波乱もなく終着した。翌朝も行軍は続くため、早々に解散と相成ったが、地和は己の夢に虚耗を連行し、先送りになっていた問題と直面する事とした。

「ところでよ、寿の嬢ちゃん随分とあつきりしてたと思わねえか？」

さて、どう口を割らせようか。素直に本当の事を告げるとも思えず、地和が切り出し方を探っていると、虚耗が水を向けてきた。牽制のつもりか？ と警戒するが、疫鬼が問うてきたそれは地和も気になっていた事ではあった。

「まあ、ね。李意…だっけ。あいつをちよろつと締め上げたくらいで、何も吐かなかつたからって殺つちやうのは解らなくもないけど。残りの連中も奇襲で一太刀だったものね」

「なんでだと思ふよ?」

「……それがあんたみたいのが薺華を気に入ると何の関係があんのよ?」

気に掛かる事ではあるが、話の主眼はそこではない。このままずるとこの小狡い小鬼に流れをつくらせてはいけない。強い言葉と共に睨み付けるが、虚耗は何処吹く風で話を続けた。

「嬢ちゃん、実は首謀者に心当たりがある」

「なんですつて?」

つい反射的に反応してしまい、苦い顔になる。

「ま、おいらにとつてはそれは重要じゃねえんだ。ただ、おいらが惹かれたところにそいつ等の話もあつたつてただけでね」

「ちよつと待つて、どういう事? じゃあ、薺華ははじめから知つてたの?」

地和と子敬の予想では敵は未来の足跡を識る者だ。慶祝がそれを知っているという事は、それはつまり彼女も同様に先の出来事を識っており、意図的に改変したと……? 「とはちよいと違うな。寿の嬢ちゃんはただ思うがままに生きてたら連中に目を付けられた、というか気付かれちゃったのさ。それで嬢ちゃんも敵の正体を知つたつてえとこだな」

「取り敢えず、薺華は意図して動いてたわけじゃないのね?」

警戒していた筈が、すっかり虚耗に主導権を握られる地和。元々、この手の渉外は妹が一手に引き受けており経験がなく、そも素養がないため致し方ない事ではある。

「ま、後は自分で確かめるこつたな。天地がひっくり返る事請け合ひさね。おいら、もうずつとわくわくが止まんねえでいるよ。残念ながらこのわくわくは嬢ちゃんの敵共とは共有できなくてね。野郎共、どうも悲観的でいけねえよ」

「それがあんたが葬華に肩入れする理由？ あいつの中に何があるつてのよ」

どうやらこの悪鬼の真意を知るには友の中を覗き見なければならぬらしい。意気込んできた筈が、尻込みしている。当たり前だ。人様の内面を勝手に覗くなど、許されるわけがない。それに話がどんどん大きくなってきている。天地がひっくり返るなどと、大袈裟にも程がある。だがそれが、誇張でなかった場合、自分は果たしてそれを受け止められるだろうか？ 逡巡する地和の耳朵を、人のものならざる声が叩いた。

「世界の秘密だよ」

それは、紛うことなき悪魔の囁き。

翌日。張公平が目の下に隈をつくり、何やら考え込んでいるのを薜華が心配した以外は滞りなく軍は進んだ。そうして午前中に長安に入城した馬・嚴両軍を待つていたのは、奉車都尉馬休であった。無論、出迎えなどではなく、薜華達に下された新たな勅を携えての合流であった。

薜華・馬孟起兩名に下された新たな詔令。それは、益州の乱の平定であった。

「で、なんでお前がわざわざ出張ってきたんだ？ 鶻。指令を届けるだけって訳じゃないんだらう？」

「はい。ええーつと、その、何と言いますか、督戦の任を受けまして……」

「ほう、姉の私を督するとは出世したじゃないか」

鎮圧に次ぐ鎮圧、戦に次ぐ戦。将としては望むべくところではあるが、その為に新たに追加で派兵されて来たのが妹とあつて、孟起は中央が企図するところが気になり問い掛けた。

それに対し、少々尻込みしながら答える仲承。その予想していなかった意外な答えに、にやりと面白げに笑む孟起。だが、その笑顔には獍猛さも浮かんでいる。妹の大任を面白がっているだけはなく、己の戦場いくさばにそんなものは必要ない、という意志も込められた、そんな笑みだった。

そんな姉の反応に慌てる妹が、更なる詳細を口にした。そこに出了た名に、今度は薜華が反応した。

「い、いえ、違います！ 私が督するのは薜華と季玉さんです!」

「私と、……誰だつて?」

「……あの、わたしです」

薜華の疑問に、控え目な声音で応えたのは、馬仲承の背後に隠れる様に身を縮こまらせていた少女だった。

伏し目がちな紺琉璃こんるりの瞳は不安そうに揺れ、小さく薄い唇から漏れる声音は気弱な響きを帯び、全体的に薄く華奢な体躯と合わせて、とても英傑の類いには見えない。しかし、緩やかな曲線を描いて腰元まで流れる長春色ちやうしゆんいろの髪色には見覚えがあった。その昔、一度だけ遠目に見た劉益州と同色の髪。

彼女こそは馬孟起、薜華と共に益州乱平定に派遣された三人目の将。名を劉璋りゆうしょう*2 23。字を季玉。仲承と共に奉車都尉を務める益州牧劉焉の末子であった。

中央は益州乱の平定に身内を集めてきた。どういう事であろうか？ 薜華はちらと背後を振り返る。意図を読み取った子敬がその視線を受けて答えた。

「どちらが叛していたとしても大事にせず、身内を使って諫めようというのでしよう。それで治まらないのであれば、錦马超・翠さんに蹂躪させる。その際、薜華さん達が親

元に走らないように、鶯さんをお目付として同行させた、というところでしょう」

「包さんのおつしやる通りです。どうやら、劉嚴両軍は陣を構えたまま睨み合い、精々が小競り合いを繰り返している段階らしく、これが本格的な全面衝突に移る前に事を治めたいという事です」

「成る程ね」

子敬の解説に、仲承が補足を加えた。娘の説得に応じるのであれば、確かにそれが一番良い。だが、薺華は益州牧がそんな玉ではないと睨んでいた。その娘は睨んでいない。しかし、劉季玉は薺華の視線を避ける様に仲承の陰に隠れた。

大丈夫かな、この娘？ と、訳もなく心配しながら、州牧に対する印象と真逆と言ってもいい立ち居振る舞いをする少女に声を掛けた。

「あー、季玉さん？ 私は別に貴女と諍いを起こす気はないよ。仲良く、という訳にはいかないだろうけど、此度の乱をはやいところ鎮めたいというのは同じだと思う。それが互いの母が無事の上ならばいう事ないでしょう。だから、暫しの間、宜しく頼むよ」

「……は、はいー」

薺華の言葉に、少しの間、眼を見開いて聞き入っていたかと思えば、それまでの様子からは考えられないほど大きな声で返事を返してきた季玉に、悪い子じゃなさそうだと、僅かに頬を緩めた。

「おし！　じゃあ、ちやちやつと行って益州の騒ぎも鎮めてくるか！」

二人の様子を見守っていた孟起が締めとばかりに声を上げると、皆一様に強く頷いた。

こうして薜華は久し振りに益州へと戻る事となった。思っていたのはだいぶ違う帰郷。それでも、もうすぐ愛する母に会えるのだと思うと、状況も何もかもすつ飛ばして自然と頬がほころんだ。

数々の戦場で武を鳴らし、中央にて累進を重ねる若き武将。世の裏側で世界を拗ねる者共との暗闘に身を投じる闘士。遂に御遣いの所在を知り、その段になって態度を決めかねている乙女。

しかし結局のところ、どこまでいっても彼女は桔梗の娘なのだった。

第二十五回 靈幻亡帝

長安にて新たな勅命を受けた薜華と馬孟起は、馬仲承率いる監軍と劉李玉率いる第三軍を加え、一路益州へ急行する事となった。

薜華としては願ってもない展開だが、現在同行している歌姫にとってはそうではない。余計な寄り道である。それも、洛陽を目前にしての反転。張公平の目的は薜華の私闘絡みの補佐であつて戦に関わる気などありはしない。そこで、部曲の兵を護衛に付けて洛陽の公邸に先行してもらう事となった。

出立直前、薜華は子敬と共に公平に一時の別れの挨拶の為に時間を割いた。その頃には公平はいつもの調子を取り戻していた。

「悪いね、地和」

「別にいいわよ。ま、あんたの邸に印を付けたらそこから一旦帰るけどね」

「今更ながらに何日も不在で大丈夫なの？」

「昨日あの後でれんほーに夢で連絡しておいたから。あつちの無事も確認できたし、だ
いじょーぶよ」

「地和さん、そんな事まで出来るのですか？」

「昨日の事で虚耗の通力を感得したのよ。もともと、今はまだお姉ちゃん達と、薺華くらいにしか夢を通じれないけどね」

子敬の質問に事も無げに答えた公平の言葉に、子敬と薺華は驚きを隠せなかった。

子敬が疑問に思ったのは昨晩は薺華の夢に同行する為に入念な準備をしていたからだ。星辰を計り、身を清め、呪符を用意した。

その上で軽く妹と連絡を取ったとの弁。肉親相手ならば、精神的に強い結びつきを持つ者相手ならば必要ないという事なのかと子敬は考えたのだが、返ってきた答えは半分正解と言ったところであった。

「えっ?! それ以前は出来なかったの? 昨夜のあれだけでそこまで使えるようになったの?」

「ふふんっ。まっ、ちいは天才だからね! これくらい何てことないわよ!」

実際、妖術に関しては天才としか言いようのない才覚に薺華は絶句した。もしや、手段を選ばぬ戦闘に及べばこの華奢な歌姫は強者の部類に入れるのではなからうか? 尤も、才覚の上ではその通りであったとしても、圧倒的に実戦経験が不足しているのだが……。

そこまで自覚しているのならいいが、才覚を過信して単独で敵術士と闘り合う事にもなればかなり危うい。

「地和、無茶しないでね？」

「……それはあんたにだけは言われたくないわ」

反射的に出てきた心配の言葉の意味に、数瞬して気付いたのだろう。半眼で返されてしまった。

これは分が悪いと目を逸らした薺華の視線の先で、子敬が顎に手を当てて何事か思案していた。なにやら懸念事項があるらしい。

薺華の視線に気付いた子敬が、思案顔のまま答えた。

「いえ、ちよつと亞莎ちゃんとすぐに連絡を取れないものかと思ひまして……」

「……御方になにか？」

「あるかも知れません」

場の空気が一気に緊迫し、その空気を煙たがるように公平が口を衝いた。

「亞莎との連絡ならこの子に手紙を持たせるのが精々よ」

「その鳶、亞莎さんを探せるんですか」

「大体の場所が判れば、後は自力で見つけ出すわよ。屋外に居る時じゃないと難しいけど、どつかに引き籠もりっぱなしってわけでもないんでしょ？」

「はい。旅程が順調なら此方に向かつている途中の筈ですが、漢中郡治まで街道沿いに飛んでいただければ……」

子敬の懸念は先晩の公平との密談にあった。

敵術士達の思想。正しき歴史。もしも公平達が討ち倒されるのが正しく、主公がそれを救いあげた事を嗅ぎ付けられて敵と認定されたのだとしたら。死すべき定めにあつた筈の者が黄巾首魁だけではなかつたら。先帝もまた死んでいなければならぬとしたら。それを連中が把握していたら……。尤も、歴史の正誤云々以前に、亡帝の存命が拙いのは、誰にとつても明らかではあるが。

張姉妹には今のところ敵の手は伸びていないようだ。だからと言って先帝も無事とは限らない。子敬の懸念は決して大袈裟ではなく、実のところ的中していた。

そして、この時点で既に事態は決着した後だった。

第二十五回 靈幻亡帝

亞莎が漢中郡南鄭県城に到着したのは、慶祝達が長安に到達するよりも幾日も前になる。

県城内深奥、郡府官衙の更に中心、便坐の一面に、名を変え素性を変えて密かに生き

延びる一人の女性を迎えに、亞莎は碌に休みも取らずに馬を飛ばして駆け付けて来た。それは某かの予感に背を押されて、という訳ではなく、単に主公の元へ逸早く舞い戻りたいからであつた。

正直に言つて、亞莎は目指す人物を密かに保護する事に賛同できていなかった。その御方に含むところがあるわけではない（全く無い、とは言ひ難いが）。当然だ。それは余りにも大きな危険を孕んでいる。

しかし、主が一度決めた事を翻す事はないし、彼女が主命に逆らうという事も有り得ない。使命を帯びたからには命に代えても御方を護り、主公の元へお連れする。戦場に身を置いている時同様の緊張を纏い、亞莎は官衙へと足を踏み入れた。

そして、直ぐに緊張の度合いが上がつた。

県城に入城したのは閉門間際の夕刻だつた。だから官所に人の気配が余りない事には特段気にするでもなかつた。中_{中庭}廷を抜け、郡堂を通り抜ける時も同様だ。しかし、公邸である便坐に踏み込んで尚、人の気配が途絶しているのには合点がいかない。

便坐の奥方にある客房には御方が居り、その元には主が愛してやまない南蛮の少女が侍っている。その二人の護衛として、部曲の中でも最初期から付き従っている元豫州義勇兵が、それもその中でも特に忠に厚い者達が選抜されている。何故彼等の姿がないのか。疑問の余地はなく、亞莎は内心の焦燥を封じ込めて静かに、慎重に歩を進めた。

周囲の気配を窺いつつ便坐本堂を通り抜ける亞莎の胸中に、漢中に向けて一人出立する直前に魯子敬が発した警句が甦る。

「亞莎ちゃん、どうやら薺華さんに私敵が現れたようです」

「私敵……ですか？」

「はい。私もまだ概要すら掴んでいないので余り確かな事は言えませんが、薺華さんの幕僚である私達が狙われる可能性は十分にあります。これから単独行に移る亞莎ちゃんは十分に警戒しておいて下さい」

「分かりました。包さんもお気を付けて」

もしもその敵の仕業ならば、もっと早くここに駆け付けるべきだった。道中、急いでいたとはいえ自身の警戒も怠らなかつた為、どうしても最高速とはいかなかつた。だが、敵が主の関係者も狙うというのなら、最もその身を案じなければならぬ存在が居た。

南蛮から来た少女。あの愛くるしいトラこそが主公の最大の急所ではないか。

ぎしりと知らず噛み締めていた奥歯が軋みを上げた。あの娘に何かあれば、敵は勿論、己の事も許せない。

一方で別の可能性もある。御方の生存に気付いた何者か。憂いを断つ為に暗殺するか、利用する為に攫うか。どちらにせよ碌な事ではない。主の誓いを踏み躪らせなどし

ない。

だが予感がする。これは主の敵だ。

袖の中で両の掌を何度か握っては開く。指を一本づつ折り、また一本づつ開いて行く。手首を左右に捻り、肘まで連動して捻る。そうして暗器手甲れんげ人解の具合を確かめ、十全である事を確認した。

小さな郷の一少女に過ぎなかつた亞莎がこの特殊な手甲を手に入れたのは、たまたま郷里を通り掛かつた武芸者との立ち合いで勝利したからだつた。

それまで郷一番という小さな囲いの中での武勇が、初めての戦利品と共に外を志向するようになった。それから、いつかの雄飛を夢見ながら人解を使いこなす為の鍛錬の日々が続いた。その所為で慶祝と出会うまでは、読み書きも満足にできない有り様だつた。だが今は違う。

黄巾の乱によつて亞莎の運命は大きく変わった。

葛陂賊の横行で父を失い、仇討ちを望むも母の事を考え共に江南に逃れようとした。そこを子敬の部曲と遭遇した事で母を保護してもらい、子敬と引き合わされた。そして、彼女の導きで慶祝と運命の出会いを果たした。

その後、多くの戦場を駆け抜けて亞莎は急成長を遂げた。それは実戦に依るもののみならず。武に於いては嚴慶祝に、知に於いては魯子敬の薰陶を受けた。

それによつて、現在の亞莎は大陸でも稀有な智將として開花している。武でも知でも亞莎を越える者はまだまだ多い。しかし、その両輪を共に上回る者は殆どいない。

今は慶祝の陰で殆ど名を知られていない、その傑物の直観が告げていた。

これは主の敵だと。

確信と共に歩調を速めた亞莎の研ぎ澄まされた感覚が、向かう先での異変を嗅ぎ取つた。

慎重さはそのままに、素早く移動する。客亭の前庭、そこに横たわる無数の人影。既に事切れている者もあれば、辛うじて息をしている者、意識はないものの致命には至っていない者もいる。その全てが護衛兵であつた。いや、一人だけ違う。暗がりの中でも亞莎はその人物を見分け、足早に近寄つてその状態を確かめた。

無造作に伸ばされた亜麻色の髪が放射状に広がり、華奢な体軀を覆う新緑色を基調とした衣裳と合わせて、手折れた花の様に倒れ伏す女性。呼吸はやや薄いが、死からは遠いようで安堵する。と言つても、軽いけがでもない。元々負つていた刀傷の上から新たに受けた損傷で再出血している。亞莎は左の袖を肩口から破り、傷口を圧迫するようにきつく巻いた。

元化^{げんか} 応急処置による新たな刺激で彼女は意識を取り戻した。元漢中郡府門下縁陳調^{ちんちやう}、字

敵慶祝が將軍の印綬を賜った時、魯子敬の進言によつて、中領將軍府府佐として三人が辟されていた。一人は板楯兵を従える王子均。慶祝が直接指揮する屯騎兵とは別に板楯兵を中心とした親衛隊を指揮する門下督もんかたく*224と期待されている。

いま一人は陳元化。法曹參軍ほうそうさんぐん*225に任じられたものの、先の漢中乱の折に横死した漢中太守の敵を討たんと食客数百人と共に馬相賊に呐喊した際に負つた傷が癒えきつておらず、漢中に居残つて療養しつつ、同じように療養中のもう一人と共にトラの臨時教師を務めていた。

その陳元化が苦し気に呻きながら薄らと目を開いた。髪と同色の瞳が亞莎を捉えると、朦朧としていた意識は一気に覚醒したようで、すぐさま力強い意志の輝きを灯した。

「申し訳ありません。賊の跳梁を止められなかつたばかりか……」
「トラちゃん達は無事ですか？」

謝罪と共に傷付いた身体を鞭打つて起き上がろうとする元化を押し止めながら、しかし口から付いて出たのは労いでも労わりでもない。

元化も心得たもので、要点だけを簡潔に告げた。

「私が侵入者を引きつけている間に、我が友が連れ出しに向かいました」

元化の言う我が友。それは慶祝の幕下に加わつた最後の一人、趙嵩、字を伯高はくこう。陳元化と共に元は漢中太守に仕えていた硬骨の女士である。元化と同じ理由で、同じように

怪我の療養を受けていた。

似た者同士のこの二人は、武の才覚も似たり寄ったりだ。精兵相手にも引けは取らないが、逆に言えばそこまでだ。元より純粋な武官としてではなく、荒事にも対応できる文官としての性格が強い。亞莎は万全の二人を同時に相手取っても勝てる自信があった。

急がねば。焦りが表面化しつつある亞莎に、元化が更に言葉を告いだ。

「敵は人外の化け物を率いておりました」

「化け物？」

「はい。ですので、あやつならば穀倉に向かったかもしれませぬ」

何故に穀倉？ と疑問を表情に出せば、すぐさま答えが返ってきた。

「もち米は魔除けに効くと申します故」

「成る程」

返事をしながら立ち上がる亞莎。その視線は邸の北側奥方、厨房や倉がある区画へ向いていた。

「生存者をお願いします」

「お気をつけて」

最後にそう伝え、疾風の如くに駆け出した。

その後姿を頼もしく見守りながら、化け物と言う文言に疑義を呈されなかつた事に、元化はほつと息を吐いた。押し問答をしている猶予など無い故に、真偽はともかく敵の存在がはつきりしている為にそこは捨ておいたのかと考えたが、亞莎は元化の言を別段疑つてはいなかつた。

自身では遭遇した事はないが、主が南蛮の少女と出会つた経緯を語つてくれた時、正に化け物と言うに相応しい怪鳥の存在を聞き及んでいたからだ。いまひとつ、知己に妖術使いも居る。

世の中、己の知の及ばぬ事象・存在などきつと有り触れているのだろう。普段は皆それに気付かずにいるだけなのかも知れない。

いや、どうでもいい。世界がどうあれ、敵が何であれ、それが己が主君を害するというのであれば全力で排除するのみだ。

陽が完全に沈んだ便坐の奥。穀倉の扉は大きく開かれ、穀物用の麻袋が雑多に転がっている。その幾つかは刃物で乱暴に破られ、中身がざらざらと転び出ている。盗賊の押し入りにでも遭つたかのような有様だが、麻袋を楯にして半身を隠す淑女も、穀倉の扉

前に陣取る南蛮少女と女丈夫も賊ではない。倉を暴き、扉の周囲に半円を描くようにもち米を撒き散らしたのは、賊から身を護る為であった。人型をした異形の賊から……。

彼女達を囲うもち米の結界を、更に囲う形で群がる屍の群れ。トラ達は散発的にもち米を投げ付けて近寄せまいと抵抗するが、それもいつまで持つか判らない。

もち米を忌避するのは間違いない、素肌に食らわせれば焼けたような音を立てて怯む。が、決定打にはならない。民間に流れる言伝え程度では、実際の脅威として迫る怪異を退ける程の力はないらしい。

じりじりと追い詰められ、起死回生の手立てはない。この屍共が生きた賊兵であれば、この程度の包囲網などものともしないが、人にとつては致命の一撃を見舞つても尚襲い掛かって来る怪異相手では分が悪いどころではない。五体をバラバラに切り刻めば、然しもの怪物として動きを止めるかも知れないが、この場に居る者でそこまでの武を誇る者は残念ながない。

元は至上の身であった蹇寛はそもそも武に遠く、趙伯高は先の怪我が癒えておらず、トラも只人相手ならばいざ知らず、そこまで武に長けていない。それでも三人は諦める事なく抵抗を続けた。

そんな彼女達を嘲笑うかのよう鈴の音が、チリンと響いた。

「ふん、いつまでも無駄に足掻きおつて……」

敵方唯一の生きた人間。帝鐘ていしょうの音色とは程遠い不快な声色の道士が忌々し気に吐き捨てた。

十を越える僵尸キョウシ*2226を一人で使役するこの男は、無論敵慶祝の敵であった。

敵の総勢は男を合わせ十二、いや十三。トラ達を囲う十体の僵尸と、道士の脇に控えさせた如何にもいわく有り気な棺を背負った長身の僵尸、その僵尸が背負う棺の中にも恐らく一体。

それだけの数が、どういう理屈かは知らないが道士の持った一つの鈴で自在に操られていた。

今も澄んだ音を立てる帝鐘の音に合わせて十体の僵尸のうち、半数が囲いを解いて後方に下がった。そして、三体が縦列を作り、二体の僵尸が先頭の両脇に立った。それを見て伯高はぎくりとした。

伯高の予感はずぐさま現実として飛来した。二体掛かりで一体の僵尸を投げ付けてきたのだ。もち米の結界など意味を成さない空襲に思わず身を竦めるが、放物線を描いて飛来する筈の僵尸は、その下降線を辿る寸前に無数の鎖に絡めとられてあらぬ方向へ投げ捨てられた。轟音を立てて厨房の外壁を破壊して僵尸は土煙の向こうに消えた。その土煙を裂くように、僵尸に絡んでいた分銅鎖が厨房内部から使い手の手元に引き戻された。

その場の（僵尸を除く）誰もがその光景に目を奪われ、鎖の元を辿った。

その視線の先、普段は長過ぎる袖の中に隠された腕を左だけ手甲每むき出しにした亞莎が、鋭く敵を睨み付けていた。皆の注目を集めた分銅鎖は、剥き出しの左手甲に繋がっている。

「ちっ、増援か」

憎々し気に吐き捨てた道士は、しかしすぐさま口の端を醜く吊り上げた。小さく短く帝鐘が僅かに震えると、今し方投げ飛ばされた僵尸が厨房の奥から一跳びで亞莎に襲い掛かった。

そしてバラバラに分割された。

亞莎の手甲からは、何時の間にか分銅鎖ではなく鉤爪が生えていた。目にも止まらぬ早業であった。

もはや寸毫足りとも動かず、屍鬼から屍体に戻った僵尸を一瞬だけ見遣り、亞莎は確認するように独り言ちた。

「どうやら、「」の形を保てぬほど刻めば活動を停止するようですね」

臍を嚙む道士の表情からも、それが間違いない事だと確信を得た。

彼女の話を聞き流さないで良かった。と、表情には出さず亞莎は密かに安堵した。亞莎の言う彼女、それは稀代の妖術使い張公平だ。慶祝に請われて、色々怪しげな知識

を披露していたのを間近で耳にしていたのが、思わぬところで役に立った。

曰く、如何な怪物であつても、己を己と認識できぬほどに形を崩せば滅ぼせるのだという。無論、そもそも物理的な手段の及ばぬ超常体もあれば、肉体と霊体を同時に滅ぼさねばならぬような厄介な存在も多いという。だが、低位の怪異であれば、それなりに有効な手段であるという。少なくとも、細かい対処法など知らぬ素人にとっては唯一の打開と言えるだろう。

ともあれ、自分の手で滅ぼせる相手ならば怖れる事は微塵もない。トラ達には荷が重かつたようだが、今の手応えならば、少なくとも大きめの一体以外は束になつて掛かつてこられても脅威ではない。問題は、その長身の僵尸だ。ただ他の個体より大柄なだけならばいいが、流石にそう樂觀視は出来ない。

リン！ と強く帝鐘が鳴ると、四体の僵尸が亞莎に襲い掛かかった。その動きに、亞莎は僅かに目を見開く。見誤つた。どうやら道士の手にある鈴の音の具合で屍鬼の力がある程度増すらしい。

早く鋭い四方からの襲撃を、それでも亞莎は危なげなく回避した。見誤つたとはいえ、自分に迫る程のものではない。すくなくとも、今のところは。或いは更に力が一段二段増すかもしれないが、それに付き合うつもりもない。亞莎はあつさり四体の頸を刈つた。途端に動きが鈍る。これでどうやら人と同様、耳目を頼りにしていると判る。

こうなれば木偶人形と変わらない。手早く四肢を切り刻み、敵戦力は瞬く間に半減した。

更に、道士が動揺している間にトラ達を囲んでいた僵尸の群れも両腕から伸ばした分銅鎖で一纏めに引き摺り込んだ。慌てて帝鐘が鳴らされるが、僵尸が体勢を立て直す間を与えずに一方的に屠った。

亞莎の登場から幾許も経たぬうちに、戦局は大きく傾いた。歓声を上げるトラ達。何時の間にか麻袋の陰から身を乗り出していた寒寛などトラを抱きしめ無邪気にはしゃいでいる。

対照的に苦虫を嘔み潰した顔で此方を睨む敵道士。

そのどちらに対しても特に反応を示さずに、油断なく敵を見据える。その亞莎の様子に、トラ達も気を引き締め直した。

これが戦ならばもう決着だが、敵は逃亡も降伏する気はなく、亞莎も見逃すなどという選択肢を持たない。

戦況は次の局面に移る。

道士の前に立つ大柄の僵尸が、その背に負うた棺をおろした。

「もつと追い詰めてから披露してやりたかったが仕方ない」

醜悪に顔を歪めながら道士は帝鐘をゆらりと鳴らす。その響きが棺を震わせると、不

吉な音を立てて棺の蓋が開く。そこに収められていた屍体を見て蹇寛、いや、亡帝が息を呑んだ。その様子に、亞莎が前方の敵から視線を切つて僅かの間、右方のトラ達を横目に見た。動揺しているのは御方だけだ。直ぐに視線を棺の中身に戻し観察する。

当然、見覚えはない。本来はもっと鮮やかであつたらう孔雀緑くじゃくみどりの柔らかなくせつ毛髪、肌は青白く、瞳も閉じたままだが、顔の造作は悪くない。死に顔からもおつとりとした印象を受ける。ぼろぼろの官服に包まれた華奢な体軀、ふくよかな胸、武官ではなからう。なにより、破れ乱れた裾から僅かに見える金属の光沢。あれは下穿きではない、貞操帯だ。鉄の貞操帯。女性宦官の証。

一度だけ、その名を主公の口から聞いた事がある。唯一、真の忠誠を先帝に誓つた十常侍の序列二位。我欲で宮中に蔓延つていた宦官共の中で、御方の動揺を誘う者など彼の者しかあるまい。

亞莎の推測通り、それは間違いなく中常侍趙忠であつた。かつて、先帝劉宏に忠を捧げ、再会を誓つた唯一の臣。その成れの果てが、ゆつくりと輝きの失せた紫色の瞳を開いた。

これは何の罰だろう。それとも、死に際に観る悪夢か。かつて劉宏であり、今は蹇寛である女——空丹——は眩暈と共に声にならない眩きを発した。

目の前で、もう二度と会えないと思っていた忠臣が、変わり果てた姿でいやにゆつくりと棺から出てきた。そして、呂子明と戦いだした。

嗚呼、止めて。

喉が震える。しかし、声にはならない。代わりに小さく嗚咽が漏れた。

トラが気付いて振り返ってきた。空丹は何の反応も示せず、ただ眼前の悪夢を凝視した。

運動など碌に出来なかったはずなのに、料理以外は何をやらせてもてんで駄目だったくせに、軍中で二番目に強い片眼鏡の陪臣と渡り合っている。虚ろな目つきで、見た事もない鋭い挙動を繰り返す。そんな姿は知らない。こんな事があったらいい筈がない。

誰か止めて！ 魂だけが叫ぶ。身体はいう事を聞かない。口すら意志に判して震えるだけで役に立たない。

暗愚な皇帝に下された、これが罰なのか？ 変わり果てた忠臣に討たれる事が？

そうだ、いつか思っていたじゃないか。自分はきつと碌な死に方をしないと。しかし、それと共にもう一つ思い出した。それははつきりと否定した女傑が居た事を。帝でなくなった後に得た二人目の臣。

そうだ、ここでは終われない。そう思うと、悔しさがこみ上げてきた。今以って何の力もない自分が恨めしくて仕方なかった。かつての臣が死後も辱められるのを止められず、今の臣に報いる事も出来ていない。そんな自分がどうしようもなく惨めだった。

空丹が立ち尽くしている間に戦いは激しさを増す。今迄の屍鬼よりも余程強いらしい趙忠は、子明と一進一退を繰り返している。揺れる空丹の眼にはそう映っていたが、実際には子明が空丹の異変に意識を割かれて全力を出し切れていない為だった。

それ程に空丹の動揺は強く、その場の誰もが気付いていた。気付いていないのは本人のみ。その為、トラと趙伯高の動きにも気付いていなかった。

ただ目の前の戦闘だけが、荒れ狂う心中でも注視できる全てだった。だからだろうか、武才のない身でも子明が必殺の一撃を見舞おうとしているのが反射的に判ったのは。

これで終わり。その一撃で僵尸は胴の半ばから上下に別たれるだろう。そうなれば、たとえ動けたとしても最早子明の敵にはなり得ない。決着の一撃だ。そこまで瞬時に理解できてしまった。もう一度、今度は目の前で愛しき忠臣が死ぬという事が。

「駄目えっ!!」

その悲痛な叫びは亞莎の必殺を止め、僵尸に逆転の好機を与えた。

「はっ、ははあっ！」

歪んだ嗤い声が響くが、亞莎はそれに構わず脇腹にそつと指を這わせた。ぬるりとした感触。だが致命には遠い。彼我の実力差ならばこの程度問題ない。本来は、だ。

そもそも眼前の僵尸は、それまでの雑魚に比べれば確かに数段手強いが、亞莎にとつて脅威と言うほどではない。それを今以って仕留められていないのは、偏に亡帝の動揺にあった。

先程などは決定的な局面に横槍を入れられた。しかし亞莎はそれを責める気など勿論ない。眼前の僵尸は最早親しき人物ではなく、寧ろ速やかに滅して故人の恥辱を注ぐべきではある。だが、それは理屈だ。人の心はそんな簡単に割り切れるものではない。もしも、目の前の僵尸が自分の大切な故人の成れの果てだったら亞莎も御方と同じようもしたろう。いや、御方と違って武力を持つ分、もつと直接的に止めたに違いない。

僵尸の背後で不快な笑みを張り付けた道士を射殺さんばかりに睨む。この外道だけは絶対に赦してはおけない。

だがその為にはどうしたって僵尸をどうにかしなければならぬ。だがどうすれば？ 猛撃を凌ぎながら亞莎は思考を巡らせる。傍目からは防戦一方に追い込まれてい

るように見える為、道士は調子に乗り、御方は動揺を深めるが、亞莎は常に冷静だった。だから、視界の端に僅かに捕らえたトラ達の思惑をすぐさま読み解いた。

トラは怒っていた。それはもう密林を更地に変えてしまう巨象の大暴走のようだ。

トラも趙忠の事は多少知っていた。陛下と共に趙忠の作ったお菓子を頬張った事もあった。だからびびくりした。どう見ても死んじやつてるのに、それなのに敵として変な男の鈴の音に操られて戦っているのだ。

陛下がそれを見て泣いてしまった。涙をじゃんじゃん流してるわけじゃないけど、でもあれは人が一番悲しい時の表情だ。

だからトラは怒っていた。頭の中の巨象は地面が割れるほど地団太を踏んでいる。トラの頭の中ではへんてこ男はとっくにペしやんこだ。

トラの脳内で道士が紙より薄くなったところで、トラは実際の行動に出た。伯高の袖を引いてもち米の詰まった麻袋を指差した。伯高は心得たとばかりに強く頷き、二人は素早く、しかし注目を集めないように一言も漏らさずに行動を開始した。

道士は調子に乗っていた。呂子明の乱入に一時は焦りを憶えたが、宦官僵尸を投入して戦局は再びこちらに傾いた。そう勘違いしたからだ。？屍*227の腕は一流だが、所詮実戦では素人に過ぎぬ方術士の目には、己の勝利は揺るぎないものとししか映つていなかった。

自分の見たいものしか見ない。そのような愚者に勝利が齎される事はない。

道士の见えていないところで、雑魚と侮つていた南蛮少女達の手で勝利の天秤は完全に彼方側に傾くことになる。

意気揚々と帝鐘を鳴らすと、その度に宦官僵尸が子明を追い詰める。その様に増々有頂天になる。それが子明の思惑とも知らずに、己の術理に酔い痴れる。

手間を掛けて毛僵*228にまで高めた甲斐があつたというものだ。男が趙忠を見付けたのは全くの偶然だった。敵寿の足跡を追っている最中で洛陽を脱出した十常侍を発見した時、予感がしたのだ。あれも先の政争で死んだ筈だと、それが生きてどこかを目指している。この予定外の原因は怨敵が関わっていると、その予感に従つて捕縛。拷問の末、靈帝までも生存しており、やはりあの女が関わっていると知った。そこで趙忠を殺し、僵尸に仕立てた。良い誅罰になるだろうとの思惑だったが、戦力としても得

難いものとなったのは嬉しい計算外だった。

浮かれながら己の所業を褒め称えていると、その耳に何かが焼け爛れる音、奴隷に焼き鏝ごてを押し当てたような音と、屍鬼の放つ不明瞭な絶叫が響いた。

叫び声の方に振り向けば、残っていたもう一体の僵尸が頭から麻袋を被っており、その麻袋から今もざらざらともち米が零れ落ちていく。聖別されていないとはいえない、あれほどのもち米を浴びせられては流石に拙い。焦って帝鐘を大柄の僵尸に向けて構えたその瞬間、下から強かにその手を打ち据えられた。気配を消して忍び寄っていた南蛮少女の一撃。特に鍛えているわけでもない細腕はあつさりと骨を砕かれ、手にしていた帝鐘は宙を舞った。

無様な喘ぎを漏らしながら弧を描く帝鐘を反射的に目で追うと、目を赤く腫らした霊帝が帝鐘に向かって飛び込んでいた。

空丹は僵尸の絶叫によって驚愕で身を竦める事で、強引に金縛りから解き放たれた。

忠臣と陪臣の戦闘から視線をずらし、身の自由を取り戻した原因を探る。すると、放り出された鐘鈴がその目に飛び込んで来た。

深い考えたがあつた訳ではない。しかし、敵があれで散々僵尸を操つているところを見てきたのだ。だから自分も、と反射的に思ったのだ。憎らしい仇から、愛しい忠臣を取り戻すのだと、それだけを願つたのだつた。

だから飛び出した。ほんのちよつとの距離、邪魔するものはない。だというのに足がつれる。本当に情けない。運動が出来ないにも程がある。しかし諦めない。転びかけながらも、その勢いのまま飛び込んだ。地に身を擦りながら両手を伸ばし、落ち行く帝鐘を辛うじて受け止めた。

敵も味方も皆が空丹に意識を向けた。

場が硬直する。全員の視線を受けながらそれを意識し、急いで立ち上がろうと片膝を付き、それ以上身を起こすのももどかしく帝鐘を構えた。

「黄！ あんたは永遠のわたしのものでしようが！！ いつまでそんな醜男に良い様にされてんの！」

叫びながら帝鐘を勢いよく振つた。勢いが付き過ぎて短くカランと鳴つただけだった。

「莫迦め！ 何の修行もしておらん素人めが手にしたところで何の効力もないわー！」

嘲りを哄笑にのせて道士が叫んだ。冷静に考えれば誰にでもわかる事、しかし空丹にはそれしかなかった。元より何の力も持たぬ身だ。例えそうだとしても、行動を起こさ

ずにはいられなかった。それに、少なくとも敵が僵尸を操れなくなるはずだ。そう自身を納得させようとしたが、敵は哄笑そのままに折れていない方の腕でもう一つの帝鐘を取り出しざまに澄んだ音を響かせた。流石に？屍だけは熟練の腕を持つ道士。淀みない所作だった。

それを見たトラが慌てて再度虎侍独鈷を振り上げた。そして、次の瞬間「にや？」と固まった。トラだけではない。皆が、誰よりも空母こそがその動きを止めた。

それは決して鋭さを伴っていないかった。寧ろ、のんびりと間延びしていた。それは、道士の嘲りに反論する声だった。

「いいえ、そんな事はありませんよ。術の巧拙などよりも余程、いいえ、私にとつては至上の効力があります」

十常侍趙忠。虚ろだった瞳に意思の光を宿し、道士に振り返つてにこりと不穩な笑みを向けた。

「そ、そんな…何故…?」

「解かりませんか？ 愛ですよ、愛。陛下の無尽の愛が私を奈落の闇から救い上げて下さったのです」

「は、莫迦な……」

「おばかさんはあ、あなたです。よお」

何時の間にか道士の目の前にまで歩み寄っていた空丹の僵尸は、躊躇いもなく喰らい付いた。文字通り、道士の肩口に、大きく開いた罅で齧り付いたのだった。

聞くに堪えぬ絶叫を上げて道士は抵抗らしき挙動をばたつかせていたが、程無くそれは痙攣に代わり、直ぐに微動だにしなくなった。

「ちよつと、黄」

「あ、申し訳ありません、陛下。道士の踊り食いは少々刺激が強過ぎましたね。御目汚し失礼致しました」

「……もう陛下じゃないわ」

呆れる様に声を掛けた空丹に、往時と変わらぬ調子で、しかしかつてならば有り得ぬ言を吐く忠臣。空丹は疲れた様に呟くのが今は精一杯だった。

一夜明け、空丹の居室に主だった面々が集っていた。

現在の部屋の主、空丹。空丹の側仕えを務めるトラ。空丹達を迎えに来た呂子明、療養を兼ねてトラの教師役を務めていた趙伯高と陳元化。そして、日光を避ける様に厚手の外套をすっぽりと被った趙忠。

怪我の具合が思わしくない元化は怪しげに身を隠す僵尸を気にしており、その僵尸が昨晩口にした「陛下」という単語にそわそわしながら空丹を窺う伯高、外套の奥でとろんとした笑み浮かべながら佇む二人が不審になった原因の僵尸、どうしたものかと悩まし気に思案する子明、いつも通りのトラ。

一同を見回して、空丹は小さく嘆息した。

「趙嵩」

「はっ」

空丹の発言に、子明が口を挟もうとしたが視線で制す。空丹と視線を合わせた子明は恭しく引き下がった。

「お前の考えている通りよ」

伯高はごくりと息を飲んだ。すぐさま平伏しようとするのを「今の私は蹇寛よ」と制した。その言に、伯高は再び姿勢を正した。

一人取り残され、もの問いた気な元化に、「少し前までの私は劉姓だったの」と説明した。流石に慶祝の智囊が見い出した人材だ。その言葉と、直前の友人の様子から答えに至ったようだ。

「それで、お前たちはどうする？」

漠然とした問い掛け。それに対し、二人は暫し黙考し、互いに顔を見合わせ頷き合う

と神妙に答えた。

「我等は敵將軍に忠を誓つた身。未だ戰場を共にする事叶わずとも、その誓いに些かの曇りもございませぬ」

「我等は我等の主を信じております故に、御身を主と変わらぬにお守り致します」

「そう。薺華も良い臣下を得たわね」

「勿体無きお言葉」

慶祝の為ひととなりに人に惚れ込んで幕下に加わつたというのは確からしい。二人の態度に納得し、空丹は強く頷いた。

脇に控える外套の奥から不服そうな気配を感じるが、それはあえて無視して子明に目を向けた。

「それじゃ呂蒙。この後はどうすればいいのかしら？」

「はっ、急ぎ薺華様との合流を果たして頂きたく。元よりその為に馳せ参じまして御座いますれば」

「それって、洛陽に戻るって事よね」

「はい」

「ふむ……」

子明が僅かに心配そうな気配を発しているが、別段洛陽に戻る事に懸念は抱いていな

い。無論、危険は増すが、慶祝と離れている方が拙いと空丹は感じていた。だが、それは洛陽の慶祝の邸宅に引き籠もる方が良いという訳ではない。それなら此処に居ても変わらない。そうではなく、本当に慶祝の傍に居るべきだ。そう感じていた。理論立てて説明は出来ないが……。

その為には、色々とな必要な事が多い。まずは、一番簡単なところから手を付けていこう。

「黄。早速仕事よ」

「はいー」

思案顔のまま声を掛ければ、直前までの不満などどこ吹く風で、失禁しそうなほどの嬉声を上げるこの場で唯一の臣に思わず失笑した。

第二十五回——了——

「く、空丹様……?」

「そうよ。他の誰に見えるのよ?」

言いつつ、してやったりな表情をする蹇寛に、薜華は微妙な反応を返すのがやつとだった。

巴蜀を目指して進軍する薜華達は、三輔を出て益州の玄関口・漢中の領域に入った辺りで蹇寛達と再会した。

翌日には一気に谷越えをする為に早めに野営を整えたその時、子明が先導する一隊は紺碧の蔽旗に気付いて無事合流を果たしたのだった。

自分の幕営で報告を受けて、子敬の懸念は杞憂に終わったかと安堵の息を吐いた薜華であったが、直後に出迎える前に幕営に入ってきた蹇寛を見て、先の発言に繋がった。しかし、それも致し方ない事だろう。

光の波のように輝きを散らして背中まで伸ばされていた白堊色の髪は、光を吸い込むような黒檀色になり、おまけに項が露わに成るほど短く刈られていた。極自然に豪華な衣裳を着こなしていたのに、今その身を包むのは割と地味めな曲裾袍きよくきよほう*229だ。

不覚にも一瞬誰だか分らなかつた。蹇寛はその反応に満足気に頷く。

「流石に洛陽には私の顔を見知っている者も多いのだから、このくらいは当然でしょ？」

「え、ええ、まあ、はい」

「それと、真名も預けた者は殆ど居ないとはいえ、知ってる奴は知ってるから身内以外が居るところでは禁止よ」

「はっ」

そこまで返事をして、その場に陳元化と趙伯高が同席している事にやっと気付く。動転し過ぎだ。表情には出さず、二人に視線を向けて反応を見てから確認するように蹇寛に視線を戻した。その際、怪しげな外套の人物も気になったが、一先ず脇に置く。

「二人には私の判断で明かしたわ」

「そうでしたか」

「ま、緊急事態に陥った所為もあるけどね」

「なんですって?」

杞憂などではなかった。今こうして無事に再会できたから良いようなものの、蹇寛のみならず、トラや子明達にもしもの事があつたらと思うと身が震えた。

「ま、詳しくは黄に聞きなさい」

「……………え?」

もしもの事態に思考を奪われていると、別の意味で硬直した。誰だつて? その真名は確か…………。

「暫くぶりですね。厳寿さん」

薺華は畳み掛けられる情報の処理に脳が追いつかず、緩慢な動きで声の方を振り向くと、怪しげな外套を外した趙忠が死後とは思えぬ朗らかな笑顔で立っていた。

その夜、ついで薺華は寝る事が出来ぬほど考え込む破目になった。

翌朝、事ある毎に増えたり減ったりする薺華の陣営に、馬孟起は最早特段の反応を見せる事が無くなるほど慣れていた。

第二十六回 鬼謀闇夜

峻嶮なる山々の間を縫う谷間の闇道が巴蜀へと延々と続く。僻地でありながらよく整備された闇道から見上げれば、両脇を囲む鋭い山峰がまるで天上へ向け掲げられた剣の如くに屹立している。故にこの地は劍門と称される。

その劍閣道を、洛陽より放たれた数万の軍勢が細く長くうねる龍のように進軍する。西涼の錦に率いられた応龍。その行軍速度は平野であつても迅速と呼べるほどであつた。

今、この闇道の先にある要害劍門関けんもんかんを巡つて、益州牧伯劉焉と安遠將軍嚴顔が関の西十一里の地点で睨み合っている。

この乱を鎮めんと、龍はその身に二人の娘を抱えて両軍の元を目指し進軍していた。

劍門関へと続く森と草原がまだらに雑じりあう長く緩い斜面の上方。関を背に布陣するは嚴慶祝の母嚴顔、字を顯義。真名を桔梗。

その本陣帷幕に、桔梗の主だった幕僚が揃っていた。

「これで三晩連続か」

「あいつら絶対こつちを舐めてやがりますよ!!」

桔梗の確認に、魏文長が憤りも露わに声を荒らげた。

その理由は明白で、兩軍睨み合いが膠着した現状を打破する為か、州牧軍はここ数日連夜にわたって夜襲を掛けて来ていたのだが、此方の警戒が堅いと見るや虚仮の夜襲に切り替えてきたのだ。詰まる所、襲撃の振りだけして少数で騒ぎ立て此方に緊張のみを強いてくるやり口だ。もしもそれが虚仮でなかった場合、被害は甚大なものとなる為、警戒を怠る事も出来ずに兵は日に日に疲弊していた。

「そう興奮するでない焰耶。すぐに冷静を欠くのがお主の悪い癖ぞ」

「う…、申し訳ありません」

「さて、未究^{みく}よ。星によればこの戦、大事にはならぬとでたのであったな?」

「それは間違いなく。ただ、彼方にも私ほどではなくとも凶讖を修めている者がおりますし、私と違って天文を読むのみならず、それを戦に利用する謀智を兼ね備えているとなれば、逆手に取られるやも知れませんか」

「ふむ……」

今は遠く洛陽に仕官している娘の親友の一人周羣しゅうぐん、字を仲直ちゆうちよくに水を向ければ、淀みなく返事が返ってくる。元より武官でもない彼女がこの場に居合わせているのは、州牧が軍勢を招集したとの急報を受けて自らも將軍府に緊急招集を掛けた直後に、凶讖の結果を携えて進言して来たからである。

『桔梗様。此度の戦、大事にはならぬと星が瞬いております』

郡堂から將軍府營に移ろうとしたその矢先、郡堂正門前にて待ち構えていた周仲直の第一声に、桔梗はつい瞠目したものである。

あの時は昼日中であつたのだから、当然それよりも前に星を詠んでこの事を知つていたのだろう。前以つて知らせるのではなく、事が桔梗の耳に届いてからしたりと待ち構えているあたり、いい性格をしている。文長ならば文句の一つも出たろうが、桔梗はその程度気にも留めぬ。そこまで解かつていての態度であろう。本当にいい性格をしている。不意討ちの進言からそこまで思い至つた桔梗は鷹揚に笑んだものだ。

仲直としても、桔梗がそのような人物であつたからこそ、自邸の天文台から降りて仕官したのだった。

「ならば、やはり夜警を疎かにする事はできません」

出陣前的一幕を回想しつつ、顎に手をやりそう眩けば、軍議に額を突き合わせていた

幕僚達が一斉に各々の見解を述べ始めた。

「しかし兵達の体力にも限界がありますぞ」

「ここはやはり決戦を！」

「だが敵もこつちが焦れるのを待っているんじゃないや？」

「決戦に討つて出たところを……、という事か？」

「でもねえ、そこまで言い始めちゃつたら何もできないわよく？」

「その通り。夜襲を軽視できず、決戦にも出られずでは尻貧ぞ」

「焰耶殿の案に賛成だ。決戦を挑むべきだ。猪口才な策や罠など押し潰せるのが我等嚴軍の強みではないか！」

いつもの光景、いつもの軍議。桔梗が將軍府を開府以来、幾度もの戦場で繰り返し行われて来た通過儀礼。

今迄は誰が何を進言しようとも桔梗の一声で全て決まっていた。無論、皆の声に耳を傾けた上で決断してきてはいた。しかし、その判断は概ね桔梗の嗜好に依るところが大きかった。それで通ってきた。このような軍議が必要となる敵は、それまでは西の化外から侵攻してくる異民族相手であり、連中もあまりに複雑な策や大掛かりな罠を仕掛けるような真似をしてこなかったからだ。

だが今回は違う。同じ漢人同士、それも相手方には鬼謀を巡らす軍師が智恵を振り

絞つて来ている。これまでのやり方では恐らく負ける。桔梗の将としての直観がそう告げていた。

「劉焉軍が図讖を逆手に取るのなら、我が方は夜襲を逆手に取りましょう」

喧々諤々と皆が口論する中、凜とした少女の声が響いた。特に声を張り上げた訳もなく透き通るようにその場の全員に届いたその声の出元に目を向ければ、牛仔帽を被った少女が帷幕の入り口から落ち着いた歩調で桔梗の前に進み出た。

「遅いぞ探花^{タンフラワー}！」

「ごめんなさい、焰耶さん」

新参の幕僚の登場に、文長が声を上げる。他の主だった幕僚は皆揃つて居るのに、新顔が遅れてやつて来るとは弛んでいる。文長以外の殆どの幕僚が同じように思っていた。

それに対し新人の少女は特に悪びれるでもなく、ただ素直に謝罪して済ませた。そして桔梗に一礼して下知を待った。

「策がある？」

「拙い策ではありますが、此度だけは敵方を嵌める事が出来ましょう」

「うむ、聞こう」

桔梗のその言葉に、顔を上げた少女は朗々と自らの策を語り始めた。

桔梗は細大漏らさず少女の策を聴き取り、暫し瞑目し充分に吟味した。その間、他の者は誰も口を差し挟まず、少女の策を主に倣って同じように自分達なりに吟味していた。

瞑目する桔梗から視線を逸らさぬまま周囲の様子を感じ取っていた少女は、良い軍だと心中で微笑んだ。彼女の提案を受けて良かったと、荊州での記憶を少しだけ思い起こした。そこまで昔の事でもないのに、何処か懐かしい記憶の中の女傑とよく似た主君がゆっくりと目を開いた。

その精悍な美を支える眼差しは本当によく似ている。そして、その瞳の輝きから己が策を用いるのだと早々に確信を得た。出会ったばかりの己の策を疑いもせず信頼してくれたあの意志の光と本当にそっくりだ。

少女の確信を桔梗も気取り、最後に一つだけ気になっていた事を尋ねた。

「して、その策が此度だけは成功するというその訳はどういう事なのだ？」

「桔梗様はこれまで軍師を傍に置かれませんでした。敵方もそれを承知しております。智恵を出せる存在として未究さんの存在までは掴んでおりますが、そこまでが劉焉軍が握る我が方の最新情報です。敵方の軍師はそこまでしか勘案できずに策を練る事になります」

「つまるところ、お主の存在が抜け落ちておると」

「はい。此度の戦、この徐庶の智謀嚴軍に在りという情報一つ分の差で我が方の勝利です」

かつて、桔梗の娘が荊州南部で知己を得た水鏡女学院卒業生は、確かな自信をその樺色の瞳に宿らせてそう断言した。

薄く雲が広がり星も疎らな暗天の静謐を喰い破るような陣鐘そうおんの噪音と、わざとらしいまでの鬨の音が響く。

ここ数日繰り返されて来た茶番の幕は、嚴顔陣営から即座に放たれて来た火矢による返礼で開けた。間を置かず、戦車を牽く魏司馬に率いられた騎馬隊が闇夜にも構わず突っ込んできた。

足元も覚束なかろうに迷いのないその突撃は見事の一言。だが、夜襲部隊を率いる劉益州自慢の軍師ほうせい法正*230には、その反応も想定内の事であった。ほくそ笑みながら、落ち着いて素早く隊を撤収させる。

その上で自身は真つ直ぐ帰陣する部隊から離脱し、脇に逸れて草むらに身を隠す。

「くそっ！ 逃げ足の速い奴等め!!」

見付からぬよう身を縮こまらせながら耳を澄ませば、魏延の悪罵が舌打ちまで明確に聞き取れた。今宵は特に冴えている。己の仕掛けた策の成就が近いのを身体が気取っているのだ。敵勢の忍耐も限界だろう事が手に取るように判る。

頃合いだ。明晩には更に天を覆う雲が厚くなるだろう。星明かりどころか、月まで隠してくれるに違いない。天も此方に傾いたと見える。とは言え、夜に仕留められるなら僥倖だが、日中の決戦と相成るやもしれぬ。

どちらであつても勝利は揺るがぬが、出来れば此方の損害が少ない方が良い。

夜襲部隊を取り逃がし、それでも未練がましく暫く付近をうろついていた魏延も、最後に「くそつ」と吐き捨てて撤収していった。

敵が去り周囲に静寂満ちて尚暫しの間、法正はその場に身を潜ませていた。そして、十分な時間の経過を以つて漸く立ち上がり、それでも静かに周囲への警戒を怠らずに立ち去つた。

曇天の朝。劉焉軍は全軍を上げて見事な陣を布いて敵顔軍と対峙した。

守りを主体とした分厚い陣容。攻めに逸つては決して抜く事は叶うまいと一目で知

れる。

それでも敵顔軍から一部突出して来た。やはりというか、魏延率いる部であった。流石に昨夜と違い、魏延麾下のみではなく、同気質の猛将の隊も続いているが……。

いよいよ猪共の抑えが効かなくなってきたようだ。

安遠將軍は決戦を避けた。周羣の凶讖に信を置いているのだろう。更に此方が守りをこれでもかと固めたのを見て、無理攻めは禁物であると判断した。それでも一部の猪突共がこのままでは収まらぬと、発散の機会を与えた。そんな所だろう。

此方が敗走するであろう魏延達を無理に追撃する気がないところまで読まれている。流石に歴戦の将といったところか。

結局、魏延率いる敵軍の一部は午後の半ばまで暴れ回って撤退した。

最初の勢いは拒馬と重装盾兵、その背後に配した弓兵によって出鼻を挫いたが、それでも散発的に繰り返される突撃に、想定以上に兵を削られた。益州一の猛将の評価は伊達ではなかった。相手の呼吸に合わせて陣の入れ替えが滞れば、一気に持つていかれたかも知れない。突撃と後退の呼吸が読み易くて助かったが、全く以つて忌々しい。正面からやり合えば簡単に押し潰されてしまうだろう。地力の違いをまざまざと見せ付けられた。

まあ、いいさ。それでも勝つのは我等なのだから。

星一つ見えない深夜。今宵、この前哨戦が決する。そう、これは所詮前哨戦なのだ。劉君郎の野望の為の第一歩に過ぎない。故にこれ以上時を浪費する訳にはいかない。我等には時間が無いのだ。

法正は不断の決意を以つて暗夜の決戦に臨んだ。だが、それは本人の自覚しない焦りを含んだものであった。

真闇の中、静かに進軍する劉焉軍第一陣が、前方にぼんやりと浮かぶ明かりを捉えた。敵顔軍本陣の篝火だ。明かりの周囲に僅かな歩哨の姿があるが、それ以外には敵陣は静まり返っており、ここ数日見受けられた警戒を感じさせない。日中での此方のあまりの攻め気の無さに、流星に緩んだか。第一陣を構成する東州兵を率いる趙躰ちやうたい*231は、にやりと口の端を上げた。

息を潜めるのはこれくらいで十分だろう。後は一気に敵陣に雪崩れ込み蹂躪するのみだ。さつと手を上げ、血気鋭く号令を発した。

闇夜の冷たい空気が怒号に震えた。

号令一下解き放たれた東州兵は、意気を上げ敵顔軍陣営に突入した。突如の怒号に震

えあがつた歩哨は、脇目も振らずに陣営奥へと逃げ出してしまった。精強で知られる敵兵のそんな様に、夜襲兵の軍気は更に盛り上がった。策の成功と、戦の勝利を、誰もが確信した。誰も疑問を持たなかった。精強な敵兵が、奇襲を受けたからといって敵襲を知らせる事もなく逃亡するだろうか。

焦れていたのは劉焉軍も同様だったのだ。時間を掛けて丁寧に積み上げた策の全貌を知る事の出来る兵卒など居る筈もなく、軍師の思惑を読み取るうとする者など居るわけもない。ただ、今夜で決着が付くとだけ知らされた。

やっと終わる。その想いで夜襲を掛けて早々に敵の逃亡という判り易い自軍の勝勢を見せられて、冷静な判断を下せる兵卒など居なかった。

こうして、劉焉軍第一陣は勢いに任せて敵顔軍本営に雪崩れ込んだ。

なんの障害もなくあっさりと陣奥まで突入する自軍の波に乗り、趙韜も突き進む。そして、敵営に突入するや直ぐに違和感に気付いた。余りの手応えの無さに馬を止め兵に確認を促そうとした矢先、先鋒隊の兵らが報告にやってきた。その時点で夜襲が失敗した事が判ってしまった。同時に信じたくないという逡巡があった。だから敵営内がもぬけの殻との報告を実際に聞き及んだとき、狼狽えてしまった。それは波紋のように麾下に伝わり、全体の動きを鈍くする呪縛と化す。

尚悪いことに、完全にもぬけの殻というわけではなかった。極少数ではあるが、敵軍

本営には今夜の夜襲に対する戦力が息を潜めて趙韙を待っていた。

「やつと来たか。全く待ちくたびれたぞ」

「?! お、お前は……」

趙韙が焦る心情のまま撤退を指示しようとした時、それを見計らったように近くにあらる天幕の一つから一人の人物が姿を現した。

「探花の働きを認めないわけにはいかないな。本当にワタシの目と鼻の先で足を止めるとは思わなかった」

独り言をつぶやきながら悠々と趙韙の前に姿を現したのは、誰あろう益州一の猛将魏文長その人であった。

嵌められた！ そう判断した法正の動きは早かった。

一切の逡巡も未練もなく、即座に撤退を指示したのだ。内心の焦りも怒りも全て呑み込んで、被害を最小限に抑える為に、無理矢理にでも毅然とした態度で以って軍を率いた。

第一陣が難なく敵軍本営に雪崩れ込んだまでは良かった。しかし、そこから関の声の

みて悲鳴も剣戟も響いてこなかった時点で、法正は自身が率いる第二陣に停止命令を出した。

何故分かった？ そう思考しながら、周囲への警戒と偵察と命じる。此方が仕掛ける機を完全に読んだというのか？ 歴戦の将のみが持つ勘？ いや待て……。

日中の魏延の攻撃。あれも計算の内か？ あれが暴走ではないとしたら？ そこに至った時、法正は偵察が戻るのを待たずに撤退を命じた。

と同時に、周囲に伏していた敵軍が闇夜を劈く怒号を上げた。

くそうつ、矢張り軍師か！ いつ召し抱えた?! 心中で毒づきながらも法正の指揮は的確だった。油断と慢心と、そして焦りを自覚しながら完全に敵に囲まれる前に軍を退いた。策を見破られ罠に嵌ったとは思えぬ法正の冷静な指揮、荒れ狂う内心を理性で無理矢理に抑えたそれによって、彼女の率いる第二陣はそれほどの被害を被ることなく撤退して見せた。

だが、敵本営に侵入した第一陣ばかりは相当の被害を被った。退却を指揮する最中ですでに法正はそれを予想していた。第一陣の見るに堪えぬ混乱ぶりを遠目に確認した時、部将である趙韜が討たれる可能性が高いと見ていたのだ。

屈辱的な撤退戦の最中でも法正の軍師としての思考は止まらない。第一陣の惨状、埋伏していた敵軍の見事な配置、追撃の引き際、自軍の士気の崩れ具合、地勢の洗い出し、

主君の悲願と現状……。明るい材料が見当たらずとも、彼女の心が折れる事だけはないか。

埋伏していた敵軍は動揺する劉焉軍を容赦なく叩きのめす。だがそれも長くは続かない。動揺が収まった訳ではないが、それでも統率を失わずに劉焉軍が退却し出したからだ。

策を巡らし罫に嵌めた。そう思っていた側が、逆に自分達こそが嵌められたのだと認識した時の衝撃と動揺は生半可なものではない。であるにも関わらず、ある程度の秩序を保ったまま退却戦に移行した劉焉軍に、桔梗は感嘆の息を吐いた。

「敵も然る者よな」

「劉焉以外にあれほど彼の軍を統率しうるのは、おそらくは法正の手際かと」

「ふむ、相手方の軍師か。指揮まで一級以上にこなすとは、天晴れと言うほかないな」

脇に控える軍師の言に、愉し気に敵を称賛する桔梗。

撃滅に固執せず、敵勢を追い遣る事に重点を置くよう指示を下し、桔梗は横に立つ徐元直に顔を向けた。

「さて、軍師殿。次の一手、どう打つ？」

「明日の午前まで兵を休め、昼に総攻撃を掛けます。陣内に取り残された劉焉兵も捕虜にするのではなく、そのまま追い散らせるようお願いします」

「容赦がないな」

軍師の進言に笑いながら応じる。言葉とは裏腹に、明日の決戦が簡単なものにはならないと感じたが故に浮かんだ笑み。

撤退した第二陣は勿論、敗走した第一陣は相手にとつて大きな枷になるだろう。明日の劉焉軍の士気は見るに哀れなものとなる筈だ。しかし、あの劉君郎とその懐刀であれば、容易い相手とはなるまい。多少敵将を知り、また此度の戦でその智囊の力量を知った桔梗は、だからこそ喜悅を含んだ戦者の笑みを浮かべたのだ。

「座して運命に隷属する気にはなれませんか」

桔梗の反応に、元直はそう返した。その応答に、桔梗は仲直の図讖を思い出した。

「お主はこの局面から更に踏み込んだ一手を投じながらも、未究めの図讖が的中すると考えておるのだな」

「いえ、そこまで確信がある訳ではありません。ただ、もしも天意というものがあつたとして、人はそれに対したただ従順で在るべきではないと考えているだけなんです。……私達は、象棋の駒ではないのですから」

そう漏らした元直の言葉に、今は遠い空の下に在る娘を想った。

天命や天意といった思想に忌避感を、いやもつと直接的に否定の感情を向けていたものだ。思えば、図讖家である仲直と真名を交わすほどの親交を持ったのも奇妙な巡り合わせだ。仲直の性格からすれば、だからこそ娘に興味を持ったのだろう。娘の方も、……あれもああ見えて変わったところがあるからな。と、一人納得した。

天命か。天命と言えば……、

桔梗の脳裏に続いて浮かんだのは、天命という見えない何かに縛られているかのような肩書を背負わされた男子だった。

御遣いの少年は首尾よく娘に会えただろうか。中央で將軍となり、漢中で起こった叛乱に派遣された事は桔梗の耳にも入っていた。会えたかどうかは時期的に微妙なところだ。その後も京師に戻ることなく涼州に赴いたらしい。今頃は韓遂相手に奮戦しているところだろうか。こちらにも劉焉の動向に神経を張っていたので、確認する暇もなかった。

桔梗は何故だか、自らの下に光臨した少年と娘を引き合わせようと思つた。少年の事が気に入ったというのもある。娘が年頃になったという理由も大きい。だが、それだけではないような気が、今になってきていた。言葉にできない領域で働く意志決定の一部分。戦での勘働きは我ながら鋭い方だと思つているが、こういった方面で発揮され

た覚えはあまりない。だがこれは女の、いやさ母の勘というものか。

……もしかすれば、これが天意というものなのかも知れんな。

そんな益体もない事を考えながら桔梗の口について出たのは、年若い男女の事ではなかった。いや、或いは、それも含んでいたかもしれない。

「我等は天意を越える事が出来るかの？」

「……判りません。ただ、私達に出来るのは眼前の現実には全力を尽くすくらいのものでしよう」

「そうさな。それに、例え全ては天の思惑の内に終着するのだとしても、その過程を疎かにする言いい訳にはならぬしな」

「はい」

天の意を飛び出すにしろ、内に収まるにしろ、己の為すべき事を成した結果であれば納得もいくというものだ。

兵の撤収と翌昼までの休息を指示しながら、桔梗は天命に対する己の答えを得た。

「流石に出てきおったか」

中天の太陽を被隠すように厚く垂れ込める鈍色の雲からは少々拍子抜けな小雨の降る中、桔梗は対面する軍勢を強く、それでいてどこか嬉し気に睨みつけながら呟いた。

鋭い視線のその先には、敵将を示す劉の牙門旗が翻っていた。

この戦が始まって以来、後曲に引つ込み敵前にその姿を現す事のなかった敵総大将劉焉。それがこの決戦の場で先鋒に陣取り、その存在を以って自軍を鼓舞していた。

「見事なものではあるが……」

それにしても動きが鈍い。死に掛けの軍勢に覇気を与える程の器量を持っていないが、今迄後方でまごまごしていた理由が解からない。

そもそも、今回のこの叛乱自体、桔梗には違和感があった。

劉君郎とは全く知らない仲ではない。数は少ないが共に氏蛮討伐で肩を並べた事もある。一度などは彼方の陣幕で一献酌み交わした事もあった。

その時にも己の野心を隠そうともしなかった豪胆な女だったが、慎重さや狡猾さが欠けている訳でもなかった。

他地方で乱が起きたからといって、ただその流れに乗るだけの軽拳に及ぶ人物とは思えなかった。かと思えば、この戦場での鈍さ。焦ったかのような挙兵から、尻込みでもしているかのような陣取り。

何があったのか？

「この桔梗を軍門に下らしめると宣したお主は何処へ消えた？」

酒の席でまず益州を完全に掌握すると、己の王国を築いてみせると息巻いていた。そうはさせぬと応じれば、戦にて雌雄を決し、自分を幕下に加えてみせると胸を叩いて宣言した奸雄。

しかし、現実には益州掌握は未だ整っておらず、漢中は中央の影響力を増している。いざ事を起こしてみれば、自分を避ける様に急いで司隸を目指し、そうはさせじと立ちはだかれれば戦は臣下任せときた。

考えれば考えるほどに解せぬ事ばかりだ。

その時、雨音を押し退ける大軍の気配が後方北寄りから響いてきた。敵か味方か、などと問う必要もない。禁軍に決まっている。自軍の後方には剣門関があり、そこを通り抜けてきたのは明白。我が軍を迂回して敵劉両軍の間に立つつもりだろう。と考える間に雨脚をもものもしない進軍速度で桔梗達の中間北方の位置に展開した。

速い。だが、その先頭に翻る新緑の馬旗を見ればすぐに得心がいく。それよりも、桔梗の目を奪ったのはその左斜め後方に柵引く紺碧の敵旗であった。

桔梗の視線が娘の軍旗に釘付けされている間に、一人の騎馬武者が威風堂々と進み出て両軍を睨みつけた。そして、場を圧する軍気を大喝に乗せて、たった一騎で両陣営を制してみせた。

「我は左將軍馬超！ 双方ともに軍を退けい！！ これは陛下の御意志！ 勅令である！！」

錦馬超の宣言。それは中央の判断が征伐ではなく、停戦を選択したものであった。

改めて視線を左將軍に向ける途中、馬旗を挟んだ敵旗の向こう側に劉旗を認めて、互いの子女まで引つ張り出して事を治めようとする洛陽の姿勢に枯梗は肩の力を抜いた。

結局のところ、此度の叛乱劇は天の意の内に収束するのであった。

第二十六回——了——

某州某郡。郡太守官衙中枢、便坐の一面を足早に進む女が一人。豪奢と華美を掛け合わせて彩られた派手な女性が、やや優雅さに欠けた足取りで声を張り上げている。

「真直さん？ 真直さん！！ 何処に居らっしゃいますの？」

「はい、！ 麗羽様、お呼びでしょうか？」

真名を大声で呼ばれていた女性が、稟書房の一面から慌てて姿を現し主人の前に馳せ参じた。

「ああ、そんな所に居ましたの」

「そんな所つて、稟議書の選定・決裁はいつも……」

「そんな事はどうでも宜しいですわ」

「そ、そんな事……」

あまりの言い様に、目の前の主君が真面に働かない所為で全ての苦勞を背負い込んでいると言つても過言でない女は、二の句も告げない。そんな女の様子に全く気付かず、或いは気にも掛けずに黄金色の髪を振り乱して、傲然な主たる女は声を更に荒らげた。口を開く度に興奮が増しているようだ。

「そ・れ・よ・り・もー」

「は、はいっ！ なんででしょう？」

「あなた、この間、恐ろしく貧相で華麗の華の字の始めの一画も無いくせに、書だけは素晴らしい殿方を召し抱えましたわよね」

「あ、あの、麗羽様。流石に少し言い過ぎではないかと……」

「なに言つてますの？ このわたくしが褒めて差し上げてますよの？ 優雅さの欠片もない男性を」

「あ、はい。それで、その者がなにか？」

「そうですわ！ その者に檄文を書かせるのです!!」

「は？ 檄文、ですか？ そ、それはどのような？」

嫌な予感がする。と言うよりも、嫌な予感しかしない。腹心の女は背に流れる生温い汗の不快感を無視して訊ねた。

「決まっていますわ!! あの、につくき！ 田舎の泥棒猫!! 董卓誅滅の檄文ですわ!!!」

「……………え、えええー!!?」

大陸の安寧には未だ遠い。